第21回夏季デフリンピック

日本選手団参加報告書

開会式のオープニング

財団法人 日本障害者スポーツ協会
財団法人 全 日 本 ろ う あ 連 盟

秋篠宮同妃両殿下ご接見

石野派遣委員長による挨拶

和やかな懇談（写真上、右）

写真提供（宮内庁）

結団式・開会式

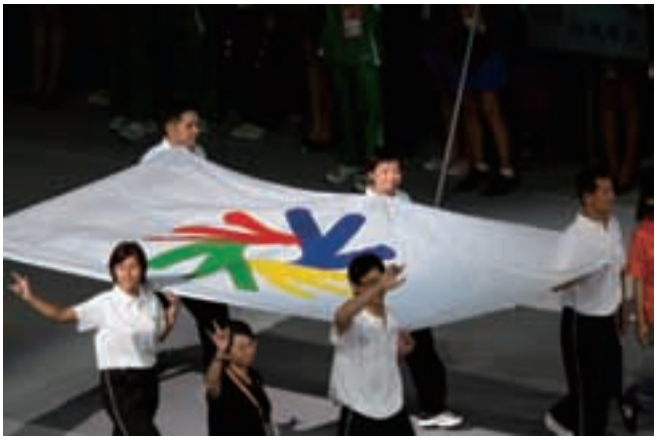
結団式にて粟野団長による決意表明

開会式を前に石野派遣委員長より激励のあいさつ

メダルをとるぞ！

入場行進　日の丸高らかに！

開会式では台湾人の観衆から大きな声援を受けた



デフリンピック旗

選手の活躍

ビーチバレーボール（女子）

テニス（男子）

テニス（女子）

サッカー（男子）

サッカー（女子）

バスケットボール（女子）

バスケットボール（男子）

選手の活躍

バレーボール（女子）

バレーボール（男子）

ボウリング（女子）

ボウリング（男子）

水泳（男子）

水泳（女子）

選手の活躍

柔道

空手（男子）

陸上競技（リレー）

陸上競技（男子やり投げ）

陸上競技（男子マラソン）

陸上競技（男子ハンマー投げ 世界新記録）

陸上競技（女子やり投げ）

選手の活躍

卓球（男子ダブルス）

卓球（女子シングルス）

卓球（女子団体）

卓球（女子ダブルス）

バドミントン（混合）

陸上競技（女子マラソン）

監督会議・解団式・閉会式

監督会議

解団式

解団式

閉会式

閉会式

閉会式（フィナーレ）

選手団本部

本部事務局

ミニスタジオ

トレーナールーム

内科診療室

外科診療室

応援メッセージ

目　　次

1．日本選手団参加報告書の発刊について（お礼）…… 1
2．台北デフリンピック及び日本選手団の概要…… 2
3．日本選手団名簿…… 4
4．成績一覧
①メダリスト一覧…… 13
②国別メダル獲得成績一覧…… 14
③各競技成績一覧…… 15
5．団員報告
①団長報告…… 31
②事務局報告…… 32
③医療班報告…… 40
④陸上競技チーム…… 51
⑤バドミントン競技チーム…… 61
⑥バスケットボール競技男子チーム…… 65
⑦バスケットボール競技女子チーム…… 71
⑧ビーチバレーボール競技チーム…… 80
⑨ボウリング競技チーム…… 84
⑩サッカー競技男子チーム…… 88
⑪サッカー競技女子チーム…… 99
⑫柔道競技チーム…… 105
⑬空手競技チーム…… 110
⑭水泳競技チーム…… 112
⑮卓球競技チーム…… 117
⑯テニス競技チーム…… 126
⑰バレーボール競技男子チーム…… 132
⑱バレーボール競技女子チーム…… 138
6．参考資料
①日本選手団派遣経過…… 149
②日本選手団必携マニュアル…… 150
③日本選手団の編成にかかる指針…… 169
④選手推薦等申請用紙…… 171
⑤健康調査票…… 178
⑥聴力検査票…… 184
⑦インフルエンザ罹患者の発生への対応経過…… 184
⑧夏季・冬季デフリンピック開催地一覧…… 189

第21回夏季デフリンピック
日本選手団参加報告書の発刊について（お礼）

財団法人全日本ろうあ連盟理事長
デフリンピック派遣委員会委員長
石野富志三郎

アジアで初めてのデフリンピックである第21回夏季デフリンピックが台湾・台北市で９月５日から15日の11日間にわたり開催され、日本からは選手・スタッフ合わせて244名の夏季デフリンピックにおける過去最高の人数を派遣いたしました。そして金メダル５個、銀メダル６個、銅メダル９個のメダルを獲得し、成功裡に終えられましたことを関係者の皆様にご報告できることは、私の大きな喜びでございます。

出発前には秋篠宮同妃両殿下とのご接見の機会を賜り、両殿下より直に激励のお言葉をいただき、選手たちは日本代表の誇りと自覚を持ちました。また、テレビや新聞などで取り上げられ、世間の目が自分たちに向けられていると感じることで、選手たちの中にメダルを獲得したいと強く望む気持ちが高まり、練習に一層励んでいく姿が見られました。このような多くの方面からの応援があったからこそ20個ものメダルを獲得できたのだと確信しております。

今回のデフリンピックの派遣にあたっては、国の事業として初めて国庫補助金が適用されました。デフリンピックはオリンピック同様に４年に１度開催されており、夏季大会は1924年、冬季大会は1949年より始まり、とても長い歴史を持っております。しかしながら、マスコミなどに取り上げられることはほとんどなく、内閣府が行った平成18年の調査では国民の認知度は２パーセント程度というとても低い結果が出ております。今回のデフリンピックでの日本選手団の活躍がマスコミ等に掲載され、国民の認知度の向上に多大な効果を与えたことを大変嬉しく思っております。これを更に推し進め、聴覚障害者スポーツを促進させるとともにデフリンピック派遣事業が国の事業として遜色ないものとなるよう、選手および指導者の技術力向上などに取り組んでいく所存です。

今回ご支援を賜りました厚生労働省、宮内庁、日本障害者スポーツ協会、日本パラリンピック委員会、全国手話通訳問題研究会、聴覚障害者の医療に関心をもつ医療関係者のネットワーク、関係各団体、そして選手やスタッフを快く派遣いただきました各学校・各企業等、日本選手団を陰で支えてくださった皆様方には心より感謝申し上げます。

私たちはこの経験を充分に活かし、２年後の第17回冬季デフリンピック（スロバキア・ハイタトラス）、４年後の第22回夏季デフリンピック（ギリシャ・アテネ）に向けて一層精進してまいりますのでこれからも温かいご指導ご鞭撻のほど何卒宜しくお願い申し上げます。

＜台北デフリンピック及び日本選手団の概要＞

台北デフリンピック

■大会名称

第 21 回夏季デフリンピック（通称：台北デフリンピック）

■目　　的

オリンピック精神に則り、聴覚障害者スポーツの発展と向上に寄与し、国際的な親善･友好の精神を養うために、４年に１回開催する。

■開催期間

2009 年９月５日（土）～ 15 日（火）【11日間】

・開会式９月５日（土）（会場：台北市営スタジアム）

・閉会式９月 15 日（火）（会場：台北市営スタジアム）

■開催国・都市

台湾・台北市

■運営主体

国際ろうスポーツ委員会（International Committee of Sports for the Deaf）

台北 2009 デフリンピック大会組織委員会（21st Summer Deaflympics Organizing Committee）

■参加国・地域数

77 カ国

■参加人数

選手 2,498 名

■実施競技

陸上、水泳、卓球、テニス、射撃、バドミントン、ボウリング、オリエンテーリング、自転車、レスリング（フリースタイル）、バスケットボール、バレーボール、ビーチバレー（＊）、ハンドボール、サッカー、水球、柔道（＊）・空手（＊）・テコンドー（19競技）

＊は新規競技

日本代表選手団

■派遣者

財団法人日本障害者スポーツ協会

■派遣実施主体

財団法人全日本ろうあ連盟デフリンピック派遣委員会

■派遣期間

2009年９月２日（水）～16日（水）【14泊15日】（男子サッカーチームは８月31日（月）～９月16日（水）【16泊17日】）

［結団式９月３日（木）（会場：台北フラートンホテル）
解団式９月15日（火）（会場：台北フラートンホテル）］

■参加競技

陸上、水泳、卓球、テニス、バドミントン、ボウリング、バスケットボール、バレーボール、ビーチバレー、サッカー、柔道、空手（12 競技）

①参加人数　合計 244 名

役員　90 名（男 62 名・女 28 名）

選手 154 名（男 88 名・女 66 名）

②団長　　粟野達人｛(財）全日本ろうあ連盟スポーツ委員会国際事業部員｝

③主将　　上田　萌　出場競技　卓球競技（団体・シングルス・ダブルス・混合ダブルス）
19才　女　東京都在住

④旗手　　森本真敏　出場競技　陸上競技（男子ハンマー投げ）
24才　男　滋賀県在住

⑤日本選手団の特徴

1）夏季大会では過去最高の代表団人数

2）最年少出場選手は水泳競技の藤川彩夏選手で 14 才

3）最年長出場選手はボウリング競技の数見満選手で 66 才

4）デフリンピック日本代表選手選考規程に基づき、154 名の選手を選考

台北デフリンピックスケジュール

	8月		9月																
	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木
式典		① 到着		② 到着			開会式										閉会式	出発	
ICSD 評議員会					評議員会	評議員会													
陸上（男子・女子）						練習	練習	練習	競技	競技	競技	休	競技	競技	競技				
陸上（マラソン）																競技			
バドミントン（男子・女子）					練習	練習	練習	競技	競技	競技	競技	競技	競技	競技	競技	競技			
バスケットボール（男子・女子）					練習	練習	練習	競技	競技	競技	競技	競技	競技	競技	競技	競技			
ビーチバレーボール（男子・女子）					練習	練習	練習	競技	競技	競技	競技	競技	競技	競技	競技	競技			
ボウリング（男子・女子）							練習	練習	練習	競技	競技	競技	競技	休	競技	競技			
自転車（男子）					練習	練習	練習	競技	休	競技	休	競技	休	競技					
サッカー（男子・女子）			練習	練習	練習	競技	競技	競技	競技	競技	競技	競技	競技	競技	競技	競技	競技		
ハンドボール（男子・女子）					練習	練習	練習	競技	競技	競技	休	競技	休	競技					
柔道							練習	練習	練習	競技	競技	競技							
空手						練習	練習	練習	競技	競技									
オリエンテーリング（男子・女子）							練習	練習	練習	競技	競技	休	競技	休	競技				
射撃（男子・女子）					練習	練習	練習	競技	競技	競技	競技	競技	競技	競技	競技	競技			
水泳（男子・女子）						練習	練習	練習	競技	競技	競技	休	競技	競技	競技				
卓球（男子・女子）					練習	練習	練習	競技	競技	競技	競技	競技	競技	競技	競技	競技			
テコンドー					練習	練習	練習	競技	競技	競技	競技								
テニス（男子・女子）					練習	練習	練習	競技	競技	競技	競技	競技	競技	競技	競技				
バレーボール（男子・女子）					練習	練習	練習	競技	競技	競技	競技	競技	競技	競技	競技				
水球（男子）					練習	練習	練習	競技	競技	競技	競技	競技	休	競技	競技				
レスリング（男子）					練習	練習	練習	競技	競技	競技	競技	競技	競技						
	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木
	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
	8月		9月																

日本選手団名簿

※年齢ー 2009 年 9 月 5 日現在で記載

通し No	競技名	No	役職 (ｽﾀｯﾌ/選手)	名　前	フリガナ	性別	年齢	都道府県市区町村	所属団体
1	日本選手団本部	1	団長	粟野　達人	アワノ タツヒト	男	53	東京都渋谷区	㈳東京都聴覚障害者連盟
2		2	総務(副団長)	大杉　豊	オオスギ ユタカ	男	46	東京都中野区	㈳東京都聴覚障害者連盟
3		3	医師	田口　智博	タグチ トモヒロ	男	36	愛知県名古屋市昭和区	(健聴者)
4		4	医師	類家　拓也	ルイケ タクヤ	男	34	北海道旭川市	(健聴者)
5		5	アスレティックトレーナー	中島　幸則	ナカジマ ユキノリ	男	47	千葉県市川市	(健聴者)
6		6	アスレティックトレーナー	星野　直志	ホシノ タダシ	男	28	東京都豊島区	(健聴者)
7		7	看護師	大島　三千子	オオシマ ミチコ	女	44	栃木県宇都宮市	(健聴者)
8		8	看護師	高田　智子	タカタ トモコ	女	50	千葉県千葉市稲毛区	(健聴者)
9		9	手話通訳	高井　洋	タカイ ヒロシ	男	35	東京都豊島区	(健聴者)
10		10	手話通訳	豊島　絵美子	トヨシマ エミコ	女	43	東京都練馬区	(健聴者)
11		11	事務局員 (翻訳)	小林　昌之	コバヤシ マサユキ	男	45	東京都葛飾区	(健聴者)
12		12	事務局員 (広報/記事・HP)	高橋　真里	タカハシ マリ	女	29	群馬県館林市	群馬県聴覚障害者団体連合会
13		13	事務局員 (広報/写真・HP)	岸田　修	キシダ シュウ	男	35	東京都八王子市	㈳東京都聴覚障害者連盟
14		14	事務局員 (宿泊・輸送)	山崎　陽一	ヤマザキ ヨウイチ	男	42	東京都江戸川区	(健聴者)
15		15	事務局員 (宿泊・輸送)	石澤　慧	コクザワ ケイ	男	26	東京都杉並区	(健聴者)
16		16	事務局員 (記録)	瀬川　奈美	セガワ ナミ	女	34	東京都江戸川区	㈳東京都聴覚障害者連盟
17		17	事務局員 (記録)	加茂下　和子	カモシタ カズコ	女	38	東京都西東京市	(健聴者)
18	陸　上	1	スタッフ	三枝　隆行	サエグサ タカユキ	男	41	兵庫県伊丹市	㈳大阪聴力障害者協会
19		2	スタッフ	竹原　和哉	タケハラ カズヤ	男	31	東京都杉並区	(健聴者)
20		3	スタッフ	鷲見　英治	スミ エイジ	男	46	愛媛県西予市	(健聴者)
21		4	スタッフ	東口　紘也	ヒガシグチ ヒロヤ	男	31	大阪府大阪市阿倍野区	㈳大阪聴力障害者協会
22		5	スタッフ	田中　かつ子	タナカ カツコ	女	67	東京都練馬区	㈳東京都聴覚障害者連盟
23		6	スタッフ	下堂薗　里美	シモドウゾノ サトミ	女	28	鹿児島県鹿児島市	鹿児島県聴覚障害者協会
24		7	スタッフ	下防　健太郎	シモボウ ケンタロウ	男	37	東京都立川市	㈳東京都聴覚障害者連盟
25		8	スタッフ	喜多　清美	キタ キヨミ	女	47	神奈川県横浜市金沢区	(健聴者)
26		9	選手	重田　竜佳	シゲタ タツヨシ	男	21	大阪府枚方市	㈳大阪聴力障害者協会

通し No	競技名	No	役職 (ｽﾀｯﾌ/選手)	名　前	フリガナ	性別	年齢	都道府県市区町村	所属団体
27	陸　上(続き)	10	選手	白石　進	シライシ ススム	男	26	大阪府大阪市都島区	㈳大阪聴力障害者協会
28		11	選手	高田　裕士	タカダ ユウジ	男	24	東京都港区	㈳東京都聴覚障害者連盟
29		12	選手	北田　明広	キタダ アキヒロ	男	18	奈良県生駒郡三郷町	㈳奈良県聴覚障害者協会
30		13	選手	山中　孝一郎	ヤマナカ コウイチロウ	男	28	東京都町田市	㈳東京都聴覚障害者連盟
31		14	選手 (日本選手団旗手)	森本　真敏	モリモト マサトシ	男	24	滋賀県蒲生郡竜王町	㈳滋賀県ろうあ協会
32		15	選手	石田　考正	イシダ タカマサ	男	22	愛知県蒲郡市	㈳愛知県聴覚障害者協会
33		16	選手	佐藤　將光	サトウ マサミツ	男	28	愛媛県西予市	愛媛県聴覚障害者協会
34		17	選手	竹花　康太郎	タケハナ コウタロウ	男	22	大阪府東大阪市	㈳大阪聴力障害者協会
35		18	選手	前島　博之	マエジマ ヒロユキ	男	21	鳥取県鳥取市	鳥取県ろうあ団体連合会
36		19	選手	板鼻　英二	イタハナ エイジ	男	28	神奈川県川崎市宮前区	神奈川県聴覚障害者連盟
37		20	選手	寺澤　純一	テラサワ ジュンイチ	男	22	愛知県知立市	㈳愛知県聴覚障害者協会
38		21	選手	山田　真人	ヤマダ マサト	男	44	福島県いわき市	㈳福島県聴覚障害者協会
39		22	選手	金子　誠一	カネコ セイイチ	男	42	山口県山口市	㈳山口県ろうあ連盟
40		23	選手	堰本　将平	セキモト ショウヘイ	男	17	鳥取県岩美郡岩美町	鳥取県ろうあ団体連合会
41		24	選手	嶋田　裕子	シマダ ユウコ	女	37	大阪府堺市南区	㈳大阪聴力障害者協会
42		25	選手	奥村　渚	オクムラ ナギサ	女	21	奈良県奈良市	㈳奈良県聴覚障害者協会
43		26	選手	佐藤　優	サトウ ユウ	女	20	愛知県豊田市	㈳愛知県聴覚障害者協会
44	バドミントン	1	スタッフ	石井　幹雄	イシイ ミキオ	男	56	北海道札幌市北区	㈳北海道ろうあ連盟
45		2	スタッフ	岡崎　勇二	オカザキ ユウジ	男	46	北海道札幌市西区	(健聴者)
46		3	スタッフ	田原　直幸	タハラ ナオユキ	男	47	東京都日野市	㈳東京都聴覚障害者連盟
47		4	スタッフ	渡辺　恭弘	ワタナベ タカヒロ	男	21	北海道札幌市南区	(健聴者)
48		5	選手	小堀　知史	コボリ トモフミ	男	38	熊本県熊本市	(財)熊本県ろう者福祉協会
49		6	選手	宮﨑　大介	ミヤザキ ダイスケ	男	30	熊本県熊本市	(財)熊本県ろう者福祉協会
50		7	選手	勝田　健	カツタ タケシ	男	20	佐賀県鳥栖市	(社福)福岡県聴覚障害者協会
51		8	選手	甲斐　勝己	カイ カツミ	男	32	兵庫県西宮市	(社福)福岡県聴覚障害者協会
52		9	選手	石井　満里	イシイ マリ	女	29	北海道札幌市北区	㈳北海道ろうあ連盟
53		10	選手	井上　美緒	イノウエ ミオ	女	25	埼玉県越谷市	㈳埼玉県聴覚障害者協会
54		11	選手	樋渡　美香	ヒワタリ ミカ	女	25	愛知県岡崎市	㈳愛知県聴覚障害者協会

通しNo	競技名	No	役職（ｽﾀｯﾌ/選手）	名　前	フリガナ	性別	年齢	都道府県市区町村	所属団体
55	バドミントン（続き）	12	選手	別所　睦月	ベッショ ムツキ	女	19	三重県四日市市	㈳愛知県聴覚障害者協会
56	バスケットボール男子	1	スタッフ	坂本　知加良	サカモト チカラ	男	29	北海道札幌市東区	（健聴者）
57		2	スタッフ	谷口　裕教	タニグチ ヤスノリ	男	35	北海道北広島市	㈳北海道ろうあ連盟
58		3	スタッフ	青井　佳奈子	アオイ カナコ	女	24	宮城県仙台市泉区	㈳宮城県ろうあ協会
59		4	スタッフ	吉野　巨人	ヨシノ ナオト	男	25	千葉県流山市	（健聴者）
60		5	スタッフ	山﨑　敬祐	ヤマザキ ケイスケ	男	29	福岡県福岡市早良区	（健聴者）
61		6	選手	及川　澄志	オイカワ キヨシ	男	31	北海道帯広市	㈳北海道ろうあ連盟
62		7	選手	雪森　文晃	ユキモリ フミアキ	男	27	東京都大田区	㈳東京都聴覚障害者連盟
63		8	選手	辻　　朋大	ツジ トモヒロ	男	26	三重県四日市市	㈳三重県聴覚障害者協会
64		9	選手	手塚　清貴	テヅカ キヨタカ	男	22	北海道札幌市	㈳北海道ろうあ連盟
65		10	選手	小沼　功治	オヌマ コウジ	男	27	神奈川県横浜市戸塚区	神奈川県聴覚障害者連盟
66		11	選手	西川　恵太	ニシカワ ケイタ	男	27	神奈川県横浜市戸塚区	神奈川県聴覚障害者連盟
67		12	選手	石川　友正	イシカワ トモマサ	男	27	東京都府中市	㈳東京都聴覚障害者連盟
68		13	選手	大平　良龍	オオヒラ ヨシタツ	男	21	福岡県福岡市西区	(社福)福岡県聴覚障害者協会
69		14	選手	丹沢　佑輔	タンザワ ユウスケ	男	23	神奈川県相模原市	神奈川県聴覚障害者連盟
70		15	選手	吉良　悠祐	キラ ユウスケ	男	20	福岡県朝倉市	(社福)福岡県聴覚障害者協会
71		16	選手	小立　哲也	オダチ テツヤ	男	32	大阪府箕面市	㈳大阪聴力障害者協会
72		17	選手	西　　正剛	ニシ マサタカ	男	35	福岡県福岡市博多区	(社福)福岡県聴覚障害者協会
73	バスケットボール女子	1	スタッフ	五十嵐　悟	イガラシ サトル	男	45	北海道旭川市	㈳北海道ろうあ連盟
74		2	スタッフ	木下　千代	キノシタ チヨ	女	25	大阪府四条畷市	（健聴者）
75		3	スタッフ	会田　孝行	アイダ タカユキ	男	42	埼玉県所沢市	㈳埼玉県聴覚障害者協会
76		4	スタッフ	栢森　香澄	カヤモリ カスミ	女	21	東京都八王子市	（健聴者）
77		5	選手	大庭　紀美	オオバ モトミ	女	29	静岡県裾野市	㈳静岡県聴覚障害者協会
78		6	選手	渡辺　亜紀	ワタナベ アキ	女	25	大阪府枚方市	㈳大阪聴力障害者協会
79		7	選手	平林　裕子	ヒラバヤシ ヒロコ	女	28	千葉県船橋市	(社福)千葉県聴覚障害者協会
80		8	選手	渡辺　さやか	ワタナベ サヤカ	女	23	神奈川県川崎市幸区	神奈川県聴覚障害者連盟
81		9	選手	杉谷　香	スギタニ カオリ	女	24	兵庫県尼崎市	㈳兵庫県聴覚障害者協会
82		10	選手	長谷川　理沙	ハセガワ リサ	女	24	兵庫県尼崎市	㈳兵庫県聴覚障害者協会

通しNo	競技名	No	役職（ｽﾀｯﾌ/選手）	名　前	フリガナ	性別	年齢	都道府県市区町村	所属団体
83	バスケットボール女子（続き）	11	選手	蓑原　由加利	ミノハラ ユカリ	女	26	東京都東村山市	㈳東京都聴覚障害者連盟
84		12	選手	吉田　裕加	ヨシダ ユカ	女	29	大阪府高槻市	㈳大阪聴力障害者協会
85		13	選手	真野　美千代	マノ ミチヨ	女	35	千葉県浦安市	(社福)千葉県聴覚障害者協会
86		14	選手	三宅　里歩	ミヤケ リホ	女	17	愛媛県四国中央市	愛媛県聴覚障害者協会
87		15	選手	富田　望	トミタ ノゾミ	女	24	大阪府東大阪市	㈳大阪聴力障害者協会
88		16	選手	的場　友里恵	マトバ ユリエ	女	23	大阪府堺市中区	㈳大阪聴力障害者協会
89	ビーチバレーボール	1	スタッフ	今井　起之	イマイ タツユキ	男	31	埼玉県さいたま市大宮区	（健聴者）
90		2	スタッフ	大石　歴	オオイシ レキ	男	24	神奈川県横浜市金沢区	（健聴者）
91		3	スタッフ（男子バレー/ビーチバレースタッフ兼務）	大川　裕二	オオカワ ユウジ	男	42	東京都江戸川区	㈳東京都聴覚障害者連盟
92		4	スタッフ	太田　夏未	オオタ ナツミ	女	21	東京都八王子市	（健聴者）
93		5	選手	平井　望	ヒライ ノゾミ	女	25	千葉県船橋市	(社福)千葉県聴覚障害者協会
94		6	選手	曾本　聡子	エモト サトコ	女	26	千葉県市川市	(社福)千葉県聴覚障害者協会
95		7	選手	沼澤　真里	ヌマザワ マリ	女	27	千葉県柏市	(社福)千葉県聴覚障害者協会
96		8	選手	藤田　琴美	フジタ コトミ	女	22	神奈川県伊勢原市	神奈川県聴覚障害者連盟
97	ボウリング	1	スタッフ	邊見　新吉	ヘンミ シンキチ	男	43	福島県白河市	㈳福島県聴覚障害者協会
98		2	スタッフ	笹木　光明	ササキ ミツアキ	男	59	千葉県松戸市	(社福)千葉県聴覚障害者協会
99		3	スタッフ	笹木　るみ子	ササキ ルミコ	女	52	千葉県松戸市	(社福)千葉県聴覚障害者協会
100		4	選手	数見　満	カズミ ミツル	男	66	和歌山県和歌山市	㈳和歌山県聴覚障害者協会
101		5	選手	新垣　匡史	アラカキ マサフミ	男	33	沖縄県那覇市	沖縄県聴覚障害者協会
102		6	選手	久保　春夫	クボ ハルオ	男	50	群馬県太田市	群馬県聴覚障害者団体連合会
103		7	選手	藤岡　宏明	フジオカ ヒロアキ	男	52	広島県福山市	㈳広島県ろうあ連盟
104		8	選手	松清　俊子	マツキヨ トシコ	女	62	愛知県名古屋市中村区	㈳愛知県聴覚障害者協会
105	サッカー男子	1	スタッフ	尾上　直也	オノエ ナオヤ	男	39	埼玉県熊谷市	（健聴者）
106		2	スタッフ	塚田　智宏	ツカダ トモヒロ	男	29	埼玉県越谷市	（健聴者）
107		3	スタッフ	北　一行	キタ カズユキ	男	34	埼玉県さいたま市桜区	（健聴者）
108		4	スタッフ	高橋　孝司	タカハシ コウジ	男	56	埼玉県草加市	㈳埼玉県聴覚障害者協会
109		5	スタッフ	山崎　剛	ヤマサキ ゴウ	男	21	東京都多摩市	（健聴者）
110		6	選手	四方　恒	シカタ ヒサシ	男	32	愛知県豊田市	㈳愛知県聴覚障害者協会

通しNo	競技名	No	役職（ｽﾀｯﾌ/選手）	名　前	フリガナ	性別	年齢	都道府県市区町村	所属団体
111	サッカー男子（続き）	7	選手	金安　恭平	カナヤス キョウヘイ	男	22	北海道札幌市北区	㈳北海道ろうあ連盟
112		8	選手	西浦　太志	ニシウラ フトシ	男	28	大阪府和泉市	㈳大阪聴力障害者協会
113		9	選手	伊東　高志	イトウ タカシ	男	33	愛知県安城市	㈳愛知県聴覚障害者協会
114		10	選手	野呂　啓	ノロ ケイ	男	34	愛知県名古屋市瑞穂区	㈳愛知県聴覚障害者協会
115		11	選手	細見　尚史	ホソミ ヒサシ	男	28	兵庫県たつの市	㈳兵庫県聴覚障害者協会
116		12	選手	中島　正行	ナカジマ マサユキ	男	27	東京都豊島区	㈳東京都聴覚障害者連盟
117		13	選手	野間　三夫	ノマ ミツオ	男	30	福岡県北九州市	(社福)福岡県聴覚障害者協会
118		14	選手	伊賀崎　俊	イガサキ シュン	男	28	千葉県印西市	(社福)千葉県聴覚障害者協会
119		15	選手	松本　弘	マツモト ヒロシ	男	23	東京都国分寺市	㈳東京都聴覚障害者連盟
120		16	選手	木根渕　慶彦	キネブチ ヨシヒコ	男	29	東京都三鷹市	㈳東京都聴覚障害者連盟
121		17	選手	穐田　誠	アキタ マコト	男	19	熊本県熊本市	(財)熊本県ろう者福祉協会
122		18	選手	桐生　聖明	キリュウ キヨアキ	男	19	神奈川県大和市	神奈川県聴覚障害者連盟
123		19	選手	村上　祐太郎	ムラカミ ユウタロウ	男	24	千葉県旭市	(社福)千葉県聴覚障害者協会
124		20	選手	河野　翔	コウノ ショウ	男	20	茨城県つくば市	㈳茨城県聴覚障害者協会
125		21	選手	高橋　裕樹	タカハシ ユウキ	男	29	大阪府堺市北区	㈳大阪聴力障害者協会
126		22	選手	桶口　智弘	オケグチ トモヒロ	男	31	佐賀県佐賀市	佐賀県聴覚障害者協会
127		23	選手	那須川　耀	ナスカワ ヨウ	男	18	北海道札幌市北区	㈳北海道ろうあ連盟
128		24	選手	船越　弘幸	フナコシ ヒロユキ	男	31	大阪市東住吉区	㈳大阪聴力障害者協会
129		25	選手	白井　隆	シライ タカシ	男	25	大阪府茨木市	㈳大阪聴力障害者協会
130		26	選手	江島　由高	エジマ ヨシタカ	男	24	千葉県柏市	(社福)千葉県聴覚障害者協会
131		27	選手	松元　卓己	マツモト タクミ	男	20	福岡県北九州市	(社福)福岡県聴覚障害者協会
132		28	選手	古　　隆喜	フル タカヨシ	男	30	兵庫県尼崎市	㈳兵庫県聴覚障害者協会
133	サッカー女子	1	スタッフ	佐藤　浩幸	サトウヒロユキ	男	49	神奈川県綾瀬市	神奈川県聴覚障害者連盟
134		2	スタッフ	武井　基	タケイ モトイ	男	28	東京都町田市	㈳東京都聴覚障害者連盟
135		3	スタッフ	立川　智隆	タツガワ トモタカ	男	31	広島県広島市安佐北区	㈳広島県ろうあ連盟
136		4	スタッフ	中山　剛	ナカヤマ ツヨシ	男	33	兵庫県姫路市	（健聴者）
137		5	スタッフ	川畑　孝夫	カワバタ タカオ	男	52	北海道札幌市厚別区	㈳北海道ろうあ連盟
138		6	選手	会津　みなみ	アイヅ ミナミ	女	24	東京都青海市	㈳東京都聴覚障害者連盟

通しNo	競技名	No	役職（ｽﾀｯﾌ/選手）	名　前	フリガナ	性別	年齢	都道府県市区町村	所属団体
139	サッカー女子（続き）	7	選手	井部　絵里子	イベ エリコ	女	27	兵庫県三田市	㈳兵庫県聴覚障害者協会
140		8	選手	大島　彩香	オオシマ アヤカ	女	17	兵庫県西宮市	㈳兵庫県聴覚障害者協会
141		9	選手	川畑　菜奈	カワバタ ナナ	女	19	北海道札幌市厚別区	㈳北海道ろうあ連盟
142		10	選手	黒崎　幸恵	クロサキ サチエ	女	31	東京都江戸川区	㈳東京都聴覚障害者連盟
143		11	選手	熊沢　佑吏	クマザワ ユリ	女	28	愛知県名古屋市天白区	㈳愛知県聴覚障害者協会
144		12	選手	古賀　千恵美	コガ チエミ	女	26	千葉県千葉市美浜区	(社福)千葉県聴覚障害者協会
145		13	選手	佐藤　愛香	サトウ アイカ	女	24	神奈川県大和市	神奈川県聴覚障害者連盟
146		14	選手	佐野　和美	サノ カズミ	女	23	静岡県伊豆の国市	㈳静岡県聴覚障害者協会
147		15	選手	首藤　麻衣	シュトウ マイ	女	27	埼玉県さいたま市南区	㈳埼玉県聴覚障害者協会
148		16	選手	芹澤　育代	セリザワ イクヨ	女	24	東京都町田市	㈳東京都聴覚障害者連盟
149		17	選手	田中　恵	タナカ メグミ	女	27	北海道札幌市北区	㈳北海道ろうあ連盟
150		18	選手	田村　友恵	タムラ トモエ	女	25	東京都大田区	㈳東京都聴覚障害者連盟
151		19	選手	寺井　名美	テライ ナミ	女	34	静岡県磐田市	㈳静岡県聴覚障害者協会
152		20	選手	中井　香那	ナカイ カナ	女	20	大阪府堺市北区	㈳大阪聴力障害者協会
153		21	選手	仲宗根　祥子	ナカソネ ショウコ	女	26	神奈川県座間市	神奈川県聴覚障害者連盟
154		22	選手	濱田　梨栄	ハマダ リエ	女	24	東京都大田区	㈳東京都聴覚障害者連盟
155		23	選手	御園　裕未	ミソノ ユミ	女	22	埼玉県上尾市	㈳埼玉県聴覚障害者協会
156	柔　道	1	スタッフ兼選手	南　　栄一	ミナミ エイイチ	男	59	福岡県三井郡大刀洗町	(社福)福岡県聴覚障害者協会
157		2	スタッフ	石橋　千草	イシバシチグサ	女	31	東京都世田谷区	（健聴者）
158		3	スタッフ	渡部　裕介	ワタベ ユウスケ	男	48	東京都江東区	㈳東京都聴覚障害者連盟
159		4	選手	山田　光穂	ヤマダ コウスイ	男	28	滋賀県彦根市	㈳滋賀県ろうあ協会
160		5	選手	東　　智宏	ヒガシ トモヒロ	男	26	鹿児島県大島郡瀬戸内町	鹿児島県聴覚障害者協会
161		6	選手	須川　幸一	スカワ コウイチ	男	33	東京都江戸川区	㈳東京都聴覚障害者連盟
162		7	選手	宮山　賢治	ミヤヤマ ケンジ	男	34	鹿児島県大島郡瀬戸内町	鹿児島県聴覚障害者協会
163	空　手	1	スタッフ	宮下　昭宣	ミヤシタ アキノブ	男	43	埼玉県越谷市	㈳埼玉県聴覚障害者協会
164		2	スタッフ	高橋　朋子	タカハシトモコ	女	32	東京都板橋区	㈳東京都聴覚障害者連盟
165		3	スタッフ	坂口　健二	サカグチ ケンジ	男	41	神奈川県横浜市保土ヶ谷区	神奈川県聴覚障害者連盟
166		4	選手	小島　崇寛	コジマ タカヒロ	男	23	愛知県岡崎市	㈳愛知県聴覚障害者協会

通し No	競技名	No	役職 (ｽﾀｯﾌ/選手)	名　前	フリガナ	性別	年齢	都道府県市区町村	所属団体
167	空　手 (続き)	5	選手	栗本　紗弥	クリモト サヤ	女	20	大分県大分市	(社福)大分県聴覚障害者協会
168	水　泳	1	スタッフ	豊田　律	トヨダ タダシ	男	42	三重県鈴鹿市	㈳三重県聴覚障害者協会
169		2	スタッフ	大平　英一	オオヒラ エイイチ	男	56	大阪府河内長野市	(健聴者)
170		3	スタッフ	村山　樹里	ムラヤマ ジュリ	女	32	愛知県愛知郡東郷町	㈳愛知県聴覚障害者協会
171		4	選手	今村　可奈	イマムラ カナ	女	21	大阪府河内長野市	㈳大阪聴力障害者協会
172		5	選手	茨　　隆太郎	イバラ リュウタロウ	男	15	東京都江戸川区	㈳東京都聴覚障害者連盟
173		6	選手	山本　駿	ヤマモト シュン	男	17	東京都葛飾区	㈳東京都聴覚障害者連盟
174		7	選手	高瀬　理恵	タカセ リエ	女	31	東京都大田区	㈳東京都聴覚障害者連盟
175		8	選手	藤川　彩夏	フジカワ アヤカ	女	14	長野県駒ヶ根市	中学生
176		9	選手	水谷　哲也	ミズタニ テツヤ	男	35	京都府京都市南区	㈳京都府聴覚障害者協会
177		10	選手	高岸　里佳	タカギシ リカ	女	23	大阪府大阪市城東区	㈳大阪聴力障害者協会
178		11	選手	藤井　陽	フジイ ヨウ	男	25	愛知県名古屋市北区	㈳愛知県聴覚障害者協会
179		12	選手	北嶋　昇	キタジマ ノボル	男	32	茨城県つくば市	㈳茨城県聴覚障害者協会
180		13	選手	木下　徹	キノシタ トオル	男	20	茨城県つくば市	㈳茨城県聴覚障害者協会
181	卓　球	1	スタッフ	佐藤　真二	サトウ シンジ	男	46	東京都杉並区	(健聴者)
182		2	スタッフ	西村　卓二	ニシムラ タクジ	男	61	千葉県市川市	(健聴者)
183		3	スタッフ	谷上　宏樹	タニガミ ヒロキ	男	33	京都府舞鶴市	(健聴者)
184		4	スタッフ	冨田　茂	トミタ シゲル	男	55	千葉県千葉市稲毛区	(社福)千葉県聴覚障害者協会
185		5	スタッフ	今西　伸行	イマニシ ノブユキ	男	36	大阪府東大阪市	㈳大阪聴力障害者協会
186		6	スタッフ	高橋　さや	タカハシ サヤ	女	29	千葉県八千代市	(健聴者)
187		7	スタッフ	井出　敬子	イデ ケイコ	女	46	神奈川県横浜市神奈川区	(健聴者)
188		8	スタッフ	松下　健	マツシタ ケン	男	23	茨城県日立市	㈳茨城県聴覚障害者協会
189		9	選手	望月　翔太	モチヅキ ショウタ	男	22	神奈川県横須賀市	神奈川県聴覚障害者連盟
190		10	選手	青山　修	アオヤマ オサム	男	40	千葉県千葉市若葉区	(社福)千葉県聴覚障害者協会
191		11	選手	梅村　正樹	ウメムラ マサキ	男	35	北海道北広島市	㈳北海道ろうあ連盟
192		12	選手	上田　大輔	ウエダ ダイスケ	男	24	京都府舞鶴市	㈳京都府聴覚障害者協会
193		13	選手 (日本選手団主将)	上田　萌	ウエダ モエ	女	19	東京都新宿区	㈳東京都聴覚障害者連盟
194		14	選手	鈴木　由樹子	スズキ ユキコ	女	32	北海道札幌市豊平区	㈳北海道ろうあ連盟

通し No	競技名	No	役職 (ｽﾀｯﾌ/選手)	名　前	フリガナ	性別	年齢	都道府県市区町村	所属団体
195	卓　球 (続き)	15	選手	小浜　京子	コハマ キョウコ	女	33	大阪府東大阪市	㈳大阪聴力障害者協会
196		16	選手	佐藤　理穂	サトウ リホ	女	18	東京都杉並区	㈳東京都聴覚障害者連盟
197	テニス	1	スタッフ	森本　尚樹	モリモト ナオキ	男	38	兵庫県尼崎市	㈳兵庫県聴覚障害者協会
198		2	スタッフ	杉本　和子	スギモト カズコ	女	41	東京都新宿区	(健聴者)
199		3	スタッフ	梶野　千賀子	カジノ チカコ	女	39	大阪府大阪市北区	㈳大阪聴力障害者協会
200		4	スタッフ	稲辺　忠奎	イナベ チュウケイ	男	61	埼玉県戸田市	㈳埼玉県聴覚障害者協会
201		5	スタッフ	石水　政之	イシミズ マサユキ	男	47	静岡県駿東郡長泉町	㈳静岡県聴覚障害者協会
202		6	選手	松下　哲也	マツシタ テツヤ	男	35	大阪府貝塚市	㈳大阪聴力障害者協会
203		7	選手	梶下　怜紀	カジシタ レイキ	男	15	広島県広島市安佐南区	中学生
204		8	選手	阿部　八千代	アベ ヤチヨ	女	34	徳島県板野郡上板町	徳島県聴覚障害者福祉協会
205		9	選手	辻岡　瑞恵	ツジオカ ミズエ	女	34	大阪府大阪市天王寺区	㈳大阪聴力障害者協会
206	バレーボール男子	1	スタッフ	岩下　忠正	イワシタ タダマサ	男	31	東京都江戸川区	(健聴者)
207		2	スタッフ	金子　大	カネコ マサル	男	23	東京都杉並区	(健聴者)
208		3	スタッフ	大崎　紀代美	オオサキ キヨミ	女	49	東京都葛飾区	(健聴者)
209		4	スタッフ (男子バレー/ビーチバレースタッフ兼務)	大川　裕二	オオカワ ユウジ	男	42	東京都江戸川区	㈳東京都聴覚障害者連盟
―		5	スタッフ	古徳　愛子	コトク アイコ	女	41	東京都大田区	㈳東京都聴覚障害者連盟
210		6	スタッフ	川邉　貴久	カワベ タカヒサ	男	47	大阪府大阪市阿倍野区	㈳大阪聴力障害者協会
211		7	スタッフ	山﨑　藍	ヤマザキ アイ	女	25	千葉県千葉市稲毛区	(社福)千葉県聴覚障害者協会
212		8	選手	信田　光宣	ノブタ ミツノブ	男	38	兵庫県神戸市西区	㈳兵庫県聴覚障害者協会
213		9	選手	西村　浩一	ニシムラ コウイチ	男	36	兵庫県西宮市	㈳兵庫県聴覚障害者協会
214		10	選手	平田　智哉	ヒラタ トモヤ	男	32	千葉県市川市	(社福)千葉県聴覚障害者協会
215		11	選手	若原　正享	ワカハラ マサユキ	男	26	栃木県那須塩原市	栃木県聴覚障害者協会
216		12	選手	田中　利典	タナカ トシノリ	男	24	滋賀県草津市	㈳滋賀県ろうあ協会
217		13	選手	猪野　康隆	イノ ヤスタカ	男	35	東京都府中市	㈳東京都聴覚障害者連盟
218		14	選手	瀬井　達也	セイ タツヤ	男	26	東京都町田市	㈳東京都聴覚障害者連盟
219		15	選手	高橋　竜一	タカハシ リュウイチ	男	21	愛知県大府市	㈳愛知県聴覚障害者協会
220		16	選手	乾　文雄	イヌイ フミオ	男	32	大阪府大阪市生野区	㈳大阪聴力障害者協会
221		17	選手	中野　智久	ナカノ トモヒサ	男	24	大阪府堺市美原区	㈳大阪聴力障害者協会

通しNo	競技名	No	役職（ｽﾀｯﾌ/選手）	名　前	フリガナ	性別	年齢	都道府県市区町村	所属団体
222	バレーボール男子（続き）	18	選手	今井　勇太	イマイ ユウタ	男	16	大阪府大阪市城東区	㈳大阪聴力障害者協会
223		19	選手	中村　俊雄	ナカムラ トシオ	男	26	大阪府大阪市福島区	㈳大阪聴力障害者協会
224	バレーボール女子	1	スタッフ	吉田　浩司	ヨシダ コウジ	男	45	神奈川県平塚市	（健聴者）
225		2	スタッフ	遠藤　昌治	エンドウ マサハル	男	42	静岡県富士宮市	（健聴者）
226		3	スタッフ	物井　明子	モノイ アキコ	女	41	神奈川県中郡大磯町	神奈川県聴覚障害者連盟
227		4	スタッフ	矢島　実	ヤジマ ミノル	男	39	千葉県千葉市稲毛区	（健聴者）
228		5	スタッフ	澤和　信二	タクワ シンジ	男	47	千葉県市原市	㈳千葉県聴覚障害者協会
229		6	スタッフ	海老澤あきつ	エビサワ アキツ	女	32	東京都板橋区	㈳東京都聴覚障害者連盟
230		7	スタッフ	小垣　奈美	オガキ ナミ	女	32	兵庫県西宮市	㈳兵庫県聴覚障害者協会
231		8	スタッフ	梅本　祥子	ウメモト サチコ	女	33	大阪府大阪市生野区	㈳大阪聴力障害者協会
232		9	選手	柳川　奈美子	ヤナガワ ナミコ	女	23	宮城県仙台市泉区	㈳宮城県ろうあ協会
233		10	選手	菅谷　美穂	スガヤ ミホ	女	20	茨城県石岡市	㈳茨城県聴覚障害者協会
234		11	選手	信田　裕子	ノブタ ヒロコ	女	32	兵庫県神戸市西区	㈳兵庫県聴覚障害者協会
235		12	選手	赤堀　美里	アカホリ ミサト	女	32	静岡県掛川市	㈳静岡県聴覚障害者協会
236		13	選手	鈴木　恵子	スズキ ケイコ	女	28	京都府京都市南区	㈳京都府聴覚障害者協会
237		14	選手	岡本　かおり	オカモト カオリ	女	33	大阪府大阪市生野区	㈳大阪聴力障害者協会
238		15	選手	岡崎　宏美	オカザキ ヒロミ	女	29	大阪府大阪市	㈳大阪聴力障害者協会
239		16	選手	安積　梨絵	アヅミ リエ	女	18	兵庫県飾磨郡夢前町	㈳兵庫県聴覚障害者協会
240		17	選手	物袋　友美	モッテ トモミ	女	36	大阪府大阪市平野区	㈳大阪聴力障害者協会
241		18	選手	長澤　みゆき	ナガサワ ミユキ	女	21	東京都八王子市	神奈川県聴覚障害者連盟
242		19	選手	青木　洋佳	アオキ ヒロカ	女	30	東京都三鷹市	㈳東京都聴覚障害者連盟
243		20	選手	山崎　望	ヤマサキ ノゾミ	女	25	大阪府大東市	㈳大阪聴力障害者協会
244		21	選手	升田　真紀	マスダ マキ	女	36	兵庫県神戸市東灘区	㈳兵庫県聴覚障害者協会

成績一覧

メダリスト

No,	競　技	種　目	氏　名	メダル
1	陸上	男子ハンマー投げ	森本真敏	金メダル
2	陸上	男子槍投げ	佐藤将光	銀メダル
3	陸上	女子マラソン	嶋田裕子	銀メダル
4	陸上	女子槍投げ	佐藤　優	銅メダル
5	陸上	男子マラソン	金子誠一	銅メダル
6	バドミントン	混合ダブルス	小堀知史　石井満里	銅メダル
7	ボウリング	女子マスターズ	松清俊子	銀メダル
8	柔道	男子90－100kg級	山田光穂	金メダル
9	空手	男子60－67キロ級	小島崇寛	金メダル
10	空手	女子50－68キロ級	栗本紗弥	金メダル
11	水泳	男子200メートル背泳ぎ	茨隆太郎	金メダル
12	水泳	女子200Mバタフライ	今村可奈	銅メダル
13	水泳	女子800M自由形	今村可奈	銅メダル
14	卓球	女子団体	上田　萌　佐藤理穂　小浜京子　鈴木由樹子	銀メダル
15	卓球	女子シングルス	上田　萌	銀メダル
16	卓球	女子ダブルス	小浜京子　鈴木由樹子	銅メダル
17	卓球	女子シングルス	佐藤理穂	銅メダル
18	テニス	男子シングルス	梶下玲紀	銀メダル
19	テニス	混合ダブルス	松下哲也　阿部八千代	銅メダル
20	バレーボール	女子団体	柳川奈美子　菅谷美穂　信田裕子 赤堀美里　鈴木恵子　岡本かおり 岡崎宏美　安積梨絵　物袋友美 長澤みゆき　青木洋佳　山崎望　升田真紀	銅メダル

獲得メダル数	金メダル	5
	銀メダル	6
	銅メダル	9
	合計	20

国別メダル獲得成績一覧

（台北デフリンピックウェブサイトより）

順位	国　名	金	銀	銅	計
1	ロシア	29	41	28	98
2	ウクライナ	20	22	25	67
3	韓国	14	13	7	34
4	中国民国	12	9	17	38
5	台湾	11	11	11	33
6	ベラルーシ	10	6	7	23
7	アメリカ合衆国	10	5	7	22
8	南アフリカ	8	2	2	12
9	**日本**	**5**	**6**	**9**	**20**
10	スウェーデン	5	2	3	10
11	トルコ	4	6	7	17
12	イタリア	4	5	5	14
13	フランス	4	2	6	12
14	エストニア	4	2	2	8
15	ケニア	4	2	1	7
16	ドイツ	3	8	12	23
17	イラン・イスラム共和国	3	5	5	13
18	オーストラリア	3	2	1	6
19	ベネズエラ	3	1	2	6
20	リトアニア	2	4	7	13
21	ラトビア	2	3	0	5
22	ハンガリー	2	0	3	5
23	キューバ	2	0	2	4
24	ポルトガル	2	0	2	4
25	ノルウェー	2	0	0	2
26	イギリス	1	4	5	10
27	ポーランド	1	2	1	4
28	ブルガリア	1	1	3	5
29	モンゴル	1	0	2	3
30	スイス	1	0	2	3
31	ニュージーランド	1	0	1	2
32	プエルトリコ	1	0	1	2
33	クロアチア	1	0	0	1
34	フィンランド	1	0	0	1
35	オランダ	1	0	0	1
36	ギリシャ	0	2	3	5
37	カナダ	0	2	0	2
38	ナイジェリア	0	2	0	2
39	アイルランド	0	1	1	2
40	マレーシア	0	1	1	2
41	セルビア共和国	0	1	1	2
42	チェコ共和国	0	1	0	1
43	スペイン	0	1	0	1
44	スロバキア	0	1	0	1
45	アルゼンチン	0	0	2	2
46	オーストリア	0	0	2	2
47	ブラジル	0	0	1	1
48	デンマーク	0	0	1	1
49	香港	0	0	1	1
50	インド	0	0	1	1
51	カザフスタン	0	0	1	1
52	キルギス	0	0	1	1
53	サウジアラビア	0	0	1	1
54	メキシコ	0	0	1	1
55	ウズベキスタン	0	0	1	1
	合計	178	176	205	559

各競技チーム成績一覧

【陸上競技】

選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	順位(位/人)	記録	POINT	風力	成績
重田　竜佳	男子　100m	51	予選	7	3/7	11.27		+1.0	準決勝敗退
		24	準決勝	3	4/8	11.21		+0.6	
堰本　将平	男子　100m	51	予選	7	4/7	11.34		+1.5	準決勝敗退
		24	準決勝	3	8/8	11.60		+0.5	
白石　進	男子　400m	23	予選	4	5/5	52.50			準決勝敗退
		16	準決勝	2	6/8	50.97			
高田　裕士	男子　400m	23	予選	4	5/7	52.77			予選敗退
北田　明広	男子　800m	27	予選	4	1/7	01:59.53			準決勝敗退
		16	準決勝	2	7/8	02:08.96			
寺澤　純一	男子　800m	27	予選	4	6/6	02:02.79			予選敗退
堰本･重田･竹花･白石	男子　4x100m リレー	8	決勝	1	6/8	43.51			6 位 / 入賞
白石･北田･寺澤･高田	男子　4x400m リレー	9	予選	1	4/9	03:26.56			5 位 / 入賞
板鼻･北田･重田･白石		8	決勝	1	5/8	03:24.21			
板鼻　英二	男子　10 種競技	8	決勝	1	7/8	5278			7 位 / 入賞
前島　博之	男子　高跳び	11	決勝	1	8/11	1.93			8 位 / 入賞
竹花　康太郎	男子　棒高跳び	13	決勝	1	4/12	4.40			4 位 / 入賞
佐藤　將光	男子　槍投げ	14	決勝	1	2/14	59.32			銀メダル
森本　真敏	男子　ハンマー投げ	9	決勝	1	1/9	61.08			金メダル /WR GR
石田　考正	男子　ハンマー投げ	9	決勝	1	7/9	46.10			7 位 / 入賞
金子　誠一	男子　マラソン	26	決勝	1	3/24	2:40:21			銅メダル
山中　孝一郎	男子　マラソン	26	決勝	1	4/24	2:47:17			4 位 / 入賞
山田　真人	男子　マラソン	26	決勝	1	5/24	2:51:44			5 位 / 入賞
奥村　渚	女子　槍投げ	8	決勝	1	5/8	39.70			5 位 / 入賞
佐藤　優	女子　槍投げ	8	決勝	1	3/8	42.56			銅メダル
嶋田　裕子	女子　マラソン	11	決勝	1	2/9	3:41:01			銀メダル

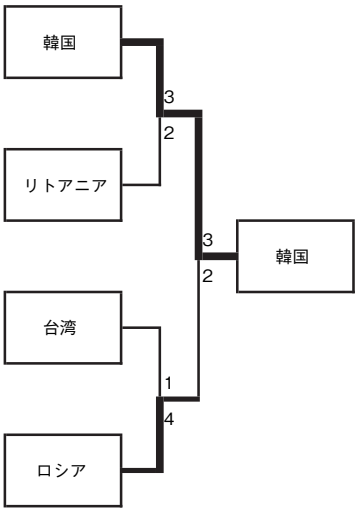
WR : 聴覚障害者世界新記録　　GR : デフリンピック新記録

【バドミントン】

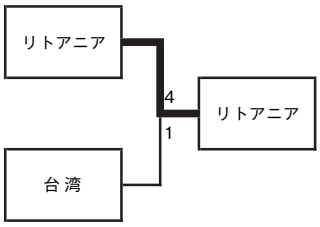
選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	勝敗	対戦相手（選手名・国）		マッチ	セットポイント					予選成績			成績
									1	2	3	4	5	順位	勝	負	
日本チーム	団体戦	16	予選リーグ	4	勝	ドイツ		4-1	0-2	2-0	2-0	2-1	2-1	2/4	2	1	予選通過
					勝	インドネシア		3-2	0-2	2-0	0-2	2-0	2-0				
					負	ロシア		1-4	0-2	0-2	0-2	0-2	2-1				
		8	決勝トーナメント		負	リトアニア		1-4	0-2	0-2	0-2	2-0	0-2				5位入賞
小堀　知史	男子 シングルス	57	予選リーグ	16	負	ANTONOV Valery Valeryevich	ロシア	1-2	21-18	12-21	9-21			3/4	1	2	予選敗退
					負	NIU Wen Cong	中国	0-2	16-21	14-21							
					勝	REZNIKAS Ignas	リトアニア	2-0	21-15	21-14							
宮﨑　大介	男子 シングルス	57	予選リーグ	16	負	WITTE Oliver	ドイツ	0-2	8-21	13-21				2/3	1	1	予選通過
					勝	CHAN Wing Hung	香港	2-0	21-11	21-17							
		32	決勝トーナメント		負	HERMAWAN Aditya	インドネシア	0-2	4-21	10-21							一回戦敗退
勝田　健	男子 シングルス	57	予選リーグ	16													棄権
甲斐　勝己	男子 シングルス	57	予選リーグ	16	負	LU Guowen	中国	0-2	12-21	10-21				2/4	2	1	予選通過
					勝	GRAVOGL Robert	ラトビア	2-1	19-21	21-18	21-10						
					勝	SADLER Carl	イギリス	2-0	21-15	21-19							
		32	決勝トーナメント		負	WITTE Oliver	ドイツ	0-2	12-21	3-21							一回戦敗退
石井　満里	女子 シングルス	52	予選リーグ	16	勝	VITHIKA Suhani	インド	2-0	21-17	21-16				1/3	2	0	予選通過
					勝	CHEN Hui	台湾	2-0	21- 9	21-11							
		32	決勝トーナメント		負	井上　美緒	日本	0-2	11-21	16-21							一回戦敗退
井上　美緒	女子 シングルス	52	予選リーグ	16	負	JIANG Jialai	中国	0-2	9-21	15-21				2/4	2	1	予選通過
					勝	TING Pong Man Mandy	香港	2-0	21- 4	21- 4							
					勝	SOBOLEVA Alena Igorevna	ロシア	2-0	21- 8	21-15							
		32	決勝トーナメント		勝	石井　満里	日本	2-0	21-11	21-16							2回戦敗退
					負	別所　睦月	日本	0-2	12-21	15-21							
樋渡　美香	女子 シングルス	52	予選リーグ	16	勝	REISENBERGER Silke	オーストリア	棄権						1/3	2	0	予選通過
					勝	CHAPKANOVA Silviya Arsova	ブルガリア	2-0	21-14	21-11							
		32	決勝トーナメント		勝	WARDANI Tri Kusuma	インドネシア	不参加									3回戦敗退 ベスト8
					勝	IVASHKEVICH Olessya	カザフスタン	2-0	21-19	21-17							
					負	DOVYDAITYTE Kristina	リトアニア	0-2	13-21	7-21							
別所　睦月	女子 シングルス	52	予選リーグ	16	勝	ANAND Vaishnavi	インド	2-0	21- 7	21- 9				1/3	2	0	予選通過
					勝	CHU Chai Ho	香港	2-0	21- 2	21- 5							
		32	決勝トーナメント		勝	DIESSLIN Helga	ドイツ	2-0	21- 9	21- 5							3回戦敗退 ベスト8
					勝	井上　美緒	日本	2-0	21-12	21-15							
					負	WANG Meng	中国	1-2	21-19	14-21	18-21						
小堀・宮﨑	男子 ダブルス	27	決勝トーナメント		負	ROHMAN Muhammad Aditya SUSANTO Eddy	インドネシア	1-2	16-21	21-17	14-21						1回戦敗退
勝田・甲斐	男子 ダブルス	27	決勝トーナメント														棄権
石井・樋渡	女子 ダブルス	23	決勝トーナメント		勝	CHU Chai Ho /CHIM Kuk Fan	香港	2-0	21- 4	21- 4							1回戦シード 3回戦敗退 ベスト8
					負	WANG Meng /ZHANG Yi	中国	0-2	20-22	19-21							
井上・別所	女子 ダブルス	23	決勝トーナメント		勝	SEDOVA Anastasia Yuryevna/ GERASIMOVA Yana Alexandrovna	ロシア	2-0	21- 6	21-10							3回戦敗退 ベスト8
					勝	JIANG Jialai /LUO Qin	中国	2-0	21- 9	21- 8							
					負	KLOPP Svenja /FISCHER Saskia	ドイツ	1-2	15-21	21- 9	15-21						
小堀・石井	混合 ダブルス	49	決勝トーナメント		勝	REZNIKAS Ignas/NOVIK Viktorija	リトアニア	2-0	21-12	21- 7							銅メダル
					勝	LEE Jongbong /KIM Sunghee	韓国	2-0	21-16	21-17							
					勝	WITTE Oliver (1978)/FISCHER Saskia	ドイツ	2-1	18-21	21-18	21-19						
					負	SIN Hyunwoo/JEONG Seonhwa	韓国	1-2	21-13	9-21	18-21						
					勝	宮﨑・井上	日本	2-0	21-16	21-16							
宮﨑・井上	混合 ダブルス	49	決勝トーナメント		勝	CHAN Wing Hung /HO Pui Man	香港	2-0	21- 4	21- 8							4位入賞
					勝	VASILYEV Alexander Sergeevich/ SHTAYGER Olga Andreevna	ロシア	2-0	21-17	21-13							
					勝	JUNG Sunho/JOUNG Arum	韓国	2-0	21-18	21-19							
					負	KARPOV Artemy Mikhailovich/ SOBOLEVA Alena Igorevna	ロシア	0-2	17-21	11-21							
					負	小堀・石井	日本	0-2	16-21	16-21							
甲斐・樋渡	混合 ダブルス	49	決勝トーナメント		負	LU Guangyao (1990)/JIANG Jialai	中国	0-2	6-21	13-21							一回戦敗退
勝田・別所	混合 ダブルス	49	決勝トーナメント		負												棄権

※団体戦・シングルス戦は予選リーグあり。

■【団体戦】決勝トーナメント



■3-4決定戦



■最終結果

順位	国名	順位	国名
1	韓国	5	インド
2	ロシア	5	日本
3	リトアニア	5	カザフスタン
4	台湾	5	中国

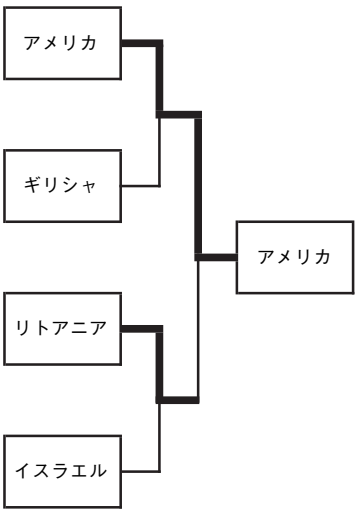
【ビーチバレーボール】

選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	勝敗	対戦相手（選手名・国）		マッチ	セットポイント 1	2	3	予選成績 順位	勝	負	成績
沼澤 真里 藤田 琴美	女子ペア	20	予選リーグ	4	負	DUDINA Ksenia Andreevna/ GRIBOVA Irina Andreevna	ロシア	1-2	18-21	21-19	9-15	3/5	2	2	予選通過
					負	ALEKNAVICIUTE Birute / KOSIUTE Sigita	リトアニア	0-2	12-21	6-21					
					勝	GRÄTZER Daniela/ROSSINI Laetitia	スイス	2-0	21- 6	21-19					
					勝	CHEREZOVA Olga（1972）/KURJIYAMSKAYA Susanna（1988）	ウズベキスタン	2-0	21-14	21-10					
		16	決勝トーナメント		負	BEDNAREK Doris/ OCHSENBAUER Magdalena Seraphine	ドイツ	0-2	12-21	12-21					1回戦敗退 ベスト16
平井 望 曾本 聡子	女子ペア	20	予選リーグ	4	勝	NIKIFOROV Stacy Elizabeth/ ACHIN Laurie Jane	アメリカ	2-0	21-19	21-18		2/5	3	1	予選通過
					負	BEDNAREK Lidia/ZERJATKE Katrice	ドイツ	2-0	19-21	16-21					
					勝	MATVIENKO Evgenya/ LAVROV Tatiana	イスラエル	2-1	21-16	18-21	15-10				
					勝	CHOU Pei /YU Tzu Hsuan	台湾	2-0	21-12	21-8					
		16	決勝トーナメント		負	LAANSOO Kristel /PARN Karin	エストニア	1-2	21-23	21-15	12-15				1回戦敗退 ベスト16

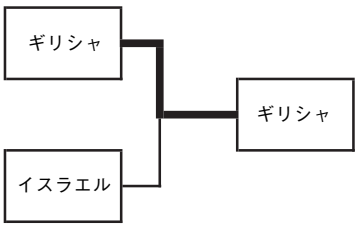
【バスケットボール　男子】

プログラム	対戦国	勝敗	スコア	Q1	Q2	Q3	Q4	成績
予選リーグ	ドイツ	負	55-61	11-18	19-9	15-18	10-16	0勝3敗 （D グループ4位）
	ベネズエラ	負	104-113	24-37	25-21	25-30	30-25	
	ギリシャ	負	55-97	19-23	8-26	12-19	16-29	
9-15 位決定戦	香港	勝	107-40	20-7	23-12	32-7	32-14	1勝2敗 （12 位 /15 チーム）
	スロベニア	負	80-104	14-21	17-28	25-23	24-32	
	ドイツ	負	51-68	19-13	2-22	17-19	13-14	

■決勝戦



■3位決定戦



■最終結果

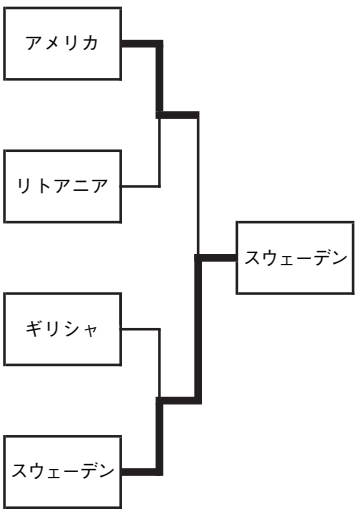
順位	国名	順位	国名
1	アメリカ	5	ベネズエラ
2	リトアニア	6	スペイン
3	ギリシャ	7	ウクライナ
4	イスラエル	8	台湾

9－スロバキア、10 －ロシア、11 －ドイツ、12 －日本、
13 －中国、14 －トルコ、15 －香港

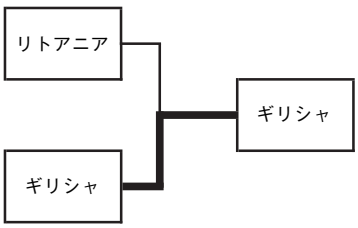
【バスケットボール　女子】

プログラム	対戦国	勝敗	スコア	Q1	Q2	Q3	Q4	成績
予選リーグ	リトアニア	負	32-102	7-20	5-23	6-24	14-35	2勝2敗 （B グループ3位）
	スウェーデン	負	32-72	12-20	11-17	8-21	1-14	
	香港	勝	62-16	9-5	19-2	17-5	17-4	
	オーストラリア	勝	64-40	16-8	8-13	16-9	24-10	
1-8 位決定戦	ギリシャ	負	62-82	12-16	7-22	16-29	27-15	1勝2敗 （6位 /10 チーム）
	中国	勝	76-75	15-11	17-22	19-15	25-27	
	ウクライナ	負	36-65	12-17	8-18	10-14	6-16	

■決勝戦



■3位決定戦



■最終結果

順位	国名	順位	国名
1	スウェーデン	5	ウクライナ
2	アメリカ	6	日本
3	リトアニア	7	中国
4	ギリシャ	8	オーストラリア

9－台湾、10 －香港

【ボウリング（男子）】

＜男子シングルス＞

順位	選手名	国　名	Ave	G1	G2	G3	G4	G5	G6	Total	ハイスコア
1	PERRY Randall Wayne	アメリカ	204.67	179	241	189	239	168	212	1228	239
2	HAM Jonghoon	韓国	199.5	216	184	232	188	190	187	1197	232
3	AWANG Mohd Zaidi	マレーシア	198	209	201	190	170	200	218	1188	218
⋮											
16	新垣　匡史	日本	185.33	174	155	200	194	188	201	1112	201

総合 16 位以上がマスターズ戦出場

⋮											
30	藤岡　宏明	日本	177.33	179	130	195	213	150	197	1064	213
78	久保　春夫	日本	159.17	137	172	144	149	174	179	955	179
87	数見　満	日本	156.5	164	130	158	169	152	166	939	169
⋮											
144	DAR Nasir	パキスタン	104.5	102	116	98	110	90	111	627	116

＜男子ダブルス＞

順位	選手名	国　名	Ave	G1	G2	G3	G4	G5	G6	Total	
1	AN Seongjo	韓国	187.5	175	201	195	167	199	188	1125	2378
	HAM Jonghoon		208.83	190	223	211	194	236	199	1253	
2	KIM Younho	韓国	195.83	191	198	223	222	174	167	1175	2368
	SEO Youngchun		198.83	202	193	204	189	169	236	1193	
3	ALROMAIH Fahad Mohammed	サウジアラビア	206.5	166	234	203	225	208	203	1239	2346
	ORAIF Mohmmad Adel		184.5	165	232	200	167	177	166	1107	
⋮											
13	新垣　匡史	日本	185.33	187	190	181	182	180	192	1112	2215
	藤岡　宏明		183.83	193	161	211	164	175	199	1103	
⋮											
17	数見　満	日本	187.33	174	198	179	179	211	183	1124	2189
	久保　春夫		177.5	192	160	163	202	178	170	1065	
⋮											
64	DAR Nasir	パキスタン	109.67	103	100	143	110	105	97	658	1501
	KHAN Zeeshan Ahmed		140.5	123	166	109	165	151	129	843	

＜男子トリオ＞

【前半 B 組】

順位	選手名	国　名	Ave	G1	G2	G3	Total	
1	PERRY Randall Wayne	アメリカ	188.33	181	194	190	565	1651
	STOGRYN Darrell Dean		182	165	188	193	546	
	ZUCHEGNO JR Ronnie Leonard		180	170	180	190	540	
2	DEKKER Wouter	オランダ	174.33	179	159	185	523	1640
	DUIVENVOORDEN Joost		197.33	192	196	204	592	
	VISSER Martin		175	181	174	170	525	
3	CHANG Li Hsiao	台湾	175.33	169	186	171	526	1638
	CHENG Chung Chin		172.66	140	179	199	518	
	KUNG Shih Chun		198	177	202	215	594	
⋮								
6	新垣　匡史	日本	178	169	168	197	534	1534
	藤岡　宏明		159.66	192	134	153	479	
	数見　満		146.33	215	137	169	434	
⋮								

順位	選手名	国　名	Ave	G1	G2	G3	Total	
41	IQBAL Javed	パキスタン	118	137	88	129	354	1194
	KHAN Zeeshan Ahmed		133.66	146	108	147	401	
	MAJEED Shahid		146.33	139	147	153	439	

【後半 A・B 組】

順位	選手名	国　名	Ave	G1	G2	G3	G4	G5	G6	Total	
1	AN Seongjo	韓国	193.83	206	227	218	151	181	180	1163	3485
	CHOI Taein		200	198	193	192	200	183	234	1200	
	HAM Jonghoon		187	186	216	195	152	183	190	1122	
2	CHIU Ching Ling	台湾	189	184	181	197	201	180	191	1134	3483
	HSIEH Sheng Fu		205.33	213	189	216	176	193	245	1232	
	WENG Chung Ming		186.17	175	198	211	165	166	202	1117	
3	ELOFSSON Anton Carl Bertil	スウェーデン	176.5	188	187	209	122	167	186	1059	3290
	FLINK Fredric Tesfaye Angurun		182.5	179	171	225	182	157	181	1095	
	JOHANSSON Peter Leif		189.33	179	192	214	175	187	189	1136	
⋮											
13	新垣　匡史	日本	172.17	169	168	197	180	143	176	1033	3122
	藤岡　宏明		166.17	192	134	153	144	191	183	997	
	数見　満		182	215	137	169	196	196	179	1092	
⋮											
41	AKOPYAN Arsen Arturovich	ロシア	110.17	170	199	156	0	0	136	661	1999
	ANDRIASOV Roman Yuryevich		109.67	168	175	172	0	0	143	658	
	KUZNETSOV Dmitry Lyvovich		113.33	157	157	201	0	0	165	680	

＜男子団体（５人）＞日本の出場なし

＜男子マスターズ＞

順位	選手名	国　名		Ave	G1	G2	G3	G4	G5	G6	G7	G8
1	AN Seongjo	韓国	スコア	204.63	180	178	184	221	202	204	189	215
			ボーナスポイント	7.5	10	10	5	10	10	0	0	10
			小　計	212.13	190	188	189	231	212	204	189	225
				G9	G10	G11	G12	G13	G14	G15	G16	Total
			スコア	225	200	222	200	190	235	168	197	3325
			ボーナスポイント	10	10	10	10	0	10	0	10	
			小　計	235	210	232	210	190	245	168	207	
2	CHOI Taein	韓国	スコア	210.38	182	168	203	168	182	205	201	194
			ボーナスポイント	6.25	10	0	10	0	0	10	10	0
			小　計	216.63	192	168	213	168	182	215	211	194
				G9	G10	G11	G12	G13	G14	G15	G16	Total
			スコア	230	222	190	192	195	214	205	235	3276
			ボーナスポイント	10	10	10	0	10	0	0	10	
			小　計	240	232	200	192	205	214	205	245	
3	HAM Jonghoon	韓国	スコア	204	168	153	192	193	257	227	147	214
			ボーナスポイント	6.25	0	0	10	10	10	0	0	10
			小　計	210.25	168	153	202	203	267	227	147	224
				G9	G10	G11	G12	G13	G14	G15	G16	Total
			スコア	168	226	235	191	148	196	202	266	3273
			ボーナスポイント	0	10	10	10	0	10	0	10	
			小　計	168	236	245	201	148	206	202	276	
⋮												

順位	選手名	国　名		Ave	G1	G2	G3	G4	G5	G6	G7	G8
12	新垣　匡史	日本	スコア	193.75	175	194	200	160	162	160	168	194
			ボーナスポイント	3.75	10	10	10	0	0	0	10	0
			小　計	197.5	185	204	210	160	162	160	178	194
				G9	G10	G11	G12	G13	G14	G15	G16	Total
			スコア	192	225	189	234	202	154	173	181	3033
			ボーナスポイント	0	10	0	10	0	0	10	0	
			小　計	192	235	189	244	202	154	183	181	

⋮

16	SEO Youngchun	韓国	スコア	187	167	167	187	187	147	188	159	143
			ボーナスポイント	5	0	0	0	10	0	0	0	0
			小　計	192	167	167	187	197	147	188	159	143
				G9	G10	G11	G12	G13	G14	G15	G16	Total
			スコア	187	183	189	225	156	132	202	222	2891
			ボーナスポイント	0	10	0	10	0	0	10	10	
			小　計	187	193	189	235	156	132	212	232	

● 3 位決定戦

順位	選手名	国　名	
1	CHOI Taein	韓国	決勝戦へ
2	HAM Jonghoon	韓国	銅メダル

●決勝戦

順位	選手名	国　名	
1	AN Seongjo	韓国	金メダル
2	CHOI Taein	韓国	銀メダル

【ボウリング（女子）】

＜女子シングルス＞

順位	選手名	国　名	Ave	G1	G2	G3	G4	G5	G6	Total	ハイスコア
1	CHANG Yao Chien	台湾	189	142	187	197	190	232	186	1134	232
2	JEONG Jeongyeon	韓国	188	165	184	224	167	193	195	1128	224
3	LIN Hsiang Tzu	台湾	184.33	168	185	189	197	192	175	1106	197
4	KATANSKAYA Marina Vladimirovna	ロシア	179.5	176	182	233	175	146	165	1077	233
5	松清　俊子	日本	176.83	156	168	162	212	175	188	1061	212

総合 16 位以上がマスターズ戦出場

⋮

65	FAYTAREN Jorrelle Geron	フィリピン	111	117	104	108	124	98	115	666	124

＜女子ダブルス＞＜女子トリオ＞＜女子団体（５人）＞　日本の出場なし

＜女子マスターズ＞

● 16 人戦

順位	選手名	国　名		Ave	G1	G2	G3	G4	G5	G6	G7	G8
1	CHANG Yao Chien	台湾	スコア	196.88	180	199	178	170	212	170	161	172
			ボーナスポイント	6.25	10	10	10	5	10	0	10	10
			小　計	203.13	190	209	188	175	222	170	171	182
				G9	G10	G11	G12	G13	G14	G15	G16	Total
			スコア	193	205	198	224	192	153	223	187	3132
			ボーナスポイント	0	10	10	10	10	0	10	0	
			小　計	193	215	208	234	202	153	233	187	

順位	選手名	国　名		Ave	G1	G2	G3	G4	G5	G6	G7	G8
2	松清　俊子	日本	スコア	193	168	178	202	186	210	161	143	147
			ボーナス ポイント	8.75	10	10	10	10	10	10	0	0
			小　計	201.75	178	188	212	196	220	171	143	147
				G9	G10	G11	G12	G13	G14	G15	G16	Total
			スコア	202	200	185	201	171	200	182	203	3069
			ボーナス ポイント	10	10	10	10	0	10	10	10	
			小　計	212	210	195	211	171	210	192	213	
3	BERTI Themis	ギリシャ	スコア	185.88	178	182	161	170	190	164	171	196
			ボーナス ポイント	8.13	10	0	0	5	10	0	10	10
			小　計	194	188	182	161	175	200	164	181	206
				G9	G10	G11	G12	G13	G14	G15	G16	Total
			スコア	172	137	207	173	170	167	246	215	3009
			ボーナス ポイント	10	0	10	10	10	5	10	10	
			小　計	182	137	217	183	180	172	256	225	
⋮												
16	KELLER Jerilyn	アメリカ	スコア	165.13	146	138	154	157	152	172	149	183
			ボーナス ポイント	3.13	5	0	0	0	0	10	0	10
			小　計	168.25	151	138	154	157	152	182	149	193
				G9	G10	G11	G12	G13	G14	G15	G16	Total
			スコア	166	156	182	189	168	167	155	138	2622
			ボーナス ポイント	0	0	0	10	10	5	0	0	
			小　計	166	156	182	199	178	172	155	138	

●３位決定戦

順位	選手名	国　名	１Ｇスコア	
1	松清　俊子	日本	172	決勝進出
2	BERTI Themis	ギリシャ	169	銅メダル

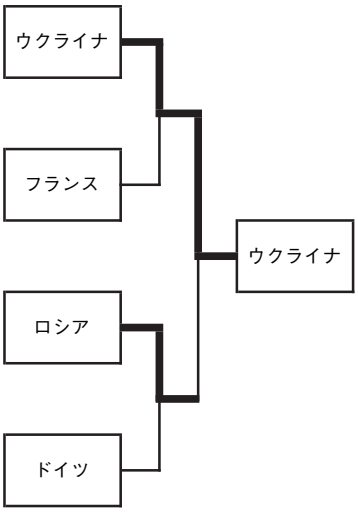
●決勝戦

順位	選手名	国　名	２Ｇ Total	
1	CHANG Yao Chien	台湾	386	金メダル
2	松清　俊子	日本	331	銀メダル

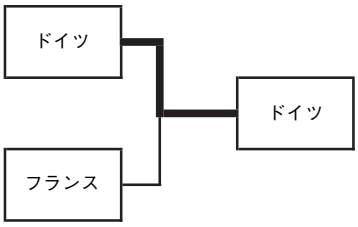
【サッカー　男子】

プログラム	対戦国	勝敗	スコア	ＰＫ	成績
予選リーグ	イギリス	負	1 - 2		０勝１敗２分
	アメリカ	引	0 - 0		
	アイルランド	引	0 - 0		
9-16 位決定トーナメント	韓国	勝	2 - 2	5 - 3	12 位 /16 チーム
9-12 位決定トーナメント	スペイン	負	0 - 2		
11、12 位決定戦	デンマーク	負	2 - 3		

■決勝戦



■3位決定戦



■最終結果

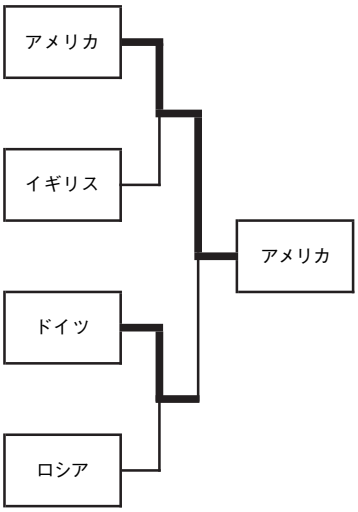
順位	国名	順位	国名	順位	国名
1	ウクライナ	5	イラン	9	イギリス
2	ロシア	6	アルゼンチン	10	スペイン
3	ドイツ	7	アイルランド	11	デンマーク
4	フランス	8	アメリカ	12	日本

13－韓国、14－南アフリカ、15－カザフスタン、（不参加）ナイジェリア

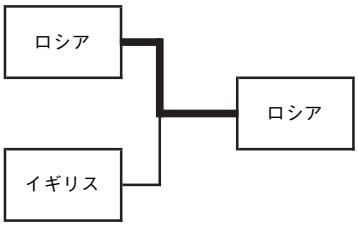
【サッカー　女子】

プログラム	対戦国	勝敗	スコア	ＰＫ	成績
予選リーグ	イギリス	負	1 - 6		１勝２敗
	ロシア	負	0 -10		
	タイ	勝	5-0		
5 - 6 位決定戦	デンマーク	負	1 - 2		6位 / 7チーム

■決勝戦



■3位決定戦



■最終結果

順位	国名	順位	国名
1	アメリカ	5	デンマーク
2	ドイツ	6	日本
3	ロシア	7	タイ
4	イギリス		

（不参加）南アフリカ

【柔　道】

男子60－66kg　東　智宏　　成績　0勝1敗（1回戦敗退）

出場数	ラウンド
10	トーナメント

	1回戦
相手名	DA SILVA Heverson Greiton
国　名	ブラジル
内　容	一本負け
決まり技	内股

男子66－73kg　宮山　賢治　　成績　1勝2敗（5位）

出場数	ラウンド
10	トーナメント

	1回戦	2回戦	敗者復活戦／3位決定戦
相手名	MAMEDIYEV Elnur	JUNG Jinwoong	ROY Frédéric Serge
国　名	アゼルバイジャン	韓国	フランス
内　容	一本勝ち	一本負け	一本負け
決まり技	隅返し	横四方固め	谷落とし

男子73－81kg　南　　栄一　　成績　0勝2敗（7位）

出場数	ラウンド
8	トーナメント

	1回戦	敗者復活戦
相手名	CHIARAMONTE Marco	DUVENDEY Chechek-Ool Shoydanovich
国　名	カナダ	ロシア
内　容	一本負け	一本負け
決まり技	すくい投げ	すくい投げ

男子81－90kg　須川　幸一　　成績　1勝2敗（5位）

出場数	ラウンド
7	トーナメント

	1回戦	2回戦	敗者復活戦／3位決定戦
相手名	ALCANTARA Paulo Nascimento	BASTUG Murat	LIN Mao Chang
国　名	ブラジル	トルコ	台湾
内　容	一本勝ち	一本負け	優勢負け
決まり技	払い巻き込み	送り襟絞め	優勢（有効・返し）

男子90－100kg　山田　光穂　　成績　4勝0敗（金メダル）

出場数	ラウンド
5	リーグ

	リーグ1回戦	リーグ2回戦	リーグ3回戦	リーグ4回戦
相手名	CRESPO Sebastien	LAVROV Dmitry	ALYUZ Selcuk	GURRAGCHAA Shijirbaatar
国　名	フランス	ロシア	トルコ	モンゴル
内　容	一本勝ち	一本勝ち	一本勝ち	一本勝ち
決まり技	送り襟絞め	内股	内股	内股

【水　泳】

選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	順位(位 / 人)	記録	成績
水谷　哲也	男子 100m バタフライ	40	予選	5	1/ 8	01:01.76	B 決勝へ
			B 決勝		−	−	棄権
	男子 100m フリースタイル	60	予選	8	3/ 8	00:56.66	予選敗退
	男子 50m バタフライ	47	予選	7	2/ 8	00:27.96	予選敗退
	男子 50m フリースタイル	63	予選	9	5/ 7	00:25.68	B 決勝へ
			B 決勝		7/ 7	00:25.69	B-7 位
藤井　陽	男子 100m バタフライ	40	予選	5	2/ 8	01:02.00	予選敗退
	男子 100m フリースタイル	60	予選	8	3/ 8	00:59.48	予選敗退
	男子 200m フリースタイル	49	予選	7	5/ 8	02:14.34	予選敗退
	男子 400m フリースタイル	26	予選	4	7/ 8	04:42.99	予選敗退
	男子 50m　バタフライ	47	予選	7	4/ 8	00:28.03	予選敗退
	男子 200m 個人メドレー	36	予選	5	7/ 7	02:28.06	B 決勝へ
			B 決勝		7/ 7	02:30.00	B-7 位
	男子 200m バタフライ	11	予選	3	5/ 5	02:34.25	予選敗退
北嶋　昇	男子 50m 平泳ぎ	37	予選	5	5/ 5→5/ 8	00:33.75	B 決勝へ
			B 決勝		5/ 8	00:33.71	B-5 位
	男子 100m 平泳ぎ	31	予選	4	5/ 8	01:15.51	B 決勝へ
			B 決勝		5/ 8	01:15.28	B-5 位
	男子 200m 平泳ぎ	26	予選	4	4/ 7	02:49.82	B決勝へ
			B 決勝		5/ 8	02:47.80	B-5 位
	男子 50m　フリースタイル	63	予選	9	6/ 8	00:26.78	予選敗退
木下　徹	男子 50m 平泳ぎ	37	予選	5	5/ 8→6/ 8	00:33.34	B 決勝へ
			B 決勝		4/ 8	00:33.57	B-4 位
	男子 100m 平泳ぎ	31	予選	4	4/ 8	01:13.80	B 決勝へ
			B 決勝		4/ 8	01:14.07	B-4 位
	男子 200m 平泳ぎ	26	予選	4	3/ 7	02:45.70	B 決勝へ
			B 決勝		2/ 8	02:41.42	B-2 位
	男子 200m 個人メドレー	36	予選	5	6/ 7	02:34.02	予選敗退
茨　隆太郎	男子 200m 背泳ぎ	21	予選	3	1/ 7	02:17.05	金メダル
			決勝		1/ 8	02:13.10	
	男子 50m　背泳ぎ	34	予選	5	4/ 8	00:29.77	B 決勝へ
		63	予選	9	1/ 8	00:29.19	B-1 位
	男子 50m　バタフライ	47	予選	7	5/ 8	00:28.35	予選敗退
	男子 100m 背泳ぎ	33	予選	5	2/35→2/ 7	01:02:77	A 決勝へ
			決勝		4/ 8	01:01.99	A-4 位
	男子 50m　フリースタイル	63	予選	9	7/ 8	00:26.97	予選敗退
山本　駿	男子 100m フリースタイル	60	予選	8	8/ 8	00:56.06	予選敗退
	男子 200m フリースタイル	49	予選	7	6/ 8	02:02.52	B 決勝へ
			B 決勝		3/ 8	02:00.75	B-3 位
	男子 400m フリースタイル	26	予選	4	2/ 8	04:20.10	B 決勝へ
			B 決勝		1/ 5	04:14.55	B-1 位
	男子 1500m フリースタイル	19	予選	3	2/ 6	16:52.91	予選通過
			決勝		4/ 8	16:52.83	4位 / 入賞

選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	順位(位 / 人)	記録	成績
今村　可奈	女子 200m フリースタイル	18	予選	3	2/ 5	02:16.15	予選通過
			決勝		5/ 8	02:14.14	5位 / 入賞
	女子 400m フリースタイル	20	予選	3	3/ 7	04:44.24	予選通過
			決勝		6/ 8	04:41.00	6位 / 入賞
	女子 200m 背泳ぎ	19	予選	3	3/ 7	02:35.21	予選通過
			決勝		7/ 8	02:33.23	7位 / 入賞
	女子 200m バタフライ	13	予選	2	1/ 7	02:29.56	銅メダル
			決勝		3/ 8	02:24.45	
	女子 800m フリースタイル	13	予選	2	1/ 7	09:45.44	銅メダル
			決勝		3/ 8	09:30.22	
高瀬　理恵	女子 50m 平泳ぎ	16	予選	2	5/ 8	00:36.18	予選通過
			決勝		4/ 8	00:36.10	4位 / 入賞
	女子 200m 平泳ぎ	13	予選	2	3/ 7	02:54.14	予選通過
			決勝		7/ 8	02:54.04	7位 / 入賞
	女子 100m 平泳ぎ	16	予選	2	4/ 8	01:20.27	予選通過
			決勝		8/ 8	01:21.00	8位 / 入賞
藤川　彩夏	女子 100m バタフライ	18	予選	3	4/ 6	01:11.18	予選敗退
	女子 200m 混合メドレー	20	予選	3	6/ 7	02:42.11	予選敗退
	女子 400m 混合メドレー	10	予選	2	5/ 5	05:33.66	予選敗退
	女子 200m バタフライ	13	予選	2	4/ 7	02:33.92	予選通過
			決勝		7/ 8	02:36.14	7位 / 入賞
高岸　里佳	女子 400m フリースタイル	20	予選	3	4/ 6	05:08.01	予選敗退
	女子 50m 背泳ぎ	17	予選	3	5/ 5	00:34.65	予選敗退
	女子 200m 背泳ぎ	19	予選	3	4/ 7	02:38.81	予選敗退
	女子 50m フリースタイル	25	予選	4	7/ 8	00:30.59	予選敗退
	女子 100m 背泳ぎ	23	予選	3	5/ 7	01:13.16	予選敗退
山本・茨・藤井・水谷	男子4x200m フリースタイルリレー	14	予選	2	2/ 7	08:33.30	予選通過
			決勝		6/ 8	08:26.46	6位 / 入賞
山本・水谷・茨・藤井	男子4x100m フリースタイルリレー	14	予選	2	3/ 7	03:50.82	予選通過
			決勝		7/ 8	03:50.40	7位 / 日本新記録
茨・木下・水谷・山本	男子4x100m メドレーリレー	15	予選	2	3/ 8	04:14.90	予選通過
			決勝		–	–	失格
今村・藤川・高瀬・高岸	女子4x200m フリースタイルリレー	6	決勝	1	5/ 6	09:41.97	5位 / 入賞
高岸・高瀬・藤川・今村	女子4x100m メドレーリレー	7	決勝	1	6/ 7	04:43.89	6位
高岸・藤川・高瀬・今村	女子4x100m フリースタイルリレー	7	決勝	1	6/ 7	04:24.28	6位

【空　手】

選手名	種目	出場数	ラウンド	勝敗	対戦相手 (選手名・国)		マッチ	ポイント			成績			成績
								一本 (1ポイント)	二本 (2ポイント)	三本 (3ポイント)	順位	勝	負	
小島　崇寛	男子 60 - 67kg	8	トーナメント	勝	PAVLYUCHENKO Evgeniy Vitalyevich	ロシア	2-0	2-0			1/8	3	0	金メダル
				勝	DI GUIDO Daniele	イタリア	9-8	4-2	1-3	1-0				
				勝	TAI Wen Chi	台湾	4-2	1-2		1-0				
栗本　紗弥	女子 50 - 68kg	5	トーナメント	勝	TITCOMBE Kerry Ann	ニュージーランド	3-1	3-1			1/5	2	0	金メダル
				勝	LIN Wen Fang	台湾	3-1	3-1						

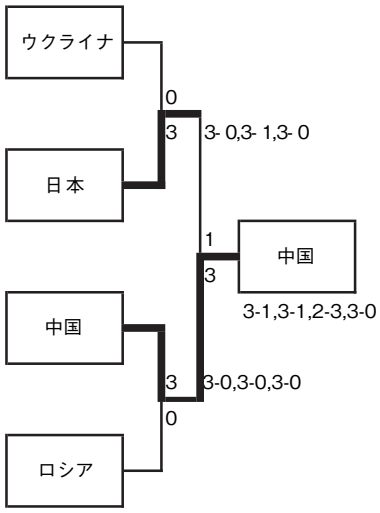
【卓　球】

選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	勝敗	対戦相手（選手名・国）		マッチ	ゲーム / ポイント							予選成績			成績
									1	2	3	4	5	6	7	順位	勝	負	
日本チーム	男子団体戦	17	予選リーグ	4	勝	イギリス		3-1	3-0	1-3	3-0	3-0				1/4	3	0	予選通過
					勝	ポーランド		3-1	3-0	0-3	3-0	3-1							
					負	オーストリア		3-0	3-0	3-0	3-0								
		8	決勝トーナメント		勝	韓国		3-0	3-1	3-2	3-2								4位入賞
					負	台湾		0-3	0-3	0-3	2-3								
					負	中国		0-3	0-3	1-3	1-3								
日本チーム	女子団体戦	10	予選リーグ	2	勝	香港		3-0	3-0	3-0	3-2					2/5	3	1	予選通過
					勝	韓国		3-1	3-1	2-3	3-2	3-2							
					負	中国		0-3	2-3	0-3	1-3								
					勝	ハンガリー		3-0	3-0	3-0	3-0								
		4	決勝トーナメント		勝	ウクライナ		3-0	3-0	3-1	3-0								銀メダル
					負	中国		1-3	1-3	1-3	3-2	0-3							
望月　翔太	男子シングルス	80	予選リーグ	16	勝	FONARIN Gennadiy	ウズベキスタン	3-0	11- 3	11- 4	11- 4					2/5	3	1	予選通過
					勝	NARKEVICIUS Viktoras	リトアニア	3-0	11- 6	11- 8	11- 4								
					勝	LOICQ Mathieu	ベルギー	不戦勝											
					負	CHERNYAK Ihor	ウクライナ	0-3	11-13	5-11	8-11								
		32	決勝トーナメント		負	SCHŐLZEL Sebastian	ドイツ	0-4	6-11	9-11	6-11	8-11							一回戦敗退
青山　修	男子シングルス	80	予選リーグ	16	勝	DYBALL Jacob LAWRENCE	オーストラリア	3-0	11- 9	11- 6	11- 5					2/5	3	1	予選通過
					負	SCHŐLZEL Sebastian	ドイツ	0-3	7-11	9-11	12-14								
					勝	AYGUN Burcin	トルコ	3-0	13-11	12-10	13-11								
					勝	NAZARBAI-UULU Kubanych	キルギス	3-0	11- 1	11- 7	11- 4								
		32	決勝トーナメント		負	CHERNYAK Ihor	ウクライナ	3-1	7-11	9-11	9-11	11- 8	7-11						一回戦敗退
梅村　正樹	男子シングルス	80	予選リーグ	16	勝	KONG Cheuk Ming	香港	3-0	11- 1	11- 6	11- 3					1/5	4	0	予選通過
					勝	CRESPI Luca	イタリア	3-0	11- 2	11- 2	11- 5								
					勝	RUTOWSKI Marek	ポーランド	3-0	18-16	11- 8	17-15								
					勝	KONKUBAYEV Kanat	カザフスタン	3-1	9-11	11- 6	11- 5	11- 0							
		32	決勝トーナメント		勝	HWANG Sungchul	韓国	4-0	12-10	11- 6	11- 4	11- 8							2回戦敗退
					負	WANG Cong	中国	0-4	8-11	10-12	6-11	8-11							
上田　大輔	男子シングルス	80	予選リーグ	16	勝	VAN DAM Kurt	ベルギー	3-0	11- 9	11- 9	13-11					2/5	3	1	予選通過
					勝	AL-DHARI Yahya	イエメン	3-0	11- 1	11- 1	11- 4								
					勝	BADMUS Nurudeen Olaywola	ナイジェリア	不戦勝											
					負	BARON Jan Erik	ドイツ	2-3	11- 9	11- 8	2-11	8-11	2-11						
		32	決勝トーナメント		負	LI Yunnan	中国	0-4	2-11	9-11	7-11	3-11							一回戦敗退
上田　萌	女子シングルス	50	予選リーグ	10	勝	CHEN Hsiao Hui	台湾	3-0	11- 0	11- 2	11- 3					1/5	4	0	予選通過
					勝	KONCZAK Eliza Aleksandra	ポーランド	3-0	11- 5	11- 5	11- 2								
					勝	ENK Nazia	ドイツ	3-0	11- 6	11- 3	11- 1								
					勝	POON Lee Ling	香港	3-0	11- 3	11- 3	11- 3								
		20	決勝トーナメント		勝	NESTLER Anke	ドイツ	4-1	11- 1	11- 2	8-11	11- 4	11- 8						銀メダル
					勝	SHI Ce	中国	4-1	11- 5	9-11	11- 1	11- 8	11- 7						
					勝	佐藤　理穂	日本	4-0	11- 2	11- 7	11- 7	11- 6							
					負	HUANG Meng Ping	中国	3-4	11- 6	11- 9	11-13	7-11	9-11	11- 9	10-12				
鈴木　由樹子	女子シングルス	50	予選リーグ	10	勝	BREGOCS-LAZANE Eva	ハンガリー	3-0	13-11	11- 4	11- 7					2/5	3	1	予選通過
					勝	ADILOVA Kulzhamila	カザフスタン	3-0	11- 2	11- 3	11- 2								
					勝	AKYUZ Dilem	トルコ	3-0	11- 3	11- 4	11- 1								
					負	KONDRATOVA Anna Alexandrovna	ロシア	2-3	11- 7	9-11	9-11	11-7	4-11						
		20	決勝トーナメント		負	MAO Shangbin	中国	3-4	3-11	11- 5	6-11	12-10	7-11	11- 7	9-11				2回戦敗退
小浜　京子	女子シングルス	50	予選リーグ	10	勝	LUKIANCZYK Anna	ポーランド	3-0	11- 4	11- 0	11- 2					1/5	4	0	予選通過
					勝	MO Yunsol	韓国	3-2	11- 7	11- 3	10-12	11-13	11- 7						
					勝	NESTLER Anke	ドイツ	3-1	11- 8	11- 3	9-11	11- 4							
					勝	MABALA Phumza	南アフリカ	3-0	11- 2	11- 2	11- 0								
		20	決勝トーナメント		勝	REIDER Ilona	ハンガリー	4-1	11- 1	11- 4	11- 6	7-11	11- 4						3回戦敗退ベスト8
					負	HUANG Meng Ping	中国	0-4	4-11	6-11	5-11	6-11							
佐藤　理穂	女子シングルス	50	予選リーグ	10	勝	REIDER Ilona	ハンガリー	3-0	11- 3	11- 6	11- 6					1/5	4	0	予選通過
					勝	HUCZYNSKA Maria	ポーランド	3-0	11- 3	11- 7	11- 6								

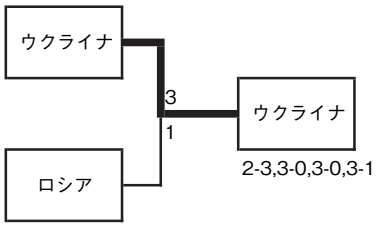
選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	勝敗	対戦相手（選手名・国）		マッチ	ゲーム / ポイント							予選成績			成績
									1	2	3	4	5	6	7	順位	勝	負	
佐藤　理穂	女子シングルス	50	予選リーグ	10	勝	CHEN Li Chien	台湾	3-0	11- 4	11- 4	11- 7					1/5	4	0	予選通過
					勝	SHAGIEVA Elena Alexsandrovna	ロシア	不戦勝											
		20	決勝トーナメント		勝	ZYLA Iwona EWA	ポーランド	4-0	11- 2	11- 3	15-13	11- 8							銅メダル
					勝	LEE Ji Yeun	韓国	4-3	11- 4	11- 4	14-16	10-12	11- 9	6-11	11- 7				
					勝	MAO Shangbin	中国	4-1	11- 6	5-11	11- 9	11- 6	11- 6						
					負	上田　萌	日本	0-4	2-11	7-11	7-11	6-11							
					勝	LIN Huan	中国	4-0	11- 5	11- 3	11- 2	13-11							
青山・梅村	男子ダブルス	35	決勝トーナメント		勝	FONARIN Gennadiy / ISMATULLAYEV Akramjon	ウズベキスタン	4-0	11- 2	11- 7	11- 9	11- 6							4回戦敗退ベスト8
					勝	ARU Marco /CRESPI Luca	イタリア	4-0	11- 9	11- 7	11- 7	11- 6							
					負	CHERNYAK Ihor/KOKOSHA Dmytro Olexsandrovych	ウクライナ	0-4	7-11	6-11	7-11	13-15							
望月・上田	男子ダブルス	35	決勝トーナメント		勝	MEYERS James Daniel Edward/STRUTT Martin John	イギリス	棄権											2回戦敗退
					負	GNATIUK Andrii / ZAKLADNYI Gennadii	ウクライナ	0-4	9-11	9-11	8-11	0-11							
上田・佐藤	女子ダブルス	21	決勝トーナメント		勝	POON Lee Ling /LUI Lai Kwan	香港	4-0	11- 3	11- 1	11- 2	11- 8							2回戦敗退
					負	HUANG Meng Ping /SHI Ce	中国	4-1	9-11	11- 7	12-14	11-13	10-12						
小浜・鈴木	女子ダブルス	21	決勝トーナメント		勝	ENK Nazia/DIEDERICH Ann-Kathrin	ドイツ	4-0	11- 5	11- 5	11- 5	11- 2							銅メダル
					勝	KHODKO Iuliia Olexsandryuna/ PAVLIUKOVA Olena Yuryevna	ウクライナ	4-1	11- 7	12-10	11- 8	7-11	11- 3						
					負	LIN Huan /MAO Shangbin	中国	1-4	6-11	8-11	7-11	11- 8	9-11						
					勝	LEE Ji Yeun /MO Yunja	韓国	4-2	11- 7	3-11	11- 3	11- 4	3-11	11- 9						
上田・鈴木	混合ダブルス	40	決勝トーナメント		勝	PIETA Pawel / LUKIANCZYK Anna	ポーランド	4-0	14-12	11- 2	11- 4	11- 4							2回戦敗退
					勝	ZAKLADNYI Gennadii /VASYLIEVA Mariia	ウクライナ	1-4	7-11	11- 7	9-11	10-12	4-11						
梅村・上田	混合ダブルス	40	決勝トーナメント		勝	NG Wai Yip /POON Lee Ling	香港	4-0	11- 5	11- 6	11- 1	11- 4							3回戦敗退
					負	HWANG Sungchul/MO Yunja	韓国	3-4	9-11	11- 7	13-11	11- 2	7-11	6-11	8-11				
望月・小浜	混合ダブルス	40	決勝トーナメント		勝	BEK Mladen/ROGAR Ines	クロアチア	4-0	11- 5	11- 3	11- 2	11- 3							3回戦敗退
					負	PARK Kwangeun/LEE Ji Yeun	韓国	3-4	3-11	11- 5	4-11	10-12	11- 8	13-11	4-11				
青山・佐藤	混合ダブルス	40	決勝トーナメント		勝	SZCZEPIŃSKI Ryszard /KONCZAK Eliza Aleksandra	ポーランド	4-1	5-11	11- 3	11- 9	11- 6	11- 3						4回戦敗退ベスト8
					勝	BEZDENEZHNYY Sergey Grigoryevich/KONDRATOVA Anna Alexandrovna	ロシア	4-2	11- 8	11- 9	9-11	7-11	11- 9	11- 4					
					負	WANG Cong /SHI Ce	中国	1-4	11- 7	8-11	7-11	4-11	5-11						

※団体戦・シングルス戦は予選リーグあり。

■【女子団体戦】決勝トーナメント



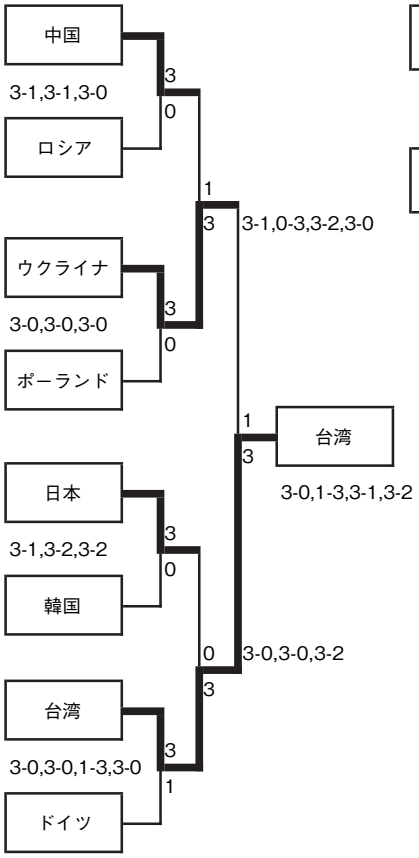
■3-4決定戦



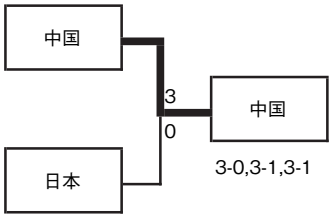
■最終結果

順位	国名	順位	国名
1	中国	6	ドイツ
2	日本	7	ハンガリー
3	ウクライナ	8	台湾
4	ロシア	9	ポーランド
5	韓国	10	香港

■【男子団体戦】決勝トーナメント



■3-4決定戦



■最終結果

順位	国名	順位	国名
1	台湾	6	ロシア
2	ウクライナ	7	韓国
3	中国	8	ポーランド
4	日本	9	香港
5	ドイツ	10	オーストリア

11- リトアニア、12- クロアチア、13- ベルギー、
14- イギリス、15- イタリア、16- イエメン

【テニス】

種目	出場数	ラウンド	選手名	勝敗	対戦相手（選手名・国）		マッチ	セットポイント			成績			成績
								1	2	3	順位	勝	負	
男子シングルス	33	トーナメント	松下　哲也	勝	ZAFIR Jamie Aznarez	オーストラリア	2-1	6-3	6(3)-7	6-1	-	1	1	3回戦敗戦
				負	VONTHEIN Torsten	ドイツ	0-2	2-6	1-6					
			梶下　怜紀	勝	SEALY Joshua Charles	オーストラリア	2-0	6-0	6-0		2/33	4	1	銀メダル
				勝	SINCLAIR Philip Anthony	イギリス	2-1	3-6	6-4	6-0				
				勝	UITERWIJK WINKEL Jan Jaap	オランダ	2-0	6-3	6-1					
				勝	TOEDTER Hans	ドイツ	2-0	6-3	6-4					
				負	LAURENT Mikael	フランス	0-3	2-6	1-6	2-6				
女子シングルス	19	トーナメント	阿部　八千代	勝	HO Chiu Hsiang	台湾	2-0	6-2	6-1		4/19	2	2	4位
				勝	FIGUEROA Carla Merino	チリ	2-0	6-1	6-0					
				負	VILLAMANDOS LORENZO Beatriz	スペイン	1-2	6-3	3-6	4-6				
				負	HO Chiu Mei	台湾	0-2	5-7	3-6					
			辻岡　瑞恵	勝	KALOGEROPOULOU Vasiliki	ギリシャ	2-0	6-3	6-0		-	1	1	2回戦敗退
				負	GRAHAM Catherine Louise	イギリス	0-2	0-6	0-6					
男子ダブルス	11	トーナメント	松下・梶下	勝	CHIN Wu Lung/LIN Chun Jan	台湾	2-0	6-1	6-0		-	1	1	2回戦敗退
				負	O'DONNELL Darren Cornelius/ FLETCHER Lewis Gordon	イギリス	1-2	6-3	1-6	3-6				
女子ダブルス	6	トーナメント	阿部・辻岡	負	HO Chiu Hsiang/HO Chiu Mei	台湾	0-2	1-6	0-6		4/6	0	2	4位
				負	ODDONE Barbara/RICCI BITTI Susanna	イタリア	0-2	0-6	3-6					
混合ダブルス	12	トーナメント	松下・阿部	勝	LAURENT Mikael /BERNARD Sophie	フランス	不戦勝				3/12	3	1	銅メダル
				勝	BREITENBERGER Urs/ALBRECHT Heike	ドイツ	不戦勝							
				負	SINCLAIR Philip Anthony/ GRAHAM Catherine Louise	イギリス	0-2	1-6	1-6					
				勝	TOEDTER Hans/FLECKENSTEIN Verena	ドイツ	2-0	6-4	6-4					
			梶下・辻岡	負	CAILLAUD Valerie/NOVELLI Vincent	フランス	0-2	4-6	4-6		-	0	1	1回戦敗退

【バレーボール　男子】

ラウンド	対戦国	勝敗	マッチ	セットポイント					予選成績			成績
				1	2	3	4	5	順位	勝	負	
予選リーグ	ベネズエラ	勝	3-2	17-25	25-23	22-25	25-19	15-13	2	3	1	
予選リーグ	ロシア	負	1-3	23-25	22-25	25-21	18-25					
予選リーグ	台湾	勝	3-0	26-24	25-12	25-11						
予選リーグ	ドイツ	勝	3-0	25-19	25-18	25-23						
準々決勝	イラン	負	1-3	25-23	22-25	24-26	17-25					5位
5-8 位決定戦	トルコ	勝	3-0	25-20	25-23	25-23						
5-6 位決定戦	ベネズエラ	勝	3-0	25-18	25-17	25-15						

■最終結果

順位	国名	順位	国名
1	ロシア	5	日本
2	ウクライナ	6	ベネズエラ
3	ドイツ	7	ポーランド
4	イラン	8	トルコ

9－台湾、10－フィジー

【バレーボール　女子】

ラウンド	対戦国	勝敗	マッチ	セットポイント					予選成績			成績
				1	2	3	4	5	順位	勝	負	
予選リーグ	イタリア	勝	3-0	25- 7	25-12	25-10			2	5	1	
予選リーグ	ウクライナ	負	0-3	18-25	18-25	26-28						
予選リーグ	ロシア	勝	3-0	25-15	25-10	25-11						
予選リーグ	アメリカ	勝	3-1	20-25	25-22	28-26	25-18					
予選リーグ	アルゼンチン	勝	3-0	25-15	25-11	25-19						
予選リーグ	ベラルーシ	勝	3-0	25-16	25-17	25-15						銅メダル
準決勝	アメリカ	負	1-3	22-25	27-29	25-23	16-25					
3 位決定戦	ベラルーシ	勝	3-0	25-21	25-19	25-19						

■最終結果

順位	国名	順位	国名
1	ウクライナ	5	ロシア
2	アメリカ	6	イタリア
3	日本	7	アルゼンチン
4	ベラルーシ	8	―

団員報告

団長報告

団長　　粟野　達人

(1)大会参加までの準備な状況

事前取組について

2007年2月の第16回冬季デフリンピックに総監督として参加、続いて、今回の夏季大会へは団長として参加した。

従来は団長、総監督、事務局長を置いてきたが、競技上の様々な対応を迅速に行う指示系統の観点から、(財)全日本ろうあ連盟スポーツ委員会で審議の結果、団長と総監督を同一人物が務めることとし、総監督は廃止、事務局長を総務に変更した。また日本選手団本部も総務・医療・広報など、4年前より強大な体制を設けて各チーム、選手が競技力を発揮出来る様に務めた。

4年前のメルボルン・デフリンピック、8年前のローマ・デフリンピックに派遣された役員よりアドバイスを得て色々と検討し、提案も積極的に行った。日本パラリンピック委員会などの協力を得て強化研修会、全競技監督・マネージャー会議を数回実施、全日本ろうあ連盟スポーツ委員会でのデフリンピック啓発活動、パンフレット発行、ホームページにデフリンピック啓発ウェブサイト掲載などデフリンピック知名度をあげる為に取組んだ。

ユニフォームについて

日本代表団ユニフォームについて前回のメルボルン・デフリンピックでの反省点をふまえて、日本選手団一同が奮起し、世界に対してアピールしやすいユニフォームにしたいという強い気持ちがあった。

デザイン仕様については、ジャパンナショナルチームや北京オリンピックやパラリンピックウェアおよび今までの夏季デフリンピックウェア、世界選手権に出場した日本選手のウェアなどの資料を集めて検討した。その結果、国旗と同じイメージで白と赤でオリジナルデザインウェアを作成して発注する事にした。内容はジャージ上下、ハーフパンツ、Tシャツ、キャップ、シューズを配布する方針に決定した。そしてメーカーは入札を経てミズノに決定した。

何回かのデザイン修正、布地選びなど苦労したが、最終的に北京オリンピックウェアに使用された通気のよい布地で製作してもらう事になった。そのおかげで綺麗なカラーでまとまったユニフォームが完成し、日本選手団全員に満足してもらえる出来になったと自信を持っている。色々と協力していただいたミズノに感謝している。各競技の競技ウェアについては色々と検討の結果、各競技チームで自分の競技で動きやすいウェアにした方がよいと考え、それぞれ自分でデザイン、手配してもらう事にした。

全競技の知識把握

上記の選手選考で述べた通り、徹底的な選考をする為に、自分も毎晩インターネットで全競技情報収集などをしたり競技ルールなどの勉強もして、団長として出来るだけ全競技に対応出来るよう努力した。私は夏季競技よりも冬季競技の経験が長い方であるが、毎年、関東・全国ろうあ夏季体育大会などで積極的に競技担当を務め夏季競技の知識収集に努めた。さいわい学生時代に昔からスポーツで知られる東海大学附属高校～東海大学在学中に必修科目で柔道・剣道・体操・テニスなどを学んだり、スポーツクラブでスキー部、合気道、空手なども経験した事があるので、それぞれの競技選手が何を求めているのかを理解しやすかったかと思う。おかげで、団長としてそれぞれの競技に対して何をやるべきか検討することが出来た。

(2)成績と評価

出発前に、全競技で入賞、40個以上のメダル獲得と目標を掲げたが、この2週間の熱戦の結果、日本選手団が獲得したメダルの数は金5個、銀6個、銅9個、計20個と、40個には届かなかった。もうひとつの目標であった全競技入賞も果たせなかった。メダルを狙える選手が多かったのに、目標のメダル40個に届かなかったことで、非常に悔しい思いをした。しかし、夏季大会では過去ローマ大会と並ぶ過去最高のメダル数となり、皆さんに大いに喜ばれる結果になった。

メダル獲得数でトップから5位までの国ではメダリストに賞金が出ると聞いている。ある国では二つのメダルを取った選手に500万円(日本円)を支給すると新聞に載っていた。また新しい家かそれにあった賞金をもらえたり、毎月賞金が支給されるという国もあった。さらに5か月間仕事、学校を休んで強化合宿に参加している選手もいるそうで、必死になって練習を積み重ねて来たと思われる国もあり、4年前よりかなりレベルが上がっていた。それもあって世界レベルも予想以上に上がっており、目標は果たせなかったが、インフルエンザ発生などのアクシデントもある中で、ここまで頑張り、メダル20個獲得出来た事で4年前より全体の実力はアップしたと思う。

(3)大会の競技運営などの報告

全競技監督会議で指示した通り、各競技チームがTD会議に出席して全体を把捉する様、体制を組んでもらった。しかし、初めて参加する競技チームもあり、まだ国際手話が未熟のチームもあったので、全競技のTD会議を視察するなどサポートした。全て国際手話と台湾手話で行われ、日本語も日本手話もなかったが、自分の過去の世界ろう会議、アジア交流などの経験で習得した国際手話と台湾手話でコミュニケーションを図れるよう努力した。しかし、現地の組織委員会が、突然変更したりする事もある為、毎朝大会本部で実施される団長会議に出席して確認など対応もした。

今回は12競技と数が多く、各競技チームで公開練習および試合スケジュールの時間と場所に変更あったりしないか、徹底的に確認を取る様、指示もした。結果的に一部で期間途中で翌日の試合組み合わせ抽選があるという連絡と確認にすれ違いが発生した為、調整が間に合わず、そのまま試合に挑んだチームもあった。また各競技チームの練習および試合中に怪我が発生したと連絡を受け、医療チームの判断で治療、検査をして頂いた。また怪我状況により出場可能か診断指示もした。

コミュニケーション重視として日本代表選手団の滞在ホテルを1つにしたかったが、今回は全競技および全競技選手のコンディショニングを考えて特に競技会場が遠い競技は競技会場の近いホテルに分散する方法を取った。そのおかげで全選手達が体調万全で挑める環境となったと思う。しかし、医療チーム・アスレチックトレーナーは本部ホテルしか駐在できない為、必要な時のみ派遣する方法も取った。日本選手団の広報の為に、毎日各競技監督と連絡を取り合ったり、各競技の成績結果報告をしてもらうなど、本部に常に連絡を行い、情報収集に尽くした。

(4)競技規則の適用(問題点など)

今回の夏季デフリンピックの為に前もって全競技監督会議でデフリンピック委員会のホームページで常に徹底的に競技規則の確認を取る様、指示もしてあり、全競技チームで十分に用意されたと思っている。

しかし、一部の競技で抗議の手順が間に合わず、却下されてしまった例もあったので、今後は監督・スタッフはもちろん選手自身も審判に対して何か不審を感じたら、すぐその場で問いただすなど積極的な姿勢を取るべきと感じた。また、ある競技のＴＤ会議で対戦する選手の競技ウェアで明暗と判りやすくする為に、例として白、青と分けて着用する様、組み合わせで決まっているのに、相手チームが青を着るべきところをホテルに忘れたと言って日本チームがやむを得ずその場で白から青に着替えた例もあった。日本チームの方が競技規則に従ってちゃんと着用した以上、相手チームにペナルティを与えるか減点させるなり、相手チームにも国際大会として厳しくすべきではと感じた点もあった。

全体的に、世界各国と比較して日本選手団の方が、しっかりと競技規則を守っていると誇りを持っている。

(5)反省・まとめなど

夏季デフリンピック期間中、毎日、各競技チームおよび監督達と携帯電話で手話通訳を通して連絡を取り合ったが、時々電波障害で不通になって再電話をした事もあり、さらにインフルエンザ対応も含めて手話通訳者に色々と兼任で負担をかけてしまったが､よく頑張ってくれたことに感謝したい｡陸上競技で、一度抗議をして数時間ねばったが、認識不足で却下されてしまったことを悔しく思う。

デフリンピックは国際デフリンピック委員会と加盟国の努力で積極的に取り組まれ、開催されてきている。我が国の日本選手団も積極的に国際手話などでコミュニケーションを計り、現地で競技運営に対して抗議、意見を出す事で、改善されてきていると思う。夏季デフリンピックという大規模の国際競技で、不慣れもあったが、団長、総務チームと医療チーム、手話通訳チーム、全競技チームと共に協力しあいながら進める事が出来て助かった。特にインフルエンザ発生の時は、本部全員で素早く対応したおかげで最後の日に全員で無事に帰国出来た事を喜びたい。

全競技を見回ってサポートしてきたが、全競技試合を見てみて、日本選手レベルは世界から見てトップレベルに達していると感じ取れた。しかし上記の成績評価で述べた通り紙一重で負けたり、自分のミスで勝てなかったことが多く、メンタル面と経験が足りないと感じた。全競技で今後の国際大会に向けての課題になると思われるので、ぜひ頑張って欲しい。

派遣委員会および事務局と連日、あらゆる面で確認と連絡を取り合い、準備に欠かさないよう尽くしたが、反面、まだ足りない所もあった事を反省したい。

今回で色々と限られた範囲で日本代表選手団が前回よりも強い体制で取組み、ここまで成果を出した事は評価して頂けると自信を持っている。

団長は、全競技選手の体調や現地の様子、相手の情報など全てを頭に入れておかなければならず、真の意味で選手をまとめる大きな『要(かなめ)』とならなければならない。

デフリンピックの知名度が上がればそれだけ、ろう者スポーツに対する理解が広まり、ひいてはろう者の社会的地位の向上につながるものと信じている。今後、今回の取り組みの教訓を生かし、各競技団体を中心とした関係団体との信頼関係をさらに深めていくとともに、ろう者スポーツの発展と技術の向上を図っていく必要がある。

最後に、多くの皆さんからいただいた多大なご支援、ご協力に、あらためて心より深く感謝申し上げたい。

事務局報告

総務(副団長)　大杉　豊

「大会としての完成度を高めていくためには、デフリンピック開催国の努力ももちろん重要であろうが、選手団としては、他国と共に正しい競技運営に向けての積極的な取組みを展開することと、そしてろう者が主体となっての選手団による意思決定を速やかにできるようにすることと考える。」

これは２年前のソルトレーク冬季デフリンピック日本選手団派遣報告書に書いた一節であるが、今回も選手団本部の運営に関わらせていただく中で、とくに「スポーツ活動を通したろう者のエンパワメント」の重要性をあらためて確信することができた。また、私自身が選手団総務の任務を最後まで全うしここに報告をすることができるのは、ひとえに粟野団長を始めとする本部スタッフ皆さん一人ひとりの力に支えられてのことである。この場を借りて皆さんに心よりお礼の気持ちを申し上げたい。

日本選手団本部を運営するにあたり、競技関係のとりまとめがスムーズにできる体制を築くことと、ろう者と健聴者間のコミュニケーションを十分に保障することの二点を基本的な方針とした。これは２年前のソルトレーク冬季デフリンピックの時と同様であるが、冬季大会と異なって夏季大会は競技の数も選手・スタッフの数も桁違いに大規模となるので、「報告・連絡・相談」の徹底による「生きた情報」の共有、組織の存在を体感できるような宿泊施設内における本部配置、ホワイトボードの多用による情報の連絡や掲示などを含めて、常に組織的な引き締めを図るようにした。

具体的には、毎晩の事務局定例会議で事務局員一人ひとりに一日の報告を課して、問題点があればその場で整理して短期的な課題として共有するようにしたことや、宿泊施設の 15 階と 17 階の計７部屋に本部機能を分散させ､競技に関する実務、宿泊・移動に関する実務、医療に関する相談、個人的な相談を別々の部屋で行えるようにしたことなどである。

以下、総務の立場での所感をいくつかの項目に分けて述べる。

【事前準備】

選手・スタッフの推薦手続き、エントリー手続き、健康調査の実施、各研修(説明会・勉強会)の実施、ボランティア選考、執行予算の編成などを事務局で進めた。これらの実施には、各競技協会・チームの窓口との連絡を緊密に行えることが必要な条件であった。経験に不足していて連絡窓口を一本化する調整に時間を要する競技協会があったが、それはごく一部で、全体的にはジャパンパラリンピック委員会(ＪＰＣ)強化事業の実施などの経験を通して監督とマネージャーを別々に立てて対応する競技協会が多かった。デフリンピック派遣の時だけでなく、ＪＰＣや全日本ろうあ連盟スポーツ委員会と日頃からの連絡が円滑にできるようにすること、これは全体的な継続課題である。

もう一つの課題は、選手の所属する全日本ろうあ連盟加盟団体への情報提供である。各競技協会がＪＰＣ強化事業における強化指定選手リストを全日本ろうあ連盟スポーツ委員会にも提出し、該当する加盟団体に強化指定選手の情報を提供することで、加盟団体としても情報の把握ができるほかに、選手推薦が決まったときにすぐ会員管理、行政連絡、派遣助成などの面で迅速な対応が可能となろう。

【現地下見】

７月 10 ～ 12 日に旅行業者とともに現地下見に赴いた。宿泊施設及び競技施設、日本領事館相当機関及び大会準備委員会訪問を主な目的としたが、事前に各競技チームからの質問事項を整理して持参したのが効果的であった。また全日本ろうあ連盟派遣委員会委員長の親書を準備委員会執行委員長に手渡しして、準備委員会全体に敬意を表し、部長レベルの担当者との細かい確認作業や情報収集を行えたことは、現地における選手団の運営をシミュレーションするにあたって大きな成果をあげた。今回は開催国が親日国だったこともあり、準備委員会側も視察団側もそれぞれ中国語 - 日本語通訳者を用意していたことが大いに役立った。

日本領事館に相当する財団法人交流協会訪問では代表者にデフリンピックの開催意義と日本選手団の概要について説明を行い、現地における日本選手団への応援と、緊急時における協力の二点についての確約を頂くことができた。

【諸行事の企画・運営】

マスコミの関心を集めるために結団式を国内で開催することは以前からの検討課題であったが、日程的な都合から、今回もまた現地での開催となった。その代わりに、選手団のほぼ全員が出席し、財団法人交流協会代表、日本人会理事長、日本工商会理事長のご臨席を賜り、現地の日本選手団担当のボランティアも参加し、選手団全員の気持ちを一つにまとめることができたことは大いに評価されて良い。現地 NHK の取材が入り、翌日の NHK 手話ニュースで日本国内へ報道されたことも記しておきたい。

㈱日本航空の配慮により、成田空港特別待合室にて出発式を行うことができた。結果としては、出席者が選手団の一部メンバーに限られたものの、厚生労働省、福祉医療機構、ＪＰＣ（日本障害者スポーツ協会）、日本航空、近畿日本ツーリストからの代表出席を頂き、簡潔ながらも結団式に近い形での発表ができたのではないかと思う。

【団長補佐体制】

日本選手団のトップである団長が各競技会場を回って日本チームを鼓舞し、各競技監督や医師から報告を受け、有事に円滑な対応を行えるよう、今回は以下の形で体制を整えた。

・手話通訳を２名配置し、一日交替で団長に同行できるようにした。
・毎朝の団長会議に日本語・英語・中国語・日本手話を理解する事務局員を同行させ、会議終了後は団長の本部への指示を速やかに伝達するようにした。
・団長専用に８名乗りの車をチャーターで確保し、運転手、中国語通訳をつけることで、状況に合わせて行動予定を常時調整できるようにした。
・団長は携帯メールを使わないこととし、その代わりに同行する手話通訳者が音声の携帯端末を持ち、各競技監督や医師、本部からの報告を電話で受けられるようにした。

【広報体制】

ウェブサイトで写真・動画・記事・記録を速報の形で発信するために、写真カメラマン、ビデオ撮影カメラマン、記者、事務局員の配置を行った。写真・記事・記録についての現場報告は担当者に委ねるが、今回の大きな特色としては、動画の発信によって選手やスタッフの生の声を手話で国民に伝えたことである。また、現地の主要新聞におけるデフリンピックの扱われ方なども分析してコラムの形でウェブサイトに掲載したことも特記したい。

写真や動画をインターネットに取り込むに必要な IT 機器の準備が不十分ではあったが、写真・動画・記事の作成を競技会場で行い、すぐにインターネットを通して編集者に送り込み、編集者がチェックをしたうえで日本選手団ウェブサイトに公開する、記録も大会本部の発表した記録を翻訳して日本選手団ウェブサイトに掲載するといった作業の流れが十分に可能であることが確認されたため、今後は競技会場での取材体制を強化して、現場から送られる材料をもとに、日本選手団の動きや日本選手の活躍に特化した広報取組みをさらに強化する見通しがついたこと、これは大きな収穫である。

【医療体制】

聴力検査は選手個人に病院へ行っていただく方法、使用薬剤の調査・助言はＪＰＣ医学委員会の協力をいただく方法は従来のとおりであった。しかし、帯同いただく医師と看護師については、ろう者と健聴者間のコミュニケーション保障を重視する考えから、手話コミュニケーションの可能な医師と、手話通訳の可能な看護師の確保を目指した。「聴覚障害者の医療に関心をもつ医療関係者のネットワーク」の協力を得た結果として、内科医師と看護師の確保ができたものの、整形外科医師については従来通りＪＰＣ医学委員会より紹介を頂く形となった。ただし、整形外科医師と連携してコンディショニングを指導するトレーナーは手話コミュニケーションの可能な専門家の確保ができた。

帯同医師の役割範囲についての確認に曖昧な面があったが、今回は出発日から帰国日までの期間での医療業務とし、その医療業務の効果をあげるために健康調査を事前に実施するという考え方で進めた。選手決定手順に健康診断を含めるかどうか、また出発までの健康上の助言指導を行うかどうか、これは今後の検討課題である。

現地に持参する薬剤一式を全日本ろうあ連盟で揃えたのも今回初めてのことである。帯同医師が作成した薬剤リストをもとに、聴覚障害を持ち、スポーツに関心を持つ薬剤師２名がジェネリック薬剤を含めた薬価調査、薬事法をふまえた購入手続きの面で協力をしてくださった。東京都との相談を経て薬剤を購入するまでに時間がかかったが、聴覚障害を持つ薬剤師が主体的に動く形で解決できたことは「スポーツ活動を通したろう者のエンパワメント」の意味で大きな前進であった。

今後の課題は、聴力検査の可能な医療施設の調査なども含めて、デフリンピックの医療関連に対応できる全日本ろうあ連盟デフリンピック派遣委員会としての継続的な医療チーム（医学委員会）の立ち上げと、ＪＰＣ医学委員会との連携の強化である。

【インフルエンザ対応】

医療班報告に詳細が述べられるが、選手団内にインフルエンザ罹患が発生し、拡大の恐れが確認されたときに、まず団長が競技関連に対応、総務がインフルエンザ拡大防止などの対応に専念することを確認した。そのために事務局としての各競技チームの細かいニーズへの対応力が低下したことは否めない。

幸いにして、医療班及び宿泊･輸送担当より正確な情報と適切な助言を得ることが出来たために、財団法人交流協会、滞在ホテル、台北市衛生局、台北 2009 デフリンピック組織委員会

などと連携をとって対応することが出来た。
全日本ろうあ連盟から役員１名を含む４名の役職員が緊急に派遣されたこともあり、帰国前にインフルエンザ終息宣言を出すことが出来た。(対応経過記録は参考資料を参照のこと)
罹患選手とその競技チームメンバーが持っただろう心の葛藤を思うと、インフルエンザ拡大防止を第一目的とする対応の中で彼らに配慮の行き届かなかった部分があったことについて、心よりお詫び申し上げたい。

最後になるが、メダル 20 個を獲得できたこと、緊急事態にも落ち着いた対応をとれたことで、日本選手団が以前にまして成長していることの手ごたえを感じることができた。台北滞在 17 日間が、選手団の運営に関わる者として冥利に尽きる日々であったことを改めて感謝したい。

事務局員(翻訳)　小林　昌之

１．派遣任務

翻訳担当の任務は、「派遣期間中に日本選手団として必要な情報を収集し、翻訳を行うこと」および「英語・中国語でコミュニケーションの必要性がある場合は総務の指示に従う」ことにあった。現地で発信される競技および運営に関するさまざまな英語・中国語による情報を収集・翻訳することで日本選手団を支える本部スタッフとして働き、デフリンピックに関する現地メディアの記事を収集・整理し、開催地台北におけるデフリンピックの扱いや社会の反応を紹介することでデフリンピックに関する相互理解の促進に努めた。

２．業務内容

派遣任務に沿って、現地では次の業務を行った：①団長会議の随行、②現地主要紙の記事紹介、③「速報」の中国語翻訳、④各種文書の翻訳、⑤本部での手話通訳。
①団長会議の随行：　団長会議は台北デフリンピック組織委員会委員長とＩＣＳＤの担当者の主催の下、毎朝８時に台北スタジアムで開催され、運営全般に関して各国代表団の意見を聴取し、調整を行っていた。私は粟野団長に随行し、会議内容を記録し、団長に対して必要に応じ会議で行き交う情報のフォローを行った。粟野団長は国際手話がわかり、国際手話／英語の手話通訳者も配置されていたが、主として発言していた健聴の組織委員長が英語を使用していたため、国際手話に通訳される際の情報ギャップを補足した。また、委員長を含め組織委員同士で相談する際は音声中国語が使用されており、ほとんど国際手話に通訳されることはなかったので、その内容を補足した。会議終了後に、会議で議論された内容を団長と確認し合い、選手団本部に帰った後､総務に報告し情報の共有をはかった｡なお、組織委員会から配布される各種文書および結果表・対戦表をメールボックスから持ち帰り、関係者に配布した。
②現地主要紙の記事紹介:　台湾の主要な３つ新聞『中国時報』『聯合報』『自由時報』の他､『蘋果日報』『Taipei Times』を読み、デフリンピック関連の記事をクリッピングするとともに、その一部を要約する形でウェブ上の「速報」で発信した。
③「速報」の中国語翻訳：　日本選手の活躍をウェブ上で紹介する日本語の「速報」を中国語に翻訳して発信する作業の一部を担当した。
④各種文書の翻訳：　日本選手団で発生したインフルエンザに関して、現地社会の反応を確認し、日本選手団としての対応の参考とするために、新聞およびインターネットで関連記事を収集・翻訳した。また、本件に関して台北市政府衛生局から来た文書なども翻訳した。
⑤本部での手話通訳：　手話通訳者２人と健聴者の本部スタッフ１人と協力し、電話通訳(外出中の団長、各競技団体、国内外の関係機関)、本部内の通訳、ホテルとの通訳などを担当した。

３．成果と課題

①団長会議では、国際手話よりも音声英語による発信にウェイトがあり、重要情報が必ずしも国際手話通訳で表されなかったため、今回随行することによって団長に重要な情報のフォローができた。今後も英語とある程度の国際手話を理解する健聴者のスタッフが同行することが望ましいと思われる。その際、団長と随行することが多いスタッフは、できる限り団長と同じアクレデーションのステータスを獲得することが望ましい。今回はステータスが異なったため、セキュリティーで止められ、別行動しなければならいケースがあった。
②主催国の情報を日本に提供し、日本選手団の様子を現地に紹介できたことは相互理解の促進に役立っただけでなく、デフリンピックに対する社会への啓発にもつながった。今回、日本語「速報」の中国語への翻訳作業のほとんどは、日本で研修した経験をもつ台湾人ボランティアのサポートに負う。相互理解のためには今後も同様な体制が組めることが望ましく、そのためには日本ファンを増やす努力が必要かもしれない。
③本部と各競技団体の連絡では携帯電話が大活躍した。しかし、本部が連絡の出入りの中心であるにもかかわらず、他の仕事を兼任している数名で担当しなければならなかったことで、長時間の拘束が余儀なく発生していた。２週間という長丁場であり、健康問題に直結するので、今後可能であれば体制の改善が望まれる。

事務局員(手話通訳)　豊島絵美子、高井　洋

①団体内の担当とその内容
本部手話通訳者が２名おり、全体行事は協働し、大会開催中はほぼ同じ内容を交代で担当した。担当業務は下記の通り。

【全体行事】

・出発時：スポンサー企業からの記念品贈呈式の通訳、旅行代理店と事務局間の通訳
・現地到着時：現地ボランティア、旅行代理店と事務局間の通訳
・現地行事：結団式、開会式前の全日本ろうあ連盟理事長等挨拶、代表者会議、監督会議、解団式の通訳
・帰国時：①関係各所(ＪＰＣ、厚生労働省)への挨拶周り
　②報道関係インタビュー(①②に分かれて担当)

【大会開催中】
手話通訳者が２名いるため、下記Ａ、Ｂ の業務を１日交代で行った。

Ａ：７時半～事務局待機。
　９時～団長同行で各競技場へ外出。
　・団長の電話通訳(本部、各競技団体)、
　・各競技場で健聴スタッフや応援のご家族などとの通訳。
　・帯同ガイドとの行き先確認などの通訳。

・応援
夕方帰ホテル～ 20 時　休憩
20 時～ 21 時　事務局会議参加と会議の手話通訳
～ 23 時　事務局待機

B：12 時（昼食前）or 13 時（昼食後）～　事務局待機
20 時～ 21 時　事務局会議に参加と手話通訳
会議終了後担当も終了。

事務局待機時は、
・帯同医師、トレーナーと事務局の打ち合わせ、相談時通訳。（診療時の通訳は、医療チームに一任。看護師が不在の時のみ数回対応）
・担当ボランティアとの打ち合わせ、相談時通訳。
・旅行代理店との打ち合わせ、相談時通訳。
・各競技チームからの問い合わせや事務局からの連絡時の電話通訳。
・各競技チームとの打ち合わせ、相談時通訳。
・来所者との簡単な対応、伝言受けなど。
・各競技の戦績や翌日の予定などの確認作業の補助。

②反省・まとめなど
【よかった点】
・派遣前に本部スタッフの会議で、顔合わせができたこと
・手話通訳の業務を事前に明確化できたこと
・本部スタッフのＭＬ（メーリングリスト）で情報を共有できたこと
・団長に常に手話通訳がついたことで、競技団体の健聴者や選手ご家族とコミュニケーションの機会を得られたこと
・通訳者間の連絡ノートを作成して引き継ぎができたこと
・イヤホンを使用しての電話通訳

派遣前の会議で、顔を合わせの機会を作ったことで、お互いの名前と顔を一致させることができた。またその際にそれぞれの業務について確認ができた。手話通訳者の業務についても先に述べた団長付通訳を中心にした業務であることの整理ができた。このことにより安心して臨むことができたことは、とてもよかったと思う。

本部からの通知や台北の状況などを、ＭＬを通して情報が届けられるので、情報として蓄えられたことはよかった。

団長同行時は、各競技チームの応援が主であったが、現場で聞こえてくる情報（競技チームの健聴スタッフとの会話や、応援に来られている方の話）を積極的に伝えて、直接話ができるようにつなげるようにできた。

１日交代で業務を進めるためお互いの状況を引き継ぐために通訳者用の引き継ぎノートを作ったことにより、口頭での引き継ぎができないときもスムーズに情報を共有できた。

事務局待機時、団長同行時の連絡には、携帯電話を使用したがその際電話を肩にかけて無理な体勢で通訳するのではなく、イヤホンを使用して無理な体勢で通訳することはなかった。

【改善すべき点】
・ろうスポーツ組織や競技の知識について
・手話通訳者の拘束時間と休養の取り方
・各競技団体との連絡

前回までのデフリンピック報告書等で知識を深めたが、実際には付け焼刃の知識の部分もあり、通訳時に活かしきれないこともあった。各競技チームで使用されている用語を交流の中から取り入れること、また競技に関する基本的な知識も必要である。

事務局開所時間は毎日７:30 ～ 23:00。派遣前の会議では、休養日を取ることも考慮されていたが、実際には事務所開所時間内も電話通訳などの頻度も高いため、休養日を実質取れないことが分かった。また事務局待機の時間が長くなった。

団長同行通訳では、移動時の車内での通訳、暑い中での通訳をするため、疲労がかなりあった。本来ならば休養を十分にとり回復させ、よりよい通訳に臨むことが大切だが、事務局での拘束時間が長くなるため、日程が進むにつれ疲労が蓄積していった。また、本部スタッフのみんながオーバーワークの中で働いているところを見ると、休養を取ることにも気兼ねしてしまう面もあった。改善すべき点として、手話通訳者の増員と本部スタッフがお互いに休養を取り、長期間を乗り越えるための体制が整えられることと考える。

③感想・その他
各競技場での情報保障については気になった点があった。直接本部スタッフ手話通訳者が担うことではないが、会場内の放送などすべてに通訳がついているわけではなかった。

ある競技については、天候不順のため会場がインドアに変更になった。その連絡は競技チームには日本語のできる審判員が口頭で説明してくれたが、応援者に対しては、音声による台湾語と英語でのみ行われた。日本から応援に来ていた聴覚障害者はわからず、競技チームや我々団長一行に問い合わせてくることになった。国際手話などでの案内はなかったようで、残念に思った。

ＴＤ会議の会場に行ったときも、国際手話通訳者が２名いたが、１人は読み取りもう１人は聞き取りと結果的に休む間もなく通訳をしている状況を目にした。通訳者不足を感じた。

各競技チームに配布した携帯電話は、日本語表記がない現地のもので慣れないため間違って電話がかかってしまうこともあった。また、携帯電話を携帯しないため連絡が取れないことも多々あった。

台湾は親日的で、ボランティアやホテルの方などとても良い対応をしていただいた。ただ、大切な話をするには、ホテルの「日本語ができるスタッフ」の日本語ではわかりにくく、とても時間がかかってしまった。旅行代理店が通訳者（台湾語～日本語）を用意してくださり、スムーズに会話ができるようになったことは、手話通訳者としても負担が減りとても有難かった。

今回は選手団内で病人がでて、その対応のために気を使う通訳が多く精神的な部分でも疲労があったが、通訳者の待機が必要なこともわかっていたので、休養を申し出ることができなかった。

９月 12 日から応援者が来たため、医療関係の通訳は一任することができた。

今回初めて全国手話通訳問題研究会からの派遣となり、このようにチームとして報告書を書くことが出来たのは、二人ではあるが多角的な見方で振り返ることができ、今後につながる通訳活動ができたと思う。今回はたまたま顔見知りのスタッフが多く信頼関係が築きやすいメンバーであったが、初対面であれば事前の顔合わせ、情報交換による信頼関係を築くまでのプロセスが欠かせず、次回以降も事前の動き方にもっと手話通訳者を積極的に交えた方法を活用していただければと思う。また、このような機会を与えていただき、貴重な経験をさせていただいたことに改めてお礼を申し上げたい。

事務局員(広報)　岸田　修

台北夏季デフリンピックにおいて、ソルトレーク冬季デフリンピックに引き継ぎ、２回目のカメラ撮影の業務を引き受ける。これまでになかった日本選手団における組織の中、広報担当を新しく加え、ソルトレーク冬季デフリンピックと違い大会規模が大きく種目も多いため、私一人でのカメラ撮影に不安があり、「オフィシャルカメラマン」として何が必要なのか、どんなことをやればいいのかを把握するために、ワールドカップ・雑誌等などを撮影活躍されているスキー・サーフィンフォトグラファーの菅沼浩氏※のアドバイスを受け、出発までに色々準備を取りかかる。

※スキー・サーフィンフォトグラファーの菅沼浩氏
1957年生まれ、東京出身のプロカメラマンである。東京写真大学(短期)卒業。神奈川県在住。佐々木明(アルペンスキー選手)、河野健児・福島のり子(スキークロス)をはじめ、多くのスキーヤーの担当をし、多くのスキー雑誌などを活躍しているプロカメラマンである。

【使用した機材】
・CANON　EOS-1D Mark II(カメラ本体)
・CANON　EOS-1D Mark III(カメラ本体)
・EF16-35mm F2.8L II USM(一眼レフ用交換レンズ)
・EF300mm F2.8L IS USM(一眼レフ用交換レンズ)
・EF70-200mm F2.8L USM(一眼レフ用交換レンズ)
・EXTENDER EF1.4 × II(一眼レフ用交換レンズ)
・スピードライト 580EX II(フラッシュ用)
・三脚
・ノートパソコン
・画像処理ソフト(Photoshop Lightroom 2 など)
・外部 HDD 1 TB ※実際に使用した画像データ容量：230GB
・撮影記録形式　RAW ファイル(画像処理ソフトを使い、JPG ファイルに変換)

【現地の確認】
・各競技の会場・場所の確認(台北デフリンピックオフィシャルＷＥＢ)
・メディアにおけるルールの確認

【現地における１日の行動】
本部【ホテル】各競技の情報集め
【団長号で移動】
各競技会場・カメラ撮影(１日あたり平均約 1500 枚撮影)
【団長号で移動】
本部【ホテル】
写真データを外部 HDD にコピー(約１時間業務)
厳選した写真を画像処理ソフトで JPG 形式へ変換(約 30 分業務)
ＷＥＢ担当へ写真データを送る
終了

【まとめ・反省】
・10 年近くスポーツカメラ撮影をしてきましたが、初めて撮影するスポーツがいくつかあり、慣れていない面もあり、撮影に苦労したこと。室内競技において、会場によってライトの明るさが足りないことで、ピントが合わなかったケースもしばしばあった。(フラッシュ禁止されているうえ、ISO 感度を上げる対策)
・ほとんど屋外での撮影が多く、室内(ホテル内等など)フラッシュ撮影に慣れていない面があり、明るすぎ・暗過ぎ面がしばしばあり、フラッシュの使い方などの高度技術を磨くべきだった。
・台北デフリンピックにおけるメディア扱いの情報不足だった。出発前に、各会場においてネット環境があることをきちんと調べていなかった。きちんと調べていたとしたら、ノートＰＣを持参し現地で撮影した写真データをサーバーにアップロードする流れをしていれば、すぐにでもＷＥＢに掲載出来たと考えられる。(ただ、ろうあ連盟にサーバーが置いていなかった為、今回は無理があった。)

台北デフリンピックでカメラ活躍全体を通じて気づいたことは、私カメラマン一人だけでは、足りないと実感した。他国のメディアスタッフと情報交換したところ、アメリカ約 15 名、ドイツ約８名のカメラマンが派遣されているとのこと。次のデフリンピックにおいて競技数・派遣選手の人数に合わせ、本部広報の人数も考えなければならないと改めて実感した。今回のデフリンピックでオフィシャルカメラマンとしての自覚を改めて持つようになり、高度の技術を上げたいと改めて思い、色々な面を収穫出来たことと、次期デフリンピックまでに各競技の国内大会へ積極的にカメラ撮影をし、皆が満足できる絵になれる写真が出来るよう腕を磨きあげたいと思っております。そして、スポーツ写真を通し、デフリンピックを国内の周知度をオリンピック・パラリンピック並に知名度を上げられるよう貢献していきたいと改めて強く思っております。もちろん、未来の日本選手のために。

【今後においての広報担当に関する要望】
広報担当の充実を図るため、ろうあ連盟・デフリンピック派遣委員会に要望したい。

１．広報担当費に係る費用負担の見直し
（１）少人数広報担当の推進を図るため、広報担当配置の更なる充実を図るための予算確保

２．少人数広報担当の推進を図るため、広報担当配置・機器を更なる充実
（１）カメラマン、記者、ＷＥＢ担当　各２名以上確保
（２）画像編集処理等などに使用するハイスペックＰＣ機器等
（３）本部サーバー設置

事務局員(広報)　高橋　真里

１．業務内容
・開会式などのイベントや試合結果について速報を作成する
・私と同じく広報スタッフの岸田さんが撮影した写真を掲載
・ＣＳ放送「目で聴くテレビ」のビデオカメラマンが選手や監督へのインタビューを撮影したものを、編集して速報記事に埋め込む
※全日本ろうあ連盟がビデオ撮影を「目で聴くテレビ」に依頼
・インタビュー撮影のための、選手や監督とビデオカメラマンのスケジュール調整
・メディアルール説明会(外国メディア対象)への出席

各競技会場にはメディア(マスコミ)が待機する部屋が用意されており、ネット環境が整備されていた。そこで記事作成を行ったり、他国のメディアとの情報交換を行ったりした。

各競技会場へは粟野団長と共に移動することが多かったが、各競技の記事量のバランス、競技結果などを考慮して別行動をとることもあった。

最初の数日は、競技会場にいる時間を活用できておらず、ホテルに戻ってから速報を掲載していたため、速報作成が一日３件程度に留まっていた。各競技会場のネット環境を利用して記事を書き、事務局内で大杉総務が確認と記事公開を行う体制が出来上がってくると次第に掲載件数も増え、一日最高８件になった。

２．今回の台北デフリンピックを振り返って

全体を通して気づいたことを反省も含め以下に記す。

＜速報作成＞

・日本選手が出場する試合が同時に別々の会場で進行する状況下では、取材先を１つに絞らざるを得なかった。私の力量の問題もあり、全ての選手や試合を記事でとりあげることができなかった。
・出発前から競技のルールを勉強するなどはしていたが、やはり知識が不十分であった。各競技会場などで監督や選手、経験者にルールや対戦形式について質問して教えていただいて学ぶところが大きかった。皆さん親切に教えていただいてとても感謝している。
・ホテルに戻ってからも夜遅くまで編集作業が続く状況では、翌日の取材スケジュール検討や情報収集をする余裕があまりなかった。そのため、他の記録担当の事務局員がまとめてくれた競技スケジュール表がとても参考になった。しかし、やはりそれとは別に広報活動のためのスケジュール作成や情報収集を行うスタッフが欲しいと痛感した。
　＊観戦時、選手の判別が難しいことがあり、競技会場の記録部署にいってユニフォーム背番号と選手氏名の対応表のある資料をもらい、確認をとった。出発前に派遣事務局から選手団の資料はもらっていたが、選手の氏名と背番号の対応表もあればより良かった。
・日本選手団のウェブサイトは特にトップ写真の華やかさが素晴らしくブログ形式で更新が容易だった。しかし更新作業を重ねるにつれ、ウェブサイトをより充実させるいくつかのアイデアがでてきた。
・ビデオカメラマンとは出発前に連絡を取ることなく、現地で初めて会った。広報チームとして、出発前にMLを立ち上げ、現地での動き方などを話し合っておけば広報活動もスムーズに進んだかもしれない。
　＊スタッフは事務局から携帯を支給されていた。しかし、健聴者スタッフに支給された携帯にはメール機能がなかった。ビデオカメラマンには健聴者スタッフもおり、連絡をとるには電話通訳が必要だった。そのため取材対象の選手らとのインタビュー撮影のスケジュール調整が大変だった。
　＊撮影したビデオデータをパソコンで取り込むことができず、解決に１日要した。これはハイビジョンで撮影したビデオデータはパソコンに取り込む際出力設定を変更する必要があったことを知らなかったため。

＜その他＞

・開会式や閉会式で、式典が行われている様子を背にしてカメラに向かって音声や手話でリポートしている海外メディアがいた。おそらく後で編集して発信するのだろう。日本も次回は現地でリポートを行ってニュースとして発信できればと思った。
・試合時間、場所の変更は音声でアナウンスされることがあった。大会ボランティアが教えてくれたこともあったが、気がつかないこともあったかもしれない。このことについては次回以降のデフリンピックでの改善を期待したい。

ここで諸外国の広報活動状況についてふれておきたい。

台北デフリンピックの公認メディアには、国内官公メディア、国内民間メディア、海外メディアの３つがあり、ユニフォーム色で区別できるようになっている。

台北デフリンピック中、アジアでの開催にもかかわらずアジア系のメディアが少ない印象をうけた。またアフリカ系のメディアも、私が見た限りでは、一人も見かけることがなかった。開幕前に行われた海外メディア対象のメディアルール説明会では、欧米のメディアが積極的に発言していた。ドーピングについての記事を書いていたアメリカ人記者もおり、試合の速報を伝えるだけに留まらない、欧米の国々の広報スタッフの層の厚さを感じた。

他国の広報スタッフ人員を一部ではあるが以下に示す。括弧内の数字はその国の選手人数である。

・ドイツ [157]
　ビデオ撮影４名、写真撮影４名(うち２名が健聴者で記事執筆も担当)
・ノルウェー [7] やスウェーデン [31]、イスラエル [20]
　各国１名。１人だけで撮影から記事執筆まで全ての作業をこなしていた。
・韓国 [65]
　２名（うち１人は健聴者）

その他、アメリカ合衆国 [141]、イギリス [77] は広報スタッフが 15 名前後いると他国の広報スタッフから聞いた。

概して欧米の国々は広報スタッフが多く体制が充実しているようだった。台北デフリンピックはアジア初の開催であり、アフリカでの開催はまだない。欧米の海外メディアが目立ったのも、デフリンピックの知名度の違いが要因の１つだろう。

日本は日本選手団事務局の公式メディアとしては、事務局の広報スタッフ２名(写真撮影１名、記事作成１名)、外部に依頼したビデオカメラマン３名の合計５名が広報業務を担当した。アジアの中で日本の広報スタッフは多い方に入ると思うが、やはり欧米と比較すると少ない。

台北デフリンピックは現地では非常な盛り上がりを見せ、オリンピックかパラリンピックかと見まがうほどだった。しかし残念ながらその熱狂は日本に十分には伝わっていないようだ。

この感動、熱気を日本にも伝えられるよう、次回のデフリンピックでは、広報スタッフのチーム化をはかってはいかがだろうか。ウェブサイト構築、速報記事作成、写真撮影、ビデオ撮影、データ編集、情報収集・・・までにいたるスタッフを配置して、出発前から広報チームがお互いに意見を出し合い、広報業務に協働してあたる体制ができたら、日本での知名度、選手たちのモチベーションも一段とあがるに違いない。

３．最後に

広報スタッフとして、選手たちの満面の笑み、悔し涙･･･さ

まざまな表情を間近で見ることができ、感動を分けていただきました。「記事見たよ！ありがとう」と選手たちが言ってくれたときには疲れがふきとび、とても嬉しかったです。

台北2009デフリンピックに携わったすべての関係者の皆様、ありがとうございました。

事務局員（宿泊・輸送）　石澤　慧

①団体内の担当とその内容

≪宿泊管理≫

今回日本選手団のメインホテルである「台北フラートンホテルイースト」､水泳チーム滞在の「ハワードプラザホテル新竹」､ビーチバレーチームとマラソンチーム滞在の「ハワード・ビーチリゾート・グリーンベイ」の宿泊管理・それに伴うホテルとの折衝。今回、競技団体や選手個人によって、滞在日数が異なり、非常に複雑な形態となりましたが、（1）事前に各競技団体の代表者の方々より､しっかりとした情報を頂く事が出来､（2）かつ、ホテル側にも非常に協力的な体制をとって頂いた事で、現地での変更にもスムーズに対応できたと感じております。特に、日本選手団内におけるインフルエンザ発症の際には、当該選手の隔離に伴う、お部屋割りの変更や衛生局との連携、マスコミ対応等について、ホテルの協力もあり、突発的なトラブルながら、問題なく対応出来たかと思います。

≪輸送管理≫

各競技団体の試合・練習会場への輸送については、大会本部のボランティアがしっかりとした体制を布いており、本部として関わる部分はありませんでしたので、ホテル⇔空港間の輸送管理が主となりました。8/31と9/2の到着、9/14～16の出発については大会ボランティアとの協力をして運営をし、それ以外の日程の到着・出発については人数や公費対象・非対象に応じて、車両の手配とご案内を行いました。こちらも非常に複雑な形態となりましたが、上記（1）と大会ボランティアの協力で問題なく運営が出来たと思います。

また、日本～台湾間の航空便に関しても、日本航空との連携で、突発的な変更にも対応出来、成田空港・台北桃園空港での誘導にも混乱をきたすことはありませんでした。

≪ツアーデスク運営≫

台北フラートンホテル15階にツアーデスクと自由サロンを設置し、選手団向けの情報発信を行いました。主なものとしては、両替・昼食弁当手配・各競技会場へのアクセス案内・大会事務局からの配布物やギフトの配布・競技スケジュールと結果のご案内・交通費精算・その他滞在中の質問事項やトラブル対応です。また、このような通常業務に加え、選手団内でのインフルエンザ発症後は隔離フロアである7階(主に男子サッカーが宿泊)の食事のケアを行いました。

自由サロンでは、ＰＣでのインターネット閲覧やテレビの放映、観光資料の配布を行い、競技団体によっては当日の試合のビデオを観ながらミーティングを行う場合もありました。

②反省及びまとめ

・競技会場へのバスは大会ボランティアの管理下で運行をしていたので、大会本部からの情報が行き届いており、非常にスムーズだった一方で、空港～ホテル間については宿泊・輸送担当の私たちとの連携が必要になったが、バスの台数が直前まで決まらなかったり、必要な情報が引き出せない事もあり、今回は大きな問題はなかったが、不安な部分もありました。
・15階フロアは専用のカードキーを持っていないとエレベーターで上がれない為、前後階から階段で行くか、事務局からカードキーを借りなければならないので、便がいいとは言えず、ツアーデスクにいらっしゃる方は限られていたように思われますし、同時に自由サロンも当初想定していたよりも、利用する方は少なかったように思います。ホテルの構造上、致し方なかったのですが、利用頻度を多くするためには、誰にでもオープンなスペースに設置することが重要なポイントであると感じました。

今回、私自身は初めてのデフリンピックの参加、そしてデフスポーツとの関わりとなりましたが、世界の選手たちと堂々と渡り合う日本選手に勇気付けられ、非常に実りのあるものでした。

今回の経験を基に､2年後のハイタトラス､4年後のアテネ､またデフスポーツ全体の力になれるよう精進してまいりたいと思っております。

事務局員（総務補佐･記録）　瀬川　奈美

【担当内容について】

派遣前の準備、派遣期間中の事務局、大会終了後の事務処理

【反省・まとめなど】

①大会前の準備について

監督会議の開催や競技チームとのＭＬによる連絡やり取りなどで､「ほうれんそう」コミュニケーション体制の確立に事務局としても重点を置いた。

メルボルン2005の２倍の派遣数になったことと、日本代表選手決定を派遣１ヵ月半前の７月13日に設定したことなどで、短時間に大量の手続きを進めることの大変さがあり、また国際ろうスポーツ委員会医学委員会指定の聴力検査票の記入方法が細かくなり、大学病院などからも検査方法や記入方法についての問合せが相次いだ。

②大会期間中について

主に、記録作成が中心であるが、スケジュール管理（団長の競技視察、広報チームの取材など）や、競技チームからの質問や相談、マスコミ、家族、応援参加者への対応に追われ、とても記録作成に集中できる状況ではなかった。

しかし、メルボルン2005以降、デフリンピック以外の国際大会への参加が増え、競技チームが国際大会に慣れてきている様子が感じられた。

また、日本から自費ボランティアの方が４名、スタッフの弁当の買い出しや団長の競技視察同行など、事務局を陰から支えて下さった。

台北滞在中の連絡ツールについては、チームスタッフが聴覚障害者のみの場合はメール専用、健聴者がいる場合は音声通話専用の携帯を１つずつ渡したが、電話が繋がらないこともあるので、やはり次回は予算を多くとって、音声通話とメールどちらも完備した体制が望ましい。また、ホテルが３箇所に分かれた為、スカイプによるテレビ電話を設置したことは効果的であった。次回は、国内との連絡にも活用すべきであろう。

最後に、現地ボランティアの統括責任者が事務局に常駐し、各チームにボランティアが１人ずつ付くことで、常に最新情報を取り入れることが出来、組織委員会への確認もスムーズに行なえるなど、事務局として大変助かった。ボランティアが毎日

交代となるため、自発的に「引継ぎノート」を始めるなどの努力も見られ、各国のチームのサポートなど隅々まで配慮が行き渡った大会運営がなされていたことに深く尊敬の念を覚えた。

そして、今回ほど事務局が一体となって選手団の運営にあたることができたのは、チームワーク作りに心をひとつにして協力してくださったスタッフ皆さんのおかげである。この場をお借りして心より御礼申し上げたい。

選手・役員の皆さん、素晴らしい試合、そして感動をありがとう！！映画「ゆずり葉」のように、デフリンピックに対する思いが譲り譲られることを願う。

事務局員（総務補佐・記録）　加茂下　和子

【担当内容について】

派遣前の準備、派遣期間中の事務局、大会終了後の事務処理

【反省・まとめなど】

①大会前の準備について

基本的な事務的準備は２名の事務局員で手分けをして進めた。選手個人に連絡を取るということはせず、競技団体内にデフリンピック連絡窓口担当を立ててもらい、ＭＬを活用した。選手への連絡は競技団体担当者より伝えてもらうという方法だ。デフリンピックへ参加するための説明会議を２度行った。しかし、やはり選手に大切な連絡が確実に伝わっていない事も多々あったように思う。

出発前の準備で特に苦労したことは「聴力検査」と「薬物使用の可否」の確認であった。

●聴力検査

デフリンピック・世界選手権大会へ初出場の選手は聴力検査表を提出しなければならない。検査項目は多岐に渡るため特殊な機械を用いる。国立病院、市立病院、大学病院のような大きな病院では設置されているが、町のクリニックでは検査ができない場合がある。

まずは自身が検査に行こうと思う病院へ検査が可能かどうかを確認した上で受診をするように、と競技団体経由で選手へ伝えてあるにも関わらず大学病院に行く時間がないなどの理由により一般クリニックに行き、検査不十分の書類が事務局へ届くということがしばしば見られた。また、選手の親より自分の子供はろうだと分かっているのに何故聴力検査をしなければならないのかという質問もあった。

病院からは聴力検査表に「ろうである」と英語で書くのはどのように書いたらいいのか？や、検査結果（グラフ）を数字に換算して書き記したことがないので分からないなどと毎日のように問い合わせが入った。

●薬物使用調査

ドーピング検査に対してＴＵＥ申請が必要かどうかを調べるために、普段から使用している薬、今後使用するかもしれない薬について申告をしてもらわなければならない。薬については飲み薬のほか、湿布薬、塗り薬なども含まれていることは連絡をしている。しかし提出が遅れたり薬品名が一切書いていないため、選手が使っている薬がないのか、又は書き方が分からないのかを再確認をしなければならないケースが多かった。実際、大会間近になって薬を使用したのでＴＵＥ申請がしたいという慌てた連絡が入ったり、薬物使用届を出したことによりすでにＴＵＥ申請がなされていると勘違いしている者もいた。また、大会期間中に持病を持っているけれども出発前にＴＵＥ申請をしたかどうか分からないので調べて欲しいという選手もいた。

上記のいづれについてもデフリンピックへ参加する「アスリート」としての意識、選手を支えるスタッフの理解、事務局から競技団体（選手を含む）や医療関係者への説明が不足している面が明確に表れていると思う。

事務局は今後の課題として、どこの医療機関に聴力検査が出来る機械があるかどうか調査を続けると同時に、諸手続についてどのように進めたらいいのか相談ができる耳鼻科医を見つけることが大事だと感じる。また、誰が見ても分かりやすいマニュアルを作成することも重要である。

選手・競技団体は、デフリンピックに参加するためのルールや手順を人任せにせず自分で理解するのだという気持ちを持って欲しい。

②大会期間中について

今回の大きなポイントは各国に現地ボランティアが付いたことである。当然本部事務局にも日本語の出来るボランティアがつき、実行委員会との連絡のパイプ役となってくれた。
競技毎にも配置された。そのおかげで、事務局員が大会本部に対して直接確認の連絡を入れるということはほとんどなかった。

コミュニケーションの面では、選手団全員が実行委員会の指定したホテルに宿泊したので、選手やスタッフと直接顔を合わせて話しがする機会が多かったので、質問や相談への対応が柔軟に出来たことが良かったと思う。

携帯機器についてはメール専用は日本製、通話専用は外国製品を使用したが、やはり通話回数は多いので今後は使い慣れた日本製を活用することが望ましいと思う。

イヤホンを使ったことは初めてであったが、体への負担が軽くとても良かった。今後はワイヤレスのものにすればコードが手に引っかかることがないので更に便利になるだろう。

また遠隔地の競技団体とは電話だけでなく、スカイプを使って直接手話でやりとりをする方法をとったことで、相手の様子が視覚で確認できるのはとても良かった。

事務局内の手話通訳は２人であった。１人は団長付、もう１人は午前中は休憩を取るという方法を取った。午前中の事務局には手話通訳がいないため、事務局スタッフの健聴者が通訳をすることも多かった。手話通訳を３人にするか、もしくは事務局員の人数をもう１人増やせば、それぞれが多少の休憩をとりながら仕事を進めることができたのではないかと感じた。

事務局員はほとんど外出の機会がなかったが、試合結果を報告に来てくれる選手や役員の一喜一憂に癒され感激し涙し、大会自体を感じることが出来た。

そして裏方である私たちに「ありがとう」の言葉をくれた選手、スタッフ。こちらこそ感動を与えてくれて本当にありがとう！

メダル 20 個を獲得した選手団は素晴らしいと思う。自らの仕事の反省点を４年後の仕事につなげて、さらに選手の実力発揮のお手伝いが出来るよう邁進していきたい。

【特別報告】

台北 2009 組織委員会

リアゾン　オフィサー　　矢口　恵理

1）団体内の担当とその内容

①大会本部と日本選手団間の連絡

台北の大会本部から日本選手団に連絡事項が入った際、それを日本選手団事務局に伝えました。また、日本選手団内で大会に対し疑問等が出た場合、その旨を大会に伝え、確認をとりました。

②日本選手団担当ボランティアのシフト作成及び管理

大会期間中、日本選手団担当のボランティア(20 名)のシフトを組み、各競技団体に少なくとも一人はボランティアがつくよう調整しました。(但し、ボランティアがつくのは試合がある日のみで、日によって変わります)その他に、帯同の最中にトラブル等が発生した際、解決方法の指示出しも行いました。

③大会バスの手配及び時間確認

団体競技(バスケットボール、バレーボール、サッカー)は専用のバスが出ているため、バスの発車時刻を毎日確認し、またバスが不要である場合、キャンセルの連絡をしました。

④中国語と日本語の通訳

解団式や大会本部との連絡などで中国語と日本語の通訳が必要である場合、通訳を務めました。

2）反省　まとめ

①反省点１：ボランティアのシフトについて

当初は各競技団体にそれぞれ固定した担当のボランティアを一人から二人つける予定でしたが、スケジュールの調整が難しかった為、担当のボランティアが毎日変わってしまい、始めは監督方や選手のみなさんを困惑させてしまいました。その後、ボランティア引継ぎノートと顔写真つきの名簿を作成し、毎日事務局前のホワイトボードに翌日の各競技担当ボランティアを書きこんだりすることで、帯同も徐々にスムーズになりましたが、やはり各競技団体に固定したボランティアをつけた方がお互い連絡がとりやすくて良かったのではと感じました。

②反省点２：コミュニケーションについて

手話の知識が全く無かったため、事務局内で、または監督、スタッフ、選手のみなさんとコミュニケーションをとる際、必ず通訳が必要となり、手話通訳の豊島さん、高井さんを始めとする健聴のみなさんにご迷惑をたくさんかけてしまいました。事前に手話の勉強をしておくべきだったと大会中に強く感じました。

③まとめ

今回、日本選手団のリアゾンオフィサーを務めさせて頂き、本当に貴重な経験をしたと思っています。デフリンピックに関わるまでは、ろう者スポーツの存在さえ知らなかった私ですが、選手のみなさんが真剣に試合に臨んでいる姿から、数え切れない程の感動と勇気をもらいました。また、事務局のみなさんと一緒に仕事をすることを通じて、学生時代には学ぶことの出来なかった知識を習得でき、良い社会勉強になったと思います。

台湾では、連日のメディア放送により、国民全体にその名が知れ渡ったデフリンピックですが、こんなに素晴らしい大会が日本国内ではあまり知名度が高くないことが非常に残念だと感じました。これから、自分なりの方法で、少しずつですが、一人でも多くの人がデフリンピックやろう者スポーツに関心をもってくれるよう、努力していきたいと思います。

医療班報告

医師　　田口　智博

○はじめに

メディカルチームのメンバーは医師２名(内科系１名、外科系１名)、看護師１名、トレーナー３名(うち１名ボランティア)の構成で、日本選手団団長である粟野達人が責任者であった。

・９月２～16日

内科系(家庭医療・総合内科専門)　田口智博

外科系(整形外科専門)　類家拓也、

トレーナー　中島幸則　星野直志

・９月２～９日　看護師　大島三千子

・９月８～16日　看護師　高田智子

医療報告については、類家医師および大島看護師、高田看護師、中島トレーナー、星野トレーナーからの報告書をあわせて読んでいただけると幸いである。今後の引き継ぎと更なる医療班のろうスポーツへの貢献の意味でも医療報告は非常に大切であり、かなり詳細に記載した。

医務室は台北フラートンホテルイースト(多くの日本選手団が滞在していて大会アリーナやスタジアムから徒歩 10 分圏内)の 15 階に２室を当てられた。１室は内科系(ベッド２つ、机１つ、椅子)、もう１室は外科系(ベッド１つ、机１つ、椅子)およびトレーナールーム(簡易ベッド２つ、机１つ)として利用された。２室とも医療チームが滞在する階で、２室は向かいあう部屋(２室間に団長室あり)であり、17 階の本部事務局とも行き来がしやすかった。しかし、15 階には選手団は直接エレベーターで来ることはできないため、17 階の本部事務局経由で来ることが多いことなどややわかりにくい面があった。

医務室には薬品や処置道具など日本から持ち込まれたトランク２つと段ボール３箱(他にトレーナーが利用したトランク・段ボールあり)の中身を２室の棚およびトランク(薬品を入れたトランクを内科の医務室に置いた)を利用して使用できるようにした。医務室の開設時間外は薬品のはいったトランクに鍵をかけて内科医務室の金庫で保管した。日本に持ち込む際には薬品の英文リストを作成しておいたが、入国出国の際にチェックされることはなかった。医療材料は診察器具、薬品(内服、坐薬、点滴、注射、外用、消毒)、衛生材料、処置道具、インフルエンザ迅速検査キットなどである。医務室では自由にインターネット接続可能であり、医療情報などを収集する場合に非常に便利であった。

開設時間は原則、7:30 ～ 10:00、19:00 ～ 22:00 として、医師・看護師は上記の時間は医務室に常に待機するようにした。待ち合いが必要な時は、医務室の外に椅子を置いて待ってもらったり、トレーナールームで待ってもらったりした。また、待ち合いが多い時は、いったん自室に戻ってもらい、時間を指定して医務室に受診してもらった。

受診前には問診票に記載してもらい、診療に活用した。大会後は事務局で破棄してもらうようにした。

受診方法として、①医務室に直接訪室(必要に応じてコーチや監督と一緒に)、②医療チームに(電話)連絡後受診、③本部事務局から連絡後受診、④再診(時間を指定することもあり)、があった。特に大会開始直後などは受診方法がわからない選手やスタッフが多く、連絡先を含めて、受診方法を前もって通達

することが必要と思われた。

上記の医務室開設時間以外は医務室に看護師の携帯連絡先を掲示しておいて連絡してもらうようにし、また、医療チームの携帯番号を各チームへ本部事務局から連絡事項として通達した。緊急の場合も含めて 24 時間連絡が取れるようにした。夜間緊急で連絡がくることはなかった。上記の開設時間外も緊急時には医務室での診療を行い、相応の受診数はあった。また、大会会場や台北フラートンイーストホテル以外のホテル(ビーチバレーチーム滞在ホテルであるハワードビーチリゾート)に出向いて診療を行うこともあった。内科系では、医務室があるホテル以外で診療したのは 1 件のみであった。大会会場や他の地区でのホテルは医務室とは距離的に離れているため、医療チームとして役割を分担して機能する必要が生じた。

10：00 ～ 19：00 は医務室での受診があると予想されたときはホテル内で待機するようにし、受診した選手も含めて病気やけがの状態で練習や試合の様子を診たほうがいいと思われたときは、練習・大会会場に出向くようにした。

携帯電話は医師１人１台、看護師１人１台、トレーナー１人１台あり､連絡を要することが非常に多く､大変便利であった。

出国前に全選手に診断書および基本健康調査用紙を記載してもらい、チームごとにファイリングして診療する上で活用した。大会終了後、事務局で破棄してもらうようにした。

これまでの大会では日本障害者スポーツ協会からのサポートを全面に受けてきたが、今回、全日本ろうあ連盟が主体となって医療チームを構成し、準備をおこなった。そのため、出国前にはメールでおもに事務局および医療チームで連絡を頻繁にとることが多かった。個人的にもはじめての経験であり、業務内容は出国前も非常に多く、時間をかなり要した。事前に聞いていた帯同医としての業務内容や仕事量よりはるかに多かった。その際、2005 メルボルンデフリンピック大井直往医師、2008 北京パラリンピック上野友之医師、日本障害者スポーツ協会医学委員長　陶山哲夫医師にご指導を仰いだ。特に上野医師からはメールや電話で相当なご指導を頂いた。次の大会へ今回の業務や経験をどのように引き継ぐのかは大切な課題である。

現地での医師の業務はハードであり、医師自身の健康管理も非常に大切であった。幸い、田口、類家医師とも寝不足ではあったが健康であった。

医療チームとしてメンバーにも恵まれ、チーム内および事務局ともコミュニケーションを十分に図り、チームとしてよくまとまっており、途中インフルエンザの集団発生があるなどあったが、選手・スタッフの健康面でのサポートを十分に行えたのではないかと思う。

医師の業務内容は以下のとおりである。

(1)出国前の業務

①選手の健康状態の把握　診断書および基本健康調査用紙を今回デフリンピック用に作成し、全選手に提出してもらった。作成時、事務局との合意で日本障害者スポーツ協会医学委員会の協力を得て、選手への個別指導を行う予定であった。しかし、事前の個別指導はしないと事務局により決定がされたため、個別指導は行わなかった。類家医師により提出された診断書および基本健康調査用紙の確認がされ、大会へ出場できない選手はいなかったものの、さらに検査などを必要とする選手もいた可能性があり、次回への大きな課題である。

②医療マニュアル　出国前に配布されたマニュアルには医療マニュアルも含まれた。内容は次の通り。メディカルスタッフの役割、医務室の開設時間と場所、メディカルルームとトレーナールームについて、受診方法(ただし連絡先は現地で事務局からの連絡事項として通達された)、健康管理の重要性、熱中症の予防(水道水や生水ではないミネラルウォーターを十分に摂取することなど)、インフルエンザ対策を含めた予防(うがい・手洗い・マスクなど)、薬剤(アンチドーピング、点滴ができないことなど)。受診した選手やスタッフの理解を考えると読んでいなかったケースや実行していなかったケースが多く(特にインフルエンザ予防をほとんどしていないケースが目立ったり、アンチドーピングの問い合わせを現地に来て行うケースがあったりなど)、自己の健康管理がとても大切であることを事前に周知し、マニュアルを熟読したうえでの実行を徹底することが次回の課題である。

③アンチドーピングの管理　ＪＰＣアンチドーピング部会(責任者　草野修輔先生)により、大会前の服薬状況の把握がされ、アンチドーピングの薬剤の有無を確認し、ドーピング禁止薬は変更可能であれば変更し、変更できない必要性のある薬剤は事前にＴＵＥ申請された。

２名が使用していたドーピング禁止薬が出国前に中止され、１名がドーピング禁止薬から変更可能な薬剤に変更した(中止もしくは変更されたため、この３名はＴＵＥ申請する必要はない)

出国前に２名、ＴＵＥ申請が行われた。しかし、その結果について確認がされていなかったため、台北で確認を行った。

さらに、１名ドーピング禁止薬を使用していた選手に出国前に連絡したが返答がなかったとの報告が草野医師よりメールで大会開始後にされた。それを受けてその選手に確認を行った。

④現地へ携帯する薬剤・処置材料の選定

国際ろう者スポーツ委員会(ＩＣＳＤ)、世界ドーピング防止規定(ＷＡＤＡ)、日本アンチドーピング機構(ＪＡＤＡ)、台湾への持ち込み禁止薬を基準にして医療チームで選定を行った。費用を抑えるためジェネリックを活用したり、可能な限り数量を少なくしたりした。薬剤リスト(薬剤名および数量、処置材料)と英文リストを作成した。なお、ドーピング禁止薬と知りながら、緊急時の対応や処置の必要性から携帯した薬剤は次の通り。サルブタノール吸入薬剤（サルタノールインヘラー)、デキサメタゾンナトリウム注射(デカドロン)、アドレナリン注射(ボスミン)。いずれも使用しなかった。

購入にあたっては事務局が購入先を探したが、薬事法がネックとなり、購入方法や帰国後の管理などの問題から難航した。大会直前の８月 21 日になり、購入窓口として高橋薬局(高橋春夫さま)が決定した。佐野産婦人科医院　院長佐野慎一医師にもご協力を頂き、早急に購入することができた。不足分は類家医師や大島看護師、高田看護師が対応してそろえることができた。次回は購入をより早くする必要がある。

⑤現地の医療情報の収集　会場にＡＥＤがあること・大会会場の医務室では帯同医は同伴できるが診療行為はできないこと・その際、受診費用はかからないこと・現地の病院の受診先(指定医療機関)・費用について事務局を通して情報収集を行った。医療チームとして事前に対応ができたとともに、現地に行ってからは会場医務室を視察し、その医療

内容を確認し、現地病院に同伴し、それらを医療チームで共有することで選手団により適切な対応ができた。

(2)現地での業務

①急性疾患に対する治療

日本選手団 244 名(選手 145 名、スタッフ 90 名)がエントリーされ、現地での急な病気やけがの治療を行った。

のべ受診数　229 名で内訳は次の通り。選手 196 名、スタッフ 33 名。

内科系のべ受診数　160 名(選手 131 名(初診 46 名、再診 85 名)、スタッフ 29 名(初診 20 名、再診９名))

外科系のべ受診数　69 名(選手 65 名(初診 48 名、再診 17 名)、スタッフ４名(初診４名、再診０名))

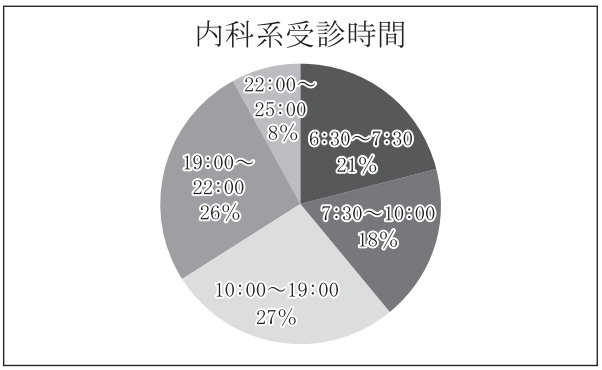
内科系は外科系に比べると受診数は選手・スタッフとも多かった。理由として、選手では内科系はインフルエンザなどの再診数が非常に多かったこと、スタッフでは内科系の病気が発生することは多いがけがをすることは少ないということが挙げられる。大会半ばより内科系の受診数は増えているのはインフルエンザなどの再診数が多くなったためであり、帰国前になりインフルエンザが終息するにつれて受診数も減っていった。

選手がスタッフに比べると受診数は非常に多い。再診が大会半ばより多くなったため受診数が増えていった。スタッフは全日程で一定数受診があった。

受診疾患は初診 118 名のうち、内科系 66 名(56%)、外科系 52 名(44%)であった。内科系 56% のうち内訳は次の通り。上気道炎(15%)、胃腸炎(８%)、インフルエンザ(７%)、ドーピングなどの薬についての問い合わせ(６%)、熱中症(３%)、口内炎・口唇ヘルペスなどの口腔内疾患(３%)、頭痛・めまい(３%)、月経前症候群・月経痛などの婦人科疾患(３%)、虫刺症などの皮膚疾患(２%)、過換気症候群などの心療疾患(２%)、便秘(１%)、その他病的意義なし(４%)。

受診場所は内科系の受診件数 160 件のうち、医務室がほとんどで 90 件、インフルエンザの再診(もしくは疑いの段階での初診)で個室に隔離中の選手への部屋への往診が 69 件、医師が同伴して現地病院を受診したのは８件(いずれもインフルエンザ)、医師が同伴せず現地病院を受診したのは１件(過換気症候群で生食の点滴を受けたケース。医務室があるホテルから遠方に滞在中のチームの選手で受診中に医療チームに電話で付き添いから連絡があった)、大会会場内の医務室を受診したケースはなかった。現地病院受診の際に、２度中国語通訳ができる人に同伴していただいた。実際は医師が英語で現地病院の受付や診察室で医療者と会話が可能であれば通訳は必要ないと思われる。さらに、手話が堪能な看護師にも何度か同伴していただいた。医師がある程度手話ができるか、チームで手話ができるものが付き添うことができれば手話でのやり取りは可能となる。しかし、手話が堪能な看護師が同伴していただけることは医師の負担は相当軽減された。

医務室開設時間は７：30 ～ 10：00、19：00 ～ 22：00 であるが、受診時間はその時間帯で 44% であり、医務室開設時間外の受診が 56% と半数以上を占めた。19：00 ～ 22：00 のほうが、７：30 ～ 10：00 の時間帯より受診数は多かった。８人のインフルエンザの部屋への往診(再診)を主に６：30 ～７：30、18：00 ～ 19：00 の１日２回していたためその時間帯の受診人数は多かった。10：00 ～ 19：00、22：00 ～ 25：00 にも受診数は多かった。限られたスタッフで医療チームの疲労を減らすためには医務室開設時間に受診していただくことを原則に、時間外の受診数をどのように減らすかが課題である。



診察前に問診票に記入してもらい、カルテ記載にも活用した。発熱があるものについては問診票の裏面のインフルエンザに関することも記入してもらった。出国前に提出された選手の診断書および基本健康調査用紙もあわせて活用し、これらは診察する上で有用であった。

大会期間中に使用した使用薬剤名と使用量は下記の通りである(内科系のみ)。外科系での使用薬剤名および使用量、処置材料名および使用量については類家医師の報告を参照されたい。

薬剤名(一般名；商品名)	使用量
フェキソナフェジン；アレグラ 60mg	24
センノシド；センナル 12mg	4
ファモチジン；プロゴーギュ 20mg	18
アセトアミノフェン；同左 200mg	38
メトクロプラミド；テルペラン 5mg	3
ロキソプロフェンナトリウム； ロルフェナミン 60mg	18
デキストロメトルファン； デトメファン 15mg	66
ドンペリドン；ジャックマール 10mg	14
ロペラミド；ロンバニン 1mg	14
スコポラミン；スコポラ	14
ブロムヘキシン；ルンボン 4mg	10
デカリニウム；SP トローチ 0.25mg	48
クロタミントン； オイラックスクリーム 10g	1本
ポビドンヨード； ポピヨドンガーグル 7%30ml	2本
フルスルチアミン・B2・B6・B12； ビタノイリン 50mg	12
トリアムシノロンアセトシド； アフタッチ	12
トリアムシノロンアセトシド； ケナログ軟膏 5g	1本

点滴静注は医務室では行わなかった。

内科系では処置用材として、マスク、酒精綿、ディスポ手袋、ビニール袋を多数使用した。また診察の際に、電子体温計、自動血圧計、聴診器、ペンライトを多く使用した。インフルエンザ簡易キット診断を 20 個入り 1 ケースを日本より持参した。現地で 2 回検査を施行し、1 件は陽性、もう 1 件は陰性であった。

インフルエンザの診断で試合に出場できない選手に関して、チームトレーナーより大会出場不許可証明書をデフリンピック大会本部に提出する必要があるとのことで作成を依頼された。これをうけて、2 通(2 日間分)記載し、トレーナーを通して大会本部に提出し、受理された。

②トレーナー業務　中島トレーナーおよび星野トレーナー、類家医師の報告書を参照されたい。

③カルテ作成　エクセルファイルで受診した全選手・スタッフの診療記録を記載した。　内科系と外科系に分けてそれぞれ田口と類家医師が記載した。内容は氏名・生年月日・性別・年齢・選手かスタッフかの区分・競技種目・受診日時・主訴・現病歴・既往歴・アレルギー・身体所見・診断名・治療内容(投薬・処置・指示・紹介を含む)・再診の経過である。カルテは記録として保管する必要があるため、本部事務局でおこなうことを依頼した。

④医療チーム会議　毎晩、医療スタッフ内で会議を行った。

内容は医師・看護師・トレーナーからその日の報告と情報共有を行った。さらに課題があったときには討論を行い、チームとしての意見をまとめ、本部への事務局への報告や相談・提案を行った。

課題があったり情報共有が必要だったりした時は夜の会議以外にもその都度連絡を頻繁に行った。

これらと懇親会を随時行うことで、チーム内のコミュニケーションはよりよくなり、機能もより向上し、結果として選手団にいいパフォーマンスを提供できたと思われた。

⑤事務局への報告・相談・提案

毎晩、紙面および口頭で報告を行った。内容は受診人数、今後の試合に影響しそうな選手の報告である。また、医学的な内容を踏まえてどのように今後対応するかについてはその都度、事務局に連絡・報告・相談を行い、指示を仰いだ。

⑥インフルエンザの対応

今年度、H1N1 インフルエンザ(新型インフルエンザ)の発生がみられ、流行しており、今大会においても選手団に発症することは前もって予想されていた。そのため、医療マニュアルで事前にマスク・手洗い・うがいを行い、予防に努めることを勧告した。マスクに至っては日数分持ち合わせることを明記し、チームごとに体温計を持参することも記載した。さらにインフルエンザの簡易迅速検査を日本より持参した。その目的はインフルエンザ簡易検査の対象を適切に選別し、検査の特性を踏まえたうえで検査をすることで早期にインフルエンザの発見をし、罹患者の治療を早急に行うとともに、さらなる感染の拡大を防ぐことである。

さらに、インフルエンザが発生する前の 9/6 にあらためてインフルエンザの予防について本部事務局を通して紙面で通知した。内容は、台湾にいる間、インフルエンザの対策(ホテルに戻ったら毎回と食事前にアルコールによる消毒をする、うがい手洗いの徹底、発熱・せき・のどの痛み・鼻汁・頭痛・下痢の症状があったら必ず医療チームに連絡する、人ごみの中でマスクすること)を必ず実行すること、である。

この通達があったことで発熱の症状があった選手からすぐに連絡があったことで早急に対応することができた。

9月7日にインフルエンザ発生後は

1．インフルエンザに罹患した選手の治療を適切に行うこと
2．さらなる感染の拡大を防ぐため対応をしっかりすること
3．日本選手団に過剰な不安をあおらないようにすること
4．日本選手団の外部機関に対してインフルエンザ感染の情報を開示すること

の対応を行った。

1．について　インフルエンザに罹患した人との接触状況やインフルエンザの迅速検査の特性(発症早期では陰性にでること)を考慮し、適切にインフルエンザの診断を行った(基本的にはインフルエンザの人と接触があって高熱などのインフルエンザの症状があればインフルエンザの診断となる)。その選手は田口が同伴のもと、現地病院を受診して、現地病院の医師と看護師に情報を提供するとともに、インフルエンザの迅速検査やときに詳細な検査(新型かどうかなど)を行ったうえで、治療についても現地病院の医師と相談した。特に、インフルエンザの治療薬であるタミフルについては新型であった場合、重症化しときに死亡例が季節性インフルエンザより高い可能性があり早期にタミフルで治療することで防げる可能性があること、有症状期間を短縮する可能性があること、タミフルによる治療をせずに経過を診た場合、長期に症状が持続して台湾を出国できない恐れがあることを考慮して、全例タミフルを現地病院に処方してもらい、選手に十分に説明して合意のもと、内服してもらった。発症してから治療が開始されるまでは全例、数時間から

長くても半日であり迅速な治療ができた。その後は選手が滞在する部屋への回診を毎日全選手に対して１日２回看護師と行い、選手の状態を把握するとともに適切な治療を行った。隔離が数日になると選手のメンタル面でのストレスが見られ、看護師とともにメンタルケアを行い、さらに同じチームの監督やコーチ・トレーナーにメンタル面でのサポートをお願いした。

２．について　高熱などのインフルエンザの症状があり医療スタッフに連絡が来た時は現地病院を受診する前の段階で、本部事務局に連絡後速やかに同室の選手と部屋を分け、個室での隔離を行った。部屋については KNT の協力のもと、同じ階にインフルエンザの選手を集めるようにした。看護師とともに部屋へ回診するときは回診する医療者もマスクをしっかりと行い、診療後には各部屋で手洗いを徹底した。同じチームのメンバーにはインフルエンザの選手との接触を最低限にするとともに食事も食堂ではなく、部屋で摂るようにした（KNT の方にも食事のケアをしていただいた）。本部事務局を通してさらなる感染拡大を防ぐための情報を提供し、選手団全員にマスクをしてもらい、ホテルへの入館や食事前などアルコール消毒を徹底すること、うがいや手洗いをすること、インフルエンザの症状があったらすぐに医療スタッフに連絡をすることを重ねて通達した。

さらに、台北政府衛生局に事務局を通して連絡をおこない、事務局・衛生局・医師とで 9/10 に対応を相談した。さらにとった対応は a. 健康調査票、b. 入館するすべてのものに体温をチェックする、c. エレベーターを分ける、d. アルコールによる消毒を増やす、e. インフルエンザの詳細な検査、である。

a. については全選手・スタッフに健康調査票をチーム毎に記入し、本部事務局へ提出してもらった。それを医療スタッフですべてチェックし、症状ありにチェックがついたものについてはチームへ電話連絡し、状態を確認し、さらに必要に応じて受診してもらった。また、その結果を毎日、事務局とホテルへ報告した。健康調査票により新たにインフルエンザの診断となった者はいなかったが、医療サポートを十分に行うことができた。c. についてはインフルエンザに罹患した選手が滞在する階のエレベーターを分けた。e. については衛生局からの要請もあり、罹患した選手の滞在する部屋でインフルエンザの詳しい検査を選手に説明、合意を得た後に３名に対して行った。

また、滞在しているホテルにも適切に情報を提供し対応をしていただくため、罹患した選手に関する報告書を提出するとともに、治癒して部屋から隔離解除するにあたっては、その診断書（証明書）を提出したうえでおこなった。

治癒し隔離解除になった後の試合出場や会場へ行くことに関しては台北政府衛生局の勧告を踏まえて、チームの監督・事務局と十分に相談を行った。そして、台湾出国や日本への帰国に関して、厚生労働省検疫所および厚生労働省の HP をもとにその内容を事務局に伝えたうえで、全日本ろうあ連盟および台湾交流協会へ応援を依頼してスムーズに行えるよう配慮した。

３．について　日本選手団には、選手の守秘義務を遵守しつつ感染状況を隠すことなく開示したうえで、予防をしっかり行うことで感染を防ぐことができることを事務局へ提案し、通達された。９月 11 日朝以降、新たな感染者が出ず、罹患した選手も治癒が十分に予想されたため、９月 13 日にインフルエンザの終息宣言を事務局を通して行った。その内容は、終息したこと、新型（H1N1）インフルエンザではなかったこと（季節性（H3N2）であった）、マスク・手の消毒・うがいを引き続き行うこと（日本選手団から感染することはなくても台湾で流行していて感染の危険性は引き続きあったため）、である。

４．について　インフルエンザに感染したことを内密にして感染が拡大することは問題であること、感染者の守秘義務を担保しつつきちんと情報を開示することは透明性を保ち、日本選手団がインフルエンザ感染に対して適切な対応をしていることをアピールにもなること、開示した結果として必要なサポートも得られることになり、さらなる感染拡大を防ぐことにもなること、それらのことを念頭に、台湾交流協会（協会から日本外務省にも情報を開示した）、台北政府衛生局、デフリンピック大会本部へ情報を開示することを事務局へ提案し、実行された。

これらの対応を適切にかつ迅速にすることで９月 10 日までの間に選手８名がインフルエンザを発症したが、さらなる拡大を防げた（９月７日　１名、９月９日　４名、９月 10 日　３名。所属するチームの内訳はＡチームが７名、Ｂチームが１名）。罹患した選手は速やかに症状は改善して９月 14 日にはすべての選手が治癒した。選手はインフルエンザ発症後、試合に出場することができなかったが、治癒後には試合会場に行ったり、ベンチ入りしたりできた。また閉会式へ参加してともに帰国することができた。

⑦会場内の医務室　すべての会場ではないが、各会場でどのように医療行為が行われそうかを把握するため、各会場の医務室の見学を行った。アリーナ・スタジアムでは薬剤・処置材料・ＡＥＤ・モニターなどその場で緊急の処置をできる体制が整っていたが、その他の会場では救急車で医療機関に搬送するつなぐ役目としての機能のみの診療体制であり、会場により医務室の体制が大きく異なっていた。

⑧アンチドーピング管理

既述のように出国前に草野医師を責任者として対応がされた。どのような対応がされたかは台北に到着後の９月５日になって報告を受けた。その中には、出国前にＴＵＥ申請がされた２名の確認がされていないこと、ドーピング禁止薬を使用していた選手１名と連絡がとれなかったことがあった。そのため、その確認を行った。結果として、出国前にＴＵＥ申請を行った２名はいずれも承認の判定がされていることを確認した。さらに、ドーピング禁止薬を使用していた選手は６ヶ月間その薬を使用していないことを確認した。これらはもし申請が許可されていない状況で禁止薬を使用していた場合、その選手のみならず、チームや日本選手団に責任があることを考えると、選手・チームスタッフのドーピングに関する更なる意識の向上が必要である。

さらに、出国前からの内服薬に関して問い合わせの受診が内科に７件あり、出国前のアンチドーピングに関する管理の周知の徹底が必要と思われた。

現地で薬剤を処方した場合は、ドーピング禁止薬ではないものをすべて使用した。その際、日本語で薬剤名と飲み方を記載したメモを手渡すとともに、さらにドーピング検

査があった場合のことを想定して、英語表記で記載したメモを手渡すようにした。現地病院で処方された薬剤についてもドーピング禁止薬でないことを確認した後で選手に手渡した。デフリンピック選手であることを現地病院の医師に伝えてあるが、ドーピングに関する知識がその医師にあるとは限らないので、帯同医がしっかりと確認する必要はあるだろう。実際に、禁止かどうか不明の薬(インフルエンザの選手で現地病院を受診して、タミフル以外の対症療法の薬のうち)については必ずしも服用する必要性がなかったので選手には服用しないよう伝えた。

ＴＵＥ申請は１名行った。喘息を基礎疾患にもつ選手で練習中に呼吸苦が出現し、現地病院(Hsin-Chu Armed Hospital；今回大会提携病院のひとつ)を受診した。その病院の医師の判断で生食 500ml の点滴静脈注射がされた。診断は過換気症候群であった。生食 500ml の量の点滴を施行され、ドーピング規定にかかるため、その医師に田口が電話で情報を収集し、ＴＵＥ申請を行った。その後に再調査などの依頼は来ておらず申請は承認されたようである。

実際に今大会で選手に対するドーピング検査の結果については類家医師により報告予定である。

⑨コミュニケーション

今回、手話が堪能な大島看護師・高田看護師が医療チームにいたことは非常に大きかった。途中インフルエンザの対応などで、看護師が手話の通訳と医療の提供の双方が困難となり、日本より医療チームへ通訳者の応援が一人あった。そのころは受診数も落ち着いてきており、通訳を依頼する機会は少なかった。

田口自身、出国前に医療内容に関することも含めて手話の勉強をしてきた結果、受診した選手やスタッフとは手話や口話・空書・筆談を交えながらある程度のコミュニケーションは可能であった。しかし、本部への報告や相談といった日常会話を超える内容については十分にコミュニケーションが図れず、通訳者にサポートをしていただいた。

現地での医療機関を受診するには、医師が英語でのコミュニケーションができれば台北の場合、十分であり、中国語の通訳は必ずしも必要ないと思われた。しかしながら、受付などの面で現地の言葉ができるほうが医師の労力は減少し、本来の医療面に集中できる。

○今回の課題と今後の対策についてのまとめ

・医療チームのコミュニケーション　現地に行ってからは十分にチーム内でコミュニケーションができたが、出国前に全員が直接顔を合わせることはなかった。本部事務局のメンバーを含めて準備段階で顔を合せたほうがいいと思われた。
・医療マニュアル作成依頼など、事務局からの連絡をもう少し早くしていただけると幸いである。医療スタッフはそれぞれ普段、通常の仕事をしており、それに加えて今回、準備にあたっている。
・アンチドーピングに関する選手・スタッフの意識の向上　ドーピング禁止薬を使用しており、アンチドーピング部会から連絡があったのにもかかわらず返答をしなかったり、サプリメントを含めて服用中の薬に関してドーピングに問題ないかの確認の受診があったりした。選手はもちろん、それを監督するコーチ・監督の意識の向上を図る必要がある。大会直前の会議だけでなく、ことあるごとに啓蒙することが必要だろう。
・日本障害者スポーツ協会・アンチドーピング部会との連携　出国前の対応の報告が現地にいってから行われた。さらにＴＵＥ申請の結果の確認などが事前にされておらず、すぐの確認の必要性があった。出国前には少なくとも帯同医に報告がされるといいだろう。
・携帯薬剤・処置材料　購入先を早めに確保することと、大会後に余ったものを捨てるのではなく保管管理し、その後の日本国内や国際大会に運用すべきである。事前準備に薬剤師がいたほうがよく、可能であれば薬剤師が帯同することで医師・看護師の多くの労力が減るだろう。
・現地の医療サービスの内容　会場の医務室の医療内容・帯同医が診療できるか・受診費用がかかるのか・AED があるのか・現地の病院の受診先や受診方法・費用を把握することで医療チームも対応が可能となるため、出国前に情報を早めに事務局より収集する必要があるだろう。
・出国前の選手への個別指導　デフリンピックは国際大会であり、選手がスポーツを通して健康を保ち、さらによい成績を上げるには、自己健康管理の意識の向上は必須である。診断書や基本健康調査用紙の出国前の提出は現地での診療にも必須であるが、自己健康管理の意識の向上のためにも必要である。さらに診断書や基本健康調査用紙をふまえて、大会に出場できるか、さらなる精査を主治医に情報を求めるなど含めた個別指導をすべきである。今回、事務局の判断により個別指導はしないとされたが、選手がスポーツを安全に行うためにも、次回大会からはその指導をすべきと考える。また、日本障害者スポーツ協会からは個別指導をするよう求められ、両者の見解が異なったため大変なストレスであった(最終的には帯同医を任命している事務局の責任のもと、その指示に従った)。
・全日本ろうあ連盟(デフリンピック事務局)への医学教育委員会の設置　医師・看護師・薬剤師・トレーナーからなる委員会を設置し、日頃からスポーツに関する啓蒙や大会前のアンチドーピングや薬剤購入・選手やスタッフへの健康指導や個別指導を行うといいだろう。各大会で帯同医や看護師・トレーナーができることには限りがあり、またそれらは大変な労力であるため委員会を設置することでより機能として果たせると思われる。またそうすることで次回大会へスムーズに引き継ぎを行うこともできる。
・カルテ管理　カルテは医師法で５年保管が必要であり、帯同医を任命している事務局にその対応が求められる。
・受診方法について　医務室の場所や連絡方法など事前に通達することで受診を希望する選手団にとってよりアクセスがよくなるだろう。
・医務室から離れた地域でのメディカルサポート　医務室での業務が多忙になるとその他の地域へ行くことが困難となる。今回、水泳チームやビーチバレーチームなど医療サポートのニーズはあり、診療するには困難を要した。また、近くに医療スタッフがいないことで不安を抱える選手やスタッフもいるだろう。解決策として１．医療スタッフの人数を増やす(看護師を常時２人にする、医師を３人にするなど)、２．毎日もしくは定期的に離れた地域のチームに連絡をとる(電話や健康調査票を記載してもらって FAX してもらう)、が挙げられる。
・仕事量　インフルエンザに起因することも多いが、医師・看護師とも相当な業務であった。次回、選手団が増えるのであれば、医師・看護師もそれぞれ１名ずつ増員したほうがいいだろう。
・インフルエンザなどの感染対策や健康管理　最終的には自己

責任であるが、病気やけがにならないように予防をすることが大切であることを選手・スタッフが熟知するよう出国前の会議や医療マニュアル、現地で直接もしくは紙面で伝える必要がある。特に感染症に関しては本人だけでなく、周囲にも感染するため予防が大切で、罹患した場合には試合に出場できないだけでなく、部屋で静養(隔離)することになることをあらかじめ通達してもいいだろう。特に隔離は選手にとって非常にストレスがかかる。インフルエンザのため試合に出場できないことや隔離の必要性(しっかり静養することで治癒も早くなる)をわかりやすく説明したが、今回、インフルエンザに罹患した選手の中には、試合になぜ出場できないのか？なぜ部屋から出られないのか？とあからさまに不快な表情を示したものもいた(もちろん、選手の気持ちは理解できる)。

・コミュニケーション

手話が堪能な看護師であったことは非常に大きかった。

医師も手話ができたほうが選手・スタッフとコミュニケーションが直接できるメリットがある。今回、自分の手話のレベルが現在どのくらいでどこまでのレベルが求められるのか、そのためにはどのように学べばいいのか、２月にろうあ連盟の方に面接していただき、４月より愛知県聴覚障害者協会の皆さんにご指導いただいた。しかし、自分自身が多忙なこともあり、十分な学習ができなかった。可能であれば、より長期的な期間をかけて、そして、１回だけでなく定期的な面談を通して、手話の学習内容や方法をより具体的に明示していただけると幸いである。

現地病院では帯同医が英会話でのコミュニケーションができると現地病院の医師とよりスムーズにコミュニケーションができる(現地病院の医師が英会話をできることが前提だが)。現地語での通訳者が現地病院に同伴すると医師は医療面に集中できる。

・受診時間　医務室開設時間は今回上記でいいと思われた。インフルエンザの再診のための時間外の受診や往診を除いても、10:00 ～ 19:00、22:00 ～の受診が相当数あった。

10:00 ～ 19:00 は限られた医療スタッフであったため医務室があるホテル近辺に待機する必要があった。しかし、医務室から離れた地域への医療サポートについては上記のように複数あればその分医療スタッフの増員は必要だろう。今回、うまく機能を分担することで対応することができたが、異なる地域に往診する必要が出た場合、対応できなかった可能性は十分にありえる。

22:00 ～の受診に関しては必ずしも緊急ではなく、外での食事などの帰りに受診するケースも目立ち、19:00 ～ 22:00 の時間帯に受診可能であった。医務室開設時間内に受診することを十分に周知することが必要と思われた。

内科系では再診の予約時間をきめ、受診が集中しないようにしたこと、インフルエンザの１日２回の往診を医務室開設時間外に設定したこと、で対応できたのではないかと思う。

実際にはやっていく中で、柔軟な対応の必要性が求められる。

○最後に

出国前の準備にあたり、2008 北京パラリンピック帯同医　上野友之先生、2005 メルボルンデフリンピック帯同医　大井直往先生、日本障害者スポーツ協会医学委員長　陶山哲夫先生、アンチドーピング部会長　草野修輔先生には多大なるご指導ご教授を頂きました。さらに、携帯薬剤を購入するにあたり、高橋薬局(高橋春夫様)と佐野産婦人科医院　院長佐野慎一先生には直前にもかかわらず快く対応していただきました。そして、手話の学習においては愛知県聴覚障害者協会の皆様にご指導いただきました。この紙面を借りて厚く御礼を申し上げます。

準備から台北の長い期間にあたり、医療スタッフおよび事務局の皆様をはじめ、ボランティア・通訳の方には大変お世話になりました。この場をかりて厚く御礼を申し上げます。すばらしいメンバーでした。そして、スポーツを通して努力されている選手・スタッフの皆様には大きな感動と勇気をたくさん頂きました。開会式・閉会式に参加させていただき、試合の観戦もいくつかでき、そして業務を通して多くの方とお会いする機会を得て、多くのことを学びました。私自身にとって本当に貴重なかけがえのない体験をすることができました。そしてなにより楽しむことができました。ありがとうございました。

全日本ろうあ連盟のさらなる発展とろうスポーツのさらなる飛躍を心よりお祈り申し上げます。

医師　　類家　拓也

外科系メディカルルーム設営

外科系のメディカルルームは、台北フラートンホテル 15 階スイートルーム向かい合わせの二部屋が割り当てられ、常時情報交換のしやすい環境であった。リビングと寝室の２部屋タイプのスイートルームを外科系メディカルルームとし、奥の寝室を医師室・手前のリビングをトレーナールームとして医師の診断ののち必要があればトレーナールームでの治療・コンディショニングを連携して行えるように配置した。

受診の流れはまず、新規受診の場合には問診票記入の上、一度医師室で診察を受け必要に応じて処方や処置を行い、またトレーナールームに依頼して治療・コンディショニングを行った。トレーナールームでの継続治療をする場合、トレーナールームと選手間で時間を調整し治療継続することとしたが状況の変化があればいつでも医師室へ受診し再評価できる体制をつくった。事前にメディカルスタッフからメディカルルームの配置について本部に要望を出し、最大限に要望を受け入れて頂き、実際に機能的なメディカルルームが設置されたと考えている。

本部よりメディカルスタッフには携帯電話が配布され常に携行した。各チームには連絡先を周知し、メディカルルーム開設時間以外にも怪我の発生や体調不良などに電話で応対をし必要と考えられた場合はメディカルルームあるいは現場に急行して診察を行った。

またメディカルスタッフの各部屋はメディカルルームと同階に割り当てられており、いつでもメディカルルームへ駆けつけられる環境を用意して頂いた。

外科系メディカルルーム診療状況

大会期間中を通じての総受診者数は 68 名であった(表１)。再診者は経過観察のため指示再診した者、症状の変化により再診した者を含む。トレーナーに依頼し治療を継続している選手については再診数に含まれていない。同一選手別部位については新規として集計している。

表１　受診者の内訳

	選手	スタッフ
受診の内訳	新患　47	新患　4
	再診　17	再診　0
	のべ　64	のべ　4
総受診数	68	

現地入りした翌日９月３日よりメディカルルームを開設し競技終了の 14 日までの受診者数の推移を図１に示す。大会終盤にかけて連戦の影響もあり下肢の筋・腱に疼痛を抱える選手は多かったようだが、受診者数は減少傾向にありインフルエンザ対策を徹底した結果メディカルルームの使用を控えている影響があったと推測している。そのため終盤では相談のあった競技会場にはメディカルルームとの連絡体制を保った上でトレーナーが会場に出向いてケアを行うなどの対応を行った。

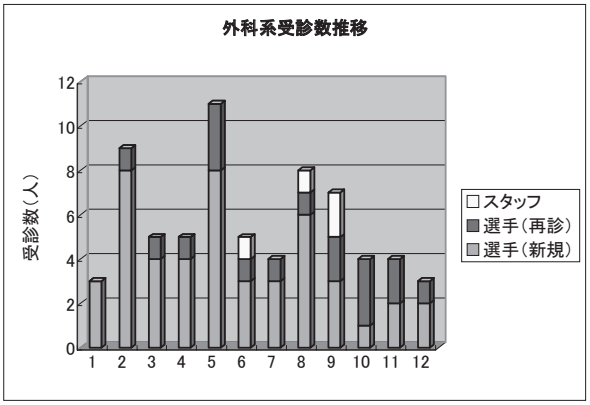


図１

新規受診選手 47 名の受診内容の内訳を表２に示す。大会前からの問題について相談を受けたケースについては１２件で、選手の希望など考慮し鎮痛剤の使用・トレーナーに依頼してのテーピングの指導や大会以後を見越してのトレーニングの指導なども行った。大会期間中に新たに発生したものとしては筋・腱のトラブルが多かった。高温環境下での開催ということがあり筋痙攣（いわゆる「足がつる」）の発生も多くみられた。

大会期間中に外科系メディカルルームで処方した薬剤は表３にまとめた。処方した薬剤について英文表記のメモを一緒に渡してドーピング検査の際に記入できるよう配慮した。

帰国後の経過観察が必要と考えられた選手に対し、診療情報提供書を作成し帰国時に持参させた

遠隔会場については電話で連絡を受け、skype・電話対応・往診などできる限りの対応を努力しこれまでの大会と比較しても一定の改善があったと考えているが、チームスタッフからはちょっとしたことの相談など近くにいて欲しかったという声も聞かれた。距離など物理的な問題は難しいが、相談のしやすさなど工夫の余地はあると思われ今後の課題として書き加えておく。

表２　新規受診 47 名（選手）：内訳

大会期間中			大会以前
試合中	練習中	競技外	
28	6	1	12
筋性痛（含：筋痙攣）		14	1
打撲症		7	1
脱水症		1	0
肩関節痛（腱板損傷・周囲炎など）		0	3
腰痛・坐骨神経痛		2	2
膝関節痛（水腫、陳旧性靱帯損傷など）		6	0
足関節痛		2	0
足関節捻挫		1	2
下腿シンスプリント		1	1
肉離れ		1	2
その他（擦過傷、足白癬）		2	0

表３

使用した薬剤	使用量
イリナトロン（ボルタレン）	20 錠
ロルフェナミン（ロキソニン）	1 錠
レバミピド（ムコスタ）	21 錠
ロキソニンテープ	7 枚
ロキソニンパップ	21 枚
アデフロニックゲル（ボルタレンゲル）	4 本
ゲンタマイシン軟膏（ゲンタシン軟膏）	1 本
ケルガークリーム（ラミシールクリーム）	1 本
デキサン VG 軟膏（リンデロン VG 軟膏）	1 本
１%キシロカイン	3 アンプル（各々 7ml、2ml、2ml 使用）
生理食塩水 20ml	1 本（10ml 使用）
アドマックディスポ（スベニールディスポ）	2 シリンジ

現地病院受診

幸い大会中に外科系の怪我などにより救急搬送を要する病態は生じなかった。メディカルルーム受診後に病院受診したケースは３件であった。レントゲン検査２件、ＣＴ検査１件を施行した。現地２病院を利用したが病院設備は充実したものだった。１病院は地元の救急患者であふれており、診察前の待合いの段階で「鎮痛剤を打つか？」と英語での質問があり希望した者にはその場で筋注投与され順番を待つという体制であった。薬剤は不明であったがドーピングで禁止されている麻薬系の鎮痛剤も一般に使用されているので注意が必要である。医療者に対してのやりとりでは十分内容が理解されていなくても、うなづいてしまうということは健聴者でも良くあることだが慣れない外国語でのやりとりのなかでは更に困難が予想される。メディカルスタッフが同行することで受診をスムーズに行えたと考えている。治療費は事前に契約していた保険でまかなわれた。受診時の本部事務局・スタッフの速やかな連携も特筆に値し感謝したい。

ドーピング管理

デフリンピックにおいてのドーピング検査は、これまで徹底されてはいなかったが、今大会より世界基準で管理を行っていくと事前に通達があった。競技団体によってはドーピングに対しなじみが少なかった部分があったと推察される。各選手に対して事前に本部より服薬状況の調査票が配られ内服薬の全調査を行い、回収したものをＪＰＣアンチドーピング部会により確認、服薬指導が行われた。これにより変更可能な薬剤については変更、２名に対し事前のＴＵＥ申請がなされた。今回のメディカルスタッフはこの課程に関わることはなかった。

服薬状況について出発前に帯同医に報告書が届く事になっていたが現地到着後も報告されなかったため、現地より問い合わせを行い、ＴＵＥ申請した選手・内容と服薬変更した選手・内容のみ報告を受けた。選手１名は服薬指導後どのように対応したかの連絡が無くアンチドーピング部会で把握されていなかったため大会期間中に本人に確認し、それをＪＰＣに再度報告

して問題ないと確認された。

日本国内においても医師のほとんどはドーピングについての知識を持ち合わせていない。ＷＡＤＡ／ＪＡＤＡの公式サイトをはじめ様々な情報収集を行い、同門のドーピングコントロールドクターより検査時の実際やＴＵＥ申請のシミュレーションを行ってもらうなどの準備をして大会を迎えた。

メディカルルーム開設後、持参した薬剤についてドーピング関連の問い合わせは十数件あった。常用しているサプリメントなど事前確認の際に記載していないものは確認が困難なため服用させないで対応、薬剤については持参したドーピング関連の薬剤集で確認し、確認できない物はメディカルスタッフで持参した薬剤に変更して対応した。

一方、事前にこの確認の申請が行われ問題なしとされていたにもかかわらず、ドーピングが心配と降圧薬など全ての内服薬を自己判断にて中止していた選手がおり、別件でメディカルルームを受診した際の血圧は 180 ／ 100 まで上昇しており服薬内容を再度確認の上、再開させた。選手の健康を守るためのアンチドーピングであるが正しい理解がないと、逆に選手の健康状態に悪影響をもたらしかねない１例であった。

また前回大会の反省からよく配慮された朝食が用意された（台北フラートンホテル）が、昼食・夕食については各チームに任されており、ドーピングが怖くて何が食べて良い食材か判らないからコンビニなどでも購入して食べれないというような話が一部の選手から聞かれた。長期海外遠征の中で食事は大きな課題だが、ドーピングを過剰に意識することでスタミナや体調へも悪影響を及ぼしかねない問題となりかわるものと認識させられた出来事だった。選手の健康を管理し大会で好成績を挙げていくためにも、正しく啓蒙していく必要性を感じた。

総じて事前に文章での通達を行ってきたが実際の印象として選手個人への理解の浸透は不十分と感じた。これは各競技によって異なりドーピング検査の経験のある競技団体との認識の格差があったと思われる。選手へのトップアスリートとしての自覚を促しアンチドーピングの啓蒙活動を継続、各競技団体は今回の経験を次回以降へ引き継いでいくことが大切と考え本部事務局に提言した。

大会中のＴＵＥ申請

大会期間中にＴＵＥ申請したのは１件であった。遠隔地に会場・宿泊施設のある選手が過換気発作にて現地病院に救急搬送され禁止行為である生理食塩水 500ml の補液を受けたと連絡を受けた。帯同医が治療にあたった現地医師と電話で連絡を取り治療状況を確認してＴＵＥ申請書を作成した。申請は問題なく受理された。大会指定の病院ではあったが安易な点滴が行われたと考えられ注意が必要である。

選手は喘息の治療中であったためＴＵＥ申請の際に、「呼吸が切迫しており重度の喘息発作の可能性も考えられるため確定診断の前に薬剤ルート確保の必要性があったものと推測する」と点滴の必要性について申し添える文章を加えて申請した。

大会中のドーピング検査

デフリンピック大会参加全選手のうち 10%程度にドーピング検査を行うと大会本部より通達があった。日本選手では、８名に行われ全員問題なかった。１名は競技前に検査官がホテルに出向いて検査を施行した競技外検査であった（結果的にメダル獲得）。内訳は以下の通りで、メダリストから選択的に検査が行われていた。前回大会のメダリストも対象者を選択する際の参考となっていると推測される傾向が見られた。

内訳）　金メダリスト５名　　のうち４名
　　銀メダリスト６名　　のうち１名
　　銅メダリスト９名（テニス混合ダブルス含む）
　　＋団体競技１　　のうち３名

準備期間・大会期間を通じてのまとめ

今大会から本部スタッフとして医師・看護士・トレーナーからなるメディカルチームが設置されることとなった。我々の任務は大会期間中の選手の健康管理はもちろんのことだが、前例のない中でメディカルチームが円滑に機能的に運営される仕組みを構築することなど多岐に渡り、日本選手団本部として新しい取り組みであった。試行錯誤の繰り返しであったが今後の大会運営につながるものが作られたのではと評価している。他方、メディカルチェックのあり方、医薬品・医療材料の購入・管理、遠隔会場への対応など課題も見えている。

大会期間中は、医師として発生した外傷に対し診断・応急処置を講じてきたが、一方で選手のトラブルとしては疲労や会場のコンディションによる筋・腱のトラブルが多く、すべての競技にトレーナーが帯同していない現状で選手からのニーズも多かったことから、本部スタッフにトレーナーを配置したことはメディカルチームとしての活動範囲が大幅に広げられたのではと考えられる。

最後に・・・

開会式に参加してまだこれから始まるというのに、ここまでたどり着いたことに感激し、選手と交流して純粋さひたむきさに感動し、試合では日本選手の一挙手一投足に声をはりあげ過ごした２週間は素晴らしい日々の連続であったと思います。帰国した選手達が更に成長して活躍されることを、またこれからの若いアスリート達がこのような素晴らしい大会にあこがれスポーツに打ち込んでいけるようにろう者スポーツを取り巻く環境がますます発展していくことを願ってやみません。今大会に携わったすべての役員・選手・スタッフの皆様、ありがとうございました。

アスレティックトレーナー　　中島　幸則

①団体内の担当とその内容

まず始めに、本部メディカルスタッフの一員として、トレーナーのポジションを作っていただいたことに深く感謝いたします。一般的に、トレーナーの役割は、選手がベストなコンディションで試合に臨むためにサポートすることで、アスリートの世界では必要不可欠なポジションと考えられています。しかし、これまで、聾スポーツにおけるトレーナーの理解度は低く、前回大会にトレーナーとしての教育を受けた人を帯同させていた競技は、私を含めて２・３種目だけだったと記憶しています。しかし、今回は 10 種目にトレーナーが帯同し、その中には日本体育協会公認アスレティックトレーナー資格取得者１名（私を含めると２名）、資格取得を目指している者が３名いました。この資格はアスリートをサポートすることを目的として作られたもので、資格保有者のその多くは、プロスポーツ、企業スポーツ、オリンピックに帯同し、国内トレーナー資格では最高の教育水準と考えられています。今後も、聾スポーツがアスリートの仲間入りをするためにも、こういったアスレティックトレーナーのサポートは必要不可欠であると考えます。

今回、我々本部トレーナーの実際の役割としては、①各競技種目に帯同するチームトレーナーと連絡をとり選手サポートする②トレーナーの帯同しないチームスタッフと連絡を取り合い、選手サポートをすることでした。朝７時 30 分から 10 時と、夜 19 時から 22 時にトレーナールームをオープンし、日

中は競技会場に出向き、チームトレーナー・スタッフとのコミュニケーションを図りながらサポートを行いました。以下、大会期間中の本部トレーナー３名（ボランティア１名含む）の活動詳細を記します。

《トレーナー利用者》：トレーナールームオープン 12 日間で、延べ 80 名がトレーナーを利用しました。７日の夜にインフルエンザが発生した影響で、それ以降選手が感染予防のために、よほどのことがない限り、トレーナールームに近寄らなくなったという印象があります。そこで、11日以降は現場での選手サポートを積極的に行うようにし、それ以降は毎日10 名前後になりました。

《実施内容》：トレーナーの行った内容は、ストレッチ 51 件、低周波 22 件、マッサージ 22 件、アイシング 14 件、テーピング 13 件、鍼５件、トレーニング４件であった。

《時間別利用者》：サポートした選手は延べ 80 人で、半数が夜 19 時から 22 時の利用であった。朝のオープン時に利用した選手は３名程度であった。

②反省及びまとめ

全体を通じて、気づいたことを記します。

・トレーナールームを利用する選手のチームトレーナーとのコミュニケーションは十分にとれ、問題はなかったと考える。
・トレーナールーム自体は十分な広さであったが、製氷機が部屋の近くにないのは、不便であった。また、容量が小さく全競技にいきわたらない日が多くあった。
・中高年のベテラン選手はトレーナーをマッサージする人だと理解していたのは残念であった。
・今回、トレーナーが帯同しなかった競技で、あらためてトレーナーの必要性を感じてもらえる競技があれば幸いである。
・本部トレーナーの役割として、「外への積極的な対応」という考えが必要であるならば、今後は本部トレーナーの職種、人数も考えなければならないと思う。
・「トレーナー」はメディカルスタッフの一員であるということを、理解してほしい。

今回、本部トレーナーとして大会に参加して、あらためて本部トレーナーの必要性を強く感じた。今後、日本がメダルを 40 個獲るためには、選手強化はもちろん、選手サポート体制の充実も重要だと考えます。その中で、トレーナーの必要性については、これからも各競技団体にアピールしていければと考えています。

トレーナー（鍼灸マッサージ師）　星野　直志

今回は本当に良い経験をさせて頂きました。

視覚障害を持ちながらトレーナーを目指す私を本部メディカルチームの一員として加えて頂いたこと、何かとご迷惑をおかけしたかと思いますが、この機会を与えてくださった方々、選手団の方々には本当に感謝をしています。

私もそうでしたが、障害者は同じ障害を持つ者たちで集まり、他と壁を作ってしまうことがあります。視覚障害を持つ私が聾スポーツへ関われたことは、今後社会へ対して理解を求める中で視野を広く持つことの重要性を実感する大きな経験になりました。

今回の帯同における業務内容のご報告と合わせて、これまで 10 年以上障害者スポーツに関わり、パラリンピックを選手として経験した立場としての私見を述べさせて頂きます。

１．担当と業務内容

《主な業務》

◆帯同医と相談のもとマッサージ、ハリ、低周波治療器を用いての施術
◆競技現場での選手、競技トレーナーと帯同医との連絡役

《トレーナールーム》

◆オープン期間 12 日（7：30 ～ 10：00、19：00 ～ 22：00）
　・主に午後の時間帯に利用が集中。
　　⇒午前の時間帯は練習、試合と重なるため、会場でのサポートが中心
◆利用件数：129 件（実数 80 人）
　（うち、マッサージ 22 件、ハリ４件、低周波 22 件）

２．反省及びまとめ

《反省》

◆各競技トレーナー、コーチとの選手状況、会場状況などにおける事前確認が取れていなかったため、競技現場での連携ミスやタイムロスがあった。
◆選手、コーチへ「トレーナーの枠割」について周知ができていなかった。
　⇒「トレーナーはマッサージをするところ」という認識が多く対応に困る場面があった。
◆身体状況、施術内容を記録し選手へ手渡していたが、理解度の確認を怠っていた。
◆メディカルチームとしての自覚が薄く指摘を受けた、確実なサポートを行う上でチーム内連携の重要性を痛感した。

《まとめ・感想》

選手個々における管理意識に大きな差を感じました。

デフリンピックという日本を代表して参加する大会での自分の役割、影響を自覚して自己管理や競技に関する知識を高めてくる選手、対して言動に軽率さが見られる選手。

聾スポーツに限らず、障害者スポーツにおける選手教育や情報の提供、共有が未発達なため、アスリートとしての自覚を持ち難いのだと思います。

オリンピック選手ともなれば、練習や合宿のなかで、または自ら機会を作り、コンディショニングやトレーニング、栄養やメンタルなどの学習をするのは基本です。パフォーマンスに直結するからです。

障害者スポーツにおいてもトレーナーやドクターなど専門の知識、技術を持ったスタッフを中心として選手教育の必要性を強く感じます。トップアスリートとしての自覚を持ち、多くの人に競技を通じて感動を与え、後輩につなげることは今後のレベルアップに欠かせないことです。

今回参加させて頂いたことで、改めて様々な課題に気付き、その上で今後も携わっていきたいと強く思いました。機会を見つけてスポーツ現場に向かいトレーナーの必要性をアピールしたいと思っておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。

看護師　　大島三千子

〔派遣期間〕2009 年９月２日～９月９日
（大会期間前半担当　９月８日交替・申し送り日）
〔活動内容〕
Ⅰ　出発前準備
・メディアカルスタッフ顔あわせ、情報交換手段の構築
・ドーピングに関する学習
・派遣選手の健康状態・既往歴・現病暦・内服薬の把握
・現地地理・気候・医療情報入手、医療に関する繁体字の確認、ASL（大会公式サイト等よりドーピング・医療関係）習得
・2009 Taipei Deaflympics Medical Service Summary より指定医療機関・台湾持込禁止薬・大会医護室（first aid station）の情報入手。日本選手団派遣委員会台北 2009 事前視察報告より台北滞在中の環境を把握
・日本選手団参加競技・日程・競技会場の確認
・台北持参薬、医療機器、必要資料を検討・準備
・全世界的に新型インフルエンザ流行中のため、台北市衛生局長臨時報告「H1N1 新型流感出現群聚感染疫情，以及聽奧活動」等参照。インフルエンザ迅速キットの追加準備・感染症患者発生時の対応をメディカルスタッフと事前協議

Ⅱ　台北到着後
・メディカルルーム初期の診療体制確立～継続期担当
・到着翌日からメディカルルームレイアウト、資器材配置
・台北体育館・基隆河迎風運動公園で医護室確認、現地医療スタッフより救護所資器材情報入手。救護車（ambulance）の確認
・メディカルルーム又は連絡用携帯電話（音声）で傷病者情報入手。トリアージ、医師への報告と診察・処置介助。適宜ミーティング実施し情報共有、発生した問題の解決策を協議
・医師－選手・各競技チーム関係者間のコミュニケーション支援。選手・関係者ら個々の相談支援、疑問・不安の聞き取り
・往診（フラートンホテル内・太平洋翡翠灣）介助。傷病者の経過観察、療養環境整備
・医師と共に台北市内病院受診の付き添い。診療時コミュニケーション支援（音声：日本語・英語・中国語→日本の手話）
・健康教育、情報発信（感染性疾患の罹患・拡大防止）
・手洗い、手指用乾性アルコール（75%酒精）による消毒（ホテル入り口・食事前の手指消毒）、うがい・マスク着用指導

〔まとめ〕
今回帯同させていただき有難うございました。世界の桧舞台で活躍する選手の迫力に大変感動しました。皆さんは、これまでに培った体力と意思の強さで体調不良にも毅然と立ち向かっていました。また、二人の医師は聴覚障害のある傷病者に自らコミュニケーションを図り、希望を十分見て＋聴いて診療しており、大変貴重な時間・空間でした。私自身は至らない点も多々ありましたが、皆さんに支えられ派遣期間中の活動ができました。

美しく立派なデフリンピックとなった今回、開催国台湾の方々にも大変お世話になりました。４年後のデフリンピックは、日本国内の周知度が上がり、更に素晴らしいものになると信じています。皆さんこれからも頑張ってください

看護師　　高田　智子

◇派遣期間：2009 年９月８日～９月 16 日
◇看護師の役割
選手団スタッフのメディカルチームに手話のできる（聴覚障害の特性を理解する）看護師として参加する。
（前回大会までの医療スタッフと各選手とのコミュニケーション不足を踏まえて 2008 年に内定）
◇準備について
・薬品、医療材料
メディカルスタッフ、事務局間でメールによる確認、発注（薬剤師とは経過途中から事務局を通じた確認を行う）
・マニュアル
メーリングで項目を確認し、たたき台を提示後、修正・作成を行う。台北の情報を踏まえ、インフルエンザに関する項目を追加した。
◇大会中の活動
・定期の診療
午前７時 30 分～ 10 時、午後７時～ 10 時
（情況により延長）ルームは 14 日午後９時で終了
・インフルエンザ
９月６日「すべての選手・スタッフのみなさんへ」と題してマスクや手洗い、うがいなどの予防方法、ホテル入館時の手指消毒についてお知らせを出す。９月 13 日「インフルエンザに関する連絡事項」として終息宣言と報告、予防の継続について選手団全員に配布する。
９月７日に最初の発熱患者があり、その後、計８名の患者が発生したため、午前、午後のメディカルルーム診療前に各室を医師、看護師の２名で回診を行った。
回診時は、各室での手洗い、回診終了時のマスク交換を徹底して実施した。初期は使い捨てエプロンを使用したが、吐物等の汚染もないため、患者の感情を考慮し、家庭でのケアと同じ条件として、スッタフなどの接触も短時間とした。９月 14 日には全員の隔離が解除となり、全員で解団式及び閉会式に出席し、帰国することができた。
・隔離
発熱患者については、基本的に個室管理として、面会者も各チームの担当者、事務局スタッフ等が食事の差し入れなど最小限の時間で接触することで対応した。チームメンバーも同一階とし、使用エレベーターを限定とした。
ホテル側では、施設の出入り口、エレベーターホールにアルコール消毒薬を設置し、入館者に対して、体温の測定がセンサー式で実施された。
◇今後の課題
・スタッフの人数について
全期間を通じて、医師２名に対して看護師が１名であった。通常の診療時については、大きな問題は生じなかったが、個室隔離に対する回診が加わったため、時間の調整が困難な時があった。
・準備に関すること
薬剤、医療材料については、今回の資料を基に数量の決定や、発注先を早めに決定する。（仕入れ業者、調剤薬局を通じた購入、保存方法、協賛品の依頼など）
・聴覚障害者にとっての隔離
各患者は熱が下がり、体調が戻るとともに、個室管理による精神的ストレスを会話や態度で現すようになった。（手

話で)会話する相手がいない、ＴＶの日本語放送はあるが、日本語字幕の番組は無い、漫画なども日本語のものは手に入りにくいなど、室外への出入りを禁止されているために一人で過ごす時間が多くなることで表現の違いはあったが、個々の表情は回復とともに硬くなっていった。

回復状態が同じくらいであれば、患者の同室管理が可能であると、メディカルスタッフとして事務局へ伝え、一次的に同室としたが一晩で個室となった。

【スタッフとして思うこと】

今回の、デフリンピックは私にとって多くを学んだ大会でした。監督会議やメーリングを通じて感じたものは、次回に継ぐ実績作りとベストな状態で大会へ挑戦する姿でした。そして、裏方である事務局の昼夜や休日を問わない準備、選手団のチームワーク作りなど活気ある団員の一員であったことがうれしい限りです。

大会の場では、あまり皆様の応援に駆けつけることができなかったことが心残りですが、全員でメダル20個の成果を持って帰国できたことが何よりだと思います。(次の発熱患者が発生した際はメディカルスタッフとして帰国延長を覚悟していました)

お会いできなかった(言葉を交わせなかった)選手・スタッフのみな様、健康に過ごせて何よりでした。

４年後に向けてスタートとなりますが、次回大会のメディカルスタッフに準備や成果を引き継ぎたいと思います。

陸上競技チーム

監督　　三枝　隆行

選考について

ＩＣＳＤの標準記録に伴って日本聴覚障害者陸上競技協会内で協議した。国内選手のレベルと国際大会に合わせた選考規定の標準記録から、初出場を含む18選手を選考した。また、昨年参加した第１回世界ろう者陸上競技選手権大会の成績も選出方法のひとつである。

成績

堰本将平	100m	11秒60	準決勝敗退
重田竜佳	100m	11秒21	準決勝敗退
白石進	400m	50秒97	準決勝敗退
高田裕士	400m	52秒77	予選敗退
寺澤純一	800m	２分02秒79	予選敗退
北田明広	800m	２分08秒96	準決勝敗退
板鼻英二	十種競技	5278点	決勝７位
山中孝一郎	マラソン	２時間47分17秒	決勝４位
山田真人	マラソン	２時間51分44秒	決勝５位
金子誠一	マラソン	２時間40分21秒	決勝3位銅メダル
前島博之	走高跳	１m93	決勝８位
竹花康太郎	棒高跳	４m40	決勝４位
森本真敏	ハンマー投	61m08	決勝１位
		金メダル／世界ろう新・大会新	
石田孝正	ハンマー投	46m10	決勝７位
佐藤將光	やり投	59m32	決勝２位銀メダル
嶋田裕子	マラソン	３時間41分01秒	決勝２位銀メダル
佐藤優	やり投	42m56	決勝３位銅メダル
奥村渚	やり投	39m70	決勝５位
堰本・重田・竹花・白石	４×100mリレー	43秒51	決勝６位
板鼻・北田・重田・白石	４×400mリレー	３分24秒21	決勝５位

成績と評価

トラック競技

メンタルと身体能力に差があったが、日本人特有の体格との差はそんなにはないと感じた。この経験を今後の課題に生かしたい。

マラソン競技

男女合わせて４選手のうち、デフリンピック経験者３選手はメダル候補の有力視と思われたが、故障した選手もあり、また国内には夏季レースがあまり少ないため、その条件下でメダルが取れたことは評価したい。暑さ我慢のレースであった。

フィールド競技

メダル候補の最も近い種目にあり、全員入賞、メダル３個獲得した。

またハンマー投世界新記録でメディアがどっと押し寄せた。

10種競技(デカスロン)

板鼻選手は外国選手より、ひときわ小さな体格だが、それに負けないステータスで挑んだ事を評価したい。

リレー競技

昨年、世界ろう者陸上競技選手権大会で好成績を得た選手がそれぞれ故障も抱え、悔いの残るレースだったが、昨年のタイムに差がないことを評価したい。

チーム体制と役割

監督１名
コーチ２名
トレーナー１名
マネージャー１名
コック１名
マラソンスタッフ２名

三枝隆行

チームに関する全ての責任者、選手の付添、会議出席、報告、選手とのコミュケーション、多方面の庶務。

鷲見英二

フィールド競技全般中心のコーチ担当、選手とのコミュケーション、手話通訳、選手の付添、トレーナー(簡素なマッサージ等)。

竹原和哉

トラック競技10種競技中心のコーチ担当選手とのコミュケーション、英語通訳、選手の付添、トレーナー(主にテーピング等)、ドーピング関連。

東口紘也

トレーナー中心全般担当、選手の健康管理、ドーピング関連、メンタル、選手の付添。

下堂薗里美

業務中心担当、選手の通達、選手の付添、コックの補佐。

田中かつ子

コック中心担当、選手の健康管理。

下防健太郎

マラソン選手のアシスタントスタッフ(男子)

喜多清美
　マラソン選手のアシスタントスタッフ（女子）

競技スケジュール
　７日間競技の間に１日休息日を入れて計８日間。
国際競技大会同様、午前（９時～ 11 時頃）と夕方（17 時～ 20 時頃）に分かれ、午前は予選中心、夕方は決勝中心で行われた。最終日はマラソン競技で早朝６時でスタート（台北特有の気候により）。

競技運営、規則
　台北デフリンピックの組織はオリンピック同等の組織力があり、大会スタッフやボランティアの活動がすばらしかった。警備に関しては厳重でかつ安全であったが、スタジアム内にあるテクニカルインフォーメーションセンターに入る為にまた別のＩＤカードが必要で、不便を強いられた。
　規則は国際ルールであるＩＡＡＦ（国際陸上競技連盟）にしたがったルールとなっている。競技計測システムは全て日本でも見慣れているセイコー社であり、短距離のスターター器具（スタート信号機）も精度が高く、トラブルも少なかった。判定について、２件抗議をした。どれも却下だったが、こちらの抗議手順や選手自ら抗議を取らなかった反省もあり、今後は、もっと知識と経験を積む必要がある。

大会までの準備状況
　２泊３日の強化合宿を３回行い、リレーのバトン練習を中心にはかり、それぞれ各種目で切磋琢磨しながら練習に取り組んだ。昨年の世界ろう者陸上選手権大会の反省をふまえ、ドーピング知識、競技ルールの熟知、チームの組織の統括、スタッフとの準備の統括等に力を入れた。
　また、選手同士とのコミュケーションにはかりそれぞれの種目ブロック長、副主将、主将を決めてまとめていった。フィールドの競技器具（棒高跳のポール、ハンマー、槍等）も輸送において注意を心がけた。とくに長物のポールは通関や輸送に関しても苦労はあったが、日本選手団事務局、大和物流株式会社様、ＪＡＬ様より万全なサポートを得られた。大会前の最終合宿で鷲見コーチ様の協力で、愛媛県国体予選会に特別参加させてもらえることになり、シミュレーションを組み立てることが出来た。それぞれの課題を見つけ、台北出発までの心構えが出来たと思う。

反省と今後の課題
　過去、陸上チームは参加人数が少なかったのですが、今回は初めて２桁の 18 名参加となり、本格的な団体として始動しました。
　大きな反省をあげると
（1）選手のメンタル、国際大会の経験に差がはっきりと出ていた。外国選手はそれぞれの国内で健常者トップレベルの大会に出場するぐらいの実力者が多く、日本の国内レベルで例えると、有名な室伏選手や為末選手、朝原選手等に等しいレベルである。またインターハイ、インターカレッジ等にも出場できる実力で頑張らないといけないことを痛感した。また、日本選手の参加は１種目出場（リレーを除いて）が多く、外国選手では２～３種目出場の選手が多くみられた。
体力的にも精神的も強く、日本選手はまだまだ甘かった。
（2）故障や怪我等があり、もっとケアの勉強が必要であった。なかでは、大会１ヶ月半前に怪我の再発で辞退をせざる選手までいて色々と決断しなければならないこともあった。また辞退選手の交代手続きに手間がかかり、選手団派遣委員会には大変、ご迷惑をおかけした。
（3）強化合宿の回数、またリレーメンバーだけの合宿も多く実施する必要があった。リレーの試合にも多く出場する必要もあった。また強化費、派遣費等負担もあり、少しでも軽減する為に、早急に資金繰りする必要があった。
　最後に監督自身としてまだまだ未熟さもあったと思う。選手達にどれだけサポートしてあげられたか、まだまだ足りない部分があったと思う。
　またスタッフ陣をはじめ、コーチ、トレーナーマネージャー、コック、アシスタントマネージャー方々に私と一緒についてきてくれた事に感謝したい。また選手達もこの台北デフリンピックでの貴重な経験をもとに、これからの発展につながるように日々練習に励んで欲しいと思っています。
　これからももっとデフリンピックの文化と知名度が上がるよう、次回のアテネデフリンピックまでに４年計画を立てていきます。

コーチ　　鷲見　英治

　私は今回初めて第 21 回デフリンピックという世界規模の大会に参加させていただいた。２月に監督である三枝氏と会い、コーチ依頼を受けてから、大会終了まであっという間に時間が過ぎていったという感じである。私は第２回の合同合宿から参加して、初めて全日本に選ばれたメンバー達と会った。私の役割としては、主にトラックを担当したもう一人のコーチ竹原氏と共に、監督と選手の橋渡しとチームのモチベーションの盛り上げ役という立場で大会終了まで関わったつもりである。
　今大会が行われた台湾では、オリンピッククラスの世界大会を行うことがないために、国を挙げての大会の開催となっており、その宣伝効果や有名な会社による協賛、市民の取り組み方、ボランティアの数と質など、どれを取っても素晴らしい大会であったと思う。ＩＤカードをぶら下げている私に、「ヘイ、ジャパニーズコーチ！」と言って、市民の皆さんが気さくに声をかけてくれたり、国際手話で話しかけてくる。また、選手同士・コーチも含めて、初めて会う者同士がお互いに握手をしたり抱き合い健闘をたたえ合う姿は、実にほほえましく、世界大会初参加の私にとって、とても印象深く素晴らしい大会だと感動した。成績の方も、ハンマー投げの森本選手の金に始まり、銀２個・銅２個という素晴らしい結果となった。
　さて、日本チームの内状はというと、実際にはかなり厳しい状況であった。先ず今回の反省として考えなければならないのは、選手選考である。これは監督とコーチがきちんと検討して決定をしないと、今回のようなリレーに関わることで選手ともめることになると思うので、チームとして少人数でもリレーを視野に入れた選手選考を考える必要があると思う。また、試合中や試合前に怪我をしたり不調を訴える選手も多く、日本代表として恥ずかしい状況もあった。個人的な変なプライドや自惚れは必要ない。日本代表として、一心不乱に「日本代表として走りたい！」「勝ちたい！」という選手を集めるべきである。精神的にもろい選手は、本番では勝てないと思うので、アメリカ式の一発勝負での選考（ある試合をこちらが設定し、その試合に勝ったものを選考するというやり方）の中から、さらにハングリーな選手を今後は選考しなければならないと思う。やはり日本代表として自信と誇りを持って戦える者を先ず選考する

べきである。それには、監督とコーチが意識統一できてないとチームにほころびが出ると思う。今回に関しては、竹原氏とは陸上に対する考え方や価値観が一致していたため、リレーでの選手起用や対応が迅速にできたと思う。ただ、選手とのコミュニケーション不足もあり、コーチも手話や筆談などでしっかりと意思疎通・意志確認をする必要があったと反省している。残念ながら、今回のやり投女子の佐藤選手が投げたやりの痕跡が、完全に先から落ちていながらファールにされてしまった問題なども、もちろん我々コーチがもっと早く競技中に審判に訴えていれば、状況は変わったかもしれない。しかし、もっと大切なことは、選手自身が、今のは何故ファールなのか？どこがファールなのか？という審判への訴えと説明を求める姿勢がほしかったと思う。今後は選手が自信を持って試合に臨めるよう細かいアドバイスも必要であると思った。マイルリレーでのバトンゾーンでのトラブルについても、完全な力負けをしているので、負けは負けとして潔さも必要であると思うし、あまりに必用に抗議を迫ると今後の日本の印象が悪くなるからである。

また、年に３回の合宿や試合への参加など。全員が集まる時の費用は全て立て替えとなっている資金面の問題は大きな壁となっていると思われる。コーチ・選手共に、今の社会状勢から考えると前もっての資金援助などが必要になるであろう。

コーチ　　竹原　和哉

①団体内の担当とその内容

日本選手団の大会及び練習会場への引率、ウォーミングアップ指導を担当した。ナショナルチームという特性上、選手には個々のコーチがいるため調整メニューは各自に任せることにした。調整練習の中で、ケガなど調子が万全でない選手の練習メニューのアドバイス、ラウンドを重ねるに従ってでてくる疲労などへの対応はコーチ・トレーナーと連携して行った。４×100 mリレー・４×400 mリレーのメンバー選定、バトン練習を含めた練習メニューの計画、走順の決定は私を含む陸上競技コーチ２名で担当した。

個々の選手には個人種目に集中してもらい、個人種目の終了した選手から順次、リレーの練習をするという形をとった。（大会期間中盤からリレーミーティングを開始）けが等で選手団編成時に想定していたメンバーとは変更せざるを得ない状況の中、短距離と一部の跳躍選手にはリレーを走る可能性のあることを伝え、メンバーの発表、補欠で一緒にアップをする選手の発表は前日のミーティングで伝えた。

今回の大会では、ハンマー投げで世界新記録を樹立した選手がドーピング検査の対象となり、コーチも同行することとなった。手順はＷＡＤＡのマニュアルに沿って行われたが、封印で使用されるはずの剥がしたら痕跡の残るテープではなく、セロハンテープが使用されていた。コーチ署名時には特記事項として記入した。このことは本部のトレーナースタッフにも伝えた。

抗議について･･･今回、女子やり投げの判定について、マイルリレー４走のリレーゾーンに入る順番の間違いについての抗議を行った。抗議した件に関する説明は、日本チームで撮影した映像をもとに行うこととなる。抗議の場での事情説明の際、ビデオカメラと会議室のプロジェクターをつなぐのに時間を要してしまった。各自で持ってきているビデオカメラは、判定にミスがあった際の有効な抗議手段であるため、ビデオカメラに付属しているコードを各自持参しておけば説得力のある抗議ができたと考えている。

②反省・まとめなど

今回、コーチとしての選手への説明、とくにリレーのメンバー選定の際には、選手に選考の結果を伝えることのみならず、選手個々の気持ちもフォローすることも考えて話をしたいと思う。

今回は手話のみで私の思いを全て伝えることができなかったことがコーチとしての反省点である。今後、帯同する機会があれば手話の勉強を積んでから参加したい。

日本代表メンバーの選定について･･･今回の日本代表は昨年度までの実績は残していたものの、今年度ケガをしていたり、競技成績が振るわなかった者もいた。選手の選考は、デフリンピックの行われる年に、日本選手権の上位入賞者、などの選考条件を明確にし、誰にでもチャンスがあるという選考の方法をとったほうが、国内の陸上競技の活性化につながると思う。

トレーナー　　東口　紘也

担当した業務および今大会を振り返って

第 20 回デフリンピックに夏季大会台北 2009 にトレーナーとして参加しました。４年前のメルボルン大会も参加させていただきましたが、当時は４名と少人数でしたが、今回は、19名と大勢での参加でした。

業務内容は、選手のケア、ペアーストレッチ、マッサージ、メンタルサポート、テーピングを中心に行い、時には、一緒に練習をしました。環境的な違いもあって、気温も湿度も高くすぐに疲れてしまう、ホテルはクーラーが強く、寒いなど選手の体への負担は大きかったと思います。出発前から、怪我をしている選手がおり、当日までに悪化しないように、テーピングをしての練習や、ストレッチなどのサポートを行いました。中には、極度の緊張から体調不良を訴える選手もいて、食事担当のスタッフに消化のいいものを作るようにお願いし、日本選手団のドクターにもお世話になりました。食事の面でも、栄養が偏らないよう、スタッフにもお願いをして体調管理のチェックを行いました。大勢の選手を 100％見ることは難しいですが、選手とのコミュニケーションを図り、マッサージやペアーストレッチ、ウォーミングアップの状態などを見て、把握していくように努めました。

４年前のメルボルン大会の時と比べると、全体的に競技レベルが上がっているのを感じました。ちょっとどころか、急激に伸びていました。日本選手も世界と同等のレベルで、極端に離れているわけではありません。でも、他国の選手と決定的な差がありました。それは、『メンタル面』と『経験』です。国際大会では、予想もしないアクシデントが起こることは当たり前です。日本でありえないような事が起こります。選手がそれに対して合わせていけるメンタル面の強さが求められます。どんなことにも動じない『不動心』です。今回の試合の結果は、どこがよかったのか、どこで失敗したのかなど、選手一人ひとりがよくわかっていると思います。今大会を通して、４年前よりも多くの収穫があり、４年後の課題がたくさんあります。選手一人ひとりの、『メンタル強化』、『自己管理』などといった知識を伝えていく必要があると感じました。競技中は、トレーナーは選手にケアをすることはできません。ハプニングが起こったときの対処法を知っているのと知らないのでは、競技にも大

きく左右すると思います。

今回、目標のメダル５個、全員入賞（リレーでの入賞を含む）する事ができたことは、喜ばしい事です。４年後も今より競技レベルがグンと上がることが予想されます。それに、遅れないよう、日本もそれに合わせて遅れないように伸びていく必要があります。そのために、今回の経験を、デフリンピックを目指している選手に伝えていく義務があると思います。そして、メンタルの強化を図っていかなければなりません。今後の育成に努めて行きたいと思います。

マネージャー　　下堂薗　里美

①団体内での担当とその内容
・日本選手団事務局との事務連絡業務
・陸上競技チーム内の事務連絡・経理業務
・選手の練習付き添い、サポート、テーピング、ストレッチの補助、アイシングケア
・田中スタッフの調理業務ヘルプ
②反省・まとめなど

今年２月に三枝監督より台北デフリンピックのスタッフとして選手たちのサポートを一緒にやらないかという話が来た時、一度ためらってしまった。なぜなら、選手選考に漏れてしまったからだ。一晩中熟慮した結果、ありがたく引き受けることにした。

５月の滋賀強化合宿を機に、マネージャーとして動き始め、７月の福島、８月の愛媛強化合宿にも参加した。しかし、日本代表が正式に決定される時期が遅いことが気掛かりであった。そのこともあって、選手たちは日本代表としての自覚があまりないように見えた。また、怪我などの不調を訴える選手が多く、日本代表として恥ずかしい思いもした。日本代表としての自覚をもってもらうことや、日本を背負うといったその重大さに気付かせるように努めたが、やはり時間が足りなかった。それでも、私らしく最後までマネージャーの仕事を頑張ろうと改めて決意し、９月に台湾へ渡航した。

台北市内に着くと、街全体が熱狂モードで、あったことには驚かされた。あちらこちらに台北デフリンピックのポスターや旗が飾ってあり、バスやタクシー、自家用車等にもその旗がつけられていた。アジア初のデフリンピックということもあり、国を挙げての大会開催だったので、印象に残る大会だった。

到着翌日に、選手の練習付き添いで、練習場所までバスで移動したのだが、乗り継ぎを含めて片道だけで２時間以上もかかり、移動するだけで疲れてしまうこともあった。選手のコンディションを考えると、バスの移動は負担がかかるので、移動時間をどのように短縮しようかと考えたら、三枝監督よりタクシーで移動したら良いと指示があった。タクシーによる移動は20～30分で着いたので、選手は集中して練習に取り組めるようになった。この後、大会期間中はタクシーで移動することが多くなり、今になって思えば、各選手のベストコンディションにつながる一因であると思っている。

その夜から、私の部屋で同室の田中スタッフの調理業務を始めると、すぐに慣れない台湾料理に戸惑う選手たちが途絶えなく、部屋まで来て日本料理を食べるなど、選手が続々と出入りすることが多かった。この為、田中スタッフや私自身がゆっくりと休めなかった。各スタッフのプライバシー、体調を考えると、あと１～２部屋が欲しかった。その部屋があれば、調理、食事、マッサージなどの多目的ルームに使えたのではないかと思う。

７日から陸上競技の試合が始まり、すごい！！と思ったのは、地元台湾の人たちが一心同体になって応援していたことであり、表彰式では全員が起立し、国歌が流れ終わった後にメダリストへ拍手を送っていた。今回のデフリンピックは、やはり地元の声援や協力が大きい、また、国家全体でデフリンピックを盛り上げようという気持ちが強く伝わり、台湾人たちにはとてもフレンドリーに接していただいた。

陸上競技の成績については、男子ハンマー投げの森本選手の金メダルから始まり、銀２個、銅２個という素晴らしい結果となった。大会後、選手たちに「ありがとう」と言われた時、大変だったけどもマネージャーを引き受けて本当に良かったと思えた。普段と違い、選手を支えるといった貴重な経験を活かし、今後の競技活動を頑張っていきたいと思っている。三枝監督を始め、コーチ、トレーナー、コック、スタッフ、選手たちに感謝したい。

「ありがとうございました！！」

選手　　重田　竜佳

【結果】
男子 100m　準決勝 11 秒 21（+0.6）４着
男子 ４×100m リレー　決勝 43 秒 51　６位入賞
男子 ４×400m リレー　決勝 ３分 24 秒 21　５位入賞

私は陸上競技の日本代表選手として第 21 回夏季デフリンピック大会に参加させていただきました。私自身の競技結果についてですが、男子 100m 予選では 11 秒 27（+1.0）を記録し３着に入り、次の男子 100m 準決勝では 11 秒 21（+0.6）をマークしましたが４着で準決勝敗退という結果に終わってしまいました。この結果には受験勉強による長期間の練習不足が大きく影響していると私は思っています。しかしながら、練習不足でも 11 秒 21 というサードベストをマークし、決勝まで後一歩というところまで進めたということに、次の世界大会では十分な練習量をこなすことができれば世界一とメダルは狙えるという大きな自信を持てるようになりました。男子４×100m リレー決勝では 43 秒 51 の日本ろう記録歴代２位を記録して６位入賞、そして男子４×400m リレー決勝でも３分 24 秒 21 とこれまた日本ろう記録歴代２位のタイムで５位入賞を果たすことができました。私から見れば、両方の種目とも記録を伸ばせる技術的な余地がまだあり、メダル獲得もそう遠くはないと思っています。まとめとして、今回のデフリンピックでは自分の結果はあまり良くは無かったが、これから次の世界大会までゆっくり時間をかけて練習を積めばメダルはもちろん世界一も狙える可能性があります。最後になりましたが、色々とご援助いただいた皆様に感謝の気持ちを表したいと思います。本当にありがとうございました。

選手　　白石　進

結果　400m　50 秒 97　準決勝敗退
　　４×100m リレー　43 秒 51　６位入賞
　　４×400m リレー　３分 24 秒 21　５位入賞
自己評価　400m 走は決勝まで残れなくて残念だったが、自分としては準決勝で自己ベストが出て、強豪相手たちとのタイム

差がなく、良いレースになったと思います。ただ満足していません。これからという気持ちです。4×100mリレー、4×400mリレーは最低でもメダルを獲得したがったが、バトンタイミングが悪く、メダル獲得のチャンスを逃してしまい、すごく悔しかった。でも日本としては、両リレーで入賞を獲得できたというとは、今回が初めて。しかし、「日本が強い」というアピールをもっとしたかった。これができなく、人生の中で一番悔しい気持ちになりました。

反省とまとめ

前回までのデフリンピック、去年の世界ろう者陸上競技選手権の決勝進出のレベルを参考し、トレーニングを積んできたが、今回は、急にレベルが高くなり、驚かされました。台湾料理が苦手ということもあり、朝食抜きで400m予選に出場したら、ギリギリで予選突破しました。それが最悪だと大きな反省をしました。それから、きちんと朝食を取り、準決勝で自己ベストが出ました。今後も朝食が大事だと心して行こうと思います。400mの決勝まで残れなかったのが今後の課題です。次回の大会に向かって、オリンピック並みのレベルを参考し、油断せずにもっと基礎と専門的なトレーニングを取り組んでいきたいと思います。

4×100mリレー、4×400mリレーもメダルが獲れなかったが、新たな一歩を踏み出せたと思っています。課題は国際競技会の経験不足とバトンのタイミング。リレーメンバーで練習できる機会が少なく、一般の大会にも参加する機会もなかったので、そのような結果になった、次回までに一般の大会でのリレーに参加するなど経験を積み重ねたいと思います。

選手　　堰本　将平

初めて台北デフリンピックに出場しました。陸上競技で100mと4×100mリレーに出場し、100mは準決勝で敗退し、4×100mリレーは6位入賞という結果でした。100m予選では11秒34という自己ベストを出しましたが、準決勝では11秒60でした。これは、初めての世界大会という舞台であり、かなり緊張していました。予選通過できたことで、緊張からの精神的な疲れと十分なアップが出来ていなかったことからこのような結果がでたのです。その反省を踏まえ、4×100mリレーの開始前のアップでは失敗しないように心掛けました。4×100mリレーは43秒51で6位でした。わたしたちの目標は42秒台で日本ろう記録を樹立させるとともにメダルを獲得することでしたが、その目標が達成できずとても悔しいです。でも、この台北デフリンピックというとても貴重な経験をした上でいくつかの課題を見つけることができました。100m決勝に残るためには最低でも10秒9台をださなければなりません。また、10秒台の壁に突入するためにはどういうことが必要なのかを日本帰国後から分析しています。最後に、わたしたちを支えていただきました三枝監督を始め、竹原コーチ、鷲見コーチ、東口トレーナー、田中コック、下堂薗マネージャーに感謝します。一番若くて、やんちゃな私でしたが、最後まで世話をしていただき、本当に申し訳ないほど感謝します。ありがとうございました。また4年後のアテネデフリンピックに向けて悲願のメダルを目標として頑張りたいとおもいます。

選手　　高田　裕士

私自身はデフリピック直前に右ハム裏を肉離れしてしまい、試合に出場できるかどうかという状況でしたが、トレーナーさんの懸命な治療により、テーピングで固定して、痛み止めを服用すれば、なんとか走れるという状態まで持っていくことができました。4年に1度の大舞台にも関わらず、非常に不甲斐ない結果に終わってしまい、無念です。この悔しさをばねにして、アテネデフリンピックでのメダル獲得に向けて練習を積み重ねていきます。また、陸上競技のトラック種目の部長としても参加しましたが、個人競技と言われる陸上競技において、集団(選手)をどのようにまとめていくかということが課題として浮き彫りになりました。アテネデフリンピックでは、心を鬼にして集団をまとめ、戦う集団として、日本代表選手一丸となって、臨みたいと考えています。

デフリンピック出場は初めてですが、他のなにものにも代えがたい貴重な経験ができました。今回の経験を今後の人生に活かしていきたい。日本代表選手団の監督、スタッフ、トレーナー、ドクターには大変お世話になりました。そして、最後の最後までサポート及び応援をしてくれた日本代表選手の仲間、日本の皆様には心から感謝しています。応援有難うございました。

○大会結果

・400m予選　52秒77の自己ワースト記録で予選敗退。

・4×400mリレー予選(4走)組3着で決勝進出。(決勝5位入賞)

選手　　北田　明広

デフリンピックは昨年の世界ろう者陸上競技選手権大会と比べて規模も大きく、警備体制も昨年と全然違いました。また、他競技の方もいらっしゃっていたので、興奮気味で行動していました。そのため、アスリートらしくない行動になってしまい、先輩などに怒られてばっかりでいました。しかし、競技の方は昨年の世界大会より集中できたと思います。この大きな大会で自分は記録を残す！結果を残す！と日々練習に励みました。

予選ではアクシデントに見舞われましたが難なく通過しました。準決勝では転倒という残念な結果になりましたが、それまでの過程は今季の中で一番良かったと自分は思います。マイルリレーも、怪我や疲労など、万全な状態ではなかった、それでも私たち選手は最後まで走りぬけたと思います。デフリンピックという大きな大会にも関わらず、いつも通りに臨めたのは昨年の世界大会の経験があったからだと思います。

今回のデフリンピックに参加して悔しい思いをしてきたので、その思いを次回のアテネデフリンピックにぶつけたいと思います。また、世界の人たちに「北田明広は速い！日本は強い！」ということをアピールできるくらいの力をこれからの4年間の間に身につけます！

選手　　寺澤　純一

台北デフリンピックに出場して

2009年9月5日から15日まで台湾台北市にて開催されたデフリンピックに出場しました。

“新型インフルエンザ”が流行っている中、自分自身の体調管理、そして万全な体調で試合に出る事は大変な事だと、デフ

リンピック開催前から思いました。日本出発前、そして台北滞在中はまめに体調管理することを常に心掛けていました。それも大変重要な事だと思いました。

出場種目は、陸上競技の 800m、4 × 400m リレーです。800m 予選は、11 日、準決勝は 12 日、決勝は 13 日でした。4 × 400m リレー予選は、12 日、決勝は、13 日でした。それまでに、9 月 3 日からある高校の陸上競技場を借りて調整(練習)しました。

普段は、試合日の 2 日前に、練習して、次の日は休養することが前から決まっていますが、ところが、疲労がまだ取れず、良いコンディションではないまま、個人種目の試合に出てしまいました。記録は今季ワーストであり、良い成績を残すことが出来ませんでした。原因は、今年の試合(大会)、記録会の出場数が僅か 3 回でした。その経験の浅さにより、試合前の調整が上手く出来なかったかもしれません。その原因が一番大きいと私は思っています。

4 × 400m リレーでは、本来、私が補欠であり、決勝で走るレギュラーが温存するため、私は予選だけ走る事になりました。大きなプレッシャーに襲われました。何故なら、決勝までに行けるように走る、次に繋がるように走るという、一番大きな仕事を背負いながら走ることになるのでかなり緊張していました。

結果は、レギュラーを決勝までに連れてあげる事が出来ました。良い仕事をすることが出来たと思いました。個人種目に対する悔いが一番大きかったので 4 年後のデフリンピックにてリベンジすることを決心しました。

月もかかったのは、疑問を感じる。既に落選したと思っていた。たまたま申し込んでいた北海道マラソン(8 月末)を練習モードに切り替えて臨み、事なきを得たと思う。4 年後のアテネでは、余裕を持って発表してもらいたいと思う。

22 分～ 23 分を目標に国際マラソン大会(福岡、びわ湖など)に出て、4 年後につながるよう、経験を積みレベルアップを図りたい。

最後に、裏で支えてくれたスタッフを始め、一緒に練習したランナーの方、応援してくれた方に御礼を申し上げます。有難うございました。

表 1　記録の詳細と目標タイム

Point	Split Time	Lap Time	目標タイム[1]
5km	18:52	18:52	18:00
10km	37:47	18:55	36:00
15km	56:51	19:04	54:00
20km	1:15:45	18:54	1:12:00
Half	1:19:55	-	1:15:57
25km	1:35:02	19:17	1:30:00
30km	1:55:02	20:00	1:48:00
35km	2:14:20	19:18	2:06:00
40km	2:37:53	23:33	2:24:00
Finish	2:47:17	9:24	2:31:54

[1] 後半の失速は考慮しないものとする

選手　　山中　孝一郎

①成績に対する自己評価

競技種目：マラソン(男子)

試合結果：4 位(2 時間 47 分 17 秒)

(完走者数：11 名、出走者数：26 名)

夏マラソンであり、暑さによるタフなレースであるため記録よりも順位が大事。記録面では褒められたものではないが、結果を出せて安堵している。また、マラソンでは日本勢が好結果を出せ、次回に向けてアピールできたと思う。

②反省・まとめなど

当初、10000m にもエントリー可能であったが、台湾の気候を考えてマラソンに集中したいと思い 1 本だけに絞った。

国内で順調に調整し、遅めに(9 月 10 日)現地入りした。マラソンのスタート時点となる台北郊外の宿泊先で過ごし、スタート時間に合わせてジョギングしたため、その時間帯の気温、湿度の感覚を掴めたと思う。また、9 月 12 日に、Taxi を利用して、マラソンチームでコースの下見をし、コースの特徴を掴めた。国際試合は初めてなので、他国のランナーの特徴などを、出場経験者に色々リサーチした。

レースでは、5km18 分前後のペースで行こうと思った。30km で 6 位と把握していたが、33km 手前で暑さの影響か、脚の裏が吊ってしまった。意識も失いかけてきたが、順位をキープしようと思い、必死に逃げ切りを図った。しかし、慎重になりすぎて、記録の面が想定よりもハーフの時点で 4 分、ペース配分も 19 分前後と 1 分ぐらいの遅く消極的なレースとなったのが悔やまれる(表 1)。

③その他(選出時期などについて)

選出決定が 7 月 13 日であったが、当初の発表時期より 3 ヶ

選手　　金子　誠一

嬉しかった日の丸の掲揚と男子マラソンチームの連続入賞

前回メルボルン大会でのマラソンは 5 位入賞という結果こそ残せたものの、不本意な内容の走りだった。次こそ雪辱を期したいと思って迎えた今大会であった。4 年 8 ヶ月のこの間、マラソンで自己ベストを 2 度更新し、走力を上げつつ走りの質を高める経験を積んできた。特にマラソンは結果として表れるタイムだけでなく、気象コンディションやコース状況、また周囲のランナーの走力等といった様々な条件、レース展開の中で対応しうる内容が問われる点で経験の数の要求されるところが大きく、その意味でもこの 4 年の歳月に積んだ努力と経験を活かすことができた。

本来、夏季に実施される競技でないマラソンは、オリンピックでさえ棄権者や力の出せない選手が多く、加えて今回は台湾という初めての亜熱帯地域での開催ということで、トレーニングは何よりも暑さ、そして過去大会にない湿度対策に重点を置いて取り組んだ。事実、当日のレースはスタート時から気温 30 度、湿度 70%をともに超える経験したことのない厳しいコンディションとなり全選手ともタイムは伸びなかったが、元々暑さに自信を持っていたことやこの大会に照準を合わせてきた調整が功を奏し、銅メダル獲得を果たすことができた。

今回、充実した陸上チームの中で男子マラソンも初めて複数選手が選出された。これは現地入りしてからレース当日を迎える迄の練習やコミュニケーション、リラックスしたコンディション維持において、またレース最中にさえ互いに通じ合える点等、非常に好影響をもたらした。その結果が 3、4、5 位の連続入賞であり、日本男子マラソンの実力を世界に示すことができたことを誇りに思う。表彰式で掲揚された日の丸も 3 人の力

で勝ち取ったもの、陸上チームをはじめとする応援のおかげと考えている。

ケニア選手らアフリカ勢との実力の差も痛感させられたが、なお挑戦を続けたいと思う。

選手　　山田　真人

成績に対する自己評価

成績は９月 14 日　男子マラソン５位（２時間 51 分 44 秒）

８年振り（第 19 回ローマ大会以来）デフリンピックに出場した。前回は４位で終わり、悔しさが残っていたので。
２時間 40 分を切りメダル獲得という目標を挙げたが、過酷な高温レースの為、目標より遠く及ばなかった。

６位のフランス選手（世界最高記録保持）と７位の南アフリカ選手（ローマ大会金メダル、メルボルン大会銅メダル）と途中棄権したトルコ選手（昨年の世界選手権（トルコ大会）銀メダル）に勝つことが出来た。

目標タイムやメダル獲得が出来なかったが、今回はレベルの高い選手が多く参加した為、ある程度の評価だと思う。今回のレースの流れと選手層の厚さと目標タイムなどを考えると 60 点かなと思います。

反省のまとめ

３ヶ月間で 1800km 位走り込んだ。

マラソンとして、夏場のトレーニングが非常に難しい。理由は夏場のトレーニングによると、かなり体力消耗しやすいし、疲れがたまりやすい時期である。僕にとっては苦手な時期である。

実はデフリンピック前のアクシデントがあった。強化合宿後の７月 22 日頃、胸膜炎や微熱が１週間位続けていた為、練習で思う通りで走れなかった時期があった。それでも休まずにＪＯＧする程度で走り続けた。

８月に入ってから、少しずつ良くなったが、残された時間は１ヶ月しかなかった。平日 10 ～ 20km、休日 30 ～ 35km 走をこなし、何とかスタミナを付けるようになった。

８年前のローマ大会も暑かったが、多くの選手が途中棄権した経緯があり、今回の台北大会も同じようになるだろうと予想した。

今回の台北大会は早朝６時スタート、しかもレース途中で気温 30 度以上越す暑さで厳しいレースだった。
僕　の作戦は前半で抑え気味で走り、得意の後半にペースアップで走ることだった。現実では甘くなかった。

実際、スタートしてから５km 過ぎ、暑さの中で思うとおり、ついて行けなかった。さらに得意の後半もペースアップも出来ず、タイムもズルズルと悪くなっていく一方。やはり、暑さでかなり体力が消耗され、完走するのが、精一杯だった。僕は暑さに弱い理由を調べたところ、北海道出身であり、高校卒業まで、北海道に住んでいた為、汗腺の関係（暑さに強いか弱いか）で決まるそうです。それだけでなく、メンタル面も甘かった。弱いところがあれば修正（克服）していくべきだと思っています。

最後まで諦めないという気持ちで走り続けたことがすごく良かったと思う。監督をはじめスタッフの皆さん、マラソン選手達をサポートしていただき、心から感謝しております。

本当にありがとうございました。

選手　　嶋田　裕子

今回のデフリンピックへの出場は、２大会連続出場になります。前回「メルボルン大会」は銀メダルを獲得していましたので、今回は金メダルを目標にして頑張ってきました。デフリンピックへ向けての練習は、春頃から始めて、その後順調に練習を積んできましたが、しかし、運が悪いことに、７月末にハムストリングに肉離れを起こしてしまいました。正直言って、あの時は走れる状態ではなかったので、「デフリンピックを回避しようか？」と、かなり悩みました。しかし･･･、やはり４年前から目標にしていた大会ですし、せっかく会社から休み（当初は認めてもらえなかったところを、会社の陸上部の部長さん方のご尽力のお陰で、会社から認めて頂けました）をもらえたので、その事への恩返しの気持ちで、故障と戦い、最後まで諦めずに頑張って、スタートラインに立とうと決心しました。整骨院の先生方のサポートのお陰もあって、肉離れの症状が思ったより早く回復することができた為、８月半ばには走り込みを再開する事ができるようになりました。台湾の気象コンディションは、かなり暑いと聞いていましたので、暑い中での走り込み中心の練習を頑張るしかないと思いました。故障がまだ完治していないため、速いペースで長い距離を走り込む事が出来ず、仕方なく代わりに、42.195ｋｍを完走できるようゆっくりペースでの走り込みを中心に練習を積んできました。その後、ハムストリングの状態は、徐々に回復へと向かい、８月後半より、10 ～ 15ｋｍを速いペースで走れるようになり、デフリンピック当日を向かえて、やっとスタートラインに立つことできたのです。その時の気持ちは、とても嬉しかったですが、その反面、不安もありました。４年前のメルボルン大会は脱水症状になり、35ｋｍ以降はフラフラの状態で、やっとの思いでゴールにたどり着いた経験があったからです。その経験を生かして、今回はしっかり給水を取るように、充分に気を付けて“最後まであきらめない！”という強い気持ちで走りました。その気持ちが強かったおかげで、30℃を超える気温で湿度もかなり高い中でも完走することができたと思っています。

正直言って、メダルは無理だと思って諦めかけていました。悪条件が私を味方にしてくれたかどうかは分かりませんが、とにかく完走を目標に頑張ったことが、結果としてメダル獲得に繋がったのだと思います。素直に嬉しかったですが、反面、本当の力で走れなかったことで、とても悔しい気持ちもあります。今回メダルを獲得出来たのは「運」だったかも知れませんが、「諦めない心」を持って練習をしたのが大きいと思います。もし、ハムストリングを故障した時に諦めていたら、メダルは獲れなかったと思います。周りのサポートがあったお陰でデフリンピック台湾大会を走る事ができました。感謝の気持で一杯です。『ありがとうございました』。今後は、初心に戻って、フルマラソンで３時間を切れるように頑張ります。まずは基礎から体を作り直していきます。そして、いろいろな大会に積極的に参加して、４年後のアテネ大会につながるよう頑張りたいです。それが、私から皆さんへの恩返しと思っております。

選手　　森本　真敏

「台湾デフリンピックの軌跡」
陸上競技　ハンマー投げ　森本真敏
日本代表選手団旗手　陸上競技主将
試合日時：2009 年 9 月 9 日 17:00 から決勝戦
結果：61m08　世界新・大会新　優勝

試技（投目）	1	2	3	4	5	6
記録（m）	58.18	57.97	57.29	57.57	×	61.08

私は日本選手団旗手、陸上競技主将、滋賀県から 32 年ぶりの出場、竜王町からは昨年のトルコ世界選手権に続き金メダルという大きな期待されていた。今までにない気の重さを抱えながら、台湾現地入りをした。そのプレッシャーもあり、1 投目は硬くなりながらも、58 m 14 の大会新記録を投擲。自分にとっては失敗投擲だったがベストな体調だったのか、想像以上にハンマーが軽く飛んでいった。この投擲が優勝を位置づける結果だった。他国の選手は私の記録を超えることはないと試合前の調整練習を見てわかっていた。2 投目からは、自己ベスト（63m25cm）を超えることを目標に切り替えた。2 投目は上手くいかない。右足と左足のバランスがうまく取れなかった。3 投目で回転スピードを上げて持ち直そうとしてみるが、やはり、左足に寄りかかってしまう。迷った。迷っては、目標を超えられないことは選手心理面としてわかっていた。

話は遡るが、台北入りする前、8 月に 2 回ほど恩師である松本智好コーチと調整練習をした時「イメージを変えよう」と言われた。普通は大会 1 ヶ月前になるとイメージは変えることはない。変えるのは無謀である。しかし、自分は自分を乗り越えたい気持ちがあったから迷わず、切り替えることができた。今までは、重心を両足にのせて、サークル地面を蹴っていた。それをやめて、ハンマーの遠心力を利用しながら股関節から上の上半身を両足から重心を外して、両足に乗らないようにした。つまり、重心を外したから両足は自由に調整ができるようになる。それによって、全身の回転力が高まる。4 投目は、それを確認した投擲。その結果、両足のバランスが取れるようになった。「よし、行けるぞ」と思った。結果、記録的にも、3 投目より飛んでいる。5 投目は、タイミングのずれがあったため、納得いかず、自ら前に出てファールを選んだ。恐らく、飛距離は 59m くらい飛んでいただろう。6 投目は、既に金メダルが確定したため、リラックスして、会場に拍手を求めて、最高のモチベーションを持っていくことができた。盛り上げて全世界に自分の投げを「見ろ！」という気持ちいっぱいだった。「いけるぞ、さぁ、自分の 60m は嘘じゃないことを見せよう。驚かせよう。」という心境で静かにサークルに入り、スイングから 1 回転目に入った瞬間、「来た！いけるぞ！」と確信した。タイミング良く、回転速度を高めて投擲した。60m50cm くらいは飛んだと手が離れた瞬間で確信した。全世界のみんな、見たかといわんばかりガッツポーズをした。世界新記録という距離と目測ではっきりしたから、審判団がメジャーで測っている。3 分ほど緊張して待った。国際手話通訳者から「61,08」と見えた瞬間、自分でも驚いた。61 mも飛んだか！正直、ピタッときた投擲ではない。実はもう少しいけた。日本で応援メッセージがびっしり書かれた国旗を持ってウィニングランをした。その後、ドーピング検査をした。2 回目の検査なので、すんなりと、すませることができたが、他の国は対応しきれず、戸惑っている様子だった。昨年のトルコ世界選手権からドーピングに関する準備をしてきた甲斐があったと陸上競技団体として強さを見せ付けたと思う。竹原コーチもドーピングに関して知識もあり、英語も話せるので選手として安心できた。それもしっかり準備してきて良かったと結果も合わせて、主将として責任を果たせたと思う。

その日から周りは変わった。翌日、世界新記録として台湾新聞などにトップ面に自分のことが大きく取り上げられた。街を歩けば、写真・サインを求められた。こういう体験は日本ではできないことだ。この試合の雰囲気や流れがモチベーションを持ち上げられることをデフリンピックから学んだ。

＜今後の課題と反省＞

・最高モチベーションを持って行く心理・メンタルトレーニングをしなければならないこと。今後の自分の目標の変更。投擲技術の向上。
・主将としてのとりまとめ方の改善。スタッフと選手の間の関係、チームのマナーの問題。
・陸上競技用のマッサージルーム・休憩の多目的ルームが必要。トレーナー、スタッフの個人プライバシー問題があったため。
・日本のメデイアの利用とＪＰＣとの関わり方。

選手　　石田　考正

9月7日～9月 13 日にデフリンピックを開催しました。デフリンピックは、オリンピックと同じく 4 年に 1 回行われ、聴覚障害が集まる世界大会です。私が出場する陸上競技、ハンマー投げ決勝は、9日の夕方5時に行われました。

私にとっては、今までに経験ない大きな試合なのでかなり、興奮しました。

落ち着かないという気持ちを持ちながら、サークルに入りました。1投目と2投目はあまり良くないフォームだった為、悪い記録でした。3投目は確実に、ベストエイトへの出場権を得たいと思い、とにかく落ち着いて3投目の投てきをしました。結果は、45m ラインを越え、46m12 という記録を残し、7位だった為ベストエイトへの出場権を獲得しました。ベストエイト進出した為、3投をもらいました。残りの3投、後悔のない投てきにしたいと思い、気持ちを高めました。

かなり興奮した為か、力んでしまい、ネットに触れてしまって記録がもらえなかったです。悪い流れになってしまって、5投目も6投目も悪い記録で終わりました。総合結果、7位でした。

この試合でいろいろな課題があります。

一番情けなく思うのは、ランキング5位から実戦して、7位に落ちてしまったことと周りの人（応援者）の期待に応じれなかったことです。技術の面も、まだまだ未熟で完全なるフォームを出し切れなかったのが悔しいです。

これからどう考えるか、どんな練習をするか、一から考え直さなければならないと思います。

選手　　竹花　康太郎

①成績に対する自己評価

国際大会という大きな大会で試合ができたことに誇りに思える。今大会を通して、負けたこと、実力不足だったことを素直に受け入れることができた。やはり、今の自分の力ではデフリンピックでは勝てないということが痛恨されるほど理解できた。この悔しさをバネにして、２年後のアジア大会(韓国)、３年後の世界ろう選手権(カナダ)、４年後のデフリンピック大会(アテネ)でリベンジしてやろうと強く感じた。今回の経験は「今後も頑張るぞ」とやる気を出させてくれたので、大きな収穫あり。もし、今回で勝って満足してしまったら、今後の陸上に対するモチベーションが下がり、やる気が起こらなかったかもしれない。台北デフリンピック大会にでたからこそ、世界ろう記録保持者やいろいろな人と棒高跳びの技術や相手の経歴、自分の体験などについていろいろ語り合えたので、自分の弱点、改善すべき技術がよくわかった。今大会を経験して強くなったと思えることは、これからはどんな大きな試合でも緊張せずに挑めるようになったかも･･･(自信がついた)

余談ですが、今年のシーズンベストを出せば２位だったという惜しい結果に終わったのですが、大きな舞台で成績を残そうと思えばコンスタントに今のベストを出せるくらいの実力をつける必要があることがわかった。

②反省・まとめなど

足をつりやすいという、持病があるということをよく踏まえたうえでアップの仕方、待ち時間をどうこなすかをもう少し考えるべきだったと思っている。

緊張しすぎたので、もう少しリラックスして楽しく競技をすべきだった。滞在期間の食事にもう少し気配るべきだった。技術点で言うとペネトレーションができてなく、下曲がりでアップライトをピンポイントに合わせなければならなかった。踏み切りも突っ込みも低いので更なる技術の改善が求められる。戦略で言うと、パスの仕方、たとえば勝つためにはどの高さを跳び、どうパスするかをもう少し工夫するべきだった。

結局はもう少し硬く長いポールを使いこなせるようにならないと記録の向上は期待できない。

改善すべき技術

助走→力みのない助走　(駆け上がれるような走り)

踏み切り→右足をもう少しひきつける。ペネトレーションをうまくするためにも踏み切り姿勢を保つ必要がある。

突っ込み→右８：左２な感じで高く押していく

巻き→右に高く深く巻く。

捻り→ターンと同時に捻る。ポールの反発に合わせてタイミングよく。

クリアランス→棒を見ず、バーを見るような感じで。

※今年は踏み切り姿勢を直すことに集中。すぐ巻きつけてしまう癖を直す。

選手　　前島　博之

・競技の面での反省

私は、トラック種目では４×100ｍリレーの補欠として、フィールド種目は走り高跳びの選手として出場しました。自分は、チームの監督から補欠選手に任命された時から、４継メンバーのみんなとメダルを取る気持ちで、愛媛での初めての練習から必死に頑張ってきたと思います。みんなもリレーのために自分の練習メニューを犠牲にするという複雑な気持ちは持っていたと思いますが、よくまとまり練習ができたと思います。だからこそ、記録はちょっと悔いが残るものの団結…絆？は強くなってきたと思います。私は実際にデフリンピックの４継決勝で走ることはなかったのですが、本番のぎりぎりまでアップを共にし、レギュラーメンバーを励まし、サポートする仕事ができて本当にこのメンバーで走れたことに対して誇りを持っています。また走り高跳びの方でも、今季のベストが１ｍ90と低迷していたのですが、デフリンピックに選ばれた以上はと思い、今夏の練習環境を地元に移し、死ぬ気で練習しきた成果がこのデフリンピックで１ｍ93のシーズンベストという結果になったということが自分にとっては大きな自信になりました。

また、台北は日本より蒸し暑いという環境でしたが、日本の梅雨シーズンと同じだと思って何も考えないで過ごせたから、環境問題には時に苦ではなかったと思います。

・競技以外の面での反省

デフリンピックに参加して思ったことは、私たちは監督、コーチ、スタッフの皆さんのおかげで無事に全員入賞できたと思っています。集団行動はもちろん、相部屋の人、友だちとかといっしょになって台北というなれない場所を動き回ることには気を使ったと思いますが、協力して助けあうことが、集団行動の基本なので、それができたっていうことはよかったと思います。

また、食事の面でも、慣れない台湾料理をカバーするためにスタッフさんがわざわざ日本食を作ってくださったこと、選手の要望にこたえてくださったことに対しては本当に感謝しています。スタッフさんの支えがなかったら、選手たちはみんないい記録がでなかったかもしれません。今回のデフリンピックのなかで一番の反省点が、「場をわきまえて行動することの未熟さ」でした。これからは、今までの反省を生かし、今後につなげていくようにしたいと思います。

最後に、デフリンピックの間にたくさんの方からサポートをいただき本当にありがとうございました。

選手　　佐藤　將光

①成績に対する自己評価

男子やり投げ　　59ｍ32　銀メダル

昨年の世界選手権に出場したことが大きいと思う。デフリンピックは、昨年の世界選手権に参加した選手がほぼ出場したので、選手同士で声を掛け合いながら、緊張せずリラックスな大会だった。オリンピックさながらの多くの声援の中、気持よく投げることができた。調子も良かったので自己記録更新を狙ったが、それができず、悔しかった。でも、高校時代からの夢だった「デフリンピックでメダルを」を実現できたので、嬉しかった。

②反省・まとめなど

自分の都合により、一週間遅れて台北に到着したが、会場ではすごく盛り上がっていた。この会場で投げるんだという気持ちから、今までになく鳥肌が立った。その興奮は今でもよく覚えている。実は、前回のメルボルンデフリンピックに落選し、直後に左膝靭帯損傷というアクシデントも重なり引退を考えた。しかし、仲間たちの温かい支えがあって、今回のような素晴らしい舞台に立つことができた。メダルを取れたのは私一人

の力ではない。皆さんの温かい応援がメダルを引き寄せてくれたのだと思う。

重さ 800g、長さ 275cm の槍に、力と技のすべてをかけるのがやり投げ。パワーが凝縮された槍が、手から離れる時の感覚、槍との一体感が魅力だ。やり投げを始めて 10 年ほど経つが、満足のいく投てきができたのは 10 回くらい。その感覚を少しでも多く感じたい、今までにない素晴らしい感覚を感じたいという思いがあるので、今後も続けていきたい。スポーツで頑張るろう者をアピールしていくためにも、今後も一般の大会にもどんどん参加していきたい。そして、そういう私のことを見た後輩たちが、「自分にもできる」と世界を目指し、続いてくれるといいなと思っている。

選手　　板鼻　英二

■結果（十種競技・４×400 mリレーに出場）

十種競技・・・5278 点で７位という結果で、目標にしていた総合得点（5500 点）には届きませんでした。１日目の砲丸投げ・走り高跳びで失敗し、更に、２日目の 110 mハードルで７台目のハードルに足を引っかけてバランスを崩し、最後までハードル間のインターバルを３歩で飛べなくて、気持ちが折れそうになりました。しかし、その後の棒高跳びで自己ベストを出す事ができ、なんとか立ち直ることができました。全体的に流れは悪かったのですが、最後まで最高の競技ができたと思っていますので、悔いはないです。

４×400 mリレー・・・３分 24 秒 21 で５位。自分は第１走者を務めました。十種競技の翌日だったので、満身創痍の状態の自分が一緒に走るメンバーの足を引っ張るのではないかと心配でしたが、みんなの励ましや声援があったお陰で、最高の走りをすることができ、また、他のメンバーも頑張ってくれたので、５位入賞という成績を残すことができました。念願のメダルには届きませんでしたが、５位入賞はこれからの後輩や選手たちに繋げられる結果だと思っています。

■反省

十種競技は、全体的に準備不足だったと思います。デフリンピックまでの一ヶ月の間は、最も苦手とする棒高跳びを中心に練習し、他種目（投てき等）の練習を疎かにしてしまった分、結果としては棒高跳びは 30cm アップしたが、他種目は記録が低迷していました。全体的にバランスよく練習すれば良かったと思います。

また、高得点をとりたい種目で思うように記録が伸びず、110 mハードルで、ハードルに足を引っかけてバランスを崩し、今一つリズムに乗れないところがありましたが、その後、集中的に練習してきた棒高跳びでベストが出て、リズムやテンション、集中力を立て直すことができました。最初（100 m）から最後（1500 m）までの流れを総括しますと、失敗したら集中力が切れるなど、メンタル面・フィジカル面の弱さを露呈してしまった競技内容だったと思いますが、最後まで自分のパフォーマンスを発揮できたので、それは良かったと思います。

デフリンピックのために、26 歳から始めた十種競技、練習時間や練習場所（特に投てきと棒高跳び）、の確保に難航し、体格などの関係で幾多の壁にぶつかってきました。でも、周りの仲間に支えられ、自分の可能性を信じ、ここまでやって来れて、こうして「デフリンピック」という檜舞台で走る事ができたと思っています。温かい応援とご声援をありがとうございました。

選手　　佐藤　優

女子やり投げに出て銅メダルを獲りました。

デフリンピック日本代表に選ばれた時は、嬉しかったけど、自分は世界チャンピオンであり、いろいろなプレッシャーがかかり不安な時もありました。また、今年から社会人になり、学生時代と違って、練習量が減ってしまったことから、「自己ベストを出せるのか？」と心配になったりしました。でも、競技中は世界チャンピオンという存在を忘れて、挑戦者という気持ちをもって、試合に出ました。４、６投目に 45 mぐらいまで槍が飛んだのですが、ファールで記録無しになってしまいました。でも、思っていた記録より、あまり落ちることなく、練習不足にしてはそこそこの記録を出せたことは良かったかなと思います。

デフリンピックでは、本当に色々なことを学ぶなど、４年後のアテネ大会に向けて教訓になることばかりでした。このような経験を活かし、今後の競技活動を頑張っていきたいと思います。

選手　　奥村　渚

陸上競技 女子やり投げ　奥村渚　　５位 39 m 70

３年前から、デフリンピックに出たい、出場したら優勝する目標、それから、去年、出場した第１回世界ろう陸上大会は納得できない結果で、悔しい思いがあり、そのリベンジをしたいという目標を持ち、毎日の練習を積み重ね、試合に挑みました。台湾は、日本より湿度が高くて、暑かったけれども、私にとってはいい条件だったと思います。監督、コーチ、スタッフ、トレーナーさんたちのおかげで、コンディションを整えることができました。日本からの応援、台湾に応援来てくれた人たちのおかげで、力を精一杯出すことができ、ベスト８に残り、今季ベスト、悔いのない結果になりました。目標していたワンツー表彰、メダルを獲得できなかったのが残念な気持ちでしたが、６投目の時、力を分散せず、槍の軌道がよかったです。それに繋がり、帰国後に大体大競技会で、練習の投げの時に良い投げだったが、本番では、力みすぎた事、体が上に向いた事で、良い記録を出せなかったけれども、新しい課題を見つかる事ができました。大きなプレッシャーでも勝つということを学ぶことができ、４年後に向けて、続けようか、考えていますので、選ばれたら、リベンジしてメダルを獲得したいです。大型モニターで私の姿をたくさん映された事が恥ずかしかったけれども、今、思うと、経験できないことを経験できて、かっこいいと思いました。デフリンピックに出て、学ぶことが多く、良い経験になり、いい思い出を作ることが出来ました。みなさんに感謝の気持ちがいっぱいです。ありがとうございます。

バドミントン競技チーム

監督　　石井　幹雄

(1) 今回の試合の結果

団体予選リーグ戦

日本２勝１敗　２位→決勝トーナメント　準々決勝戦敗退

ベスト８→５位

（小堀知史、宮崎大介、甲斐勝巳、勝田　健、石井満里、樋渡美香、井上美緒、別所睦月）

男子シングルス予選リーグ戦

小堀知史　１勝２敗→決勝トーナメント進出ならず

宮崎大介　１勝１敗→決勝トーナメント１回戦敗退

甲斐勝巳　２勝１敗→決勝トーナメント１回戦敗退

勝田　健　棄権（体調不良の為）

女子シングルス予選リーグ戦

石井満里　２勝０敗→決勝トーナメント１回戦敗退

樋渡美香　２勝０敗→決勝トーナメント３回戦敗退
ベスト８

上　美緒　２勝０敗→決勝トーナメント２回戦敗退
ベスト16

別所睦月　２勝０敗→決勝トーナメント３回戦敗退
ベスト８

男子ダブルス決勝トーナメント戦

小堀知史＆宮崎大介　決勝トーナメント１回戦敗退

甲斐勝巳＆勝田　健（体調不良の為）棄権

女子ダブルス決勝トーナメント戦

石井満里＆樋渡美香　決勝トーナメント３回戦敗退
ベスト８

井上美緒＆別所睦月　決勝トーナメント３回戦敗退
ベスト８

混合ダブルス決勝トーナメント戦

勝田　健＆別所睦月　（（体調不良の為）棄権

甲斐勝巳＆樋渡美香　決勝トーナメント１回戦敗退

宮崎大介＆井上美緒　決勝トーナメント３、４位戦→４位

小堀知史＆石井満里　決勝トーナメント３、４位戦→３位

(2) 今回の課題と問題点

第21回夏季デフリンピック台北大会のバドミントン競技を通して、いくつかの課題と問題点を残した。この参加選手の技量等を確認し、参加のメンバーでは前回大会で来た人はレベルがアップしているので以前よりは苦しいかも知れないとか想像していました。そして、前回大会と比べ今回大会の方が強豪レベル、技術が高い状態であったので、メダル獲得は厳しいだろうと思い緊張感もあったようです。

今回金メダル獲得を手にすることが出来なかった、その原因は練習不足にあります。相手とローテーションが旨くいかなかったのとミスが多かったです。それぞれのダブルスの練習が満足に出来なかったことということです。日本ではダブルスというのは長い間一緒に組んで、練習と試合を何度繰り返すのが出来ない状況であります。ペアを組むことが決まったのは今年５月でしたが、選手は家が遠く離れておりて、一緒に練習したのはわずか３回だけでした。

(3) 今後の課題と対策

このデフリンピックのバドミントン競技に参加し、日本選手が世界レベルのどの位置ににあるのか、また、各参加国のレベルや特徴について知ることが出来ました。日本ではビデオなども見て研究もしましたが、やはり実際に見てみないと分かりません。

今後の課題は、各国に対抗できるパワーとテクニックを今以上に付けることや聴覚障害者へのバドミントン競技に関係する情報の提供、また新しい選手の発掘や強化および強化育成スタッフの確保などにあると考えます。

①国際大会の有無に関係なく毎年ナショナルチーム（強化指定選手）を認定し、国際大会出場最優先選手として認定制度を確立する。（男子10人、女子10人程度）※大会成績などで毎年入れ替わる。

②国内強化合宿実施回数の充実および強化スタッフの確保（登録）を図る。

③選手個人の基礎体力の評価、技術的評価、改善項目（筋力、持久力、フットワーク、ラケットワークなど）などを評価表にまとめ、強化していく。選手は地元練習でも改善項目を中心に練習し合宿での評価を受ける。

④新しい選手の発掘に努める。

⑤一般競技大会に積極的に参加する。（年間規定回数を決める）

(4) 監督としての所感

開会式と同様に閉会式も開催国である台湾の人々の想いがこめられたプログラムでした。300卓に及ぶテーブル置かれ、次々に運ばれてくる台湾料理の数々そしてチアリーディングや台湾の芸能がスタジアムのあちこちで繰り広げられました。閉会式の参加者は式台北スタジアムに設置された２つの巨大なモニターに映し出されるデフリンピックの競技シーンを見て台北デフリンピックを振り返ったり、各のテーブルを回ってユニフォームやバッチ等を交換したりして友情を深めて凄く楽しめたことでしょう。夜空に放たれ数発の花火が台北デフリンピックの閉暮を告げ、凄く感動しました。

初めてお会いしたデフリンピック選手団として行き、帰りまで一緒にお世話になりました。宿泊・輸送担当など事務局の方々も毎日笑顔で選手に「明日もガンバッテ！お帰りなさい！お疲れ様です！……・等」の声をかけて頂き感謝の気持ちでいっぱいになりました。医師とトレーナーが２人ずつ帯同していましたが、毎日あちこちに走り回って大変のようでした。また、トレーナーが手話が出来るのにとてもびっくりして、会話も大変楽しくて参考になる内容もありました。今度次回大会の時、医師とトレーナーも４人ずついた方がいいかなと思います。

応援して下さった方々、そして今回の大会を支えて下さった事務局スタッフの方々に厚くお礼を申し上げます。最後になるが、全国の皆さん、ご協力してくださって本当に心から感謝しています。今後、日本ろう者バドミントンチームをご応援、ご協力の程、宜しくお願い申し上げます。

コーチ　　岡崎　勇二

1）選手選考

今回の台北大会参加にあたり、５月にと８月に選手選考と強化合宿を行い、５月の選考会は、男子６人、女子６人が参加し、出場枠男女４人ずつ選考しました。

前回のメルボルン大会メンバーが４人、新メンバーが４人を選考いました。選考にあたっては、個人の技術レベル、チーム内のコミュニケーション、ダブルス、ミックスなどのペアの相性など総合的に考え選考しました。選手は国内より選ばれていることから、一緒に練習やペアになるということがないため、選手もスタッフも少し戸惑いがあったように思います。

８月の合宿は、台北が暑いことから、熊本で実施しました。この合宿は、試合中心に実施し、特にダブルス、ミックスダブルスでの試合経験やパートナーとのコミュニケーションについて練習を行いました。大会まで２回の練習でどこまで、強化できるかとの不安はありましたが、試合相手をしていただいたボランティアに勇気をもらい、充実した練習ができました。

2）コーチの内容、経過、結果

チームは、９月２日、成田集合し、午後７時に台北に向け出発しました。同日、午後９時半過ぎに台北に到着、やはり暑くこれからの大会が過酷になるのではないかと思いました。

翌日３日から５日まで公式練習が予定されており、試合形式で軽めの調整を行い、毎日１時間半ほどで体調を整えました。内容は、基礎打ち、試合形式でダブルス、ミックスダブルスのローテーションを確認することを中心に行いました。技術的な内容も大事ですが、精神的にリラックスしながらの練習を行い、チームも良い雰囲気で試合の準備ができたと思います。

≪　試　合　≫

６日から試合開始。

団体戦が行われ、ＡからＤグループがあり、16 カ国が参加しました。日本チームは、グループＢで、ドイツ、インドネシア、ロシア、日本の４カ国の強豪国のグループに入りました。試合は、４チーム総当たりで、各グループ１位から２位がトーナメントに進むことができます。

初戦は、優勝候補のロシアとの対戦となり、ミックスダブルスで小堀、石井組が勝利したものの、強豪ロシアに１勝４敗で敗れました。初めの試合で選手も硬くなっていたようですが、『落ち着いて』の声をかけながらの試合でしたが、初戦ということもありそのまま流れを変えられず試合を終えました。

翌７日ドイツと対戦し、男子シングルスで宮崎選手、男子ダブルスで小堀、宮崎組ミックスダブルスで小堀、石井組が勝ち３勝２敗でドイツに快勝しました。この勢いで、インドネシアにも快勝し、グループ２位でトーナメント進出を果たすことができました。

決勝トーナメントは、初戦、Ｄグループ１位のリトアニア戦でした。日本チームの目標が、団体戦でのメダル獲得でしたので、大事な試合となり、選手は、リラックスすること。自分からのネットミス、アウトに注意するし、ダブルス、ミックスダブルスは、こちらが２人で対戦相手を１人で試合を進めるようアドバイスをしました。

しかし、ヨーロッパの強豪には、練習量や試合経験の差で、勝利することはできませんでした。全体としては、５位となり前回のメルボルン大会と同じ結果となり、メダルは次期大会に持ち越すこととになりました。

優勝は、メルボルン大会に続き、韓国、２位はロシア、３位はリトアニアという結果となりました。この大会では、残念なことに日本選手団内でインフルエンザにより競技に支障がでたことです。移動や環境の変化で、各競技チームも体調管理が大変だったと思います。バドミントンチームもその影響を受けましたが、気持を切り換えて個人戦に臨みました。

個人戦は、シングルス、ダブルス、ミックスダブルスを並行しながらの対戦となりました。シングルスは、男女とも３人から４人のリーグ予選を行い、男子は、甲斐選手、宮崎選手が２位でトーナメントに進出し、女子は、石井選手、樋渡選手、井上選手、別所選手の全員がトーナメントに進出しました。しかしながら、トーナメント１回戦で、女子の石井選手と井上選手の対戦となり、日本チームとしては避けたい組み合わせとなってしまい、結果、井上選手が石井選手を破り、２回戦へ進出しました。また、予選１位の別所選手と井上選手２回戦での対戦となり、度重なる不運な対戦となりました。別所選手が３回戦まで進んだものの、中国の選手に惜敗という結果となりました。男子は、初戦を突破できませんでしたが、ダブルスやミックスダブルスに全力を注ぐよう気持ちの切り替え望むこととなりました。日本チームは、体力や体格差をカバーできる得意のダブルスやミックスダブルスでメダル獲得を目指すことになりました。男子ダブルスの小堀、宮崎組は、韓国ペアと互角に試合を進め、第１セットを勝ったものの、フルセットに持ち込まれ惜しくも初戦突破とはなりませんでした。女子ダブルスは、第１シードの石井、樋渡組と井上、別所組が出場しました。石井、樋渡組は初戦、不戦勝となり、井上、別所組も１、２回戦を快勝したものの、石井、樋渡組は中国の重いスマッシュやクロスのリターンに対応できず、惜しくも敗れ、井上、別所組も長身ペアのドイツに惜敗という結果となりました。

個人戦は、１日にシングルスやダブルスなどを行うため、プレースタイルなどの頭の切り替えも行う必要があり、選手は苦労したと思います。ミックスダブルスの参加は、64 ペアと最も多い参加選手となり、どのペアも女性が前方、男性が後方のトップ・アンド・バックの形で、男性のパワーと女性のコンビネーションが重要になります。井上、宮崎組は、初戦は不戦戦となり、香港、中国、インドに勝ち、準々決勝に進みメダル圏内となり、石井、小堀組もリトアニア、韓国、ドイツに勝ち、準々決勝に進みました。日本チームとしては、初の日本同士の決勝戦を目指し、石井、小堀組は韓国と対戦し、第１セットを先行したものの、フルセットの末、２対１で惜敗、井上、宮崎組も宿敵ロシアに２対０で敗れ、日本ペアは、３位決定戦で対決することになりました。どちらのペアにも、全力で試合してもらうしかありません。結果は、21 対 16、21 対 16 で石井、小堀組が３位という結果になりました。

3）まとめ

日本チームとしては、前回のメルボルン大会を上回るメダル獲得を目標にしていましたが達成することができませんでした。世界のレベルは、パワー、テクニック、メンタル面が想像以上に高かったこと。選手強化についても、集中的に実施する国もありました。日本チームは選手選考、強化について計画的なビジョンを作ることが必要だと思います。

【今後の課題】

①ナショナルチーム（強化指定選手）の認定
（選手の技術的評価、改善項目）などの選手評価を決める。

②定期的な強化合宿の実施（毎年実施）

③スタッフの確保（試合ボランティア、トレーナー、コーチングスタッフ）

④デフリンピック選手選考基準
（職場環境、合宿参加の有無等）
⑤大会参加の報告（一般大会の積極的な出場と成績の報告）

今後の日本バドミントンチームに期待したいと思います。
そして、日本選手団の方々お疲れでした。

選手　　小堀　知史

台湾の台北市で第21回デフリンピックが行われ、私はバドミントン競技に参加し、今回で４回目の出場となりました。４回も選ばれて光栄で感謝しています。

アスリート経験は長いのですが、他国にも私より年上の方がおられ、素晴らしい技術のプレーヤーで大変刺激を受けました。又、開閉会式も今迄にない世界の祭典オリンピック並みの式典で感動しました。

今回のデフリンピックは事前に強化合宿で膝を痛めてしまい、不安材料を持ったままサポーター装着して試合に臨みました。結果は、団体戦→５位、男子シングルス→予選敗退、男子ダブルス→１回戦敗退、最後に、混合ダブルスはベスト４まで進み、韓国と対戦し、僅少で惜しくもファイナル進出ならず、３位決定戦へ。しかも１番やりたくない同国衝突で複雑な心境でしたが、最後は経験の差で銅メダルを獲得する事が出来、嬉しく思います。ただ、残念な事にチームの１人がインフルエンザにかかり、ホテルの部屋すら出れない状態となり、大会期間中、共に行動できなかった事を残念に思います。

今回のデフリンピックを通して、いくつかの課題と問題点を残しました。

まず、膝の故障により練習不足であった事。ダブルス、混合ダブルスパートナーに心配をかけてしまい、本来の力を出せず、悔やまれました。又、台北は暑いというイメージで暑さ対策を練ってきたが、体育館内は空調が入ってとても涼しく、汗で体が冷え硬くなり、ベストな状態ではなく、空調の風力によりシャトルが変化し悪戦苦闘しました。

４年後のデフリンピックでは、監督、選手選出を早期決定し厳しい練習を積んでおく事。体育館内の空調関係も慣れておく事（暑さ対策も）。合同合宿を増やし監督と選手との間に信頼感を持たせる事。他国では金、銀、銅メダリストにマイホームが与えられる、報奨金がもらえる事。３ヶ月間の合同合宿を行っていると聞いた。そういった環境を日本でも出来る様にしてもらいたいと思います。

最後になりましたが、家族、応援して下さった方々、今大会を支えて下さった事務局スタッフの方々、選手の体調に気遣ってくれた渡辺トレーナー、世話をしてくれた田原さん、本当にお世話になりました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。本当に有難うございました。

選手　　宮﨑　大介

私が４年前のメルボルンデフリンピックの日本代表最終選考で落選して以来、自分の存在価値を全て否定させられるような悔しさそしてバドミントンに対する情熱も失われるような日々の中で、やっと掴んだ代表でした。それが長い道のりでもあったように思えます。

今までに参加した国際大会にはない雰囲気を味わいました。日本ではデフリンピックの知名度がかなり低く、今回の大会に賭ける選手の強い思いを感じる独特な雰囲気がありました。

私は、アジア・世界選手権に参加してきたので、今回は４年前の悔しさを晴らす絶好の場所でもありました。

しかし、メンバーと監督・コーチの間の相違があり、大会期間中はずっとモチベーションも上がらず、不完全燃焼でした。

メダル獲得することが出来なくて残念でしたが、これまで一緒にプレーして来た選手・スタッフ・トレーナー、そして関わってきてくれた方のおかげでデフリンピックに参加する事が出来、大変感謝しています。　ありがとうございました。

選手　　甲斐　勝己

９月６日（日）～９月14日（月）の９日間で、最初は団体戦で３日間戦い、残りは個人戦（男子・女子シングルス、男子・女子ダブルス、混合ダブルス）で毎日熱い戦いが続き厳しい内容でしたが、日の丸を背負って戦い続けました。
その結果、団体戦は予選リーグ２位になり決勝トーナメントへ進出しましたが、宿敵であるリトアニアに敗れ総合５位でした。

男子シングルスは予選リーグ２位になり、初めて決勝トーナメントへ進出しましたが１回戦でドイツ選手に敗れベスト32でした。

男子ダブルスは、残念ながら不戦敗になりました。

混合ダブルスは、１回戦で敗退しましたが内容は非常に良い試合が出来て良かったのですが、やっぱり負けて悔しかったです。

唯一のメダルを獲得したのは混合ダブルス３位で、小堀選手と石井選手が表彰台に立ちました。

その姿を見て、胸が熱くなり、日本として誇りを持つ事が出来て良かったと思います。

一人一人がデフリンピックの為にハードなスケジュールをこなして頑張ってきました。

いろんなアドバイスをしたり選手同士でのコミュニケーションを取りながら戦ったり、応援したり、盛り上がったりして、一日一日を大切にしながら過ごした事でキャプテンとしてすごくいい経験になり、感謝でいっぱいです。

今回が２回目の出場で４年に１回だけの貴重な大会なので、僕にとって特別な大会でした。

日本選手団の皆さん、お疲れ様でした。

また、世界大会や４年後のデフリンピックの活躍を期待し、自分も前向きに頑張って行きたいと思います。

選手　　勝田　健

《結果》
団体戦　５位
個人戦　全種目棄権

《自己評価》
試合１日目の団体戦のインドネシア戦で私は男子シングルスに出て、０－２で黒星でしたが日本チームとしては３－２で勝利しました。

私は２度にわたる国際大会に出場した経験がありますが、デ

フリンピックのような大規模の大会は初めてで、緊張のあまり自分のイメージ通りに試合をすることができませんでした。本当に悔しい思いでいっぱいでした。

私が出た試合はそれだけで、その後は仲間の応援をしました。

そして試合３日目（９月８日）の午後、37.6 度の発熱、頭痛がしたので、日本選手団の医師、田口さんに診断してもらいました。その時は熱中症の診断で解熱鎮痛剤をもらいましたが、インフルエンザの可能性もあったので医師の指示により、個室に隔離されました。翌日、台北の病院に受診し、検査結果はインフルエンザ感染症と診断されました。その日から 14 日の朝まで個室に隔離され、試合も個人戦は全試合棄権となりました。

《反省》

試合３日目にインフルエンザにかかった事でスタッフの田原さんをはじめ、医師の田口さん、看護師の大島さん、高田さん、日本選手団の皆様にご迷惑をおかけしました。また、バドミントンチームの選手達にも心配させた事で試合に支障を与えたかもしれません。そして何より日本にいる応援してくれた方々には本当に心配かけたと思います。

インフルエンザ予防はもっと努力できる余地があったと思います。反省しています。

これまで必死に練習してきたのに当日、体調管理不足で発揮できなかった悔しさ、虚しさを忘れる事なく、同じような失敗を繰り返さないようにしていきたいと思います。

また、自分は選手の中で１番若いということもありますので先輩たちを見習い、このまたとない経験を活かして、さらに若い世代を引っ張っていけたらいいなと思っています。

選手　　石井　満里

私にとってデフリンピックは最高のステージです。小さい時からそのステージに憧れて頑張ってきました。３度目の出場が決まった時、「経験を生かして」ではなく、「自分の可能性に挑戦する」という気持ちで挑みたいと考えました。

混合ダブルスで銅メダルを獲得しましたが、今でも信じられない気持ちでいます。なぜならば、一番苦手な種目であり、体の大きい外国男性選手と戦うので攻撃してくる羽を止める、拾うだけで精一杯でした。また、日本選手にはないプレースタイルの方々ばっかりで自分らしいプレーをなかなかさせてもらえませんでした。しかし、デフリンピックという憧れのステージに立つために頑張って来た時間を無駄にしたくない、コートに立ったら自分に負けないで戦おうと日本を発つ前から決めていたので、その結果銅メダル獲得につながったと思います。特に今まで日本選手が１度も勝てなかったドイツの強豪ペアと準々決勝で当たったとき、後がないフルセット、１１～１６の時にパートナーの小堀さんの精神的な支えと技術的なフォローのお陰で逆転勝ちすることができました。こうして、競り勝つことができたことで生まれて初めて国際大会でやり遂げた達成感を味わうことができました。

４種目の中、結果的にみれば銅メダル一つだけになりましたが、私なりに全力を尽くしてプレーした結果なので、満足しています。なので、今まで獲得してきたメダルの中でも、一番輝いて見えてとても幸せです。応援してくださったみなさん、ありがとうございました。

選手　　樋渡　美香

団体戦優勝、ダブルス二連覇という目標を達成することが出来ず、自分のバドミントン人生のなかで、一番悔いの残った大会となってしまいました。今回のメンバーは今までで一番強いメンバーであったが、前回と同じ結果になり、また、女子ダブルスはこれからという時にあっさり負けてしまい、メダル無しの帰国は応援してくれた皆さんの期待に応えられなく自分に負けたという意味であった反面、もっと成長させるための結果だったのかもしれないと前向きにこれからはその悔しさを胸にまた頑張っていきたいと思います。

他国と自国の違いは、やはりチームワークの良さだと痛感させられました。

今回のデフリンピックは、自分を成長させてくれ、また勝つために大切なことを改めて見つめなおさせてくれた自分にとっていい勉強になりました。

最後に応援してくださった皆さん、応援ありがとうございました。また期待に応えられなくすみませんでした。

選手　　井上　美緒

初めて参加したデフリンピックでした。４年前は「デフリンピック」という存在すら知らなかった私が、この舞台に立てた事は運命でもあり、また長い道のりでもあったように思います。

そして、今まで参加した国際大会にはなかった違う空気をとても感じました。オリンピックと同様に、他の競技の選手も一緒に参加する大規模な大会であるからだと思います。「デフリンピック」というものを日本ではほとんど知られていないため大きく取り上げられませんが、世界では大きく取り上げられるようで選手達もこのデフリンピックに賭ける思いが何倍も強く、緊迫した雰囲気がありました。

まず団体戦ですが、４つの予選ブロックがあり日本チームは、インドネシア、ドイツ、そして世界選手権で１位のロシアと同じブロックでした。予選から気の抜けない試合が始まり、インドネシア戦では３－２で辛勝し、ロシア戦には１－４で惨敗という出だしになりました。インドネシアに苦戦した時点でチームの団結力・集中力は切れていたように思います。決勝トーナメントに進めるのは２位までなので、ドイツには何が何でも勝たなければならない後の無い試合になり、メンバーで気持ちを入れなおしてドイツ戦に臨み、４－１と快勝した時は胸を撫で下ろしました。しかし、決勝トーナメントではリトアニアに１－４で敗戦し、ドイツ戦の気迫がこもった雰囲気が全く感じられなくあっさり負けてしまいました。世界選手権の時と比べ、勝って勢いにのるわけでもなく個々の不満や気持ちの相違でチームが最後までバラバラだったのが敗戦の原因ではないかと思います。

続いて個人戦のシングルスは予選リーグを２位で突破したが２回戦目でダブルスのパートナーである別所さんにストレート負けしました。予選リーグの１試合目に中国と対戦した時、自分のミスがとても多く相手を楽に勝たせてしまったのが痛恨であります。

個人ダブルスは、アジア・世界選手権とペアを組んできた樋渡さんではなく、今回はペアを変えて別所さんと組んで参加しました。彼女との練習は２回しか練習が出来ず、コンビネーションに課題と不安を残したまま試合に臨みました。相談し合い

ながら順調に勝ち進み、３回戦目のドイツ戦は世界選手権のダブルスで苦戦したペアとの対戦になりました。１度経験しているからこそ負けられない試合でもありました。１セット目は取られ、２セット目は１桁に抑えたので「この調子！」と意気込んではいたが接戦の末、最後はコンビネーションが崩れての敗戦となり波に乗っている状態を維持することの難しさを感じつつ、非常に後味の悪い試合で悔しい気持ちが残りました。一方のペアも、デフリンピックでの２連覇を賭けていたが中国にストレート負けをし、どの競技にも言えることだが「試合はいつ何が起きるか分からない。魔物が潜んでいる。」という事はこういうことなのかとも思いました。また、今後の日本代表のあり方として、個々の技術問題よりもダブルスはコンビネーション良し悪しで試合の流れが変わるので、もっと早く選手選考をしてもらいパートナーとの練習時間を増やしていただきたいと思いました。

混合ダブルスは、49 組という出場者が多かった種目であり３年間ずっとペアを組んできた宮﨑さんと「今度こそベスト４に入ってメダル取るぞ」と唯一目標が明確でした。それは、すぐに確信へと変わりました。ランキング１位のペアが棄権した為にこれはチャンス！と思いました。ベスト８の準々決勝は、韓国との対戦でありこれに勝てばベスト４という気持ちからいつも以上に集中していたように思います。しかし、勢い余ってコートサイドに出したり、ハーフを狙いすぎてアウトにしてしまったりとミスが多く、試合している自分でもヒヤヒヤしていたので最後にシャトルが相手のコートに落ちた瞬間はホッとした気分と、目標だったベスト４へ勝ち上がることが出来た喜びでとても嬉しかったです。

準決勝はロシアのエースペアとの対戦で、韓国戦の時の様に自分からミスをしないように地道に点数をかせいで行こうと思っていたが、２人で連続ミスしたりパートナーの動きが分からなくなったり、自分の動き迷いが出てきてしまい最後は点差を離されて負けてしまいました。前へ入ることに躊躇したりして攻めのパターンが出来ていなかったと思います。３位決定戦は日本人同士という対戦というのもありお互い意地の張り合いだったと感じます。正直なところ対戦したことのある相手だからこそやりにくく、ハーフに落としてあげさせて攻撃するいつもの勝ちプレーが出来ませんでした。ここまで勝ち上がってきたからこそメダルが欲しかったので不完全燃焼のまま全てが終わったことに悔しい気持ちでいっぱいになりました。混合ダブルスは配球が速いので相手の攻撃パターンを崩しつつ、自分から前に入るなど女の人がゲームメイク出来るようにしていかないと勝つのは難しいと感じました。

今回のデフリンピックは、私が 16 年間バドミントンを続けてきた人生での中で一番悔いの残った大会でした。メンバーと監督・コーチの間で相違があり、毎日がギスギスしていた事でモチベーションも上がらず、今まで悔しい思いは何度も味わっているけれど言葉では言い尽くせないくらいやりきった気がしない後味の悪い結果になったと残念に思います。

選手　　別所　睦月

今回初めてのデフリンピック出場で、期待と不安の中ワクワクドキドキしながらの参加となりました。夜の開会式での花火の凄さに驚き、素晴らしい幕開けとなりました。しかし残念なことにバドミントン代表の選手もインフルエンザにかかり出場できるのか心配な事態となりました。最悪な事態は避けることができ他の選手に感染することもなく無事に出場することができました。本人はとても辛かったと思います。一日一日回復していき本当に安心しました。

初出場での試合についての反省と感想は、まず体育館に慣れることがなかなか出来ず、空調でシャトルを上手くコントロールできなかったこと。普段ならミスをすることのないところがミスにつながり苦しい場面が多かったです。団体ダブルスシングルスとベスト８に入ることはできたのですがあと一つ勝ち上がることができず悔いの残る大会となりました。必ずメダルを取ると心に決め出場したのですごく残念です。特にシングルに関してはフルセット戦いあと少しのところでミスを連発してしまい敗退となりました。スタミナもなくミスにつながったのかもしれません。ベスト４に入った外国人選手は身体も大きくスタミナもあり攻撃力に力の差を感じました。

今回の負けを力に変え今一度気持ちを切り替えて上を目指したいと思っています。

そして私達選手を支えていただいた監督コーチスタッフの皆様本当にありがとうございました。初出場のデフリンピック素敵な思い出を作ることができました。日本でももっともっとデフリンピックを知っていただきメジャーな大会になってほしいと願っています。応援していただいた多くの方々に感謝の気持ちで一杯です。本当にありがとうございました。

バスケットボール競技男子チーム

監督　　坂本　知加良

１．試合結果について

A アメリカ、イスラエル、中国、トルコ
B リトアニア、台湾、香港
C スロベニア、ウクライナ、スペイン、ロシア
D ギリシャ、ベネズエラ、ドイツ、日本

４グループから２チームが決勝リーグ（１～８位）へ進み、２チームか下位リーグ（９～ 15 位）に進む事となる。
全試合で６試合
１．日本ードイツ　55 対 61
２．日本ーベネズエラ　104 対 113
３．日本－ギリシャ　55 対 97
下位リーグ
４．日本ー香港　107 対 40
５．日本ースロベニア　104 対 80
６．日本ードイツ　51 対 68
結果　２勝４敗

２．全体の試合を通しての私見

①日本と世界の差が確実に縮まっている。

明らかにわかっていることは体格差である。その体格差を埋めるための戦略（フォーメーション）、スピードやパス回しなどでディフェンスを崩して攻撃においては通用した。しかし、課題であるリバウンドがやはり取れなかった。また、相手のエースとなる長身でスキルの高い選手に対して、チームとして効果的なディフェンスができなかった。ゾーンディフェンスやプレスディフェンスに対する課題も次に生かしたい。

チーム全体におけるリーダーシップをとれる選手が存在しな

かった。そのことによって、コート上あるいはベンチで状況を改善するためのコミュニケーションが不足した。アジア人のメンタル面の弱さが見えたので改善していく必要がある。

②他国との選手同士のコミュニケーションと監督同士のコミュニケーション

他国との選手同士のコミュニケーションは国際手話である。もちろん、口話は通用しない。日本人は、もっと積極的にコミュニケーションを図る必要があると感じた。しかし、他国の監督たちはどうだろうか。アメリカ以外健聴者監督であることが残念であった。健聴者が監督であることが問題ではない。健聴者でもコーダなど手話を使った充分なコミュニケーションが選手とできれば問題ない。その意味ではアメリカは全てが聾者で構成されたチームであり、名実共に真のチャンピオンであると感じた。

我々日本は、ゲーム内容もさることながら、デフリンピックというものの存在自体の意味を考えたチーム作りをして行かなければいつまでもアメリカの背中ばかり追い続けなければならないことになるだろう。

3．デフリンピックと　DEAF JAPAN について

４年間指導して、金銭面の問題、仕事との両立、様々なろう者と理解し合うことの難しさ、選手同士のコミュニケーションの難しさを感じた。そのため、指導者は手話がでることはもちろん、ろう文化に対する自身の哲学をもって指導を行わなければならない。それが DEAF JAPAN の哲学となる。

私は、育った環境、聴力の良し悪しに関係なく日本代表のバスケットボールに関わるすべての人が手話ができて、ろう文化理解があることを強く求める。ここは DEAF JAPAN である。手話はろう者のアイデンティティである。ともすると、手話ができなくてもバスケットボールがただうまい選手の集団になってしまうことを危惧する。それでは本来の DEAF JAPAN の本質を失う事になりかねない。しかし、現実的には健聴者の方がバスケットボールの歴史においても絶対数においても、技術においても上である事は事実である。そのような方々の指導や協力を仰ぎながら、コアとなる DEAF JAPAN の文化をしっかり次世代に伝え、繋げていっていただきたい。

4．次回のアテネデフリンピックに向けて

４年という長い間、本当に大変な事が多く、私自身自分の人生のほとんどを捧げてきた。しかし、今回の台北デフリンピックはそれを全て帳消しにするだけの価値のある大会であったと感じている。私自身今回わかった新たな課題を克服して、新たなチーム作りに向けて再び動き始めている。

まず、２年後のパレルモ世界選手権、アジア大会で勝つ事ができなければ、次回のデフリンピック参加は難しいであろう。オーストラリアもアジアとして参加する。来年度から韓国の参戦も決定している。アジアの枠が２つになるか３つになるかもＤＩＢＦで検討中である。

いずれにしろ、日本、オーストラリア、中国、台湾、香港、韓国など、まずアジアで勝ち抜けるしっかりとした実力をつけることが次の目標である。

5．応援してくださったみなさまへ

みなさまの多くの支えや応援の中で、日本代表は戦う事ができたことを心より感謝申し上げます。台北まで足を運んでいただき、その応援のおかげで、私たちは最後の１秒まであきらめずに全力でプレーをすることができました。デフジャパンはこれからも続いていきます。どうぞ、今後とも応援を宜しくお願いします。

最後に全日本ろうあ連盟の皆様、現地ボランティアの皆様、本当にありがとうございました。男子バスケットチームを代表し心より感謝申し上げます。

Ａコーチ　　谷口　裕教

成績は残念な結果となりましたが、日本代表としては８年前のローマ 2001 デフリンピックより強くなっていることは間違いないと思っています。今回の敗因はチームが一つになっていなかったことと、プレッシャーで精神的に安定した選手がいなかったことです。それは選手の責任ではなく、コーチとしての力量が足りなかったからだと思います。これまでの合宿の成果が活かされていないことは本当に申し訳なく思います。しかし、初めてコーチに就任し、色々、学ばせて頂くことが出来ました。選手も世界レベルの経験が出来たと思うので、そのことを忘れないで、日々の練習を頑張って欲しいです。そして四年後のアテネ 2011 デフリンピックで勝利することを期待しています。自分もコーチとして勉強し直します。

マネージャー　　青井　佳奈子

まず、世界大会では、２年前の中国（広州）世界デフバスケットボール選手権大会で初めてマネージャーを経験させていただきましたが、今回このデフリンピックという「４年に１回の聴覚障害者のオリンピック」へもスタッフとして参加させていただいたことに感謝を申し上げたいと思います。

広州のときの世界大会とはまた違った形で、台北デフリンピックではこんなにも素晴らしい大会なのかと、終わってからは感謝の気持ちとこれまでにない感動を得ることができました。そして、自分自身、マネージャーとして少しは成長できたのではないかなと実感しました。

国内合宿では、仕事とマネージャーの両立というものが非常に大変でした。

当時はスタッフメンバーが監督と私の２名ということもあり、仕事の量の多さについていけずに辛い思いをしたことも多々ありましたが、選手のためにも顔には出さずになんとか周囲の方々のお力を借りて、この４年間を乗り越えていけたことに感謝です。

一時期、事務作業にばかり目がいってしまい、選手のメンタル面まで考えられずにいたことと、私自身が選手とのコミュニケーションが十分できなかったことの２点が今回のデフリンピックを通しての最大の反省点でした。

男子バスケットボール競技では 16 チーム内の 12 位という結果になり、全ての試合の内容においては非常に残念な結果という形ですが、私自身嬉しく思ったことがひとつあります。それは「ジャパンは世界に確実に近づいていっている」ということです。ギリシャ戦＆香港戦を除き、他の試合は全て「勝ってもおかしくない試合」でした。選手を間近で見ていて私も一緒に戦っているので、惜しくも敗れてしまったという結果の試合が多かったことには悔しさと涙でいっぱいでした。ここぞというときに決められなかったこと、メンタル面で弱さが目立ってしまったところがあったかもしれませんが、選手の目には「勝ちたい！」という気持ちが常に表れていて最後まで戦っていま

した。そういう面では「私も一緒に戦わせてくれて有難う」という気持ちでいっぱいです。至らない部分が多くてご迷惑をおかけした部分が多々ありましたが、マネージャーとしてここまでやってこれて本当に勉強になることの多い４年間でした。このデフリンピックのために４年間支えてくださった選手・チームスタッフ、そして応援してくださった全ての方々に深く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

スタッフ　　山﨑　敬祐

≪感想文≫

今までの人生の中で、一番刺激になった 11 日間でした。

私は、毎年都道府県にて持ち回りで開催されている「ミミリーグ」という聾話者と健聴者が一緒のチームになって争うバスケットの大会に参加しています。これはバスケット（スポーツ）を通じて、聾話者と健聴者の交流、お互いの視野を広げること、そして何より共に同じ目標に向けて、汗を流すことがこの大会の醍醐味になります。

デフリンピックという場所は、まさにこのミミリーグの延長線上にある最大の目標だと確信しました。

私は聾の世界を全て理解することは出来ないかもしれませんが、人として、バスケット選手として、共に生きていくことは出来ます。人間関係は、お互いを尊重し、今何をするべきか、とことん話し合わないと、お互いの距離感は近づくことは出来ません。世界の選手団に会い、ノーボーダーを実感し、自分を客観的に見れたことは、これからの自分の人生に大きな影響になりました。

現在、選手のレベルも向上している背景は、ミミリーグの様な地道な大会運営やクラブチームへの参加、合宿にてプロチームによるクリニックの開催などがあります。聾話者も健聴者も引き込んで、日本人として皆で盛り上げていくことで、世界との差は確実に縮まって行くと確信しています。

≪試合内容≫

■強み＝技術、走力、体力

■弱み＝身長差、体格差、メンタル面

≪試合総括≫

「まだやれる」選手･監督も同じ気持ちです。仕方がない「身長差・体格差」をカバーするには、シュート力を高め、最後の最後まで頑張れるメンタルのタフさ、チームの結束が世界１位になることが絶対条件です。誰一人、今回の結果に満足もしていないですし、「もっとできた、もっと結果を残せた」と不甲斐ない気持ちを持っています。技術面は日本選手が勝っていますので、弱みを強みに変えられるようこれからの練習に励んでもらいたいです。日本各地にいる代表選手が一緒に練習できる環境、選手の経済面の負担、仕事の不安定さ、社会におけるデフバスケ・聾話者に対しての認知度の低さ、若い選手の育成後の就職状況によって代表継続の可能性、様々なことを抱えながら「世界大会、デフリンピック」その場所に行くために、これからも自分に出来ることをしていきたいと思います。

スタッフ　　会田　孝行

今回光栄にもスタッフとしてデフリンピックに参加させていただくという人生でもめったにない貴重な経験をさせていただいた。これも全日本ろうあ連盟、日本デフバスケットボール協会や、職場、家族など大勢の皆様方の支えがあってこそ経験できたこと。それゆえにこのような経験をさせていただいたことに対して、周囲の方々には感謝の気持ちでいっぱいである。

私は日本デフバスケットボール協会の理事として、男女問わずバスケットボール部門の全体を統括する業務を担当させていただいた。具体的な内容としてスケジュール管理、スタッフ及び選手の状況確認を行った。その中で感じたことをまとめたい。

◎情報の獲得、共有化の重要性

国際大会は練習予定、移動時間などのスケジュールは現地に行ってみないとわからない部分が多い。今回、諸事情により予定されていた練習がなくなるという事が２回あった。選手としては試合に向けてコンディションを整えるために現地での練習は不可欠。海外に行く前に調整できたことはきちんと調整すべきだったと思うし、現地で予定変更となった場合は、先方から言われたまま受け入れるのではなく、団体としていかに有利に調整を進めていくかが非常に大事であると考え、今回のデフリンピックではそのように心がけていた。

それでも会議の場所や練習の場所を間違えて連れて行かれることがあり、きちんとした情報を獲得するとともに、獲得した情報をスタッフ全員で共有化できるような体制が重要であると思った。

◎スタッフの充実化

今までの国際大会ではスタッフは男女ともにヘッドコーチとアシスタントコーチ、マネージャーだけだった。今回初めてトレーナーを帯同したが、選手のケアに関して非常に重要な役割を果たしていただいた。また、男子の方でスカウティングを担当するスタッフも帯同し、他国の情報を収集し、コーチ陣に伝えることで戦略に生かすことにつながった。　このように今までにないスタッフを用意することで、スタッフ、選手ともに気持ちの余裕につながり、試合に専念しやすくなった。

今後、デフリンピックや世界大会などの国際大会でメダルを獲得するためにスタッフを充実させて、試合に臨むことが必要であるし、スタッフの数が増える分情報の共有をしっかりと行い、ぶれない組織を作り上げたい。

◎国際手話、ＡＳＬの獲得

ＴＤ会議、他にバスケットボール協会の国際会議に参加したが、どちらも国際手話で進められた。通訳を用意して会議に出席したが、自分で直接意見を述べることができなかった。ＴＤ会議で既に試合が始まっていると考えている。そこにどれだけ情報を獲得し、意見を述べることができるかで、試合に臨む心構え、有利さに影響を及ぼす。今回、自分にはその部分で全く貢献できなかった。今後国際大会に参加するためには国際手話やＡＳＬをきちんとマスターしたいと思う。また、自分だけではなく、協会としてそのような人材を育成していくことの重要性を痛感した。

今回女子は過去最高の６位、男子は12位の成績であったが、今後の取り組み方次第でもっと上の結果を残すことができるだろうし、その可能性を感じたデフリンピックであった。今回の経験をいかして、次につなげていきたいと考えている。

選手　　丹沢　佑輔

９月のデフリンピックで初めて世界のバスケを味わった。

まず印象に残ったのは海外デフの選手はみんなでかい。

日本代表の中で一番大きい辻さんが普通に見えた。最初の試合はドイツ。ドイツはスピードはそんなになかったが高さ。日本も負けじとスピードで対抗したが世界の壁は厚く何よりパワーが違った。惜しくも６点差で負けてしまったが、日本も前回の世界大会より一層強くなってたとコーチが言ったのをよく覚えてる。その時試合前の調整で左膝を大怪我してしまったがトレーナーのテーピングのおかげでいつもと変わらないプレーができた。シックスマンとして試合の流れを変えたのはよかった。

次はベネズエラ戦。前の試合でいい結果を出したからたくさん試合にでれた。ギリシャ、スロベニアは内容が最悪だった。香港ではファールトラブルで試合にあまり出れなかったことが悔しかった。２回目のドイツはもうズタボロだった。集中力が切れて 20 点差で負けてしまった。でも世界にいっていい経験になりました。

選手　　西　正剛

僕にとってデフリンピックは出会いもあり感謝もあります。去年の初めの頃までデフリンピックを全く知りませんでした。自分の年齢を考えて現在通っているクラブを辞めようか考えていた時に、ある人に出会ってデフリンピックの事を初めて知りました。参加を理解してくれた会社に感謝しています。デフリンピック（世界大会など）は初めての大会なのでどんな世界レベルなのかこの目で見たかった。体格とパワーと高さに苦しんだが、選手たちは最後までよく戦ったと思います。また日本代表はしっかり練習を重ねていけばきっと上位に行けると僕は信じてます。今後はもっと手話を覚えてデフバスケに関わりたいと思うし、辞めようか迷っていた強いクラブで現役も続けたいと思いました。出会いのおかげです。
ほんとうにありがとうございました。

選手　　西川　恵太

まずはじめに、この大会に参加するにあたって色々な形でご支援、サポートをして下さった多くの皆さま一人ひとりに深く感謝の意を表したいです。そして共に戦った選手の皆、スタッフ、そして坂本監督にも感謝の気持ちでいっぱいです。

前回のデフリンピックは陸上競技として出場し、今回はバスケットボールとして２度目の出場となりましたが、競技も異なりますし、前回以上に思い入れをもって４年間過ごしてきましたので、初出場のような気分でありながらも大会にかける思いは強かったです。

今回のデフリンピックは、市が全面的に開催に協力したこともあり、長期かつ綿密な計画と準備によって台湾におけるデフリンピックの認知度を著しく向上させ、前回とは比べ物にならないくらいの盛り上がりの中、大会が開会されました。また台湾においては親日家が非常に多く、日本戦のある会場には毎回多くの観客に囲まれ、ホームのような雰囲気の中で試合に臨むことが出来て、選手としてこの上ない幸せを感じました。

勝敗や順位だけを見れば、決して褒められた結果ではないと強く自覚すると共に反省しております。ただ、試合内容については前回のデフリンピック、そして中国・広州にて開催された世界選手権以上に良かったものだと自負しております。これまでヨーロッパ諸国をはじめ強豪国との試合は大差で負けることが多かったのですが、今大会においてはドイツ戦、そして優勝したアメリカを破ったベネズエラ戦、プロ選手が登録されているスロベニア戦においても最後の最後まで相手を本気にさせたことに、初めて世界と対等に戦えた喜びを感じました。がしかし、日本代表たるものは結果が全てです。結果を残せなかったことを、チーム一同、悔しい思いをしています。この思いを忘れず、次の世界選手権及びデフリンピックに繋げてほしいと思います。私は今大会をもって競技を離れますが、日本代表としての役目・責任はこの先もずっと続きます。その役目の大部分は、デフリンピック及びデフバスケットボールの認知度の向上にあります。もっと視点を広げれば、デフリンピックが、パラリンピックそしてオリンピックと対等な位置づけに置かれること。その日が日本という国においてもやってくることを障害者アスリートとしても市職員障害者スポーツ担当としても願ってやみません。

競技や仕事を通じて知り得た知識、情報、経験を障害者スポーツ担当としてどのように活かしていくべきか、その方策を模索しながら業務を進めていくと共に現役アスリートとして新たな競技で新たな目標に向かい、デフリンピックをはじめとする障害者スポーツの認知度向上の一翼を担って邁進していきたい。

選手　　大平　良龍

まず最初に二年間日本代表のマネージャーを勤めた青井さんに感謝してます。本人はマネージャーとしてはまだまだと言ってますが、レベルはともかく、すくなくともマネージャーの為にも世界大会に挑戦したいという気持ちはありました。こういう気持ちにさせられたマネージャーも素晴らしいのではないでしょうか。

話しは変わって初めてのデフリンピックは素晴らしいという言葉以外に変えようがありません。

プレータイムがチームの中でもより長かった僕は理想の成績に近づけなかったことに責任を感じてます。

ガードとしてチームを引っ張る力がなく勝負どころでのミスなどがあり、勝利を手に出来ませんでした。

大会を通して常にがむしゃらであり続けたことは自分の中で納得いく内容であったし、誰かの為に思いをもってバスケットが出来たのは幸せだと感じました。

僕はこの大会の為に進路を変更し、がむしゃらになる必要性を感じ、大阪でバスケをする道を選びました。この選択は自信をもって間違っていなかったと言えます。大阪で学んだことを伝える役目を果たしていかないといけません。

これから日本代表はもう一度基本に戻って練習をしないといけない課題がはっきりとわかり、新しいスタートは切れそうです。

最後にやはりどう考えても日本代表は選手だけでは成り立たない。多くの人の支えがあっての日本代表だった事をしっかり心で記憶したい。本当に約２週間素晴らしい経験をさせていただき、ありがとうございました。

選手　　小沼　功治

１日目は成田空港に集まり、激励会をしてもらい、感謝・感激をし、勇気をもらいました。その後、台北へ出発して、無事に台北に到着しました。台北の方々が歓迎してくれたので、嬉しかったです。外に出たら、暑く・空気(湿気)が苦しかったです。ホテルに到着し、思ったよりホテルが小さく感じました。僕は外国人と一緒だと思っていました。

２日目は朝、関西の方に会いました。練習開始、ボールは違うので、感覚が慣れてないので早く友達にならなきゃと思い、あっという間に 45 分間終了しました。出来れば、２～３時間練習したかったです。

３日目は練習し、前回の事を思い出して、練習に出発する前にホテルでストレッチをしてから、練習に行きました。

４日目は練習終了後、夜に開会式に参加して、色々外国人に会え、デフリンピックが始まりました。楽しかったです。

５日目はリーグ初戦でドイツ対決しました。結果は６点差で負けました。みんなは頑張っていたと思います。気持ちが弱かったんだと思います。

６日目はリーグ第二戦でベネズエラ対決しました。
結果は９点差で負けました。負けず嫌いで戦いましたが、みんなは良く頑張ったと思います。

７日目はリーグ第三戦でギリシャ対決しました。
４年前に４位になった相手です。結果は負けましたが、みんなは最後まで諦めずに戦いました。

８日目はＯＦＦなので、観光に行き、101 へ高所エレベータで 89 階 382 Ｍへ昇りました。良い思い出になりました。そして、ナイキショップへ行きました。

９日目はＯＦＦなので、デフリンピック限定Ｔシャツを買いたかったけど、売り切れました。残念です。

10 日目は香港対決しました。結果は初勝利しました。みんなは全力で戦い、良く動きました。

11 日目は練習後、女子の試合を応援に行きました。

12 日目はスロベニア対決しました。４年前、３位になった相手です。結果は負けましたが最後まで諦めずに全力で戦いました。

13 日目はまたドイツ対決し、リベンジしました。結果は負けました。最後の試合は盛り上がり、皆で戦った結果で良かったと思います。

12 位になりましたが、良い経験になり、勉強になりました。そして、その日の夜にお疲れ様会を行いました。感動や感激をありがとうございました。台北まで応援に来てもらった方や日本から心を応援してくれた方に本当にありがとうございました。

選手　　雪森　文晃

私は仕事の都合で５日から成田空港出発、２日から現地入りしているみんなと合流しました。開会式には参加できませんでしたが、日本でじっくり調整することができました。本番の一週間前にトレーニングで右足首をねんざしてしまいましたが、アイシングなど応急処理と試合本番当日のテーピングのおかげでプレイに支障なく、万全の状態で集中することができました。その結果、私自身は一試合、一試合、チームに貢献することができたと思います。しかし、内容がよくても結果は１勝５敗、予選リーグ敗退、16 チーム中(オーストラリアは棄権)12 位という結果におわりました。

四年間この日のために猛練習を積んで、この結果は不本意でしたが、日本は過去最高のチームで挑戦できたので悔いはありません。それどころが四年前のメルボルンデフリンピックよりも各国のレベルが格段にアップしていて激戦の中、各国と競り合ってとれた 12 位という成績は素晴らしいものだとおもっています。

また、開会式と閉会式に参加できなったことが後ろ髪をひっぱられる思いでしたが、何よりも台北の街全体がデフリンピック一色で祭りだ！という雰囲気につつまれ、いままでにない興奮の体験でした。それはよかったとおもいます。

四年後のアテネは個人としてはまだ考えていませんが、悔しさの残る今大会の内容だっただけに、若い選手は新しい目標を、また、私は国際交流をしてスタッフとして今後のデフジャパンに何をしてやれるかというチーム運営に興味を持っています。

いつか、日本バスケットチームがメダルを掴むまでまだまだ私たちの戦いは終わらない。そう思っています。そう思わせた台北デフリンピックだったと思います。感謝！

選手　　手塚　清貴

2009 年９月５日にデフスポーツの祭典、第２１回夏季デフリンピック台北大会が開催されました。前回とは比べ物にならないくらいの盛り上がりだった。

僕は４年前のメルボルンデフリンピックに続き、２回目の出場となった。

予選リーグで、日本はギリシャ、ドイツ、ベネズエラチームのいるグループで戦うことになった。強豪チームが揃う中、２位以上の成をおさめ決勝トーナメントに進出しなければならない為、最低でもベネズエラとドイツを倒さなければいけないと思った。

コート上あるいはベンチで状況を改善するためのコミュニケーションが不足した。メンタル面の弱さが見えた。最終順位は 15 チーム中 12 位。悔しさが残るような試合だったが、試合内容からして考えられるのは「世界との差は確実に縮まっている。」ということ。

今回のデフリンピックでは、本当に充実した経験を積むことができた。

全日本ろうあ連盟の皆様、現地ボランティアの皆様、そして、デフジャパンのために応援してくださった方々に深く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

選手　　石川　友正

９月２～ 15 日まで台北デフリンピックという世界最高峰の大会に日本代表として行きました。結果は 15 ヵ国のなかで 12 位です。残念な結果になりましたが、接戦のこともあって貴重な経験になりました。その上、人間的成長に繋がることができてよかったと思います。今まで１番試合をやって印象に残ったのはベネズエラ戦です。ベネズエラは全米選手権でアメリカを倒したという強敵なチームです。接戦し、100 点を越えてもあと少しで負けてしまいました。しかし、内容は悪くなかったです。結果は結果ということを受け止めて、悔しさがいっぱいでした。お互いに全力を出し切ったからこそ、心から楽し

んだと思います。前回は点差を離されたのですが、今回は接戦してあまり点差はありませんでした。世界は最後まで諦めない日本を認められ、高く評価を頂きました。これから日本に期待していると言われました。まず課題はゴール下でリバウンドを取ること、相手の高さを防ぐことです。課題が明確になっているので、課題を解決しないと世界は厳しいと思います。良い経験になったので、お世話になって頂いた方々、応援して頂いた方々には本当に感謝しています。ありがとうございました。

選手　　辻　朋大

先ず、両親や友人、職場の皆さん、監督やチームメイトたちのおかげで、前回のメルボルンに続いて、今回デフリンピックにまた出場することができ、とても感謝しています。その感謝の気持ちをもって、代表に漏れた選手の分も精一杯プレーしようとこの大会に臨みました。

今から４年前、初めて世界の高さに衝撃を受け、個人得点の殆どが味方からのアシストによるもので、自分から攻めての得点は少なかった。それからは常に高さを意識して、フックシュートやバックシュートなどの技術や味方が攻めやすいようにスクリーンも考えながら練習に取組んできました。

今大会は前大会以上の成績（10位）を残すことを目標としていましたが、計６試合で１勝５敗の結果で12位となり目標達成できませんでした。以前から膝の調子が悪く、膝に気を使いながらのプレーだったので、日頃の練習の成果を発揮できなかったこともあり、とても悔いが残ります。やはり日頃からのケア（アイシングやストレッチ等）が大切だということを痛感しました。自分のプレーとしては、フックシュートなどが通用できたこともあり、自分からどんどんアグレッシブに攻めれば良かったな、と思います。

ドイツ戦は６点差、ベネズエラ戦は９点差と１桁差の試合もあり、４年前と比べて確実に世界との距離が縮まりつつあることを実感できたのは良かったと思います。また、色々な方から「日本のバスケット（スピード）は素晴らしい」と言われたこともあり、チームとしてとても自信がついたのではないでしょうか。

日本は高さがないので、今後もスピードで勝負していくスタンスになると思いますが、まだ個人個人で攻める場面が多く、スクリーンや味方全員でのボックスアウトなどのチームプレーやゾーンに対するチームオフェンスも身につけていく必要があります。

今後はこの経験を色々な形で活かしていき、また４年後のアテネに向けて、環境や身体などと相談しながら頑張っていきたいと思います。

選手　　及川　澄志

2009年９月５日にデフスポーツの祭典、第21回夏季デフリンピック台北大会が開催されました。

この大会で私自身３回目の出場となりましたが、今回の開会式は台北のデフリンピックにかける思いが十分に伝わってきました。また、過去にも未来にもこんな素晴らしい演出は味わえないのではないかと思うぐらいの感動をもらいました。

さて、まずは予選リーグ。日本はギリシャ、ベネズエラ、ドイツのいるグループで戦うことになりました。世界的にもレベルの高いチームが揃う中、２位以上の成をおさめ決勝トーナメントに進出しなければならない。その為には最低でもベネズエラとドイツを倒さなければいけないと考え、初戦のドイツ戦での一勝を 目標にあげ、臨みました。ドイツとは８年前のローマ大会の時も対戦したが、その時はリバウンドやインサイドプレイなど、身長差に苦しみ、世界との差を痛感した試合でもありました。その事もあり、個人的にはリベンジを果たしたいと思っていました。しかし、結果は接戦の末敗退してしまいました。続くベネズエラ戦やギリシャ戦についても明らかにドイツよりも格上のチームということもあり、最終的には０勝３敗で予選リーグ敗退という非常に残念な結果となりました。悔し涙を流し、モチベーションが下がったチームをなんとか立ち直らせ、次の目標「二勝」を設け、順位決定戦に臨みました。というのも過去に日本は今まで各大会で１勝しかしたことがないので、まずは２勝することで今後に繋げようと話し合いました。そして初戦の相手香港に勝利し、このまま波にのるかと思われたが、前大会銀メダルチームスロベニアやドイツに連敗してしまい、最終順位は15チーム中12位となりました。前大会は12チーム中10位。しかし、試合内容を考えると私は「世界との差は確実に縮まっている。」と感じられました。今回、本当に充実した経験を重ねることができました。係わって下さったお一人一人に、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

そして、最後にここまで多くの苦労をかけながら、私を支えてくれた妻に深く感謝します。ありがとう！

選手　　吉良　悠祐

９月２日～15日まで台北デフリンピックがありました。台北は気温が高く蒸し暑かったです。３日～５日は練習しました。怪我をしてた人がいました。練習時間が一時間しかなかったので、みんなピリピリしていました。５日の夜、開会式がありました。今までにはない華やかな舞台で、観客席も盛り上がっていて、気持ち良かったです。６日は１試合目のドイツと戦いました。コートに立つと、映像に映されるのでビックリしました。まず、スタメンで出ました。緊張しました。ドイツのスタメンは背が高いなと思いました。結果はいい勝負だったけど、惜しくも６点差で負けました。勝てる試合だったので、悔しくて泣きました。次の試合はベネズエラです。ベネズエラがゴール下三枚に入ってくるので、いっぱい点を入れられました。カバーしても、すぐにパスされて結果は９点差で負けました。次はギリシャと戦いました。みんな、背が高くてゴール下で攻められました。エース13番を止めるのが難しかったです。結果は30点差で負けました。リーグ戦で敗退したので、最下位トーナメントに進出しました。９位～15位決定戦が行われました。４試合目は香港と戦いました。結果はダブルスコアで勝ちました。日本初勝利をあげました。５試合目はスロベニアです。プロ選手がいて、歯が立たなかったです。13番はノールックパスしたり、シュートしたり結構上手かったです。結果は20点差で負けました。最後の６試合目は２回目のドイツです。リベンジできるはずが、調子が悪くなって、12点差で負けました。２連敗でした。成績は１勝５敗で世界12位になりました。前回は世界10位だったので、下がりました。みんなが力を合わせて頑張ったので悔しかったです。デフリンピックは良い経験になりました！！次は４年後にもっと上を目指して頑張りたいと思いました。

選手　　小立　哲也

９月５日～15日に台湾台北市で開催された21回夏季デフリンピックのバスケットボール競技の日本代表として参加しました。私は過去にアジア大会で日本代表として台湾の大会に出たことがありますが、まず驚いたのは台湾に入国したら空港からもう周りはデフリンピック一色でした。看板、ポスター、広告、バスのペイント等。アジア初開催というだけあって台湾がいかにデフリンピックに力を入れているのかがわかりました。５日の開会式はとても感動しました。前に北京五輪の開会式をテレビで見ましたがそれに負けないくらい素晴らしかったと思います。中でも中国の聴覚障害者の女性による『千手観音』の演舞が一番印象に残りました。日本選手団の入場で会場がヒートアップしたのも感動的でした。台湾と日本は親密感があるせいかもしれませんが。

６日はドイツとの試合。会場はギャラリーが沢山いてビックリしました。やはりデフリンピックは普通の大会とはちがう。試合は残念ながら６点差で負けてしまいました。試合に勝てるとばかり思っていたので凄く悔しかったです。続くベネズエラも９点差で敗北。もう後がない！次の相手は強豪国ギリシャ。相手の高さに圧倒され40点もの差をつけられ敗北。世界の壁の高さを痛感しました。この時点で日本は予選リーグ敗退。下位決定戦で香港に勝ち、スロベニア、ドイツに負けて最終結果は12位でした。この悔しさは絶対忘れない。４年後のアテネでリベンジしたいと思います。この大会を通して日本は確実にレベルが上がってきていることを実感しました。今後はヨーロッパを倒せるまでになると思います。デフリンピックの代表の一員としてこの大会に参加できたことをとても光栄に思いました。また応援してくださった方々どうもありがとうございました。次はアテネで会いましょう！

バスケットボール競技女子チーム

監督　　五十嵐　悟

[選手の選考]

正式選手を決定するまでの合宿に積極的に参加した選手候補約20名をアシスタントコーチとともに視察してきた。選手選定において、私は、バスケット歴、これまでの世界大会に出場した経験、素質(持ち味)、そして意志を基にして、アシスタントコーチ、マネージャーと３人で話し合った上、正式選手を決定したのが選手12名。さらに、選手たちには女子トレーナーが必要と思い派遣依頼をした。

[成績一覧]

Ａグループにはアメリカ(前大会金メダルを獲得)・ギリシャ・ウクライナ・中国・台湾(開催国)

Ｂグループにはスウェーデン(前大会銀メダルを獲得)・リトアニア(前大会銅メダルを獲得)・オーストラリア・日本・香港(初参加)

その計10ヶ国でメダルを競うことになった結果、１位スウェーデン(初)　２位アメリカ　３位リトアニア　４位ギリシャ　５位ウクライナ　６位日本　７位中国　８位オーストラリア　９位台湾　10位香港で、日本が前大会を上回る初入賞を得た。

[成績と評価]

９月６日は予選リーグ初戦のリトアニアと対戦
(試合開始17：00)

●日本32(１Ｑ　７－20　　２Ｑ　５－23
　３Ｑ　６－24　　４Ｑ　14－35)102リトアニア

４日から５日までは３回目の練習をしたが、選手全員が揃ってない状態であった。選手２人とアシスタントコーチは職場の都合で６日より合流にすることになっており、ホテルに着いたのが５日の夜中の２時ごろだった。リトアニア戦当日、選手が全員揃って、朝９：30からの１時間に公式ボールを利用し、念入りにドリブルコントロール、シューティング練習をした。しかし、ベストコンディションがまだ出来てないので、ゲーム前のミーティングでモチベーションを高めるために「皆さん、ついに来た。ここは世界の試合だ。日本は弱いと思っている連中がいる。だが、ここにいる君たちは弱い者ではない。弱いと思っている連中に君たちの魂を見せつけてくれ。」と選手たちに伝えた。

試合開始後、重くのしかかる緊張の中、全力のプレーで戦うもどんどん引き離された。リトアニア選手たちが中から外からスクリーンプレーを駆使して攻撃の手を緩めなかった。結果、完敗してしまったが、ホテルでのミーティングで「負けたが、それでいい。今日の事は忘れろ。またチャンスがあるから、心を切り替えて明日から頑張ろう」と激励をした。

９月７日は予選リーグ２戦のスウェーデンと対戦
(試合開始17：00)

●日本32(１Ｑ　12－20　２Ｑ　11－17
　３Ｑ　８－21　４Ｑ　１－14)72スウェーデン

朝９：30から１時間、いつも通りアップ、ストレッチ、シュート練習をした。選手たちもリトアニア戦の敗戦から気持ちを切り替えることができたようだ。

試合開始。前回より選手たちの体の動きがいいし、ますますベストコンディションでディフェンスが良くなってきたが、スクリーンアウトはきちんとするものの、リバウンドを取っていない。オフェンス面は調子の良い＃４にボールを回すとシュート。オフェンスを頑張る＃４の得点で完全に日本ペースに持ち込めたが、オフェンスリバウンドはできていなかった。32－72でゲーム終了。

スコアを見れば、３Ｐ(３点)シュートではスウェーデンは18本中５本(15点)入り、日本は37本中４本(12点)入りでした。３Ｐが入らなかった原因を克服できれば対等に戦えたのではと思った。

これで選手たちも課題がはっきりしたことと、いい試合になるという自信が持てたように見えた。

９月８日は予選リーグ３戦の香港と対戦(試合開始13：00)

○日本62(１Ｑ　９－５　２Ｑ　19－２
　３Ｑ　17－５　４Ｑ　17－４)16香港

ゲーム前のミーティングで、「香港戦に向けてのスカウティングはできているから、マッチアップがすべてミスマッチであることはわかっているが、ファール(反則)が仕掛けてくることで君たちのポジショニングと役割を抑えてやりなさい。」と選手たちに伝えると、選手は、やるぞ！という気合いを入れた。試合開始。すでにいい流れで、ディフェンスで相手を消耗させ、スウェーデン戦の続きでしつこくディフェンスをし、ボールをカットしたらすぐに＃４がトライブイン、ファールを誘いツーフリースローで11得点、＃８にも＃15にも積極的に得点を

挙げ、いいゲーム運びができた。ついに初勝利。これで１～８位決定戦入りと確定。

９月９日は試合なし
　11 時からは男子が練習する体育館で合流してもらい、ハーフコートで１時間練習をした。
　15 時からは女子が練習する体育館で試合の状況に応じたコンビネーションプレー練習をした。

９月 10 日は予選リーグ最終戦のオーストラリアと対戦(試合開始 15：00)
　○日本 64(１Ｑ　16－8　２Ｑ　8－13
　　３Ｑ　16－9　４Ｑ　24－10)40 オーストラリア
　２年前の世界大会に負けたが、「今度こそ負けない。」と選手たちが誓った。
　試合開始。２クォーター、選手がケガをし、一時中断となったが、再び気合いを入れた。前半終了 24 － 21。ハーフタイムに入って＃９が無事にベンチに戻ったせいか、いいモチベーションで選手チームが一丸になった。「いける！」と私の心にあった。後半開始、＃５がゴール下にリバウンド相手に負けない気持ちで次々リバウンドをとった。４クォーター、時間残り４分にリバンダー＃５がファールアウト(退場)。それでも、日本がいい展開で、＃ 11 が３Ｐ(３点)を３連続で９ゴールを挙げた。ついに２連続勝利といういい結果になり、控室でうれし涙を流す選手たちがいた。
　これで日本は結局２勝２敗(Ｂグループ３位)で１～８位決定戦に進み、ギリシャと対戦することになった。ホテルでのミーティングで「明日は大事な試合。勝てば１～４位決定戦へ、負ければ５～８位決定戦へ。メダルには１～４位決定戦入りしかないから、絶対勝つぞ！」。

９月 11 日はギリシャ(Ａグループ２位)と対戦
(試合開始 15：00)
　●日本 62(１Ｑ　12－16　２Ｑ　7－22
　　３Ｑ　16－29　４Ｑ　27－15)82 ギリシャ
　朝９時からの１時間、シューティングなどの練習をした。
試合開始。＃４が 14 ゴール、＃７が２ゴール、＃６が３ゴールを挙げるが、２クォーターはオフェンスパターンを読まれてパスミスで７－ 22。前半終了 19 － 38。ハーフタイムにアシスタントコーチからの助言で選手たちが気合を入れる。後半開始、前半より体の動きがいい展開で＃４がエースの 18 ゴール、＃５が３ゴール、＃６が４ゴール、＃７が９ゴール、＃８が８ゴール、＃ 15 が１ゴールを挙げる活躍、得点をとることができたが、勝機を逸した。後半だけを見れば、43 － 44 の互角だった。これで５～８位決定戦に進み、中国と対戦することになった。

９月 12 日は中国(Ａグループ４位)と対戦(試合開始 17：00)
　○日本 76(１Ｑ　15－11　２Ｑ　17－22
　　３Ｑ　19－15　４Ｑ　25－27)７５中国
　選手たちの体を休ませたいと思い、私の判断で朝８時からの１時間は練習をキャンセルした。11 時からは男子が９～ 12 位決定戦の試合に出るので、私と選手たちは応援で現場に行った。その後、ホテルに戻って昼飯をとり、ゲーム前のミーティングで、「心を切り替えて５位を取ろう」と激励をした。試合開始。＃４が 16 ゴール、＃５が４ゴール、＃７が４ゴール、＃８が５ゴール、＃ 11 が３ゴールを挙げるが、互角の展開で１点リードされて前半終了 32 － 33。
　ハーフタイムにアシスタントコーチとともに「とにかく諦めるな。集中を。」と選手たちに激励をした。
　後半開始、やはり互角の展開に中国の＃ 11 が猛攻でも日本ディフェンスが崩れない。４クォーター、リバンダー＃５がファールアウト(退場)。それでも、まだ日本が生きてる。時間がわずか残り＃８が３Ｐ、＃６が２Ｐ、＃７が３Ｐ、そして＃４が３Ｐ(３点)で逆転、会場全体に私たちもすべての人が立ち上がって地響きが鳴った。時間切れついに勝った。選手たちが「やった。勝った。」と再びに地響きが鳴った。うれし涙を流す選手たちがお互いに抱きしめあった。
　これで５～６位決定戦に進み、ウクライナと対戦。

９月 13 日はウクライナ(Ａグループ３位)と対戦
(試合開始 17：00)
　●日本 36(１Ｑ　12－17　２Ｑ　8－18
　　３Ｑ　10－14　４Ｑ　6－16)65 ウクライナ
　昨日に続いて、11 時からは男子が 11 ～ 12 位決定戦の試合に出るので、私と選手たちは応援で現場に行った。ホテルに戻って昼飯をとり、ゲーム前のミーティングで、「５位を取ったら日本へ帰ろう。」と激励をしたら、選手たちが「みんな、絶対５位をとるぞ！やるぞ！」と誓った。
　試合開始。１クォーター、チームプレーの要である＃８がいきなりファール３で交代をした。２クォーターからは予選リーグ戦から７戦目で疲れが見え始めてきた。前半終了 20 － 35。
　ハーフタイムにアシスタントコーチが「お前たちやる気あるか？お前は何をしてるか。」とすごい剣幕で喝を入れた。私は「気持ちを切り替えよう。諦めるな」と選手たちに激励をした。
　後半開始、３クォーター、４クォーター、選手たちは頑張ったが、やはり疲れで万策つきた。得点をトータルで＃４が 11 ゴール、＃６が１ゴール、＃７が 13 ゴール、＃８が３ゴール、＃ 11 が８ゴールを挙げる活躍で頑張ってきたが、勝機を逸らした。これで６位入賞を手に入れた。

[チーム体制と各コーチの役割]
ヘッドコーチ(私)
　■ＴＤ会議に出席・練習や試合の指揮・本部に報告義務・全体把握
アシスタントコーチ(女性健聴者)
　■ヘッドコーチ補佐・選手たちへのコーチング・選手たちの状況把握・テーピング処置・マッサージ・携帯で本部への連絡役
トレーナー(女性健聴者)
　■選手たちの体調をチェック・ストレッチ指揮・テーピング処置・アイシング処置・マッサージ
マネージャー(＃ 14)
　■選手たちの健康管理・スケジュール管理・本部との連絡役・情報把握・スコア役
マネージャー(＃ 15)
　■ＴＤ会議、監督会議(男子)での国際手話役
[競技スケジュール]
９月２日　出国
９月３日　結団式や壮行会に参加し、ＩＤ登録のため練習なし
９月４日　練習①(10：30 ～ 11：30)・練習②(男子と 17：00 ～ 18：00)
９月５日　練習③(男子と 11：00 ～ 12：00)・開会式(19：30 ～)に参加

９月６日　練習④（９：30 ～ 10：30）・予選リーグ初戦リトアニアと対戦（17：00 ～）
９月７日　練習⑤（９：30 ～ 10：30）・予選リーグ２戦スウェーデンと対戦（17：00 ～）
９月８日　予選リーグ３戦香港と対戦（13：00 ～）
９月９日　練習⑥（男子と 11：00 ～ 12：00）・練習⑦（15：00 から 16：00）
９月10日　予選リーグ最終戦オーストラリアと対戦（15：00 ～）
９月11日　練習⑧（９：00 ～ 10：00）・１～８位決定戦ギリシャと対戦（15：００～）
９月12日　５～８位決定戦中国と対戦（17：00 ～）
９月13日　５、６位決定戦ウクライナと対戦（17：00 ～）
９月14日　３、４位決定戦（13：00 ～）と決勝戦（17：00 ～）を観戦
９月15日　帰国

[大会の競技運営]
ホテルから練習する体育館までバスで移動し、またホテルから試合を行う会場まで移動してくれたのはボランティアの人たちであった。したがってボランティアの人たちが行き届いたサービスをして頂いたお陰でスムーズにいけた。しかも、ボランティアの人たちは日本語が出来るので、私たちに筆談したり、丁寧に対応したり、最後までお世話にしてくれた。私たちはボランティアの人たちに対して本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

[競技規則の適用]
私から見ると、すべての審判員は国際バスケットボール連盟で公認把握が出来ないが、その審判員はほとんど台湾人だった。これまでの試合は不平、不満や公平と様々な場面があったが、問題は特にありません。

[大会参加までの準備状況]
ベスト４に入るのが選手たちの目標であり、「世界で戦うためには基礎体力の向上が必要で、体力強化をする。まずは、足から鍛えて行きたい」と私はアシスタントコーチとともに強化合宿で千葉、愛知、東京、京都、大阪、兵庫を回って来た。「君達、これが日本代表か。」と激を飛ばし、「もっと集中力を！」「常にアグレッシブでいること。自信を失わないこと」と激励。私は選手たちの気持ちを尊重してこれまでの試合、練習試合や合宿での練習で、試行錯誤を繰り返しながら少しずつ鍛え、選手たちが手応えをつかんできたと信じている。本当に厳しい練習にも関わらずここまで頑張ってきた選手たちはますますたくましくなってきたなと感じている。

[反省・まとめ]
アシスタントコーチらと話し合った上で記載するべきでしたが、話し合う機会がないので、私個人的見解として感じたことを記載させて頂きたいと思う。私は「世界のレベルで追いつく、戦うためには基礎体力の向上が必要で、体力強化をします。」と言い続け、選手たちは厳しい練習にも関わらずここまで頑張ってきてくれた。その甲斐あって香港、オーストラリア、中国を倒しアジアナンバーワンになり、前大会を上回る６位入賞を手に入れることができた。私は選手たちを誇りに思っている。

反省点はパワーが尽きて引き離されてしまうことです。連日の試合で体力的に尽きるのはわかるが、最後まで頑張って欲しかったのです。今後はハングリー精神が足りないという課題を、全国ろうあ者体育大会より優秀な能力を持った選手や将来的に有望な若手選手を発掘し、このデフリンピックで経験した有志らの強化育成を日本デフバスケットボール協会と検討していくことを考えていきたい。

アシスタントコーチ　　木下　千代

Ⅰ．はじめに
今回、2009 年台北デフリンピックに参加し、感じたことを以下に述べる。

Ⅱ．試合について
（1）９月６日　リトアニア戦（日本 32 － 102 リトアニア）
デフリンピック初戦だったこともあって、チーム全員が緊張していたように感じた。
オフェンスでは相手の身長が高いせいか、攻めることにためらっているように感じた。会場内も合宿のときとは空気が違い、選手１人１人の動きがぎこちなく、シュートもなかなか入らなかった。
ディフェンスでは全員の足が止まってしまい、スクリーンアウトも出来ていない状態で、リトアニアの選手にリバウンドを取られっぱなしだった。日本で練習してきたことの 20％ぐらいしか、自分たちの力を出し切れていない様に感じた。
総合的に見てリトアニア戦は、初の大舞台での試合にしては、試合の空気になじむことに、時間がかかってしまったように思えた。

（2）９月７日　スウェーデン戦（日本 32 － 72 スウェーデン）
スウェーデンの選手は、前回の世界選手権で２位という成績を残しているだけの貫禄があった。しかし、前日のリトアニア戦とは違い、選手達はリラックスした様子で、試合に対しての集中力も違った。
オフェンスでは、前半リトアニア戦同様、身長の高い選手に悩まされる場面が何度か見られたが、前日に比べまずまずの攻撃力があったように感じた。しかし、１アシストで終わることが多く、スウェーデンの選手にリバウンドを取られてしまうことが多かった。攻撃しているにも関わらず、オフェンスリバウンドに飛び込むことが出来なかったことが、点数の伸び悩んだ原因だったと思う。ボールに対する執着心を、もっと試合中に出していかなければいけないと思った。
ディフェンスでも、やはりリトアニア戦同様、スクリーンアウトの徹底が課題となった。また、本来ならできるはずの、しつこいディフェンスがまだまだ発揮出来ていなかった。
相手が身長を武器に勝負してくるならば、日本は粘りのあるしつこい攻撃をしていかなければならない。しんどさに負けてしまったことが、この試合の敗因だったと思う。

（3）９月８日　香港戦（日本 62 － 16 香港）
香港の選手は、他の国に比べ身長も低く、スピードもなかった、今までの合宿で練習試合をしていた相手と同じ様な感覚で試合が出来たと思う。
オフェンス、ディフェンス共にリラックスして攻撃する

ことができ、今までの練習の成果がでる場面が多々あった。しかし、日本が課題とするスクリーンアウトのつめが甘いせいか、香港に16点も取られてしまい、試合には勝ったが納得のいく流れを作ることができなかった。連戦が続く中、勝敗だけでなく、1人1人が納得できる試合をすることによって、翌日の試合にも大きく影響してくる。香港戦は、デフリンピック初勝利の喜びもあったが、反省する点も多々あった。

（4）9月9日　オフ

この日は試合がなく、午前は午後と練習をした。

練習では、シューティングを組み込んだアップと、3日間の試合で課題となっているスクリーンアウト、他の国が使ってくるゾーンディフェンスに対しての攻め、セットオフェンスの確認などを行った。練習のときは確認をしながら取り組めるせいか、選手も落ち着いてオフェンスやディフェンスが出来ていた。監督や私が、選手に要求している課題はクリアしていた。練習で出来ているということは、後は選手が試合中にいかに自分や試合相手に厳しくなるかである。これは、練習で培うものではなく、試合をこなしていくことで培っていくものである。選手1人1人が自分自身で気持ちを高め、どんな状況でもやるべきことをやり通す精神力が求められた。この日の練習はチームにとって、いい空気で終わることが出来たので、デフリンピックの空気に慣れてきていると感じた。

（5）9月10日　オーストラリア戦（日本64－40オーストラリア）

オーストラリアの選手も身長が高く、体格のいい選手が多かった。しかし、リトアニアやスウェーデンと違いシュート率の低さや、スピードのなさが目立った。

オフェンスでは、今までなかなか思うように攻めることが出来なかったことが嘘の様に、日本の流れを作ることが出来た。課題であったスクリーンアウトも、1人1人が意識して取り組めていた。失敗することもあったが､引きずらず､気持ちを切り替えて試合を楽しんでいるように感じた。

ディフェンスにおいても、日本本来の守り方を徹底することが出来たと思った。身長の高い相手にも高さではなく、粘り強さやスピードで挑んでいっているようだった。その粘り強さがあったからこそ、オーストラリアの選手は、自分たちよりはるかに体格の小さい日本の選手相手に、思うようにプレーが出来なかったのだと思う。

この試合の勝利は、日本にとって大きな自信をつけるきっかけとなった試合であった。結果も内容も、日本にとって最高の試合となった。

（6）9月11日　ギリシャ戦（日本62－82ギリシャ）

この日の試合は、前日のいい流れの空気を継続出来なかった。オーストラリア戦で興奮した状態のまま試合に参加している選手や、勝利で浮かれている選手など、1人1人の気持ちが違ったせいか、動きがばらばらになってしまっている感じがした。

オフェンス、ディフェンス共に、全員の気持ちが交わらないまま、試合が終わってしまったように思えた。また、前日のオーストラリア戦で、スターティングメンバーである長谷川選手が、試合中に怪我をしてしまったため、試合に出ることが出来なくなってしまった。チーム内で、彼女の存在が大きかったようで、試合の流れをうまく作ることが出来ず、常に足が止まっていた。今までの合宿で、全員同じ目標に向かって練習をしてきたにも関わらず、選手1人が変わっただけで、こんなにも空気が変わってしまうことが、長谷川選手の存在がいかに大きかったのかと、感じさせられた。その反面、長谷川選手を出場させることが出来ないもどかしさを感じた。

（7）9月12日　中国戦（日本76－75中国）

中国に対しては、2年前の悔しい敗戦の記憶があり選手達の空気が、他の試合と違っているように感じた。試合開始前からの気合も違い、今までで1番の緊張感があったと思った。

オフェンスでは、全員が必死に攻めている感じが見られた。無理矢理攻めていく場面や、タイミングを合わせきれずに無理矢理投げてしまうシュートなど、個人プレーが何度か見られたが、プレーの流れが崩れ始めても、自分たちで立て直していく精神力が発揮されていた。

ディフェンスでも、スクリーンアウトリバウンド、粘りのあるディフェンスが見られた。きっと、選手全員が「勝ちたい、絶対勝てるはず」という気持ちで40分間出場していたからこそ、ディフェンス面でも中国に対して攻めきることが出来たのだと思った。しんどいときにディフェンスを徹底出来ることこそが、本当の強さだと感じた。

この中国戦では、監督や私が1年間言い続けてきた“気持ち”を試合で出せたのだと思う。試合に出ている選手も、ベンチにいる選手も、スタッフ全員も、この試合では40分間みんな同じ気持ちで試合が出来たのだと思う。中国も、日本に負けられない気持ちがあったとは思ったが、最後まで気を抜かず試合に集中出来る精神力が勝っていたからこそ、勝利を手にすることが出来たのだと思った。

（8）9月13日　ウクライナ戦（日本36－65ウクライナ）

ウクライナの選手は、初戦のリトアニアのような空気があった。前日の中国戦での空気を継続することが出来ず、初戦のような試合の流れだった。

オフェンス、ディフェンス共に初戦のような流れであった。背の高い選手を相手にしたときに、思うように攻めることが出来なかったり、リバウンドを徹底出来なかったりで、ウクライナのリズムで試合が進んでいった。第1ピリオド以外は、ウクライナ優勢の状態で試合の流れが出来上がってしまっていた。

今まで、気持ちを張って連戦を戦ってきていた選手達には、厳しい試合だったと思った。しかし、連戦を戦ってきているのはどのチームも同じなので、日本も同じように戦っていかなければいけない。このウクライナ戦では、最後の試合まで継続させるほどの精神力の必要性を痛感させられた。

Ⅲ．最後に

デフ日本代表に初めて出会ったのは、1年前の7月の合宿からである。最初に彼女達に出会ったときは、チームワークもなく、個人プレーを主としたチームであった。このチームに出会ったときの第一印象は、「このままで勝てるのだろうか」であった。しかし彼女達は、この1年で大きく成長した。監督や私の指導方針に納得し、最後まで必死に応えてくれていた。厳しい要求をすることや、激を飛ばすことが何度もあったにも関

わらず、諦めることなく必死になって付いてきてくれた。彼女達が努力する姿を見て、私達も高い要求が出来たのだと思う。今回のデフリンピックで、キャプテンの大庭選手が、数々の成績を残しているが、数字では表せない粘り強いディフェンスをしたり、試合に出ている選手をベンチでサポートしたりなど、数字上の結果には残らない努力をした選手もたくさんいる。これは、評価されにくいことだが、試合を見てくれていた人達には伝わっていて欲しいと思う。

デフリンピックに参加することで、今まで違うチームでプレーしていた選手の気持ちを１つにするのは、難しいことにも関わらず、彼女達はこの１年で成し遂げた。全員がお互いに思いやりを持ち、同じ目標に向かっていくことによって達成出来たのだと思う。成績は６位であったが、私は、どのチームより結束があり素晴らしいチームだと思った。

今回デフリンピックに参加させてもらい、私は多くのことを学ぶことが出来た。日本代表メンバーのおかげで、バスケットボールの面白さや、チームワークの大切さ、思いやりの素晴らしさを再確認出来た。日本代表として戦った８日間は、思い出深い期間となった。

この様な達成感を感じることが出来たのは、数々の方々からの協力があったからこそだと思う。デフリンピックまでの間、日本代表の活動に対し、多大なる御協力、御支援を頂いた方々にも、心から感謝している。

スタッフ　　栢森　香澄

９月２日成田空港から台北に向けて出発しました。

３日台北フラーントンホテルにて結団式が行われました。この日は午前中練習を行う予定でしたが、結団式を優先するという指示で初日の練習は無しとなりました。

４日午前中地元の体育館にて練習を行いました。この日は台北入りして初めての練習だったということもあり、ストレッチを時間をかけ念入りに行いました。午後は男子の練習コートを半分お借りして練習をすることができました。今日は午前・午後を通して短い時間でしたが雰囲気の良い練習が出来たと思います。

５日試合前日の練習。最終調整を時間をかけて行いました。この時点で大きな怪我をした選手は出ていないので明日の初戦を無事に迎えれることを願い終了しました。

６日デフリンピック初戦は対リトアニア戦。テーピングは時間の関係上事前にホテルで巻いて行くことになりました。初戦ということもあり会場に到着し試合開始までに少し混乱する場面がありました。試合の結果は残念ながら負けてしまい、怪我人が出てしまいました。終了後も痛みを訴えていたので、本部の整形外科の先生に診察していただきました。その日はアイシング等のケアをして様子を見ることになり初日は終わりました。

７日朝練習に行く前に前日怪我をした選手をメディカルルームに連れていき診察してもらい、選手とも相談した結果、テーピングを巻いて練習・試合どちらにも出ることになりました。試合は対スウェーデン戦。結果は負けてしまいましたが、内容は良かったと思います。

８日この日は練習はなく13時からの香港戦に臨みました。香港は体格的にもチームのレベル的にもそれほど高くないていう印象でした。この日は個人のディフェンスやオフェンスのルーズボール、リバウンドに飛び込んでいて、とても良い内容で勝てたと思います。

９日この日は試合は無いため午前午後と練習を行いました。とても雰囲気良く集中して取り組めていたと思います。ただ１つ残念だったのは、練習終了間際、１人の選手が足関節を捻挫してしまいました。すぐに応急処置をし程度は軽かったので、少し痛みはありましたが歩行は可能だったので軽く固定をしてホテルへ戻りました。

10日対オーストラリア戦。アップからモチベーションを上げていこうと決め試合に臨みました。試合の内容は今までで一番良く勝利することができました。

11日対ギリシャ戦。前日のオーストラリア戦の雰囲気と違い、勢いがあまりないような気がしました。特にリバウンドの精度が下がったように思いました。最終クォーターの連続得点がありましたが、結果負けてしまいました。

12日午前中、男子の試合を応援しました。そして17時から中国との試合に臨みました。この日の試合はコート・ベンチが一体となって試合ができたと思います。最後まで油断できなかったですが、今までで一番素晴らしい内容で勝てたと思います。

13日デフリンピック最後の試合となった対ウクライナ戦。残念ながら負けてしまいましたが、日本代表として恥じない試合が最後にできたと思います。これまで怪我を負って無理をして試合に出場していた選手が多く、トレーナーとしてもっと何かしてあげれることはなかったのかと今だに考えます。

６月からデフリンピックまでの約４ヶ月間という短い期間でしたが、日本代表のトレーナーとして迎えられ、仕事ができ、とても嬉しく思うと同時にとても感謝しています。この経験を活かし、これからのトレーナー活動に繋げていこうと思いました。

選手　　大庭　紀美

約２週間に渡るデフリンピックが終わり、前大会の成績を上回る６位という結果でした。メダルを目標にしていただけに結果を残すことができませんでした。

予選リーグは前大会銀メダルのスウェーデン、銅メダルのリトアニア、オーストラリア、香港でした。初戦のリトアニア戦は主将としてどころか、選手としてやるべきことがきっちりできず監督やコーチに怒鳴られました。プレッシャーのあまり、なかなか気持ちを切り替えることもできないまま不本意な内容として大敗してしまいました。初戦の反省を生かし、気持ちを高くもつために試合への入り方に工夫をこらしスウェーデン戦に挑みました。身長・体格で劣るスウェーデンにリバウンドを取らせないことを重点に前半はゲームを展開できたが、後半でポストにボールを集められ、スクリーンアウト等各自やるべきことに対する甘さが露出し敗れてしまいました。決勝トーナメントへ進出するためには残りの試合全て勝たなければならなくなった日本は香港・オーストラリアを２戦続けて倒し予選リーグ３位で決勝トーナメントへ駒を進めました。

準々決勝はギリシャ。第１Ｑは競ったものの第２Ｑでリズムが崩れてしまい、それを取り戻そうと必死だったが、第２Ｑの失点を取り返すのに時間がかかりすぎて敗れました。

５－８位決定戦は中国。４年前は圧勝したが、２年前の世界選手権は大敗した相手なだけにリベンジしたい気持ちが強かったです。ゲーム開始後日本のペースだったが、中国の３Ｐシ

ューターにどっぷりはまり接戦となったが、決勝点の３Ｐを決め１点差でどうにか勝つことができました。このゲームで勢いに乗って５位になりたかったが、スウェーデンと同じようなゲームを展開し敗れ６位となりました。

このデフリンピックは結果を残すことだけが全てであるが、内容を聞かれれば前大会より全てにおいて大きな『進化』を遂げたことは一目瞭然だと思います。特に２００５年メルボルンデフリンピックに次いで２回目のデフリンピックとなる選手は確かな手ごたえと自信を感じたと思う。高さと体格で劣る日本が今後６位以上の上位に進むためには、スクリーンアウトの徹底、コートを駆け回るタフさ、そしてなにより強い気持ちを持つことが重要だと感じました。

デフリンピック出場にあたり、ろうあ連盟、ＪＤＢＡ等各種団体、合宿施設を提供してくださった方々、試合相手になってくださった方々、職場及び学校、御家族等、多くの方々の支えがあってここまでくることができたこと御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

選手　　渡辺　亜紀

自分にとって二度目となるデフリンピック。前大会では初めての体験だらけであっという間に終わってしまったように思います。今回は世界を知ったうえで合宿やトレーニングに励み、チームでも共有目標を設定しました。「まずは決勝トーナメント進出、そしてメダル！」そのために一年間にわたる合宿に参加してきました。身体的にも精神的にも経済的にも苦しい一年間となりました。

そしてデフリピックがやってきました。緊張はしているものの、前よりは落ち着いて試合に臨めた気がします。素晴らしいキャプテンのおかげで、試合前からチームでモチベーションをあげていき、試合に臨むことができました。コートの中でも、コートの外でもチームが一つになり、試合に臨めていた気がします。

結果としてベスト６で終わってしまったが、前大会と違って、今回は一つ一つの試合が自分にとって意味のある試合ができたし、女子バスケットボール競技において過去最高の成績を残すことができてよかったと思いました。もちろん、悔いはたくさん残っているし、メダルには届かなかったものの、今大会でメダルへの距離が明確になってきたと思います。次回デフリンピックではメダルに届く距離にあるかもしれない。そう感じさせた大会となりました。

また、女子バスケットボールの課題がはっきりしてきたと思います。仕事と両立しながら合宿やトレーニングという苦しい一年間を耐えてきたが、その苦しさをふっとばすほどの魅力がデフリンピックにはあるように感じました。そして、今回の４－６位決定戦で敗れてしまったギリシアとウクライナともう一度、試合をして絶対に勝ちたいという気持ちが強くなりました。可能ならば、４年後もまた苦しい一年間に耐えて、デフリンピックに出場したいと思うようになりました。そしてギリシアとウクライナにリベンジを果たし、次こそはメダルが欲しいです。

デフリンピック出場にあたって支えてくれた家族、応援し続けてくれていた友人や地域の方々、そして最高の監督とコーチ、スタッフ、チームメイトたちには感謝の気持ちでいっぱいです。心からお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

選手　　平林　裕子

決勝トーナメント進出、そして銅メダル獲得をチーム目標として掲げて挑戦した台北デフリンピック。私は４年前のメルボルンデフリンピック、２年前の広州世界選手権に続き、３度目の世界大会であり、台北デフリンピックに対する想いは過去の２大会より強かったです。なぜなら、今まで出場した世界大会では１勝しかできず、台北デフリンピックもまた同じ成績を残して日本へ帰りたくなかったからです。

試合では、コートに立っている皆をコントロールしながらゲームメイクをするポジションとして挑みました。初戦では久々の世界大会のせいか、緊張の連続で自らミスを犯してしまい、チームメイトをうまく動かすことができなかったので、試合後、監督やコーチに怒られました。そこから気持ちを切り替えて１つ１つの試合を全力で尽くし、ゲームメイクをしました。また、ディフェンスやリバウンドなどチームのために自分なりに出来ることをやってきました。

最終的に６位になり、銅メダル獲得には届かなかったが、決勝トーナメント進出という目標は達成することができました。また、４年前のメルボルンデフリンピックや２年前の広州世界選手権で負けた国にリベンジを果たし、前大会を上回る３勝、そしてアジア一位なれたので大変満足しています。これを機に４年後のアテネデフリンピックこそメダルを取れるよう、今大会で出た課題を着実にクリアして更なる進化をして欲しいと心から願っています。

最後になりましたが、台北デフリンピック出場にあたり、フォロー体制を整え、最後まで応援してくださった職場の方々、そして色々と支えてくださった家族に改めて御礼申し上げます。また、合宿を実施するにあたり、合宿施設や宿泊施設を提供してくださった方々、試合や練習試合の相手になってくれた方々にも改めて御礼申し上げます。それから、台北デフリンピック期間中に練習や試合にお供してくださった現地のボランティアスタッフにも改めてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

選手　　渡辺　さやか

台北デフリンピックは６位入賞、３勝４敗という成績で終わりました。オートラリア、中国に雪辱を果たしアジア１位となりましたが、メダルには届きませんでした。

欧州は、日本のように全員が自由に攻めるというスタイルではなく全員で攻めるという、敵からするとどこから決めてくるのかわからないような連携を意識したオフェンススタイルを強みとしており、日本は完全に探り探り、守りのディェンスになってしまいました。プレッシャーも総じて中途半端で、日本にはいい男子並みの体格・運動能力を持つ女子選手に対しての免疫もまだ足りなかったのかもしれません。ただ、欧州勢のシュートシーンのほとんどはアウトサイドからのペネトレイト、もしくはペイントエリアからのジャンプショットでした。ゴールまでペネトレイトさせない、もしくはシュートのリズム・セレクションを少しでも崩せるようミートからフォロースルーまでも徹底的に攻めるディフェンができていれば、シュートに関してそこまで器用ではない欧州勢の得点を抑え、スクリーンアウトとリバウンドの徹底でもう少し追いすがることもできたのでないかと思います。

いずれにせよ体格・身体能力で不利な日本はそれを補う脚・

走力とプレーの正確性をつけ、オフェンス・ディフェンス両局において攻めつづけるバスケットが体現できなければ勝機も見えてこないと感じました。

また、アジア勢には勝つことができましたが、中国チームには大変驚かされました。２年間、４年間の成長度数に関しては今一番見習うべき国だと思います。向上し続ける世界のレベルに引き離されないよう、今後もより一層危機感を持って取り組まなければならないと強く感じました。

個人としては、今回得ることのできた世界と対峙し戦う楽しさを大きな糧としながら、今後もレベルアップを図り成長していけるよう努力していきたいと思います。

選手　　杉谷　香

まず、このデフリンピックに私たち日本代表が参加するにあたって、本当にいろいろな方から、いろいろな方面から言葉に尽くしきれないほどの激励・協力をいただいたことに心から感謝したいと思います。本当に、今までいただいた激励・協力がなければ私たちはここまで戦ってこれなかったと感じています。

予選リーグで２勝をあげれば決勝トーナメント進出という試合構造の、予選リーグ初戦リトアニアは、102 － 32 で負けました。高さに萎縮、動きが硬かったこともあり、なかなか得点に結びつけるプレイをできないまま、リバウンドに競り負けて得点されてしまうことが多い試合だったと思います。今思えば、この試合で本当に「スクリーンアウト」の大切さを、今さら･･･になってしまいましたが、痛感させられました。

２試合目のスウェーデンは、毎回トップ３に食い込むチームで、しかし、それほど高くないので、ディフェンス・スクリーンアウトをきちっとやればなんとかなる！という気持ちで挑みました。前半はかなり食いつきましたが、後半で離されてしまい、72 － 32 で負けました。やはり、スクリーンアウトとリバウンドが弱く、スウェーデンの２分の１しかリバウンドを取れていなかったので､今回の大会を振り返って､最も私が「もっとやれたはず･･･」と思った、一番痛い試合でした。しかし、前半はかなり競っていたので、４年後は前半後半通して競れるようになりたいと思います。

３試合目の香港は、正直行って負けたら恥ずかしすぎて日本に帰れない、勝って当然の相手なのですが、相手のペースに乗ってファールトラブルになったり、ダラダラした試合にならないように！と気を引き締めて試合に臨みました。この試合ではほぼ全員が出場、62 － 16 でしっかりと勝ちました。

４試合目のオーストラリアは、４年前のデフリンピック、２年前の世界選手権で､「勝てるはずが､あと一歩で勝てなかった」相手でしたが､今回はきちっとやることをやって勝つ！と挑み、64 － 40 で勝ちました。同じアジアでも、白人中心のチームに勝てたことで、コンプレックスを乗り越えられたのでは、と思います。

５試合目のギリシャは、オーストラリアよりは手ごわいが、きっちりとスクリーンアウト、リバウンドを徹底すれば勝てる相手だ！と挑みましたが、結局競り負けて、62 － 82 で負けてしまいました。しかし、４年前、２年前よりは手ごたえがあったので、次回は倒してやろう！と思っています。

予選リーグ最終戦、中国は、４年前は勝ち、２年前はリベンジされてしまった相手で、今までに無い緊張感の中で迎えました。結果は 76 － 75 と１点差で本当に最後までわからない試合でした。試合終了後に気づいたことですが、私はチームで唯一 40 分出場となったのですが、本当にバスケットをやってよかった、これがバスケットなんだ！と思える楽しい、ハラハラした試合でした。この試合ではスクリーンアウトや得点へ絡むプレイ全てが、皆が気持ちがひとつになって挑めた試合だと思っています。予選リーグ３位で決勝トーナメントに進出確定ということもありましたが、勝って、今までに無く本当に嬉しかった試合でした。

決勝トーナメント、５・６位決定戦のウクライナは、長身でしたが、オーストラリアのレベルが少し上がった感じだな、というのが皆で一致した感情でした。この試合、私はファールトラブルで、前半で４ファールをとられてしまい、あまり出れなく、とても悔しい試合でした。36 － 65 で負けてしまいましたが、ベンチから見ていて、本当にスクリーンアウトの大切さを改めて感じていました。また、オフェンスのかみ合わないところを、ベンチから見られたのは、結果論としては勉強になりました。しかし、本当に出たくても出られない、それを招いたのは自分、という事実が本当に痛い試合でした。これからも世界大会に出るチャンスがあれば、この試合はいい意味でも悪い意味でも絶対忘れられない試合だと思います。

全体を通して、ベスト６という結果でしたが、ギリシャとウクライナはもう少しスクリーンアウト・ディフェンスとオフェンスのからみ方を磨けば、もっと戦えると感じました。次のデフリンピックも出場し、ベスト４に食い込める力を付けていきたいと思います。

このベスト６、アジア１位という結果が、これからの女子バスケットボール日本代表の本当のスタートだと思います。本当にいい大会を経験できた、バスケットをやっていてよかった！と思える大会でした。

選手　　長谷川　理沙

今回のデフリンピックは初めてという事もあり、緊張と興奮があり良い刺激となる大会で、この２週間、本当に喜怒哀楽の嵐でした。

９月２日に出発して台北に入った時はまだ、デフリンピックに参加している、日本から離れてるという実感が湧いていませんでした。台北で練習して、生活して、他の選手と交流していくうちに、「やっと世界と戦えるんだ」という実感が湧いてきました。

９月５日に開会式が始まり、全世界全スポーツの選手が集まっている為、全世界から観客が来ている為、会場は人で溢れていました。予想よりも盛大な開会式で驚き、感動しました。

○予選リーグ戦

・リトアニア 102vs 日本 32

９月６日から予選リーグ戦が始まり、初戦の相手はリトアニアでした。初戦という事もあって、何故かみんな緊張している部分がありイージーミスがありました。内容も悪く結果は負けてしまいました。この時は本当に悔しくて、コーチと監督の言葉が重く感じ、日本からわざわざ応援に来てくれている人の為に応えなきゃいけないと感じました。次はスウェーデン戦なので、気持ちを切り替え、試合に臨んでいこうと思いました。

・スウェーデン 72vs 日本 32

午前中スウェーデン戦に向けてフォーメーションの確認やスクリーンアウト等の練習をしました。チームメイト､コーチ､監督お互いに声を掛け合いながら練習と試合に臨みました。結

果は負けてしまったが、「内容がよかった」と監督やコーチやチームメイトで励まし合いました。リトアニア戦の反省を活かす事が出来たプレーでした。

・香港 16vs 日本 62

昼から香港戦があったので練習はありませんでした。それぞれ各自でモチベーションが上がるようにしたが内容があまりいいとは言えなかったです。勝ったのに納得のいかない試合で、リトアニア戦の反省を活かせてなかったので、心の中は少し悔しい気持ちがありました。コーチや監督に色々と言われ私たちチームメイトは何が足りなかったのか考えさせられました。

・オーストラリア 40vs 日本 64

２年前の世界選手権のリベンジを果たす事が出来て嬉しかったです。オーストラリア戦は内容がよかったです。それぞれの選手が自分の役割をこなすことが出来た試合でした。でも、私が試合中ケガをしてしまい、２Ｑの途中から出れなくなり、悔しかったがチームメイト全員が出れない私の為に頑張ってくれました。その頑張りのプレーが伝わってきて嬉しかったです。

○決勝トーナメント戦

・ギリシャ 82vs 日本 62

この時は医師からの判断で帰国まで運動禁止となり全く試合に出れなくて悔しい思いでいっぱいでした。ギリシャ戦は負けてしまい、ベスト４に入ることが出来なくて残念でした。でも、得点やリバウンドは良かった。チームメイトが私に「試合に出れなくて悔しいのに、負けてしまってごめんなさい」と謝ってくれました。私はみんなの気持ち、ケガの事等、この日だけ色んな思いが溢れて、涙が出ました。今思い出すと自然と涙が出てくるくらい悔しかったです。

・中国 75vs 日本 76

この中国戦は接戦で２年前のリベンジが出来、内容も結果もすごく良かったです。私はみんなと一緒に試合に出る気持ちで精一杯応援しました。試合中の観客も釘付けになるほどの接戦で、残り４Ｑで逆転し、勝ちました。その時にあまりの嬉しさでチームメイト、監督、コーチで喜びを分かち合い、抱き合い、泣き合いました。この時に感じた感動は忘れられないいい思い出となりました。

・ウクライナ 65vs 日本 36

ベスト５決定戦で最後の試合なのに負けてしまい、ベスト６という結果になりました。珍しくリズムが悪く、内容がいいとは言えませんでした。もっともっと上に行きたかった、もっと動けばよかった、もっとシュートすればよかったといったお互いに悔しさ、後悔、自分への怒りがありました。

この２週間色々な事があり、いい経験となりました。今回のデフリンピックで私はすごく悔しかったという気持ちが大きくてこのままでは納得いかないと思いました。トレーナーの栢森さんが言ったように、モチベーション、チームの雰囲気が良い、メンタル面が変わる事で結果、内容が変わっていくという事がわかりました。バスケだけじゃなく、他のスポーツにも当てはまる事なので、トレーナーという存在は大切だと思いました。本当に今回は色んな人に助けられ、支えられ、感謝という気持ちでいっぱいです。

このままだと納得いかないので、２年後の世界選手権、４年後のデフリンプックに挑戦しようと思います。またみんなと喜びを分かち合い、ぶつかり合い、泣き合い、バスケを通して成長していきたいと思いました。

選手　　簑原　由加利

＜開会式の思い出＞

デフリンピックに出場する前、９月３日朝９時 45 分から結団式が行なわれました。台湾大使館、台湾に住む日本人の理事長達から激励の言葉が贈られました。

10 時半から練習するつもりだったが結団式と重なってしまい、変更されました。やむを得ず、ホテルに待機して 18 時から開会式のリハーサルを見に行ってきました。曇ったり、晴れたり、降ったり…と天気の変化が激しかったです。開会式のある５日の天候がどうなるだろうと心配でした。

開会式のリハーサルは、アトラクションが２時間ぐらいあり、すごく長かったが、すごく美しすぎて感動いっぱいでした。残念なのはジャッキーチェンさんに会えなかったことです。

＜一番印象に残った試合＞

私の中で一番印象に残った試合は、オーストラリア戦と中国戦でした。

オーストラリア戦では、オーストラリアの選手たちは身長が大きいし、コートの中で大暴れしていたので、日本代表は日本らしいディフェンスで、チームで守れるようすることが出来ました。ディフェンスしたとき、相手の足を止め、攻撃を封じるよう精一杯の力を出し切りました。しかし、オフェンスでは、プレッシャーが弱く、もっと自分から積極的に攻撃すればよかったと反省しています。

中国戦では第４クォーターまで点差がなく、シーソーゲームでした。そんな中でも、気持ちをひとつにして頑張ってプレイハードし、一点差で勝ちました。監督やコーチ、選手全員が涙を流して喜びました。中国に、２年前のリベンジを果たせて、さらにアジアで１位になれた事が一番嬉しかったです。

自分がベンチから見て感じたことは、今までの試合の中で一番良い試合でした。お互いモチベーションを高めて、チームの流れを崩さないようにプレーしました。シュート連発で逆転したり、速攻を決められて逆転されたりと点を取っては取られるという状態が続きました。特に、リバウンドの奪い合いがすごく激しかったです。今でも記憶に残っています。

中国戦に勝利して、５位決定戦に行けましたが、ウクライナに負けてしまい、６位になってしまいました。５位に入賞できなくて悔しかったです。

色んな国と戦ったり、たくさんの試合を近くで見て、大きな刺激になったし、コートに立ったら、冷静に判断するのが難しかったけれども自分にとってはいい経験になりました。やっぱり外国の選手は長身者が多く、リバウンドシュートの確率が高かった。この背の高さの差があったかもしれませんが日本代表はシューティングやスクリーンアウトとか、もっと努力するべき所がいっぱいあると思いました。それは次の大会に向けての課題として、また頑張っていきたいと思います。

監督をはじめ、コーチ、スタッフ、選手たちに感謝の気持ちでいっぱいです。有難うございました。

本当に熱かったデフリンピックでした！！

選手　　鈴木　裕加

私にとって初めてのデフリンピック、初ゲームはリトアニア戦でした。緊張していないつもりが実際はしていたようでした。ポイントガードとして良い流れを作りたかったのだが、チームのコントロールどころか自分自身がパスミスなど初歩的なミスばかりしてしまい二年前の世界選手権を再現したかのような最悪な試合展開をしてしまいました。

しかし、翌日のスウェーデン戦はチームの雰囲気も非常に良い中試合を進めることができ、自分自身も落ち着いてプレーできました。前日の内容を引きずらないよう、皆でしっかり気持ちを切り替えて臨んだのが良かったと思います。全員がやるべきことをしっかりやっており、負けはしたが内容は良かったと思います。

香港戦ではまたミスを連発してしまい自分のプレータイムは短くなってしまいました。チームは勝利したが、自分自身にとっては反省点の多いゲームでした。

オーストラリア戦ではオフェンスで流れを作るのに加え、皆で協力して攻めるディフェンスを実践してみたら流れを楽にこちらに引き寄せることができました。それを最後まで維持できたことが勝利に繋がりました。

ギリシャ戦は全く歯が立たない相手だったわけではなく、自分達のやるべきことをきちんとやらなかったのが敗戦の原因であり、悔しさだけが残った試合となりました。

中国戦は最初から最後まで全く気が抜けない接戦だったが、一点差で勝つことができました。これはメンタル面での勝利だったと思います。二年前のリベンジを果たすことができて、最高な気分でした。

ウクライナ戦は相手の身長が特に高いためスクリーンアウトを徹底して行うことを皆で何度も確認して試合に臨みました。最初は互角な戦いが出来ていたがどこかでディフェンスの穴、隙を作ってしまいゴール下にボールが渡りシュートを決められ、だんだん点差が開いてしまいました。

結果は六位だったが二年前の世界選手権のときとは明らかに違う成長したチームを感じることができ、非常に満足して日本に帰ってくることができました。

選手　　真野　美千代

①成績に対する自己評価

台北デフリンピックでの女子バスケットボールは６位という成績を収めることができました。この成績に対しての自己評価は、25 ～ 30 点位、と思っています。試合に出た時間が少なかったことが理由ではなく、この試合に出ていたわずかな時間、自分がチームに貢献できるほどの力・能力を発揮していなかったことの結果です。

しかし、限られた時間の中、監督・コーチから言われたこと以上の仕事ができるよう、ディフェンス時には、自分のマークマンにボールが渡らないように台形の外に押し出したり、スクリーンアウトを掛けて相手にジャンプしてボールを取らせないよう、執拗なディフェンスを心がけた点、また、オフェンス時には、チームメンバーには劣るけれども、相手チームよりも出来るだけ早くセンターのポジションへ走ったりした点は、自分の目標を達成していたと思います。

②反省・まとめなど

合宿や現地の練習・試合で言われていた課題（スクリーンアウト、リバウンド、ボールに対する執着心、など）を本番で100% 出し切れていなかった点、また、「自分はこれを極めてやる！」という強い思いを持たなかったために、パスミスや失点などが多かった点が非常に悔やまれます。総合的に判断すると、自分のメンタル面の弱さが最大の反省点です。

今回の台北デフリンピック出場にあたって、我ら日本女子バスケットボールチームは監督・コーチが就任して１年弱という短い期間であったにも関わらず、チームワークが非常に優れていました。このチームワークの良さに合宿・大会中何度も助けられ、自分のためだけではなく、このチームのために発奮しなくては、と思えたこと、選手としてもっと精進して極めなければ、と思えたことが大きな成果になりました。最後になりましたが、色々とご助力、ご指導下さった方々に心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

選手　　三宅　里歩

第 21 回夏季デフリンピックは台湾（台北）で開催され、日本からは選手 154 名、役員 90 名、合計 244 名が 12 の競技に参加しました。台湾では地域全体がデフリンピックを盛り上げ、特に台北市ではデフリンピック一色になっていました。

開会式はオリンピックと同じような開会式でアトラクションがあり、入場行進が行われ、聖火台への点火があり、とても感激しました。そしてあの有名な千手観音がアトラクションに登場したときは、驚きと感動で一杯になり、見入ってしまいました。

バスケットボールの試合ではやはり外国の選手は背も高く、大きく、さらに動きも速く、技術面でもとてもレベルが高く感じました。

予選リーグを２勝２敗の３位で決勝トーナメントに進出することが出来ましたが準々決勝でギリシャに負け、順位決定戦で中国に勝ち、ウクライナに負け、６位という結果になりました。けれど香港、オーストラリア、中国に勝つことができ、アジアナンバー１になることができたこと。そして４年前のデフリンピック（メルボルン）で負けたオーストラリア、２年前の世界選手権（中国）で負けた中国にリベンジを果たすことができ、良かったと思います。

私は、あまり試合に出ることはなかったけど、それでも学ぶことは数え切れないほど沢山ありました。

今後、体格で劣る日本がこのような外国のチームに勝つためには、スピードと持久力、そしてシュートの決定率を上げることが課題だと思います。

試合の観戦時にはいろいろな国の選手と話すこともでき、記念に写真を撮ったりといろいろ交流することが出来ました。

帰国してから分かったことですが、女子バスケットではスウェーデンに私と同い年の選手がいて私たちが一番若かったこと、それと私が一番小さかったです。 バスケットの選手団は閉会式の前に帰国したのですが、インターネットで TV 中継されていた閉会式の様子を見た両親から、閉会式も開会式と同様に素晴らしかった、と聞き私も閉会式に出ていろいろな国の選手ともっと交流したかったと思いました。

２年後の世界選手権、４年後のデフリンピックを目標として今後、体力面の強化はもちろん、人として一回りも二回りも成長しなければ、世界では絶対通用しないと思います。 世界という大きな舞台でバスケットが出来るということ、それが出来るという環境は、本当に自分にとって大きな財産であり、価値の

あるものだと思います。また、この年齢でデフリンピックという大きな大会に参加出来たということ、本当に周りの環境にも、すごく恵まれていたんだなと思います。

家族や周りの人、先生、友人、かけがえのない大切な人達･･･私の為にたくさんの方たちが支援してくれ、そして応援してくれました。心から感謝の気持ちでいっぱいです。『ありがとう』の言葉だけしかありません。

私にとって夢であり目標であったデフリンピック。かけがえのないとてもいい思い出となりました。

選手　　的場　友里恵

台北デフリンピックに出場して、激戦の末、６位入賞という結果になりました。目標としていた銅メダルには届かなかったが、決勝トーナメントに進出できたこと、アジア No. １になれたことなど、今まで以上にベストを尽くせたことは、本当に嬉しかったです。

今まで戦ってきた試合の中で、一番印象に残っているのは中国戦です。２年前の世界選手権大会で大敗し、リベンジしたい！！という気持ちが強く、いつも以上に気合を入れて戦いました。点を取っては取られるという、まばたきすら忘れるような気の抜けない大接戦になりました。そんなときでも、チームで「負けない！！」という気持ちを持って、最後まであきらめないで戦った結果、１点差で勝ちました。１勝することの苦しさ、勝利の嬉しさをこんなに感じたことは今までの試合の中で初めてというほどであり、涙が止まりませんでした。

私は、香港戦に少しだけ出してもらいましたが、日本では感じなかったプレッシャーが体にのしかかり、手の震えが止まりませんでした。少しでもチームに貢献したい！と思いプレーをしましたが、いきなりファールを取ってしまい、逆に足を引っ張ってしまったことが今でも悔いが残っています。

身長も体格もすべて外国人には劣る日本だが、それでも６位に入賞できたのは、何より「気持ち」だと思います。どんなに高い相手でも、どんなにパワーのある相手でも、あきらめない気持ちさえ持っていれば勝てるということをこのデフリンピックで学びました。

デフリンピックに出場するにあたって、応援してくれた家族や職場の方々、友人、試合相手になってくださった方、合宿施設を提供してくださった方、ろうあ連盟の方、たくさんの方々の支えがあったからこそ、ここまで来れました。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

選手　　富田　望

＜今回のデフリンピックへの参加を通してのまとめ＞

私の中では、世界６位という結果よりも、結果を出す為に、やってきた内容・その過程のほうが大事だと思っています。前回と比べると、学んだ内容が、量・質的にも重く、だからこそ結果がついて来たことに対して、嬉しく思います。また、同時に、この大会を通して、学んだことや経験したことを、次に繋げていけるようにしていかなければならないという責任感も感じています。

私の場合は、今回、遅めの到着、早めの帰国となり、特別な扱いを施して頂いた所がありました。立場上、長期不在や、特別な配慮をして頂いている点で、チームメイトの皆に迷惑をかけてしまったのではないかと、そういう心配を色々していたのだが、そういう危惧をも吹っ飛ばしてしまうぐらいに、暖かく迎えてくれたチームメイト、また、特別な事情を理解し、後ろを押してくれた監督、コーチには感謝しています。

事実、そういう特別な環境の中で、デフリンピックへの参加を決心するのは、簡単ではなかったし、また皆とあまり練習できないというブランクは、不安要素の一つでありました。だからこそ、チームメイトが勇敢に、コートの上で世界の強者達とやり合う姿は “お前だけじゃないよ。皆で勝つんだ” と言われているようで嬉しかったです。また、監督、コーチの “お前はやれば出来る！！” と、選手を信じぬく姿に、頭を殴られたような気持ちになりました。私は何を不安がっていたのだろうと。

この大会で学んだことを一つ挙げるなら、「信じる」こと。選手がお互いに信じ合うこと。監督、コーチも選手を信じる。それも言葉だけじゃなく、行動で。

そして、私にとっての最後の試合の日、オーストラリア戦で、日本が一勝した時には、初めて試合に勝ったかのように、皆で喜びました。この日を最後に、私は台北を後にしましたが、しばらくは、あの感動とあの瞬間が頭にこびりついて離れませんでした。

もちろん、私が帰国した後も、試合は続き、日本女子は香港相手に黒字をつけ、世界六位という結果を残します。

全体としてみると、まだまだ反省点もあるけれど、日本のこれからに繋げられる内容であったと思っています。また、私自身も選手として、人間として、一回り成長できたように思います。

ビーチバレーボール競技チーム

選手選考

2007 年３月より強化合宿を実施し、2008 年７月ジャパンデフビーチカップ 2008 の試合結果に基づき、女子ペア３組を強化指定し、１年に渡り強化育成を行った。

2009 年５月ジャパンデフビーチバレーボールカップ 2009 を開催し、優勝・準優勝ペアをデフリンピック台北 2009 日本女子代表とした。

なお、男子ペアは、世界のレベルが健常者トップ競技並みに高く、日本代表候補のレベルが一定の力に達せず、派遣を断念した。

戦績一覧

日本代表女子Ａ　沼澤真理・藤田琴美ペア

月日	対戦相手	国名
	スコア	備考
9/6	DUDINA・GRIBOVA ペア	ロシア
	1 (18-21,21-19,9-15) 2	
9/7	Bednarek・Zerjatke ペア	ドイツ
	0 (19-21,16-21) 2	
9/9	Gratzer・Rossini ペア	スイス
	2(21-6,21-19)0	

9/10	Cherezova・Kurjiyamska ペア	ウズベキスタン
	2(21-14, 21-10)0	ベスト 16 進出
9/11	EDNAREK.CHSENBAUER ペア	ドイツ
	0(12-21,12-21)2	ベスト 16 決定

日本代表女子Ｂ　平井望・會本聡子ペア

月日	対戦相手	国名
	スコア	備考
9/6	NIKIFOROV・ACHIN ペア	アメリカ
	2 (21-19,21-18) 0	
9/7	Aleknaviciute・Lukosiute ペア	リトアニア
	0 (12-21,6-21) 2	
9/8	Matvienco・Lavrov ペア	イスラエル
	2 (21-16,18-21,15-10) 1	
9/10	Chou・Yu ペア	中華台北
	2(21-12, 21-8)0	ベスト 16 進出
9/11	LAANSOO・PARN ペア	エストリア
	1(21-23,21-15,12-15)2	ベスト 16 決定

成績と評価をペア、個別に述べる。

1　沼澤・藤田ペア…第１代表ペアとして遺憾なく実力を大会でも発揮することができた。抽選結果が悪く結果はベスト 16 だが、能力的にはベスト８と同格。非常に明るく、見ている人たちを楽しくさせてくれるペアである。今後の活躍が期待できる。

2　平井・會本ペア…どちらも身長的に高いためにレシーブが安定するとネット際の強さが発揮できるのだが、大会ではそこに至らなかった。平井のリードに対して會本が引き気味の部分が見えたのが残念。もっと、お互いが意見をぶつけあい納得の行く形で大会にのぞませたかった。結果はベスト 16 だが、能力ではベスト８．そのチャンスが大いにあったにも関わらず逃したのもそこが原因。コミュニケーションの向上をはかり、今後の活躍を期待したい。

3　沼澤選手…１年半前の初めての合宿から参加。身長的には 160 前後で苦しい部分は否めないが、それを補うプラス思考で代表選手たちのムードメーカーだった。左利きということで相手も対応が遅い面も見られた。初めの半年はペアとの相性がうまくいかず、何人かと試す形で進み、精神的にも苦しんでいたが、藤田と出会い吹っ切れることができた。どんなボールでも最後まであきらめない気持ちを大会でもプレーで魅せてくれ、現地の人々や応援にかけつけた方々を魅了した。今後もビーチに関わり、先駆者としてのプライドと明るさを次期代表へと受け継いでもらいたい。

4　藤田選手…１年前からの参加で代表の中ではビーチ経験が一番短い。しかし、インドアで磨いたレシーブ力を生かし、身長が低いことをものともせずに拾い捲った。加えて、風や、砂浜、陽射しの影響でスパイクは難易度が高いのだが、しっかりと計算して、狙った所へスパイクを打てるようになった。大会でも練習と同じように沼澤にリードされながら、生き生きとプレーができ、現地の人々や応援にかけつけた方々を魅了した。まだ年齢的にも若いこともあり、これからは自分がリーダーとなり４年後のデフリンピックへ向かい普及と技術向上に貢献してもらいたい。

5　平井選手…１年半前の初めての合宿から参加、代表の中で一番ストイックに自分の生活を送っていた。とくに、体重管理などに関しては日ごろの生活からしっかりと考えて取り組んでいる様子が見られた。ただ、精神的に弱い部分があり、大会では持っている能力を発揮し切れなかったことが非常に残念であった。能力的には低いわけではないので、レシーブ力と一本への執着心や、精神面を磨けばまだまだ成長が期待できる選手である。

6　會本選手…１年半前の初めての合宿から参加。代表の中では一番身長が高い。そのため、ネット際が強いのが彼女の特徴。スパイクもそれにともない代表の中で一番の能力であった。しかし、大会では彼女の輝きを魅せることができなかった。自分の意見を言えなかった彼女だが、大会が近づいた頃にはプレーの質問であり、意見を言えるようになって成長が見られた。まだまだ、レシーブやサーブなど伸ばせる部分はあるので、これからもデフビーチ発展のために先駆者として活躍してもらいたい。

チーム体制と各コーチの役割

監督 / 今井起之
手話通訳 / 大石歴
トレーナー / 太田夏未
ＧＭ (男子バレー兼務)/ 大川裕二
マネージャー (男子バレー兼務)/ 古徳愛子
＊派遣費は全額競技団体負担となり、財政的な事情により、コーチ及び専属マネージャーを配置していない。

競技スケジュール

９月３～４日練習
９月５日　ＴＤ会議、開会式
９月６～ 10 日　予選リーグ　＊ＡＢＣＤの４組に分け、各組上位４位までがベスト 16 に進出
９月 11 日　ベスト 16
９月 12 日　ベスト８
９月 13 日　準決勝
９月 14 日　決勝、３位決定戦

大会競技運営の報告

競技運営については、滞りなく進行され、大きな問題はなかった。

大会運営については、ＴＤ会議の説明で「予選で同じプール内のチームは、決勝トーナメント初戦は当たらない（既に対戦済みのため）」というルールの説明があった。しかし、１度全ての組合せ抽選が終わった後、確認すると上記の状態になっていたため、再抽選を行うことになったが、その際、本来ならば「全ての組み合わせをやり直す」はずが、「特定のチームの組み合わせのみを入れ替える」ことをしようとしたため、日本チームから英語音声により抗議した。

国際ルールでは、「その様な方法で組み合わせの訂正を行う場合には、抽選前に告知する必要がある」が、特にアナウンス

メントもなく、また運営委員会の方々も気付いていない状況であった。

なお、国際手話で対応するよりも、審判員、競技役員に健聴者が入ることから、英語通訳を確保する方が効率的であると考える。

競技規則の適用

2009－2012　ＦＩＶＢビーチバレーボール競技規則に基づく。

大会参加までの準備

７月上旬に現地視察を行い、砂質、住環境、食事面をリサーチした。

反省・まとめ

全体総括／監督　今井起之

まず、今回がデフビーチ初のデフリンピックの参加であったこともあり、大会前から大会終了までの日程を振り返り、その後にそれぞれの中での課題などを述べ、イスラエルの世界大会や４年後アテネデフリンピックへよりよいかたちで引き継げたらと考える。

２日：選手団とともに選手たちは空港で台湾の人々に迎えられフラートンホテル入り。
３日：ＩＤ作成後にビーチバレー大会会場のヒスイ湾へ（台北市内からタクシーで 45 分程度 600 元）。
４日：大会会場での練習。
５日：自分はＩＤ作成とＴＤ会議へ参加（大川副理事長、手話通訳の大石さんも同席）。選手と合流し（選手はタクシーを使って市内まで移動）、開会式へ参加。19 時半からスタートし、23時に終了。その後、タクシーでヒスイ湾へ。
６日：予選リーグスタート（４グループ×５チームによるリーグ戦）。
日本Ａ（沼澤・藤田）Ｃグループ　日本Ｂ（平井・えもと）Ｄグループ。
10日：予選リーグ終了　上位４チームが決勝トーナメントへ進出。
※試合結果は別紙参照
その日の最終試合終了後に会場横のテントで決勝トーナメント抽選。
11日：決勝トーナメント（トップ 16）スタート。
日本Ａ、Ｂとも敗戦。　結果　世界ベスト 16。
12日：インドア女子バレー準決勝応援。
13日：自分と大石さん帰国。選手はトレーナーの太田を中心に行動。
14日：決勝トーナメント終了　※試合結果は別紙参照
15日：ＴＤ会議（太田トレーナー参加）、閉会式。
16日：選手団とともに帰国。

まず、世界のレベルを目の当たりにしてみて、やはり、背の高い選手が多いことがわかった。しかし、これなら４年後のメダル獲得は 50％～ 70％可能であると私は実感した。今回は選手たちの経験不足を補えない指導力だったためにベスト 16 という結果だったが、２チームともベスト８に残れる力はあった。それはレシーブ力が世界トップのレベルであることがわかったからだ。２年弱での指導で０からのスタート。風を使ったパスの仕方、２人での基礎的・基本的なフォーメーション。なにより、健聴者とのつながり。自分の描いていた台北デフリンピックまでの過程や試合中のプレーは選手の持ち味であるレシーブが多々見られた。指導方針と指導計画は適当であったと考えている。

全体を通して言えることはスタッフが少ないことで、手話通訳が書類の英訳などの事務的な仕事を兼務したり、トレーナーがタクシーの手配や食事の調達などマネージャー的な仕事を臨機応変に兼務したりと専業以外での時間をさいてもらう部分が多く出てしまった。これは大会に関する書類から全体計画をしっかりと事前に把握すれば解決できる部分であった。国際大会にのぞむ体制としてはいささかいい加減だったと言わざるをえない。

４年後のメダル獲得には４年間での普及と強化の大きなビジョンと１年間ごとのような短めの期間での目標と計画を早急に立案し、行うことが大切であると考える。また、協会側には書類の翻訳者及び国際手話の通訳の確保が必要である。

GM　大川裕二

初参加の故、人材と予算、補助金と競技団体負担、ソロバンを弾きながらのマネジメントはさながら零細中小企業のオーナーのようであった。ビーチバレー派遣費は全額競技団体負担との上部団体の決定。必要な派遣費用額は 200 万円と見積りが出された。これをどう工面するか。

本職を持つ、任意団体のマネジメント担当役員の活動時間は限られている。かつ、聴覚障害がある役員と健聴者の関係者等とのセールスやマネジメントのやり取りはメールに限定されてしまい、休日に一日中メールを打たざるを得ないこともあった。一方では、現場スタッフ、選手、選手所属、スポンサー、上部団体等の多方面に渡る資金や登録にかかるやり取りや、時にはトライアウト告知や競技団体負担、現金授受の生々しい説明に追われた。

バレーボールを愛する役員ではあるが、プレーには殆どかかわらず、ボールを触ることも無く、現場や上部団体との軋轢解消のためのマネジメントやデスクワークに追われ、ボランティアで活動するという大変ハードな業務であるが、これを正当に評価するものは殆どいない。また、職場等への休暇申請は、役員では理解されにくい面があった。

デフバレーには、候補選手はいる、指導者は確保できる、しかしながら、マネジメントを担う役員が不足しており、マネジメント役員の環境、業務内容、報酬等を見直していかなければならない。同時にマネジメント担当役員の育成が急務であると考える。

障害者スポーツ＝ボランティア役員という概念を破壊し、新しい役員のスタイルを確立していなければ、４年サイクルでのスクラップ＆ビルドが繰り返されることになり、デフバレーボールの継承と継続的な発展は厳しいものになるであろう。

役員レポート

手話通訳　大石歴

1. 団体内での担当、及び内容について

選手が関わる全てのコミュニケーションにおける通訳
（監督・トレーナー・ホテルフロント・現地スタッフ、等々）

2. 反省

監督・トレーナーの通訳時にはスポーツ用語・知識等が必要不可欠だが、大会までの帯同期間が長かったことで自然と身に付けることが出来た。また、その期間内で既にチーム内の関係が築かれていたため、複雑な内容でも選手と意思疎通が出来ていたと思う。

現地では様々な言語が飛び交っていたため通訳が困難な場面もあった。そのような状況の中、拙いながらも出来る限り通訳をするように務めたが、今回のような国際大会の場では他言語⇔日本手話の技術の必要性を感じた。

１日の主な流れとしては、【練習】→【試合】→【反省（ビデオ使用）】。試合は午前になることも午後になることもあるのだが、２チーム参加ということで時間の幅がかなりあり、概ね全てを終えるのは 20 時前後。長丁場の通訳ということでかなり疲労するため、通訳者にも体力が要求されたが、その部分においては、自身が男性ということもありクリア出来たと思う。

3. 問題点

ⅰ．マネジメントスタッフの不在

上記担当内容以外にも、食料の買い出しや本部／協会との連絡役も同時に担っていた。負担という程ではないが、通訳に集中するためにはマネジメントを専門で行うスタッフがいた方が良いのではないだろうか。

ⅱ．立場の明瞭化

今大会への志は、「選手がベストコンディションでプレーできるよう、環境を整えるために出来る限り努力する」というものだったため、上記のような担当外の内容についても積極的に行うようにしていた。だが、そこに到るまでには「どこまですべきなのか」という葛藤があった。通訳者として派遣されているのだが、実際に行っていることは本来通訳がすべき領域を逸脱しているからだ。

通訳者は、ろう者の主体性を尊重するという観点から、通訳が必要な場面以外では自主的に動くことが良しとされていない。例えば、上記の買い出しはもちろんのこと、練習時の玉拾いの手伝いですら本来は通訳がすべきことではないだろう。だが、現実としてマンパワーが不足しているのであれば、そこを補うことが志を果たすことに繋がるのだと考えた。

「通訳」なのか「スタッフ」なのか。求められている仕事は通訳のみなのかそうではないのか。その部分を初めに明瞭化する必要があるのではないだろうか。

トレーナー / 太田夏未

９月２日からの大会は海外ということで水や食事に関しては特に注意していました。水は毎日ミネラルウォーターが支給されたので問題なかったのですが食事には悩みました。台北市内のようにホテルの近くにお店がなく、コンビニ弁当やカップラーメン、カロリーメイトに頼る状況だったからです。毎日コンビニ弁当では偏った食事になっていたので、大川さんや古徳さんが届けてくださった果物やお弁当にはずいぶん助けられました。なので今後の遠征時（特に海外）にはご飯だけでもしっかり食べられる環境を確保するため、インドア男子バレーのように炊飯器を持参するのが良いと思います。

それから選手が女性なのでチームに一人は女性のスタッフが必要だと思います。決してトレーナーは女性が望ましいと言う訳ではなく、コーチや通訳なども含むスタッフのうち一人でも女性スタッフがいれば選手も安心するのではないでしょうか。同姓の方が相談しやすいこともあると思いますし、ドーピング検査などには付いて行く必要があるからです。

今大会中私はマッサージをメインに行ったのでチームには『トレーナー＝マッサージする人』というイメージが出来てしまったのではないか不安になりました。トレーナーの役割とはスポーツ傷害の予防・スポーツ現場での救急処置・ケガから復帰するまでのリハビリやトレーニングメニューの作成・体調管理・選手に対する教育的指導などであり、マッサージだけがメインではないことを理解していただきたいと思います。

今回代表に選ばれた選手は４人とも練習熱心で意識が高く、常に質問や相談してきてくれたので私もやりがいがありました。出発前はたった２回の合宿参加で大会に臨むことやビーチバレーのホテルが本部から離れていること、長期海外遠征であることなど不安ばかりでした。実際大会が始まってからも食事や環境の違いなどに苦しみましたが、そのような条件の下でもベスト 16 という成績を修めた選手たちは素晴らしいと思います。

とても貴重な体験が出来たろう者の方やデフリンピックとの関わりを今回限りにしたくはありません。今後も機会がありましたら皆さんのスポーツ活動をサポートしていきたいと思っています。本当にありがとうございました。

選手レポート

選手　沼澤真理

前回メルボルンデフリンピックに参加したことがありますが、バレーのスタッフでした。
今回はビーチバレー選手としてデフリンピックに初めて参加します。スタッフのときの気持ちと違ってわくわく楽しみでたまりませんでした。

ずっと夢だった世界と戦うことがようやくできるので、喜びの気持ちがいっぱいでした。台北の砂は日本とほとんど変わりませんでした。我らは外国人と比べて背が低いです。そのハンディキャップを気にせず、風などで戦う技術を発揮しようと作戦を練りました。しかし、実際には無風状態で、我らは練習の成果を出せず、残念でした。

試合の結果
[予選トーナメント]
ロシア ２－１ 日本
リトアニア ２－０ 日本
日本 ２－０ スイス
日本 ２－０ ウズベキスタン
２勝２敗でした。
リーグはＡＢＣＤ４つに分かれており、それぞれのリーグで４位以上であれば決勝トーナメント進出できるシステムです。
私たち沼澤・藤田は３位でしたので、決勝トーナメント進出できました。

「決勝トーナメント」
ドイツ ２－０ 日本
一回戦で敗退。ベスト16。
私はメダル獲得のためにデフリンピックに来たが、何も貰えず本当に残念でたまりませんでした。
でも、私たち沼澤・藤田は「私たちの武器は笑顔と元気」と「観覧しているお客さんを楽しませること」それから「最後まで全力で戦うこと」３つが目標でした。
実際は３つとも完成出来たかなと達成感があります。
確かに試合に集中することはもちろんですが、観覧してるお客さんに「日本は素晴らしい！面白かったなぁ」と思わせることも大事です。
ドイツとの試合に、得点差が大きくなってしまったけど、「最後まで全力で戦うこと」が目標だった私たちは、ボールを最後まで諦めないで拾いまくりました。観覧したお客さんが「ニッポン！ニッポン！」と日本を応援してくれたことがいい思い出のひとつになりました。観覧したお客さんから頂いたお手紙に「I like your smiles」と書かれたので、本当に涙が出るほど嬉しかったのです。

今まで振り返ってみると、正直ビーチバレーを始めて１年しか経っていません。でも、毎週土日に健常者に混じって練習してきました。サポートしてくれたビーチバレーメンバーのお陰でもあります。結果を残せることが出来なかったけど、私たちは最後まで戦えることが出来たと胸を張って「ありがとうございました。」と感謝したいです。
それから私たちろう者と初めて会ってどうやったら指導したらいいのかと沢山悩んできたそして私たちの裏を支えてくれた今井監督。今井監督の言いたいことと私が言いたいことをうまく通訳してくれ、私たちに楽しさをくれたムードメーカー手話通訳の大石さん。わずか２回しか会ってないけど私たちと馴染んでくれた癒し系トレーナーの太田さん。
私たちがここまで出来たのはスタッフ三人のお陰です。ご恩を一生忘れられません。
台北デフリンピックは「負けたより経験を得たことが一番大きな収穫」と思っています。

選手　藤田琴美

「デフリンピック」
ロシアと戦った日は雲ひとつも風もなく非常に暑く、こんな日は初めてでした。帽子を被る等、暑い時の対応を考えていなかったので体力消耗が早く、とても苦しい試合でした。考える余裕がなくただ打つのに精一杯だったのか、攻撃が甘くラリーが多かったです。ロシアには勝てるのに勝てなかった。もっと我慢すればよかったと思いました。リトアニアとの試合ではリトアニアは背が高く攻められて負けてしまいましたが、自滅という内容ではなく、攻めて点を取った所が何点かあったので良かったと思います。スイスとの試合はいいプレーがたくさん出せました。１セット目は６点で抑えたが、２セット目の後半からくだらないミスが連発してしまい、２点差の勝利で恥ずかしい内容でした。ウズベキスタンとの試合は相手に合わせていた部分があったので、満足のいく試合ではなかったです。決勝トーナメント戦、ドイツとの試合では、いいプレーがあっても、ミスが多かったです。ミスをなくせば試合ができて、勝てたかもしれない。流れを自分のものにできなかったのが悔しいです。デフリンピックは初めて出たが、緊張はそんなにありませんでした。この舞台にたち、外国選手と戦える嬉しさが大きかったです。ビーチバレーを始めてから１年３ヶ月間。練習が足りないのだと実感させられた試合でしたが、初めての大会で自分の力を出せることができたのはとても良かったかなと思います。すごく貴重な経験が出来ました。そして最後に沼澤さんとペアでよかったです。とても楽しかったです！本当にありがとう

選手　平井望

ベスト16という結果だが、100%の力を出し切れず、悔いを残した試合になってしまったのが残念。海外の選手は意外と高さやパワーよりも技術という印象を受けた。日本は体格的に劣るものの、技術は世界にまったくついていけないわけではなく、経験の差だと感じた。表彰台に上がったウクライナやロシアなどのヨーロッパ勢の中に、ビーチバレーで生計を成り立てていくために毎日練習している選手もいることを知った。しかし、仕事とビーチバレーを両立させている自分でもメダルを取れるんだという証明を世界に見せたい気持ちがますます強くなった。４年後に向けて新たな気持ちで頑張りたい。

選手　會本聡子

私にとっては初めての国際大会でした。開会式でボランティアの皆さんや台北の人々から盛大な歓迎を受け、台北のデフリンピックにかける思いが十分に伝わりました。
食事管理や身体作り、トレーニングやコンディションの維持を保つなかで、自分を見失わないことを一番大事にし、モチベーションを保つよう努めてきました。
大会中では、あがってしまい、がちがちになったときも平井さんが喝を入れてくれ、気持ちをしっかり切り替えて試合に挑むことができました。
結果的には、予選リーグ２位、決勝トーナメント進出しつつも１回戦敗退という残念な結果となりましたが「日本と世界との差はそう遠くはない。」と感じました。
ビーチバレーボールよりもバレーボールのほうが経験が長いですが、これまでこれほどの刺激を受けたことはありませんでした。
数え切れないほど学ぶことがありました。
信頼できるチームメイトやスタッフと台北に行けたこと、とても嬉しく思います。
ビーチバレー仲間の皆さん、地元のバレーボールチーム仲間、いろいろな方々にお世話になりました。
心より感謝申し上げます。
ありがとうございました。

ボウリング競技チーム

監督　　邊見　新吉

(1) 選手の選考について
日本ろう者ボウリング連合から男子６名、女子６名を３年間の全国ろうあ者体育大会と全国ろう者ボウリング選手権大会の状況をもとに決めた。４年前は、男子は、アベレージ男子

200 点以上、女子 180 点以上だった。団長と話し合い、世界レベルを考えてメダル獲得を目標に調整した。男子 6 ゲーム計は 1250 点以上、女子 6 ゲーム計は 1150 点以上を方針として、男子 4 名、女子 1 名の推薦になった。

【成績(順位)一覧】

氏名	性別	シングルス 6G	ダブルス 6G×2	トリオ 6G×3	5人チーム 6G×5	総合 24G	マスターズ 16G+P	決勝トーメント決定戦
新垣匡史	男	16位	13位	13位		16位	12位	
藤岡宏明	男	30位	13位	13位		25位		
数見　満	男	87位	17位	13位		36位		
久保春夫	男	78位	17位			61位		
松清俊子	女	5位				14位	2位	2位

G：ゲーム　P：ポイント

(2) 評価

新垣　匡史

成績：シングルス戦 16 位　ダブルス戦 13 位
　　トリオ戦 13 位　マスターズ戦 12 位

15 ゲーム目の時点では総合 20 位だったため、マスターズ戦の出場 16 位以上を目標にフォームの一部変更を試み、その効果があり、最後に得点アップでき総合 16 位でマスターズ戦の進出を決めた。よく頑張りました。⑩ピンのスペアが取ることがなかなかできなかったのが残念だった。

藤岡　宏明

成績：シングルス戦 30 位　ダブルス戦 13 位
　　トリオ戦 13 位

レーンオイルは読みやすかったため、選手にアドバイスすることが出来た。右肩の痛みのため、ボールが落ちることがあった。それが無ければいい得点になったと思われる。

数見　満

成績：シングルス戦 87 位　ダブルス戦 17 位
　　トリオ戦 13 位

ショートオイルとロングオイル 2 つがあり、ボールの調整が苦しかったが藤岡選手と新垣選手からアドバイスをもらい得点をアップすることができた。

久保　春夫

成績：シングルス戦 78 位　ダブルス戦 17 位

トリオ戦の対象外(前半)3 ゲームで 200 点の連続高得点だったが後半の成績が振るわなかった。回転が足りないと思われるため、指の強化の必要がある。指が弱いため回転が不足となる。又、コントロールの調整の悪化にもつながる。

松清　俊子

成績：シングルス戦 5 位　マスターズ戦 2 位
　　決勝トーメント決定戦　銀メダル

シングルスは 5 位に入賞した。ダブルス・トリオ・5 人チーム戦は対象外だが総合 24 ゲーム計 16 位以上でマスターズ戦の進出可能となり、又、決勝トーナメント決定戦では、2 位対 3 位(1 ゲーム)決定戦を勝ち抜き 1 位対 2 位(2 ゲーム)決定戦ではコーチからの指示どおり落ち着いて投げる事ができその結果、銀メダルを獲得した。

(3)チーム体制と各スタッフの役割について

チーム体制：監督兼コーチ 1 名・コーチ 1 名・記録 1 名
スタッフの役割：
　邊見新吉：チームに関する全ての責任者、選手の送迎、会議への出席と報告、エントリーの担当、男子コーチ担当
　笹木光明：女子コーチ、選手への技術的なアドバイスを担当
　笹木るみ子：女子選手の記録、選手の送迎

(4) 競技スケジュール

4 年前は、ボウリング会場は 1 階のみ使用で競技は 11 日間であった。台北市は、1 階と 2 階の競技場使用で期間中休日 1 日で競技 9 日間に短縮されていた。又、スケジュールの変更の申請を受けて変更を行った。

1 日目　男子トリオ戦 A 組(前半) 9:00 から→ 2 日目
　　A 組(後半)12:30 から
　男子トリオ戦 B 組(前半)12:30 から→ 2 日目
　　B 組(後半)9:00 から

はじめのスケジュールでは、A 組が前半・後半とも午前スタートで B 組が前半・後半とも午後のスケジュールなっていたため条件の公平性を考えて変更を行った。

(5) 大会の競技運営について

ＴＤ会議は、国際手話を使う。世界各国の手話の違いもあるため、国際手話を使用すること。9 月 5 日ボール検量が行われた。他国では、ボール 10 個を持って来た人もいた。WTBA ルールでは、6 個まで競技使用できる。日本チームは問題なかった。9 月 6 日から 2 日間の公式練習は、1 日目ショートオイル 2 日目ロングオイルで行った。15 分間ずつレーン移動して練習を行った。選手数が少ない場合は、他国の選手と一緒の練習となったが他国コーチと選手の話し合いが長時間になり、投球する時間が短く投球不足となってしまう事がある。男子の部は 2 階レーン、女子の部は 1 階で競技した。4 年前は男子・女子 1 階レーンでの競技だった。

8 日の公式試合のスタート時間は男子 A 組朝 9 時～　B 組午後 2 時～　女子は午後 1 時～　4 種目を行った。

1 日目　男子、女子シングルス戦の 6 ゲーム投球
　　→ 6 ゲームの合計点数
2 日目　男子、女子ダブルス戦の 6 ゲーム× 2 人投球
　　→ 6 ゲーム× 2 の合計点数
3 日目　男子、女子トリオ戦(前半)の 3 ゲーム× 3 人投球
　　→ 3 ゲーム× 3
　　男子、女子 5 人チーム戦(前半)の 3 ゲーム× 5 人投球→ 3 ゲーム× 5
4 日目　男子、女子トリオ戦(後半)の 3 ゲーム× 3 人投球
　　→ 6 ゲーム× 3(前半・後半合計点数)
　　男子、女子 5 人チーム戦(後半)の 3 ゲーム× 5 人投球→ 6 ゲーム× 5(前半・後半合計点数)

マスターズ戦は、シングルス・ダブルス・トリオ・5 人チーム戦の総合 24 ゲームの合計点数となる。総合 24 ゲーム合計は男子、女子とも 16 位以上がマスターズ戦の進出できる。ダブルスとトリオと 5 人チーム戦の出場ができなかった場合、対象外の投球となる。

決勝トーナメントの優勝決定戦は、マスターズ 16 ゲームの

合計３位以上でトーナメント決定戦に進出できる。３位対２位決定戦の１ゲームで勝ち、１位対２位決定戦の２ゲームで勝てば１位になる。トーナメント決定戦のレーンは、ショートオイルとロングオイルどちらにするかは自由に選ぶことができる。

(6) 競技規則の適用(問題点など)

WTBA のルールにのっとって開催されていた。ボール検量と補聴器チェックなども行われていた。４年前、ユニフォームの国名だけだった。WTBA のルールでユニフォームは国名と名前を表示しなければならない。ボールは６個まで。ショートオイルとロングオイル２つの競技場を使用すること。ダブルス・トリオ・５人チーム戦は、エントリーを決められた時間までに提出すること。

(7) 大会参加まで準備状況について

４年前のメルボルンデフリンピック終了後から強化合宿を年２回実施し、今回の台北デフリンピックを目標に実施してきた。男子９名女子 10 名選抜した。チームワークの強化と選手どうしのコミュケニーションを円滑にすることも目的とした。メルボルンデフリンピックは男子女子とも全種目に出場したが、今回、女子は他種目に出場しなかった。

(8) まとめ・反省

期間は、９月２日から９月 16 日まで 15 日間。成田と関西２つの空港から出発だったが選手に関しての連絡はスムーズにできた。ホテルからボウリング会場は、シャトルバスで１時間位かかる。バス時間と競技時間の調整は大変だったがスムーズに移動することができた。試合のスタート時間は朝早く、朝食時間が間に合わず軽食を注文した。

次回は、ホテルからボウリング会場への移動時間を 15 分から 30 分位に配慮してもらい、ゆっくり朝食を食べる事ができるようにほしい。４年前は選手どうしのコミュニケーションが少なかったと聞いたが今年は選手男子４名女子１名のコミュニケーションがスムーズでよかった。チームワークやコミュニケーションがスムーズにできたのは、３年間の指定選手強化合宿の成果だと感じた。

ボール設置についてはボウリング会場の担当者と話し合い確認した。９月４日が日本選手のボールバッグ設置の日と思ったが担当者から出来ないと言われた。理由は、日本は５日のボール検量終了後にボール設置が可能であるということだった。理解不足で反省した。

公式練習は２日間、ショートオイルとロングオイル２つがあるが読み取ることが難しかった。公式練習と公式試合はオイルの違いもある。ボール調整は、ショートオイルのボールが合うかロングオイルのボールが合うか選択することが大事である。

選手の中には体に痛みのある人もいたがトレーナルームで相談することができた。又、ドーピングについて、禁止の薬等を確認することもできた。

競技種目の中で女子ダブルス・トリオ･５人チーム戦と男子５人チーム戦に出場なかったことは残念だった。目標はマスターズ戦へ進出だった。日本は２名出場を決めることがきた。又、女子シングルス戦の松清選手は５位に入賞。決勝トーナメント決定戦の松清選手は銀メダルを獲得。８年ぶりメダルの獲得となった。マスターズ戦の新垣選手は 12 位と健闘した。４年後はもっと技術を磨くことを期待している。

男子はダブルス･トリオ戦はメダル獲得できず残念だった。笹木コーチはアドバイスが大変上手く感心した。松清選手は年齢を感じさせず、若い選手に負けず 43 ゲームを投げ、銀メダル獲得本当におめでとうございました。

課題は、他国では健聴者コーチもいる。日本としても健聴者コーチも採用することで、選手の技術や知識の向上が期待できると思われる。今後、健聴者のボウリングとの関わりが必要と考えている。４年後は、ギリシャ・アテネで開催される。男子メダルの獲得を期待したい。男子、女子とも全種目の出場できるように要望したい。検討おねがいします。最後に、団長・総務・事務局・台北ボランティアの皆様には、15 日間いろいろお世話になり、本当にありがとうございました。

女子コーチ　　笹木　光明

９月２日　朝　第１班　選手団に成田国際空港第２旅客ターミナルの中で特別部屋を借りて壮行会を開催してもらいました。４年前に参加した時と違っていて、感激しました。厚生省・JAL 関係者の来賓方から応援の言葉を頂き、又、CA キャビンアテンダントの５名様も台北空港到着まで同乗しましたが、手話が出来るのでびっくりし感激しました。

３日　朝　台北フラートンホテルの 17 階で、全選手団が集合して、結団式を開催し、日本人会関係者の来賓方から応援の言葉をもらいました。ますますやる気が高まり、選手達はもちろん､僕達スタッフも負けられないと言う気持ちになりました。

その後、夜　開会式が行われてスケールの大きさにもの凄く感激しました。

５日から 14 日まで、４階建(120 レーン位)ボウリング場の(実際に競技に使われるのは 1,2 階のみ)31 ～ 120 レーンで競技なりました。女子の部は１階・男子の部は２階を利用して、同時に競技を行います。６日から２日間は練習日でレーンコンディションのオイルパターン・アジセスライング等を良い所、悪い所の調子を探ってつかむため、投球練習を重ねました。

８日から６日間競技を行い、男女分かれるためコーチも分けないといけないため、スタッフ３名で相談して、男子部コーチは邊見担当、女子部コーチは笹木担当と決めて行動しました。

女子部は松清選手１人だけでメダルを獲れるのは個人戦のみで、結果は５位(1061 ピン)に入賞しました。しかし、練習レーンと本番レーンが違って、オイルパターン・アジセスライングをなしめたような苦しいレーンでした。女子ダブルス、トリオ、団体戦は松清選手１人だけだったので組合せが出来ないために出場できずそのかわり、マスターズ戦(上位 16 名)を目標にして 24G 行い、総合として 14 位(4094 ピン)になり、マスターズ戦の挑戦権をつかみました。

マスターズ戦は 16 名によるリーグ戦(何勝何敗＋ポイント、勝ち 10 点、同ピン５点、負け０点)の勝負です。結果は 13 勝３敗(2939 ピン +130 点)3069 点で２位を取って次は優勝、順位決定トーナメントへの挑戦になり、２位、３位(1G)対戦して見事、相手選手の記録を破り、勝利して３位はギリシャ選手でした。１位、２位(2G)対戦して結果、台北選手は 386 ピン・松清選手は 331 ピンで残念ながら負けましたが、銀メダルを獲れました。金メダルを獲れなかったのは本当に残念でしたが、しかし、６日間として見ると年齢的に松清選手は今回の参加選手の中では上の方でしたが、気力、耐力で戦って来た松清選手には僕の頭が下がる思いでした。松清選手はとても立

派で感動しました。

「反省・まとめ」

ホテルからボウリング会場まで往復すると２時間半位かかるため移動するのがとても大変でした。ホテルからボウリング会場までのバスの時間・競技時間と組合わせてスムーズに移動できる時間を調べて移動するのはとても大変でした。朝食はゆっくり食事をする時間はなくなり、軽食ばかりになるため、体力消耗する感じでした。次からは出来れば１時間以内で交通移動できるホテルや会場を希望したいです。今年は選手達の数が少ないが、これからもっと多数の選手達をつれて行く事をめざして頑張って行きたいと思っています。

コーチとして関わるようになって初めてメダルを取ったが、少々自信がつきました。これからも金メダルを目標にして腕を磨いて優秀な選手達やスタッフと一緒に頑張って行きたいと思っています。

スタッフ　　笹木　るみ子

９月２日　成田空港にて、選手団、スタッフ達は集合場所に行って、公式ジャージを受け取って着衣しました。そして特別待合室にて出発式を行いました。スポーツ委員会役員、空港役員、デフリンピック団長が挨拶をしたり、選手達と一緒に楽しんで話が出来ました。たくさんの方が応援して下さり、見送られました。おみやげ話を期待する顔が見られました。そして、いよいよ台湾へ！！どんな国かなとわくわくしながら台湾に入りました。日本と似ているところも多いのですが、交通は、日本とはかなり違うように感じました。車間距離がなく、ギリギリで走っているし、スクーターも多いので危ないと思っていました。ホテルのツインルームは広い部屋で落ち着いた様子でした。

いよいよ、開会式に出場！！ボランティアの人達がたくさんいて驚きました。大学生のボランティアの人がたくさん活動なさっていてビックリしました。日本語の書き方は上手で、明るいし、楽しいボランティアさん達でした。日本の手話を少し教えて会話しました。

ボウリング会場へ行って、６日～７日練習、８日～14日試合を行いました。私はスタッフとして、笹木コーチと松清選手と一緒に活動しました。日本選手として男子選手４名、女子１名の５名とスタッフ３名の８名参加しました。男子シングルス戦の結果は（153名参加中）＝新垣選手は16位に、藤岡選手＝30位、久保選手＝78位、数見選手＝87位でした。女子シングルス戦（66名参加中）松清選手は５位に入賞出来ました。マスターズ戦進出をかけて24Gで投球しました。結果は男子＝新垣選手16位、女子＝松清選手14位に入りました。２人共マスターズ戦に進出しました。次に決勝戦に進出するため16Gのスコアと勝負によるPの合計をきそって投球しました。１位～３位トーナメント決定戦に進出する事よって松清選手は２位に入りました。新垣選手は惜しくも12位に入りました。

松清選手と笹木コーチと息の合った場面もあり、落ち着いた様子で相談しあったり、アドバイスや簡単な指導を受けながら松清選手は決勝戦で一生懸命投球しました。松清選手はようやく銀メダルを獲得出来ました。参加選手の中で年齢としては上でしたが、他の選手、審判達も松清選手の年齢の事を聞いて驚いた顔をしていました。凄くほめられたり握手したり、拍手喝来してくれました。松清選手は本当にすばらしいと思いました。私はスタッフ役で陰ながらずっと見ていましたが、笹木コーチと松清選手は素晴らしいコンビだと思って「ホッ」と胸をなでおろしました。

15日閉会式で一番おどろいたのは食事会です。過去にも参加した事のある選手、スタッフ達が今までの閉会式では食事会はなかったと言っていました。めずらしい閉会式でした。とても美味しく、楽しい食事会で、時間があっという間に過ぎ、夜10時にようやく閉会しました。

選手　　松清　俊子

台北デフリンピックへの日本代表選手推薦内定通知が届き胸が高なりました。しかし女子選手は私一人だと知り「なぜ私一人なの？」と不安を募らせ寂しくてたまりませんでした。強化合宿最後の日に精神的不安定な私に数見順子さんが「重庄に耐えてるのは、みんなよくわかってる。みんなであなたを応援してるよ。だから元気で頑張っていきなさい」と応援してくれました。

目を閉じて深く深呼吸してみんなの声援が見えてくる。ジタバタせず今までの努力の積み重ねを信じて世界の舞台で自分の愛するマイボウルを転がす。また、焦るな、焦るな、今まで十分練習してきた後は体調を整えて、自分を信じようと思っていました。出発日は、不安を抱きながらはじめての台湾の土を踏みました。８日の女子シングルス戦スタートからレーンの読み取りが難しくとまどいましたが笹木コーチから「落ち着いて、何も考えず、気楽に投げて」とやさしくアドバイスをもらい、気持ちを楽にチームワークからパワーをもらって集中することが出来ました。しかし連投するまでは、苦しかった。

多くの声援を受けて世界に臨んだので頑張るしかないと思っていました。最後の女子マスターズ戦で三位（ギリシャの選手）を倒し、一位の強敵台北と戦いましたが結局は勝てませんでした。でも生まれてはじめて銀メダルを獲得し、嬉しかった。そして心で泣きました。表彰台に立つ時、沢山の人々が拍手の中、カメラのフラッシュが、とても恥ずかしかった。共に過ごしてきた笑顔のたえない本当に良いチーム、邊見監督、笹木コーチ、笹木スタッフに対して言葉では表わせないほど感謝します。有り難うございました。

銀メダルを手に入れて、まっ先に日本にいる笹原プロ、仲間の選手達、主人に報告しました。

今後は、好きなボウリングを体がこわれるまで投げ続けたい。頑張っていきます。

選手　　数見　満

2009年９月２日～16日台湾・台北市にて開かれた第21回夏季デフリンピックに日本代表として参加しました。今回が２回目です。台湾の人々が日の丸旗で歓迎して下さり感激しました。又、開会式と閉会式も花火や点火など豪華に舞い上がり、北京オリンピックの様で、とても楽しませてもらいました。人生で一番素晴らしく、感動的な日となりました。

ホテルからボウリング会場へ行くのに30分～40分位かかるが、その途中で別のバスシャトルに乗りかえしなくはいけないし、交通の関係で朝５時から起床しなければならない事から精神的にも肉体的にもきつかったです。スタミナをたくわえる余裕などありませんでした。しかし地元のボランティアの人

達が親切に協力してくれたので助かりました。

ボウリング公式練習は６日と７日の２日間、レーンオイルが 36(ショートオイル)と 40(ロングオイル)という２種類があり、６日は 36(ショートオイル)投球練習を行いましたが好調でした。７日は 40(ロングオイル)投球の結果、好調だとは言い難く何とかなるだろうと思い、練習終了しました。公式試合は８日からスタート。投球始めた途端にサム(親指)の調子がおかしかった。少しミスが出てきたので悔しかった。肝心の残り１０ピンを何としても確実に取らなくちゃと精一杯頑張って投球したのだが、技術的にはもっと磨く必要あると反省しました。

私は長い間全国各県へ行き各県のレーンやメルボルンデフリンピックの時のレーンの色々な様子を勉強しました。結論としては、普段から慣れている環境に甘んじてるのではなくもっと厳しい環境の中できたえるべきだと痛感しました。その場の環境が自分の気持ちを左右するものだと感じたからです。

ボウリング競技は日本代表として基本的に男女共６名選手選出されるものなので、４年後はギリシャのアテネデフリンピックにて是非男女共揃って日本代表として派遣されることを強く望みます。

選手　　藤岡　宏明

「第 21 回夏季デフリンピック」台湾・台北市で９月５日から 15 日まで開催されました。日本代表団結式・壮行会を行ないました。団長が日本選手でメダルを 40 個以上を取ることや、「加油、日本選手オー」と皆に激励の挨拶をして下さいました。５日夜６時頃に式典開会、今までは朝行っていましたが、夜に行うというのは初めてでした。環境が違い少し暑かったです。会場から見えた沢山の日の丸の国旗を見て日本から沢山の人が応援に来て下さっているのが分かり有り難い気持ちでいっぱいになりました。

６日から７日の２日間ボウリング場にて公式練習を行いました。オーバーヘットビューの報告レーンオイル２つがあり、レーンオイルの塗り方が変っていました。４年前の大会ではレーンオイル１つだけでした。コーチに聞いたら、ここのボウリング競技大会のレーンのオイルは変わっていますとのことでした。ボール４個で考えても努力してもストライクを取るのが難しく、ボール６個でボールを変えながら投げると良い結果が取れるようです。

公式練習が終わった後ホテルへ着いて突然インフルエンザ多発の報告があると総務(副団長)から説明がありました。日本チームはマスクをつけるように注意をされました

８日、男子シングルス戦６ゲームを投げ結果は残念なことに 30 位でした。右肩が重く痛みが有り苦しかったです。その夜ホテルでアスレテイックトレーナーと話をすると五十肩と言われました。無理に投げてはいけませんと言われましたが、僕はチーム全てのゲームを自分の持てる限りの力を使って投げきりました。自分の順位は初め 30 位でしたが皆と励まし合いながら投げ総合 24 ゲーム 25 位へ順位を上げる事が出来ました。

ここ３年間の間に厳しい強化合宿を行いましたが男子はメダルを取る事が出来ず残念に思います。今回女子マスターズ戦の銀メダルを取る事が出来て大変素晴らしく本当にうれしく思います。

選手　　新垣　匡史

９月５日(土)から９月 15 日(火)台湾・台北市で夏季デフリンピックの日本代表のボウリング選手として、初めてボウリング大会に出場し、少し緊張していました。

男子シングルス戦は、前半戦はスコアが少し下がったので、３ゲームに始まる前に笹木コーチから、いろいろアドバイスもらい３ゲームからスコアを上げることができました。男子ダブルス戦と男子トリオ戦は、⑩ピンに投げたらボールが曲がってスペアが取れず、ミスが多かったので、スコアが伸びませんでした。男子トリオ戦の前半戦が終わった後、邊見監督に呼ばれて、レーンの後ろで「アドバイスした投球フォームで投げてみなさい。もし、無理だったら、いつもと同じ投球フォームで投げてもいい」と助言してくれたので、次のゲームから投球フォームを変えてずっと投げました。個人総合戦で 20 位だったけど、予選通過(16 位)までは僅差でした。最終ゲームは、残り１ゲームがあるので、最後まで諦めないで集中しながら投げた結果、スコア得点が上がり 245 点以上に上がりました。20 位から 16 位に逆転して、マスターズ戦に進出できました。とてもびっくりしたけど、最後まで諦めないで頑張ってよかったです。邊見監督と笹木コーチから、いろいろアドバイスをもらったおかげでした。マスターズ戦は、マスターズ戦に進出した選手と１対１で対決しながら、負けないように集中して投げました。前半戦は点数が上がってスコアがよかったのですが、後半戦は少ししかスペアが取れなかったので、ミスしたこともあり、スコアが下がり 12 位になりました。

日本と台湾のレーンは違うので、ボールが曲がってスペアが取れなかったので、スコアが上がらず、ミスも多かったです。もし、ミスがなかったら、得点が上がり７位以内に入れると思っていたけれどスペアが取れなかったので、反省していました。

サッカー競技男子チーム

監督　　尾上　直也

(1) 選手の選考について

本大会に臨むべく選手選考を、2005 年 11 月から開始した。日本ろう者サッカー協会(以後、JDFA)主催の「全日本ろう者サッカー選手権大会」である。これ以後、全日本ろうあ連盟主催の「全国ろうあ者体育大会」と「全日本ろう者サッカー選手権大会」の年２回の全国大会をベースに、選手選考を行った。そして、これらの選手選考を元に、台北デフリンピックまでに、代表合宿(候補合宿含む)を 12 回開催した。また、2006 年にはタイで開催された「アジア太平洋ろう者サッカー選手権大会」に参加し、2007 年には JDFA 主催の「グアム遠征」、2008 年には、台北デフリンピックのアジア予選(タイ)、台北デフリンピック大会本部主催の招待大会(いわゆるプレ大会)に参加し、2009 年には JDFA 主催の「韓国遠征」と、毎年、海外遠征を重ねてきた。これらの遠征・合宿を通して、選手選考を重ね、ベストのメンバー 23 人を選考し、台北デフリンピックに臨んだ。

(2) 成績一覧

First　Round
９月４日、14:30 〜、Yingfeng　P1
イギリス戦　日本１－２イギリス（前半 0-1、後半 1-1）
　以下、同じ
９月６日 14:30 〜、Yingfeng　P3
アメリカ戦　０－０（0-0、0-0）
９月８日 14:30 〜、Yingfeng　P1
アイルランド戦　０－０（0-0、0-0）
順位決定戦
９月 10 日 9:30 〜、Yingfeng　P4
韓国戦　２－２（0-0、1-1、延長 1-1）
PK　５－３
９月 12 日 14:30 〜、Yingfeng　P4
スペイン戦　０－２（0-2、0-0）
９月 14 日 14:30 〜、Yingfeng　P1
デンマーク戦　２－３（1-0、1-3）
以上の結果により、16 チーム（うち１チームは出場辞退；ナイジェリア）中、12 位という結果になった。

(3) 成績と評価

今回の大会では、大会期間中にインフルエンザに感染してしまった（もしくは疑いのある）選手が７人出てしまった。また、１名、全治２ヶ月の肉離れになってしまい、試合参加ができなくたってしまった。始めの２試合は、ベストな状態で臨めたが、３試合目以降は、約 15 名で試合を行わなければならない状況となり、非常に苦しかった。離脱した選手には、レギュラー選手も多くいたため、チーム力がダウンしていた。インフルエンザになってしまった選手たちは、病気そのものや、デフリンピック期間中の「隔離」という大きなストレスと闘い、チームのために頑張っていた。また、インフルエンザにかからなかった選手たちは、ほぼ選手交代が不可能な状態で７日間に 90 分の試合を４試合こなすという、プロサッカー選手でも絶対に経験しない過酷な試合スケジュールをこなした。ピッチ外でも、誤った報道や予防隔離対応等により、相当な精神的ストレスとも闘った。

このような状況下での 12 位は、評価できるものであると信じている。選手たちの行動は、デフリンピストとして全員が評価されるものと思われる。

実際のプレー・パフォーマンスでは、順位の数字以上の世界との差を感じなかった。技術・スタミナ・組織力は、世界で十分通用するものであることが確認できた。特に、GK のレベルは、間違いなく、世界のトップレベルにあると思われる。ただ、結果を出せなかった点は、２点。１点目、健聴者の日本代表と同じく、メンタル面での差が出てしまったという事である。普段出来ていることを世界大会の場でも同様に行う事や、ゴール前でのパフォーマンスを落ち着いて行う事などは、ろう者、健聴者問わず、日本人の持つ特性の一つであるのかもしれない。２点目は、インフルエンザによる戦力ダウンである。

以上のように、本大会の成績に対する評価をするものである。

(4) チーム体制と各コーチの役割

チーム体制…監督１名、コーチ１名、Gk コーチ１名、トレーナー３名、コーチ１名
スタッフの役割
尾上直也…監督。チームに関する全ての責任者。練習計画、行動計画等を立案し、選手へ指導するなどを行う。
塚田智宏…コーチ。監督の補佐的な存在。練習の準備、選手への指導、相手チームの分析、審判などを行う。
北　一行…GK コーチ。GK の練習（計画含む）・指導、選手の状態把握等。
中島幸則…トレーナー。本大会では、日本選手団全体のトレーナーとして帯同。大会以前は、サッカーチームのトレーナーとして、さまざまなアドバイスをチームにもたらす。
松原裕一…トレーナー。本大会では、就労上の都合により、帯同せず。本チーム結成時から、2009 年冬まで遠征・合宿時にトレーナーとして帯同する。
山崎　剛…トレーナー。本大会にトレーナーとして帯同する。2009 年春からの合宿・遠征に帯同する。
高橋孝司…マネージャー。さまざまなアドバイスをチームに行う。また、国際手話通訳、食事の手配、ＴＤ会議に出席などを行う。

(5) 競技スケジュール（旅行スケジュール）

男子サッカーは、開会式前に最初の試合が行われたので、選手団本隊より先に台北入りし、トレーニングを開始して備えた。以後の流れは、本隊と同様のスケジュールである。

また、競技日程は、試合と休養日が一日おきに訪れるという超過密日程で、競技内容の質を高めるならば、日程の間隔をもっと空けるべきと感じた。

８月31日　成田 19:00 －台北 21:35
　　関西 18:55 －台北 20:45
９月１日　非公式トレーニング　14:30 〜 17:00
９月２日　非公式トレーニング　14:00 〜 16:00
（非公式トレーニングは、大会側が会場を用意していない期間に、近畿日本ツーリストさんやボランティアさん等の尽力により、自ら場所；グランドを確保して行ったトレーニングである。）
９月３日　公式トレーニング　9:15 〜 10:15
９月４日　試合、14:30 〜、Yingfeng　P1、イギリス戦
９月５日　公式トレーニング　10:15 〜 11:45
９月６日　試合、14:30 〜、Yingfeng　P3、アメリカ戦
９月７日　公式トレーニング　13:45 〜 15:30
９月８日　試合、14:30 〜、Yingfeng　P1、アイルランド戦
９月９日　公式トレーニング　10:15 〜 11:45
９月10日　試合、9:30 〜、Yingfeng　P4、韓国戦
９月11日　公式トレーニング　15:30 〜 17:00
９月12日　試合、14:30 〜、Yingfeng　P4、スペイン戦
９月13日　公式トレーニング　13:45 〜 15:30
９月14日　14:30 〜、Yingfeng　P1、デンマーク戦
９月16日　台北 10:00 －成田 14:10
　　台北 13:45 －関西 17:20

(6) 大会の競技運営などの報告

公式トレーニングの初日のバスの運行がやや不慣れな点以外は、ホテルからのバスの送迎、試合会場・練習会場での誘導、審判団との連絡調整など、とてもスムーズに運営できていたと思われる。バスで会場に到着してからは、プラカードで視覚的にわかりやすく誘導してもらえた。また、試合会場で氷、ミネラルウォーターも怠りなく準備してもらえ、問題はなかった。このような対応は、ボランティアの存在が大きく、日本語での対応もしてもらえていたのは非常に大きかったと思われる。余計なストレスを感じることなく、試合に集中できる環境が用意

されていたと評価できる。プレ大会で感じたボランティアの質についても向上しており、とても良いサポートであった。

(7) 競技規則の適用（問題点など）

サッカーに関しては、FIFA のルールに準じていたため、大きな混乱はなかった。また、デフサッカーに必要な「補助役員（サッカーコートの周りに旗を持って座っていて、主審の笛に応じて、旗を揚げる役員）」が 10 名、各試合についていた。この人数は、今回が初めてで、主審の笛の意思伝達はスムーズに行われていたが、やや多すぎるきらいはあった。そのため、２回目のＴＤ会議でもそのことが議題に上げられ、10 名は必要ないのではないかという話し合いが行われた。

また、審判員については、主審に国際審判員が起用されることが多かったが、台湾国内の審判員が行うことも多々あり、やや一貫性に欠けるところがあり、疑問が残る部分ではあった。

(8) 大会参加までの準備状況

毎年、海外遠征を経験してきたおかげで、荷物の準備に始まり、渡航準備等、特に混乱をきたしたことはなかった。チームの荷物に関しては、渡航するまでは監督が管理し、台北に着いてからは、各選手の役割分担をはっきりさせ、選手に管理させていた。合宿でも行ってきたことなので、特に問題はなかった。

トレーニング等に関する準備に関しては、韓国のように直前２ヶ月間の長期合宿はできなかったものの、年間での合宿開催時期を考慮し、直前の２ヶ月間に集中できるように、JDFA が配慮してくれた。そのおかげもあり、台北に向けての準備は、滞りなくできたものと感じられる。

(9) 反省・まとめ

第一の反省点は、言うまでもなく、インフルエンザ対策についてである。台北に到着後、睡眠時間の確保・水分補給・バランスの良い食事・手洗いうがいの励行・消毒液の使用励行（ホテルの入り口に設置されていたもの）などは、ミーティングでも指示をしていたが、マスクの使用については、暑い台北であるということもあり、個人に任せていた。個人に任せるのではなく、厳しく指示を徹底していれば、インフルエンザに感染する選手が出なかったのではないかと反省する次第である。ただ、今回、プレ大会とは違い、昼食と夕食がホテルで摂ることができず（宿泊費用に含まれておらず）、ホテルの外に出て、食事をしなければならない環境であった。長期間のホテル生活で、３食ホテルでは飽きることも考えられるが、選手の健康面を考えると、とりあえず３食すべてホテルで摂れる状況にしておくことも大切ではないかと考えられる。実際、健康な状態で台北入りし、個人的にマスクを着用し、また個人で消毒液を持ってきていた選手も、インフルエンザに感染してしまっていた。外出の数を減らすことも、今後、考慮しなければならないのではないかと思う。

第二の反省点は、サッカーの具体的な反省である。

①「プレッシャー下でのベストパフォーマンスをするためのメンタル強化」。初戦の堅さというのは、どの競技でもどの国でも見られる状況であるが、短期間の大会に戸惑い続けて、いつの間にか大会が終わってしまっていた、という状況の選手もいるようである。また、自分では気付かないうちに、プレッシャーを感じ、思うようなプレーが出来ていない選手もいた。メンタル面を強化し、海外遠征の経験を重ねることは、今後の大きな課題である。

②「アタッキングゾーンでのプレーの質の向上」最終ラインからのビルドアップで、日本らしいパスサッカーを展開することが出来るようになってきたが、得点するために一工夫がまだ弱いと感じた。相手ゴール前でのシュートを如何に正確に打てるように、チーム組織で出来るようにするのが、課題の一つであろうと思われる。

③「より速く、より走り、よりミスを少なくする。」日本のストロングポイントは、健聴者の世界だけでなく、デフサッカーでも同じで、世界でも十分通用することがわかった。しかし、年々デフサッカーのレベルも上がっているので、その上昇を上回るだけの向上を日本も見せなければならない。従って、より速く、よりスタミナを付けて走り、より正確にパスをつなぐことが今後の課題であると思われる。

今回、良い結果を出すことは出来なかったが、選手の頑張り、協会のサポート、そして粟野団長、大杉総務を始めとする日本選手団本部の皆さんの心強いサポートがあればこそ、ここまでやれたのは言うまでもないことである。改めて、皆さんに感謝したい。そして、今後の日本デフサッカーの発展を心より願う次第である。

コーチ　　塚田　智宏

今大会の結果は誰もが満足できるものではなく、４年間の集大成となるはずが悔しさだけが残る形になってしまいました。監督も同じことをおっしゃっているとは思いますが、コーチングスタッフとして強く責任を感じ、高橋会長をはじめ、協会の方々や応援をしてくださった方々には申し訳ない思いでいっぱいです。

今回は今までの反省をいかし、多くの場面で手話で選手とコミュニケーションを取ることが出来たことだけが、自分にとっても、チームにとってもプラスになった材料だと思います。しかし、試合中はうまくコーチングができず、気持ちばかりが焦ってしまったことで選手達の焦りにも繋がってしまったように感じました。それは日本チームに足りなかった精神的な弱さでもあったように思います。技術や戦術では世界でも十分に通用するものがありました。勝たなければいけない、負けられないというプレッシャーを力に変えられなかいことが、世界と日本との１番の差ではないでしょうか。

ベテラン勢の中には今大会を最後に現役を引退、またはサッカーから完全に離れる方もいたようで、そんな思いを込めて試合をしていたとなると、益々勝たせてあげられなかったことへの後悔ばかりが思い出されます。今大会を経験し、次回へチャレンジする選手達には今後の日本ろうサッカーの発展のためにも結果を追及し、メダル獲得のために、さらには今大会で悔しい思いをした仲間達のために、そしてサッカー選手として自分自身のために死にものぐるいで戦って欲しいと思います。

最後にろうサッカー日本代表スタッフをさせて頂き、この４年間で言葉では言い表せないほど大きく成長させて頂きました。高橋会長、近藤さん、佐藤さん、田澤さん、他にも多くの方に支えて頂き、ここまでやってこられたと思います。これも尾上監督からの誘いがあってこそ経験できたことです。これまで関係した全ての方に感謝しております。ありがとうございました。

コーチ　北　一行

男子サッカーにおいてはスタッフ４名(監督、コーチ２名、トレーナー)と選手23名で構成され、私はＧＫ専門のコーチとしてＧＫ３名の育成に努めてきました。練習においては他の選手と違い、ＧＫのみのトレーニングもあるので、ＧＫのコンディションやピッチ状況に応じ練習内容を立案し実行しました。また全体練習や試合準備を円滑に進めるように監督ともう一人のコーチのサポートや共通意識の構築を図りました。トレーナーとＧＫの負傷状況を確認し合い、それに応じた練習内容の立案を行いました。その他、大会期間中は対戦相手の試合を監督・コーチ中心で視察・分析し、そのサポートを行いました。

現地入り後初戦のイギリス戦までの練習は猛暑の上にピッチが固かったのでダイビングの練習を避けてコンディション調整と瞬発力を高めるトレーニングを行いました。大会期間中の練習では、試合後の課題や次の試合の対策に備えた練習としてシュートストップの確認(掴むか弾くかの判断)とクロスボールの練習を行いました。クロスボールに関しては監督から一番強化してほしいと依頼されたもので外国の大型選手と競り合っても負けない為の練習を行ってきました。その中で①ボールの落下地点・通過地点を早く判断すること②判断したらすばやく動き出し③最高到達地点で捕球・パンチングすることをテーマに４年かけて強化し技術向上に努めました。その他にはキックの精度の高さを活かしサイドボレーキック(低く早いボール)を行い、すばやく前線の味方に配給する練習も行いました。また、全体ミーティング後にはＧＫだけのミーティングを行い練習の目的に沿って成果・課題や試合の反省を話し合いました。

公式戦においては、ＧＫのアップをサポートする他に、相手のＧＫのアップを観察し、ストロングポイントやウィークポイントの分析を行いました。外国のＧＫのほとんどは身長や体格が大きくロビングのボールに対しては強さを見せる一方、キャッチングやシュートストップの技術は思ったよりも低く、特にクロスボールでも速く伸びるボールや、足元などの低いシュートに対しての処理が緩慢でした。そしてこれらを選手に伝え、試合を有利に展開できるようにしました。実際にイギリス戦での得点(相手ＧＫが目測を誤り、味方のクロスボールが直接ゴールになった)やデンマーク戦での２点目(味方ＣＫで速いボールをＧＫの前に蹴りヘディングシュートで決めた)は少なくとも分析の結果だと考えます。

私自身の反省として、様々な状況を想定した練習を行えなかったことが挙げられます。私自身の勉強不足もあり良いアドバイスを送ることが出来ませんでした。また、練習が単調になることもあり、様々なトレーニングを取り入れる必要があったと思います。

まとめとして、この大会そして準備期間の４年間を通じて成人のＧＫ指導をしたことは非常に経験となりました。反省する部分が大部分を占めますが今後の指導に役立てたいと考えています。同時に聴覚障害者のためのＧＫ指導という面においてさらなる意欲を実感することも出来ました。今後もこのような活動に携わることが出来れば嬉しいです。

マネージャー　高橋　孝司

(1) 団体内の担当とその内容

主にチーム全員がスムーズに行動出来る環境作りを重点に進める。デフリンピックは、アジア予選を勝ち抜いた４年前のメルボルン大会に続いて２回目の参加になる。台北へは、昨年のプレ大会に招待されていて、ある程度、環境は把握していたので、特に問題なく進められると考えていた。大会ＨＰスケジュールを確認して、公式練習日が９月１～３日の３日間になっているので、出発日を８月31日に設定した。後日改めて確認作業していたら、公式練習日が、３日からになっているので、あわてて、大会本部やサッカーＴＤに問い合わせたのだが、決定事項だと言われた。出発日を変更する訳にはいかず、練習会場は現地入りしてから、手配することになった。結局近畿日本ツーリストさんとボランティアの人達のおかげで、会場が確保できホッとした。次は移動手段をどうするか監督と相談した。バスで片道35～40分かかる所を公共機関を使用しての移動は体力の消耗につながるし､台北の交通事情は危険が伴うので、バスをチャーターすることに決定した。事実31日に到着早々に選手等が２件のヒヤリハットを経験している。食事に関する問題も昼食と夕食は各団体手配となっている為、４年前と同様に悩まされた。サッカーは人数が多いので１度に食事できる場所が中々見つからないので、何組かにグループ分けして食事に行ってもらった。その際は交通に十分の注意をはらうように、グループリーダーに連帯責任を指示した。ＴＤ会議には、国際手話が中心で進められるので、習得しての参加が求められる。健聴者なら英会話が堪能であれば内容を把握できるが、ＴＤ会議の基本はろう者が中心になり、進行する。この大会で、ボランティアの人達には、大変助けられました。プレ大会の時もそうでしたが、氷やミネラルウォーターが頻繁に用意され、会場入りの際にはプラカードを持ち案内してくれる等選手団に負担がかからないように気遣いしてくれたことには感謝しております。今回、大会期間中にインフルエンザが発生した。想定外だったので、どう対応したらよいか、戸惑ってしまった。日本選手団には医療スタッフが同行していたので、良かったと思います。インフルエンザになってしまった選手は、何日間もずっと部屋で待機でしたので大変だったと思います。その間の昼食と夕食は、しばらくホテル側の好意で無償でしてくれましたが、それも出来なくなり、日本選手団本部から予算を捻出して続けてもらえるようにお願いしました。公式スケジュール内の試合会場、練習会場までの移動はすべてバスを利用しボランティアの方が同乗し案内してくれたので大きなトラブルもなく順調でした。

(2) 反省とまとめなど

まず、あげられるのは、インフルエンザ対策です。実際、海外遠征は毎年実施している状況だったし、手洗い、うがい、消毒液の使用を行うようにしていたが、大事にならなかった為油断してしまったと思います。食事の面も昼食、夕食は外出しなければならない状況だったにもかかわらず、マスク着用の対策まで考えていなかった。本部スタッフより通達があったのに十分な配慮をしなかったのは大失態だと反省しています。発生した後のテキパキした本部からの指導には助けられた思いです。ありがとうございました。

今後の課題とし、医療関係もある程度の知識を高める必要があると感じ、選手の怪我状況だけでなく、健康面の管理も重要だと思います。又、国際手話のできるスタッフの育成等、予定外の支出があり、チームに負担なく気持ちよくプレーしても

らう為にも、資金を工面する必要性が生じて、スポンサー獲得が急務と考えます。

今回は選手団本部や近畿日本ツーリストさんに助力いただき、インフルエンザに感染した選手も含め、全員元気に無事帰国することが出来ました。

トレーナー　　山崎　剛

チームでの担当は、選手の障害予防(テーピング・トレーニング)、コンディショニング、怪我をしたときの応急処置、疾病者が出た時の対応、選手・スタッフが飲む水の管理、氷の管理、本部ドクター・トレーナーとのパイプ役などです。

選手の障害予防での主な内容は、練習前、試合前のテーピングやストレッチ指導、また足関節の捻挫予防のため下肢の筋力トレーニングを指導しました。　コンディショニングでの主な内容は、練習前、練習後、試合前、試合後などにペアストレッチを行ったり、ホテルでマッサージを行ったりしました。また練習後、試合後のアイシングを指導、ホテルでのアイシングも指導しました。

怪我をしたときの応急処置での主な内容は、練習中、試合中で選手が何らかのアクシデントにより怪我をしてしまった時に、その応急処置(基本的には RICE 処置)を行った。試合中は試合ができるかできないかの判断をしました。

疾病者が出た時の対応での主な内容は、今回のデフリンピックでサッカーチームからインフルエンザが出てしまったので、その選手の看病(病院へ一緒に行ったり、食事をルームサービスでとったりなど)、ドクター及び事務局との連携をとりましました。

選手・スタッフが飲む水の管理での主な内容は、練習中、試合中の水の配布、コートの周りに水を設置、ホテルではペットボトルが各部屋に２本ずつ用意されていました。水道水を飲まないように注意しました。

氷の管理での主な内容は、練習中・試合中に使用する氷(飲料用、アイシング用)をホテルの製氷機から確保、ホテルで選手のアイシング用の氷を選手が取りやすい所に設置するなどです。

本部ドクター・トレーナーとのパイプ役での主な内容は、怪我をした選手を本部の整形外科のドクターの所に連れて行き診断を頂く、その時に選手の状況説明、自分の評価を説明しました。そののち、治療方針などをドクターと相談、電気などの治療が必要となれば本部トレーナーに依頼し電気・超音・針波治療を行ってもらう。などです。

今回のデフリンピックでの反省・まとめ

初めにインフルエンザがサッカーチームから出てしまったことが大きな反省点です。インフルエンザの報道も各メディアで取り上げられていたにも関わらず、マスク着用が徹底できていませんでした。台北入りする前からもっとマスク着用を促していればインフルエンザは発症しなかったかもしれません。今回このインフルエンザがサッカーチームで広まったことにより試合での交代選手がほとんどいない状況を作ってしまい監督・コーチには大変迷惑をかけてしまいました。また、事務局、内科のドクター・ナースには大変お世話になりました。日本選手団にも迷惑をかけてしまい、このインフルエンザは一番大きな反省点です。

その他には、氷が練習中・試合中に確保できないことが３回くらいありました。ホテルの製氷機が小さく他の競技団体と競技の時間が被ると製氷機に全く氷がない状況などがあり、氷の確保は大変でしたが、練習後にアイシング用の氷がなくて選手に迷惑をかけてしまう場面が何度かありました。以上が主な反省です。

今大会はインフルエンザの対応に追われてしまったというイメージでいっぱいです。怪我人も数人出ましたがそこへの対応はスムーズにできたと思います。今回の経験を通して様々なことを学べました。これを今後の活動に活かしていきたいと考えています。

選手(主将)　野呂　啓

台北デフリンピックは、メルボルン大会に続きデフリンピック出場２回目でした。メルボルン大会前まではアジア予選通過ならず、本戦へは進出できませんでした。男子サッカーは、アジア予選を勝ち抜いてデフリンピックへの切符を手にしました。本当に厳しい予選を勝ち上がって来たので自信を持って台湾に乗り込みました。

台湾は、日本よりやや暑かったのでコンディション作りに気を付けました。予選リーグを３試合戦い、上位２チームが決勝トーナメントに進出しますが、結果は、２分１負で最下位となり日本は決勝トーナメント進出ならず下位トーナメントに回ってしまいました。世界との差は、あまり感じませんでしたし、技術面もスタミナ面も自信がありました。しかし違ったのは、メンタル面とゴールを決める決定力でした。予選リーグ３試合でゴール数が１得点では、厳しすぎました。またリーグ中に、インフルエンザでメンバーが７名も抜けてしまうアクシデントもありました。このような事態が発生するとは思ってもみませんでした。結果は、メルボルン大会と同じ 12 位となってしまいましたが、23 人が一つになり最後まで諦めずに来れた事はすばらしいと思います。又結果は出せなかったものの前回より内容は進歩してきていると思います。

最後に４年間応援して頂いた家族、チームメイト、スタッフ、関係者の皆様ありがとうございました。結果を残せなかったのは残念でしたがこの４年間を次につなげて心新たに頑張って行きたいと思います。本当にありがとうございました。

選手(副主将)　細見　尚史

前回メルボルン大会での不本意な結果に対する悔しさから、大会後すぐに自らのレベルアップを求めて健常者のレベルの高いチームに入団し、平日でもボールを蹴れる環境に移りました。あれから４年間、厳しい練習や試合を積み重ねて台北に臨みましたが、前回大会と同じ成績になってしまいました。

個人的には体の大きな相手に対等に勝負ができたこと、４年間やってきたことが世界で通用し、自信になったが、団体競技であるためチーム全体で更なるレベルアップが必要だと痛感させられました。しかし、前回大会では実感できなかったが、今回の大会で、日本のサッカーは技術、体力、スピードは世界でトップクラスにあるが、ボールをゴールに結びつける技術だけが他国に比べて劣っているだけだと感じました。

４年間、監督やコーチが指導してくれた戦術は間違っておらず、世界での戦い方も今回の大会を通して非常に良い経験となったので、この土台を大切に引き継いでいきます。

また４年後アテネでの大舞台でメダル獲得に挑戦できるよ

うに、まずは次期代表に選出されること、そして２年後のアジア予選を見据えて日々トレーニングに励んでいきます。

最後に、ろうサッカーを支えてくださったスタッフの方々、応援してくださった皆様、本当にありがとうございました。

選手　　穐田　誠

５年間、夢であったデフリンピック大会2009台湾に初出場したが、サッカー競技として経験が浅く、世界各国のレベルがわからず大会前は不安でした。実際に参加してみて、様々な試合を拝見しましたが、技術やパスは日本の方がレベルが高いと思ったものの、予想以上に対戦相手のアイルランド、イギリス、アメリカ、スペインなどは日本代表より体が大きく、キックパワーがありました。身長による「壁」が大きいためヘディングをしようとしても、身長が高い相手に防がれてしまいました。結果的に、良い成績で終われず、本当に勝てる相手であったのに、非常に悔しいです。自身は１回だけ試合に参加しました。試合前に世界各国チームの試合を観戦して各国のレベルを把握できていたので自信を持ってプレーできると思ったのに、不完全燃焼のまま終わってしまった。その原因は経験不足と考えられる。やはり、日本を早めに出発し、開会式まで１週間程度、現地の環境に慣れて、トレーニングを積んだ方が良いと思った。それと試合終わった後、もっと休養時間が欲しい。ホテルには洗濯機が欲しい。台湾では、泊まったホテルには洗濯機がなかったので大変な状態でした。

反省点ですが、当たり前だが、サッカーメンバーたちとコミュニケーションをすることが大事だとよく分かった。自分から積極的に行動できないところがあったので反省した。今後、チームとのコミュニケーション不足にならないよう、きちんと話し合っていきたいと思います。また、自分の足りない所を修正し、様々な経験を積み重ねて、世界の壁にぶつかれるように、さらに質の高いプレーができるように頑張っていきたいと思います。

苦楽を共にした男子サッカーメンバーからの様々な指導に本当に心から感謝しています。本当にこのチームのことは一生忘れないと思います。大会は、本当に貴重な経験になり、一生忘れられない思い出でした。デフリンピックについて、子供たちに伝えていきたいと思います。

最後に、日本ろう者サッカー協会の幹部、スタッフの皆様、そして、家族に心から感謝いたします。

選手　　伊賀崎　俊

■成績に対する自己評価

台北デフリンピックの結果は12位でした。最低条件である前回のメルボルンデフリンピックの成績を上回ることができず、すごく悔しい気持ちでいっぱいです。また、個人的にFWとしていくつかの決定機をモノにすることができませんでした。数少ない決定機をモノにしたチームが上位に進出できるんだなということを今回のデフリンピックで感じました。ベスト８に進出できるかどうかの境目の試合でＰＫを獲得したのですが、そのビッグチャンスをモノにできず、結果的にベスト８に進出できませんでした。日本代表みなさんの夢、そして日本から応援してくださっているみなさんの夢を叶えることができず、申し訳ない気持ちでいっぱいと同時に責任を感じています。（５試合出場して２ゴール１アシストという結果を残しましたが、個人的には納得いきません。）

■反省・まとめなど

２日に１試合という過密な日程の中、ベストコンディションをキープすることがいかに難しいことか身を以て知りました。また、日本は世界と比べて技術も体力もあるのですが、最後の詰めである「決定力」が欠けていました。FWとしてゴールを量産できなかった責任を感じています。

最後に、尾上ジャパンとして４年間プレーできて幸せでした。喜怒哀楽の詰まった４年間でしたが、その中で得たものは計り知れないほど多く、それは私の今後の人生を生きる上で貴重な財産となりました。ありがとうございます。また、家族を始め、応援してくださった友人、職場のみなさんにこの場を借りて心からお礼を申し上げたいです。「ありがとう」

選手　　伊東　高志

聴覚障害者による祭典、第21回夏季デフリンピック台北大会は2009年９月５日から15日まで台湾台北市で開かれ、12日間の熱戦は長いようで短く感じました。デフリンピック大会はオリンピックと同じく４年に１度、世界規模で行われる大会で、アジアで開催されるのは初めてであり、開会式や閉会式のパフォーマンスが印象的で本当に素晴らしかった。サッカーは、４年前の大会と同位になり、悔いが残り納得しないまま終わりました。しかし、仲間と戦えて成長したことが良かったと思います。今も悔いが残ったままだが、この悔しさをバネにして心身共に強くなれるように前進し、頑張りたいと思います。思うに、悔いが残る自分たちを「何かが違う」と感じることはあったものの、それが何なのかを明確に理解することは自分でも難しい。ハッキリとした言葉には出来ないが、彼らの「姿勢」や「執着心」、「こだわりの先にある崇高な意識差」が、国内と世界レベルの違いであるように思えた。しかし、どのような壁があろうとも、自分たちは、自分たちが納得のいくように最高の大会に名を残すために全力を尽していきたい。毎回の努力の積み重ねが、いづれは、世界最高チームとして世界中のチームに知れ渡るよう、そこから、新たなる「夢」が生まれるよう全力を尽くしたい。色々、ありがとうございました。

選手　　桶口　智弘

今回のデフリンピックは自分にとって初めてだった。前回のメンバーからある程度世界のレベルを聞いていたが、実際に自分の目で見て技術面等はそんなに差はないと感じた。体格的に圧倒的な差があったが、技術、スピード、スタミナ、戦術等は世界でも十分通用したし、互角以上に戦えると感じた。それでも、前回と同じ12位になってしまったのは、決定的な場面でミスしてしまう、数少ないチャンスを相手に決められて負けてしまうパターンという試合をしてしまったからだろう。メンタル面の弱さ、集中力の差、国際経験不足に大きな差がありこの結果になってしまったと思う。また、自分の国に対する誇りや意地にも大きな差があった。自分たちは他の国と比べ国の為に戦うと言う気持ちがまだまだ弱い感じがする。技術面だけでなく精神面も徹底的に伸ばしていかないと世界大会だけでなくアジアでさえ勝つのも厳しいと思う。今までの自分たちが強くなる為にやってきた方向性は間違っていないと思うし、前大会

と比べて確実に上がってきていると思うが、それ以上に他国がどんどんレベルアップしてくるので、今まで以上に頑張らないと、日本は世界やアジアでも置いていかれてしまうだろう。そうならない為にも、今大会の経験を周りに伝え日々危機感を持って練習に励み、４年後のアテネデフリンピックで悲願のメダルを獲得できるよう頑張りたい。

選手　　河野　翔

今回の台北デフリンピックが自身にとって人生初のデフリンピックでした。出場時は20歳、デフリンピックを初めて知った時は高校３年生のときでした。デフリンピックを知ってたったの２年間で選手として参加するとは思いませんでした。当然、デフリンピック出場権のかかったアジア選手権（アジア予選）に参加していなかったので本大会が初めての国際大会でした。８月31日～９月16日まで17日間、台湾・台北に滞在していたわけでしたが、国際大会を幾度経験してきたチームメイトはきちんとした準備、体調管理をこなしていました。それに比べて私はあまり自己管理が出来ていませんでした。いつも腹を壊し、最後には風邪を引いてしまいました。その面ではとても残念に思います。

試合では最初の予選３試合全てＦＷとして出場しました。初戦イギリス戦は先発フル出場、２試合目アメリカ戦は後半途中出場、３試合目アイルランド戦は先発フル出場しました。予選グループは決勝トーナメント進出のかかったとても重要な試合で、イギリスは前大会メルボルンの優勝、同じくアメリカは９位、アイルランドは前々大会優勝、前大会４位でした。そういった意味でこの厳しい予選にこの私が予選全試合出場したわけです。プレッシャーがすごく身体中ガチガチしてボールキープもまともに出来ないぐらいでした。特に初戦のイギリスの時は極度の緊張で視野が狭く、何度もミスしてしまいました。しかし、私の武器はスピードです。世界はみんな身体が大きくて、ごつい選手ばかりだったのでスピードはそれほどなかったです。前線面での突破は何度かできましたが、そのあとのゴールに繋がるプレーが出来なくて無得点のまま、予選グループを終えてしまいました。今でも、もっと自分に決定力があれば･･･と後悔してしまうばかりです。しかし今大会を通して心身共ににとても成長することができました。この経験を生かして今後、自分のプレーの幅を広めて行きたいと思います。

選手　　桐生　聖明

初めてのデフリンピックに出場して、世界で色々な国と戦い、いい刺激になり、いい経験になり、色々なことを学びました。結果は12位で終わってしまいましたが、実際に試合をしてみると、世界の差はそんなになかった。色々な試合をして、スピードはそんなにはやくなかったし、イギリスは４年前優勝したチームなのに、戦ってみると世界の差はなく、日本はやればできると思った。技術やスタミナは日本の方が上だった。しかし、スタミナ、技術、チームワークでいいところをみせるとこができなかった。自分は、プレッシャーに追われてしまい、なかなか本領発揮ができず、悔いを残る試合をしまった。４年後は、今回の経験を活かして、絶対にメダルをとる。今以上にもっとレベルを上げて、リベンジをします。サッカーを続ける限り、一生自分の限界を超え続けていきます。

選手　　古　隆喜

＜予選リーグ第１試合　VS　イギリス　●　１－２＞

イギリスは前回の優勝国チームであり、183センチ以上で体が大きく、フィジカル面も強い。縦パスで繋いでいく、またカウンターアタックのスタイルで攻めてくる。当チームは今までやってきたこと一つ一つの戦術を全て出すよう、しっかりとマンツーマンディフェンスをするという対応は出来ていたと思う。しかし、気が緩んでしまったのか、僅かなミスが出てしまってゴールを許してしまった。お互いに攻守の切り替えを繰り返していたが、相手のほうが経験値があったのか、結果として負けてしまい、とても残念であった。今後はきちんとミスを減らし、また、ミスをしたときのカバーをきちんとできるように、徹底的な意識をするべきであると感じた。

＜予選リーグ第２試合　VS　USA　△　０－０＞

USAはデフワールドカップベスト８という戦績をもつ強豪だが、フィジカル面では負けているとはいえ、テクニック面では日本のほうが遥かに上という判断をしていた。ボールの支配力は日本のほうが上であったが、決定力が足らず、結局引き分けとなってしまった。決定力不足という課題の残った残念な試合だった。

＜予選リーグ第３試合　VS　アイルランド　△　０－０＞

アイルランドは、８年前のイタリアデフリンピックでの優勝国であり、ディフェンスがうまいという評判で、強敵だった。ボールの支配力は互角であったが、日本側のパス回しはこれまでの試合で一番よかった。しかし､攻め立てることはできたが､結局アイルランドの鉄壁のディフェンスを崩すことができなかった。この試合の問題点は、パス回しが良くても、なかなか前線に繋ぐことができず､「２番目の動き」「３番目の動き」のタイミングにまで持ち込めなかったことである。この試合は引き分けたが、これまでの試合の得失点差の計算で、予選３位で下位トーナメント進出が決定した。

＜下位トーナメント第１試合　VS　韓国　○　２－２（ＰＫ５－４）＞

韓国は、アジアでもトップクラスの強豪で、メンタル面が強いという評価があった。この試合では、これまでの課題であった「２番目の動き」「３番目の動き」のタイミングをつかむことができ、２得点を得ることはできた。しかし、オフサイドトラップにひっかかり、失点してしまうという、ディフェンスでの課題残った。結局、引き分けのまま試合が終了し、PK戦で勝ち、台北デフリンピックでの初勝利を得た。

＜下位トーナメント第２試合　VS　スペイン　●　０－１＞

スペインはデフリンピックには初出場だが、ヨーロッパ大会４位であり、アジア大会優勝国のイランと同等という評価があった。パス回しのスタイルは、日本と同じようなスタイルであり、お互いになかなか攻めきることができない状態が続いたが､結局個人レベルの技術の差が出て､失点を許してしまった。なので、個人の基礎技術のレベルの底上げがさらに必要だと感じさせられた。

＜下位トーナメント第３試合　VS　デンマーク　●　２－３＞

デンマークの評価は、強くも弱くもないが、基礎がしっかりしているチームで、ディフェンシブなチームということだった。テクニック面、戦術理解の面では、日本が上回っており、２得点をあげることができた。しかし、２得点したという余裕から気がゆるんでしまい、その隙をつかれ、３失点を許してしまった。最後まで集中力を途切れさせず、集中し続けることが大事なのだと、痛感させられた試合だった。

＜全体の自己評価＞

６試合を振り返ってみると、４年前のメルボルンデフリンピックに比べると、相手が強豪でも大敗はなく、全て接戦に持ち込めたことが大きな収穫であった。日本は、世界と戦うことができる力をつけつつあるということを証明することができる大会だったと思う。課題としては、決定力不足、ディフェンスの重要さの意識、ポジション別の動きの理解、基礎技術の最低ラインが低かったこと、最後まで集中力を途切れさせず戦術を完成させる意識が不足していたことの５つがあげられる。また、もう一つの課題としては、インフルエンザに罹患した選手７人の、「自分たちの代わりになる選手はいない」という、危機管理の不足ということもあげられる。これからの日本代表は、４年後のアテネデフリンピックまでのアジア大会、デフワールドカップ等の大会を意識したスケジュールを組み、上記の課題を一つずつクリアしていくことが大切である。

選手　　江島　由高

結果から言わせていただくと、12位。内訳は１勝２分３敗。結果だけで見ると、日本と世界の差は大きいものだと判断するのが妥当なところ。しかし、ピッチに立って戦った当事者からすれば、紙一重の差というのが正直な感想。ボールポゼッションは明らかにこちらが上回っていた。基本的なテクニックも圧倒的に日本が上だった。ではなにが足りなかったのか？これは自分が思うに、日本の国民性からなるメンタリティーのサッカーという競技における不適合さ。言い方を変えると決定力とも言える。日本人は謙譲の国民。細い道ですれ違う際には道を譲り、まんじゅうが残り一つなら相手に「どうぞ」と譲る。そこに美学を見い出そうとする。それが試合でのオフェンス面においてマイナスに作用したように思える。次回のデフリンピックで頂点になる為には、選手皆がもっとエゴイストになるか、それを補って余りあるパスサッカーを身につけるかのどちらかではないかと、私個人は思う。大会全体の面に話を移すと、様々なろう者と出会う事により、自身のろう者としてのアイデンティティがより明確になった。これは今大会で自身が得た一番の収穫である。これも自身の大会参加をサポートしていただいた、ろうあ連盟を始め、日本ろう者サッカー協会、家族、会社友人の存在があってのこと。本当の本当に感謝している。そして、言葉で感謝の意を申し上げるのは簡単な事。私としては次回のデフリンピックでの一番いい色のメダルをとって、結果という誰もが納得する形で御礼がしたい。

Road to 2013 ！

選手　　高橋　裕樹

【結果　サッカー競技 12 位】

デフリンピックは初出場です。ここまでの４年間は本当に長かった。その４年間では世界と戦う為に何か必要なのか、それを常に考えながら準備してきたのです。しかし、結果は前回同様に 12 位という結果で終わりました。メダルまでの道のりは遠いと思う結果だけど勝てない相手ではない！なぜならリーグ戦の３試合では、僅差で負けたり引き分けで内容は五分五分だったからです。しかし、勝てなかった！それがメダルへの大きな壁だと思います。

トーナメントでは、デフリンピック初勝利を決めた試合もありました。やっぱり勝つ事は気持ちいいものです。その勝利は思い出に残る試合でした。そして、４年間一緒に戦ってきた仲間（選手やスタッフなどを含め）にとって最後 11、12 位決定戦では惜しくも逆転負けてしまい後味の悪い結果になってしまいました。

あの時の悔しさは忘れません！この経験を次回につなげるように、また挑戦していきたいです！

選手　　四方　恒

■成績に対する自己評価

結果：サッカー　予選リーグ４位→９～ 16 位決定戦　12 位

前回大会よりチームのレベルはアップし、内容も相手互角に戦えていて、日本の技術も世界に通用出来ると実感しました。

また監督、スタッフ、選手 28 名が団結して、お互いに助け合い、励まし合って、チームのモチベーションを上げる事が出来た事は評価出来ると思います。

■反省、まとめなど

試合の内容は互角でも決定力やメンタルの面で劣っていた事は明らかでした。大会期間中、インフルエンザなどの影響で７人の選手が離脱するアクシデントに見舞われ、選手層の薄さが露出し、結果的に前回大会と同じく 12 位に終わってしまった事は真摯に受け止めなければなりません。インフルエンザや病気について選手の自己管理の意識が低かった事も反省すべきでした。今大会、初めて選ばれた選手は「日の丸」の重みを実感する事が出来たと思いますし、この経験や悔しさを忘れず、次のアテネデフリンピックに生かして欲しいと思います。今後、更なるレベルアップや世界と戦う為の環境をもっと作っていく必要があると実感しています。日本ろう者サッカー協会の高橋会長や協会役員方をはじめ、尾上監督、塚田コーチ、北 GK コーチ、中島先生、松原トレーナー、山崎サブトレーナーには色々ご指導頂き、心から感謝しています。応援して下さった皆様、本当に有難うございました。

選手　　松元　卓巳

今回のデフリンピックが初めての参加でした。前年度に行われた 2008 台北プレ大会には参加したものの本格的な国際大会というのを味わったことがなく、全く未知の体験でした。

予選リーグは３試合あり、全ての試合にフル出場できたことは自分にとって大きいものとなりました。結果は、初戦のイングランドは１－２、次のアメリカは０－０、アイルランドも０－０という結果でリーグ最下位になり、とても不本意な結果でした。イングランド戦こそビッチコンディションと相手の高さに苦しめられ、、また自身も初めての国際大会ということで緊張と恐怖感というものを感じ、多少萎縮してしまいました。しかし、ゲームの内容では健聴サッカーと違い、ろう日本サッカーと、ろう世界のサッカーに差があるようには感じられませんでした。自分もこの試合で世界のレベルがわかり緊張もほぐれ気負うことなく、次の試合に臨むことができました。余裕が少しできたことにより、チーム全体の緊張を軽くしようと盛り上げたりして和ませることもできました。アメリカ戦とアイルランド戦ともにベストパフォーマンスができましたし、DF との協力プレーにより無失点にすることができました。この２試合は日本が押し気味に進めていたので正直、勝てた試合でした。

しかし、90 分の試合で勝ちきれない。ゴール前での落ち着き、決定力のなさが世界に比べると劣っていました。これは、日本の大きな課題です。

このような予選結果から下位トーナメントに進んだわけですが、まずは韓国でした。この頃に風邪がはやり、７名とけが人１名が離脱しており、ベストメンバーを組めず、苦しい試合となりました。結果としては、延長２－２の末、PK 戦で５－３で勝つことができました。日本が押していたにもかかわらず、先制しても追いつかれるという試合になったので、先述のように 90 分で勝ちきる力がないと言うことをはっきり体感しました。PK 戦では、自分でも驚くほど落ち着いていて冷静に対応ができました。試合を重ねるごとにメンタル面も成長していることが実感できました。次のスペイン戦は疲労と怪我のため休養で試合には出場できませんでしたが、今までサポートしてもらった分、白分がサポートする気持ちで試合に臨みました、結果は０－２で負けました。出場していない試合の敗戦は悔しかったです。最終戦デンマークは２－３の逆転負けでした。何故負けたのかわからないくらいの内容でしたが、国際大会では、審判も味方につけないと勝てないのだなと考えさせられました。本大会での最終成績は 12 位ですが、自分としては充実したデフリンピックでした。世界のレベルを体感できましたし、メンタル面の成長、コンディションの維持、試合の進め方など、多く学べ、成長することができました。大きな国際大会で数多くの試合に出場できたことは誇りですし、貴重な経験でした。

今大会で学んだことを日本に持ち帰り、次のアテネデフリンピックにつながるように頑張ります。

選手　　松本　弘

台北で行われたデフリンピックが今回初めての出場でした。サッカーは、その前に厳しいアジア予選があります。そのアジア予選で上位４ヵ国しかデフリンピックに出場出来ません。そのアジア予選にも参加しました。

今回デフリンピックで世界各国と戦い、アジアと世界の差を感じました。それは、体格の差（フィジカル）です。とにかく、大きくて強い。そして、決定力です。その他の部分ではどうかというと、技術、体力は日本の方が上だったように感じます。では、なぜ我々は勝てなかったのか、試合の勝ち方、試合運び、このような面が私達の課題だと思います。私は４年前に初めて代表に選出されてから、自分自身も大きく変わりました。日本代表という誇り、そしてプライド、責任感。それを背負いデフリンピックに挑みました。結果は決勝トーナメントに行けず１２位となりましたが、代表に入って精神面が強くなり、日常生活でも人として、当たり前の事を当たり前にこなし皆の模範になるよう心掛けました。そういう意味では、代表になれた事、デフリンピックという高い目標を持てた事に対し、すごく充実した４年間だったと思います。

私は、４年後アテネに向け、また再始動します。今回経験した事を糧にこれからの若い世代にうまく伝え、４年後のアテネでは、決勝トーナメント進出ではなく、メダルを目指して戦いと思います。

最後に、デフリンピック 2009 台北、ありがとうございました。

選手　　西浦　太志

16 チーム中 12 位という成績は非常に不本意な結果となってしまった。ただ、内容は悪くはなかったと思う。どの試合においても僅差であったし、むしろ世界に通用するサッカーが出来たと思う。それだけに結果だけを見ると悔しい限りである。同時に、結果が全てであるということを改めて痛感した。他の国はそれを熟知した戦い方をしていたように思う。日本は 90 分通して走りまくって攻守するのに対して、他の国はスタミナがないが、大事な場面では一気にスピードを上げて数多い人数で攻めてきたりと違いが表れていた。またシュートを打つ、ゴールを狙う意識がまだまだ世界と比べて低かったと思う。パスサッカーを武器とする日本はゴールに対する執念、泥臭さが足りないと実感した。これまで培ってきた戦術に間違いはないから、勝つために何が必要なのかを意識して練習していくことが課題だと思う。組織力を高めればどんな相手でも負けないということは強く感じた。だけど、それだけでは勝てないということも感じた。組織を重んじるばかりに個の力を出し切れていないように思う。勝つためには個の力も必要だと思う。他の国との差がそうだと思った。

個人的には、走りこみやフィジカルトレーニングを積み重ねた甲斐あって通用した部分もあった。しかし、実戦をあまり積んでなかったことが大きくマイナスに影響してしまったと思う。緊張などはなかったが、もう少し落ち着いて自信を持ってプレー出来たのではないかと思う。ベストパフォーマンスを発揮し切れなかったことは否めないが、やるだけのことはやったと思える。この貴重な経験を無駄にしないで若い世代に語り継いでいきたい。絶対に４年後は金メダルを取れると確信が持てた大会であった。

選手　　船越　弘幸

2009 年８月 31 日～９月 16 日までの長期間、職場や家族、様々な方々の協力と理解のお陰で参加することができました。

1999 年に代表に初選出されてから今日まで国際大会には６回参加しています。（アジア大会、デフリンピック、アジア選手権）

これらを考えると、自身はベテランの域に入っていますが、常に気持ちだけは若い人に負けないよう走り続けてきました。今大会はメダルに届くくらい日本代表は力をつけてきただけに、前大会（2005 年メルボルン）と同じ 12 位という結果に終わってしまい、すごく悔しいのと、納得いかずに現実を受け止めれていない自分がいます。結果だけ見れば、12 位。でも、試合内容としては、全ての試合は紙一重の差でした。勝てた試合もありました。じゃ、なぜ勝てなかったのか？？これは「運」としかいいようがないです。

体格やフィジカルコンタクトは世界にはかなわないものの、個人技術、スタミナ、スピード、組織は十分世界クラスでした。でも、国内での試合経験や国際経験の浅い日本は「勝ち方」を知らなすぎた。細かく分析してみれば、日本はマイボールになると攻め急ぐ癖がある。数的不利の状況では、ゆっくりボール回して組み立てて、数的有利の時、一気に畳み掛けるといった個々の判断能力、スタミナの配分、優位に進めるためのゲームプラン等、これらが選手間で意思統一なされてなかった事。最大の課題は「決定力不足」、これはＡ代表にも同じことがいえる。1998 年にＡ代表がはじめてフランスワールドカップに出た時

も、アジアで通用していても世界では通用しなかった。あれから歳月が流れ、2002年ワールドカップではベスト16にまで進出した。国際マッチでも世界相手に互角の試合するようになっている。これが、我々聴覚障害者サッカーにも同じようになっていくことを信じています。それには、「自分は今何をしなければならないのか？」を常に追求していかねばならない。それが中々難しい。サッカーというスポーツは団体競技。個人が一生懸命努力するのでは意味がない。全員が他人以上に努力せねばならない。我々はプロでもないし、家庭や仕事あってのサッカー、そして日本代表だから本人の自由だけど、やっぱり日の丸を背負った以上は、プライドをもって、結果にこだわっていかねばならない。日の丸を背負って戦うということは、金で買えるものではないし、そう簡単なものではない。一生に一度あるかないかだし、これが人生の大きな転機にもなりうる事だから。日の丸に対する意識改革がなされなければ、いつまでたっても世界に勝てないままだろう。

個人的には４年前の世界大会の経験を生かして、家族の時間を犠牲にして着々と準備してきた。技術、スタミナ、ブレインに関しては自信あったが、ゲームが中１日(計６試合)というハードスケジュールで体力が持つかどうかが謎だった。一試合だけだったらベストパフォーマンス発揮できても、その試合で疲れて次の試合はパフォーマンス低下してしまう。だから、連戦に出る事を想定してリカバリー能力向上に努めてきた。おかげで、カード累積１試合出場停止を除いて５試合フルに出場できた。でも、激しい当たりや負傷によるパフォーマンス低下は否めなかった。長期間開催の大会は、いくら強くても連戦に耐えうるチームが最後に勝ち残るものです。

今大会を経験し、４年後に向けて再び戦う者には大いに勉強になったのではないかと思う。４年前の日本代表と比べて現代表が一気に世界に近づいたのを実感しました。でも正直、嬉しいのか悲しいのか複雑な心境です。今大会で世代交代のために代表から身を引くことにしたからこそ、最低でベスト４最高で優勝して終わりたかったのが本音です。でも、ここまでの道のりはほんとに長かったし、いろいろあったし、この経験がこれからの人生に大いに生きてくることを信じて、自惚れずに謙虚になって様々な分野でがんばっていきたいと思います。

最後にもう一度。我々日本代表のために尽力、理解、そして応援してくださった方々、職場、家族には感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

選手　　中島　正行

■成績に対する評価

サッカー男子の結果は、グループリーグで敗退。

第一戦　ｖｓ Great Britain　１－２

第二戦　ｖｓ USA　０－０

第三戦　ｖｓ Ireland　０－０

上記結果の通り、日本は世界との差があまり感じられなかったので、自信に繋がる結果を残せたのではないかと思う。

■反省・まとめなど

我がチームは、これまでずっと「やればできるんだ」というポジティブシンキングで、励ましあいながら意欲的に取り組んで来れたと思うし、今までやってきたこと自体間違っていなかったと思う。ただ、我がチームは、目標を実現するレベルまでには至ることができなかった。我がチームは、目標を実現するために、色々なことを試行錯誤しながら取り組んできたが、もっとも意識してきたのは、「チームとしていかに守るか」でした。その結果、グループリーグでは２試合とも失点をゼロに抑えることができたので、これまでの積み重ねの成果が発揮できたのではないかと思う。その反面、以前からの課題である「決定力不足」がなかなか改善されず、グループリーグ敗退の一因となった。今回のデフリンピックに出場して、世界との差があまり感じられなかったものの、組織としても個人としてもさらなるレベルアップを図っていかないと、上位進出は厳しいと言っても過言ではない。組織だけで勝ち抜くのは限界があり、「個人それぞれの能力を高めた上での組織力」が、上位進出するためには絶対不可欠なものだと、今回の大会で改めて認識させられた。今後、日ごろの練習の中でいかに意識していくか常に高い意識を持ちつつ、他の選手にも伝えていきたい。そして、日本ろう者サッカー界全体のレベルアップに貢献できたらと思う所存である。

選手　　那須川　耀

僕はこの大会が初出場で、大きな舞台に立てることを凄く楽しみにしていました。試合に出たら、相手の体格は僕たちと違ってパワーの差があり過ぎて手が出なかった。でも、デフリンピックまでの間に合宿で猛練習をしたお陰で、ピンチを抑えることができた。しかもチャンスの時得意なプレーが活きてシュートの数が増えた。しかし、支配率はこちらが勝っていたのに、決定力の精度が低くなかなか決まらなかった場面が多かった。失敗だったのはゴールを決めたあと、すぐに点を取られてしまったこと。それだけでミスが恐くなってしまった。気を引き締めるのが足りなかった。僕は試合に出るのが少々怖かった。そのとき、監督が「失敗してもいいよ。思いっきりやれよ。」と声をかけてくれた時は今までの緊張がスーっと和らぎ、失敗を恐れずチャレンジできました。監督のアドバイスのお陰で楽しい試合になったと実感しました。僕の仕事は点を取る役目だったのに、達成出来なかったことは凄く悔しかったです。でも、僕の得意なプレーが世界に通用出来たのが嬉しくて少しずつ自信を持てるようになりました。これが世界のサッカーだと肌で感じました。試合の内容を思い出すと、世界との差はそれほど感じなかった。４年後は絶対メダルが取れるよう、さらに技術を磨いてリベンジしたいです。台北に滞在している間は色々と問題が発生し、不安定な生活で凹んだ時、ボランティアの励ましなどのお陰で乗り越えられました。最後に今まで支えて下さった台北の皆様、日本の皆様、ありがとうございました。

選手　　白井　隆

■成績に対する評価

成績は、16チーム中12位という前回大会の結果と同じであった。金メダルを獲ることを目標としていたが、世界のレベルに追い付けなかった結果と捉えたい。しかし、内容的には、日本が金メダルを獲ってもおかしくない内容であったと思う。パワー、フィジカルは世界から見れば未熟であるが、世界で一番長けている日本のスピード、スタミナ、組織力で戦術展開を早め、相手を翻弄できたのではないかと思う。点を取るための戦術がうまく機能できたと思うが、唯一の問題は決定力不足である。点を取るための最後手段であるシュートをはずせば、点が取れない。戦術中心にトレーニングしたことに悔いはないが、

もう少し決定力を高めるトレーニングが必要だったのではないかと思う。12位という結果は、受け止めるしかないが、今後の代表活動につなげていければと思う。

■反省・まとめ等

私の反省は、自己管理不足である。デフリンピック期間中に日本選手団でインフルエンザ感染問題があった。その中で、インフルエンザ感染疑いにかけられ、代表から一時抜けることになり、選手たちに迷惑を掛けてしまったことを反省している。試合もなかなか出ることができないところも実力不足だと感じた。今回のデフリンピックは、代表にとっての課題、自分にとっての課題がたくさん見つかって、今後の人生の大きな糧となれるようにつなげて行きたいと思います。

選手　　木根渕　慶彦

今回のデフリンピックは、初めての参加でした。個人的にはインフルエンザにより、1試合も出場することができなかったのですが、23人という他の競技より多い人数の中でチームを盛り上げていくことは、団体競技において必要な事だということを改めて実感しました。ピッチ内での時間より、ピッチ外での時間でメンバーと共にする時間が長いからこそ、ピッチ外での行動に気を使ってきました。それが結果につながったとは言い難いですが、チームの一員として行動できたことはとても誇りに思います。

12位という結果は、前回のデフリンピックの結果と同じですが、世界レベルに日本が追いついてきたという印象です。ただ、結果が全てなので、試合に勝ちきるための何かが足りなかったのではないかと思います。体格で劣る日本が体格の大きい世界で勝つためには、想像してみると「スピード」「パスサッカー」「組織」などがあげられます。それは、3年前に日本代表が結成してから掲げてきたテーマであり、その方向性に間違いはありませんでした。後は、「経験」と「自信」です。今まで国内で代表合宿を行ってきましたが、練習試合では連敗が続き、デフリンピック本番が近付くにつれて、メンバーの中で焦り、自信喪失が生まれ、そのままの状態で本番を迎えてしまいました。そして開幕戦のイギリスとの試合では、初戦の固さからか、日本のサッカーが出来ず、体格の大きい相手に対してロングボールのみの展開となってしまい、1対2の結果で負けてしまいました。その後から徐々に世界に慣れて、その上で日本のサッカーが出来るようになってきましたが、今度は点が決まらない決定力不足を露呈してしまいました。その辺りから、全てにおいて世界で戦う「経験」が無さ過ぎたと痛感させられました。今回感じたこの「経験」を次の世代に伝えて、次の世代がぜひメダルをとってくれることを期待しています。

選手　　野間　三夫

デフリンピックは、二大会連続出場です。代表に選ばれて光栄でした。今回の大会の結果は12位でしたが、前回（オーストラリア・メルボルン）も同じ12位なので正直、悔しいです。でも、前回より今回のプレーが全て良かったと思います。やっぱり、決定力不足だと思います。本来のポジションはＦＷなのに、右ＭＦになった。ＦＷでやれば、体格の大きい相手を倒せる自信があった。監督は素晴らしい指導でしたし、コーチ達からもいろんなアドバイスをもらいました。ありがとうございました。でも、若手達は初出場で、プレッシャーがあったし、動きは固かったと思います。練習試合と交流試合を積み重ね、次の四年後に頑張ればいいと思います。自分も四年後に選ばれたら、若手達と一緒にプレーをやりたいと思います。台湾・台北市は国全体が素晴らしかった。台北の人達の出会いが凄くあったかい人でした。オリンピック位に感激しました。台湾・台北みたいに、日本でデフリンピックが開催されればいいなと思っています。

選手　　村上　祐太郎

8月31日から9月16日、聴覚障害者のオリンピックである『デフリンピック』が台湾の台北で行われました。私はサッカー選手としてデフリンピックに参加しました。試合はワールドカップと同じ方式で、グループリーグ戦でした。前回優勝したイギリス代表、ベスト4に残ったアイルランド代表、アメリカ代表に善戦したが日本は最下位となり、決勝トーナメントに残ることは出来ませんでした（3戦1敗2分）。次の9～16位決定戦でも苦戦しながら日本は12位となり、結果的にメダルを獲る事が出来ませんでした。今回初めてデフリンピックに参加することができたことで数え切れないほどたくさん学ぶことがあり、私にとって貴重な経験になりました。世界という大きな舞台でサッカーが出来たことは私にとって大きな財産であり、価値のあるものだと思います。本当に周りの環境にとても恵まれていたと思い感謝の気持ちでいっぱいです。４年後のデフリンピック会場はアテネですが、今回の無念を忘れることなく技術的にも精神的にも向上し、日本代表として選ばれるように日々成長していきたいと思います。これからも応援よろしくお願いします。

選手　　金安　恭平

台湾・台北で実施された「夏季デフリンピック2009」の男子サッカーは、前回同様、16チーム中12位という成績に終わってしまい、非常に悔しい思いでいっぱいです。イギリスやアメリカ、アイルランド、韓国、スペイン、デンマークと戦ってみて、世界と日本にあまり差がないことや結果も僅差であること、逆に日本のパスワークや戦術は世界に通じると実感しただけに、余計に何故負けたのかという悔しさがこみ上げてきます。全ては結果なのですが、まだ現実を受け入れない自分がいます。

世界各国と戦って分かったことは、日本と違い、各国は「サッカーの戦い方」を知っていたことでしょうか。連日、猛暑の中でよく走っていたのは日本なのですが、他の国はスピードと緩急の使い方がうまく、要所で攻めて得点をしていくという戦い方をしていました。あと、パスワークや日本の戦術には間違いはない（＝ 監督の指導方法に問題はない）と思っているのですが、「決定力」は、やはり早急に解決すべき問題だと思います。どんどん打っていかないと、やはり世界の壁を壊すことができないことを痛感しました。

最後に、今回のデフリンピック参加に伴い、大きくの方に多大なご協力をいただきました。この場を借りて感謝と同時に、さらに自身のサッカーレベルを上げるよう邁進したいと思います。

サッカー競技女子チーム

監督　　佐藤　浩幸

第21回夏季デフリンピック台北　女子サッカー大会参加報告

1）選手の選考について

日本ろう者女子サッカーチーム発足から４年間、代表候補強化合宿、静岡遠征試合、2008年12月の女子東西対抗戦の中から女子代表選手の状況を考慮し、基本的には、サッカーを楽しむ、トレーニングは明るく元気に取り組み、選手同士が切磋琢磨しながらプレーの質の向上に努めるために、試合では勝利を目指す、チームの中で個性を出す、選手としてコミュニケーションを取り組む、自分に与えられた役割(ポジション)を精一杯果たすなどを選考の基準としました。

ＧＫ：クラブチームの経験と技術をもっており、チームへ貢献するための能力があり、実践できる力を備え持つこと。

守備(ＤＦ・ＤＭＦ)：１対１の局面で相手の動き状況によってボールを奪うチャンスを逃さないことができる選手、粘り強く対応できる選手。

攻撃(ＯＭＦ・ＦＷ)：サイド攻撃、中央突破、ポストプレー、カウンターアタックができる選手、状況に応じたパスワークや、ファーストタッチを行うことができる選手、ゴールを意識している選手を選出しました。

2）成績

◆グループＡ：デンマーク・ドイツ・アメリカ・南アフリカ

◆グループＢ：タイ・ロシア・イギリス・日本

【予選リーグ結果】

Ｂグループ３位

【５－６位決定戦】

日本　１－２　デンマーク(前半：１－０　後半：０－２)

◆デフリンピック女子サッカー成績結果

優勝：アメリカ　準優勝：ドイツ　３位：ロシア

４位：イギリス　５位：デンマーク　６位：日本

７位：タイ　８位：南アフリカ

3）成績と評価

【９月５日(土)】第１試合(グループＢ予選)

日本　１－６　イギリス(得点者：井部)

初めてデフリンピックに参加し、最初の対戦相手はイギリスであった。４年前、３位になったチームである。イギリス戦は、選手のコンディショニング確認と得点を奪える戦い方を行った。相手のサイド攻撃を封じながら日本のサイド攻撃が出るような戦いを行ったが、クロスの判断が遅れたり、ＤＦの背後のカバーリングが不安定で判断のミスも見られた。相手のＧＫがこぼした球を井部選手がシュートを決め、１得点を入れた。日本は、相手のＤＦの裏を狙って何度もチャンスを迎えたが、これらのボールの位置や状況に応じたポジショニングがとれていないことや、準備不足が原因でそのため判断に迷いが生じた。また、判断の迷いが決断を鈍らせることでＤＦとの連携が混乱し、安全確実なプレーができていないことがあった。気温が38℃という猛暑の中で給水タイムの実施がなく、インプレー中、アウトオブプレー中に水分補給していたため、ポジションに戻るタイミングが合わず、試合の流れが乱れてしまった。また、非常にタフな相手でもあったので敗戦してしまった。

【９月７日(月)】第２試合(グループＢ予選)

日本　０－10　ロシア(得点者：なし)

２試合目は、ロシアと対戦。ロシアは４年前、決勝戦でアメリカと対戦０－２負けて準優勝となった。ロシア女子選手は身長･体格が大きく、パワーがあり、かなり強豪チームであった。試合の中では、パスをつなぐ意識を理解している選手を中心にゴールを奪うという目的でインプレー中としては悪くない内容となった。しかし、オフザボール時の味方へのフォローについては、ボールを持っている選手に関わる選手が少ない。特に逆サイドにいる選手はほとんど関わっていないため、ボールを奪える場面で奪えず、裏を取られる場面も多かった。守備の個人戦術、グループ戦術の理解がないままプレーしてしまったこと、攻撃から守備への切り替えが遅かったり、ボールを奪われた選手から守備をする意識を身に付けることが出来なかった。ＧＫは、スターティングポジション、ＤＦの連携、１対１の対応を積極的に取り組んできたが、試合の中でスキルを発揮することが出来なかった。結果、日本は０得点に終わった。しかし、現地の気温が39℃という猛暑の中、最後まで奮戦した。

【９月９日(水)】第３試合(グループＢ　予選)

日本　５－０　タイ(得点者：寺井３点、濱田、川畑)

３試合目は日本と同じく２連敗中のタイと対戦した。日本は、立ち上がりから一方的にタイ陣内に攻撃するようにし、ＤＦラインをコンパクトにする事により、相手の攻撃をしのいだ。日本の攻撃がタイの守備をかく乱することでシュートチャンスを作り、除々にペースを掴んでいき、空いた中盤のスペースを使いながらゲームを組み立て、日本は初勝利しました。しかも、主将の寺井選手は、ハットトリックで、合計５点を奪う猛攻を見せました。結果はＢ組３位となり予選通過はできませんでしたが、個々の選手に良さがあり代表チームの中でコンディショニングは非常に良かったと思っています。

【９月13日(日)】５－６位決定戦

日本　１－２　デンマーク(得点者：寺井)

デンマーク戦で勝利するために、怖がらずに自分達がこれまでにやってきた通り積極的にボールを動かすイメージを持たせることで、立ち上がりから積極的にボールを奪い、相手のＤＦに対してサイドのスペースを突きながらワイドに攻撃を行った。ＤＦラインからロングフィードパスを多用し、何度も繰り返して１点を入れた。ボランチの流動的なポジションチェンジによりサイドのスペースを支配しボールを動かすことが出来た。しかし、ボールをつなごうとツートップがスペースに流れながらくさびを受けてサイド攻撃を仕掛けたものの、強いマンマークにより良いポジションに立つことができなかった。選手個人のビルドアップに難を感じたが、今までと違って本来の力を発揮できた。しかし、あと１点というところが遠かった。これだけで支配しながら得点できなかったことについて、さまざまな課題を残した試合でもありました。

4）チーム(コーチ)体制とコーチの役割

スタッフの決定については、サッカーにおける専門的知識を身につけており、経験も豊富であることを考慮しながら協力を依頼し、承諾していただきました。各自の役割を認識して、強化合宿の実施、遠征試合などの連絡や相談をしたり、個人面談、試合の反省などを行い、コーチ体制としてスムーズに実行することが出来ました。

監督	佐藤　浩幸 （神奈川）	チーム指揮、選手の強化、 トレーニングの計画・実施
コーチ	武井　基 （東京）	監督を補佐 選手のメンタルケア
トレーナー	立川　智隆 （広島）	選手の怪我や体調の管理 テーピングの実施
アシスタント	川畑　孝夫 （北海道）	トレーナーを補佐
アシスタント	中山　剛 （兵庫）	チーム全体の運営事務

5）競技スケジュール

	期　　日	AM	PM
①	９月２日 （水）	成田空港・関西空港　現地集合→出発（出国）	
②	９月３日 （木）		ミーティング
③	９月４日 （金）	練習（ポゼッション）	ミーティング
④	９月５日 （土）	対イギリス戦（1-6）	コンディショニング ミーティング
⑤	９月６日 （日）	練習（クロスの対応・ パス＆サポート）	コンビネーション ミーティング
⑥	９月７日 （月）	対ロシア戦（0-10）	コンディショニング ミーティング
⑦	９月８日 （火）	練習（ポジション別）	コンビネーション ミーティング
⑧	９月９日 （水）	対タイ戦（5-0）	コンディショニング ミーティング
⑨	９月 10 日 （木）	練習（ポジション別）	コンビネーション ミーティング
⑩	９月 11 日 （金）	デンマーク対タイ 観戦	コンディショニング ミーティング
⑪	９月 12 日 （土）	練習（ポジション別）	コンビネーション ミーティング
⑫	９月 13 日 （日）	対デンマーク戦（1-2）	コンビネーション ミーティング
⑬	９月 14 日 （月）		アメリカ対ドイツ 決勝戦　観戦
⑭	９月 15 日 （火）	閉会式	
⑮	９月 16 日 （水）	台北空港～成田空港・関西空港到着（入国）→ 現地解散	

6）大会の競技運営などの報告

デフリンピックのタイムスケジュールや大会プログラムを頂きました。おかげで練習会場の場所や時間、試合の開始時間が把握でき、トラブルもなくスムーズにいくことが出来ました。審判に関しては、台湾（台北）女子審判員だけではなく、国際女子審判員を主審としてセッティングをすることが必要だと感じました。

ホテルから試合会場までの専用バスで 20 分程度と近くにあり、トイレ、シャワー設備などが整備されており、良い環境でありました。さらに試合会場と練習会場とホテル（各階）まで、警察の方が配備されていたこと、その他熱中症予防のための氷を多量に準備してくれたこと、またミネラルウォーターと炭酸飲料も多くもらったことが非常に良かったと思っています。

7）競技規則の適用（問題点など）

ＴＤ会議で、熱中症予防に関わるＷＢＧＴ計（湿球黒球温度）の説明がなかったこと。９月５日（土）、気温は 36℃の猛暑の中での試合は厳しかった。イギリス戦の時に、水分補給タイム実施がなく続けていた。インプレー中、アウトオブプレー中に選手自身から水分補給していました。日本選手たちは、熱中症はなかったが、約１時間の休憩を取りホテルに戻ってホッとしました。

９月７日（月）、試合の前に審判員から「水分補給タイム実施する」と言われたので、安心しましたが、39℃の猛暑中で選手達は諦めずに最後までよく頑張ってくれました。試合終了後、日本選手の２名がダウンし熱中症にかかったため、試合会場の本部で約１時間、身体を冷やして寝かせました。さまざまな問題があり、熱中症予防に関わるＷＢＧＴ計（湿球黒球温度）を設定しなければなりません。

8）大会参加までの準備状況

合宿と遠征試合については、毎年３～４回実施した。2009 年は、５月（静岡）７月（福岡）８月（静岡）の４回実施。その４年間で練習試合（Ｊリーグの下部組織、大学、高校、各県レディーズチーム）で経験を積ませ、スタッフや選手間でコミュニケーションがとれるように努めました。合宿以外では、自主的にトレーニング、地元で積極的に競技大会に参加するよう指示した。

監督は、選手の現状把握、デフリンピック関連の情報伝達、国内女子リーグ戦の視察。コーチは、選手のメンタルケア、トレーニングの担当、強化部の連携。トレーナーは、ドーピング関連の指導、情報収集を実施した。

9）反省・まとめなど

日本ろう者女子サッカーチームが発足してから４年間、代表強化合宿、練習試合を積んできた選手たちは代表の誇りを持ち、テクニックの面、フィジカルの面、精神の面において、特に力を入れた。トップメンバーとして出場した選手とリザーブメンバーとして出場した選手が共に、毎日のミーティングで全員で戦うための時間の調整及び組織的な体制の確認をした。最後までやり通す強い意志とやればできるという自信を身につけたのも事実だが、勝つことの難しさも味わった。４年間取り組んできて個人の技術・戦術の向上、チームコンセプトの理解など、一定の成果として挙げられるが、更なるレベルアップも必要である。４年後のデフリンピック参加に対しては、フィジカルのレベルアップとコンビネーションの攻撃と守備を出来るようにするためのスピードアップが必要であり、選手の選考基準、選考方法の見直しも必要となります。また、今後は世界基準をベースにし、個々のレベルを上げることが最重要課題であります。

最後になりますが、監督として多くの経験を積むことが出来てとても良い経験をさせて頂きました。台北デフリンピックが終わり、多くの方々からご支援を頂いたことを心より感謝しております。選手たちは、本当に精一杯頑張ってくれたと思います。台北デフリンピックに協力していただいたスタッフと強化部の皆さん、本当にお疲れ様でした。有難うございました。

選手(主将)　寺井　名美

①成績に対する自己評価
＜１日目　９月５日＞
日本　ＶＳ　イギリス　　●１－６
　初めての国際試合で、ＭＦ左サイドハーフとしてスタメン出場。緊張感やプレッシャーにかかってしまったせいか、少し動きが硬かった。相手は前回デフリンピック４位であるイギリスと戦ってタフな相手だけあって負けたものの、どんなレベルなのか体感できてよかったと思う。
＜２日目　９月７日＞
日本　ＶＳ　ロシア　　●０－10
　前回銀メダルであるロシアと対戦して、ロシアにはないスピードや戦術を試みたが、気温が 39 度という猛暑での試合は初体験で、うまくパスが出せなかった。それでも、最後までに諦めずに守備に集中できてよかったと思う。
＜３日目　９月９日＞
日本　ＶＳ　タイ　　○５－０
　イギリス、ロシア戦とも続けて完敗した悔しさを活かして日本らしくプレーに集中できるように声を掛け合っていった。前日の練習で再確認した戦術を理解できたので、ゴールできた。ハットトリックも、みんなのサポートがあってのゴールでした。
＜４日目　９月 13 日＞
日本　ＶＳ　デンマーク　　●１－２
　どちらが勝ってもおかしくない試合でした。レベルも五分五分であることが分かった。最終戦なのでＦＷ、ＤＦとの連携プレーに心掛けた。先制点を決めてから流れがよくなり、それぞれのポジションでの役割確認ができた。主将として最後まで、お互いのコミュニケーションを確認し合いながら、少しずつチームワークを深めていった。
　負けて悔しかったけど、次に繋がる悔いのない試合でした。
②反省・まとめ
　女子サッカー日本代表にとって、初めてのデフリンピック出場であり、メダル獲得の目標を達成できなかったけど、経験が少ない選手たちも１試合１試合ずつ経験を積んでいくうちにプレー意識が良くなっていくことで、今後につなげてもらえたらいいなと思っています。初代主将としてプレッシャーはあったけど、チームづくりに心掛けるには「１人はみんなのために、みんなは１人のために」とそれぞれの選手に声をかけていきました。
　今後の女子サッカーのためにも、育成トレーニングを取り入れたり、強化合宿に練習試合を増やして、環境整備に力を入れていきたい。

選手(副主将)　熊沢　佑吏

　私のポジションはＤＦ。予選１日目はイギリス戦で、緊張と負けないぞ！という気持ちでした。合宿で練習をしてきたＤＦ同士の連携プレーが上手く取れず負けた。予選２日目は、ロシア戦。イギリス戦での悔しさから前日練習はＤＦの動きを固めることを中心にした。ロシアは身長が高く、スピードもあった。さらにＤＦの裏を狙われ、マークとカバーが弱く守りきれなかった。予選３日目はタイ戦。もう負けない！という気持ちで望んだが、パスを上手く回せずタイのペースだった。後半は気持ちを入れ替え、冷静にパスを回した。結果、初勝利を挙げることができ、本当に嬉しかった。５，６位決定のデンマーク戦。積極的にマークし、相手の弱点を活かした動きを取り、先取点をとった。だが、後半から相手のマークが強くなり一瞬の崩れで２点入れられ、６位となる負け試合となった。勝てると思った試合なので、本当に悔しかった。
　私自身、地元でチームや同級生に協力してもらい、自分の苦手なスタミナ面を中心にフィジカル練習を心がけてきた。39 度という経験のない気温の中で、後半はスタミナが切れてしまった事が多かった。基本的なパスやトラップも合宿での練習に比べ弱くなってしまった。本大会で思うように練習成果を出せず、本当に悔しい思いを何回もした。でも練習を頑張ったこと、金メダルという目標をもって日本代表の仲間たちと何度も話し合ったこと、世界の選手に出会えたこと、すべてが私にとって貴重な財産です。
　最後まで大会に参加するか悩んだが、高校時代の経験を世界で試してみたい！と思い挑戦した。高校時代の監督、同級生、地元チームが練習相手をしてくれ、家族の協力があったからこそ私はこの大会に参加することができた。これからも地元で大好きなサッカーを続け、ろう者の女子サッカーが増えることを願い、楽しんでいきたいと思います。

選手　　井部　絵里子

■成績に対する自己評価
　試合結果は、１勝３敗で７位中６位という残念な結果になりましたが、デフリンピックに初参加かつ初国際戦という初戦で１点ゴールを決めることができたことにおいては評価したいと思います。これは自分一人で決めたゴールではなく、チーム一丸となって決めることができた１点だと思っています。２試合目のロシア戦は、スピード面や個々人のポテンシャルの高さに圧倒されたものの、臆することなく精一杯プレーすることができました。３試合目のタイ戦は、日本チームとレベルが似ていたということもあり、落ち着いて試合に臨むことができました。５・６位決定戦のデンマーク戦は、対戦前にデンマークの試合を観戦し、対策を練った上での対戦でした。そのため攻撃面だけではなく、守備面においても注意すべき選手を味方同士でアイコンタクトや身振り手振りで確認しあいながら取り組むことができました。特に、全試合の中で、失点を抑えたいという気持ちが強く表れていたと思います。今回、日本からの「女子サッカー」（種目）の出場は、初めてのことでありましたが、自分らしさを失わずプレーできました。
■反省、まとめ
　対戦相手によっては体が大きく、足が長い選手が何人かいました。試合中、自分がボールを持った時に、頭ではドリブルできる余裕があると考えていても実際はすぐにボールを奪われるという場面が幾度かあり、世界のレベルの差を痛感しました。また時々、基本である味方への正確なパス、トラップができていない場面があったので、危機的な状況に置かれても落ち着いて正確にパス、トラップができるように練習を重ねていかなければならないと感じました。そしてフィジカル面においては、相手選手とぶつかっても倒されない体作り、90 分間全力を出し切ってプレーできる体作りが必要であり、メンタル面については、どんな状況に置かれても動じない心の強化が必要であると思いました。これは、デンマーク戦で同点だった際、試合終了間際に追加点を取られた時、日本チームの “必ず、勝利する！” という気持ちの隙を狙われた気がしたからです。世界のレベルの高さを痛感させられたと共に、ろう者日本女子サッ

カーの今後の課題を見つけることができた大会でした。今までチームを支えて下さったスタッフ、応援して下さった皆様方、ありがとうございました。

選手　　田中　恵

■成績に対する自己評価

結果は６位。自己評価としては、メダルを目標にやってきたので悔しい。散々な結果だと思う。これが世界レベルだと痛感させられた。

■反省、まとめ

私は、４年前からの強化合宿に積極的に参加してきました。最初の頃に腰痛や膝痛等の怪我に悩まされた時期があり、思い通りにいくプレーが出来なく、一度は辞めようと思った時期がありました。でも、デフリンピックは私の夢であり、目標でもありました。ここで辞めたら後悔すると思い、最後まで諦めないで怪我を少しずつ克服しながら頑張ってきました。今回のデフリンピックは、初めての出場で、初めての海外でもありました。環境や食事の違いで身体を調整するのが大変でした。また試合では、暑かったり、雨が降ったりと悪天候の中でやってきました。相手は体格やパワーが日本と違って世界の凄さを肌で感じました。しかし、４年後に向けての課題がいくつか出来たと思います。もし、４年後もまた目指す事になったらその経験を生かして、トレーニングをたくさん積み、今度こそメダルを獲得出来たらいいなと思います。

デフリンピックは凄い大会でした。各国からきた人達と触れ合い、交流出来たのが凄くいい経験にもなり、勉強になりました。そして、何よりチームメイトと出会えた事がいい思い出です。一緒に戦ってきたチームメイトがいたからこそ、私は頑張れたのだと思います。

最後に支えてくれた監督やコーチやスタッフや皆にありがとうございましたと言いたいです。

選手　　首藤　麻衣

女子ろうサッカー日本代表は初出場で金メダルを目標に試合に臨んだが残念ながら予選では１勝２敗と決勝トーナメントに進出できず、最後に５位決定戦で残り数分で惜しくも逆転され、最終的に６位となり、世界の壁の厚さを改めて痛感させられた。

試合は何とか接戦になるだろうと予想したが、実際は何度もＤＦの隙を突かれ、自分たちのサッカーは相手に全く歯が立たなかった。まるで相手は大人、自分たちは子供のサッカーをしているようだった。自分の認識の甘さに大変恥ずかしいと同時、情けないと思った。これが現在の日本の実力だと重く受け止めるしかなかった。そして試合を通じて課題が色々見えてきた。やはり女子ろうサッカーは創立４年というのもあって土台がしっかりしていないのが最大の敗因ではないかと思う。次に技術面、コミュニケーション面、体力面、知識面などの不足、試合経験、国際経験の差も挙げられると思う。世界と互角に戦えるにはやはり女子ろうサッカー人口を増やして競争率を上げることが先決だと思う。現状では女子ろうサッカー人口が少なく、誰でも日本代表に選ばれるみたいな雰囲気がどこかにあって甘い部分があった事は認めざるを得ない。地元サッカーチームに入部して、普段から都道府県の女子サッカーリーグなどを通じて試合経験を積み重ねていった方が女子ろうサッカー強化に繋がるのではないかと思う。メダルを獲れなくて凄く残念な結果となったが、今となっては、猛暑の中、全試合フル出場を果たした事、世界の強豪国と戦った事が私にとって貴重な経験となった。しかも、日本より世界の強豪国が沢山ある事を知り、新たな目標ができ嬉しく感じている。４年後のデフリンピックにまた女子ろうサッカー日本代表として出場出来るなら今回の経験を生かして何らかの形で貢献できたらと考えている。

選手　　中井　香那

2009 年９月５日～ 16 日　第 21 回台湾夏季デフリンピックに出場して、技術的な反省としては、コーチからも指摘していただきましたが、まだまだサッカーの経験が浅いので、ドリブルの技術、足の使い分け、動き方、体の反転をもっと身につけたいと思います。私としては、初めてデフリンピックに出場し、２試合スターティングメンバーに選ばれたこと、猛暑の中で最後まで走り続けられたこと、誰よりも速く走れたこと、試合するたびにどんどん上手くなって身体が動けるようになりました。もっともっと練習して上手くなりたいと思いました。私は、今まで小、中、高、大学と健常者と共に学び、他競技ですが全国大会を目指しやってきました。今回初めて同じ聴覚障害者のある仲間と同じ目標を目指して頑張れたこと、デンマークや海外の人たちも含め、たくさんの人達と知り合いになり、楽しい時間を過ごせたこと、またデフリンピックに出場するあたり、職場の人達、家族、友達周りの人達の支えや応援があり、感謝でいっぱいです。この素晴らしい体験を活かし、デフリンピックという大会があることをもっとみんなに知ってもらえるようこの経験を伝えていきたいです。今後も頑張りたいと思います。ありがとうございました。

選手　　会津　みなみ

私がサッカーを始めたのが４年前。さまざまな合宿や大会に参加してきましたが、初めてのチームでもあり、本当に先が見えなくて不安になったこともあった。それでも仲間と支え合い、チームワークを深めていった。一番印象に残っていることは最後の合宿の夜にミーティングで一人一人が今までを振り返り、目標などを語った時、皆の金メダルを取りたいという気持ちが１つになったことです。私は去年の５月に練習で右膝を怪我してしまい、思うように走れなくて一時は夢をあきらめかけたが、少しずつ「ここまで頑張ったことを無駄にしたくない」と奮起することができた。初戦はイギリス。思うようにパスがつなげられず、すぐボールをカットされてしまうことが多かった。本当に勝てる試合だったと思うと悔しいです。２戦目は、４年前に２位だったロシアとの試合。ロシアの選手は体が大きく圧倒された。体の小さい私たちはパス回しとスピードで勝負したが、やはり体が大きいためパスを出してもすぐにカットされることが多かったが、チーム全員が良く動いてプレーしてくれた。リーグ戦で最後のタイ戦。初めてスタメンとして選ばれた。ゴールにつなげるパスを出せたのが嬉しかった。初めて勝つことができ、私にとって最初で最後の試合でした。私たちの熱い気持ちは最後まで尽きることはなかった。５位決定戦の相手はデンマーク。残り数分で点を決められ終わってしまったあのシーンがまだ目に焼き付いている。今回、６位という結果に終わり悔

しい思いでいっぱいであるのと同時に、世界のレベルを思い知らされました。高橋会長を初め、協会のみなさま、応援してくれた方のみなさま、共に闘ってきた仲間たち、本当に感謝しきれません。今回の台北デフリンピックはまた４年後も行きたいと思えるようなデフリンピックでした。夢と感動をありがとうございました。

選手　　田村　友恵

女子サッカーは予選リーグ３位、５位決定戦でデンマークに敗退し６位という結果に終わった。デフリンピックは初出場で、外国の選手と対戦することも初めてだった。初戦のイギリス戦は緊張からきたのか、日本らしくないプレー続出だった。ＤＦのラインがバラバラだったりＦＷとＭＦが積極的に攻めようとせず小さいパスしか繰り出せなかった。後半戦の残り 15 分のところで芹沢さんと交代し、初めてピッチに立った。ポジションはＦＷ。いつもと違うポジションだったので最初は焦ったが、スタミナがスタメンよりは余っているのでとにかく走り回って点を取ろう！その思いで戦った。結局力になれず６―１で試合が終了したあとは悔しくてただ泣くしかなかった。この時、世界のレベルを思い知り、今の私では全く歯が立たないと痛感した。ロシア戦も 10 －０で大敗した。日本の得点のチャンスは何度かあった。しかしＦＷの決定力が明らかに乏しい。それに比べロシアは 10 回シュートの内８回決めるみたいに決定力があり、ちょっとしたミスだけで点を取られてしまう。小さなミスでも許されない状態だった。タイ戦は５－０で初勝利したが素直に喜べなかった自分がいた。もっと点を取れたはず。最後のデンマーク戦は惜しくも２－１で敗退でした。

結果的に日本の敗因は沢山あるが、一番大きいのは経験の差だと思う。日本の練習試合は日本人同士としかやらなかった。外国人とは体格が全然違うので敵と敵の間にパスすると普通だったら通るのに、長い足が伸びてきてカットされたりヘディングでいくらジャンプしても全然対抗出来なかった。デンマーク戦では外国人対策が分かってきたのか少しはやりやすかったと思う。何事も経験だと痛感し、大変勉強になった。試合の結果が悪かったとはいえ、次に繋がる試合だったと思う。台北で味わった敗北感を忘れずに、４年後も金メダルを目指して頑張りたい。

選手　　佐野　和美

自分自身にとってデフリンピックは初出場であり、国際大会としても初出場でした。デフリンピックでは皆様の温かいサポートを頂いたお陰で試合に出場することが出来て本当に嬉しかったです。しかし、初出場と言うことを含めても満足の行く結果ではなかったです。悔しい思いを沢山しましたが、現在の日本と各国の選手との技術・体格などの違いが明確に分かったのは大きな収穫だと言えると思います。自分にとって、大きく感じたのは「経験不足」「情報不足」。今までの合宿では技術および戦術強化を中心に行ってきたが、それでは世界と戦えないと痛感しました。合宿の中で、自分は未経験者として参加したが、未経験者の為の練習がなく、経験者と同様の練習だけで基本が出来てないということから差が出てきたのではないかと思う。他に、自分の練習不足もあり、技術面などを高めることが出来なかった。それに、金銭面での負担も大きい。世界選手権への派遣も出来ないことから各国のレベルを把握することが出来ない部分も関係あるかもしれない。しかし、デフリンピックに出場したお陰で新たな課題を得ることで、次回へ向けて少しずつ改善していく目標が出来た。最後に、デフリンピックで多くの貴重な経験を積む事が出来て良かったです。それは、応援して下さった家族や友人、協会をはじめとする皆様からの応援のお陰です。応援、ありがとうございました！

選手　　御園　裕未

■成績の自己評価

女子ろうサッカー日本代表はデフリンピックに初出場し、結果的に７チームのうち６位。女子ろうサッカーは４年前から設立し、何回もの合宿と練習試合もして、チームワークを高めてきました。メダル取得も当然目標として、海外チームの研究もしました。しかし、世界の経験が１度もなく、ＤＶＤでの研究だけだったことが残念でした。もしも、世界選手権への出場、韓国遠征が実現していればまた結果は違ったのかもしれないと思いました。でも、合宿費用などの自己負担がすごくかかったので、世界選手権に参加することができなかった。だからこそ今大会でメダルを取得して認めてもらいたかったのですが、それを実現できなかったことが悔しいです。

■私自身の反省・感想

１年に数回行われた合宿は、学校の都合の為、全部参加することができませんでしたが、毎回合宿の度に自分ができることを精一杯アピールしてきました。その事が認められ、日本代表に選出された時はすごく嬉しかったです。対戦相手はほとんど男子並みに身長が高くて、守りがすごくハードでした。足も長くてすぐパスカットされたりと、日本とは違ったサッカーにそれが世界のレベルなのだと実感しました。さらに１試合目のイギリス戦で相手に足を蹴られて、怪我をしてしまい、２試合目以降は途中出場になり、本調子で戦うことができなかったのがすごく悔しかったです。でも、試合に出るからには自分ができるプレー、気持ちを前面に出して最後まで挑みました。結果は残念だったけど大好きなサッカーで世界と戦った事、４試合全てに出場（途中出場を含めて）できた事を誇りに思います。４年後こそギリシャのピッチで勝って泣きたい！また、試合以外での海外の人との交流も自分自身の視野が広がり、サッカーも価値観においてもすごく充実した大会でした。

選手　　大島　彩香

女子サッカーで初めて、デフリンピックに出場しました。まず、一番に感じたのが、背も高く体格も全然違うこと。それは、前もって知っていたことだけど想像していたよりもはるかにすごかった。１試合目は、初めての国際大会で、自分達は緊張しすぎて、なかなかコミュニケーションが取れなかった。２試合目は、１試合目より試合の内容も良かった。でも、自分には、欠点があった。自分のポジションに夢中になりすぎて、味方とのコミュニケーションが取れていなかった（特にＤＦとの）。３試合目は、相手は、同じ初出場であり、体格も日本と変わらない。ただ、全員が相手につられてしまい、なかなかチャンスを作れなかった。後半は気持ちを切り替え、日本らしいプレーをしていった。そして、大会で初一勝できた。４試合目、今大会の最後の試合。負けられない試合だった。試合前日に相手チームの動きや主力選手の動きを見に行ってメモを取ったり、練習

をしていった。その効果なのか、試合は互角のレベルであった。結果は負けてしまったが、悔いのない試合だった。世界の舞台に立ち、日本では学べないことを一杯学べました。これらを生かし、また、次の夢に向かって一歩一歩進んでいきたい。また、世界の舞台に立つためには、今以上にもっと技術、体力を高めていかなければならない。今回の機会で多くの課題が見つけられ、本当に良い経験になり、良い勉強になりました。

最後に、今まで支えてくれたみんなへの感謝の気持ちを忘れずに、また練習に励んでいきたいと思っています。

選手　　黒崎　幸恵

四年前の合宿から台北デフリンピックまで一回も欠かさずずっと参加してきました。初めての合宿の時は、本当に倒れそうになるぐらいきつかったです。次の合宿から段々慣れてきて皆とコミュニケーションを取れるようになりました。でも、考えが違う人もいて本当に大変でした。合宿中に怪我したりして辛かったけど最後まで諦めずやってきました。台北大会で初出場する機会が一回しかなかったので本当に悔しい気持ちでいっぱいでした。技術があまり上手くなかったからかもしれません。四年後のアテネ大会へ向けて頑張って行きたいと思います。

選手　　佐藤　愛香

結果：６位

初めてデフリンピックへ出場しました。女子サッカーとしても初出場です。結果は、予選リーグでは１勝２敗、５位決定戦では惜しく負けてしまい、６位となり、残念ながら初のメダル獲得となりませんでした。でも、国際大会で１勝できたことは、私たちにとってすごく大きいものだと思います。やはり体力および技術不足に加え、経験の浅さにより世界レベルとの差を痛感させられました。

個人の反省では、プレッシャーもありましたし、食生活の違い・環境に慣れてなく体調も万全ではなかったと共に、本来の力を発揮できなかったことが、何よりも悔しくてたまりませんでした。

国際大会の大舞台にあがるには、心技体すべての強化が必要であり、プレッシャーがかかる中で、どれだけ心身のともに平常でいられるか精神力と集中力を高めなければならないと思いました。

世界と互角に戦えるためには、合宿を増やして、練習やトレーニングを積み重ねていくことが重要なので、その為には練習環境を整える必要があります。それだけでなく、選手もチームという集団意識を持って切磋琢磨しあえば、さらなるレベルアップが出来るではないかと思います。今回の機会で多くの課題が見えて、本当に良い勉強になりました。この経験を活かして、女子サッカーの発展のためにバックアップしていきたいし、４年後には良い結果を残せるように頑張りたいと思います。

最後に、今まで支えてくれたスタッフ、たくさんの方々に心から感謝しています。応援して頂いた皆様、本当にありがとうございました。

選手　　濱田　梨栄

女子サッカー選手として、デフリンピックに初出場しました。初めて世界ろうのチームと戦って、世界のレベルが、日本より高く、技術も巧くて正直驚きました。今まで国内で健常者のチームとしか戦ってないため、世界のレベルということはどんなものなのかを全然知りませんでした。初めての試合はイギリス戦で、私は後半からＦＷからＤＦになり、ＤＦの立場からみるとイギリスはスピードがあって技術も上手でした。ロシア戦も同じでした。とても悔しくてたまりませんでした。前回デフリンピック銀メダルのロシア、銅メダルのイギリスはかなり強くて圧倒されましたが、良い経験になりました。１番良かったのは、最後の試合のデンマーク戦で結果は１－２で負けでしたが、内容的にはとても良かったと思います。どう戦略していくか、チームメンバーとコミュニケーションを取り、いろいろ勉強になる部分がたくさんありました。やはり、世界はフィジカル・技術の差が圧倒的で、今後どう戦っていくか、多くの課題が残りました。デフリンピック期間中において、練習→試合→練習…のような毎日で、本当に疲れていてベストな体調を維持するためにどうすればいいのかを考えていました。これも良い経験になりました。次のデフリンピックまで１年１年しっかりとフィジカル・技術力・戦力などのすべての面においてさらなるレベルアップして世界のレベルとの差を縮めたいとみなさんと共に頑張りたいです。

今回の機会で、いろいろ刺激的なことがたくさんあって特に精神的にこれからももっと頑張るぞーっていう気持ちが強くなりました。本当に素晴らしい経験が出来て良かったです。コーチや監督・スタッフのみなさん、本当にありがとうございました。

選手　　古賀　千恵美

私たちサッカー女子日本代表は今回のデフリンピックが初出場で、このチームを設立してから一度も国際試合をしたことがないので、世界のレベルはどのくらいか、自分やチームは世界にどこまで通用出来るか楽しみにしていました。４年間、デフリンピックのために、日本代表合宿や所属している健聴者チームで練習を積んできました。私たちはメダルを取るために日々努力してきました。私もメダルを取れるレベルに達していると思っていました。しかし、現実は違い、６位という結果に終わりました。世界の壁は高く、レベルの差も大きかったことを痛感させられました。日本も世界のレベルに近づくためには国際大会への派遣や世界と同じレベルのチームとの交流試合を通し、経験を積み重ねることも重要だと思います。

デフリンピックの１ヵ月前に骨折という怪我をしてしまい、急遽に手術を受けました。医師にデフリンピックに参加出来る保障はないと言われ、大会まであと１ヵ月という短い期間で、時間もないことから不安や焦りなどがありました。週に１～２回くらい通院し、治療、リハビリ、出来る範囲の練習を精一杯やり、本戦に間に合うことが出来ました。小さい時から憧れていたデフリンピックに出場することが出来たことは嬉しく思います。練習や試合になると、怪我に対する恐怖心がありました。今まで練習してきたことを発揮出来るよう努め、自分なりにプレーをしましたが、自分の思うようにプレー出来なかったことと得点に絡むことも出来なかったことが悔いとして残っています。

台北デフリンピックは私にとって感慨深いものとなりまし

た。試合以外にも色々学ぶことがあり、本当に良い経験と勉強になりました。

選手　　川畑　菜奈

初めて女子サッカー日本代表として台北デフリンピックに参加しました。初参加ということもあって、初めて他の国と闘える楽しみと他の国のレベルがどれくらいあるのか分からない不安もありました。私たち日本代表の最大の目標は予選リーグを突破し、決勝まで行ってメダルを取る事でした。しかし、４試合中１勝３敗という残念な結果になりました。唯一勝ったタイ戦ですが、私としては試合の内容に満足出来ませんでした。得点のチャンスがあったのに決められなかったり、トラップをミスしてしまったりと基本的な所や簡単な所でのミスが多かったからです。それから、日本の悪い癖として相手のペースに合わせてしまったり、体同士のぶつかり合いがなかったりするところが仇になってしまいました。まず、相手のペースに合わせてしまうことで日本らしいプレーが出来なくなること、そして体のぶつかり合いがないために相手に簡単にボールをキープし続けられたり、ドリブル突破しやすいというメリットを相手に与えてしまったことが多かったです。そして全体の試合を通して感じたことはマークのしかたが甘かったのと「勝利」に対するチーム全体の意識が足りなかったということも負けてしまった原因の一つだと思います。デフリンピックで試合を実際に経験してみて思ったことは世界の壁をとても感じました。でもそれと同時に世界のレベルを知り、それを４年後のための参考にすることが出来て良かったと思います。そしてデフリンピックで経験したことをしっかり頭に入れて試合で負けた悔しさをバネに４年後のデフリンピックを目指してまた一から頑張って行きたいと思います。

最後に私たち日本代表を応援して下さったみなさん本当にありがとうございました。

選手　　仲宗根　祥子

デフリンピックは２回目です。今回は初めて女子サッカーとして初出場しました。４年前のＤＶＤを見て色々、勉強をしてきましたが､実際に試合を戦ってみると予想と違っていました。外国チームは技術面、精神面が日本より上でした。私はずっとＦＷとして仕事を担い、自分のスピードに自信を持って戦ってきました。しかし、イギリス、ロシア、デンマークに負けてしまい、本当に悔しい思いです。一番、良かったのはデンマークと試合です。どっちが勝ってもおかしくない戦いでした。最後までに諦めずに頑張ってきましたが、日本は６位という結果に終わりました。しかしながら、自分としては全身全力で戦えたと思います。

最後に、応援してくださったみなさん、励ましの言葉を沢山いただき本当にありがとうございました。

選手　　芹澤　育代

私は、女子サッカー代表として初出場いたしました。また、デフリンピックで女子サッカー競技が開催されるのは２回目だが，日本は今大会が初出場でした。サッカーを始めて今年で18年目となるが、世界と戦うことはサッカー人生で始めてであり、世界のサッカーを体感出来る事は誰もが経験できることではなく、滅多にないチャンスであり、小さいころからの夢でした。そんな世界のチームと戦える日が遂にやってきた時は、いよいよ夢の舞台に立てるんだなと緊張と喜びをかみしめていた。台北に足を踏み入れた時は気温が35度，湿度が90％以上と蒸し暑く、突然のスコールなど驚くことばかりでした。最初は環境の変化に早く慣れるだろうか戸惑っていたが、日が経つにつれ、だんだん慣れてきた。２週間ずっと一日おきに90分間試合をすることは始めての経験で不安がとても大きかったが、試合を重ねるごとに最後まで諦めたくない気持ちがだんだん強くなってきた。試合では、ＤＦ、ＭＦ、ＧＫと色んなポジションを経験させてもらったが、それぞれの試合で色んな事を学び、とても充実した試合でした。

異国の地で世界と戦って学んだことは、世界は想像以上にレベルが高く、聴覚障害というハンデがあってもなくても世界は共通していると感じました。まず、アジア以外の国は背が高い選手ばかりで、体格もひと回り大きく、日本が不利になる部分が多かった。例えば、守備時にマークしている相手に抜かれないように気をつけていても相手は背の高さや体の大きさを生かしてヘディングでパスしたり、腕の高さがちょうど首から胸にかけて当たるため、簡単に体を抑えられ、抜かされたり、走り負けることが多かった。また、ボールを触ろうとしても相手の足が長い為、先に触られることが多く、なかなか自分達のボールにすることが出来ず、やりづらかった。しかし、どんなに負けていても最後まで諦めない気持ちを持ち続けられたことは良かった。次に環境の面で，学んだことがあった。それは、暑さ対策である。第２試合目（ロシア戦）のとき39度の気温の中で試合をしていて、後半開始後に熱中症にかかり、自ら交代を申し出て、その後に倒れたのである。この試合ではボランチで出たのだが、暑さで水分補給を取るタイミングが難しく、20分過ぎに少し飲めたのがやっとだった。朝からもっとこまめに水分を摂っておけば熱中症にもかからずに済んでいたと思うと水分補給の大切さを痛感させられた試合でした。そんな経験があったおかげで、その後の試合ではフル出場で出ることができたが、一番良かったのは最後の試合でした。この試合は逆転負けしたが、自分も含め、ピッチにいるメンバー、監督、スタッフ、ベンチメンバー、みんなの気持ちが一つにまとまった試合だと感じました。これからの日本にとって、自分もチームも含め、収穫や課題が多く見つかり、後に続く人達に伝えていけたら良いなと思いました。

最後にデフリンピックという素晴らしい大会を経験することができ、本当に貴重な経験になりました。デフリンピックのことをもっと多くの人に伝えていきたいと思います。

柔道競技チーム

監督　　石橋　千草

選手の選考について

2008年５月にフランスで行われた世界選手権で、男子－73kg級宮山選手が３位、－90kg級須川選手が３位、－100kg級山田選手が１位。2009年９月に台北で行われたプレ大会で、男子－60kg級東選手が３位，－73kg級宮山選手が３位，－81kg級南選手が３位，－90kg級須川選手が２位、

－100kg 級山田選手が１位。各大会で上位入賞した選手、今までの行動や態度、取り組み等デフリンピックに対する熱意の強い選手が選考された。

①成績一覧

男子－ 66 kg	東　選手	１回戦敗退
－73 kg	宮山選手	５位
－81 kg	南　選手	７位
－90 kg	須川選手	５位
－100kg	山田選手	優勝

②成績と評価

－ 66kg 東選手は、１回戦ブラジルの DA SILVA 選手と対戦し、序盤は優位に試合を進めていたが , 試合中盤相手の組み手になり、下がったところを内股で１本負けを喫した。減量や腰痛で調整が思うようにいかず、自分の持っている力を最大限発揮出来なかったのが敗因であった。日頃から体重管理と体のケアをしていかなければならないと感じた。

－ 73kg 宮山選手は、１回戦アゼルバイジャンの MAMEDIYEV Elnur 選手と対戦し、組み手争いが続く中、互いに積極的戦意に欠けている為に指導ポイントを重ね指導３までいく。奮起した宮山選手はその後果敢に前に出て、試合終盤に隅返しで一本勝ち。２回戦韓国の JUNG Jinwoong 選手と対戦し、試合中盤までは互いに一歩も引かず積極的に攻めていたが、巴投げを掛けたところ上手く捌かれ横四方固めで一本負けを喫した。相手が準決勝へ進んだ為、敗者復活戦へとまわりフランスの ROY　Frederic 選手と対戦するも前に出ようとしたところを谷落としで合わされ一本負け。寝技や力には自信を持っているが、投げ技で一つの技に頼り過ぎている為に崩しや繋ぎの技が出ず、相手に読まれて終盤ポイントを取られてしまう展開が多く感じられた。今後の課題としては一つの技に頼りすぎるのではなく、足技や崩しなどを覚え、そこから寝技に移行するといった練習や研究を重ねていけば良いのではないかと感じた。

－ 81kg 南選手は、１回戦カナダの CHIARAMONNTE Marco 選手と対戦し、組み手争いから互いに技を掛け合い、積極的に前に出て内股に入ったとこをすくい投げで合わされ一本負けを喫す。相手が決勝に進んだ為、敗者復活戦へとまわりロシアの DUVENDEY Chechek 選手と対戦するも、試合中盤組み手争いから不用意に前に出ようとしたところをすくい投げで一本負け。今大会出場した選手の中で 59 歳と最年長であり、この年齢で出場した事は柔道をしている選手並びに観覧に来られた方々に少なからず勇気と希望を与えた。

－ 90kg 須川選手は、１回戦ブラジルの ALCANTARA Paulo 選手と対戦し、試合開始後すぐに払い巻き込みで豪快な一本勝ち。２回戦はトルコの BASTUG Murat 選手と対戦し、序盤から果敢に前に出て試合を優位に進めようとするも上手く捌かれ自分の組み手になれない。試合終盤、強引に払い腰を掛けたところ相手に潰され送り襟絞めで一本負けを喫す。相手が決勝に進んだ為、敗者復活戦へまわり台湾の LIN Mao Chang 選手と対戦し、払い腰に入ったところを返されて有効を二つ奪われ優勢負け。技にキレがあるので強引に技に入るのではなく、しっかりと引き手を持ち、足技から崩して連絡技を使う事と、スタミナを付ける練習を増やしていけば , もっと上位を狙えるのではないかと感じた。

－ 100kg 山田選手は、リーグ戦で総当りであった。一試合目フランスの CRESPO Sebastien 選手と対戦し、試合開始後小外掛けで有効を奪われたが、残り 28 秒相手が崩れて寝技に移行する瞬間を見逃さず送り襟絞めで逆転の一本勝ち。二試合目ロシアの LAVROV Dmitry 選手と対戦し、指導ポイントを二つ取り試合を優位に進め、自分の組み手になった瞬間得意の内股で一本勝ち。三試合目トルコの ALYUZ Selcuk 選手と対戦し、終始自分の組み手になり指導ポイントを二つ取った後、相手が下がったところを内股で一本勝ち。四試合目モンゴルの GURRAGCHAA Shijirbaa 選手と対戦し、試合開始後すぐに内股で一本勝ち。各大会でも優勝しており世界でもトップレベルの実力を持っている。周囲からメダルの期待もあって多大なプレッシャーがあったとは思うが、相手よりも積極的に前に出て圧力をかけ、自分の得意技を出せたのが勝因であった。組み手や崩しがしっかりと出来ており、最後まで技を掛けきり一本を取る柔道で全試合一本勝ちと素晴らしい試合内容で優勝した事はとても感動的であった。

③チーム（コーチ）体制と各コーチの役割

今回、選手とコーチの兼任が出来ない為、以下スタッフ３名で選手のサポートを行った。

監督：石橋

ＴＤ会議（代表者会議）に出席し、ルールなど情報を選手へ報告、選手に技術の指導、試合での指揮

コーチ：渡部

ＴＤ会議（代表者会議）に出席。スケジュール管理、調整、選手のサポート

事務：柴崎

選手や事務局との連絡、選手のサポート

キャプテンとして山田選手が軸となりチームを纏め、各選手が意見を交換し、試合に集中出来るような体制をとった。色々と皆が助け合い、協力していたので良いチーム雰囲気であった。

④競技スケジュール（旅行スケジュール）

試合３日前から練習会場は各国割与えられた時間帯の中で使用可能なので、５日は開会式の為、練習が出来ず試合会場の雰囲気を確かめた。６日・７日は体操や打ち込み、寝技、乱取りなど選手は精力的に汗を流していた。宿舎では体重調整の為トレーニングやサウナを利用し、怪我をしている選手は日本チーム専属のトレーナーや医師に治療してもらう等コンディションを整えた。

８日：試合初日、出場選手がいない為試合見学

９日：－ 66kg 東選手、－ 100kg 山田選手。

10日：－ 73kg 宮山選手、－ 81kg 南選手

－ 90kg 須川選手

試合前の選手は自分の調整が終わり次第、選手のサポートにまわる。試合最終日は皆でサポート。

⑤大会の競技運営などの報告

会場は、台北警察学校で行われた。ホテルからバスで向かい、一旦バスターミナルで乗り継ぎ会場に向かう為時間にロスがあり、試合当日は選手のコンディション等を考え、少しでも試合会場に早く到着するためにタクシーを使い時間短縮を図った。試合会場は三階にあり、練習会場が地下になっていた為、会場との往復が大変であった。昼食は会場に販売所が無い為、各自用意してきた物や、学校内の食堂を利用した。試合の運営自体は、軽量が終わり次第試合

のタイムスケジュールを頂いたので試合時間の把握ができ非常にやりやすかった。また、係の方が次の試合を随時知らせに来てくれるので慌てることもなく、次の試合の準備ができ安心してやれたとともに昼食タイムもあり、時間に余裕がある為選手もリラックスして出来た。練習会場には、マッサージ器やテーピング、アイシング用の氷、飲み水が用意され、会場は程よく空調がきいていた為にとても良い環境で選手は試合に望めたと思う。一つ困った事はセキュリティーが厳しく、試合が終わり次第一旦試合会場の外に出なければならず、すぐ次の選手のセコンドにつかなければならなかったので反対側まで走って戻るなど大変であった。

⑥競技規則の適用(問題点など)

ＴＤ会議でルール改正の説明があったが、国際手話の通訳を連れて来ていない国は、細かい部分を理解していないように思えた。ＴＤ会議の際に準決勝以降はコーチ席に座る時には正装着用と言われ、あまりにも急なことだった為にどの国も準備しておらず、国のネームの入ったジャージとなった。本来、ルール改正により準決勝以降は正装着用と決まっており、私を含め前もって新しいルール改正を調べてきている国はあまりなく、困惑していた。また各階級で参加人数が少ない為に無くなった階級があり、台北入りして知らされ困惑していた選手がいた。事前に連絡があれば体重調整をして出場出来ていたと言っている国もあり、いくつか問題点があったように思えた。技の説明では、文章やスライドの画像、プリント用紙の挿絵を見ながらの説明であった為少々分かりづらく、細かい部分は映像や人を使って説明して欲しいとの意見があった。

試合では審判によって見る角度などで曖昧な部分があり、それによっては納得出来ずに負けた選手もいた。

⑦大会参加までの準備状況

デフリンピックまでの期間に2008年度７月・11月、2009年度５月(インフルエンザ流行の為中止)７月に東京スポーツ文化体育館で強化合宿を行った。全国から集まっており、仕事などの関係上、土日での２日間の合宿となった。短い期間の中で、今までに出場してきた国際・国内大会等で見つけた自分の弱点や反省すべき点を考えて皆で積極的に研究や練習に取り組んでいた。合宿を行う事によって選手のコンディションを見ると同時に、一緒に同じ時間を共有する事で選手同士がコミュニケーションをとり親交を深めた。選手の中では予め台北に下見に行き、現地の状況や雰囲気等を確かめて来るなど意識の高い選手も見受けられた。

⑧反省・まとめなど

今大会は聴覚障害者のオリンピックとして４年に一度開催され、世界各国から集まる最大の国際大会ですが、今回初めて柔道が公式競技として認められ、選手達は心の底から待ちわびた大会だったのではないかと思います。開会式を始め、国を挙げての盛況ぶりでとても感動しました。ボランティアの方々には本当にお世話になりました。一生懸命手助けして頂き感謝しております。試合の時、団長をはじめ本部の方々や御家族と空手選手の皆さまが応援に来て下さり、選手達にとって大きな力になった事と思います。また審判委員の中に日本の先生が来ておられ、話しかけて頂き安心したのを覚えています。その際、日本の選手達へ試合内容や技のご指導を頂き有難かったです。今回柔道のチーム監督として初めて参加させて頂き感じたことは、今、世界の柔道は奇襲技を駆使しどんな状態からでも強引に投げに来るヨーロッパスタイルの柔道になってきていることです。世界選手権やプレ大会よりも個々の選手が更にレベルアップをしており、レスリングやモンゴル相撲の要素を取り入れた柔道が多く感じられ、その柔道スタイルに戸惑う日本選手もいました。国際大会で勝つ為には、海外での試合経験を積むことや積極的に出稽古を行い、不安に陥らないよう色々な選手たちと練習をしていかなければならないと感じました。また本大会で自分の力を出し切った選手、全力を出し切れず悔いが残る選手など様々だとは思いますが、デフリンピックに出場出来たことを誇りに思い、次につながるようがんばって欲しいと思います。私自身はまだまだ未熟で他のスタッフや選手達に助けてもらうなど、色々と迷惑をかけてしまった事や、手話自体上手く使えず､細かな所を伝えきれなかった事は反省すべきところです。ですが、とても一生のうちに何度も経験出来ない事をさせて頂き、この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。これからも皆様の活躍を願う次第です。今回参加した選手達の活躍がメディアを通して全国に伝わり、病気や怪我、虐め等、様々な悩みを抱えている人々に少しでも勇気や希望を持って頂けたら幸いです。デフリンピックをもっと全世界に広め、多くの人々に知ってもらう事により多方面の協会や連盟から手助けして頂ける様になれば、選手達が自己負担せずに思いっきり試合に臨めるようになるのではないかと考えます。これから更に選手たちのレベルアップや試合で勝てる選手作りを目指し、他の選手にも呼びかけるなどチーム全体が盛り上がるよう精一杯頑張って行こうと思います。

スタッフ　　渡部　裕介

団体内の担当とその内容

柔道男子５人の選手(－66Kg階級・東選手、－73Kg階級・宮山選手、－81kg階級・南選手、－90kg階級・須川選手、－100kg階級・山田選手)と石橋監督の連日のタイム連絡打合せ、戦術分析・記録ビデオ撮影、ＴＤ会議の担当を主に業務として携わりました。

まず最初に９月５日に柔道試合会場の台北警察学校へ下見に行きました。オリンピックの様な立派な会場だったので選手達は張り切っていました。それから練習会場や公開体重測定会場の場所を確認しました。午後から日本チームの練習割り当て時間だったのですが、開会式が夕方から始まるので午前で打ち切られてしまいました。うまく計画通りに行かない時もあることが分かりました。

夕方からアリーナで待機し、スタジアムで開会式が始まりました。22時までかかりました。無事に終わり､ホッとしました。

９月６日はようやく、練習が出来ました。私はビデオで記録撮りをしました。選手は念入りにウォーミングアップして稽古に汗を流したようです。

日本選手が出る試合は９月９日･10日なので今日から毎日、21時に翌日の打合せを行いました。

９月７日は朝早くバスに乗らなければならないので、朝食用にホテルからサンドイッチ、果物を用意してくれました。

８：30～９：30まで稽古模様をまたビデオで撮りました。選手は試合に向けて最終調整を行いました。

ホテルに戻り、昼食を済ませてから石橋監督と一緒に15時からＴＤ会議(会場は同じく台北警察学校)に出ました。初めて

世界の柔道監督・スタッフや役員・国際審判員と会いました。立派な体格の方ばかりで圧倒されました。国際手話を少し、予習したのですが、なかなか読み取れなくて苦労しました。そこで粟野団長が心配して来てくれて、国際手話の出来るボランティアが日本手話通訳をしてくれました。国際柔道競技のルール変更、注意点の説明がありました。その点は石橋監督が把握してくれました。

大変、助かりました。次回のためにもっと国際手話講習会へ行かなければと痛切に感じました。こうして無事に17時にＴＤ会議が終わり、解散しました。21時からミーティングを行い、翌日は試合の様子、雰囲気に慣れるために全員、観戦に行くことに決めました。

９月８日から柔道試合が始まりました。

その日は男子－６０kg階級、女子－52kg階級の試合でした。軽量階級なので筋肉骨格、腹筋の凄い人が多く、技に切れがありました。午後から選手はそれぞれの競技に応援に行きました。自分は空手競技会場へ日本女子・栗山選手の応援に行きました。見事、金メダルを取りました。昨日も日本男子・小島選手が金メダルを取りました。空手アベック金メダルが取れたことは日本ろう者武道連合スタッフとして嬉しかったです。

明日から日本選手の柔道試合が始まるので21時にミーティングを行った。朝早くバスに乗らなければならなく、疲れてしまうのでタクシーに乗ることに決めました。朝食もサンドイッチ、果物だけでは足りないのでヨーグルトを追加してもらいました。選手たちは早めに、就寝しました。私は明日の試合対戦のチェック、ビデオ撮影セッテイングなどに追われていました。

９月９日、いよいよ、日本選手が初めて、試合に出ます。

まず、－66kg階級から始まり、東選手が１回戦にブラジルの選手と対戦しました。私はビデオで撮影しながら、応援していました。結局は負けてしまいました。東選手は練習不足、体重調整・体力作り不足に感じられました。

気を取り直し、次は－100kg階級・山田選手がリーグ総当り戦(参加者が５人のため)に出ました。ビデオを撮りながら応援しました。１人目はフランスの選手と対戦、初戦のためか、山田選手は固かったがようやく、逆転、１本勝ちました。そこから調子がうなぎのぼり、残り３人、ロシア、トルコ、モンゴルの選手たちを相手に難なくオール１本勝ちして優勝しました。空手に続き、柔道も金メダルが取れて嬉しかったです。

最後に表彰式が行われ、日の丸旗が一番高いところに揚がり、感激しました。

そこで山田選手のドービング検査が行われました。検査が終わるまで待機していました。１時間くらいかかり、ようやく、帰ることが出来ました。明日も残りの日本選手の試合があるので21時にミーティングを短めに終わらせて、明日も同じく、タクシーに乗ることに決めました。

９月10日、最後の試合が始まりました。

まずは－73kg階級・宮山選手が１回戦にアゼルバイジャンの選手と対戦しました。負けるかと思っていた所、残り３秒で巴投げで逆転、１本勝ちました。

次に－81kg階級・南選手が１回戦にカナダの選手と対戦しました。残念ながら負けてしまいました。59歳の年齢の衰えは隠せない。さぞ、悔しかったに違いない。敗者復活戦で銅メダルは取れると期待していました。

次に、－90kg階級・須川選手は１回戦にブラジルの選手と対戦、難なく、１本勝ちました。

２回戦の宮山選手は韓国の選手と対戦、大接戦だったが残念ながら負けてしまいました。もう１人の須川選手はトルコの選手と対戦、これも大接戦だったが負けてしまいました。

南選手の敗者復活戦はロシアの選手と対戦したが負けてしまい、無念だった。最後に３位決定戦。宮山選手の対戦はフランスの選手、須川選手の対戦は台湾の選手。２人とも健闘したが負けて、銅メダルは取ることが出来ませんでした。結局、日本柔道は金メダル１個のみ受賞でした。目標は金１、銀１、銅１だったが、デフリンピックは甘くなかった。世界を見ているとレベルが高く、日本選手も２，３倍稽古をしないといけないと感じました。

反省・まとめなど

もう少し、選手のコンディションを整えてあげたかった。特に朝食・昼食の差が出たと思います。他の国のように栄養のある弁当を出前すればよかったかもしれない。

私は初めてのデフリンピック参加で良い経験させていただきました。感謝しています。次回もスタッフに選ばれたら、経験を生かし、食事面に気を付けたいと思っています。

それと国際手話を身につけていきたいと思います。

男子 66kg 以下級代表　東　智宏

①成績に対する自己評価

デフリンピック大会として初出場でした。－66kg級１回戦、ブラジル代表選手と試合して一本負けしてしまいました。負けて、納得行かなくて悔しかったです。敗因原因は組み手とコンディションとモチベーションが足りなかったと思います。

②反省・まとめ

台湾に着いてからずっと腰が痛く、試合までずっと不安だった。試合直前まで、ホテルの15階にあるマッサージや針や電気などをしてもらい、だんだん良くなりました。試合までは、練習をしても腰が痛いせいで、いつも通りいかなくて、結果的に負けました。コンディションを良くすれば、勝つことが出来たと思います。また４年後、リベンジするために、もっともっと練習してコンディションを整えて、モチベーションも上げて悲願の金メダルを取りたいと強く思います。

その他

デフリンピック新種目に柔道と空手が追加になり、大変嬉しく思っています。柔道１個、空手２個金メダルが取れて日本ろう者武道連合として誇りに思います。今回、デフリンピックに参加したことで将来、子供達の希望になることと思います。今まで日本ろう者武道連合の監督、選手、マネージャーたちが頑張ってきたおかげだと思います。

男子 73kg 以下級代表　宮山　賢治

①成績に対する自己評価と反省・まとめ

デフリンピック大会に出場は初めてです。４年で一回大きなイベントで、いろんな国が集まってるのでびっくりしました。柔道競技の参加国は28カ国です。１回戦は、アゼルバイジャン選手と対戦し、勝ちました。２回戦は韓国選手と対戦し、引き分けになりそうでしたが、最後に、巴投げをしたが、相手に上手く交わすれたため、負けました。でも、敗者復活戦へ行け

ることになり、その相手はフランス選手と対戦し、残念ながら、負けました。結果は、５位でした。世界のレベルが上がっています。でも良い戦いでした。デフリンピック大会は最高の舞台です。良い経験が出来ました。応援、ありがとうございます。４年後はギリシャです。子供たちも夢を持って目指してほしいです。頑張ってください。

男子 81kg 以下級代表　南　栄一

①成績に対する自己評価と反省･まとめ

台北でのデフリンピックの開会式はとても素晴らしく、すごかったです。私は８日、練習中に仙骨（おしりの骨の所）と腰を痛めてしまいました。注射をしながら１回戦はカナダ選手と対戦しましたが、負けました。敗者復活戦で、ロシア選手に挑みましたが負けてしまい、残念な思いでした。結果は７位になりました。でも、念願が叶い、デフリンピックに参加する事が出来、嬉しく思います。表敬訪問などで、デフリンピックを一般の方々に知って頂いた事も良かったと思います。皆様に感謝します。

男子 90kg 以下級代表　須川　幸一

①成績に対する自己評価と反省・まとめ

2009 年９月２日、夏季デフリンピックに行かせてもらいました。自分は柔道選手として日本代表に選ばれました。

大変、光栄に思いました。日本代表として恥のないようにベストを尽くしたいと日々、練習を行いましたが、肩甲骨骨折という大怪我を負いました。完治するまで安静して、７月頃に練習を再開しましたが、痛みが取れないので MRI 検査で診てもらいました。その結果、肩甲骨骨折した時に、筋肉も分裂していたと判明しました。手術しなければならない状態でしたが、夏季デフリンピックに間近のため、手術を諦めて、インナーマッスルの方法でリハビリを頑張りました。

自分は、左利きですが、左の方は力が入らないので、得意技の内股と、払い腰を封印して、右側から攻める技を練習しました。

地元の真成会道場の、松戸先生からアドバイスもしっかり受け、道場の仲間も、外人の攻撃パターンをシミュレーションして相手をしてくれました。得意の内股と払い腰なしで勝てるかが、自分の最大の課題でした。－ 90 キロクラスでは自分が一番小柄です。背負い投げと一本背負いが有利と思い、特訓しました。そして、いよいよ試合がやってきました。自分の初戦はブラジルです。今まで世界ろう者武道大会や国際大会などに参加してきましたが、ブラジルの選手は見たことがありませんでした。ブラジル選手は手足が異常に長いので、どう攻めるかと悩んだが、「今の持ち技を全て出し切ろう」と挑みました。しかし、外人はパワーも握力も半端ではなかったので素直に組み、すばやく技を仕掛けました。封印していた払い腰で決まりました。

２回戦はトルコとぶつかりました。レスリングから柔道に転属しただけあって、パワーが凄く、トルコではエースの選手です。去年、国際大会と対戦したことがある選手です。去年は背負い投げで勝ちました。今回は簡単に勝たしてくれないだろうと気を締めて、対戦しました。しかし、トルコ選手がいきなり自分の道着を掴んで投げた為避けようとして、左肩を強打してしまい、左腕の感覚を失ってしまった。

相手に警告が与えられたが、左腕が上がらなくなり、首を絞められ、降参で負けました。生涯で初めて、締め落とされて悔しかったです。悔しい気持ちを切り替えて３位決定戦に向かいました。

３位決定戦は台湾です。左肩の感覚を早く戻さないといけないと思って応急手当てをしましたが、効果はありませんでした。台湾は自分と同じ位の身長で、やりにくい選手でした。なんとか残された力を搾り出して攻めましたが、途中、技を出してなかった時に、指導されました。それで有効負けになりました。

今回は、初めて手ぶらで帰りました。悔しい気持ちでいっぱいです。自分が怪我を負ってなければと後悔しています。怪我を乗り越えることが出来なかった自分は、まだまだ甘かったと思っています。人生も同じく、怪我と病気も乗り越えなければならないと学びました。

男子 100kg 以下級代表　山田　光穂

①成績に対する自己評価と反省・まとめ

柔道は日本から生まれたスポーツであり、今大会から正式種目として採用されることになったので、そのためにも絶対に勝つという意気込みがあったのですが、その裏にはとてつもないプレッシャーがありました。柔道は階級別であり、規定内の体重をオーバーしないように自己管理しなければならないため、それをキープするのは大変でした。私の場合は 100kg 級であり、日本を出る前に、体重を 4kg 落としての 98kg でしたので、そのままキープする予定が、台北で、さらに 4kg 痩せてしまったのです。ご飯を食べても体重は増えない一方、94kg のままで試合に挑みました。階級の中では、私が一番軽かったのです。試合は５人によるリーグ戦でした。第一戦はフランス選手で、対戦経験のある相手で、お互いの技を知っていました。この初戦は絶対に落とせないと思いつつ緊張したせいか足が棒立ちになっていました。１・２分過ぎに得意技である内股をかけたとき、小外掛けをかけられて有効を取られてしまったのです。「このままではいけない」と必死に攻めるも、なかなか技が出ず時間が過ぎるばかりでした。そして、内股をかけたとき失敗に終わったのですが、私が上になったので、すかさず送り襟絞めに入って逆転勝ちすることができました。続いて第二戦はロシア選手で、これも対戦経験があり、研究されていたのですが、自分の柔道をすれば大丈夫と積極的に攻めて内股で一本勝ち。第三戦のトルコ選手、第四戦のモンゴル選手との対戦も積極的に攻めて内股で一本勝ちし、オール一本勝ちで優勝することができました。大会を振り返ってみると、今大会はレベルも高く、気も抜けず、楽な試合はひとつもありませんでした。初戦は有効を取られるなど苦しい展開でした。後の三試合も一本勝ちしたとはいえ、技量の拮抗するなかでの勝利でした。これからは、皆さんにデフリンピックの素晴らしさを伝えていくとともに、夢と希望を与えていきたいと思います。

空手競技チーム

監督　　宮下　昭宣

(1) 選手の選考について

全日本ろうあ連盟指針では、デフリンピック出場権を得るためには2008年5月にフランス共和国トゥールーズ市にて開催された世界大会ベスト8以上であること、又はデフリンピック金メダル相当にする国内大会で優秀な成績を残すことであることを条件としています。

選手選考については世界大会に組手の部に出場した男女合わせて3選手が第3位以上という結果を残すことが出来た。しかし、出場権を得た男子2選手が諸事情により辞退した。もう一人の女子選手は女子68kg以上級に出場する予定でしたが、2009年4月にICSDが実施した空手道競技の出場選手数を記入した予備登録の結果、女子68kg以上級の登録選手が4人以下だったため、規則により中止となった。そのために選手選考から外しました。

学生現役選手などの理由により、世界大会に参加できなかった小島崇寛選手、栗本沙弥選手の両者とも、金メダルに相当する国内大会で下記の通り、よい成績を残すことが出来た。

小島崇寛選手･･･2008年3月まで国際武道大学空手道部に所属した。大学4年の時は主将を勤めた。全日本障害者空手道競技大会(聴覚障害の部)で4年連続優勝した。2008年12月に行われた全日本空手道選手権大会に出場した。

栗本沙弥選手･･･現在、大学2年生で日本文理大学空手道部に所属している。全日本障害者空手道競技大会(聴覚障害の部)で4年連続優勝した。高校時代に3年連続インターハイに出場経験を持つ。

デフリンピックで金メダルを狙える選手を日本代表として選考した。

(2) 競技成績一覧

空手道競技は、男子4階級、女子1階級が実施された。日本は、男子1階級と女子1階級に出場した。試合結果は下記の通りである。

男　子			
階級	氏名	出　身	成　績
60 － 67kg	小島崇寛	愛　知	優　勝
67 － 75kg	出場なし		
75 － 84kg	出場なし		
＋ 84kg	出場なし		
女　子			
階級	氏名	出　身	成　績
50 － 68kg	栗本沙弥	大　分	優　勝

(3) 成績と評価

試合結果

空手道競技は、9月7日(月)から8日(火)までの2日間、南港スポーツセンターで13ヶ国31人(男子26人､女子5人)が参加して行われた。日本は、男子組手60～67kg級、女子組手50～68kg級の2階級に出場した。試合結果は次の通りである。

男子組手60～67kg級小島崇寛(愛知)　優勝　出場者8人

1回戦：　小島崇寛　2-0

RUS　PAVLYUCHENKO　Evgeniy Vitalyevich

準決勝戦：小島崇寛　9-8　ITA　DI　GUIDO　Daniele

決勝戦：　小島崇寛　4-2　TPE　TAIWen Chi 台湾

女子組手50～68kg級栗本沙弥(大分)優勝　出場者5人

1回戦：　栗本沙弥　3-1 NZL TITCOMBE Kerry Anni

決勝戦：　栗本沙弥　3-1 TPE LIN Wen FangN

(4) チーム(コーチ)体制と各コーチの役割

選手2名(男;1、女;1)に対し、スタッフ3名(男;2、女;1)であった。

監督は、チームに関する全ての責任者。会場への送迎バス時刻の確認、組手の相手を務め、TD会議への出席、本部への報告などを行なった。

他のスタッフは、選手のお世話、組手の相手を務め、競技会場内での写真撮影・ビデオ撮影などを行なった。

(5) 競技スケジュール

9月2日　成田空港集合、出発。台北到着
9月3日　結団式
9月4日(金)　13:00～15:00　公式練習
9月5日(土)　11:00～13:00　公式練習
　　12:00　ＴＤ会議

【試合日程】

・9月7日(月)　男子：60～67kg級、67～75kg級
・9月8日(火)　男子：75～84kg級、84kg超級
　　女子：50～68kg級
・9月11日(金)　帰国。

(6) 空手道競技運営などの報告

今大会の競技運営は、下記の通り円滑に行われたと感じている。

・公式練習日程情報は公式サイトに載ってあって、計画を立てやすかった。
・宿泊所から空手道競技会場までの輸送方法はバスだったが、乗り継ぎターミナルを経由して競技会場へ行くため、非常に時間がかかった。対策としてタクシーで輸送することにした。
・練習場のスペースは4面コートがあった。
・練習場のサービスが良かった。
・試合会場には大画面スクリーンがあった。
　試合と大画面スクリーンを交互に見ながら試合状況がわかりやすかった。
・日本語ボランティアが親切に対応してくれて非常によかった。

(7) 競技規則の適用

空手道競技ルールは世界空手道連盟(WKF)に準じて行い、トーナメント方式を行なわれた。

デフリンピックのために「競技終了10秒前」の合図をする時、主審が「10」を左人差し指と右拳で示すなどを行った。

(8) 大会参加までの準備状況

当連合が設立された2005年より毎年2回の強化合宿を行なっている。

強化合宿については、アンチドーピング講習会、国際手話講座を行なった。ドーピングの関係で居所調査、実施検査等につ

いて、講師より詳しく説明してもらった。競技後のドーピング検査を受けた時、その講習会での説明が役立った。

2008年5月にフランス共和国トゥールーズ市で行なった第13回世界ろう者武道選手権大会の動画がホームページで公開されているので、国際大会未経験の選手が、選手の実力レベルを把握することが出来た。

デフリンピック出場予想国の情報収集や分析を行ない、各クラスの出場予想国をまとめて選手への報告を行なった。

(9) 反省・まとめなど

当連合としては、何度も出場している世界大会と違って、初めてのデフリンピック出場ということでスタッフも選手も不安でしたが、他の競技団体のデフリンピック経験を参考にしたり、団長や副団長のサポートを頂きながら選手を競技に集中させるようにした。

競技では、選手2人が自分の持てる力を発揮し、金メダルを獲ることができて良かったと思います。

今回はデフリンピックに出場した日本人が2人しかいません。日本における聴覚障害者の空手道人口が極めて少ない状況ということである。空手道の発祥地は日本であるにもかかわらずである。

次回のアテネデフリンピックに向けて、日本人全階級出場できるように選手数を増やすことが課題である。また、全日本空手道連盟などの各関係機関に協力してもらって、デフリピックでメダルを狙える選手の発掘をテーマに色々な方法を考えて行きたいと思います。

小島　崇寛(愛知県)

●競技種目●空手道－60ｋｇ～－67ｋｇ(組手)
●結　　果●優　勝

今回、初出場のデフリンピック。2009台北デフリンピックから「空手道」が新競技種目として、加わったことをとても嬉しく思いました。そのお陰で、小学6年の時から空手道を続けてきた私は、運良くデフリンピックの日本代表選手に選ばれる機会を得ました。

この場を借りまして、お世話になりました全日本ろうあ連盟を始め、ご指導頂いた先生方や支えてくださったスタッフの方々、選手の方々、また、応援してくださった皆様、本当にありがとうございました。デフリンピックでは、とてもいい経験と思い出が出来ました。他の競技の日本代表選手との交流もいい思い出の一つです。

今年、空手道競技歴13年目。これまでに、高校や大学などで、国内の健常者の人達とたくさん試合して常に上位を目指してきました。そのプライドが私にはありました。また、空手道は、日本から発祥した武道でもあり、どうしても負けたくないと言う思いもありました。発祥の地・日本で空手道をやっている誇りもあり、「金メダル」しか考えていませんでした。「もし負けたら、恥ずかしくて日本に帰れなくなる」という思いで、自分にプレッシャーをかけていました。

結果として、無事に金メダルを獲ることが出来て、とてもホッとしています。正直に言うと、試合はとてもやりにくかったです。海外の選手の特徴である体格や戦略スタイルが違うことはもちろんですが、1番の大きな要因は、それぞれの選手たちが自分の国の誇りを持って戦っている事で、「勝ちたい」という気持ちが国内の試合以上に強く伝わってきて、「粘り強さ」を感じました。「国の名誉をかけて戦う。これがデフリンピック」と強く感じました。その思いの強さを感じ、私も負けたくない気持ちを強く持ち、正々堂々と挑みました。特にイタリア戦の時は、お互いやられたらやり返すというシーソーゲームに追われましたが、今までの試合経験を活かして、うまく乗り越えることが出来ました。最後の決勝戦では、今回のデフリンピックの開催国である台湾の選手でしたが、イタリア戦での緊張がほぐれ、楽に勝つことが出来ました。

出場した選手は、国を代表して戦っているだけに全員が、強かったと私は思います。

最後に、私は今後も健常者の大会でも勝つことを目標にして、空手道は出来る限り続けていきたいと思っています。また、デフリンピックに出場した経験を活かして、将来、何かに結びつけることが出来たらいいなと考えています。これからも引き続き、ご指導をよろしくお願いいたします。

栗本　弥沙(大分県)

●競技種目●空手道50ｋｇ～68ｋｇ(組手)
●結　　果●優　勝

空手競技が初めて投入された第21回夏季デフリンピック。日本代表空手チームの皆もデフリンピックは初めてだったが、私自身は、世界大会自体が初めてだった。世界大会には何度か出場している小島選手とは違い、私は世界の強さすら知らない初心者だった。そんな私が出ても勝てるのだろうかと不安があった。

台北に出発してから、私の試合日まで約一週間あった。会場でチームの皆と、攻略の相談をしながら練習。練習は2日間、1日に2時間程度という短い練習量だったが、短い時間で集中できた。疲れを残さないように、他の時間をリラックスして過ごした結果、当日は万全の状態で迎えることが出来たと思う。

試合当日、世界大会が初めての私にとっては、初戦が大きかった。不安は消えないままだったが、空手チームに留まらず他の競技チームも応援に駆けつけて、背後で応援してくれていたので、自分のいつも通りの組手で、3－0で勝つことが出来た。この初戦に勝てた事で、次の試合への自信になり、緊張感が和らいだ。

決勝戦では、相手の攻める気持ちに圧倒されたが、最後まで落ち着いて、最後まで自分の組手でぶつかっていき、3－1で優勝を決めることが出来た。だが、もう少し攻めていっても良かったかもしれないとも思った。

私が金メダルという結果を残せたのは、たくさんの方の支えのおかげでした。日本で応援してくれていた恩師の方々、仲間、友達。日本選手団。台北のボランティア。空手チームの皆。そして母。たくさんの方の応援や支えがあって、優勝することが出来ました。感謝してもしきれません。本当にありがとうございました！

水泳競技チーム

監督　　豊田　律

１．選手の選考について

2007 年の第２回世界ろう者水泳選手権大会の６位記録を基準記録として 2008 年８月の第 13 回大阪ろう者水泳選手権大会、９月の第３回日本ろう者水泳選手権大会にて選考会を行ない、2008 年の日本水泳連盟の公認大会も含めて基準記録を突破した選手の中から厳格に選考した結果、男子６名、女子４名の計１０名を候補選手として派遣委員会へ推薦し、全員、正式に派遣選手として決定しました。

スタッフにおいても 2007 年の第２回世界ろう者水泳選手権大会の監督とコーチの２名が引き続き決定し、マネージャーも日本ろう者水泳協会の強化本部の推薦で決定しました。

２．成績一覧

・【金メダル１個】　茨隆太郎：200m 背泳（日本ろう者新記録）
・【銅メダル２個】　今村可奈：200m バタフライ（日本ろう者新記録）、800m 自由形（日本ろう者新記録）
・【入賞 14 個】　今村可奈：200m 自由形　５位、400m 自由形　６位、200m 背泳　７位（日本ろう者新記録）、高瀬理恵:50m 平泳　４位（日本ろう者新記録）、100m 平泳　８位、200m 平泳　７位（日本ろう者新記録）、茨隆太郎：100m 背泳　４位（日本ろう者新記録）、山本駿：1500m 自由形　４位、藤川彩夏：200m バタフライ　７位、男子 400m フリーリレー〔山本・水谷・茨・藤井〕　７位（日本ろう者新記録）、800m フリーリレー〔山本・茨・藤井・水谷〕　６位（日本ろう者新記録）、女子 400m フリーリレー〔高岸・藤川・高瀬・今村〕　６位（日本ろう者新記録）、女子 800m フリーリレー〔今村・藤川・高瀬・高岸〕５位（日本ろう者新記録）、400m メドレーリレー〔高岸・高瀬・藤川・今村〕　６位（日本ろう者新記録）

３．成績と評価

今大会でのメダリストは２名でした。200m 背泳で自己ベストの日本ろう者新記録で金メダルを獲得した茨選手は弱冠 15 歳の高校１年生。去年の夏からメキメキと頭角を現していき、中学生ながら日本ろう者新記録を連発し、2007 年世界大会メダリストの山本選手（高校２年生）と並ぶホープとして注目されました。特に大会前の公認大会で 2007 年世界大会の３位に相当する自己ベストを出し、メダルが期待できる位置にあがりましたが、初めての国際大会で様々なプレッシャーの中で獲得した価値のある金メダルでした。得意の 50m 背泳はスタートが失敗して決勝進出はならなかったものの、B 決勝で自己ベストの日本ろう者新記録を樹立して B 決勝１位を果たし、苦手である 100m 背泳もタッチの差で惜しくも４位入賞でしたが、これも自己ベストの日本ろう者新記録を樹立しました。これが大きな自信となり、次回のアテネ大会に繋げたいと思っております。

200m バタフライと 800m 自由形で自己ベストの日本ろう者新記録で銅メダルを獲得した今村選手は大会中に起こった肩の痛みを抑えてのメダル獲得という、彼女の不屈の闘志に、脱帽しました。前回メルボルン大会で高校２年生ながら 400m 自由形、800 m自由形で金メダル、200m 自由形で銀メダルを獲得し、次回大会（今大会）の活躍を大きく期待しておりました。しかし、高校卒業後、練習環境が変わって思う通りには練習が出来ず、タイムも伸び悩んでいましたが、2007 年世界大会では銀メダル２個、銅メダル３個を獲得するなど、復活の兆しが見られました。しかし、この大会にて今村選手の自己ベストを上回る選手が続々現れて、今大会ではかなり厳しくなっているだろうと予想していました。その中での銀メダル２個、入賞３個は大変高く評価できると思っております。

惜しくもメダルに届かなかったその他の選手もほとんどが入賞を果たしてくれました。また全員自己ベスト記録を更新する泳ぎを見せてくれました。

中でも高瀬選手の 50m 平泳と女子 400m メドレーリレーのタイムは前回メルボルン大会の決勝レースにあてはめるとメダルが獲得できるタイムでした。好記録の背景には、話題の高速水着を着用した効果も表れておりました。それだけでなく、泳ぎも勿論、スタート、ターン、そしてタッチの技術向上も見られました。特筆すべきことを言いますと、男子 100m 背泳で茨選手がゴール直前までには２位にキープし、そのまま銀メダルと思われていたのですが、タッチだけで２選手に抜かされて４位に敗れてしまったことです。

全員決勝進出という目標を果たせなかったものの、前述のように記録だけを見ると日本競泳チームのレベルが下がったということではなく、他の参加諸国のレベル向上が日本のレベル向上を大きく上回っていたことと判断し、2007 世界大会を今大会のレベルとして甘くみていたことが原因と考えられます。

４．チーム（コーチ）体制と各コーチの役割

豊田監督…チーム全体の掌握、指揮監督、TD 担当
大平コーチ…選手指導管理、競技規則担当
村山マネージャー…監督、コーチ補助、選手ケアサポート、競技スケジュール担当

５．競技スケジュール（渡航スケジュール）

９月２日…台北到着
９月３日…結団式。ＩＰカード作成後、新竹市へ移動
９月４日…ＴＤ会議（豊田、大平）15 時半～ 17 時半練習（メインプール）
９月５日…9 時半～ 11 時半練習（サブプール）16 時 45 分ホテル出発、17 時半～ 22 時 45 分開会式
９月６日…9 時半～ 11 時半練習（メインプール）
９月７日…試合　10 時～ 12 時予選、17 時～ 19 時決勝
９月８日…試合　10 時～ 12 時予選、17 時～ 19 時決勝
９月９日…試合　10 時～ 12 時予選、17 時～ 19 時決勝
９月10日…ＴＤ会議（豊田、村山）10 時～ 12 時練習（メインプール）
９月11日…試合　10 時～ 12 時予選、17 時～ 19 時決勝
９月12日…試合　10 時～ 12 時予選、17 時～ 19 時決勝
９月13日…試合　10 時～ 12 時予選、17 時～ 19 時決勝
９月14日…本部（台北市）へ移動、自由時間
９月15日…豊田監督帰国、解団式、閉会式
９月16日…帰国

６．競技運営などの報告

ＦＩＮＡ（国際水泳連盟）の二名が参加し、技術委員、審判との連携により、全ての競技において基本規則通りの運営が行われていたと思われます。

しかし、スターターのミス、折り返し審判の反則見逃しが見られ、抗議しようと思ったことが何度かありました。

今思えば思い切って抗議すればよかったと、監督として後悔しております。そうすれば審判たちが意識して正当な審判ができるだろうと思ったからです。

ボランティアのろう者への配慮や飲み物の配布などのサービスなど、大会を盛り上げようとする意気込みが十分伝わっておきました。

おかげ様で競技会場でのトラブルがほとんどなくスムーズに過ごすことができました。

７．競技規則の適用（問題点）

ＦＩＮＡ（国際水泳連盟）の規則に従っており問題はなかったが、競技が始まってスタート方法、召集呼びかけ方法においてろう者に対して配慮がなく、不便を感じた。試合のない９月10日にＴＤ会議が開かれ、その問題点について審判長との話し合いを行ないました。その場で解決でき、翌日からの試合には問題はありませんでした。

８．大会参加までの準備状況

今大会に向けての強化合宿において、今年も監督、コーチ、そして選手たちの都合とプールの確保が合わず、なかなか調整できなかったが、日本ガイジアリーナ管理室、静岡県富士水泳場、サンフロッグ春日井、菊水スイミングスクールのご厚情、ご協力により下記の通り実施することができました。

第１回合宿　４月 12 ～ 13 日　於：日本ガイシアリーナ
　チームワーク作りと基礎体力の向上
第２回合宿　５月２～５日　於：サンフロッグ春日井市民プール
　持久力強化
　特別合宿　６月６～７日　於：富士水泳場
　持久力、スピード持久力強化
第３回合宿　６月 27 ～ 28 日　於：日本ガイシアリーナ
　持久力、スピード持久力強化
　特別合宿　７月 19 ～ 20 日　於：菊水ＳＳ
　スピード持久力強化
第４回合宿　７月 25 ～ 26 日　於：日本ガイシアリーナ
　レーススピード強化、リレー引継ぎ技術向上
第５回合宿　８月 15 ～ 16 日　於：日本ガイシアリーナ
　レーススピード強化、調整、リレー引継ぎ技術向上
　特別合宿　８月 30 日　於：菊水 SS
　調整、スタート、リレー引継ぎ技術向上

９．反省・まとめなど

今大会での水泳競技は 40 ヶ国、選手 168 名参加し、世界新記録が延べ 52 個、デフリンピック新記録も延べ 80 個も樹立するなど、ハイレベルな大会となりました。その中で日本チームは男子６名、女子４名の計 10 名参加で金メダル１個、銅メダル２個、入賞 14 個とよく健闘してくれました。

ハイレベルな大会の背景には「高速水着」による効果が大きいと考えられます。水泳は浮力と推進力で競うもので「高速水着」着用で浮力をよりアップし、あとは推進力をつけるだけで世界新記録を樹立した選手の中に無名選手が数人いたほどです。もちろん、勝つために日本チーム選手全員に「高速水着」を着用させました。予想通り、全員自己ベストを出すことができ、日本新記録も延べ 22 個樹立することができました。しかし、世界のレベルには追いつけませんでした。原因は考えられるのが二つあります。一つ目は技術の差。泳ぎのレベルは世界と互角でありながらスタートとターン、そしてタッチで差をつけられたのです。二つ目は日本のレベル向上が世界のレベル向上のスピードについて行けなかったことです。その二つを今後の課題にして要因を的確につかみ、対処していきたいと思っております。

また、アジア諸国の台角も著しく、特に中国と韓国が急速に伸びてきました。中国は金メダル４個、銀メダル２個、銅メダル３個とトップレベルに立ち、男女とも世界新記録を樹立して優勝する他、男子のリレー、メドレーリレーでメダルを獲得しました。中国は政府がろう者スポーツに力を入れており、健聴者のナショナルチームと同じ扱いで援助しているそうです。韓国も金メダル１個、銀メダル１個、銅メダル１個を獲得しました。しかも男子選手一人で獲得しました。彼は日本では数少ないプロをやっているそうです。こうした環境での結果なので中国と韓国と同じ環境を日本に取り入れるのがなかなか難しいのが現状です。

高速水着も来年３月より規制され、より浮力・推進力を高める技術が求められます。また、前述したスタート、ターン、そしてタッチの弱点を早急に克服しなければなりません。トータル的には世界を先駆けてより高くレベルを上げなければ世界には勝てません。

今後は、日本水泳連盟と日本スイミングクラブ協会との連携を持つことが第一と考えております。新人の発掘、技術指導、合宿施設のあっせんなど色々と協力が必要になります。

最後になりましたが、強化本部の方針として精鋭主義として選手を絞っていきたいと思います。

しかし、少数でなくみんなを精鋭にしなければなりません。そうしないと世界とは戦えません。それを次大会を目指すデフスイマーたちが認識して成長してくれることを、私は願ってやみません。

コーチ　　大平　英一

２年前の台北での世界選手権に続き、今回デフリンピックにコーチとして参加させていただきました。世界選手権とは全く違っており、とにかく驚くことがいっぱいありました。まず、開会式は、北京オリンピックに勝るとも劣らないような規模と演出に、まず度肝を抜かれました。このような大会を開催するには、台湾政府や台北市の協力を得なければ出来ないのは当然ですが、そのような政府などを動かした世界、台湾のデフの皆さんのパワーは凄いというのが第一印象でした。

また、大会や開閉会式を通じてデフの皆さんの交流のすごさには驚かされました。各国の手話はそれぞれ違うらしいのですが、微妙に似ているところもあって結構話が出来るというところにまず驚かされました。健常者であれば、まずロシアやスペインの人たちと話をすることは不可能に近いのですが、皆さんは結構通じ合っているのです。デフのパワーは素晴らしい、まさに Power in me という言葉が相応しいと思いました。

その中で、水泳日本チームは世界のレベルがかなり上昇している中で、金１銅２と何とか日頃の成果を発揮出来たと胸を撫ぜ下ろしているというのが事実です。ただ、私の認識もかなり甘かったという反省があるのですが、今回銅メダルを獲得した今村選手は私が日常も指導している選手ですが、前回の金メダルのレベルからある程度水準をあげれば何とかなると考えていましたが、世界の伸びは想像以上のものがありました。このようなレベルに対応するには、健常者の中でも、かなりのレベルで戦える選手でないと世界のレベルでは全く歯が立たないのが現実だと思います。世界の強国は、年間を通してのナショナル

チームの活動をしたり、勝者には賞金を与えるというような事もやっていると聞きます。もちろん日本ではそのような事は無理かと思いますが、これからの選手発掘の方法や強化策を早急に考えないと次はメダルも無理ということになりかねないと思います。

また、トレーナーや医師の帯同も、今回は本部のある台北から離れているということもあり、ありませんでしたが、今後は普段の合宿での指導も含めてトレーナーの派遣、帯同も考えていただきたいと思います。

本当に貴重な経験をさせていただき、ろう者水泳協会はじめ関係者の皆様に感謝を致しています。これからの私の人生にとっても大変プラスになったと思います。本当に有難うございました。また、何かお役に立つことがありましたら、何なりとお申し付けて欲しいと思います。

マネージャー　　村山　樹里

私は、初めて４年に一回行われるデフリンピックへ水泳競技のマネージャーとして行きました。最初は、マネージャーを引き受けるかどうか迷いました。今まで女性スタッフがいなかったので、女性選手たちが男性スタッフに言えないことが絶対にあるので我慢してしまう影響も出ると思い、女性スタッフが必要だと感じて今回引き受けました。

また、合宿で選手たちの体調や性格などを見てきたのでそれも合わせて全体的の選手たちを頑張ってケアしていこうと決心しました。

今回世界大会に初めて参加される選手が３人、参加経験のある選手は７人いました。

初めて参加した選手のうち１人が開会式の前日に不安が高まり、過呼吸症候群を起こしてしまい、救急車で運ばれました。日本選手団本部と水泳チームのホテルは２時間ほど離れているため、本部とやりとりする暇もないこともあっていろいろと大変でした。なんとか乗り越えて無事に治まりました。開会式は欠席とし、ホテルで待機してもらいました。

また１人が緊張や不安を感じられて落ち込んで泣いてしまったこともありました。その選手を一生懸命ケアして行きました。開会式ではその不安を忘れたかのように明るく笑顔で日本選手団の水泳代表選手として歩いていけたことに安堵安心しました。最初から最後まで選手たちの表情、体調、チームワーク様子を見逃してはいけないと感じました。

これを生かして世界大会へ遠征するための課題として取り組みたいと思います。

選手　　水谷　哲也

デフリンピックに参加するのは２回目になりますが、台北でのデフリンピックはアジアとして初めての開催であり、開会式や閉会式で主催者の挨拶、花火、チアガールなどのパフォーマンスやらまるでオリンピックのようで本当に素晴らしい大会でした。

水泳競技では旗とランプ信号による合図でスタートすることになっており、初めは不慣れで緊張感がありましたが、途中でスタートのルール変更があり黄色ランプの点灯で「よーい」を表し、緑色のランプでスタートという方法が分かりやすくて良かったと思います。

これからも日本でも様々な水泳大会で同じ方法が採用されればと考えています。

今回の水泳競技大会は思っていた以上にレベルが高く、個人種目で 50 m自由形以外は自己ベストにも関わらず予選落ちに終わり残念でした。50 m自由形のみ運良くB決勝進出したもののスタート技術不足もあって自己ベストを出せなかったのが心残りでした。

他に水泳選手の出場枠が増えたことからデフリンピックで日本チームとして初めてリレーに参加できたのですが、これが更にチームの団結力を強めるきっかけにもなったと考えています。

５歳から水泳を始め、17 歳のときに世界ろう者体育大会があることを知ってから現在に至るまで 18 年間水泳を続けてきましたが、仕事やこれからの人生を考え今回のデフリンピックで選手引退を決意しました。

ただ、50 m自由形で念願のメダルを獲得できなかったことから４年後のアテネデフリンピックにてメダルを獲得できる見込みがあれば再チャレンジしたいという気持ちも残っています。

この先、四泳法の他に日本泳法も合わせて泳法技術向上に努め、これまで経験してきたことを後輩に引き継げるよう頑張っていきたいと考えています。

選手　　北嶋　昇

僕は 32 歳で人生初めてのデフリンピック大会の水泳競技に出場しました。

２年前、台湾で第２回世界ろう者水泳選手権大会に出場経験しましたが、現在のデフリンピックの水泳競技はレベルが遥かに高くてびっくりした。

僕は 50 m・100 m・200 m平泳ぎと 50 m自由形に出場して、50 m自由形以外、平泳ぎ全種目は予選通過し、決勝Bに進出しました。決勝Aに進出出来ないのが悔しかったですが、各国代表選手が出場した種目のエントリータイムを見て、当初、決勝Bに残る可能性は厳しいと思っていました。

自己ベスト更新を出して、決勝Bに残るとは思いませんでした。決勝Bも自己ベスト更新し順位を上げたので嬉しかったです。あの時、本当に１番辛かったのはオフの日です。オフの朝、起きてみたら風邪っぽいかなと思って体温計を計ってみたら熱は 37.2℃ありました。まさか新型？インフル？に感染したと思い不安な気持ちがありました。コーチ・選手の方々に心配、迷惑をかけてしまいました。オフの翌日に 100 m平泳ぎがありました。翌日の朝になっても熱は下がりません。僕の体に異変がある事は分かっていても、表は平気な表情をしていました。

本当に頭が痛く、体が重くて最悪でした。でも病院に行かず、薬も飲まなかった。その悪条件をクリアする対処方法を探しました。心の問題を見つけて対処しました。決勝Bに残ることが出来たのは「勝つぞ」という気持ちです。この気持ちがなかったら、確実に予選落ちでした。

水泳競技６日目、僕の熱は下がりました。でも体力は回復せず、いつもとは違う感じでした。７日目 50 m自由形に出場しました。しかし予選落ち。デフリンピックで 26 秒を切る目標が達成出来なくて悔しかったです。個人種目の予選、決勝を含めて７レース泳ぎました。

今後の課題は、４年後のアテネ大会まで自己ベスト更新を続

けて今回大会の決勝Aに十分残れるレベルに達成したい。来年から水着規制になる為、高速水着に頼らず、自分の力と技術と心を強く鍛えたいです。

これから４年間の国内大会・国際大会で実力をつけて、安定した平均タイムを保つ事が目標です。

中国、韓国、強豪国の選手は国の税金をもらって生活しています。日本もスポーツ庁の設置や報償金制度が必要だと思います。

選手　　藤井　陽

2009年台北デフリンピック水泳競技では個人競技とリレー種目を含め計９種目に出場しました。結果は200ｍ個人メドレーＢ決勝進出と400ｍフリーリレー７位入賞と800ｍフリーリレー６位入賞でした。決勝に進めなかった残りの６種目のうち５種目では自己ベストを大幅に更新することができました。２年前の世界ろう者水泳大会では個人種目とリレー種目を含め６種目出場し、自己ベストは１種目だけと比べれば大きな成長になったと思っています。

しかし、今大会では自己ベストを更新しても決勝には残れず、世界の壁の高さを改めて痛感しました。一番、悔やんでいる事は今までの練習での気持ちの持ち方が甘かった事です。ずっと「決勝進出」を目標に練習していることが分かりました。つまり、「メダル獲得」ではなく入賞を目標にしていたのです。その気持ちだけで練習量も大きく変わったはずです。外国の選手はすべてを水泳に託して練習しており、メダルに対する熱意が非常に強く感じられました。今回の一番の敗因は気持ちの強さに負けた事だと思っています。

今回の失敗を課題とし、４年後のアテネデフリンピックまで「金メダル」を目標に練習に励んで行きたいと思います。

選手　　木下　徹

今回の2009台北デフリンピックで、私は初出場し、初の世界大会で、世界から色んなことを学んだことがいっぱいありました。生活面、競技面、コミュニケーション面で、気づいたり、反省したりするところが多かったですが、今回の大会で私が一番反省したのは、デフリンピックの候補になったときに立てた目標タイム、50m平泳ぎ31秒台、100m平泳ぎ１分10秒台、200m平泳ぎ２分35秒台をすべて、突破できなかったことでした。今回、高速水着のこともあり、世界レベルが、前のデフリンピックや世界水泳よりも、かなり上がっていて、自分は、ベストは出せたが、目標タイムを突破したわけでもなく、決勝レベルに追いつくことも出来ず、かなり甘かったなと思いました。あと、400メドレーリレーで、決勝５位だったが、引き継ぎ違反で、日本は失格になってしまい、皆に迷惑をかけてしまいました。本当に、悔やまれてなりませんでした。また、このように、今まで、三日間連続、一日休み、三日間連続で試合をやった経験がなかったので､次のデフリンピックに出る時は、長く試合に出られる体力をつけることと、メダルを取るという気持ちで臨みたいと思いました。

今後の課題としては、まず、大平コーチ、豊田監督から、言われたことも含め、泳ぎのフォームを、さらに、大きく改善しようと思っています。目標タイムも、50m平泳ぎ31秒台、100m平泳ぎ１分10秒台､200m平泳ぎ２分35秒台ではなく、今回のデフリンピックでメダルが取れる範囲のタイム以上のタイムに設定します。筋肉も、まだまだ足りないので、筋トレも増やしていきたいです。練習、試合前のストレッチもしっかりやります。

４年後のアテネデフリンピックは、メダルが取れることを、目標に、これからも精進していきたいと思います。

選手　　山本　駿

２年前の世界大会400mフリースタイルで強運に恵まれ３位に入りメダルをとることができました。この大会で世界と戦う厳しさ楽しさを体験しました。

その後、今度は実力でメダルをとれるように練習をしてきました。

私は、このデフリンピックで「全種目自己ベストを出して決勝に進むこと」「チャンスがあれば狙うこと」を目標にしました。

大会が始まり最初の個人種目400mフリースタイルで決勝に残れないという状態が起こりました。自分では、精一杯力を出して泳いだつもりだったのでタイムを見て愕然としました。

この400mフリースタイルでこの大会のレベルの高さを思い知らされました。

他の種目も自己ベストを出せたものの自分の目標としていた自己ベストよりもタイムが悪く午前中の予選では全く力が出せずＢ決勝に残るのがやっとでした。

唯一1500mフリースタイルだけ決勝に進み４位に入賞出来ましたが、上位３選手とは力の差があり「メダルを狙う泳ぎ」というよりも「４位を守る」という泳ぎしかできず大変悔しいです。

リレーについては水谷キャプテンのもとチーム団結して一生懸命泳ぎました。

リレー３種目決勝に進め世界強豪を相手に泳げて良かったです。

今後はさらに世界の水泳のレベルが上がって行くと思うので今まで以上に積極的に練習に取り組み、次回の世界大会、アジア大会､デフリンピックではメダルに絡めるように頑張ります。

最後になりましたが豊田監督、大平監督、村山マネージャー大変お世話になり、ありがとうございました。また、応援していただいた皆さんにも感謝したいと思います。

選手　　茨　隆太郎

デフリンピック、今までにない大きな大会に参加した。

もちろん開会式や閉会式はすごく盛り上がった。四年に一度のデフリンピックだったので、参加できて良かった。

僕が出た８つの種目の結果、メインの200m背泳は金。100m背泳は４位入賞。50m背泳は９位。他の種目はベスト８。最後、リレーではメダル獲得出来ず、入賞。

特に200m背泳では予選で２位通過でしたが、予選では皆、流していたので、少しプレッシャーがかかりましたが、決勝のレースの前、自分の目標タイム２分15秒を切ることだけ考えていました。目標を達成し(予想以上の13秒)、さらに金メダルを取ることができた。日本の競泳と違って、世界はパワー型なので、50m、100m背泳は負けてしまったが、自分のベストを突破することができたので、良かったと思う。

これからはパワーアップして、 飛び込みやタッチの技術を

上げて、４年後のアテネデフリンピックで世界新と金メダルと二連覇を狙います。

選手　　高瀬　理恵

今回、私は初めてデフリンピックに出場させていただきましたが、全て決勝にコマをすすめ、入賞を果たすことができました。

２年前、同じ台北の地で開催された世界選手権では全て予選落ちの惨敗。

この悔しさがあってこそ、このような結果に繋がったと思っています。

振り返ってみると、世界のレベルは想像以上に上がっていて、メルボルン大会のメダル圏内の記録も今大会は入賞がやっとの急激なレベルアップでした。

その背景に、福祉国家、オリンピックに限らずナショナルチームへのバックアップ体制が進んでいる東欧の抜きん出た強さを直に感じました。

まだ日本は、世間の知名度も低く支援がまだまだ薄い現状で、これからは東欧のような支援が必要になってくる時代になってくるかと思います。

私は三十路を過ぎての初出場でしたが、社会人の傍ら、限られた時間の中でトレーニングを積み重ね、このような舞台で戦うことができたのは、多くの方々の支えと協力があったからです。

私の場合、半分はセルフで練習してきたので、妥協するのも自由という辛い環境が、かえって精神面で鍛えられたかなと思います。

自分１人の力ではここまで来られていなかったです。

感謝してもしきれませんが、それまで支えてくださった方々に感謝申し上げます。

そして、キャプテンを務めさせていただいたことで、色んな視点から考えさせられ、大いに学ばせてもらいました。

最後になりましたが、このような素晴らしい舞台に立たせていただき、ありがとうございました！

選手　　高岸　里佳

私は、この大会に出るのが２度目になります。

二度目に出たいという気持ちが強かったので、決まったことは、本当に嬉しかった。

ここまで来るまでの目標がありました。

①４年前（１回目）より、上位を狙うこと。

②上位を狙って、さらにメダルを取ること。

③初リレーもメダルをとること。

という目標でした。その為に、きつい練習やトレーニングをしてきた。本当に苦しかった。

台湾に着いてから、いつもと雰囲気が違うと感じた。ここが勝負場だ！という感じでプレッシャーがありました。

まず、レース前から３日間、大会で使うプールで練習した。

調子はかなり良かった。この調子で大会にもつながればいいと思いました。

７日から大会が始まりました。１日目は 400m 自由形に出ました。私の番の前に、I 選手がトップバッターとして泳いでいた。その組や他の組のレベルを見て、思った以上にレベルが高くなっていた。かなりびっくりしました。こんなレベルでやっていける？？という不安があった。

でも、私は、日本代表として来たのだから、なんとかしないとという気持ちがあったので、最後まで頑張った。結果は、決勝に残れなかったのですが、自己ベストが出たので、満足しました。

２日目は、メインのレースでした。メインは、200m 背泳ぎです。４年前は、７位入賞だったので、目標通り、上位を狙うつもりでいましたが、昨日のせいで、かなり緊張してしまい、思ったとおり、完璧に泳げなかった。タイムは悪くなかったが、決勝に残れなかった。悔しくて泣いてしまいました。

さらに落ち込んでしまった。でも、チームの皆が励ましてくれて、なんとか立ち直った。

４× 200m フリーリレーも出ました。初めて、日本チームがリレーに出ることは本当に光栄です。

200m 背泳ぎのタイムがちょっと悪かったので、その分頑張った。チームのパワーで、５位でした。力を合わせて楽しく泳げたと思います。

３日目も、メインのレースでした。50m 背泳ぎです。４年前は、６位入賞。200m 背泳ぎのリベンジを果たそうと自己ベスト更新したものの、決勝に残ることが出来ませんでした。悔しかった。

４日目は、大切なレースです。それは、メドレーリレーです。メダル狙うことを目標にしていました。自己ベストを３～５秒更新しないとメダルは取れないことは分かっていた。

結果は６位入賞。自己ベストを２秒更新出来たのですが、メダルを獲得することが出来なかった。

５日目は、50m フリーです。苦手な種目でしたが、自己ベストが出すことが出来たので、嬉しかった。

６日目（最終日）は、メインのレースです。100m 背泳ぎです。今まで、個人種目がすべて決勝に残ることが出来なかったから、100m 背泳ぎには、絶対に残りたいという気持ちが強かった。結果は、自己ベスト更新できず、決勝も駄目になった。今までの悔しさと違って、泣いてしまい、すごく落ち込んでしまいました。

まだ、ラストのレース（フリーリレー）があるのに、迷惑をかけてしまった。

それなのに、監督やコーチやマネージャーやチームメイトが励ましてくれたので、プラス思考に切り替えて頑張った。結果は、６位でした。

今まで思ったことは、世界新や大会新がすごく出ていたこと。水着のこともあるのですが、それだけなく、水泳の技術、レベルが高くなってきたと思います。

印象に残った国があります。ヨーロッパも強いのですが、アジア勢が強くなってきた。日本も頑張らないといけないと感じました。

＜課題＞

①自己ベストを更新したが、ほとんど、レース前に、マイナス思考になってしまい、さらに、力が入ってしまって、思い通りの泳ぎが出来なかったこと。

②スタートが遅い。

③バサロはよいが、遅い。

④ターンが遅い。

⑤キックが弱い。

他にもあります。いっぱいあったので、こういう結果になったと思います。本当に反省しています。

日本に帰ってから、その課題を克服して、１からやり直して、

レベルアップしたいと思います。今も筋トレを頑張っていますが、もうちょっと増やしたいと思います。

４年後のアテネデフリンピックまで長いですが、その間に、いろんな大会(アジア大会や世界大会)で好成績を残せるように頑張りたい。

今回のデフリンピックは、すごくレベルが高かったですが、皆さんのおかげで、最後まで戦うことが出来て、本当にいい経験になったし、いい思い出になりました。

I選手＆I選手がメダルを取ったり､他の選手も入賞とったり､すばらしいレースで本当に感動しました。いい刺激を与えてくれました。

開会式や閉会式は一生忘れないくらいすばらしい式でした。感動がいっぱいで､いろんな人と交流が出来て楽しかったです。

台湾のみなさん、ありがとうございました。思い出を大切にします。

最高のデフリンピックでした。

本当にありがとうございました。

選手　　今村　可奈

今回のデフリンピックで２回目の出場でした。４年前は金メダルを取ったが今回は思ったよりもレベルが高くなっていてメダル届くかというくらいレベルが上がっていました。

試合の前半の３日間だけ初めて親が私の試合を見に来てくれました。しかしメダルを取るとこを見せてあげられず悔しくて何回も母のところに行って一緒に泣いてしまったけど後半の３日間試合を楽しんでどんな色でもいいからメダルを日本に持って帰る約束した結果銅メダルを２個取ることが出来ました。後半試合の雰囲気に慣れてタイムもベストを出すことも出来ました。肩も痛めて泳げないくらい苦しかったがいろんな人達の支えや応援などしてくれたおかげで何とか泳ぎ切ることが出来ました。

今回は金メダルという期待に応えられなくてすみません。でも私は今回の大会で４年ぶりのベストを更新出来たので満足です。

この大会で引退の予定だったけどレベルが高くて悔しい思いもいっぱいして銅メダルもらった時私はまだやれるという事を実感しました。だから後４年頑張ってみたい。

次のデフリンピックで絶対世界新を出して金メダルを手に入れたいのでまた応援よろしくお願いします。

「私はやって見せます!」

選手　　藤川　彩夏

私の小６時からの夢で「世界大会に出たい」という事を叶えて日本代表に選ばれた事が一番嬉しかった。選ばれてから、４月から毎月１～２回ぐらい強化合宿に参加して厳しい練習を受けてデフリンピックの本番に入ると健聴者の大会より大きな大会と分かってすごく緊張してしまいました。試合に入ってから100m バタフライ・200m，400m 混合メドレーは、予選落ちで悔しかったが、200m バタフライでは、やっと決勝に進出する事が出来て嬉しかった。200m バタフライ・400m 混合メドレーは、自己ベストが出て良かったし、800m，400m フリースタイルリレー・400m メドレーリレーでは、日本新記録を樹立する事が出来て嬉しいです。

試合前に目標とした、「力を尽くして自己ベストを出したい。出来ればメダルを取りたい。」という事で、残念ながらメダルは取れなかったが、自己ベストを出せて、目標を達成出来て良かったです。いい経験でした。

これからの課題は、ＫＩＣＫは良かったけど、腕の力は足りないのでもっと練習して力を付けたい。泳いでみて足りない所をスタイルごと、又世界のレベルはとても高かったです。

４年後のアテネデフリンピックでいい記録を出せるように今から頑張りたいと思います。

卓球競技チーム

監督　　佐藤　真二(東京都)(協和発酵キリン)

(1) 選手選考について

２年前に選考基準発表 (男女４名代表)

・第 42 回全国ろうあ者体育大会卓球競技の優勝者
(20 年９月・大阪)
・第 31 回全国ろうあ者卓球選手権大会の優勝者
(20 年 12 月・千葉)
・台北デフリンピックに本代表選考会の優勝者
(21 年２月・神奈川)
・残り１名については候補者(６名)を集めて２度(１･２月実施)の強化合宿を行い監督が１名を決定する。
※最終的には２月中旬に代表メンバーを決定

(2) 成績一覧

男子	団　　体	４位
	シングルス	ベスト16(梅村)
	ダブルス	ベスト８(梅村･青山)
女子	団　　体	準優勝
	シングルス	準優勝(上田)　３位(佐藤)
		ベスト８(小浜)
	ダブルス	３位(小浜・鈴木組)
	混合ダブルス	ベスト８(青山・佐藤)

(3) 成績と評価

男子）はっきり言って完敗です、相当の準備をして大会に臨みましたが、世界のレベルどこの国も高くて、中国、台湾・韓国・ウクライナ・ドイツ等、日本の力は７～８位が現実であると同時に若手の伸び悩み。

女子）男子に比べ欧州が強くないので、アジアで勝てば上位に行くのが現状です、力的にも上田･佐藤を中心として中国とは互角と判断できる。

(4) チーム体制と各コーチの役割

今回は女子の上田を中心に金メダルを１つでも良いから獲ることが目標でした。その為に普段から上田・佐藤を指導している東京富士大学の西村監督(アテネオリンピック女子監督)をヘッドコーチとして招聘して上田・佐藤を中心に女子の指導をしてもらった。また、コーチには上田を高校時代指導された谷上さんを招聘し、ヘッドコーチのサポート及び男子選手の指導に従事してもらった。

スタッフ(トレーナー)として、現役選手の松下君を同行させ、選手の技術面だけでなくメンタル面においても選手のケアーに務めてもらった。冨田会長・今西副会長がスタッフとして加入し、国内外の情報収集やマスコミへのアプローチや資金調達の積極的な働きかけをしてもらった。そのお陰で選手・コーチ陣が安心して合宿から大会終了まで集中して競技に専念できた。手話通訳の２名の最高の立ち振る舞い(目配り・気配り・心配り等)は陰の MVP です。

(5)競技スケジュール

９月２日　出発・結団式
３日　練習
４日　練習
５日　開会式
６日　男女団体戦　予選リーグ
７日　男女団体戦　予選リーグ
８日　男子団体決勝トーナメント
　　女子団体　予選リーグ
９日　男子団体　準決勝、３位決定戦、決勝
　　女子団体　準決勝、３位決定戦、決勝
10 日　休み
11 日　混合ダブルス(決勝まで)、男女ダブルス
12 日　男女ダブルス(決勝まで)、
　　男女シングル　予選リーグ
13 日　男女シングル　予選リーグ
14 日　男女シングル　決勝トーナメント
　　(準決勝、３位決定戦、決勝)
15 日　解団式・閉会式
16 日　帰国

(6) 大会の競技運営などの報告

□ＴＤミーティングについて
・世界ランキングの採用方法…16 年前からのポイントを参考にシードにすることの意味は？
・トーナメントの作成について…ＩＴＴＦのルールを把握しておくことが大事。男子と女子のシングルスのトーナメント作成の違いが見られた。
・聴力レベルの不平等さはないのか。そう思われる選手がいたが…。
・時間がかかる場合が多いので軽食の準備が必要だと思えた。
□ラケットコントロール、ドーピングについて
・新しいラバーに張り替えた場合は必ずプレテストを行うようにしてもらいたい。
・ペンの選手はコルクが張ってあるので異常な数値が出た？検査器の基準値を０(ゼロ)にリセットしておくことが望まれる。

(7) 競技規則の適用(問題点など)

・アドバイスが時間以内(１分)に終わらない場合に呼んでも聞こえないので時間が往々にして過ぎるので対応が急務。
□審判との関わり方
・何か問題が起きた時は粘り強く交渉する。(例；混合Ｄ青山・佐藤選手の準々決勝直前)
・イエロー、レッドカードについて(ジェスチャーや日本語での応援はＮＧ)。審判に事前の確認をすると効果的かも。

(8) 大会参加までの準備状況

・対選手
①代表が２月に決まり月 /1 回(２泊３日)の合宿を行う
②社会人の代表選手の会社に出向き会社に協力要請を行う
③健聴者の試合に参加させてもらう
　(東京卓球選手権大会：全日本選手権権大会に次ぐ大会)
④用具の提供をメーカーに依頼
　(個人負担軽減させる)
⑤トップ選手との合同練習
　(協和発酵キリンや東京富士大学：中にはオリンピック出場や学生チャンピオン)
⑥過酷な練習内容と練習時間の確保を強く要求
　(健常者と同じレベル・内容)

・対マスコミ(メディア)
①４年前より上田を追いかけている関西テレビの活用
　(９月２日の 18 時 40 分から 12 分間関西方面で放映)
②５月 31 日都内でデフ祭り開催しデフリンピック周知活動
　(TBS 朝ズバ、朝日新聞、卓球王国、ニッタクニュース、目で聴くテレビの取材)
③フジテレビのディレクターに直接お願いしてテレビ放映(フジテレビ・スーパーニュースに放映)
④朝日新聞へのアプローチ(夕刊に 1/4 ページ記事)
⑤ＮＨＫへのアプローチ(テレビニュースにて放映)
⑥スポーツ報知新聞へのアプローチ
　(朝刊に 1/8 ページ記事が載る)
⑦壮行会の開催
　(７月 18 日中野サンプラザでろうあ者協会、卓球協会、卓球連盟、各卓球メーカー、新聞記者、テレビ関係、卓球雑誌社約 100 名参加)
⑦大会期間中のメディアの同行
　(関西テレビ：９月 24 日夕方 13 分放映、卓球王国：10 月 20 日発の卓球王国誌の７ページ記事が載る)

・対資金
①募金を募る
　(目標 200 万円を掲げ、出発前までに目標達成)
②日本卓球協会からの補助金
　(日本卓球協会の理事会へ補助金申請を行い 150 万円の補助を確保)
③各カテゴリーからの援助
　(日本卓球リーグー、日本学生卓球連盟、関東学生卓球連盟、都道府県卓球連盟からの支援金をもらう)
④日本パラリンピック委員会への助成金の申請
　(正規の補助金申請を最大限に活用する)

・対その他
①練習場の確保
　(東京富士大学や協和発酵キリンや明治大学の練習場を無料で開放してもらう)
②ボランティアの応援
　(スタッフ以外の方々の献身的な応援：手話通訳、練習相手、雑用)
③豊富な練習相手
　(東京富士大学・協和発酵キリン・明治大学の戦型の違う選手との練習確保)

④応援ツアーの実施

（H.I.S さんのご好意により格安でのツアーの実現。約 40 人の方々が台北に参集した）

(9) 反省・まとめ等

監督の要請があり会社及び関係者と協議をして最終的に昨年の４月に就任して１年６ヶ月大役をさせて頂きました。

私が就任して目標に掲げたのは、３つあります。

１つ目は選手の意識改革、２つ目は、ろうあ者協会の意識革命、３つ目は、マスコミ（メディア）対策でした。１つ目の選手の意識改革は、合宿を重ねるごとに強くなりたいという意識が芽生えて自然と苦しい練習にも耐えられるようになりました、若いとかベテランとの区別はなくアスリートとして常に指導しました。月 /1 回のペースの合宿ですので、終了してから次の合宿までに怠けていれば自ずと練習にはついてこられませんので意外と見ていないところの方が練習量の確保等で工夫をしたと感じています。

また、人間として共存の世界で生きていかなければなりません。障害があるからといって同情はありますが、評価はわかりません。如何なる時も健常と障害とかでなく共存の世界に飛び込んでいける人間力を身につけさせて欲しかったのです。ですから合宿の開始時にはいつも約 45 分間の講義をしてから練習をスタートさせました、内容は今まで自分自身が経験したことをいろいろな角度から説明をして共存の世界で生きるパワーを身につけさせてあげられたと感じています。

２つ目の日本ろうあ者卓球協会の意識革命です。これは非常に難しい問題でしたが、ここを革命しないといつまで経っても競技においては成功（金メダル）することはないと感じました。デフリンピックはここで終わりますが必ず４年後にはまたデフリンピックが開催され、競技が行われるのです、そのためにもしっかりとした健常の組織団体、障害の組織団体の枠を超えた考え方のできる組織を確立することが大切と考え、今までは OK だったものも共存の世界では通用しないものはバッサバッサと切り捨てました。その結果他の競技団体から少しは評価される団体になってきたと思います。今後は、縦横の連携を密にして他の競技団体からモデルになるような組織になることを目指したいと思います。

３つ目は、マスコミの活用です。今の日本は、新聞・テレビでのインパクトは計り知れないものがあることは十分理解をしていると思いますが、いざ何かあると新聞・テレビのツールを忘れてしまい目先の充実感を求めてしまう傾向があります。逆に新聞・テレビで少しでも取り上げてもらえればすぐにでもデフリンピックのことを国民に知ってもらえるのがマスコミです。そこで西村ヘッドコーチと相談をしてあらゆる人脈を使って、ダメでもともとで良いから発信しようと決めて行動したところ意外と反響があり、興味を持ってもらい、新聞・テレビの方々が放映・記載をして頂きました。

感じたことは、ダメでも良いから積極的にアピールすれば必ず理解をしてくれると言う事です。初めから無理だろうではなく動き出すことが大切だと言うことを再認識しました。

１年６ヶ月の監督期間、大会での 16 日間と多くの方々に支えられ、応援してもらい感謝の一言につきます。しかし、

現実は、９月 16 日からスタートをしています。日本ろうあ者卓球協会の更なる発展を祈念しています。本当にありがとうございました。

以　上

ヘッドコーチ　　西村　卓二（千葉県）

（東京富士大学卓球部監督・元オリンピック女子監督）

はじめに

第 21 回夏季デフリンピックに、卓球競技のヘッドコーチとして参加しました。参加選手の上田萌、佐藤理穂選手は東京富士大学卓球部在籍のこともあって、今回の台北デフリンピックの日本卓球チームの色々な取り組みに協力し、佐藤監督とともに一緒に取り組ませていただきました。

競技をふりかえってみて

女子チームの競技をふりかえってみますと、アジアレベルが高く、韓国も強いですがやはり強敵は中国でした。善戦したものの、女子団体、女子ダブルス、女子個人、混合ダブルスはほとんど中国に負けて目標の金メダルの獲得はできませんでした。

私は大学の都合（関東大学リーグ戦）により、女子団体戦のみベンチに入り、アドバイスをして大会期間の途中に帰国させていただきました。

９本とっても、あと１本がなかなかとれないという課題がありました。しかし、全然歯がたたないわけではないように思えました。今後の強化委員会や大学などの取り組みいかんでは、次回のアテネデフリンピックでは中国をやぶって金メダルをとることも夢ではないと実感しました。

反省から今後の強化策

金メダルはアテネでのデフリンピックまでお預けとなりました。アテネではぜひ金メダルを取りたいものです。その為にも私なりに今後の強化策を考えてみました。

1　強化合宿の継続開催（合宿・遠征など）

・合宿会場は東京富士大学アリーナーを拠点とする

・合宿実施の選手・スタッフの諸経費をどうするか、考える必要があります。

（自己負担かもしくは日本ろうあ者卓球協会半額負担か）

2　強化委員会の充実（強化本部新設か）

・男女各４名程度コーチを設ける（東京近郊在住が良い）

・男女監督１名か２名を配置する

3　強化指定選手の選考（8 名程度）

・国際競争力の可能性（技術・練習環境・体力など）のある選手

・台北デフリンピックでの試合実績参考

・今後の国際大会派遣の選考

4　メディア（テレビ・新聞・卓球専門誌）との懇親会を年２回位開催したい。

・さらにデフリンピックの意義をアピールする

・日本ろうあ者卓球協会内に広報担当を設置して、メディアに情報提供をする

5　募金内容を広報誌に掲載（引き続き募金支援を公表する）

・募金者、支援者に継続協力のお願い（今回のお礼報告実施）

・収入、支出の明細を公表する

チーフマネージャー　　冨田　茂(千葉県)

(1) 団体内の担当とその内容

チーフマネージャーとしてデフリンピックに行く前から国内合宿などの色々な準備に関わりました。

合宿の会場、宿泊場確保、会計対処、コーチなど協力者との連絡、メディアとの連絡や対応、来訪者・見学者などの接待・対応、チーム内の情報伝達と保障、卓球メーカーとの渉外(寄贈)・対応、監督・ヘッドコーチおよびスタッフの協議、台北への荷物調達と配送、記録関連機器の調達(ビデオカメラ、パソコン、プリンター)などまさに大変でしたが、日本チームスタッフのご協力のもと、こなしてきました。

また大会前の壮行会は中野サンプラザで開催し、100 名以上も集まりました。日本ろうあ者卓球協会役員会などからのご協力を頂いて盛大な壮行会になり、モチベーションを高め、デフリンピックに挑みました。

何よりも派遣資金調達のため、日本ろうあ者卓球協会が加盟している日本卓球協会へのお願い(150 万円の補助金受給が実現)、募金活動に監督・ヘッドコーチなどと協議のうえ、取り掛かってきましたが、卓球王国や全国の卓球仲間たちからの心温まるフォローなどを頂く中、出発前には目標の 200 万円募金を越えて、日本チームは負担なく心残りもなく派遣できましたことはまさに嬉しい限りでした。

大会期間中は、本部とのかかわり、情報交換と伝達、卓球チーム内の色々な状況および健康状況の把握、毎日の監督・ヘッドコーチおよびスタッフとのミーティング､毎日の会計対応(立替えの対応も含む)、ビデオ記録、記録機器などの備品の保管・管理、日本からの応援団、来訪者との対応・接待、備品の現地調達、日本への情報伝達、御礼の葉書郵送、帰国の時に日本の協力者へのお土産購入、スタッフ･選手の体の不調の対応など、毎日色々な状況に対応してきました。

(2) 反省・まとめなど

日本のレベルは伸びたと思っていました。しかし世界、特にアジアのレベルがそれ以上に伸びていたという現実がありました。金メダルが取れなかったことを心から素直に受け止めています。

しかし、強敵の中国と最後の最後までもつれる試合もあり、五分五分の善戦をしてきたことは、アテネデフリンピックへの明るい材料であることは間違いないと思います。今後の取り組みいかんで、金メダルが取れるのでは、と思えたのは私だけでしょうか。

今後の課題としては、スタッフ(監督、ヘッドコーチなど)を早く決め、日本ろうあ者卓球協会内の強化委員会の見直しとともに強化本部体制を入れて、さらにスタッフの増員、継続性のある強化合宿の実施、海外派遣などによる選手育成と、若手選手の開発と育成にきちんとしたビジョンのもと取り組まなければと痛感しました。

また資金面の対応からもスポンサーとか募金活動の継続化に取り組む必要性があります。またいつかは日本でデフリンピック開催が実現できる為にも、国民への声を大きくすることが求められており、メディアとのパイプを強くし、活用していくことが大切だと思います。

現地では毎日のあわただしい様々な場面での対応があり、もう少し大会前にスタッフ内での打合せができたらよいのでは、と思えました。

また、毎日の色々な状況の中でスタッフ内に情報を分かち合えられるよう、もう少し工夫をしたらよかったのでは、と思いました。

最後にデフリンピック参加にあたり、勤務先から思いがけない応援、そして長期休暇を公休扱いにして頂けたこともあり、デフリンピックというものは、人だけでなく会社をも変えられる大きな力を持ち、素晴らしいものだという事を知りました。

この貴重な体験を頂いて感謝すると共に今後とも日本ろうあ者卓球界ひいてはろう者スポーツの発展に活かせたら、と新たな希望がわいてきました。ありがとうございました。

コーチ　　谷上　宏樹(京都府)

(1) 団体内の担当とその内容

今回、私はコーチという立場でデフリンピックに参加させて頂きました。

私がコーチの役割として心掛けたことは､常に “監督と選手のパイプ役” となり、卓球チーム全体としての雰囲気や調子、また個々の選手の “心･技･体･知” におけるコンディションを良い状態に保つことでした。

その中でも特に心掛けたことは個々の選手と小まめにコミュニケーションをとるということでした。何気ない会話や行動の中で選手が発する言葉の内容や表情・仕草などから調子の良し悪しや、自信やプレッシャーの度合い、健康状態等を出来るだけ理解しようとしました。

また他のスタッフと共に、他国のデフリンピックに対する取り組みや、強豪選手の情報収集･分析も重要な役割の１つでした。

特に他国におけるデフリンピックへの国家支援や理解、取り組み等については、これから４年後、８年後のデフリンピックに向けた日本の取り組みを考える上で大変参考になる部分が多々あり、また考えさせられるものとなりました。

その他に、現地での応援グッズ作成(日の丸の小旗 100 本、卓球日本チームのスローガンが入ったスティックバルーン 100 セット)も担当しましたが、とても評判がよく、また応援も一致団結したまとまりのあるものとなりました。今後もこのような取り組みを継続していければ良いと思います。

(2) 反省・まとめなど

今回のデフリンピックに向けて、卓球競技としては１年前のプレ大会から始まり、今年２月の最終選考で出場選手(男子４名、女子４名)が決定してから、計８回の合同合宿を行い、“卓球日本の復活” を合言葉にして、監督・スタッフ・協会、そして選手が一致団結して取り組んできました。

結果としては前回のメルボルン大会以上のメダルを獲得することが出来ました(銀２、銅２)。しかし最大の目標であった金メダルを獲得することが出来なかった事については真摯に受け止め、今後の課題として取り組んでいかなければなりません。

私は初めてデフリンピックに参加しました。その中で最も印象に残ったことは、世界の各国が日本と同じか、それ以上にデフリンピックに向けた取り組み(国家の支援や理解、選手の強化や育成、社会における認知度、等々)をしているということでした。

今後､日本において､また卓球チームにおいても､もう一度 “世界一” を目指す上で､他国の取り組みを参考にし､時には連携を図りながら、４年後、８年後を目指していく必要があると思います。

コーチの立場としては、今回の大会を通じ本当に多くの事を

監督やヘッドコーチ、他のスタッフ、そして選手から学ぶことが出来ました。その中でもチーム作りの上で、コーチにしか出来ない役割に対してこだわりを持ち、徹底して取り組むことの大切さを学びました。

今後は学んだ事を１つ１つ整理したうえで、自らの課題として取り組み、成長していきたいと思っています。

最後になりましたが、今回デフリンピックに出場し、日本チームの一員として選手と共に戦えたことは、今後の私の人生にとって大きな影響を与えてくれたと思います。

日本チーム、また卓球チームをご支援・ご声援してくださった方々に心から感謝申し上げます。本当に有難うございました。

マネージャー　　今西　伸行（大阪府）

(1) 団体内の担当とその内容

大会まではいろいろな事務的作業がほとんどでした。

①日本卓球チームの窓口として台北デフリンピック日本選手団事務局、旅行会社など連絡やりとり

②日本卓球チームの選手・スタッフに事務局から受け取ったデフリンピックの情報、調査書、健康診断、使用薬物の調査、エントリー申請、ユニフォームのサイズ、強化合宿案内など連絡やりとり

③強化合宿の宿泊地を探して予約、選手・スタッフの交通費など強化合宿経費の整理、選手の強化合宿報告書の整理

④アンチドーピング講習会の会場確保、担当者と打ち合わせ

大会期間中では、

①卓球競技のＴＤ（テクニカルディレクター）会議に日本卓球チーム代表としてコーチ、手話通訳者と一緒に出席しました。

②監督、コーチから卓球競技のＴＤに確認して欲しいこと（決勝トーナメントの組み合わせ、表彰式の時間など）を卓球競技のＴＤに確認しました。

③試合記録、写真撮影、試合の組み合わせの整理、選手の試合時間の整理をして選手に伝えたりしました。軽食の買い出しもしてました。

④ほぼ毎日に試合結果など情報を日本卓球チームのブログに打ち込んで、日本から応援している人たちに見てもらいました。

(2) 反省・まとめなど

金メダルが１個も取れなかったことが１番残念でした。

メルボルンデフリンピックの時および昨年のブルガリアでの世界ろう者卓球選手権大会時の選手が力をつけて来ているし、上位成績に入る各国は 10 ～ 20 代の選手が中心となっていることから、日本も早速、手を打たなければならないと思いました。2011 年の韓国でのアジア大会、2013 年のアテネデフリンピックなどの金メダル獲得に向けて、組織の見直し、長期計画的な選手育成・多くの国際試合の経験、早いうちに監督・スタッフ決定､資金作りなどに取り組む必要があると思いました。また、マスコミなどで日本国民にデフリンピックの認知度を広めることも課題と思いました。また、デフリンピック会場でドーピング検査と同じように抜き打ち聴力検査が必要ではないかと思いました。

今回は監督、ヘッドコーチ、コーチが健聴者ということで、メルボルンデフリンピックの反省から手話通訳者２人を入れたことがよかったです。

他にスタッフの明確な担当分担がはっきりしておらず、大会時に担当分担しましたが、大会前に担当分担をはっきりと確認しておいた方がよかったと思いました。

スタッフとして大きな経験、大きな勉強をさせてもらいました。今後もその経験、勉強をしたことをいろいろな活動の場でいかしたいと思っています。

最後に日本からたくさんのご協力、温かい応援をしていただき、本当にありがとうございました。

マネージャー　　松下　健（茨城県）

今回はスタッフとして第 21 回夏季デフリンピックに参加させて頂きました。

選手としての参加ではなかったので、最初は正直なところ、自分の頭には選手としての参加しかなかったので、スタッフとして台北にまで行って何の意味があるのだろう？と戸惑いがあり、とても悩みました。

選手としての参加でしたら胸を張って、２週間の仕事を休むことができるけれど、スタッフとして２週間も長期間の休みがもらえるのだろうか、それが一番心配だったためです。

しかし、日本ろうあ者卓球協会の冨田会長や強化委員会から「スタッフとして勉強してみないか」との連絡があり、自分の会社の上司に相談したところ、「そういうことだったら、頑張ってやってきなさい」と仕事が忙しいにもかかわらず、快く承諾して下さいました。感謝し、気持ちを切り替えて、自分には何が足りないのか？を学ぶ事も含めて良い機会だと思い、参加させて頂くことを決意しました。

「心は一つ！台北に日の丸を揚げよう！そして日本に感動を！」というスローガンをのもとに、会長をはじめ、監督やコーチ、選手、スタッフが一丸となって世界一を目指して強化合宿を重ねていくうちに、今までは感じたことのない裏の仕事の大変さ、小さな心配りの重要性を感じ、改めて責任のある仕事だということを痛感し、今までサポートして下さったスタッフに感謝する気持ちを感じました。そして、選手が 100％の持っている力を出せるよう、サポートしていかなければいけないんだという使命感に立たされました。

台北に行き、私が勤めたスタッフの仕事内容は選手達の食事の準備をしたり、試合結果や次の試合の予定をプリントに記入して 50 枚位コピーし、日本から応援しに来て下さった方々に、作成したプリントと国旗とバルーンを配布して一緒に応援したり、選手の練習相手やベンチコーチとしてアドバイスをしたりしました。

試合のみではなく、ホテルに戻ってからパソコンへの入力等もしました。

試合の結果は男子団体戦が４位で、シングルス、ダブルスも上位に入れずに終わってしまいましたが、女子は団体戦が準優勝、ダブルスは小浜・鈴木組が３位、シングルスは上田萌選手が準優勝、佐藤理穂選手が３位になりました。男女共に団体戦は中国に敗れてしまうという悔しい結果になってしまいました。

今回のデフリンピックは王座奪回というテーマで挑みましたが、思ったよりも世界の壁は厚く、良い成績を残すことはできませんでしたが、日本のチームワークは他国と比べると一番良

かったので、チームワークとしては世界一ではないかと思います。

今回の大会を通して、精神面の弱さ、スタミナ不足、環境への適応などの課題が見つかりましたので、その課題を糧にして４年後のデフリンピックに向けての目標に揚げて、今から努力する必要があると思いました。

デフリンピックに初めて参加し、各国の選手達の技術は勿論のこと、気配りの大切さや、各国の文化等、色々と学ぶ事ができ、とても有意義な体験となりました。この感謝の気持ちを無駄にしないよう、今後は日本のために頑張っていきたいと思います。誠にありがとうございました。

手話通訳者　　高橋　さや（千葉県）

(1) 担当、内容について

選手やスタッフ、監督間などでの、手話通訳を主に担当。

練習や試合、チームでのミーティング以外にＴＤ会議への通訳参加もしました。

また、手話通訳だけでなく、チームスタッフとしての行動もしました。

(2) 反省、まとめなど

初めてのデフリンピック参加でしたが、昨年台北で行われたプレ大会参加の経験もあり、土地感覚が身についていたので少し安心感はありました。しかし、国際大会且つ非常に大きな大会ということで、緊張の連続でもありました。

私自身卓球の経験がありませんし通訳技術も未熟なので、合宿等で経験を重ねても本番で良い通訳が出来たかというと、そうは思えません。ただ、周りの雰囲気に圧倒されることもありましたが、選手や監督の気迫に後押しされ、通訳ができたという面もあるように思えます。本当に皆の心がひとつでないと、メダルには手が届かないということが今回の２週間でよく分かりました。

通訳の技術面でも反省すべきところはたくさんあるのですが、それよりも自分のメンタル面での反省部分が大きいです。台北到着当日は問題なかったのですが、翌日以降、特に練習や試合が始まってからかなりの緊張があり、通訳中に手の震えも出てしまうくらいでした。デフリンピックという大舞台にいるのだから緊張は当然だとも思ったのですが、もう少し心の落ち着きがあれば良かったというように思います。また、滞在期間も終盤になると集中力が欠けてしまうところもありました。緊張と緩和のバランスを上手く保つことができれば良かったです。

また、やはり国際手話を少しでも身につけておくべきでした。出発前に学ぶ機会が得られず、現地で他国の方と話す中で国際手話を見て理解することに努めました。現場で学ぶということもとても重要なことですが、世間話程度のことをすぐに理解できるようにしていればもっと会話がスムーズに出来たかもしれないと思うことも多々ありました。理解は出来るけれど、表現ができないという苦しさがありました。

相手の方が、私の言いたいことを汲み取ってくださったので、会話が何とか成立していたところがほとんどだったように思います。国際手話だけでなく、英会話に関しても同じです。大会中、現地の日本語ボランティアの方にもだいぶ助けていただきました。

今回、卓球チームとして金メダルの獲得は出来ませんでした。しかし、チーム全員がひとつの目標に向かって突き進むという感覚は今まで味わったことがなく、鳥肌が立つほどの感動と、一丸となる爽快感を得ることが出来ました。しかし、もっと結束を強めることも出来たのではないか、という気持ちもあります。４年後のチームメンバーはどなたが選ばれるのかは分かりませんが、今回のチーム以上の結束力を見せていただきたいです。そうすることによって、台北で逃した金メダルにも近づくことが出来るように思います。

そして、２週間という長丁場を乗り越えられたのも、卓球チームのメンバーのおかげだと思っています。スタッフは勿論、選手も周りに気遣う行動が多く、そういうところでかなりメンタル面での支えになりました。

デフリンピックに行くまで、いろいろなことを考え、悩んでいたこともあったのですが、２週間を通して、自分への課題、目標が明確になってきました。これを少しでもクリア、達成することによって、皆様への恩返しになるのではないかと思います。この貴重な経験を糧にして、手話と関わる人生を更に長く深くしたいと思います。

手話通訳者　　井出　敬子（神奈川県）

はじめに

第 21 回夏季デフリンピックに、卓球競技の手話通訳スタッフとして参加しました。スタッフ８名の中、監督、ヘッドコーチ、コーチの３名が健聴者だったので、その手話通訳が主な役割でした。

手話通訳の内容

①朝食時、スタッフ間でその日の予定確認
②練習や試合は、監督、ヘッドコーチ、コーチの指示
③選手、スタッフ全員のミーティング
④ＴＤ会議に出席
⑤ドローに出席
⑥台北卓球協会との食事会
⑦ドーピング検査の同行
⑧テレビ、雑誌等、メディア取材の対応

上記はデフリンピック期間中の手話通訳の仕事ですが、①②③⑧については、強化合宿からのつながりがあります。デフリンピックに向けての強化合宿は、７回以上ありました。選手、スタッフとの交流（ミーティング）を重ねる中で、選手としての自覚、心構えなど、監督の言わんとしていることを、私も理解していくことができました。

特に監督が幾度となく繰り返された「ほうれんそう」=「報告、連絡、相談」は、単なる情報の共有化ではなく、より深く共有する（理解を深める）ことが大切である。言葉だけでなく、その奥にある意味、思いを共有できる通訳を心がけたいと自分なりに解釈し、デフリンピック期間中は、「ほうれんそう」を徹底するよう努めました。

その他の業務

また手話通訳の他にも、食料等の買い出し、アイシング用氷の調達、練習時の球拾い、体調不良の選手の付き添い、記録、タイムコートの確認…　選手の忘れ物を取りに全速力で走ったりすることもありました。こういった細かい仕事の役割分担はなく、できる者ができることをする。誰もが１スタッフとし

て動いていました。

意外だったのは、試合会場内では、英語、中国語、国際手話、台湾手話での案内だったということです。練習場にいる限り、本部隣の手話は見ることができません。しかし、アナウンスの後に、呼び出しカードを持った係りが場内を一周してくれるので、混乱はありませんでした。また、不測の事態が起こったときには、日本卓球チーム付きの現地ボランティアスタッフがいたので大変心強かったです。

反省

さて、３月の強化合宿からデフリンピックまでを振り返ってみます。最初に気づいたのは、選手８名のコミュニケーションの多様性です。年齢や育ちの環境などの違いでしょうか。とても戸惑いました。選手も不安だったと思います。選手ひとりひとりに向き合い、その選手に最も近いコミュニケーション方法と手話を使いたい…と、今も試行錯誤が続いています。

そのことも含めて、他競技の手話通訳者はどうしているのでしょう。また、試合中の監督の指示の伝え方、通訳者としてのON、OFF の切り替えなど、工夫があったら教えてほしいです。情報交換ができたらと思います。

おわりに

学生時代に卓球選手だった経験を生かして、専門性を持った手話通訳ができれば…と、勇んでデフリンピックに臨みました。しかし、最も重要なことは、日本選手が限りなく、遺憾なく、その力を発揮できるように全力でサポートするその姿勢だと思いました。

そして、今回デフリンピックに参加したことで、卓球以外の競技の選手やスタッフとコミュニケーションがとれたことは、私にとって幸せなことでした。また、手話通訳として多くの経験を積むことができ、いい勉強をさせていただいたと感謝の気持ちでいっぱいです。

選手　　男子主将　梅村　正樹（北海道）

今回は８年振りのデフリンピック出場ということと、６年間のブランクがあって自分がどこまでやれるか、不安な気持ちがありました。

台北では朝から気温が 30 度もあり、体力の面で不安がありましたが、体育館はエアコンが入っていたので安心しました。ところがエアコンが強すぎてボールが揺れたり、止まったりなど、かなり惑わされました。

台北に入って３日目くらいに足に違和感があり、変だと思ったら体育館の床がコンクリートだったので（赤いマットがしいてあり、気がつかなかった）選手のほとんどが足や腰を痛めてしまい、そのまま試合に入ってしまいました。

大会期間中に他種目の日本選手がインフルエンザになり、パニックになった選手達もいましたが、自分達は予防を徹底しました。

最初に団体戦が始まり、順調に予選を突破し、準々決勝で韓国に競り勝ちましたが、準決勝の台湾戦は体が硬くなり、思い通りのプレーが出来ず、負けてしまいました。

３・４位決定戦の中国戦も硬さが取れないまま敗れ、４位という不本意な結果でした。

続く混合ダブルス、男子ダブルス、シングルスも調子が出ないまま思い通りの結果が残せずに終わってしまいました。

自分自身としては納得いく試合がなく、このままでは終われないと強く思いました。出来ることなら４年後のアテネを目指したいと考えております。

皆様のあたたかい応援に感謝しております。ありがとうございました。

選手　　青山　修（千葉県）

●成績・自己評価

【成績】

男子団体戦	４位	入賞
男子ダブルス戦	ベスト16	入賞
混合ダブルス戦	ベスト８	入賞
男子シングルス戦	ベスト32	

【自己評価】

まず男子団体戦チームにおいて、元世界王者の梅村選手と若手期待の望月選手とカットマンの上田選手と良いメンバーが揃い、今まで７回の強化合宿で一緒に猛練習してきました。メダルを取ろうと男子メンバーで約束しました。しかし、台北アリーナでは今まで経験したことがない風があり、肌が冷たく感じました。クーラーから強風が出たらしくて、ボールを正確に捉えることが出来ないまま体調を崩してしまい、自分の思い通りに体を動かすことが出来ませんでした。しかし、各国の選手達も同じ条件なので勝負するしかないと思い、気持ちを切り替えて最後まで精一杯戦ってきました。残念ながら４位に終わってしまいました。すごく悔しくてたまらない気持ちでした。次にまたダブルスとシングルスもあるので、じっくりとやり方・戦術などを考えました。しかし、一気に攻める気持ちがあるにも関わらず体がついて来なかったし、卓球らしさが出ないままで完敗しました。結局、ノーメダルに終わりました。やはり、前回よりも世界全体でのレベルが高くなったと痛感しました。

●反省とまとめ

40 歳で迎えた台北デフリンピックであり、日本代表４大会連続出場。今回は世界各国のレベルがぐんと伸びた中、日本は王座から転落し常勝国の日本という時代が終わったと感じました。今から常に日本において積極的に改善に取り組まなければならないと感じました。卓球選手として成功したいですが、成功後の生活における保証はないし、卓球を辞めた後の人生のほうが長いこともあり、日本ろうあ者卓球協会も今後の強化合宿の改善をしなければならないと思います。また今後も若手選手育成や指導者を増やさないと厳しいのでは、と改めて思います。

強化合宿の間には、協和発酵キリンの佐藤監督と東京富士大学の西村監督と谷上コーチの指導を頂き、また一流選手が練習相手の協力をして頂いた事はとても感謝しております。色々なことを多く学ぶ中で気づかされたこと、色々な出会い、夢を持てたことは感謝しており、すべてが私の財産になりました。今後は恩返しをしたい気持ちで、できるならば全国を廻って私と同じ聴覚障害を持つ子供たちに今まで経験したアジア、世界、デフリンピックなどの卓球体験を伝承していきたいと思います。

最後になりますが、日本の皆様から今までたくさんのご協力と温かい応援をいただき、誠にありがとうございました。

選手　　上田　大輔（京都府）

今回のデフリンピックに参加して、成績は団体４位、混合ダブルス・男子ダブルス・男子シングルスベスト32という成績でした。

残念ながら、メダルを獲得することはできませんでしたが、個人的には生涯最高のベストプレーができた14日間だと思っています。

特に、ヨーロッパの選手はカットマンを苦手とする選手が多く、戦型的にも自分にとって有利でありました。しかし、アジアの選手はカット打ちを得意とする選手が多く、カット一本で粘り切るには限界があると感じさせられました。今後は、カットだけでなく、自分のポイントにつながるカットの使い方を考えていく必要があると思いました。

また、勝ち負けだけでなく世界中から同じ障害を持った仲間が集まり、その場で共に競い合えるという貴重な体験をさせて頂きました。

デフリンピック全体を振り返って、一番感じたことはデフリンピックに対するモチベーションの差でありました。それぞれの国の状況、個人の生活状況によって、大会にかける意気込みに差があり、それが少なからず勝敗に結びついた部分もあると思います。

私自身、ベストプレーをするという意識はありましたが、何が何でも勝つという気持ちは他国の選手に比べて足りなかったように思えました。その差が今回の結果につながったのでしょう。

デフリンピックに参加したのは初めてでしたが、台北での盛大さには本当に驚きました。４年後はアテネで開催されますが、近い将来、日本でも開催してほしいと思います。そして、デフリンピック開催をきっかけに、日本全体で聴覚障害者に対する意識改革になればと思っています。

選手　　望月　翔太（神奈川県）

今回の台北デフリンピックが初めての出場でした。デフリンピックの目標は自分のプレーを思いっきり出して１つでもメダルを勝ち取ることでしたが、１つもメダルを取れずに終わってしまいました。大変悔しいですが自分のプレーを全て出し切った結果なので、その結果を受け入れながら４年後のデフリンピックに向けて頑張っていきます。

また、今回のデフリンピックで身をもって味わった課題を忘れずに自分のプレーの質を上げていくことを目的に、今まで以上に精進していきたいと思います。

最後になりましたが、今回のデフリンピックは競技だけではなく、世界各国の選手達や現地ボランティアの人達と交流することもでき、自分自身にとって大変貴重な経験になりました。それとともに４年後のデフリンピックに向けて、自分のプレーの質を上げていくだけではなく、デフリンピックの素晴らしさを周りの皆さんに伝えていきたく思います。

今回は誠にありがとうございました。

選手　　女子主将　小浜　京子（大阪府）

(1) 成績に対する自己評価

【成績】

女子団体	銀メダル
混合ダブルス	ベスト16
女子ダブルス	銅メダル
女子シングルス	ベスト８

【自己評価】

初参加３名を加え、チームワークを大切に、心を一つにして力を発揮出来た事。

緊張感がありすぎて体が硬くなってしまい、なかなか動けなかった事。

(2) 反省・まとめなど

この大会は私にとって４度目の出場でした。卓球競技としては女子団体・混合ダブルス・女子ダブルス・シングルスの４種目があり、参加してきた国はオーストラリア・オーストリア・ベルギー・中国・クロアチア・デンマーク・ドイツ・イギリス・ギリシャ・香港・ハンガリー・インドネシア・イタリア・日本・カザフスタン・キルギス・韓国・リトアニア・ニュージーランド・ナイジェリア・ポーランド・ロシア・スロバキア・南アフリカ・スウェーデン・トルコ・ウクライナ・ウズベキスタン・ベネズエラ・イエメン・台湾の31ヶ国でした。

６日～８日は団体戦の予選リーグを行いました。この予選では、ＡとＢブロックの２つに分かれて、私たち日本チームは抽選の結果、Ｂブロックになり相手は中国・ハンガリー・韓国・香港と対戦する事になりました。今までプレッシャーをかけてしまった分を乗り越えて、チームワークの為に最後まで諦めずに頑張って戦いました。

予選リーグの結果は３勝１敗になり、２位突破で決勝トーナメント戦へ進出する事が出来ました。

そして、９日は決勝トーナメント戦１回戦（準決勝戦）の対戦相手はハンガリーでした。結果は３対０で勝って８年振りの決勝戦へ進みました。決勝戦の対戦相手は中国で、予選リーグでは上田選手、佐藤選手、鈴木選手が出て結果は０対３で負けてしまいましたが、決勝戦では絶対に倒したい！という気持ちが高まりました。決勝戦も上田選手、佐藤選手、鈴木選手の３名が出ました。３名ともデフリンピック初出場ですが、最後まで諦めないで頑張りました。結果は残念ながら１対３で負けてしまい、“金メダル獲得ならず”。悔しい気持ちより、チームワークの為に頑張って戦ってくれた３名の選手にホンマに感謝しています。ホンマに有難う！

11日は混合ダブルス戦（望月ペア）ではベスト１６まで勝ち進みましたが、相手は韓国のPark&Leeペアに惜しくも３対４で負けてしまい、メダルなしに終わってしまいました。私が緊張で体が硬すぎて投げ上げサーブを出せなくなってしまったんです。パートナーの望月選手にはホンマに申し訳ない気持ちが精一杯でした。ホンマにごめんなさい。

12日の女子ダブルス戦（鈴木ペア）では準決勝戦まで楽勝で勝ち進みましたが、準決勝戦で中国のLIN&MAOペアと対戦した時、相手２人の欠点をなかなか見つからないまま１対３で負けてしまいました。

次は３位決定戦があるのでまだ終わってないですし、最後まで諦めないで頑張ろう！という気持ちに切り替えました。３位決定戦の対戦相手は韓国のLee&Moペアと対戦。妹の鈴木ペアとお互いに大きな声を出しながら一本一本集中し、息を合

わせ戦いました。銅メダルを獲得する事が出来てとても嬉しかったです。

最後の日がとうとうやってきました。残っている試合は女子シングルスでした。準々決勝戦まで苦戦もありましたが勝ち進む事が出来ました。準々決勝戦では中国の Huang 選手と対戦してなかなか攻守出来ず、０対４で終止符となってしまいました。

私にとってこの大会はもの凄い試合だったので、金メダルを取れなくても銀メダル１個、銅メダル１個を獲得出来ただけで嬉しいです。でも、この試合で反省した事を日本に帰って、また４年後のアテネデフリンピックで“金メダル獲得”する為に体力面・技術面などより良く磨いて頑張っていきたいと思います。

台北で熱い応援をして下さった皆様、そして日本から温かいご声援をして下さった皆様、ホンマに有難う御座いました。

選手　　鈴木　由樹子（北海道）

◇成績に対する自己評価◇

自分にとって初めてのデフリンピックであり、国際大会も初参加でした。

試合結果：女子団体　　→　銀メダル
　　混合ダブルス　→　ベスト 32
　　女子ダブルス　→　銅メダル
　　女子シングルス　→　ベスト 16

自己評価としては緊張することもありましたが、自分の力を出し切り最後まで戦う事ができました。

◇反省・まとめ◇

選手に選ばれてから、去年 12 月より東京で７回・京都で１回、合計８回の強化合宿に参加してきました。

しかし、自分は家庭、子育て、仕事を持っているため、チームメンバーと一緒についていけるか､本当に私でいいだろうか､など不安でいっぱいでした。けれども終わってみると、とても良い経験になったと思います。

目標にしていた金メダルを獲得することができませんでしたが、団体戦では一戦一戦全力でプレーをして最後まで諦めずにチームのみんなの心を一つにして戦い、銀メダルを獲得することができました。

また、姉（小浜選手）との女子ダブルスでは、幼い頃（高校時代）、ダブルスを組んでは喧嘩ばかりだった姉妹でしたので、今回は姉と顔を見合わせて、最後までお互いの気持ちを確認し合いながら、ひとつひとつのプレーを大切に最後まで諦めずに戦うことができました。姉妹でダブルスの銅メダルを獲得したことは、本当に嬉しかったです。私にとって一番の思い出になりました。

最後になりますがメダルに届いたのは、佐藤監督、西村ヘッドコーチ、谷上コーチ、スタッフのみなさんのご指導があったからこそと思います。

このデフリンピックに初めて参加して、忘れられない経験をさせていただいたことは非常に感謝しています。

今まで応援して下さった皆様、本当にありがとうございました。

選手　　上田　萌（東京都）

私は初めてデフリンピックに参加しました。

団体戦、ダブルス、ミックスダブルス、シングルスの四種目に出場しましたが、デフリンピックで実際にプレーをして感じた事は『自分の未熟さ､一本の重みの大切さ』この二つでした。私は、心のどこかで『勝たないといけない』という目に見えないプレッシャーを感じてしまい、前半は自分の本来の力を発揮することができませんでした。自分より格下の相手にも負けてしまい、その時はとても悔しくて何度も涙を流しました。

後半は気持ちと考え方を変えて自分のプレーをする事を心掛けて臨みました｡すると入らなかったボールが入るようになり､自分のプレーにも自信が持てるようになりました。

シングルスの決勝では最後の最後まで接戦となりましたがあと一歩のところで負けてしまいました。けれど自分の力は全て出し切る事が出来たし、試合をして楽しかったです。

今回のデフリンピックは金メダルをひとつも獲得する事が出来ませんでしたが、今の自分はまだまだチャンピオンにはなれないということがよくわかったし、自分にとって様々な面でとても勉強になった大会でした。

選手　　佐藤　理穂（東京都）

私は小さい頃から夢だった夏季デフリンピックに初めて参加し、団体・シングルス・ダブルス・混合ダブルスの４種目に出ました。『心は一つ。台北に日の丸を掲げよう。そして、日本に感動を！』というスローガンをしっかり持ち、金メダルが取れるよう頑張ってきました。最初は団体戦で、次に混合ダブルス、ダブルス、シングルスと続きました。団体はＢリーグでその中に中国・韓国もいるという厳しいグル ープでした。韓国には勝たないと決勝トーナメントに行けなくなることもあり、前回は韓国のエースにボロ負けしたので、今回は絶対に自分が勝ってチームに貢献しようと思い挑戦者のつもりで頑張りました。その結果、３－１で勝ち、決勝では残念ながら中国に負けてしまい、銀メダルでした。シングルスは３位で銅メダルを獲る事ができました。しかし、私は金メダルを獲る事が目標だったので達成できなくて悔しかったですが、自分の持っている力をすべて出し切る事が出来たし、また最高のチームワークで戦える事ができた点は良かったです。この大会で私は、ジュースや９－９の時にどうしてもあと１本が取れず、１本の重さというものを痛感しました。卓球は２週 間ほとんど毎日試合があったので体力・気力をずっと同じように保つ事が大変だったので、技術だけではなく、体力と集中力をもっとつけていかなくてはいけないと思いました。今まで応援してくださった方々への感謝の気持ちを忘れず、また４年後のアテネデフリンピックで、ライバルの中国を倒して金メダルを取れるよう頑張りたいと思いました。

テニス競技チーム

監督　　森本　尚樹

①選手の選考について

2005年から2008年の3年間において全国ろうあ者体育大会及び全国ろうあ者テニス選手権大会(ランキング大会)の結果において競技ポイントと競技内外における社会的マナー評価も合わせて選考とする。3年間の総合ポイントの上位成績から男子5名と女子3名による選考会を実施し、候補選手と補欠選手の正式内定を決定。2009年2月より月一回の強化合宿を実施し、強化合宿の期間中においても、競争心を維持して貰いたい為､候補選手と補欠選手の入れ替えも可能。2009年6月に最終的に監督、コーチ、協会役員で協議した後、日本代表選手を決定し、台北デフリンピック派遣委員会に選手推薦書を提出する。

2008年に広島出身の中学二年(14歳)の梶下怜紀選手の存在を知って全国ジュニア大会で優秀な実績があるという情報を入手し、2008年全国ろうあ者テニス選手大会(埼玉県開催)にワイルドカード出場させた。その結果、男子参加選手全員を圧倒的に倒し続け、初参加ながら初優勝。デフリンピックテニス競技の参加資格の年齢は14歳以上で出場可能と判明とした為、候補選手として内定とした。

当初は、世界相手にダブルス戦なら競争心を持ち、上位を狙えるとして男子4名、女子2名を日本代表として推薦書を提出する意向でしたが、団長から世界でメダルを確実に取れる選手を絞るなど、厳しい査定があった為、前回大会(メルボルン大会)と同様、男子2名、女子2名と派遣決定となった。

2009年6月に最終選考協議した結果で選手推薦書を提出した直後、代表に決定致した女子選手が手首を負傷し出場辞退を申し入れ、急遽、選手変更を受け入れてくれた派遣委員会に感謝を述べ、迷惑おかけしたことお詫び申しあげます。

②成績一覧

☆男子シングルス(Men's Singles)参加：33名

松下哲也　選手

2回戦　ZAFIR、Jamie(AUS：オーストラリア)

○　6－3／6－7／6－1

3回戦　VONTHEIN、Torsten(GER：ドイツ)

●　2－6／1－6　ベスト16

梶下怜紀　選手

2回戦　SEALY, Joshua(AUS：オーストラリア)

○　6－0／6－0

3回戦　SINCLAIR、Anthony(GBR：イギリス)

○　3－6／6－4／6－0

4回戦　UITERWIJK　WINKEL、Jan、Jaap
(NED：オランダ)

○　6－3／6－1

準決勝　TOEDTER、Hans(GER：ドイツ)

○　6－3／6－4

決勝　LAURENT, Mikael(FRA：フランス)

●　2－6／1－6／2－6　銀メダル

☆女子シングルス(Women's Singles)参加：19名

阿部八千代　選手

2回戦　HO, Chiu-H(TPE：中華台北)

○　6－2／6－1

3回戦　FIGUEROA、Carla(CHI：チリ)

○　6－1／6－0

4回戦　VILLAMANDOS　LORENZO, Beatriz
(ESP：スペイン)

●　6－3／3－6／4－6

3位決定戦　HO, Chiu-M(TPE：中華台北)

●　5－7／3－6　　4位

辻岡瑞恵　選手

1回戦　KALOGEROPOULOU, Vasiliki
(GRE：ギリシア)

○　6－3／6－0

2回戦　GRAHAM,Catherine(GBR：イギリス)

●　0－6／0－6　ベスト16

☆男子ダブルス(Men's Doubles)参加組：11組

松下哲也選手・梶下怜紀選手　組

1回戦　CHIN　/　LIN(TPE：中華台北)

○　6－1／6－0

2回戦　O`DONELL　/　FLETCHE(GBR：イギリス)

●　6－3／1－6／3－6　ベスト8

☆女子ダブルス(Women's Doubles)参加組：6組

阿部八千代選手・辻岡瑞恵選手組

準決勝　HO　/　HO(TPE：中華台北)

●　1－6／0－6

3位決定戦　ODDNE　/　RICCI　BITTI(ITA：イタリア)

●　0－6／3－6　　4位

☆ミックスダブルス(Mixed　Doubles)参加組：12組

松下哲也選手・阿部八千代選手　組

1回戦　BERNARD　/　LAURENT(FRA：フランス)

○　WO

2回戦　ALBRECHT　/　BREITENBERGER
(GER：ドイツ)

○　WO

準決勝　GRAHAM　/　SINCLAIR　(GBR：イギリス)

●　4－6／2－6

3位決定戦　FLECKENSTEIN　/　TOEDTER
(GER：ドイツ)

○　6－4／6－4　銅メダル

梶下怜紀選手・　辻岡瑞恵選手　組

1回戦　CAILLAUD　/　NOVELLI(FRA：フランス)

●　4－6／4－6　1回戦敗退

③成績と評価

松下哲也選手…デフリンピック3度目の参加(8年前ローマ、4年前メルボルン)で過去2大会では世界の実力にのまれて、完全燃焼できなかった悔いが残った。

台北大会こそ3度目の正直としてメダル獲得を目標におき、候補選手に選出されてから強化合宿に完全参加して日本チームのなかではリーダーで欠かせない存在である。

最近、試合における好・不調の波があまりない選手で、精神

的に安定してきてる。
　シングルスの試合では粘り強く見せ、相手の苦手とするバックを狙い、ストロークを武器にして相手を狂わせる。
　ミックスダブルスの試合では、前大会のメルボルンで相性のいい阿部選手と組んで準々決勝で５－７、７－６、６－８といい接戦の成績だったが、惜敗してメダル獲得ができなかった悔しさが残る。それを今大会はリベンジかけて同じ阿部選手と組んで出場し、運よく準決勝に進出出来た。準決勝で敗退したが、３位決定戦へ。狙うのはもちろんメダル。３位は銅メダル、４位はメダルがない、その差は大きいという意識もって攻め勝つ戦略を展開し、見事に銅メダルを獲得した。彼は、最後まで戦う姿勢を見せていたことがメダルを取れる要因になったと思う。

梶下怜紀選手…デフリンピック初めての参加。15歳では日本ろうテニスの歴史のなか、最年少参加。それまで全国ジュニア大会にも数多く参加して上位入賞するなど優秀な成績をおさめる。世界大会でも出場経験がある。
　デフリンピックでは世界のデフ強豪者が集まる大会で何処まで食い込むかを期待したが、試合をするたびに想像以上に実力をあげ、決勝進出をはたした。今まで過去大会でもアジアとヨーロッパの戦略技術の差が大きく、競技が始まったばかりの時は、アジア勢男子選手はあまり注目されてなかった。しかし彼が勝ち進むたびにヨーロッパ選手や監督が、彼の存在の質問するなど注目を浴びた。彼の活躍によりアジア勢の技術も見逃せなくなった大会だと感じた。金メダルは逃したものの、まだ年齢的に若いし、今後、デフリンピックで最頂点を狙える選手だと確信し、将来も頑張ってもらいたい。

阿部八千代選手…デフリンピック３度目(８年前ローマ、４年前メルボルン)でローマではシングルス銅メダル、メルボルンでは女子ダブルスで銀メダル、今度こそ金メダル奪取して色違いのメダル制覇を狙っての参加。
　国内の聴覚障がい者テニス選手の女子トップの成績をずっと維持。しかし家事、育児に追われ普段の練習に十分参加できない状況ながら、強化合宿時は、阿部選手自身が集中力を持って実戦対策にメンタル強化の課題を持ちながら挑んでくれた。ところが、大会直前に、腰を痛めるアクシデントに見舞われ、期待から不安、心配する毎日ばかりだったが、本番に向けて治療専念に励み、本番に間に合わせることが出来た。出国の時にいけるところまで頑張ると本人が言った言葉を信じ、阿部選手のパフォーマンスが発揮できるよう支えていった。
　試合本番には台湾までご家族とお母様が応援に駆けつけてくれたので､本人の強い励みとなった。さらに､『ママアスリート』の活躍により、出産は引退に導くものではなく、競技能力を向上させメダルを獲得する成果にもつながったことを教えてくれた。
辻岡瑞恵選手…デフリンピックは初めての参加だが、世界大会は３度目の参加。イギリスでの世界オープン大会参加と団体戦ドレセ・マエレ杯参加で日本代表として世界大会を経験している。シングルス派タイプで長い時間でラリーを続け攻める武器を持つ。だがひとつのミスに次のプレーが大きく影響されやすい。そのメンタル強化を課題として本番直前までの短い期間に鍛え上げた。練習において熱心に質疑しながら技術を覚えていったが、試合本番に活かされなかったのに悔いが残る。ひとつひとつのプレーに大切に意識を持てば、攻めのいい試合展開が出来たのではないかと思う。
　今回のデフリンピックで世界レベルを実感し今後、技術の向上に成果を期待したい。

④チーム(コーチ)体制と各コーチの役割
　チーム体制…監督１名、コーチ１名、トレーナー１名、スタッフ２名
　スタッフの役割
・森本　尚樹…代表監督、チームに関する統括責任者、ＴＤ会議出席、代表者会議(総務召集)＆監督会議(団長召集)出席、報告

・杉本　和子…代表コーチ、練習メニュー責任者
　戦略指導

・梶野千賀子…代表事務局、事務処理担当、梶下選手と共に出、帰国同行、会計担当
　女子マネージャー

・稲辺　忠奎…技術員、監督と共にＴＤ会議に出席
　男子マネージャー

・石水　政之…トレーナー、現地情報探索、記録係

⑤競技スケジュールについて
　今大会のデフリンピックは、台湾で一番、猛暑の時期に開催であった。
　テニスやサッカー、陸上など、外でのスポーツ競技は、競技以外に猛暑と戦わないといけない。氷や水の補給など一番準備が大変だった。どのスポーツにおいても気温に最適な時期の開催を選定して欲しかったと思う。

⑥大会の競技運営などの報告
(開・閉会式)
　過去のデフリンピックの前例がないほど開会式、閉会式は盛大で驚くばかりだった。
　スタジアムではオリンピック、パラリンピック並みに観客満員であり興奮し続いた。閉会式は軽食まで用意されていると思わなかった。観客や選手やスタッフや役員などスタジアムで世界交流を深められた式典であり、豪華で満喫した。
(ＴＤ会議)
　台北市立教育大学で行われた。宿泊ホテルからそこへ行くのに、タクシーで高速道路を使って30分程かかる遠い場所だった。ＴＤ会議ではチーム代表者のほとんどが健聴者だった。
　参加国語・手話→英語→国際手話と通訳するたびに多少時間がかかった。組み合わせ抽選は、２度やり直すなど、パソコンの具合が悪く、結局は手操作抽選となった。会議は約５時間かかった。
(テニス会場)
　彩虹河濱運動公園は川沿いの公園で、新しくテニスコートを改造したと思われる。だが、テニスコートが少し傾いていた。(ボールを置いたら側に転がる。)トイレとシャワーは簡易式だった。
　晴天時のテニスコートと雨天時のテニスコート(インドアコート)の会場が離れていた。(車で40分以上かかった。)

（選手の輸送）

日本チームはスタジアム近くのホテルに宿泊し、テニス会場へのバス輸送は本数が多く長く待たされることはなかったが、突然バスの運行を取りやめたりすることが多くテニス現地スタッフにホテルまで輸送して貰った時があった。

⑦競技規則の適用（問題点など）

シングルス試合の組み合わせ抽選はＴＤ会議で実施されたが、ダブルス試合は翌日、会場の仮設で行われた。ＴＤ会議で合わせて実施して貰いたかった。大会責任者と審判員の考えのズレが目立っていた。スコア担当がスコアを間違えたり、コールの声が小さかった審判員が多かった。

⑧大会参加までの準備状況

前回メルボルン大会で反省点を改善し、万全な準備が進められた。今回はスタッフ体制を変えて人員を増やしたが、チームとして充分機能したし、チームワークにも支障はなかった。

⑨統括と今後の課題について（反省・まとめなど）

毎日、ミーティング実施において出場した選手の試合の反省や、監督、コーチ、技術員からの評価を確認しあい、次の試合に悔いの残らない試合をする為の戦術や体調、メンタルなど話しあえたのが良かった。翌日の試合相手や試合時間や試合コートの場所情報を出場選手に伝達し、一刻も早く、イメトレさせた。監督やスタッフ、選手とのコミュニケーションに充分、時間をかけたと思う。

今回は新たにテニス競技のトレーナーをつけ、選手のコンディション状況の把握やマッサージして、選手に大きな怪我を期間中に起こらなかったことに大きく役に立てた。

今大会は男子シングルス史上初の銀メダル、ミックスダブルスで念願の銅メダルが獲得出来てその決まった瞬間を思い出すと涙が出る想いです。他も女子シングルスで４位、

女子ダブルスでも４位、あと一歩届かなかった善戦の試合もあって選手に最後までＪＡＰＡＮの意地を見せたれやと信じ、頑張ってくれた選手４人にお疲れさまと言いたい。

スタッフも慎重に丁寧にサポートしてくれた事もあって過去最高の団結が出来たと実感致しました。

４年後のアテネでのデフリンピックでは世界の各国に対抗できるレベルに達するよう、新しい選手の開拓、強化選手の育成を努めるべきだと実感しております。

今後、選考基準や選考方法も見直して４年後にも世界一番狙える体制を整えたいと考えたいと思っています。

デフリンピックなど世界大会に出場経験ない私に推薦を受けてから１年半の間、こんな責任重い監督をさせてもらってもいいだろうか？と思う時が度々あったが、見たこともない世界の相手を想像しながら無我夢中にやりました。

世界を脅かせてみせてやる。JAPAN　TENNIS　は世界で練習でも試合でもハードに頑張れる。最後の最後まで諦めない。絶対、複数のメダルを獲得したる　と心の中で誓って、選手を信じてやってきました。そんな私の気持ちを、選手やスタッフ、台北まで応援にかけつけてもらった皆さん、日本ろう者テニス協会関係のみなさん、台北デフリンピック派遣委員会の関係者、全日本ろうあ連盟など多大なる協力をしてくれたお陰で、今日の日を迎えられたと心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

コーチ　　杉本　和子

①代表チームコーチとして参加しました。まず代表選手の選考決定に携わりました。その後、何度か行われた強化合宿では各選手のテニス全般技術向上や色々なトレーニング方法などを指導してきました。また試合に対する挑み方や、メンタル面の強化も同時にアドバイスしてきました。台北に入ってからは調子を崩さないことに留意しながら最終調整をしました。しかし到着から３日間天気が悪く中断や場所の変更などで思うように練習時間の確保が出来なかったのが残念です。シングルスを想定したラリー練習を中心に行い、シングルスのポイントマッチ練を行いました。余った時間は女子ダブルスのマッチ練習などをしました。３日間の練習で現地の高温多湿の天候に慣れることも大事なポイントとなりました。実際に競技が始まってからはいかに選手が試合に集中できる環境を作るかが大切になりました。その為コーチング以外の選択や食事の店探しなどの雑務も行いました。コートでは特に試合前のウォーミングアップではあえて色々なアドバイスはせず、試合に入る前にそれぞれ一言ずつ最も伝えたいものをコメント書きして選手に毎日渡すという方法をとりました。過密な試合日程ということもあり身体の負担を避ける為にウォーミングアップやクールダウン以外は練習を控えました。ただ女子ダブルスのリターンサイドを決める為に３セットマッチ練習を行いました。コート外での出来事ではある選手が抜き打ちドーピング検査をする事になり、その時は付き添いをしました。また健聴は私一人だった為日常的に手話通訳をしていました。毎晩ミーティングをし、その日にあった試合の内容を振り返ると共に反省も踏まえアドバイスをし次の試合に繋がるよう心掛けました。時には試合を録画したものを見ながら一つ一つのプレーを取り上げながらアドバイスもしました。そのような生活が試合最終日まで毎日続きました。

②今大会テニスチームは複数のメダル獲得を目標としてきました。メダルを取れる選手を選考する必要があった為、当初男子４人・女子２人を予定していましたが涙を呑んで男子２人・女子２人を派遣する事を決めました。辛い過程もありましたが目標としていた複数メダルを獲得する事ができ、本当に良い結果となりました。選手達は想像を絶するような暑さ湿度日差しなどを克服して本当に頑張ってくれました。一日２試合も当たり前という厳しい状況もあり　精神的に厳しい時もあったと思いますが皆よく気持ちを繋いでくれたと思います。

またどんどん疲労が蓄積する中、お互いが気遣いあいながら駆り残った選手のサポートや応援にまわったり　終始チームとして纏まりがありました。残念だったのは男子ダブルスの練習が全体的に足りなかったことです。梶下選手の都合で遅れて来た為、開会式前までの最終調整のダブルス練習ができませんでした。結果ぶっつけ本番でダブルスをする事になりました。その為、初戦は勝ちましたがコンビネーションやポジショニングが悪く２回戦で逆転負けしてしまいました。やはり何度も一緒に練習を重ねないと個々の力があったとしてもダブルスとしては成立しません。常に勿体なかったと反省しています。また男子シングルス決勝では雨天の為、場所を室内コートに移して行われました。梶下選手を除いた選手は同じ場所で練習していましたが、彼だけ練習できずそれが決勝敗退の一因となったと思います。特例で出発を遅らせて頂きましたが、やはり一緒に日本を出発しておくべきでした。

ただそれ以外は選手もスタッフもチーム一丸となって同じ

目標に向かっていけたことは選手其々かけがえのない経験となりました。今までにない最高の成績を残せたことを私自身も誇りに思います。今大会に参加することができ本当に良かったと思います。

スタッフ　梶野千賀子

９月３～15日に開催された台湾：台北デフリンピックはあっという間に過ぎ、無事に日本テニスチームは大きなケガもなく、選手達は立派な成績を残し、日本へ２つのメダルを土産に持ち帰る事が出来ました。

昨秋から強化合宿が本格的に始まり毎月１～２回強化合宿を行ってきましたが、５～６月に新型インフルエンザが世界的に流行の理由で合宿が出来ないなど不運に見舞われて冷や冷やしたものでした。我々スタッフ一同は台北デフリンピックまで、選手達の体調管理を常にチェックしていき、幸い誰１人も大きな病気もなく台北へ発つ事が出来ました。

しかし、現地にて他団体の選手がインフルエンザにかかり感染が広まった事で日本選手団はピリピリムードになってしまったもの、手洗い・うがい慣行をきちんとやり続けたおかげでテニスチームは最後まで問題なく試合に挑めてよかったです。また、トレーナーが毎晩選手全員１人ずつ翌日の試合のために疲れを残さないようにマッサージを続けたおかげでもあります。日中でも試合前後に選手１人１人の体の動きなど見守り、それはもう精神的に大変な仕事でした。テニスというスポーツは個人競技とはいえ、孤独感が強いのでサポートが必要です。

前回の大会までは専門知識を持ったトレーナーを同行してなかったテニスチームにはどうしても必要があると思いチームに入れました。おかげさまで今回のデフリンピックは、選手達は試合に体調万全で挑めたと思います。

私は裏方役スタッフとして、台北デフリンピックまで派遣メンバーのために事務局仕事を全うしてきました。今まで経験のない事務手続きは本当に大変なもので毎日あたふたとしていましたが、選手達のためであり、その分選手達はメダルを目標に練習を励んでいましたし、メンタル面でも相談にのってあげたりとサポートしてきました。また、今回は中学生選手を連れていく事で保護者代わりに同行し、不規則にならないよう食事なども注意してきました。

今回は選手４名に対して、スタッフは５名派遣しましたが、先に述べたようにテニスというスポーツは過酷な暑さの中での試合でメンタル面を正常に保つことはとても難しいので監督・コーチだけでは選手を守るのには大変なものです。

選手も自分の試合に集中することで精一杯ですから、スタッフがお節介せず選手が自分で出来る範囲はお任せし、選手がスタッフに頼みたい事は遠慮せずに声をかけるなどチーム全体がまとまって過ごせたと思います。スタッフ間でもお互いにカバーし合い、声を掛け合い協力していきました。

結果的に、日本ろうテニスで史上初の男子シングルス銀メダルと混合ダブルス銅メダルを獲得する事ができました。

メダル獲得した選手達が表彰式で最高の笑顔で胸を張って、日本の日の丸旗が挙った事は一生忘れらない思い出になりました。

選手達は自分なりにいろいろと反省点があるだろうと思いますが、試合では一球一球を大事に実力を精一杯出して頑張ったと思っています。そして、８日間の試合を見守ってきたスタッフ一同は選手からたくさんの感動をもらい、チーム全員、胸を張って日本へ帰る事が出来ました。

今後の課題は次回デフリンピックまで選手をどのように育てていくか･･･台北デフリンピックメンバー以外、今の日本ろうテニスは課題が山積みであるため、今回派遣したスタッフ達が台北デフリンピックでの経験や世界レベルをしっかり伝える事と引継ぎをしっかり務めなければならないと思っています。

スタッフ　稲辺　忠奎

９月２日～16日台湾の台北で開かれたデフリンピックに参加した。テニスの試合は、９月６日～13日まで。結果はシングルス２位、ミックス３位を取ることができた。

選手の人選では、いろいろな意見があった。シングルスの梶下選手を採用するにあたっては、特に意見が分かれ、選考の目安とされる４年間のポイントが彼にはなく、まだ中学３年生という幼い年齢であるため、世界の舞台で戦って勝てるのかということ。これについては、自分は彼がずば抜けた力を持っていると信じ、メダルを取るのもけっして夢ではないと推した一人であるが、結果的にまちがいはなかったと嬉しく思っている。

また、ミックスの２人は、４年前に悔しい負け方をし、どうしてもリベンジを果たしたいという強い思いを持っていた。それについては、この２人の思いを信じ頑張らせてみようということになった。結果、３位がとれ銅メダルは涙のメダルになったのではないだろうか。

昨年の11月から強化合宿が始まった。大阪からスタートし、広島、東京、松山、埼玉と練習試合を重ねていった。いろいろな企業のテニス部からも協力をもらって練習試合をしていただき、良いアドバイスも受けることができた。

私は、個人的には日本のろう者のテニスレベルは見てわかっており、プロの選手レベルも見知っていたが、世界のろう者のレベルは知らなかったので、大変興味を持って参加した。実際に参加してみると、日本のレベルはまだまだ世界と勝負するのには力が足りないということを痛感する。今回１年間の強化合宿を組んで大会に臨んだわけだが、次回の大会までには、かなりの練習を積んで技術を磨かねばならないと思う。

チームは、選手４人とスタッフ５人(森本監督と杉本コーチ、石水トレーナー、梶野事務局長と総合管理の稲辺)。今回からチームに加わったトレーナーについては、毎夜遅くまで選手一人一人に対してマッサージで疲労を取るなど、次の試合に向けての体調管理を頑張ってくれ大きな役割を担ってくれたと感じている。また、いろいろな補助金関係の煩雑な手続き等は、事務局が一手に担ってくれたおかげで選手たちは試合に専念することができたのではないか。この選手スタッフメンバー９人は、台北ではどこへ行くにも一緒で、初めから終わりまで、常に行動を共にし、一丸となってチームワークよく頑張ったと思う。

その結果が、２つのメダルとなって実を結び、チームとして胸を張って日本に帰ることができた。

大会では、開会式から北京オリンピック並の盛大さで驚かされたが、閉会式も型破りな食事付きのショーでスタジアムの中での食事には度肝を抜かれた。私は初めての参加だったが、何度も大会に参加している仲間も今回の大会の華やかさには驚いていたようだ。

日本円で2800億円をかけたといわれる台北大会。国を挙げて世界のろう者のために立派な大会を催してくれた台湾には本当に感謝している。新聞やテレビも大きくこの大会を取り上げ、垂れ幕や登りもたくさん用意され、スタジアムの建設やターミ

ナルなど多くの施設もこの大会のために建設されたとのこと。テニスコートも新設だった。

この大会を振り返って、選手達は、自分たちのもてる力を存分に発揮してメダルも取ることができたが、日本選手がここまでの成績で終わったことは自分たち指導者の力不足でもあると感じている。今から次の大会までの４年間をしっかり取り組んで、これから世界のレベルにあった練習を組み立て、選手達の力が十分発揮できるように養成していかなければならないと考える。次回の大会に期待したい。また、デフリンピックとして今大会から国からの補助金をいただけるようになり、選手の費用面での負担が軽減し参加しやすくなったことはありがたいが、今後は、さらに健常者のオリンピック同様にスタッフ全員の渡航助成が得られるよう国に対して要望していきたい。それとともに、メダルを獲得した選手に対しての国からの報奨金も今後是非検討していただきたいと願っている。

スタッフトレーナー　　石水　政之

今回のデフリンピック、小さな国が挙げての大会は、北京オリンピック・パラリンピック同様の大会に勝る規模で、開催してくれたため、私たち聴覚障害者に大きな自信と感動を与えてくれました。

2009年９月２日台北市に現地入りし、９月５日、2009台北デフリンピックが開催しました。

トレーナーとして、初参加・初体験でもあり、緊張感を持ったままでしたが、選手やスタッフ、ボランティアのおかげで、日々少しずつ柔らげてきました。インフルエンザ騒動もある中での、モチベーション・コンディション維持は、大変だった。

選手の中には､初日からコンディションが悪い方もいたので､毎日の試合に影響がないように一生懸命、マッサージ・アイジングなどのケアをしました。連日、朝早くから夜遅くまでの繰り返しは大変でしたが、後半ミックスダブルスで、３位・銅メダル、男子シングルスで、２位・銀メダルを獲得したときは、今までの疲れもぶっ飛び、ホッとしました。

期間中、天気も最終の決勝戦日を除いては、いい天気に恵まれて、台風の心配もなく、そして、選手たちの頑張りもあって、大きな怪我もなく、無事に終わえたことは、本当によかったです。

各国選手が試合ごとに、自主的にウォーミングアップ、クールダウンを行っていたことは､当たり前のことでありながらも､考えさせられる出来事だと思いました。

もう少し、時間に余裕があれば、期間中にもっと他国チームのトレーナー状況や選手の自己管理方法について、自主的に聞けばよかったなと、思いました。この反省を生かして、４年後、トレーナーとして参加する方の課題にしたいと思います。

今回のデフリンピックは、台湾国民全体がオリンピック・パラリンピック同様の大会に盛り上げてくれたことは、本当に感謝いっぱいです。今後は、日本のメディアも同様の記事に扱ってくださることを願いたいです。

選手　　松下　哲也

＜自己評価＞

デフリンピックは３度目出場なので、他国のレベル・プレースタイルに対する対策を基づいて練習してきた事を試合で十分に発揮したので、３種目とも上位に勝ち進んだ結果になったと思います。多数の国際試合の経験を積んでいたので、テニス強豪国のネームバリューに恐れず平常心で試合に臨んだのが大きかったです。

特に混合ダブルスは４年前の悔しさと反省を忘れず練習してきました。メダル獲得が最低限！と強く目標していました。3・４位決定戦は勝たないとメダル獲得できないプレッシャーが非常にあった状況の中でも平常心でインパクトを強くし、質のあるボールを打ち、ポーチなどの積極プレーを心かけた結果、念願のメダルを獲得できました。

僕が日本ろうテニス男子のメダル第１号として歴史に刻んだ事が誇りと思っています。日頃、支えてくれた皆様の有難みを感謝しながら試合に臨んだので、銅メダル獲得など良い成績を残した事に繋がったと強く思っています。

＜反省＞

国内大会は１セットマッチが多いので、３セットマッチでの対策・経験が乏しかった。厳しい気候の中で３セットまでにスタミナ配分を考えながらプレーの内容、セットアップ・セットダウンした後の次のセットに入る時の気持ち切り替えと作戦などが必要で、３セットマッチゲームの経験が大事だと痛感しました。

各国の代表として参加されるのですからテクニックがあるので、ラリーなどでミスを待つプレースタイルは上位に勝ち進む事ができないと改めて思い知られました。

上位に勝ち進む為の必要な能力は最低限のテクニックはもちろんですが、相手の弱点などを探す洞察力とウィナーショットと常に平常心と３つを身に付ける必要があります。

ダブルスは２～５回ぐらいのミスを恐れない積極プレーとショットコースバリエーションを増やす事が大事だと思います。そうするとプレーの幅が広くなり、相手が自分達の出方を掴めなくなるので、ゲームを優位に立てるからです。

その反省を生かして、自分のテニスの質を上げられるように頑張りたいと思います。

選手　　梶下　玲紀

１回戦　SEALY，Joshua（AUS：オーストラリア）
　　６－０／６－０
２回戦　SINCLAIR、Anthony（GBR：イギリス）
　　３－６／６－４／６－０
３回戦　UITERWIJK　WINKEL、Jan、Jaap
　　（NED：オランダ）
　　６－３／６－１
準決勝　TOEDTER、Hans（GER：ドイツ）
　　６－３／６－４
決勝　LAURENT，Mikael（FRA：フランス）
　　２－６／１－６／２－６　銀メダル

ぼくは、今回初めてデフリンピックに出場しました。初めてなのでどんな大会かもわからず、日本代表として戦わなければならないので、心配も緊張もありました。自分ではしっかり落

ち着いてやろうと言い聞かせながら１試合、１試合ずつやっていきました。１戦１戦勝つごとに、心配や緊張もなくなってきて、いつも通り安定してプレーができ、銀メダルを取ることができました。メダルが取れた時、メダルを取ったかどうか分からないくらいでした。今回のことがすごく自信になったので、これからの大会にもつなげて頑張っていきたいです。ダブルスの反省点は、ペアの松下さんと１回戦はしっかり話し合って作戦を決めてやったから勝てたと思いますが、２回戦は、お互いの気持ちがちょっとすれ違いになっていたところを立て直せなかったのがよくなかったと思います。団体生活では、自分勝手な行動や自覚が足りなかったことも、みなさんに迷惑をかけすみませんでした。

ぼくがメダルを取れたのは、日本のみなさんの熱心な応援のおかげだと思っています。応援して下さった団長さんをはじめ、日本から応援に来てくださったみなさん、日本で応援してくださったみなさん、本当にありがとうございました。ぼくがデフリンピックに出るためにサポートをしてくださったろうあ連盟の方々、大会期間中も日本ろう者テニス協会のみなさんに大変お世話になりました。ありがとうございました。表彰式で、銀メダルをいただき、日本の国旗が揚がった時は感動しました。今回、日本の皆さんの応援はすごく、ぼくの力になりました。応援があったから負けそうなときも頑張ることができたし、とても嬉しかったです。

デフリンピックは、ぼくのいい経験になりました。出場させていただいてありがとうございました。

選手　　阿部　八千代

①成績に対する自己評価

・シングルス　４位（二大会連続）

・女子ダブルス　４位

・混合ダブルス　銅メダル（混合として初）

今回は、ママアスリートとしてのチャレンジであり、蒸し暑い中で厳しい戦いになると想定した練習を積み重ねました。スタッフのサポートなどがあったからこそ、スムーズに解決していく雰囲気があり、集中力を高められて良かったと思います。出発前に腰を痛め、さらに試合中に過去に痛めた右肩が再発するという悪条件のコンディションにも関わらず、全て種目においてベスト４に入れたのは、本当に良かった。少し欲を言えば、もう一歩届かなかったのが惜しかったかなと思ってます。

②反省・まとめなど

８年前から三回目の出場で雰囲気には慣れていたが、試合内容で反省点が目立った。

まず、シングルスは、四年前と同様、打てない試合が続いてしまった。今までの練習や試合の中身が甘かったなと感じた。また、相手の弱点を見つけたが、そこを攻めきれず、自滅やチャンスボールを与えて決められてしまうパターンが多かった。

女子ダブルスは、試合前日に対戦する相手の試合戦法を分析しながら、パートナーとお互いに確認したまでは良かった。最初のゲームだけは作戦通りだったが、だんだんミスが増えてくると、コミュニケーションが減り、パートナーに気を使うという悪循環に陥り、自分のプレーに集中出来なかった。やはりパートナーを励まし、信じることで、コンビネーションや試合の流れなどを活かせるのではと思った。

混合ダブルスは、２試合とも不戦勝で上がってきたため、自分側の動きがまだ固く、相手は勝ち上がってきて、モチベーションが良く動いてた。私達にとって、初戦で相手のペースにはまってしまい、ボーチボレーのミスが目立った。女子ダブルス同様で、マイボール精神でパートナーに遠慮せずに打つことが大切だなと。お互いを信頼してプレーすれば、いいプレーや集中が出来たのでは？と思った。その反省を活かしていこうと３位決定戦では、お互いを信じてプレーした結果、コミュニケーションが最後まで続き、最後まで諦めずに集中ができたことが、銅メダル獲得できた要因だと思う。やはりダブルスは、「コミュニケーション」、「信頼」、「コンビネーション」が大事である。それを磨いていけば、いいダブルスが出来ると確信してます。もう一つは、国際試合や一般大会にも沢山の経験が必要だと思う。

総合的に考えると、私としては不十分なコンディションで挑んだ為、精神面では良かったけど、体力面が課題でした。今後は、若い世代が目標を持てるよう、レベルアップやサポートに出来る範囲での支援をしていきたいと思います。

選手　　辻岡　瑞恵

<u>シングルス</u>

９月６日　　１回戦：ギリシャ　３－６　０―６

大きな舞台に立つのは初めての経験であり、最初は緊張して動きが硬くなってしまったため、３ゲームとられてしまいました。でも徐々に落ち着きを取り戻し、ミスをしないように努力しました。相手はプレーに波があることと、ラリーを続けるとミスしてくれることが多かったですので、私はミスをしないように粘ることで、２ゲーム目はストレート勝ちすることが出来ました。

９月７日　２回戦：イギリス　０－６　０－６

相手にバック中心に狙われて、私も負けずに返しましたが、短いボールを出してしまった時に、サイドへ決められてしまうというパターンが多く、それを阻止できるだけの技術力が不足していることを痛感しました。後、決めた球が少なかったので、もっと決め球をたくさん作ることが必要です。

<u>女子ダブルス</u>

９月10日　　台湾　１－６　０－６

台湾の選手は姉妹。姉のほうが安定した技術をもっている。妹は姉ほどではないがボレーを決めることもあり得るので、攻略の作戦としては、ロブをたくさんつなげてチャンスのボールがきたら、スマッシュで決めていくことをパートナーと話しました。その作戦は最初の１ゲーム獲得のときは成功しましたが、２ゲームからは通じなくなりました。作戦の切り替えが出来ないまま　２セット目に入り、ロブをやめて途中から攻撃スタイルに変えたことで、ゲームの流れが変わったが、浮いたボールがきたにも関わらず、決めれなかった。ロブだけでなく、もっと色々な手段を試行しながらゲームしていくべきだったということが反省点です。

９月12日　３・４位決定戦　イタリア　０－６　３－６

選手のうち一人は左利きなので、サーブに回転がかかっていたため、リターンできず、とれたとしてもストレートにあげてしまい、相手の前衛に決められてしまった。

またプレーでつなげていくうちに早いテンポにのれず、ミスを早めてしまった。またボレーに対しては、相手の早いボー

ルに恐れてしまい、強い壁が出来なかった。２ゲーム目からパートナーに前へ前へとアドバイスをもらい、意識して前に詰めることでボレーをいくつか決めることができて３ゲームとれたが、挽回出来なかったことがとても悔やむ。

ミックスダブルス

９月７日　１回戦：　フランス　４－６　４－６

互角の対戦でした。その日はナイターで行われ、比較的暑くはなかった。カメラのフラッシュを浴びながら試合実施。お互いに男性はほとんどサーブでゲーム獲得。女性はサーブとリターンの成功率が勝負の分かれ道だった。　大事なポイントのときにリターンのアドサイド(コート左側サイド)にいた私がミスしてゲームをとられてそこが大きな勝負の別れ道だった。日本ではアドサイドいることが多く、技術的にも通じていたが、世界では通じなかった。それによりアドサイドは自分の不得意・得意関係なしに、経験者と比較的上手い人はアドサイドにいるほうが勝率も違ってくると判断しました。

反省

・ダブルスのリターン場所のアドには、経験者・上手い人がいるべし！
・サーブ強化とフットワーク強化と攻撃力と勇気を持つべし！
・そして、何より経験から学んだ課題を栄養として、次への力へと変換できる「自分造り」を行うべし！！

バレーボール競技男子チーム

選手選考

2005 年 11 月より強化合宿を開始。2006 年２月にＶ１リーグ東京ヴェルディから岩下監督を迎え、2009 年８月までに合計 32 名の候補選手で、24 回の選考・強化合宿を実施した。選手の実力、体調(怪我)、チーム戦術への理解度等を勘案のうえ、2009 年５月合宿をもって、選手 12 名を代表に決定した。

月日	対戦相手 スコア	備考
9/6	ベネズエラ 3(17-25,25-23,22-25,25-19,15-13) 2	
9/8	ロシア 1(23-25,22-25,25-21,18-25)3	
9/9	台湾 3(26-24,25-12,25-11)0	
9/10	ドイツ 3(25-19, 25-18, 25-23)0	
9/11	イラン 1(25-23,22-25,24-26,17-25)3	準々決勝
9/12	トルコ 3(25-20, 25-23, 25-23)0	5-8 位 決定戦
9/13	ベネズエラ 3(25-18, 25-17, 25-15)0	５位決定

成績と評価

監督　岩下　忠正

2009 年９月５日から９月 15 日に行われました、第 21 回夏季デフリンピック大会に全日本男子デフバレーボールチームの監督として参戦して参りました。

監督に就任してから約３年半となりましたが、とにかくこの大会でのメダル獲得というのが最大の目標となっておりましたので、選手、スタッフも非常に高いモチベーションのなかこの大会に臨みました。

日本は予選Ａグループに入りましたが、９月４日のＴＤ会議にて１カ国棄権が発生したため、初戦がドイツからベネズエラに変更となりました。昨年の世界選手権であまり苦労せず勝利しているため、心の隙が出てしまい非常に接戦となりましたが、なんとか３－２で勝利致しました。その後、優勝したロシアには１－３で負けてしまいたが、地元台湾、ドイツを共に３－０で勝利しＡグループ予選２位通過となりました。

当初、予選２位通過となった場合は、Ｂグループの３位と対戦すると聞いておりましたが、急遽方式が変わり、各組２・３位の４チームが抽選を行い、準々決勝の相手が決まると予選リーグ最終日の夜に変更が発表されました。しかし、日本チームには伝わらず、この抽選にも不参加でした。代理抽選の結果、Ｂ組２位イランと試合になりました。

結果は１－３で負けてしまいました。３セット目大幅にリードしておりましたが、途中からサーブカットが乱れ、完全にペースを持っていかれてしまいました。イランとは、いつかは当たる相手でしたので、組合せや試合時間が変わろうとも、これは言い訳になってしまいます。やはり、すべては力不足ということになると思います。

その後、５－８位決定戦ではトルコ、ベネズエラに日本らしいバレーで快勝し見事５位で大会を終えることとなりました。

メダルを目標としてこの大会に臨みましたが、結果としてメダルを獲得できず非常に悔しい思いと、申し訳ない気持ちでいっぱいです。しかし、前回大会よりも順位を２つ上げられたことだけが、唯一の救いかと思います。

チーム体制と各コーチの役割

監督 / 岩下忠正
コーチ / 大川裕二(ビーチバレー兼務)
トレーナー / 金子大
手話通訳 / 大崎紀代美
マネージャー / 山崎藍
マネージャー (ビーチバレー兼務)/ 古徳愛子

競技スケジュール

９月３～４日練習
９月４日　ＴＤ会議、
９月５日　開会式
９月６～ 11 日予選リーグ
　＊ＡＢの２組に分け、各組上位４位までがベスト８に進出

９月 12 日　準々決勝
９月 12 日　準決勝、順位決定戦
９月 13 日　決勝、３位決定戦、順位決定戦

大会競技運営の報告

競技運営については、滞りなく進行され、大きな問題はなかった。

大会運営については、準々決勝組合せでトラブルがあった。ホームページで公表されていた組合せ、ＴＤ会議での配布資料では、Ａ・Ｂ各組の２位と３位が準々決勝で戦うことになっていた。しかし、予選リーグ終了後に各組の２位と３位の４チームが抽選の上、組合せが決まることになった。予選リーグ全日程終了後の夜に、日本選手団事務局に電話で組合せ抽選の呼び出しがあったようだが、結局、連絡がつかずに、日本チームは抽選に参加できず、代理抽選の結果、Ａ組２位の日本は、Ｂ組２位のイランと準々決勝で戦うことになった。Ｂ組３位のポーランドとの対戦を想定し、分析、戦術ミーティングを完了していたが、この変更で、翌日の試合時間が２時間繰り上げとなり、再度、イランの分析と戦術ミーティングを夜間にやり直すことになった。翌日、ICSD バレーボールＴＤに説明を求めたところ、「北京オリンピックと同じやり方で行うことを競技委員長(FIVB)と協議し、予選リーグ終了後に変更を決めた。連絡方法 (電話を用いたこと)、変更決定の遅れは、申し訳ない。」と話があった。オリンピックと同じ組合せということであるが、大会期間中の組合せ変更は、オリンピックでは考えられないことであり、このような変更は大会の信用にかかわるもので、デフリンピックならではの特徴といえるだろう。

競技規則の適用

2009 － 2012　ＦＩＶＢバレーボール競技規則に基づく。

大会参加までの準備

７月上旬に現地視察を行い、体育館までのアクセス、住環境、食事面等をリサーチした。

反省・まとめ

全体総括　監督　岩下　忠正

総括と致しまして、まず準決勝に残った４チームに技術的な部分ではかなり肉薄してるのではないかと思いました。しかし、どうしても体格(身長、パワー)の面では劣ってしまう部分が多々見受けられました。

しかし、それよりもメンタル面での差を大きく感じました。「勝ちたい」という気持ちと「負けてしまったらどうしよう」という気持ちのコントロールがまったくと言っていいほど出来ていません。

相手を格下と判断してしまうと、勝手に気持ちを緩めまったく攻めの姿勢を作れなくなります。そのため、少しでも相手にリードを許すと、すぐ「負けてしまうのではないか」という気持ちになり、さらに守り、またミスを恐れる怖さから、硬くなりさらに傷口を広げてしまうパターンが多々ありました。

逆に調子に乗ると手がつけられなくなりますが、どこかで気が緩みすぐに追いつかれてしまうパターンも多々ありました。ベスト４に残るためにはまずメンタル面の強化が必要だと思います。

しかし、日本の守備については非常に高いレベルにあり、ディグ、レセプションの部門では、ダントツの１位の成績を残しており、この部分では世界とも充分互角に戦えるということもわかりました。

常に攻める気持ち、また正確なレシーブからの攻撃がどれだけ精度の高いものになるかによって今後の日本チームの成績が大きく変動すると思われる。

また、最後になりますが、多くの方々に応援、ご協力頂き、誠にありがとうございました。

GM　大川　裕二

派遣人材と予算、補助金と競技団体負担、ソロバンを弾きながらのマネジメントはさながら零細中小企業のオーナーのようであった。

本職を持つ、任意団体のマネジメント担当役員の活動時間は限られている。かつ、聴覚障害がある役員と健聴者の関係者等とのセールスやマネジメントのやり取りはメールに限定されてしまい、休日に一日中メールを打たざるを得ないこともあった。一方では、現場スタッフ、選手、選手所属、スポンサー、上部団体等の多方面に渡る資金や登録にかかるやり取りや、時にはトライアウト告知や自己負担、現金授受の生々しい説明に追われた。

バレーボールを愛する役員ではあるが、プレーには殆どかかわらず、ボールを触ることも無く、現場や上部団体との軋轢解消のためのマネジメントやデスクワークに追われ、ボランティアで活動するという大変ハードな業務であるが、これを正当に評価するものは殆どいない。また、職場等への休暇申請は、役員では理解されにくい面があった。

デフバレーには、候補選手はいる、指導者は確保できる、しかしながら、マネジメントを担う役員が不足しており、マネジメント役員の環境、業務内容、報酬等を見直していかなければならない。同時にマネジメント担当役員の育成が急務であると考える。

障害者スポーツ＝ボランティア役員という概念を破壊し、新しい役員のスタイルを確立していなければ、４年サイクルでのスクラップ＆ビルドが繰り返されることになり、デフバレーボールの継承と継続的な発展は厳しいものになる。

役員レポート

トレーナー　金子　大

１．はじめに

今回デフリンピックに初めて参加させて頂き、関係者の方々、現地ボランティアの方々、全ての方々に感謝申し上げたい。

今まで感じた事などまとめていく。

２．合宿時のレポート

合宿は主に都内で行われ、関西在住の選手には大きな負担をかけたと思うが、毎回の合宿ではそれなりの課題と改善点が浮き彫りになっていたと感じる。

合宿は１ヶ月に一回のペースで行われ、毎回の合宿では課題がそれぞれ見つかり、良い合宿であったと思う。しかし、その課題が解決する前に、合宿が解散となってしまう事もあった。それがどうして解決出来なかったかは私にもわからない。あくまでバレーボールの技術や、チームでの約束事の達成感が不足

していたという意味である。

私の担当の部分である、体に関わる面においても反省しなければいけない事も多い。

・手話の能力の向上の努力が不足していた。
・選手の要望や、監督の要望、スタッフの要望を適切にくんでいなかった。
・選手、スタッフに対する適切な情報提示、共有がふそくしていた。
・判断や要望が遅いことが多くあった。

７月の合宿では、基礎練習やチーム練習、高校生との練習試合も行われた。ここで問題となったのはチームでの一体感に欠けていたところだと思う。選手同士の言い合いやケガなどもあったが、ここで様々な悪い事を出し切れた事は良かったと考えている。

８月の合宿では、チームとしてのまとまりが今までの合宿の中で一番良かったと思う。それは、デフリンピックまで１ヶ月を切っていたという事もあると思うが、選手ひとりひとりが強い気持ちを持っていたからだと思う。今までで一番良い練習だった。

合宿での問題点は、チーム練習を実施しようと思っていても、ケガやチームの約束事の理解が不足していることである。健聴者でも難しいことであるが、特に気になった事である。

３．台北デフリンピックにて感じた事

台北に出発するにあたり、先ず私の準備不足、連絡不足があった事をお詫びしたい。

後手後手に回っていたこと、要望されなければ気づかず仕事をしていなかった事も多々あり、深くお詫び申し上げます。

現地に持っていくものなどは、メールでのやり取りで行い、不足したものなどはほとんどなかったが、現地で体重計を買った事は今後の課題として、物品の充実という事が上げられると思う。テーピング等は十分に用意して頂いた事は深く感謝しています。

現地で一番困ったのは食事の対応とインフルエンザの対応である。食事の対応としては、私としてはほとんど食べて問題ないと感じたが、スタッフミーティングにて不足の事体に備えて、外食の際には熱が通っていないものについては原則禁止とした。

しかしながら、その都度基準が変わり選手やスタッフに迷惑をかけた事は、お詫びしたい。その他にも、選手によっての嗜好、食べる速度などによって、しっかりと食事を出来ない選手が、少数みられたのは残念である。しっかりと食事を出来ていない選手という言葉は、漠然としているが要するに、量とバランスの両方を満たしていないという事である。また運動後だから食べられないというのは、当たり前のことで理由にはならない。やはりそれらは、育ってきた環境や、合宿時の選手に対する教育が不足していたことがあると考えている。しかし、多くは育ってきた環境が大きな影響を与えていると考える。

現地では試合スケジュールの変更や、バスの時間変更など度重なるスケジュールの変更があったが、これも世界大会として考えれば問題になる事ではない。いかに対応するかがポイントとなる。

日本選手団の一員として、疑問に感じた点が多々あったので、下に記す。

・日本選手団として、メダルを 40 個獲得するという目標を掲げたはずなのに、それを達成しようとする意志が感じられない。
・まず、理解に苦しむ式典参加の強制が多すぎる。
・メダルを取る為にきているはずなのに、柔軟に時間調整をしてくれない。
・選手団本部のスタッフは仕事で来ているのであれば、もっと質の高い仕事をすべき。（メディカルスタッフは大変丁寧に対応して頂いた事は、感謝しています。）
・伝達連絡方法に問題が多すぎる。（連絡ミスがないように、複数の方法の用意を。）
・選手団として、選手教育をもっとすべき。（特に今回インフルエンザが出たサッカーチームなど。）
・メダル、メダルとすることは、子どもでもできる。具体案、補助金の提示を。
・世界大会に参加しているのに、前回の教訓が生かされていない。
・選手に大きな金額負担をかけている事をどう考えているのか？
・スポンサーを探す努力は行ったのか？（行っているが、協賛社が少ない）
・個人個人で選手はスポンサーを探している事に、何の問題も感じないのか？
・夜の選手団本部会議の時間が長過ぎて、相談や連絡が出来ない。何故そんなに長いのか？

４．聴覚障害者における先天的な問題とその課題

デフバレーボール選手に求められる能力は、一般のバレーボール選手と変わらない。求められる能力のレベルとしては、大学男子選手程度の能力と考えてよいと思う。

ご存知だとは思うが、改善しなければいけないポイントを以下挙げる。

・前後左右方向の切り返し能力
・上半身、特にパスを遠くに飛ばす力が重要

この二つが今後の課題として残る。

一つ目として、前後左右の方向の切り返し能力は健聴者選手でも問題となるポイントではあるが、ボールの落下地点に入る速度も遅い、予知する速度も遅いと感じる。また、ワンプレーが終了してから、次のプレーに入るまでにも時間がかかる。これらは全て、全方向の切り返し能力の低さにあると思う。ブロックにおいても、その場でまっすぐ飛ぶ能力にもつながって来ると思う。

二つ目として、上半身特に腕の力でボールを遠くに飛ばす能力に欠けている。これは、腕の力が弱いという事である。基礎スキルの習得が、未熟であるという事もあるが、基礎スキルというよりもこの場面においては体力の要素が大きいと感じる。トレーニング経験が浅いなどの様々な要因があると思うが、あくまで体力はプレーを行う上での基礎であって、それ以上でも以下でもない。という事は、体力が向上したとしても、やはりバレーボールに対する深い理解、戦術に対応する能力、技術の研鑽がなければ、体力を向上させたとしてもトレーニング効果として考えると問題がある。

あくまで、体力は土台であって、やはり技術を磨かなくてはトレーニングもやっている意味がない。技術が未熟な事を、トレーニングで補う事は不可能に近い。やはり、何度も述べるが、まずは、バレーボールに深い理解があって、そこから、体が出来上がり、技術が向上し、それに伴って精神が成長して素晴らしいプレーが生まれる。それに尽きる。

５．2013 に向けて強化すべき身体的ポイントと具体例

まずは、基礎体力の向上である。トレーナーが、毎月代表選手に対して自宅で出来るようなメニューをメールにて送信する。またそれを補うものとして、３ヶ月に一度代表選手や強化候補選手に対して体力向上合宿を行い、メニューの理解度を向上させられれば望ましいと考える。強化候補選手というのは、日本全国をブロックごとにわけて各ブロック二人程度選出し強化合宿終了後に、地元のチームにて普及に努めてもらえるように務める事を義務とし、レポートの提出が望ましい。合宿参加時には、体力測定を行い、変化を見極めたい。それらを数値化して、全日本選手選出基準になればさらに良いと考える。

技術の習得も困難を極めるが、体力の獲得もさらに難しい。しかしこれらは、長期的な計画によって、必ず獲得できる。それは間違いない。この計画が実施出来るように、ろうあ連盟の方々にも協力をお願いしたい。

６．最後に

多くの方々の協力がなければ、問題なく大会を終了することは出来なかった。デフスポーツの発展と更なる認知度の向上を心より願っています。本当にありがとうございました。

手話通訳　　大崎　紀代美

私はバレーボール男子チームの競技スタッフとして９月２日から競技終了の翌日の９月 14 日まで、台湾・台北市にてその任務を遂行した。競技結果は５位、残念ながらメダルには及ばずという成績で終わったが、選手達が世界の強豪を相手に確かな手ごたえを感じることができたことは身近にいたものとして確信できた。次大会にむけ、日本デフバレーボール協会には更なる強化に務められることを期待するとともに、財団法人日本障害者スポーツ協会、財団法人全日本ろうあ連盟、デフリンピック派遣委員会には今日までの感謝を表した上、今後のデフリンピックの普及、資金獲得に対してより一層のご尽力を賜るよう冒頭にお願いしたい。

さて、男子バレーボールチームは初の健聴者監督を迎え、３年半前に今大会にむけチーム結成、その所以からチーム専属の手話通訳者が必要となり、以降、その任を務めてきた。２～３ヶ月のペースで合宿を行い、強化を進める中、多くの健聴者とより関わり、レベルアップを図るために不可欠とされるものが「手話通訳」であった。聴覚障がい者のチームではあるけれど、言語的文化的にはＤｅａｆばかりではないチーム、ともすれば選手同士でも伝わらない摩擦がおきる、もちろん健聴者である手話通訳者にも伝えるという大きな壁が立ちはだかり、監督、他スタッフ、選手達の協力のもと、試行錯誤しながらコミュニケーションを構築してきた年月であった。また「１人現場」であることから健康の維持にも陰ながら努めてきた。

台北大会期間中はその集大成として、チームの手話通訳者の主務を果たしつつ、また一スタッフとしても寸暇を惜しみ務めたつもりではあったが、何分、課題も多かった。以下３点を特筆する。第一にはやはり語学や国際手話が堪能でないことに自らもその不足を痛感し、今後は国際大会を見据えてのチームスタッフ編成も肝要かと感じた。そんな中、昨年、アルゼンチンで開催された第一回デフバレーボール世界選手権に出場した経験は、選手のみならず通訳者にも大きな成果をもたらしていた事を付け加えておきたい。聞こえない選手たちが健聴者と共に、団体競技という壁を乗り越えメダルを手中にするためには、より高度な手話通訳が不可欠である、その対応、養成も迫られている。通訳者の身分保障などの環境改善も必須であると考える。第二には競技団体と日本選手団本部、大会本部、またはそれに属するボランティア組織、宿泊･輸送担当などとの各関係団体の横のつながりや役割分担、指示系統もわかりにくかった。私が初参加だったからと言う理由も否めないのかもしれないが、結団式の際に説明して頂くか、より詳細なマニュアルを配布するなどの周知があったほうが、競技団体、強いては選手の負担が軽減されるものと思う。第三には公費スタッフという立場がよくわからず、負担金がありながらも日当が支給されることや日本選手団本部スタッフとの処遇の格差の改善を望む。

任を終えた今、あらためて思うことは、デフリンピックは夢を育むというテーマをより真実のものにするためも勝つことが必要と思われる。スポーツは勝利するから楽しい、楽しいから夢がもてるのではないか。日本選手団長が当初掲げたメダル獲得数には到底及ばなかったその事実を受け止め、選手達が安心して強化に励める予算や人材、サポート面等の改善を早急にしなければならないと考える。

選手レポート

選手　信田　光宣

デフリンピックに出場して４回目のこの大会で「メダル獲得‼」と目指し、 月一回のペースで強化合宿を行った。精神・技術・体力を細かく分析しながら、 繰り返し練習を行っていた。チームワーク「和」も良く、本戦で十分に戦えるチームでメダルが取れるチームでした。本番は、緊張し過ぎている訳でもなく積極的にアタックして、自分のベスト以上に成果を発揮することができました。

結果は５位入賞で終りました。メダルを取れなかったのは、すごく悔しさが残ります。しかし、世界レベルは４年前よりも上がっていると感じたけれど、日本は世界のレベルに近くなっていると感じました。

最後に、今まで支えてくださった、監督・スタッフ、日本から応援して下さった方々への感謝の気持ちを忘れずに、また練習に励んでいきたい。本当にありがとうございました。

選手　瀬井　達也

９月に開催された台北デフリンピックは自分にとって初参加となった。初参加とはいえ、一年前のデフ世界選手権にも出場していたこともあり、初という緊張はほとんどなかった。

大会では、大会前の練習時に足をケガしてしまうというトラブルに襲われたが、予選リーグ２位通過とし、最終的には前回の大会の７位から二つ順位を上げて５位になれたことはこれまでの合宿で培ってきたものが本大会で活かされたのではないかと思っている。

唯一、課題とすべきものは準々決勝で当たったイラン戦で勝てる試合を落としてしまったことである。その原因は勝ちたい、負けたくないという気持ちでイランに負けていたと思っている。

技術的としてはロシアやウクライナなど上位チームとはあまり差がないと感じている。すなわち、日本と、世界の違いはメンタル面であり、勝ちたいという気持ちと、どのチームと当

たってもいつものプレーが出来るという平常心が非常に重要なことと改めて実感させられた。次回のデフリンピックに向けて、メダルを獲得するために必要なことを選手みんなに伝え、意思疎通を図るよう実施していきたい。その結果がさらに良い成績につながれると信じている。

選手　若原　正享

メダルには及ばなかったが、世界５位という記録がこのチームでの実力だと素直に感じた。

勝てる試合もあったが勝てなかった。それは前回の合宿でも経験しているし、初めて経験することではない。

誰が悪いとかもっとこうすれば良かったという反省点は細かいところまで突き進めればたくさんあるが、チームとして不利な状況に立たされたときにみんながカバーできる修正力が劣っていたと感じている。

けれども、一番の敗因は苦しい展開のときにチーム一丸となって相手と戦うことができなかったこと。そういった点ではメダル圏内に自力で入り込められなかったのではないかとも感じた。

４年に１度の舞台という誰もが緊張するステージで、それぞれ個々が存分に力を発揮し、堂々と戦えるという状況にもっていけなかったのは主将としての責任を感じている。

世界規模の大会の経験不足だったと言ってしまえばそこで終わりであるが、プレッシャーをプラス思考に捉えて取り組む姿勢が他の国と比べて日本は劣っていたとも感じた。勝負どころで苦しい展開になれば最終的にはチーム力で勝敗が決するということは、頭の中のイメージとしてあったので、この３年半はチームをまとめる (意思疎通強化) ことに注力をかけて取り組んだ。これについてはやり方は間違いはないと自負している。

個人的に主将としてあるいは選手として至らないところや反省すべき点はあったかと思うが、やれることはやったと言える。プロのバレー経験者を監督として発起し、これまでのやり方を刷新したことについては大いに評価できる。

今後の課題としては、大会に挑む意識レベル（メンタル強化）を高める必要がある。スタートラインで世界各国のハングリー精神のようなものに堂々と立ち向かえること、あるいは、世界を相手に怯むことなく、我々のバレーが当たり前にできる準備が求められると感じている。

選手　猪野　康隆

初戦のドイツ戦に勝つことがまず大事だと思いつつ、決戦の地に向かった。

組み合わせに変更があったためベネズエラと初戦になり、実際ふたを開けてみれば苦戦を強いられた。今までデフリンピックに参加してどうしても初戦だけは波に乗れない。緊張感ＭＡＸなのか、体育館の雰囲気や周りの雰囲気に慣れてないのか、今後初戦に打ち勝つ方法を探らないといけない。

決勝トーナメントでイラン戦に負けた敗因は、トーナメント戦の気合の入り方が予選とは違っていて、ボールに対する執念さで勝敗が決まっていた。トーナメントでの戦い方を工夫する必要がある。

５～８位決定戦の残りの試合に勝つためには最低でも５位入賞がみんなの恩返しと気を引き締めて戦った結果が勝利に結びついた。

今後の課題については、初戦に打ち勝つためには、日常生活に危機感をもっと持つこと。勝つことが前提だが、25 点の取り方より、目先の１点、そしてテクニカルタイムまでの８点、16 点、そして終盤の 25 点へと順番に点を取っていくプレーを心がければ波に乗れるのではないか。

決勝トーナメント戦については執念、根性、精神、どれも大事だが、心技体の３つの大きさとバランスを取らないといけない。心が大きい選手はチームを支えることができて気持ちを立て直せること、技術のある選手はゲームを引率し勝利に導く、体力のある選手は今以上に動いて選手の負担を軽くすることで３つの大きさが大きくなるほどメダルに近づくのではないか。

選手　高橋　竜一

今回初めて「デフリンピック」に参加させていただきました。

結果は５位となり、目標の金メダルには手が届きませんでした。

メダルは決して遠くなかったので、それを取り逃がしてしまいとても悔しい気持ちで一杯です。

メダルを取る為には、強豪チームと同じ力では無く、強豪チームを圧倒的に上回る力が無いと勝てないと痛感しました。

しかし、「デフリンピックで金メダルを取る」という目標に向かって行く毎日はとても楽しかったです。

練習自体は、とてもハードですが、明確な目標があれば自然と頑張る事ができました。

本番のステージでも立派な体育館でプレーをしていて本当に気持ち良かったです。退屈な毎日が目標を持つ事によって、景色が 180 度変わりました。

改めて目標を持つ大切さに気付かされました。

これからも「目標」を持ち自分の信じた道を突き進んで行きたいです。

最後に、応援してくださった皆様本当にありがとうございます。

バレーをやらせてもらい最高に楽しい日々をすごしています。

これからは応援してくれる皆様にも楽しさが伝わるように日々努力していきます。

選手　乾　文雄

初戦ベネズエラと戦った時は物凄いプレッシャーにかかってしまいました。

メルボルン大会と同じ意味もあるし初戦は勝ったけどやっぱり自分が情けないです。

台北も同じくスタートが悪いんで自分自身が苛々してたことが原因でコミュニケーションがなかなか取れなくなったんです。

ホテルに帰ってからもう一回皆と話をして次の試合では同じ試合にはなりたくないし、今までの合宿でやってきた成果が出て来たらいいなぁと思ってました。

ロシア、ドイツ、調子を取り戻したんです。

トーナメントに入ってイランとあたりメルボルン大会のリベンジで倒したい気持ちが強かったけどやっぱり気持ちに負け

ました。それで悔しい気持ちになって又、コミュニケーションが取れなくなった事を反省してます。最終はベンチにいましたけどチームはよかったと思いました。

選手　田中　利典

バレーの技術は世界でも通用できる位置にある。それは個人としての考え方。

勝負する気持ち。つまり一発勝負でもある。戦いはコートの中のみ。もちろん私たちのチームは常に高い気持ちを持ってコートに入った。気持ちの中では、私たちは負けてない。その結果、２点差で負けたというセットが一杯あった。１点の重みを味わった結果となったのだ…。

でも、良い面は、監督の話が全てにおいて非常に素晴らしい。

監督の考えるバレーは間違いなくメダルは取れる !!! と今でも思うと…。

でも後戻りはできない。結果は結果。

これがバレーボール。バレーは奥が深いスポーツなんだ。

最高なパフォーマンスを発揮するという気持ちは、個人のアファメーションでもあり、全力を出し切ったという達成感はあった。しかし、チームの面では、感情が入ったのか、良いときもあれば、悪いときもあった。気持ちの荒い面がそれぞれあったかなと感じた。

もちろん私にもあったかもしれない。（それはスタッフ、選手から見ての話）

それをうまくフォローする能力が私はまだ未熟だということを実感した。

なんでかというと、バレーは何が起こるかわからないからだ。

選手　平田　智也

２回目のデフリンピック。１回目と違って、今回の代表メンバーは、健常者のプロの指導の元で編成されたチーム。前回よりは確実に強い代表メンバー。メダルが獲れるだけのチームとなっていると思う。だから、メダルを獲って日本に帰りたいと思って臨んだデフリンピック。

結果は、５位という形だったが、前大会の７位から５位へと飛躍し、また、世界一になったロシアとは予選リーグで、接線だった事もあり、確実に世界との差が無くなってた事は感じた。それだけにメダルが取れなかったのは悔やまれる。でも、結果が全て。後１歩が足りなかったと受け止めた。それでも、前大会と比較し、チームとしての一体感は凄く感じられたし、１人１人が役割を果たし、１人１人がベストプレーをした。

個人的に、セッターとして、大会前まではずっとチーム貢献するプレーが全く出来なかったが、最後の合宿から急に良くなり、大会では、チームが負けてる時に交代で出て、チームの流れを変え、勝ちに結びつける事が出来た。また、アタッカーが少しでも楽して打てるように、トスワークも色々考慮し、相手のブロックを外したトスも色々と出せた。

最終的に、個人成績のセッター部門で、ランキング１位になってしまった。自分でも凄く信じられなかった。でも、このランキングは、レセプションで綺麗なボールを上げてくれたメンバー、スパイクを打って決めてくれたメンバー、自分の様子を色々と見てくれた控えメンバー、自分がプレーに集中出来るように裏方を色々やってくれたスタッフ、色々な指導をしてくれた監督らのおかげで取れた。だからこの１位は、みんなで獲った１位。

この１位は、自分のバレー人生の中できっと生涯忘れられる事の無い思い出となった。みんなで協力しあって結果を出す事がとても嬉しく楽しかった。本当にここまでやってこれた事は、色々な人々の支え・協力があった。本当に、感謝の気持ちでいっぱい。

次のデフリンピックに出る事は現段階では考えてはいないが、今回の得た大きな財産は、少しでも多くの人に分け与えたい。また、今回のデフリンピックは、国がバックアップという事もあって、スケールの大きな大会だった。この感動・思い出も、多くの人に分け与えたい。

自分にとって、今回のデフリンピックは、『感謝』という事を凄く学んだ大会だった。

選手　中村俊雄

やっとその日が来ました。

前回の合宿で負傷した親指がまだ完治しなかったので不安でしたが医師に相談してテーピングで固定すれば大丈夫と言われ安心しました。

台北に着いて１番びっくりしたことは、デフリンピックに力を入れてることだった。

今までのデフリンピックのことを先輩達からいろいろ話を聞いていたので期待はしてませんでした。

会場、体育館などどれも立派な施設だったので気持ち良く戦えるなぁと思いました。

僕は台北デフリンピックに出てよかったです。

１回戦のベネズエラ戦、負けそうでしたがなんとか粘って勝てたことがほんとうによかったです。

２回戦のロシア戦は負けましたが本当に熱戦でしたので悔いはありませんでした。

３、４回戦勝ってＡリーグ２位をとれたときメダルまで本当に近い！と思いました。

トーナメントでイランにあたり、勝てる相手だったのだけれども流れに飲み込まれ負けました。

その時にメダルの夢が壊れ、本当に悔しかったです。

この試合で学んだことは試合中、なにがあるかわからない。だから試合はおもしろい でした。

台北デフリンピックに参加できたことが本当にいい経験、思い出ができました。

選手　中野智久

今回の結果について、勝負というのは本当に分らないものだなと実感した。昨年の世界選手権では３位と好成績を収めることができたが、台北は５位。どうして？と考えても答えは出ないが、ただ一つだけ分かっていることは、日本の力は５位であるということ。だが、各部門の順位を見てみるとディフェンス部門やレセプション部門がトップであり、レシーブ力については、誇りに思える結果であった。しかし世界のトップと戦うには、攻撃力またはメンタル力が不足していた結果から５位だったのではないかと思う。それに、チームのアファメーションである「サーブで崩して、ブロックで仕留める」が発揮できなかったことも、そういう結果になった原因ではないかと。

さて私は、候補選手に選ばれて本番まで２年間という期間であったが、夢物語でしかなかった日本代表という立場を、こんな形で頂ける。そして、デフバレーボールを知り、自分のやりたい事が発見できた。

まず、このチームの出会いは、試合相手として参加したからであった。そこでチームへの誘いがあり、参加することになった。最初は、なかなかチームに溶け込むことができにくかった。声が通じない状況でどうバレーをするのか、どまどいがあった。でも、最終メンバーに残って台北で戦うとなれば話は別やと思い、今までやってきた経験・考えを惜しまず出して共有を図った。強化合宿中も試行錯誤し、時には考え過ぎてプレー自体がうまくいかない時もあった。仲間やスタッフを悩ませることが多くあったが、最後まで信じてくれた仲間に感謝です。チームの勝利は残念だったが、自分の目標でもあった、『世界 No.1 レシーバー』を達成した事は素直に嬉しい。そして、自分の育てた選手をデフリンピックのセンターコートに立たせる夢に向かって、再びチャレンジしていきたい。

最後に、この競技の出会いのきっかけをくれた静岡県の朝比奈さんに心から感謝致します。

選手　今井勇太

今回のデフリンピックは私にとって初めての世界大会でした。

デフリンピック初出場での第一印象はとにかく規模が大きくてびっくりしました。当たり前のことですが。私は男子バレーボール選手として出場し、結果はメダル獲得ならずの５位でした。

その５位は私にしたらこれが日本チームの今までの成果だと思います。ですが、今回の結果をバネにしてこれからの日本チームは強くなっていきアテネデフリンピックでメダル獲得すると信じています。５位という結果になってしまった要因を私なりに分析しますと１番大きな要因はメンタル面ではないかと思います。

そのメンタル面の大切さを痛感したきっかけは日本チームがＢリーグ２位通過が決まり、本来ならＡリーグ３位と対決のはずが突然変更でＡリーグ２位のイランと対決となりました。

この対決に勝てば何十年ぶりのベスト４進出となるプレッシャーのかかる対決。

その対決では日本チームは落とせるセットが終いには取られるケースがありました。

イラン戦だけではなく他の国との対決にもありました。プレッシャーに打ち勝たなければならない所で日本チームはそこに勝てずこういった結果になったのではないかと思います。

紙一重で勝敗が決まるような試合でも勝てるようなチームにならないといつまでたっても勝てない。外国チームのチーム力・メンタル力はすごく強いと感じました。そのチーム力が日本チームはちょっと足りなかった部分はあったと思います。日本チーム全員の心が１つにまとまらないまま戦いに臨んでたのも敗因の１つかもしれません。もし心が１つになって試合に臨めばメダル取れたと思います。

この大会の試合の出番は私はそんなに多くなかった。しかし、ベンチ側に居てみないと分からなかった事を分かる事ができたのは大きな収穫で私なりに良い経験になりました。

それはコート全体の動きが見え、こういう場面ではどうすれば点取れる、日本チーム以外のチームの攻守の動きや戦略、特徴など分かる事ができました。

この分かった事を次のアテネに向けての課題として国内で話し合い、解決した上で試合に臨みたいです。７・８月の強化合宿では戦略の確認、チーム全員の心を１つにするといったような事を中心に進めてきました。

最後の合宿は良い締めくくりで終われました。

しかし、本番では合宿での成果が 100％出てない時がいくつかありました。

そこら辺はコミュニケーション不足すなわち意思の疎通が足りなかったのではないかと感じました。合宿では万全な状態で終われたと思っていたが足りなかったのが実態。

アテネに向けての合宿ではそのような事がないようにしっかりと話し合い本当に万全な状態で試合臨みたいです。最後になりますが台北デフリンピックは私にとってかけがえのない思い出となりました。

選手　西村　浩一

自分にとって３回目となるデフリンピック参加である。年齢的な事もありこの大会でデフ日本代表としてやるのは最後にしようと決めた。

前回は６位、前々回は７位と台北大会はメダルを取りに行く為に、練習や筋トレを頑張ってきた。

監督の方針により自分はピンチサーバーとしての出番が多く、どうしたらサービスエースが取れるか？相手の６ローテを自分なりに分析して弱い所を攻めた。

チームとしては準々決勝にてイランに敗れてしまい、メダルは絶望となったが、残り試合を全て勝ち、５位を取ろうと気持ちを切り替え、トルコ、ベネズエラに勝ち、５位となった。

応援して下さった会社、友人、家族には感謝の気持ちで一杯です。どうもありがとうございました。

バレーボール競技女子チーム

９月６日（対イタリア戦）３－０で勝ち
９月７日（対ウクライナ戦）０－３で負け
９月８日（対ロシア戦）３－０で勝ち
９月９日（対アメリカ戦）３－１で勝ち
９月10日（対アルゼンチン戦）３－０で勝ち
９月11日（対ベラルーシ戦）３－０で勝ち
９月12日（対アメリカ戦）１－３で負け
９月13日（対ベラルーシ戦）３－０で勝ち

監督　　吉田　浩司

１）選手の選考について

選手の選考は、2005 年 10 月の第１次選考合宿から始まり、2005 年 12 月に第２次選考合宿でリベロ候補を半数以下に絞りこみ、翌 2006 年８月最終選考合宿で、10 人のみを合格とした。当初は 15 人を残そうと考えていたが、私自身の代表としての最低ラインに満たない者を残しても世界と戦うことはできないと判断した結果である。その後、各地大会の様子を視察する中で、力をつけてきた選手に関しては、候補選手として、

代表の強化合宿に呼び、選考を行い、追加で６名を代表に加えた。２名が辞退、２名がケガで離脱で、最終的に 12 名でチームを構成することとなった。選考の基準として、世界と戦うことを意識し、ブロック力やレシーブ力といった技術、また精神力はもちろんのこと､スピードのある選手を求めた。その結果、パワーがあっても動きや判断が遅い選手は、代表の枠から漏れていった。

２）成績一覧

１位　ウクライナ
２位　アメリカ
３位　日本
４位　ベラルーシ
５位　ロシア
６位　イタリア
７位　アルゼンチン

３）成績とその評価

決勝に進めなかったのは悔しいが、第３位という結果については、次の代表チームのためには最低限の成績は残せたのではないかと思う。世界の舞台という大きなプレッシャーのかかる中、選手たちは自分たちのプレーを発揮して、世界の大きな選手たちによく立ち向かった。大会参加チームは、どこも 180cm クラスの選手が５～６人は揃っている。そんなチームを相手に、ほとんど 160cm 台の日本チームがセミファイナルまで勝ち進んだことを考えれば、よく戦ったと思う。スキル別のランキングを見ても、ブロック部門では７チーム中６位とやはり高さ的に不利な結果が出ているが、サーブ、サーブカット、スパイクレシーブでは１位。また個人ランキングでもサーブ部門では上位 10 人中３名が、スパイクレシーブ部門では上位 10 人中４名が日本選手である。更に、全体のベストスコアラーとベストリベロも日本の選手である。これらの数字からも日本らしいバレーを展開できていたことがわかる。

４）チーム(コーチ)体制と各コーチの役割

このチームのスタート時に依頼していたコーチが仕事上の都合で辞めることになり、2007 年の夏以降、現在のコーチに引き継いでもらった。いつも私の意向を尊重してくれるし、今、チームが何をすべきなのかをよくわかっていてくれるので、大変頼りになる存在であった。もう１名の女性コーチも、自身が元代表選手でゴールド・メダリストでもあり、世界と戦うには何が必要で、今のチームには何が足りないのかを常に考えてくれた。また選手たちのメンタリティな面をよくケアしてくれるので大変ありがたい存在であった。また、現在のトレーナーがチームに付いてくれてからは、ケガのために練習に参加できないということが明らかに少なくなった。ケガ人のケアはもとより、日頃の体調管理や試合に臨むにあたっての細かなコンディション作り、トレーニング方法のアドバイス等、代表選手の心得というか、代表選手としてあるべき姿を明示してくれた感じがする。明らかに選手の意識が変わったし、チームを預かっている私としても大変やりやすくなったのを実感している。コーチもトレーナーもチームにはなくてはならない存在であった。

５)競技スケジュール(旅行スケジュール)

９月２日(水)出国・出発式後成田発・ＩＤ作成
９月３日(木)結団式
９月４日(金)練習 (新荘体育館)・ＴＤ会議
９月５日(土)練習 (南湖高中学校)・開会式
９月６日(日)リーグ戦①
９月７日(月)リーグ戦②
９月８日(火)リーグ戦③
９月９日(水)リーグ戦④
９月10日(木)リーグ戦⑤
９月11日(金)リーグ戦⑥
９月12日(土)準決勝
９月13日(日)３位決定戦
９月14日(月)ＯＦＦ
９月15日(火)代表者会議・監督会議・解団式・閉会式
９月16日(水)帰国

６）大会の競技運営などの報告

審判団に関しては、ハンドリング基準等、国によって多少違うというのを感じたが、１つ１つのゲームの中ではきちんと統一されたレフェリングだったと思う。ラインジャッジも国際審判の有資格者４名体制であり、とてもしっかり見てくれていた。また、ボールレトリバーや記録もよくやってくれていた。全体的に見ても、チームスタッフ、ボランティア(現地通訳)が１つ１つきちんと対応してくれたおかげで、チームとして困ることなく試合に集中できた。

７）競技規則の適用(問題点など)

まず、１番大きな問題は、組み合わせや試合日程が変更になったことをＴＤ会議の場になるまで一切知らされないことである。どの国もインターネットで知らされている情報を元に準備を進めてきている。それなのにいざ明日から競技が始まるという時点になって、「スケジュールが変わりました。１日に２試合戦うチームもあります」と言われても当該のチームは困惑してしまう。たまたま日本は大きな影響はなかったが、初日にいきなり２試合になったイタリアチームが反対するのは当然といえる。２つ目は、やはりこのＴＤ会議の場でベンチ入りの人数が変更されたことである。14 名ベンチ入りできると発表されていたのにここにきていきなり 12 名までと変更になったことである。その後ウクライナやアメリカ等数カ国からの抗議で 14 名が認められたようだが、チームを預かる監督にとってもここまで来てベンチから外される選手にとってもたまったものではない。今年に入ってから発表されたこのベンチ入り 14 名という規則変更に関し、日本選手団(派遣委員会)のご高配をいただき、我々日本チームも最善の布陣で臨んだだけにこの変更を聞いたときは驚いた。３つ目は、メルボルン大会で全監督が指摘されたことを確認したのだが、試合に出場しない選手はメダルを受け取れないというルールがこの大会にはあるということだ。全員に試合出場の機会を与えるという意図なのか、どういう意図なのかよくわからないが、それぞれのチーム事情があるだろうから、そこまで強制するのはいかがなものかと思う。それよりも (予算的な問題は別にして) 一般の国際大会で行われているように、登録メンバーを 18 名に広げ、試合ごとにベンチ入りメンバー 14 名を申請していく形に変えてもらった方が、試合出場の機会を多くの選手に与えられるし、そのことがその後のデフバレー発展の一助になるのではないかと思う。

８）大会参加までの準備状況

2006 年８月の最終選考合宿以降、第８回アジア太平洋ろう者競技大会に向け５回の強化合宿を行った。実際にはアジア大会はバレーボール競技の関しては行われないだろうという見通

しと、世界大会まではまだ時間があるという考えからか、なかなか選手の技術・意識が向上してこない時期だった。当初はこの時点(2007年7月)で、一度チームを解散して、再度選考合宿を行う予定であったが、選考合宿を行ったところで、構成メンバーに変化はないだろうということで、このメンバーをベースに世界選手権、デフリンピックを目指し、改めてスタートすることにした。これを機にいくつかのフォーメーションを試みてみた。なかなかセッターが伸びてきてくれないので、コンビの精度を上げることよりも、アタッカーの技術で切っていくことと高さを重視してツーセッターを試みたりもした。そんな中、2回の合宿を経て、ようやくセッターに意識の変化が見られたので、不安定なツーセッターをやめ、3回目の合宿からワンセッターに戻した。その後、第9回デフカップの公開試合に出場した。相手は千葉県代表として全国大会にも出場する県内でもトップクラスの高校だった。勝利はできなかったものの、ブロックを基準とした組織的な守りが形となってきて、内容の良い試合が展開できた。このことが選手たちにとっても自信になり、チームとして上向いていった。さらに月に1回ペースで合宿を実施し、第16回の強化合宿まで積み上げた。1つ1つ課題を消化し、チーム力を高めていった。選手たちも自ら練習会を設け、自費で合宿を行った。私もその練習会に数回参加した。この練習会を通じて、チームの技術面だけでなく、選手同士また監督との信頼感を向上させることができたのではないかと思っている。2009年5月になって監督として大きな決断のときが訪れた。ずっと代表に召集を呼びかけていた選手が、ようやくケガの具合が回復し、デフリンピックに挑戦したいということを伝えてきた。私としては残り期間を考えて、合流リミットは遅くとも5月連休の合宿からだろうと考えていた。しかし、所属する実業団チームと会社を辞めてまで挑戦したいという強い気持ちを信じ、6月の合宿から呼ぶことにした。時を同じくして、控えセッターがケガをした。回復までに時間を要し大会に間に合わないことがわかった。残念だがこの選手をメンバーから外さざるを得なくなった。それに伴って正セッターが故障したときのためのフォーメーションを考える必要性が生まれた。コーチ陣と相談しながら合宿の貴重な時間を割いて準備にあたった。女子バレーボールチームは、デフリンピックに参加する競技団体の中でも合宿の回数は多い方だと思う。欲を言えばきりがないが、それでももっと練習する時間とその成果を試す練習ゲームの機会が欲しかった。少ない練習機会、少ない練習時間の中でチームにとって必要な練習は何か、いつもその優先順位を考えながら準備をしてきた。

9）反省・まとめなど

「3）成績と評価」でも述べたが、全体的には日本が目指してきたバレーは概ね展開できたのではないかと思う。サーブで崩し単調な攻撃をさせ、ブロックを基準とした組織的な守りでつないでいく。逆に攻撃ではカットをしっかりセッターに入れ、常に2枚3枚の攻撃ができるようにする。そういうバレーができていたと思う。しかし、ウクライナ戦の立ち上がりやセミファイナルのアメリカ戦はうまく緊張を解いてあげることができず、日本らしさが発揮できないまま負けてしまった感がある。それを考えるとメンタル面が1つ課題の残ったと言えるのかもしれない。結果として銅メダルを獲得できたことは大変嬉しいし、選手・スタッフには大変感謝している。特に表彰台で見せてくれた選手たちの誇らしげな顔は忘れられない。しかし、私の中では、まずファイナルの舞台で金メダルをかけて試合をすることを常にイメージしてきたので、大会が終わった後もずっと悔しさを引きずっていた。そんな私を多くの方々からいただくねぎらいの言葉が救ってくれた感じがする。この4年間支えてくださったすべての人に感謝したい。

コーチ　　遠藤　昌治

第21回夏季デフリンピック台北2009大会に全日本女子バレーボールチームのコーチとして参加しました。吉田監督の補助として、各試合前の練習時間の設定や練習内容および各試合のベンチコントロールを行いました。予選グループ戦では、①対イタリア戦ではセットカウント3－0で勝ち、②対ウクライナ戦ではセットカウント0－3で負け、③対ロシア戦ではセットカウント3－0で勝ち、④対アメリカ戦ではセットカウント3－1で勝ち、⑤対アルゼンチン戦ではセットカウント3－0で勝ち、⑥対ベラルーシ戦ではセットカウント3－0で勝ち、予選グループ2位(5勝1敗)で決勝トーナメントに出場する権利を得ることができました。チームの状態も良く、特にその日まで、一人も体調を崩さずに来られたことは大変素晴らしいと思いました。また、技術面においても日本の選手たちは、世界の高さに勝るチームワークとレシーブ力でまわりの人たちに感動を与えてきた成果であったと思いました。次に決勝トーナメントの準決勝対アメリカ戦。自分自身も油断をしてしまい、最後まで日本の流れをつかめないままゲームが終わってしまい、セットカウント1－3で負け、3位決定戦へ。3位決定戦では対ベラルーシ戦。この試合は日本のチームらしさを最後まで維持することができ、セットカウント3－0で勝ち、3位(銅メダル)を取ることができました。4年後のデフリンピックに向け、「金メダルへの挑戦」の継続であってほしいと思います。そのためにも、今日までに培ってきた生活面(健康管理や体力トレーニング)や技術面、メンタル面を今後にどう活かしていくのか、一人一人の課題であると思いました。これで終わりではなく、この全日本女子バレーボールチームに新たなる戦力者を育成していく必要があると考えます。今回の大会で日本のチームを応援してくれた方々が世界には、たくさんいました。予選グループ戦から決勝トーナメント、3位決定戦まで、とてもありがたく思いました(日本の多くの方々にそれらを見て欲しいくらいでした)。日本のチームは世界に誇れる最高のチームワークであったと思います。最後に、選手一人一人や吉田監督をはじめとするスタッフおよび今まで練習合宿で御協力御支援していただいた多くの方々に感謝いたします。ありがとうございました。

コーチ　　升田　真紀

9月5日　出発

到着後ＩＤカード作成会場に行ったら中国選手団150人待ち。でも翌日の試合が午前だったのでどうしてもその日に欲しくて並んだ結果、1時間半待ちでやっと作成できた。その後ホテルへ。夜中1：30に着いた。

9月6日　イタリア戦

初めての試合だったので固くなるかなと思ったけど意外とみんなよく動けていた。また全員試合に出せたので良かった。中には緊張していた選手も何人かはいたけど頑張ってプレーしていた。大会はまだ始まったばかり。長い戦いの中でどれだけモチベーションを保てるか？一番大事。気を引き締めて次のウ

クライナ戦に備えてほしい。
９月７日　ウクライナ戦
　メルボルン大会決勝戦、去年の世界選手権アルゼンチン大会で負けたウクライナが相手だった。１セット目初盤はサーブカットが乱れて13－０の悪いスタート。そこからなんとか立ち直ったもの、25－18。２セット目も25－18。３セット目は初盤から接戦だったものアドバンテージが取れなく、ここ！という所で負けてしまったのはとても痛かった。でも勝てない相手ではないので決勝トーナメントでリベンジしてほしいと思う。
９月８日　ロシア戦
　ウクライナ戦では攻められなかったサーブの反省を生かして、ガンガン攻めてたのはよかった。また、この試合もみんな出られたのでより一層勝つ喜びを味わえたと思う。
９月９日　アメリカ戦
　アメリカはウクライナの次に警戒しなければならないチーム。アメリカも去年世界選手権の反省から色々と研究し、沢山練習してきたチーム。日本もそれなりにやってきたので、いつも通りのプレーを出せば大丈夫と思ったが、１セット目はスタートが悪く、アメリカに２点リードされたままの苦しい展開が続いた。結局、１セット目は落としてしまったもの、２セット目から立ち直り、本来の日本のペースを取り戻せ、逆転勝ち出来て良かったと思う。総合的に見るとアメリカのサーブは日本より攻めてたという印象あった。また準決勝でアメリカと当たると思うのでこの勝利を自信に繋げてほしいと思う。
９月10日　アルゼンチン戦
　連戦が続き、スタメンメンバーも段々疲労が出てきてるので、コンディションを考えながら、補欠を出した。相手に合わせる事なく、日本らしいプレーを魅せる事が出来て良かった。
９月11日　ベラルーシ戦
　この日は予選最終戦。４位候補か？と思ってたロシアを３－０でストレート勝ちした事、また、アメリカにも接戦していたので、油断できないチームだった。チームには決勝トーナメント戦が決まったとはいえ、気を引き締めて戦って欲しいと渇を入れた。今まで不調だった安積選手がやっとスパイクをガンガン決めてくれた。始終、日本のペースで運び、勝利を飾った。
９月12日　準決勝　アメリカ戦
　自分自身は、過去の大会で予選でアメリカに負け、その悔しい気持ちをリベンジに繋げ、大逆転した経験がある。それを考えると、自分の過去はまさに今のアメリカと同じ立場ではないか？また、この日は日本から沢山の応援が来てくれたので、もしかしたら、緊張していないか？と不安を抱いたまま、試合会場に着いた。着いてみれば、自分は選手じゃないのに、いつもの会場の雰囲気が違う事に気がついた。やっぱり予選とは違う空気を感じ、選手達は大丈夫だろうか？と思ったら、案の定、やっぱり緊張してた選手が多かった。デフリンピック特有の魔物に飲み込まれない事を祈っていたが、スタートから悪かった。逆に、アメリカはミスも少なく、失敗しても落ち込んでなかったし、予選とは全く違うチームだったので、やっぱり、と思った。２セット目、大接戦でマッチポイントを３回位取ったもの、後１点を取れなかったのが痛かった。このセットを逃した事が一番大きかったと思う。３セット目は取れたもの、４セット目でかなり引き離されてしまい、日本のバレーが出来ないまま、終わってしまった事は非常に悔いが残ってしまった試合だった。
９月13日　３位決定戦　ベラルーシ戦
　昨日の敗戦から気持ちを入れ替え、銅メダルをかけた試合。この日は練習前からフワフワうかれていた雰囲気だったので、監督から渇を入れてもらった。まだ試合は終わっていないと。ベラルーシは予選のメンバーより、３名増えていたので、警戒していたが、始終、日本のバレーが出来たこと、またチーム全員がコートに入って戦えたので良かった。なんとか銅メダルを獲得できて、ホッとした。全ての試合が終わった瞬間、この４年間､色々と苦しかった事や楽しかった事を味わったスタッフ、選手達とバラバラになるかと思うと寂しい思いがあった。振り返ってみると、今回のチームは、プロで活躍していた山崎選手、リベロNo.１の柳川選手、成長してきた長澤選手、菅谷選手、安積選手もいながら、なぜ金メダルを獲れなかったか？を考えてみた。やっぱり、バレーは技術だけじゃない、チームワークや精神面も強くならなきゃ、勝てない。合宿の時も含め、現地での食生活について、本当にワガママだったのではないか？と思う。スタッフが一生懸命考えて、食べる場所を探したのに、「疲れているからホテルから出たくない。」とか、「脂っこいのは無理。」とか。そういう面で耐えられなかった事は残念に思う。やっぱり、合宿の時から、どんなご飯でもしっかり食べてもらわないといけないと感じた。他にも色々とあるが、今のチームは技術面が素晴らしくてもメンタル面が弱かったのではないかと思う。自分も初めて参加した大会がそうであったのと同じように。彼女達の今の気持ちは、もう４年後は行きたくない、こんな辛い思いをするんだったら、行かない方がいいと思っているだろう。でも、１年、２年経てば、時が答えを出してくれると思う。その答えが分かった時、もう１度アテネへ挑戦しようという気持ちが出てくれる事を私は願っています。今回のデフリンピックを始め、今までの４年間、本当に色々とお世話になりました。また、非常に貴重な経験をさせて頂き、本当に有難うございました。この経験を未来の子供達へ繋ぎ、そして、また日本女子バレーチームが再び世界の頂点に立ってくれる事を祈っています。本当に有難うございました。

トレーナー　　矢島　実

　この度は、台北デフリンピック女子バレーボールチームに帯同させて頂き、誠にありがとうございます。オリンピックと変わらないとても盛大な大会でした。このような重要な大会に参加させて頂けた事、そして選手と共に銅メダルを得るという貴重な体験をさせて頂けたことに心よりお礼を申し上げます。大会期間中に、選手に対して行った治療や指導に関しての報告をさせて頂きます。まず、本大会中、台北ではインフルエンザが流行し、日本チームも万全な対策で挑んでおりました。私の方としては、選手へ日本チーム全体の指導に加え、個人的にアドバイスもさせて頂きました。
①体を冷やさないこと。ホテル内はとてもエアコンが効いているので、ジャージの上下でいること。
②大会中は誰でも緊張してしまい体調を崩しやすいので、自分のペースで行動すること。
③リラックスのためにも良くストレッチをすること
　選手一人一人意識も高かったので、期間中に咳が出た選手はたった一人で､他の選手は体調良く過ごすことができました。大会本部からも、マスクの提供やエレベーター近くに手の消毒液の設置、各選手の部屋の消毒などが実施されました。ホテルの協力も、今回は非常に良いものがありました。それと、今回は緊張と食事の違いから来る便秘の選手が大勢いました。便秘に対しては健康食品と治療の併用でほとんどの選手がすぐに治りました。１名の選手は、月経前症候群と言って生理前に頭痛

やめまいを訴えていましたが、日本チームに帯同しているドクターを受診して、ビタミン剤を処方して頂きました。その後、症状は軽減し、その選手はしっかりとプレーできました。それ以外は、大きなケガや故障もありませんでした。毎日試合前にテーピングを施す選手や、試合後に４～６名の選手が夜に治療やコンディショニングを受けました。話は変わりますが、私は手話があまり上手ではないので、選手としっかりとコミュニケーションがとれたかどうか、また選手に満足の行くサポートができたかどうかはわかりませんが、とても良い選手達ばかりでしたので、私自身はとても楽しい仕事が出来ました。又、日本チームは他国に類を見ない程、恵まれた環境で試合に挑めたと思います。このような万全な体制で送り出して下さった協会の皆様、関係者の皆様には本当に感謝しております。ありがとうございます。最後に、素晴らしい選手とスタッフが一丸となって手に入れた「銅メダル」は私にとって金メダルとかわりのない貴重なメダルです。今回の体験を踏まえ、次回のデフリンピックでは、女子バレーボールチームは金メダルを確実に手に入れることが出来ると信じています。本当に長い間、サポートとご協力を頂き、本当にありがとうございます。心より感謝しております。

トレーナー　　澤和　信二

小生は全日本女子バレーボール競技の渉外及びアシスタントトレーナーとして役員をやらせてもらっております。渉外という仕事を任されて、練習場所の確保や練習試合相手先探しの交渉、スポンサー探し、ジャージやユニホームを作るにあたっての交渉など色々やってきました。また、アシスタントトレーナーについては、僕がいつもお世話になっているトライアスロンクラブの指定先病院の矢島トレーナーが担当してくれましたが、その矢島トレーナーが仕事などで多忙で、合宿などで不在の時に代わって選手達を診て､状況を矢島トレーナーに連絡し、処置を施しています。また、選手達にアンチ・ドーピング、服用する薬の注意や栄養面などの指導も行なってきました。練習場所の確保はなるべく無料で使える体育館にしたかったので、ろう学校や障害者センターなどを中心に、強化部が交渉。全てがスムーズにいくわけではなかったので､今後の課題はやはり、オリンピック選手の為に作られた施設(味の素ナショナルトレーニングセンター)をデフリンピックを目指す選手達にも使えるようにして欲しいです。パラリンピック選手の方から、パラリンピック選手でもその施設は貸してもらえない、使わせてもらえないと聞いています。今後はパラリンピック選手もデフリンピック選手も使えるようにしてもらいたいです。選手の皆さんはやはり仕事をしながら限られた時間しか練習出来ない状況でした。本当に金メダルを獲るには、練習だけではなく、メンタル面も大事になってきます。それをあまりやらなかった事が反省のひとつです。今後はメンタルトレーニングも多様に取り入れながら精神面を鍛えていく必要があるかなと思います。４年後にむけて強いＪＡＰＡＮの歴史を続けていくには一流指導者の取り入れ、練習環境の強化が大切だと思います。交渉するにはスポーツマネジメントの資格も必要だなと考えさせられました。今までお世話になった企業や応援をしてくださった方々に本当に感謝の気持ちでいっぱいです。この場をお借りして心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

マネージャー　　海老澤あきつ

2009年９月５日(土)の開幕式で幕を開け、９月15日(火)の閉会式を以て幕を閉じた2009台北デフリンピックの“女子バレーボール”競技･スタッフ(マネージャー的役割)としての報告を下記のとおりとする。

■食及び環境■今回のホテル宿泊施設環境はすごく整っていた方であり、女子バレーボール競技の選手・スタッフを同じフロアおよび隣同士の部屋同士にして頂いたお陰で、緊急時およびＭＴＧなどの連絡やりとりにも便利であり、助かった。これに関して、そのような環境に尽力した、理事及びろうあ連盟担当者たちには感謝する。次回のデフリンピックでもこのようにしてほしい。食の面では、台北は日本とそう変わらなく、どちらかといえば、ホーム(アウェイではなかった)に近く、不便さを感じることも少なかった。しかし、長い試合の日々の中、やはり炊いた日本の国米が力の源になったりする。よって、炊飯器を使うスペースを設置していただけ、本当に助かった。こちらからは現地で炊飯器を調達したのだが、２台購入すればよかったかなと思う。次回に参考したい。次回はアテネ。炊飯器が使えるようなスペースを設置していただければありがたいのだが、キッチン付き部屋が１競技に１部屋だけでもあるとなお助かる。しかし、思っていた以上に選手たちは食の好みにうるさく、日本での恵まれた環境がそうせざるをえなかったのかなとも思う。日本で行われる合宿などからこの面も指導していくべきかと思う。試合および練習中のドリンクはすべて日本から用意したアクエリアスの粉で作ったスポーツドリンクを使用。併用して塩の摂取。今までは塩は１～３袋を選手たち共同で摂ってもらったのだが、衛生面から考えてドリンク同様、選手一人一人に分けるべきであった。大会半ばごろにそのようにしたが、最初からそうするべきであった。今回は途中から参加するスタッフが数名いたおかげもあり､食の補給をすることができ、安堵したのだが､次回はそうはいかないだろうと思う。なので、個人とは別にチーム全体として余って困るくらいの量を用意するべきであろう。また、栄養補助食(カロリーメイトなど)も十分過ぎるくらいの用意が必要。

■通訳■日本国内ではともかく、大会には最低２名いたほうがよいかと思われる｡選手中心のチーム全体のための通訳者。そして、スタッフ(監督またはトレーナー含む)の通訳者。あくまでも２人いたほうが理想的ということである。当然のことながら、ＡＳＬもしくはＣＳＬが読み取りおよびある程度できる人をスタッフ(通訳)に配置するべき。今回、予選リーグ後の決勝トーナメントの組み合わせの件で確認などいろいろあり、これらを読み取り理解および意見を言うことができる実力がないと後々に困ることになる。

■大会期間■国際ルールに基づいて選手14名(リベロ２名)の登録が可能。そしてベンチサイドに入れるスタッフは３名のみ。事前に確認したのはそのルール内容であったが、蓋を開けてみれば、台北役員側は「12名のみ」「ベンチサイドに入れるスタッフは４名でＯＫ」と。やはり、蓋を開けてみないとわからないこともあるのだが、これは困る。強豪に当たる他国たちは14名の選手を連れてきており、実際に抗議もあった。結果的に２日目からは「選手14名(リベロ２名)」「ベンチサイドに入れるスタッフ４名」となった。デフリンピックとしてのルールもあるようで、前回のメルボルンデフリンピックで指摘されたルールを今回改めて確認したところ、同様のルールが施行されることがわかった。さらに追及するとデフリンピックとしてのルールというのも存在することが解明し、ルールブックを

いただくことになっている。(予定？)それらを踏まえて、このような小さなことながらも大きな不安につながらないようしっかり確認しながら固めていくべき。選手たちにとって重宝するものであり、必要なもの・氷。これは台北側が用意してくださり、困ることがなく、助かった。この際、クーラーボックスを２つ持っていったのだが、やはり２つあってよかった。持っていく・用意をするのが大変であろうが、何事にも多めにという用意が必要であることを再実感。

■データ・ブログ(ＨＰ)■予選で接戦ながらもストレート勝ちをしたアメリカに準決勝で敗れてしまった。デフリンピックの本舞台・敗れたらあとがないというトーナメント戦(決勝トーナメント)ということもあり、日本らしさのプレーが出せず残念であるが、これも実力のうちであろう。ただ、アメリカ側は予選で戦った際のデータを元に戦略を変えたようで、それに対応しきれなかった面も認めずにはいられない。やはり、データバレーという時代の流れもあると感じた。日本側もデータを収集していたのだが、これは自国チームに対するデータのみであり、升田コーチが作成したデータ表によるものである。次回はデータソフトを取り入れるのも一案である。また、相手のデータを見つけ、戦略を立てる方法(ビデオ研究など)も指導するべきではないだろうか？今回は一スタッフの案により、ブログを開設。おかげさまで多くの方々に近況などをお知らせをすることととができ、これも時代の流れというものだと感じる。さらに時代の流れ(ハイテク)を身近に取り入れて活用するべきであろう。これは続けていきたい。しかし、更新などがいろいろ大変であるのでひと工夫を組むべきであると痛感。

■選手■やはりセッターの影響は大きいと痛感。女子バレーボールの場合、すでに存在している、全国大会などに出場しているろう社会人バレーボールチームの中から今まで同様に選抜する方法は厳しい現実である。ジュニアから育成するべきである。ゲームの軸となるセッターの場合、試合を重ねて経験を積まないと育たない面もあり、今すぐにでも考慮するべきであろう。バレーボールは個人競技ではなく、団体競技。個人個人の技術はあってもチームとなるとそれがうまく発揮されないデメリットも出てしまったりする。その難しさを克服しきれたかどうかは最終的には選手のみが知るのみだろう。ぜひとも次につなげてほしい。

■その他■アジア地区予選大会が開催実施されるかどうかがギリギリのギリギリまでわからなかった中、世界選手権大会が開催実施されることになり、結果的にはこの世界選手権大会に参加することによって組み合わせにも影響が出たようだ。(現役員に確認済み)よって、次回もアジア地区予選大会は別にして、世界選手権大会にも参加は必須となる。大会中に病が発生し、バレーボール競技はまだ勝ち進んでおり、選手たちに影響があるかどうかと懸念していたのだが、色々と大変な環境の中、大杉さんをはじめとするろうあ連盟担当者たち、旅行会社たち、ホテル側などのご尽力およびご理解のおかげで無事に解決し、問題なく大会を終え、帰国することができた。本当にありがたく思う。ありがとうございます。

通訳　　物井　明子

去年世界大会に参加したため、大きなとまどいはなく通訳の仕事ができたと思う。やはり国際大会に参加することは、スタッフ、選手ともに大事だと思った。今回バレーボール競技のスタッフとしての反省や感じたことを述べたいと思う。

A．通訳は２名欲しい。私自身が難聴のため、すべてを聞き取ることができなかった面もある。しかしながら国際手話の読み取りができる健聴者はすくないと思われる。また長い期間での１人体制と、ほかのスタッフのお手伝いも兼ねると疲労がたまりやすい。きちんと伝えるためにも国際手話の通訳と健聴者の通訳の２名が望ましい。さらに英語(音声言語)の通訳もできるとなおよい。バレーのＴＤ会議では英語の音声通訳もあった。(ちなみに昨年の世界大会では国際手話のみで音声による通訳は地元の言語であったと記憶している。そのため現地の通訳者と一緒にＴＤ会議に参加した。他国は地元の音声言語を自国の音声言語に通訳できる人たちを連れてきた。)またＴＤ会議では多くの発言や質問があり、１人では対処しきれない場面があった。通訳が２名いると安心できる。決勝トーナメントのためのＴＤ会議では国際手話のできるもう１人のスタッフも一緒に参加した。会議には２名までしか参加できないと思っていたが、他の国では１チーム(１カ国ではなく)に３名参加している人もいた。通訳とは関係ないが、ＴＤ会議には１チームにかならず Deaf の人が参加しなければならなかった。Deaf の国際手話通訳と、健聴者の通訳１名が一番良いのではないかと思う。

B．通訳は VB に詳しい人がよい。ＴＤ会議ではルール等の説明が多くある。次回のスタッフ体制で、また４年間の計画で進めるならば、通訳の人は VB についても勉強してもらう方法がよいと思う。

C．期間中に気をつけなければならないことについて。今回もアルゼンチン大会同様、ルールや試合の進め方などについて突然の変更がたくさんあった。ＴＤ会議で突然変更の話があったり、後で連絡が回ってきたりする。連絡が回ってくるのはまだ良いほうで、今回男子 VB は決勝トーナメントのＴＤ会議があることを知らされていなかった。今後世界大会も含めて

①期間中毎日毎回、担当の人に確認する必要がある。会議があるかないか、変更はないか？など。

②決勝トーナメントは順位を基準にした組み合わせなのか、抽選なのかも現地での最初のＴＤ会議で確認する必要がある。

③ Deaflympic では登録選手全員が期間中に試合に参加しないと、全員メダルがもらえない。このことは周知する必要。今思うと世界大会はどうであったかは確認していない。次の世界大会では確認しなければならないひとつであると思う。

D．スタッフ間の連絡について。小さいことであったが、細かいことについて「聞いていない」、ということがいくつかあった。スタッフが大勢いた分、スタッフ間の連絡をきちんと行い、個人で進めないように気をつける必要がある。選手たちも誰に聞いてよいのかわからなくなる。チーム内で携帯をレンタルしておいたのは良かったと思う。慣れない機種で使いづらい面もあったが、４年後には技術も発達して各自の携帯でやりとりできるようになると良い。

E．コミュニケーションの配慮について。別の合宿レポートにも書いたが、スタッフは積極的に手話を使う、あるいは配慮してくれる人を望む。団体競技はなお大事になると痛感した。選手の中にも手話を流暢に使えない人もいるが、スタッフ側で配慮してくれるのとそうでないのとでは大きい。スタッフに入れるときはぜひこのことをきちんと了解したうえで入れ

てほしいと思う。

F．自分自身の反省について。周りのスタッフの優しさに甘えて自分のわがままが出た面があった。申し訳ありませんでした。長い期間、緊張を強いられる生活の中でスタッフのお互いの気遣いは本当に有難かった。期間中最後の方で補聴器のボタン電池の予備がなくなった。湿気の関係で消耗が早かったようだ。ドーピングチェックでの通訳は国際手話通訳がいたので、事なきを得た。音に頼らなくても済むというのがDeaflympics だと実感した。しかしやはりボタン電池の予備は多めに持参していく必要がある。選手に対するサポートをどこまでやればよいのかはっきりわからなかった。個人的な考えの中でここまでやる必要があるのかな？と思う面があった。次回の体制ではそのあたりもきちんと確認して、選手ができる部分はできるだけ選手が行ったほうがよいのではないかと思う。他国と比べると、我々チームはスタッフが充実していて、選手の生活面でのサポートもできたかと思うが、スタッフの役割を明確にする必要があること、生活面での必要なサポートは何か？を吟味したほうがいいのではないかと個人的には思った。４年間本当にお世話になりました。貴重な経験をさせていただきありがとうございました。

選手　　柳川　奈美子

初めて日の丸を背負い台北デフリンピックに出場しました。デフリンピックというのは私たちにとって大きな舞台です。去年の話になりますが、アルゼンチン(世界大会)の決勝戦でウクライナチームに０－３で敗れ金メダルを逃しました。リベンジとして世界大会での経験を生かし今まで強化合宿や自主練習などをやってきました。台北デフリンピックでウクライナチームを倒し金メダルを獲得することが私たちの目標でした。やっと台北デフリンピックが始まった時はオレンジ色のコートでみんなと一緒にプレーできることの喜びが大きかったです。緊張というかとてもわくわくしていました。不安は確かにありましたが仲間がいるので自信を持っていこうと思いました。予選は５勝１敗で２位となり決勝トーナメントに進出することができました。準決勝では予選で３－１で勝ったアメリカチームと再び対決することになりました。しかし、１セット目のスタートからサーブカットで乱れてしまい、日本らしいプレーをできずいつも通りのプレーができなかったです。アメリカチームに勢いがつき、１－３で敗れました。自分の役割を果たすことができなかったです。しかし終わりではない。次は３位決定戦でベラルーシチームと戦うことになりました。最後の試合です。メダルを取りたい！失敗していいから思い切りプレーするしかない！と気持ちを高めていきました。３－０で勝ち銅メダルを獲得しました。『銅メダル』を獲得出来たことを光栄に思います。アメリカチームに負け決勝戦に進出できずウクライナチームと戦うことができなかったことや『金メダル』を獲得出来なかったことがとても悔しいです。しかし銅メダルは金メダルだと思って胸を張って地元のみんなにいい報告できると思っています。台北で一緒に戦った仲間との思い出は一生忘れません。また一緒にバレーできたらいいなと思っています。台北デフリンピックはとても立派で素晴らしかったです。外国人との交流を深め、台北という文化を肌で感じることができました。忘れられない思い出を作ることができました。素晴らしい声援を下さって深く感謝しています。ありがとうございました。

選手　　菅谷　美穂

初めてのデフリンピックを経験して世界の聾バレーを目で身体で実感することが出来た。今まで４年間練習してきて、世界を知らない自分は世界に通用するかもわからなかった。私はセンターのポジションで速攻が通用するかブロックが通用するかどうかのことで頭がいっぱいだった。初戦の相手はイタリア。はじめは緊張したが一点決めたら緊張が吹っ切れた。ウクライナ戦は勝てる試合だったがチームのまとまりが足りなかった。アメリカやロシアなど予選は落ち着いて試合をすることが出来た。予選で試合を積み重ねていくうちにブロックや速攻が世界に通用することがわかって自信が出来た。今まで実感することの出来なかった日の丸を背負う重さ、また日本代表に選ばれたことの誇りを感じることができた。応援してくれる人を見て恵まれている場所にいると実感した。決勝トーナメントはアメリカ。予選では勝ったのに負けてしまった。負けた原因はチームとしての課題がまだ出来てなかった。でもそれがチーム競技の難しさなんだと改めて思った。負けたことも経験。次に繋げられるように同じことを繰り返さないように経験していくことだと思う。３位決定戦は最後の試合だから気持ちを切り替えてやった。自分の得意なブロックが３点以上も決まって嬉しかった。最後に自分のセンターの仕事を後悔ないように出来たことが１番よかった。まだまだ足りない部分もあったけどデフリンピックというものを経験して自分を変えるきっかけになったと思う。初めての世界の聾バレーを経験したことも大きな刺激になった。これからの自分に出来ることは今回経験したことを無駄にしないこと。経験したことを多くの人に伝えてデフリンピックの知名度を広めたい。

選手　　信田　裕子

みなさん、温かい応援をたくさん頂き本当に有難うございました。監督をはじめ、スタッフ、選手、家族のみなさん、多くの方々に応援して頂きここまで来ることができたことに対して、感謝の気持ちでいっぱいです。盛り上がった台北デフリンピックから日がたつにつれ、いろんなことが見えてきました。長かったような短かったようなあっというまに終わってしまいました。選考会から始まって､約４年間を過ごしてきましたが、本当に大変な日々でもあり、充実した４年間でした。今回はセッターとして選考されましたが、未熟だった・・・・時がたつにつれ、結果も少しずつ出て、頑張って乗り越えることが出来ました。忘れもしないアメリカ戦・・・。金メダルを獲得する自信はありましたが、予想外に魔物が寄ってきた感じがして、日本らしいプレーが出来ず、銅メダルに終わりました。３位決定戦のときは、嘘のように日本らしいプレーが出来、色は違うけれど、最高のチームワークであり、金メダルだと思っています。前回のメルボルンより、開会式、閉会式、試合の観客席での人の多さに驚き、感動しました。北京オリンピックと同じく盛大なデフリンピックでした。一生の思い出になりました。本当に有難うございました。これからも全日本女子は進化し続けて行くと思うので、御声援、御協力のほどよろしくお願い致します。

選手　　赤堀　美里

４年間の合宿を頑張ってきたことを世界の人々に魅せる晴れの舞台がやってきました。そう、４年に１度だけのデフリンピックに参加してきました。台北では、たくさんのボランティアやスタッフのサポートがあって、気持ちよく、不安なく、いい環境で大会に臨むことが出来ました。初戦のイタリア戦で初めてコートに立ちました。しかし初っ端からサーブミスをしてしまいました。デフリンピック、私にとって大きな舞台。最初で最後となるだろうと思うと同時にすごい緊張してしまったようです。世界選手権で外国人と戦ったことあるのに、また違った圧迫感を感じ、顔がこわばったようです。便秘にかかったり台北についてからずっと緊張しまくりの日々、自分では全然気づかなくて初戦のミスにつながってしまったこと、それを気づかせてくれたスタッフに感謝してます。緊張感がとけるにつれて次第に監督が私に求めていたもの「流れをかえる」という自分のスタイルのモチベーションがいい方向に向かうことが出来ました。ウクライナ戦ではストレート負けになってしまいました。日本らしいプレーを見せられず、ウクライナのペースでゲームが進み、なかなか、流れを取り戻すこと出来ず、黒星となってしまいました。そのウクライナ戦があったからこそ、アメリカ戦では日本らしいプレーを見せることが出来、予選では２位となりました。しかし準決勝で自分たちのプレーが出来ないまま、アメリカの波にのまれ、なかなか流れが日本に来ず、レフト中心の攻撃になってしまいました。アップゾーンから声援を送ったけれど１点１点取られるたびにコートにいるプレーヤーの顔を見ると心が痛くなりました。１－３という結果になってしまいました。トスワークに対しての不満、セッターへの返球率も低く、それぞれコンディションがベストになっていない人もいたり、チームワークが崩れていく感じが出てしまいました。台北に来て試合や練習の時間を除いてプライベートの時間が長いので、合宿では見えなかった部分がはっきりお互い見えてきたり、ストレスを感じてしまったりなど、そこまで面倒見切れなかった副主将としての責任を感じました。準決勝でアメリカに負けてしまったけれど、戦いはまだ終わってないので気持ちを切り替え、三位決定戦では最後まで日本らしいパフォーマンスを魅せる事ができました。最後にコートに立って自分のトスでいい結果で試合終了したいという夢が監督に伝わったのか、流れもたまたまなのかもしれないけれどまるで神様がくれたかのように私の夢がかないました。世界選手権の経験もしていますが、デフリンピックはどれだけ偉大なものなのかを思い知ったという感じがしました。それだけでなく、選手のメンタル面や自己管理が出来る出来ない人がバラバラだったので、日の丸という重い責任感からチームワークに影響してしまっているのではないかと思いました。人生の中でとっても大きな貴重な体験をしました。スタッフのサポートにとても感謝しています。

選手　　鈴木　恵子

今回、２回目のデフリンピックに参加して、まず思ったことは、今回のデフリンピックは恵まれた環境の中にいることでした。多数の審判員、ライズマン、ボランティアがいてくれたおかげで、充実した大会期間を過ごすことができ、感謝しています。私自身、デフリンピック出発前に、肉離れという故障をしてしまい、大会期間中に治癒できるか、試合に影響がないか、とすごく心配していましたが、専属トレーナーの矢島さんのおかげで、予選からフル出場できるまでに回復でき、本当に嬉しさいっぱいでした。本大会では、ライトというポジションで、２ヶ月という浅い経験からどう大会に活かすか、それが自分の役割発揮のポイントでした。最初の予選リーグでは、ライト守備でフェイントを多く決められ、悔しい思いをしましたが、試合を重ねるごとに、ライトポジションでの課題を少しずつクリアできている自分がいて、自信を持つことに繋がったし、毎試合が楽しみでたまりませんでした。今回の結果は３位でしたが、最後の試合では、メンバー 12 名全員試合に出れて、勝って終われたので、とても嬉しいです。４年間支えていただいたスタッフの皆様、応援していただいた皆様、最後まで戦った 11 名のメンバーに対して本当に感謝の気持ちでいっぱいです。有難うございました。

選手　　岡本　かおり

台北デフリンピックで金メダルを獲る為に、４年間強化合宿、自主合宿を重ねて行き、日本代表として自分の為、仲間の為、支えてくれている人たちの為に、台北へやってきました。私は過去３回デフリンピックに出場していますが、今回の台北デフリンピックは今までにない素晴らしい環境でした。デフリンピックモードに圧倒されそうでしたが、試合を楽しみたい！コートでいい顔をして日本のプレーは素晴らしいということを世界中に見せたいと思う気持ちで、とってもわくわくした気持ちが大きかったです。今回のメンバーは半分がデフリンピック経験のない選手で、そういう後輩がたくさん出てきてくれた事が、私の喜びのひとつでもありました。試合では、自分自身がアップゾーンにいる時間が長く、コートに入って盛り上げたい、落ち着かせたいという気持ちがいっぱいで、もどかしい気持ちでした。デフリンピックを終えて、私の今の気持ちは、普段なら気が抜けて放心状態になるはずですが、なぜか気が抜けてないのです。なぜなら、金メダルが獲れなかった、試合に出る回数が少なかったからなのか、もしくは最後の試合が３位決定戦で全員出場でき、日本らしいプレーをして最高の笑顔で勝ったからなのか、色んな感情が入り混じって気持ちの整理がつかない状態です。一番の敗因の準決勝のアメリカ戦、予選ではすんなり勝たせてもらいましたが、準決勝のアメリカは一枚上手で思いっきりぶつかって来たような気がします。逆に日本はアメリカに圧倒され、失敗を恐れるかのようにいつもの日本らしいプレーができませんでした。私は、アップゾーンから見てることしか出来ず、とっても悔しかったけどコートに立って戦った方がはるかに悔しい思いをしたと思います。この悔しさをバネに４年後のアテネ大会に向けて頑張って欲しいと思います！大会中、試合以外の生活面において気を使う事が多かったような気がします。特にベストメンバーは試合に集中させるように気をつけたりしていました。そして連日の試合にもかかわらず、日本チームはベストコンディションを維持できたと思います。それは日本のスタッフのお陰だと思います。特にトレーナーの矢島さんにずいぶんとお世話になりました！魔法の手です！！私が日本代表として最後まで残れたのは、私一人の力ではなくこうやって皆様に支えられて（応援してもらって）いたおかげなので、感謝の気持ちでいっぱいです。金メダルを目指していただけに、結果が銅メダルは残念でしたが、最後の３位決定戦で日本らしいプレーが出来たのと全員バレーができたことで、最高の笑顔が見られました！笑顔の金メダルです！今まで応援して

くださった皆さんに、この場を借りてお礼を申し上げます。本当にありがとうございました！

選手　　岡崎　宏美

デフリンピックに参加して結果は銅メダルでした。金メダルを目指していただけに悔しかったけど、３位決定戦では、最後に日本らしいプレーが出来たという満足感も半分あります。この銅メダルにたどり着くまで３年半という年月。今振り返ると長いようであっという間だったなぁと思いました。本当に今までの人生の中で何かに打ち込んだのは初めてのような気がします。メルボルン大会までの強化合宿と比べて、今この台北大会に向けての準備期間が長かったというのがあるかも知れないけど、台北大会に向けて、本当にやるだけやりきったという気持ちも大きいです。今までの合宿はスタッフが練習の場を作ってくださり、いろいろな方が協力してくださり、積み重ねた実績の結果だと思います。ここまでの道のりに、仲間達や家族や友達や応援してくださった人たちが居てくれたことに感謝の気持ちでいっぱいです。台北大会は、台湾人たちが全般的に協力してくださったおかげで、いい環境で試合をすることが出来ました。毎日毎日笑顔で迎えてくださったボランティアさん達、試合中に一緒に「日本チャチャチャ」をしてくれた汗ふきワイパーの学生さん達、台湾人の暖かいおもてなしに感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。デフリンピックが終わってしまった今、みんなと一緒にバレーができなくなるという寂しさでいっぱいです。一緒にひたすら「金メダル」を目指して、汗を流したり、涙を流したり、笑ったり、怒ったり。その中で、自分がキャプテンをやらせてもらって、団体協議の難しさ、チームワークの大切さ、コミュニケーションの大切さ等、いろいろ勉強になりました。デフリンピックで感じたことは、これから若い人たちにも伝えて行きたいです。ありがとうございました。

選手　　安積　梨絵

デフリンピックへの参加は２回目です。メルボルンでは補欠でしたが、台北はレギュラーとして試合に出ました。ドキドキというよりわくわくした感じで試合しました。予選リーグでウクライナだけ負けましたが、決勝では絶対勝つ！と思っていたアメリカに準決勝で負けました。その時はすっごく悔しかったです。涙がいっぱい出ましたが、スタッフ達にまだ終わってない！まだ次があるって言われました。その時「確かにまだ終わってない。泣いててどうするんだ？３位決定戦がある。まだ終わってない」と思って気持ちを切り替えました。３位決定戦では日本らしいプレーを出せることができました。表彰式の時、金メダルをもらってるウクライナを見て自分も欲しいなと思いました。でも、結果は結果ですので仕方がありません。銅メダルだったけど、心の中では金だと思っています。今まで苦しかった合宿だけど、よくここまで来れたと思います。皆と一緒にプレーしてよかったです。色々あったけど最後まで皆と一緒に戦い一緒にトーナメントに行けました。自分の得意なワンタッチで決めることできました。アルゼンチンでの世界選手権大会ではできなかったけど台北ではできたからよかったです。サーブも攻めることができました。相手のレシーブを崩してチャンスボールで攻めた所がたくさんありました。皆と一緒に出てよかったです。ありがとうございました。

選手　　物袋　友美

９月６日　イタリア戦：本日は、初戦です。２日に台北に到着後、なかなか練習環境に恵まれなかったが体調コンディションはしっかり出来て難無くイタリタ戦に臨めました。みんな金メダルしか見えていないので、気持ちはすごく高まっていました。日本らしい攻撃、日本らしい守備、日本のリズムがとれた試合だったと思います。気持ちのいいスタートが出来たと思います。もっとレベルアップ出来るよう強くなれたらいいなと思います。

９月７日　ウクライナ戦：ウクライナは世界ランキング１位だけあってやはり自分のリズムを崩さない精神を持っています。技術やブロックの高さには対応出来ていた試合だったと思います。後は精神的に余裕を持ってウクライナを攻めるのみかなと思います。

９月８日　ロシア戦：圧倒的に勝つことができました。日本らしいリズムをしっかり守って攻撃出来たことはすごくよかったです。やはり日本の個人個人の技術のレベルは上がっている。それが１つにまとまって戦えるという、こんなすばらしい事はないと思います。

９月９日　アメリカ戦：スタートが悪くかなり苦戦しました。やはり日本の課題はスタートからエンジンをかけ、日本のプレー、日本のリズムで挑めばモチベーションも高くなって明日明後日の勝利にも繋がると思いました。

９月 10 日　アルゼンチン戦：ウォーミングアップをゆっくりやってしまってバタバタ状態でした。そのためスタートがちょっと調子狂いました。サーブカット率も低くなってしまいました。なんとしても頑張って調整しないといけないと感じました。

９月 11 日　ベラルーシ戦：予選最終日なので気持ちをしっかり持って日本らしいプレー、日本のリズムでしっかり戦えたと思います。明日からは決勝トーナメントです。みんなの気持ちは高まっています。

９月 12 日　準決勝アメリカ戦：予選と全く違うリズムで攻撃されて日本のリズムを取り返す事が出来ず負けてしまいました。個人的な技術は日本が格上でしたが、チームワークはアメリカが上でした。団体プレーの難しさを痛感しました。金メダルを逃してしまいましたが…、３位決定戦が残っています。気持ちを切り替えて臨まないといけません。

９月 13 日　３位決定戦ベラルーシ戦：４年間の結晶がこの試合で全て出し切ることができ、日本らしいプレー、チームワークの大切さを実感出来た試合でした。銅メダルを獲得しましたが、チームワークは金メダルでした。最後には充実した大会で締める事が出来てよかったです。台北デフリンピックは本当に国や地元の協力があって素晴らしいデフリンピックでした。このタイミングで参加出来た事は、私にとって最高の想い出になりました。

選手　　長澤　みゆき

初めてデフリンピックに参加した。世界選手権バレーボール大会と比べて大きな大会であった。しかし、世界選手権バレーボール大会での経験のお蔭で、デフリンピック期間中にスケジュール的に急な変更があっても動じることなく、選手もスタッフも順応できた。予選リーグ戦では当初、２つのグループに分かれてやる予定だったが、急遽全てのチームと当たる、総当り状態の予選リーグ戦となった。しかし、予選リーグ戦ではウクライナ以外のチームを倒し、予選リーグ戦を２位で突破した。ウクライナと試合をした時は０－３で負けたが、世界選手権バレーボール大会の時と比べて内容も良く、今後に繋がる良い試合が出来た。予選リーグ戦を通して、この１年でチーム全体が成長したと感じた。決勝トーナメント戦の準決勝戦で、予選リーグ戦を３位で突破したアメリカと当たった。その結果１－３でアメリカに負けてしまった。この時はチーム全体の調子が良くなかった。一度倒していた相手に負けてしまうと思わなかった。一人一人の動きがぎこちなく、それぞれが実力を発揮しないまま終わってしまった。理由はわからない。アメリカに負けてしまったことはもちろん悔しかったが、それ以前に自分らしい、日本らしいプレーを出し切れないまま負けてしまったことが悔しかった。しかし、気を持ち直して翌日に行われた３位決定戦ではベラルーシと対戦したが、ここでは日本らしいプレーを出すことが出来た。「有終の美を飾る」ということで、最後には勝って笑うことが出来たので良かったと思う。４年前のデフリンピックでは女子バレーチームは２位だったが、今回は３位と結果的にランクダウンした。しかし、最終的にメダルが取れて良かったと私は思う。デフリンピックに参加して毎日試合をして、チームの勝敗の分かれ目となる鍵はセッターだと痛感した。

選手　　青木　洋佳

過去２大会とも候補選手止まりで、今回で念願のデフリンピック出場。そのために長い歳月をかけて諦めずにやってきて良かった。諦めるな！と喝を入れてくれた方々や、静かに見守ってくれた方々がいたおかげで、デフリンピックの舞台で戦う今の自分がいた。また、全日本女子バレーチームの為にいろいろと協力してくださった方々の温かい応援や支えがあったからこそ、今の全日本女子バレーチームが出来上がった。これらが無かったら、メダルを日本に持ち帰ることが出来なかっただろう。結果は銅メダルだったけど、支えてくれた方々には感謝という言葉が入った金メダルを捧げます。本当にありがとうございました。そして、数え切れないほどたくさんの経験を、デフリンピック出場を夢見る方々やスポーツを楽しむ方々に伝えていきたいと思いました。

選手　　山崎　望

２度目の台北デフリンピック出場となりました。代表に選ばれたことをとても光栄に思っています。今回のデフリンピックは、前回のメルボルン大会より盛大な大会でした。想像以上の感動を与えてくれて、素敵な思い出を残すことが出来ました。台北の人々に感謝してます。本当にありがとうございました。長かったような短かったようなあっという間でした。試合の結果は、残念ながら銅メダルになりました。金メダルを獲る事ができなかったけど、３位決定戦で、最後の全力を出して、気持ちよく決めることが出来ました。私としては、今までで一番良い試合出来たと思います。このチームで試合に出て、全力で勝負をしたので後悔はありません。皆様のご期待に応えることが出来ず、本当に申し訳ない気持ちです。でも、自分たちの力だけではなく、たくさんの方々に応援して頂いて獲る事が出来た銅メダル＝金メダルだと思ってます。応援ありがとうございました。

参考資料

第 21 回夏季デフリンピック　～台北 2009 ～
主なスケジュール

2007	３月１日	国際ろうスポーツ委員会（ICSD）へ団体競技予備登録
	３月27日	ICSD より団体競技割り当て数の発表
	11月19日	第 21 回夏季デフリンピック日本選手団の編成にかかる指針を制定
2008	５月29日	ICSD へ VIP パス登録（日本からは申請なし）
	７月12日	第 21 回夏季デフリンピック第１回派遣委員会
	８月１日	ICSD へ団体競技最終登録＆個人競技予備登録
	９月３～10日	台北デフリンピック・プレ大会（サッカー・陸上・卓球）
	10月10日	ICSD より団体競技の組合せ抽選結果の発表
	11月１・２日	日本選手団第１回監督会議、第１回マネージャー説明会
	11月７日	第 21 回夏季デフリンピック第２回派遣委員会
2009	１月15日	第 21 回夏季デフリンピック組織委員会へビザ申請（日本は適用外）
	２月１日	競技団体から選手候補関連書類の提出締切 （調査書、聴力検査票・使用薬物調査書、2008 年度協会会員確認書等）
	２月15日	ICSD へ団体競技参加確認の連絡
	２月21･22日	日本選手団第２回監督会議、第２回マネージャー説明会
	２月25日	選手候補推薦一次締切（各競技団体→デフリンピック派遣委員会）
	３月６日	第 21 回夏季デフリンピック第３回派遣委員会（日本代表選手一次選考）
	４月１日	日本選手団ウェブサイト公開
	４月３日	ICSD へ評議員会出席登録
	４月30日	ICSD へオンライン登録開始
	６月～７月	TUE 申請 （使用薬物についての調査書…競技団体→デフリンピック派遣委員会→アンチ・ドーピング部会） （禁止薬物使用選手情報…アンチ・ドーピング部会→デフリンピック派遣委員会→競技団体） （TUE 申請書…競技団体→デフリンピック派遣委員会→アンチ・ドーピング部会→ JADA TUE 委員会） （TUE 許可書コピー…JADA TUE 委員会→アンチ・ドーピング部会→デフリンピック派遣委員会→競技団体→ ICSD）
	６月10日	ICSD へ医療関係者登録
	６月20･21日	日本選手団第３回マネージャー説明会
	６月25日	選手候補推薦二次締切（各競技団体→デフリンピック派遣委員会）
	７月10～12日	日本選手団総務が台北へ現地下見（視察）
	７月11日	第 21 回夏季デフリンピック第４回派遣委員会（日本代表選手二次選考）
	７月13日	日本選手団団員決定通知
	７月21日	日本選手団団員（選手・役員）から提出締切（承諾書、誓約書、2009 年度協会会員確認書）
	８月１日	ICSD へ最終登録
	８月５日	秋篠宮同妃両殿下御接見 （派遣委員会委員長、派遣委員会事務局長、団長、副団長、主将、各競技チーム代表選手）
	８月31日	日本選手団先発隊出発
	９月２日	日本選手団本隊出発
	９月２日	第 21 回夏季デフリンピックＩＤ登録
	９月３日	日本選手団結団式
	９月３日～	第 21 回夏季デフリンピックＴＤ会議
	９月３･４日	ICSD 評議員会
	９月５日	第 21 回夏季デフリンピック開会式
		第 21 回夏季デフリンピック競技・表彰式
	９月15日	日本選手団解団式
	９月15日	第 21 回夏季デフリンピック閉会式
	９月16日	日本選手団帰国
	９月16日	厚生労働省・日本障害者スポーツ協会に大会の報告（副団長）
	９月19～22日	第 43 回全国ろうあ者体育大会（福島）にて「第 21 回夏季デフリンピック報告会」を開催（団長、主将、参加選手数名）
	11月５日	第 21 回夏季デフリンピック第５回派遣委員会
	10月15日	秋篠宮同妃両殿下御接見 （派遣委員会委員長、団長、卓球：上田萌選手、佐藤理穂選手、水泳：茨隆太郎選手）
	11月12･13日	天皇陛下御在位 20 年記念式典および宮中茶会参列 （派遣委員会委員長、陸上：森本真敏選手、水泳：茨隆太郎選手）
	12月３日	厚生労働大臣表彰式典及び天皇・皇后両陛下拝謁、厚生労働省副大臣表敬訪問
2010	２月上旬	日本障害者スポーツ協会表彰（予定） （派遣委員会委員長、団長、メダリスト・入賞者）

第２１回夏季デフリンピック

台湾・台北市

日本選手団
必携マニュアル

DEAFLYMPICS
TAIPEI 2009

大会期間：2009年９月　５日（土）～９月１５日（火）
派遣期間：2009年８月３１日（月）～９月１６日（水）

財団法人　全日本ろうあ連盟

第21回夏季デフリンピック　必携マニュアル　～目次～

【内　　容】		PAGE
1	日本選手団組織図	1
	危機管理ネットワーク	2
2	日本選手団名簿（ID登録）	3
3	第21回夏季デフリンピック日本選手団　結団式・壮行会 開催要項	16
	第21回夏季デフリンピック日本選手団　解団式 開催要項	
4	選手・役員必携	17
5	競技中における抗議について	20
6	ドーピング検査の手順	22
7	報告書作成について	23
8	医療チームマニュアル	25
	大会期間中に守っていただきたいこと	26
	参考　問診用紙（1）、（2）	29
	参考　新型インフルエンザ相談票	31
	東京海上の保険が適用される病院	32
9	連盟への誓約書	33
10	フラートンホテル　15F・17F　見取図と	34
	事務局、各施設の開所時間	

【危機管理ネットワーク】

厚生労働省
財団法人日本障害者スポーツ協会

【日本本部】
財団法人全日本ろうあ連盟
デフリンピック派遣委員会

【日本選手団本部】

【関係各所】
財団法人交流協会台北事務所

【新竹地区】
水泳　豊田　律

【台北地区】
陸上　三枝　隆行
バドミントン　石井　幹雄
バスケットボール（男子）　坂本　知加良
バスケットボール（女子）　五十嵐　悟
ボウリング　邊見　新吉
サッカー（男子）　尾上　直也
サッカー（女子）　佐藤　浩幸
柔道　南　栄一
空手　宮下　昭宣
卓球　佐藤　真二
テニス　森本　尚樹
バレーボール（男子）　岩下　忠正
バレーボール（女子）　吉田　浩司

【翡翠湾地区】
ビーチバレーボール　今井　起之
マラソン　下防　健太郎

【　日本選手団組織図　】

日本選手団

団長 粟野達人

手話通訳　豊島　絵美子
手話通訳　高井　洋

医療チーム
医師（内科）　田口　智博
医師（整形外科）　類家　拓也
看護師　大島　三千子（9/2～8）
看護師　高田　智子（9/8～15）
アスレティックトレーナー　中島　幸則
アスレティックトレーナー　星野　直志

総務チーム
総務（副団長）　大杉　豊
事務局員（記録）　瀬川　奈美
事務局員（記録）　加茂下　和子
事務局員（宿泊・輸送）　山崎　陽一
事務局員（宿泊・輸送）　石澤　慧
事務局員（翻訳）　小林　昌之
事務局員（広報/写真・HP）　岸田　修
事務局員（広報/記事・HP）　高橋　真里
ボランティア　4名
　中川　美幸（東京都三鷹市在住）
　油井　真（東京都江東区在住）
　浦城　直子（東京都世田谷区在住）
　箭内　秀平（千葉県印旛郡在住）

各競技監督（12競技）
陸上　三枝　隆行
バドミントン　石井　幹雄
ビーチバレーボール　今井　起之
バスケットボール（男子）　坂本　知加良
バスケットボール（女子）　五十嵐　悟
ボウリング　邊見　新吉
サッカー（男子）　尾上　直也
サッカー（女子）　佐藤　浩幸
柔道　南　栄一
空手　宮下　昭宣
水泳　豊田　律
卓球　佐藤　真二
テニス　森本　尚樹
バレーボール（男子）　岩下　忠正
バレーボール（女子）　吉田　浩司

差出人: info@sias.org
送信日時: 2009年8月4日火曜日 23:04
宛先: taipei2009team@jfd.or.jp
件名: JPN - Athletes

Japan (JPN)
Athletes
As of 4 Aug 2009

	Name (ID #)	Birthdate	Gender	Athlete	TUE	Audiogram
1.	ABE Yachiyo (14830)	2 Aug 1975	W	TE - doubles		C
				TE - mixed doubles		
				TE - singles		
2.	AIZU Minami (21322)	18 Jul 1985	W	FB - football		C
3.	AKAHORI Misako (20325)	13 Mar 1977	W	VO - volleyball		X
4.	AKITA Makoto (21321)	7 May 1990	M	FB - football		C
5.	AOKI Hiroka (20326)	3 Jul 1979	W	VO - volleyball		C
6.	AOYAMA Osamu (12099)	12 Jun 1969	M	TT - doubles		C
				TT - mixed doubles		
				TT - singles		
				TT - team		
7.	ARAKAKI Masahiro (21324)	28 Mar 1976	M	BW - doubles		C
				BW - singles		
				BW - trios		
8.	AZUMI Rie (16469)	9 Jun 1991	W	VO - volleyball		C
9.	BESSHO Mutsuki (21323)	17 Jan 1990	W	BD - doubles		C
				BD - mixed doubles		
				BD - singles		
				BD - team		
10.	EJIMA Yoshitaka (10891)	22 Aug 1965	M	FB - football		C
11.	EMOTO Satoko (21379)	20 Apr 1983	W	BV - beach volleyball		C
12.	FUJII Yo (21326)	20 Feb 1984	M	SW - 100m butterfly		C
				SW - 100m freestyle		
				SW - 200m butterfly		
				SW - 200m freestyle		
				SW - 200m individual medley		
				SW - 400m freestyle		
				SW - 4x100m freestyle relay		
				SW - 4x100m medley relay		
				SW - 4x200m freestyle relay		
				SW - 50m butterfly		

Japan (JPN)
Athletes
As of 4 Aug 2009

13.	FUJIKAWA Ayaka (21327)	27 Jul 1985	W	SW - 100m butterfly	C
				SW - 200m butterfly	
				SW - 200m individual medley	
				SW - 400m individual medley	
				SW - 4x100m freestyle relay	
				SW - 4x100m medley relay	
				SW - 4x200m freestyle relay	
14.	FUJIOKA Hiroaki (16436)	26 May 1957	M	BW - doubles	C
				BW - singles	
				BW - trios	
15.	FUJITA Kotomi (21380)	20 Nov 1985	W	BV - beach volleyball	C
16.	FUNAKOSHI Hiroyuki (10457)	27 Oct 1977	M	FB - football	C
17.	FURU Takayoshi (16450)	18 Jun 1979	M	FB - football	C
18.	HAMADA Rie (21328)	11 Oct 1984	W	FB - football	C
19.	HASEGAWA Risa (21329)	13 Jul 1985	W	BK - basketball	C
20.	HIGASHI Tomohiro (19853)	12 Apr 1983	M	JU - 90 - 66kg	C
21.	HIRABAYASHI Hiroko (16421)	6 Apr 1981	W	BK - basketball	C
22.	HIRAI Nozomi (21439)	5 Dec 1983	W	BV - beach volleyball	C
23.	HIRATA Tomiya (10477)	2 Oct 1976	M	VO - volleyball	C
24.	HIWATARI Mika (16404)	18 Nov 1983	W	BD - doubles	C
				BD - mixed doubles	
				BD - singles	
				BD - team	
25.	HOSOMI Hisashi (16448)	16 Jul 1981	M	FB - football	C
26.	IBARA Ryutaro (21330)	14 Feb 1994	M	SW - 100m backstroke	C
				SW - 200m backstroke	
				SW - 4x100m freestyle relay	
				SW - 4x100m medley relay	
				SW - 4x200m freestyle relay	
				SW - 50m backstroke	
				SW - 50m butterfly	
				SW - 50m freestyle	
27.	IBE Eriko (21331)	7 Apr 1982	W	FB - football	C

Japan (JPN)
Athletes
As of 4 Aug 2009

28.	IGASAKI Shun (19805)	12 Jun 1981	M	FB - football	C
29.	IMAI Yuta (21383)	19 Nov 1993	M	VO - volleyball	C
30.	IMAMURA Kana (18468)	29 May 1988	W	SW - 200m backstroke	C
				SW - 200m butterfly	
				SW - 200m freestyle	
				SW - 400m freestyle	
				SW - 4x100m freestyle relay	
				SW - 4x100m medley relay	
				SW - 4x200m freestyle relay	
				SW - 800m freestyle	
31.	INO Yasutaka (12094)	21 Jun 1974	M	VO - volleyball	C
32.	INOUE Mio (12078)	22 Apr 1984	W	BD - doubles	C
				BD - mixed doubles	
				BD - singles	
				BD - team	
33.	INUI Fumio (18476)	7 Nov 1976	M	VO - volleyball	C
34.	ISHIDA Takamasa (21332)	5 Nov 1986	M	AT - hammer throw	C
35.	ISHII Mari (14810)	21 Jun 1980	W	BD - doubles	C
				BD - mixed doubles	
				BD - singles	
				BD - team	
36.	ISHIKAWA Tomomasa (21333)	4 May 1982	M	BK - basketball	C
37.	ITAHANA Eiji (20693)	20 Apr 1981	M	AT - 4x400m relay	C
				AT - decathlon	
38.	ITO Takashi (18449)	23 Sep 1978	M	FB - football	C
39.	KAI Katsumi (18408)	2 Jan 1977	M	BD - doubles	C
				BD - mixed doubles	
				BD - singles	
				BD - team	
40.	KAJISHITA Reiki (21334)	1 May 1994	M	TE - doubles	C
				TE - mixed doubles	
				TE - singles	
41.	KANAYASU Kyohei (19928)	22 Jun 1987	M	FB - football	C
42.	KANEKO Seiichi (18401)	26 Mar 1967	M	AT - marathon	C
43.	KATSUTA Takeshi (19470)	27 Jul 1969	M	BD - doubles	C

Japan (JPN)
Athletes
As of 4 Aug 2009

				BD - mixed doubles	
				BD - singles	
				BD - team	
44.	KAWABATA Nana (21335)	4 Apr 1990	W	FB - football	C
45.	KAZUMI Mitsuru (18436)	16 Feb 1943	M	BW - doubles	C
				BW - singles	
46.	KINEDUCHI Yoshihiko (19892)	20 May 1950	M	FB - football	C
47.	KINOSHITA Toru (21336)	26 Jun 1989	M	SW - 100m breaststroke	C
				SW - 200m breaststroke	
				SW - 200m individual medley	
				SW - 4x100m medley relay	
				SW - 50m breaststroke	
48.	KIRA Yusuke (21337)	24 May 1989	M	BK - basketball	C
49.	KIRYU Kiyoaki (20693)	25 Dec 1969	M	FB - football	C
50.	KITADA Akihiro (20666)	10 Jul 1991	M	AT - 4x400m relay	C
				AT - 800m	
51.	KITAJIMA Noboru (19908)	23 Apr 1977	M	SW - 100m breaststroke	C
				SW - 200m breaststroke	
				SW - 4x100m freestyle relay	
				SW - 4x100m medley relay	
				SW - 4x200m freestyle relay	
				SW - 50m breaststroke	
				SW - 50m freestyle	
52.	KOBORI Tomofumi (12097)	1 Jul 1971	M	BD - doubles	C
				BD - mixed doubles	
				BD - singles	
				BD - team	
53.	KOGA Chiemi (21339)	17 Oct 1982	W	FB - football	X
54.	KOHAMA Kyoko (12921)	10 Nov 1975	W	TT - doubles	C
				TT - mixed doubles	
				TT - singles	
				TT - team	
55.	KOJIMA Takahiro (20694)	12 Dec 1985	M	KT - 60 - 67kg	C
56.	KONO Sho (21340)	1 Nov 1988	M	FB - football	C

Japan (JPN)
Athletes
As of 4 Aug 2009

57.	KUBO Haruo (16439)	31 Mar 1959	M	BW - doubles	C
				BW - singles	
				BW - tries	
58.	KUMAZAWA Yuri (21338)	7 Jun 1981	W	FB - football	C
59.	KURIMOTO Saya (21341)	15 Aug 1989	W	KT - 60 - 69kg	C
60.	KUROSAKI Sachie (21342)	22 Mar 1978	W	FB - football	C
61.	MAEJIMA Hiroyuki (20668)	15 May 1988	M	AT - 4x100m relay	C
				AT - high jump	
62.	MANO Michiyo (21343)	21 Feb 1974	W	BK - basketball	C
63.	MASUDA Maki (14841)	4 Oct 1972	W	VO - volleyball	C
64.	MATOBA Yurie (21344)	12 Mar 1986	W	BK - basketball	X
65.	MATSUKIYO Toshiko (16434)	1 Jan 1947	W	BW - singles	C
66.	MATSUMOTO Hiroshi (19930)	27 Nov 1985	M	FB - football	C
67.	MATSUMOTO Takumi (19694)	7 Aug 1989	M	FB - football	C
68.	MATSUSHITA Tetsuya (14833)	2 May 1974	M	TE - doubles	C
				TE - mixed doubles	
				TE - singles	
69.	MINAMI Eiichi (7293)	29 Nov 1948	M	JU - 73 - 81kg	C
70.	MINOHARA Yukari (21347)	17 Jan 1983	W	BK - basketball	C
71.	MISONO Yumi (21345)	11 May 1987	W	FB - football	C
72.	MIYAKE Riho (21346)	8 Aug 1992	W	BK - basketball	C
73.	MIYAYAMA Kenji (19845)	11 Nov 1974	M	JU - 66 - 73kg	C
74.	MIYAZAKI Daisuke (19477)	26 Feb 1979	M	BD - doubles	C
				BD - mixed doubles	
				BD - singles	
				BD - team	
75.	MIZUTANI Tetsuya (14827)	25 Jul 1974	M	SW - 100m butterfly	C
				SW - 100m freestyle	
				SW - 4x100m freestyle relay	
				SW - 4x100m medley relay	

Japan (JPN)
Athletes
As of 4 Aug 2009

				SW - 4x200m freestyle relay	
				SW - 50m butterfly	
				SW - 50m freestyle	
76.	MOCHIZUKI Shota (19958)	3 Feb 1987	M	TT - doubles	C
				TT - mixed doubles	
				TT - singles	
				TT - team	
77.	MORIMOTO Masatoshi (17741)	28 May 1965	M	AT - hammer throw	N
78.	MOTTE Tomomi (20329)	25 Jan 1973	W	VO - volleyball	C
79.	MURAKAMI Yutaroh (20037)	19 Aug 1985	M	FB - football	C
80.	NAGASAWA Miyuki (20330)	27 Feb 1986	W	VO - volleyball	C
81.	NAKAI Kana (21348)	16 Sep 1988	W	FB - football	C
82.	NAKAJIMA Masayuki (19897)	21 Jun 1982	M	FB - football	C
83.	NAKAMURA Toshio (21349)	17 Dec 1982	M	VO - volleyball	C
84.	NAKANO Tomohisa (20331)	5 Sep 1985	M	VO - volleyball	C
85.	NAKASONE Shoko (19487)	13 Apr 1983	W	FB - football	C
86.	NASUKAWA Yu (20699)	9 Dec 1990	M	FB - football	C
87.	NISHI Masataka (21350)	25 May 1974	M	BK - basketball	C
88.	NISHIKAWA Keita (16402)	1 Oct 1981	M	BK - basketball	C
89.	NISHIMURA Koichi (14835)	26 Jun 1973	M	VO - volleyball	C
90.	NISHIURA Fumishi (19899)	27 Aug 1981	M	FB - football	C
91.	NOBUTA Hiroko (14845)	3 Jan 1977	W	VO - volleyball	C
92.	NOBUTA Mitsunobu (12096)	22 Feb 1971	M	VO - volleyball	C
93.	NOMA Mitsuo (16452)	26 Dec 1978	M	FB - football	C
94.	NORO Kei (16447)	21 Aug 1975	M	FB - football	C
95.	NUMAZAWA Mari (21382)	16 Nov 1981	W	BV - beach volleyball	C
96.	OBA Motomi (18424)	18 Feb 1980	W	BK - basketball	C
97.	ODACHI Tetsuya (21351)	27 Sep 1976	M	BK - basketball	C
98.	OHIRA Yoshitatsu (21352)	20 Jul 1988	M	BK - basketball	X

Japan (JPN)
Athletes
As of 4 Aug 2009

99.	OIKAWA Kiyoshi (14822)	3 Jul 1978	M	BK - basketball	C
100.	OKAMOTO Kaori (12930)	11 Dec 1975	W	VO - volleyball	C
101.	OKAZAKI Hiromi (16462)	21 Jun 1980	W	VO - volleyball	C
102.	OKEGUCHI Tomohiro (19893)	12 Jul 1978	M	FB - football	C
103.	OKUMURA Hagiwa (20073)	13 Aug 1988	W	AT - javelin throw	C
104.	ONUMA Koji (21356)	20 Nov 1981	M	BK - basketball	C
105.	OSHIMA Ayaka (21358)	10 Nov 1991	W	FB - football	C
106.	SANO Kasumi (21359)	30 May 1986	W	FB - football	C
107.	SATO Aika (21362)	11 May 1985	W	FB - football	C
108.	SATO Masamitsu (20670)	20 Jan 1981	M	AT - javelin throw	C
109.	SATO Riho (20701)	28 Oct 1990	W	TT - doubles	C
				TT - mixed doubles	
				TT - singles	
				TT - team	
110.	SATO Yu (20676)	26 Mar 1988	W	AT - javelin throw	C
111.	SEI Tatsuya (20332)	11 Nov 1982	M	VO - volleyball	C
112.	SEKIMOTO Shohei (21360)	26 Jun 1992	M	AT - 100m	C
				AT - 4x100m relay	
113.	SERIZAWA Ikuyo (21361)	8 Oct 1984	W	FB - football	C
114.	SHIGETA Tatsuyoshi (20677)	19 May 1988	M	AT - 100m	C
				AT - 4x100m relay	
				AT - 4x400m relay	
115.	SHIKATA Hisashi (16444)	23 Nov 1976	M	FB - football	C
116.	SHIMADA Yuko (8083)	27 Nov 1971	W	AT - marathon	C
117.	SHIRAI Takashi (21363)	30 Nov 1983	M	FB - football	C
118.	SHIRAISHI Susumu (20679)	10 Oct 1982	M	AT - 400m	C
				AT - 4x100m relay	
				AT - 4x400m relay	
119.	SHUTOH Mai (21366)	10 Sep 1982	W	FB - football	C
120.	SUGAYA Miho (21364)	2 Sep 1989	W	VO - volleyball	C

Japan (JPN)
Athletes
As of 4 Aug 2009

121.	SUGITANI Kaori (16420)	22 Jul 1985	W	BK - basketball	C
122.	SUKAWA Koichi (19847)	19 Aug 1970	M	JU - 81 - 90kg	C
123.	SUZUKI Keiko (16483)	30 Jun 1981	W	VO - volleyball	C
124.	SUZUKI Yukiko (21365)	28 Jun 1977	W	TT - doubles	C
				TT - mixed doubles	
				TT - singles	
				TT - team	
125.	TAKADA Yuji (20680)	3 Nov 1984	M	AT - 400m	C
				AT - 4x100m relay	
				AT - 4x400m relay	
126.	TAKAGISHI Rika (16407)	22 Mar 1990	W	SW - 100m backstroke	C
				SW - 200m backstroke	
				SW - 400m freestyle	
				SW - 4x100m freestyle relay	
				SW - 4x100m medley relay	
				SW - 4x200m freestyle relay	
				SW - 50m backstroke	
				SW - 50m freestyle	
127.	TAKAHASHI Ryuichi (20333)	3 Jan 1988	M	VO - volleyball	C
128.	TAKAHASHI Yuki (19901)	20 May 1980	M	FB - football	C
129.	TAKASE Ria (21367)	6 Sep 1977	W	SW - 100m breaststroke	C
				SW - 200m breaststroke	
				SW - 4x100m freestyle relay	
				SW - 4x100m medley relay	
				SW - 4x200m freestyle relay	
				SW - 50m breaststroke	
130.	TAKEHANA Kotaro (20682)	2 Oct 1986	M	AT - 4x100m relay	C
				AT - pole vault	
131.	TAMURA Tomie (21368)	1 Aug 1984	W	FB - football	C
132.	TANAKA Megumi (21369)	24 Nov 1981	W	FB - football	C
133.	TANAKA Toshinori (20334)	8 Apr 1985	M	VO - volleyball	C
134.	TANZAWA Yusuke (21370)	22 Nov 1985	M	BK - basketball	C
135.	TERAI Nami (21371)	7 Jun 1975	W	FB - football	C

Japan (JPN)
Athletes
As of 4 Aug 2009

136.	TERABAWA Junichi (20693)	2 Oct 1986	M	AT - 4x400m relay	C
				AT - 800m	
137.	TEZUKA Kiyotaka (18410)	4 Jan 1987	M	BK - basketball	C
138.	TOMITA Nozomi (18427)	6 Dec 1984	W	BK - basketball	C
139.	TSUJI Tomohiro (18412)	1 Sep 1983	M	BK - basketball	C
140.	TSUJIOKA Mizue (18896)	28 Aug 1975	W	TE - doubles	C
				TE - mixed doubles	
				TE - singles	
141.	UEDA Daisuke (21372)	19 Nov 1984	M	TT - doubles	C
				TT - mixed doubles	
				TT - singles	
				TT - team	
142.	UEDA Moe (18960)	27 Oct 1989	W	TT - doubles	C
				TT - mixed doubles	
				TT - singles	
				TT - team	
143.	UMEMURA Masaki (12092)	24 Apr 1974	M	TT - doubles	N
				TT - mixed doubles	
				TT - singles	
				TT - team	
144.	WAKAHARA Masayuki (18470)	7 Apr 1983	M	VO - volleyball	C
145.	WATANABE Aki (18425)	8 Oct 1983	W	BK - basketball	C
146.	WATANABE Sayaka (21373)	19 Dec 1988	W	BK - basketball	C
147.	YAMADA Kosei (19840)	11 Aug 1981	M	JU - 90 - 100kg	C
148.	YAMADA Masahito (14808)	10 Jun 1965	M	AT - marathon	C
149.	YAMAMOTO Shun (21376)	5 Jun 1992	M	SW - 100m freestyle	C
				SW - 1500m freestyle	
				SW - 200m freestyle	
				SW - 400m freestyle	
				SW - 4x100m freestyle relay	
				SW - 4x100m medley relay	
				SW - 4x200m freestyle relay	

Japan (JPN)
Athletes
As of 4 Aug 2009

150.	YAMANAKA Kohichiro (21377)	27 Aug 1991	M	AT - marathon	C
151.	YAMASAKI Nozomi (18468)	24 Jul 1984	W	VO - volleyball	C
152.	YANAGAWA Naniko (20335)	18 Apr 1988	W	VO - volleyball	C
153.	YOSHIDA Yuka (21378)	21 Jul 1990	W	BK - basketball	C
154.	YUKIMORI Fumiaki (14817)	22 Jan 1982	M	BK - basketball	C

Property of International Committee of Sports for the Deaf

差出人: info@uiss.org
送信日時: 2009年8月4日火曜日 23:03
宛先: taipei2009team@jfd.or.jp
件名: JPN - Team Official

Japan (JPN)
Team Official
As of 4 Aug 2009

	Name (ID #)	Birthdate	Gender	Official
1.	AIDA Takayuki (21001)	7 May 1967	M	Coach/Assistant Coach - BK
2.	AOI Kanako (21966)	19 Oct 1984	W	Coach/Assistant Coach - BK
3.	AWANO Tatsuhito (17917)	10 Jun 1956	M	Leader/Director/Manager
4.	EBISAWA Akitsu (21955)	24 Jun 1977	W	Coach/Assistant Coach - VO
5.	ENDO Masaharu (21964)	11 Jan 1967	M	Coach/Assistant Coach - VO
6.	HAYASHI Satken (16415)	9 Jul 1953	M	Coach/Assistant Coach - BK
7.	HEMMI Shinkichi (14652)	6 Oct 1965	M	Coach/Assistant Coach - BW
8.	HIGASHIGUCHI Hiroya (16494)	28 Apr 1978	M	Coach/Assistant Coach - AT
9.	HOSHINO Tadashi (21997)	11 Oct 1960	M	Medical
10.	IDE Keiko (21963)	23 Dec 1962	W	Coach/Assistant Coach - TT
11.	IGARASHI Satoru (14858)	23 May 1964	M	Coach/Assistant Coach - BK
12.	IMAI Tatsuyuki (21962)	19 Apr 1978	M	Coach/Assistant Coach - BV
13.	IMANISHI Nobuyuki (21971)	20 Nov 1972	M	Coach/Assistant Coach - TT
14.	INABE Chukei (21970)	3 Feb 1948	M	Coach/Assistant Coach - TE
15.	ISHIBASHI Chigusa (21968)	9 Apr 1978	W	Coach/Assistant Coach - JU
16.	ISHII Mikio (16499)	10 Aug 1953	M	Coach/Assistant Coach - BD
17.	ISHIMIZU Masayuki (21969)	3 Feb 1962	M	Coach/Assistant Coach - TE
18.	IWASHITA Tadamasa (21972)	29 Jul 1979	M	Coach/Assistant Coach - VO
19.	KAJINO Chikako (21974)	2 Feb 1970	W	Coach/Assistant Coach - TE
20.	KAMOSHITA Kazuko (17918)	5 Jun 1971	W	Leader/Director/Manager
21.	KANEKO Masaru (21973)	23 Mar 1986	M	Coach/Assistant Coach - VO
22.	KAWABATA Takao (7909)	11 Dec 1958	M	Coach/Assistant Coach - FB
23.	KAWABE Takahisa (16479)	15 May 1962	M	Coach/Assistant Coach - VO
24.	KAYAMORI Kasumi (21975)	18 Apr 1988	W	Coach/Assistant Coach - BK
25.	KINOSHITA Chiyo (21976)	10 Aug 1984	W	Coach/Assistant Coach - BK
26.	KITA Kazuyuki (21978)	28 Jul 1975	M	Coach/Assistant Coach - FB
27.	KITA Kiyomi (21977)	30 Nov 1961	W	Coach/Assistant Coach - AT
28.	KOBAYASHI Masayuki (21979)	31 Dec 1963	M	Interpreter
29.	KOKUZAWA Kei (22103)	4 May 1983	M	Interpreter
30.	KOTOKU Aiko (21980)	25 Feb 1968	W	Coach/Assistant Coach - VO
31.	MATSUSHITA Ken (20006)	22 Feb 1988	M	Coach/Assistant Coach - TT
32.	MIYASHITA Akinobu (19843)	18 Jun 1960	M	Coach/Assistant Coach - KT
33.	MONOI Akiko (12928)	7 Oct 1967	W	Coach/Assistant Coach - VO
34.	MORIMOTO Naoki (21981)	12 Jun 1971	M	Coach/Assistant Coach - TE
35.	MURAYAMA Jun (21984)	9 Mar 1977	W	Coach/Assistant Coach - SW
36.	NAKAGAWA Miyuki (22022)	14 May 1975	W	Interpreter

Japan (JPN)
Team Official
As of 4 Aug 2009

37.	NAKAJIMA Yukinori (16480)	21 Aug 1952	M	Medical
38.	NAKAYAMA Tsuyoshi (21983)	9 Oct 1975	M	Coach/Assistant Coach - FB
39.	NISHIMURA Takuji (21992)	14 Aug 1948	M	Coach/Assistant Coach - TT
40.	OGAKI Nami (14646)	18 Feb 1978	W	Coach/Assistant Coach - VO
41.	OGINO Akiko (22102)	12 Aug 1981	W	Interpreter
42.	OHIRA Eiichi (21985)	25 Jul 1953	M	Coach/Assistant Coach - SW
43.	OISHI Reki (21986)	16 Jan 1985	M	Coach/Assistant Coach - BV
44.	OKAWA Yuji (14836)	27 Nov 1966	M	Leader/Director/Manager
45.	OKAZAKI Yuji (16500)	29 Nov 1962	M	Coach/Assistant Coach - BD
46.	ONOE Naoya (21987)	9 Sep 1969	M	Coach/Assistant Coach - FB
47.	OSAKA Etsuko (16508)	12 Jul 1978	W	Interpreter
48.	OSAKI Kiyomi (21988)	22 Jan 1960	W	Coach/Assistant Coach - VO
49.	OSHIMA Michiko (21989)	28 Dec 1964	W	Medical
50.	OSUGI Yutaka (14666)	18 Dec 1962	M	Leader/Director/Manager
51.	OTA Natsumi (21990)	6 Jul 1988	W	Coach/Assistant Coach - BV
52.	OTA Yosuke (13212)	30 Jun 1968	M	Delegate
53.	RUIKE Takuya (21991)	16 Apr 1975	M	Medical
54.	SAEGUSA Takayuki (21994)	19 Jul 1968	M	Coach/Assistant Coach - AT
55.	SAKAGUCHI Kenji (21993)	31 Jan 1968	M	Coach/Assistant Coach - KT
56.	SAKAMOTO Chikara (16416)	15 Mar 1960	M	Coach/Assistant Coach - BK
57.	SASAKI Mitsuaki (16501)	8 May 1950	M	Coach/Assistant Coach - BW
58.	SASAKI Ryoko (21992)	15 Sep 1958	W	Coach/Assistant Coach - BW
59.	SATO Hiroyuki (21997)	26 Jul 1960	M	Coach/Assistant Coach - FB
60.	SATO Shinji (21998)	11 Jan 1963	M	Coach/Assistant Coach - TT
61.	SEGAWA Nami (17706)	25 Jan 1975	W	Leader/Director/Manager
62.	SHIMOBO Kentaro (16495)	3 Dec 1971	M	Coach/Assistant Coach - AT
63.	SHIMODOZONO Satomi (20078)	2 Apr 1981	W	Coach/Assistant Coach - AT
64.	SUGIMOTO Kazuko (21996)	16 Jan 1958	W	Coach/Assistant Coach - TE
65.	SUMI Eiji (22009)	19 Jun 1963	M	Coach/Assistant Coach - AT
66.	TAGUCHI Tomohiro (21995)	31 May 1973	M	Medical
67.	TAHARA Naoyuki (14853)	26 Feb 1962	M	Coach/Assistant Coach - BD
68.	TAKAHASHI Koji (16463)	10 May 1953	M	Coach/Assistant Coach - FB
69.	TAKAHASHI Saya (21999)	16 Mar 1980	W	Coach/Assistant Coach - TT
70.	TAKAHASHI Tomoko (19844)	15 Feb 1977	W	Coach/Assistant Coach - KT
71.	TAKAI Hiroshi (22001)	8 Feb 1974	M	Interpreter
72.	TAKATA Tomoko (22000)	27 Jan 1969	W	Medical
73.	TAKEHARA Kazuya (22005)	17 Apr 1978	M	Coach/Assistant Coach - AT
74.	TAKEI Motoi (22004)	16 Jan 1981	M	Coach/Assistant Coach - FB
75.	TAKUWA Shinji (7010)	31 Jul 1962	M	Coach/Assistant Coach - VO
76.	TANAKA Katsuko (22002)	22 Oct 1941	W	Coach/Assistant Coach - AT
77.	TANIGAMI Hiroki (22003)	5 Mar 1978	M	Coach/Assistant Coach - TT

Japan (JPN)
Team Official
As of 4 Aug 2009

DEAFLYMPICS
TAIPEI 2009

78. TANIGUCHI Yasunori (14820)	3 Jul 1974	M	Coach/Assistant Coach - BK
79. TATSUGAWA Tomotaka (16484)	5 Feb 1978	M	Coach/Assistant Coach - FB
80. TOMITA Shigeru (22007)	2 Oct 1953	M	Coach/Assistant Coach - TT
81. TOYODA Tadashi (7617)	20 Sep 1956	M	Coach/Assistant Coach - SW
82. TOYOSHIMA Emiko (13216)	29 Jun 1968	W	Interpreter
83. TSUKADA Tomohiro (22006)	10 Dec 1979	M	Coach/Assistant Coach - FB
84. UMEMOTO Sachiko (14844)	3 Jul 1976	W	Coach/Assistant Coach - VO
85. URAKI Naoko (22020)	6 Sep 1977	W	Interpreter
86. WATABE Yusuke (22008)	19 Mar 1981	M	Coach/Assistant Coach - JU
87. WATANABE Takahiro (22010)	24 Feb 1988	M	Coach/Assistant Coach - BD
88. YAJIMA Minoru (22011)	13 Dec 1969	M	Coach/Assistant Coach - VO
89. YAMANE Shoji (17916)	14 Oct 1955	M	Delegate
90. YAMASAKI Go (22013)	20 Jul 1988	M	Coach/Assistant Coach - FB
91. YAMAZAKI Ai (22015)	2 Feb 1984	W	Coach/Assistant Coach - VO
92. YAMAZAKI Keisuke (22012)	14 Mar 1980	M	Coach/Assistant Coach - BK
93. YAMAZAKI Yoichi (14883)	5 Apr 1967	M	Interpreter
94. YANAI Shuhei (22019)	1 Sep 1987	M	Medical
95. YOSHIDA Koji (22014)	30 Aug 1964	M	Coach/Assistant Coach - VO
96. YOSHINO Naoto (22016)	1 Oct 1982	M	Coach/Assistant Coach - BK
97. YU Ling Li (22101)	6 Sep 1955	W	Interpreter
98. YUI Makoto (22021)	3 Feb 1979	M	Interpreter

Property of International Committee of Sports for the Deaf

第 21 回夏季デフリンピック
日本選手団　結団式・壮行会　開催要項

1　開催日時：2009年9月3日（木）　11：00～12：30
2　開催場所：台北フラートンホテル（台北馥敦飯店南京館）17FBallRoom
3　出席者：選手団員
　来賓：日本交流協會代表　齋藤正樹氏
　　台湾日本人会理事長　澤木正隆氏（台湾伊藤忠董事長）
　　台北日本工商会理事長　小椋和平氏（台湾三菱商事董事長）
4　式次第（予定）
　①　開式通告
　②　団長挨拶
　③　来賓挨拶
　④　乾杯
　⑤　歓談
　⑥　日本選手団紹介
　⑦　団旗授与
　⑧　主将決意表明

第 21 回夏季デフリンピック
日本選手団　解団式　開催要項

1　開催日時：2009年9月15日（火）　午後（調整中）
2　開催場所：台北フラートンホテル（台北馥敦飯店南京館）17FBallRoom
3　出席者：選手団員
　来賓：（調整中）
4　式次第（予定）
　①　開式通告
　②　団長挨拶
　③　来賓挨拶
　④　成績発表
　⑤　乾杯
　⑥　歓談
　⑦　各競技チーム成績報告と挨拶
　⑧　団旗の返還
　⑨　主将挨拶
　⑩　閉式通告

【選手・役員必携】

1　はじめに

初めてデフリンピックに出場するとか、自分の技術の程度や海外遠征など、不安な状態にあると思われます。参加決定後、選手団本部、競技団体やコーチからいろいろと注意、指示があると思われますが、項目が多すぎたり、メモに書き落したりということがあっては、折角のチャンスを十分に生かせない結果になることも予想されます。ここでは、心構え、準備から帰国後までの内容を記しておきます。

2　心構え

★　日本代表選手としての自覚を持って行動する。
★　代表選手として悔いのないように練習する。
★　大会参加の経験を生かし、後輩のために役立てる。

3　大会参加まで

1）選手団本部やコーチからの連絡事項
　①　身体に関すること
　　・　健康状態の確認
　　・　常備薬、排便などの生活習慣チェック
　②　競技に関すること
　　・　エントリー種目の決定
　　・　競技規則の熟知
2）生活態度に関して
　①　指示事項は必ずメモを取る。
　②　集団生活のマナー（ルール）を守る。
　　・　時間の厳守
　　・　私物の管理（持ち物に名前を付ける）
　　・　あいさつの習慣
　　・　喫煙場所の厳守
　③　生活習慣を合せること
　　・　食事、シャワー浴、ベッド（メイキングも含む）
　　・　バランスのよい食事に気をつけること。
　　・　貴重品は各自で管理すること。
　　・　時間的、場所的にも制約を受けることが多くあるが、お互いのペースを尊重しながら、睡眠、食事、トレーニング、競技、応援、ミーティング、洗濯、排せつ等の生活リズムを自分でコントロールし、規則正しい生活に心がける。
3）所属するろう協会、居住する都道府県障害福祉課への連絡について。
　①　都道府県・指定都市の障害福祉課等と十分連絡を取り、挨拶などを欠かさないこと。
　②　ユニフォーム等支給されたものは、サイズ、品目を受領後、直ちに確認すること。

4）その他
① 主将（上田 萌選手）旗手（森本真敏選手）の選出。
② 国際手話に慣れておき、簡単な会話も学習しておくこと。

4 大会前までの練習について

1）大会に合わせた練習計画を立て、質の高い練習をすること。
2）初めての国際大会では、雰囲気に慣れなかったり、あがったりするので、各自で競技に集中する方法を持っておく。
3）選手１人になっても競技に参加できるように、競技会の仕組について理解しておくこと。
4）コーチの指示をメモし、頭にいれておくこと。
5）大会参加までの練習で、困ったこと、わからないことがあれば、選手団本部や競技チームに連絡、相談すること。
6）練習終了時に身体のチェックを行なうこと。

5 ユニフォームの着用について

日本選手団として参加する者は、その自覚と誇りを持って選手団公式ユニフォーム（以下「公式ユニフォーム」）を着用しなければならない。
日本選手団より支給された公式ユニフォームは以下の通りである。
1）共通ユニフォーム
ジャージ（上）、ジャージ（下）、ハーフパンツ、ポロシャツ、T シャツ、キャップ、シューズ
2）競技ユニフォーム
3）共通ユニフォームの着用について
結団式、開会式、閉会式及び表彰式、解団式はジャージ（上下）、ポロシャツ、キャップ、シューズを着用すること。
4）バッジ
選手団員は必ず１個を自分用として胸もしくは襟元に付けること。

6 大会会場で

1）競技場、食堂、宿舎、その他の関係施設の位置を確認すること。
2）デフリンピックでは、雰囲気に慣れなかったり、あがったりするので、各自で競技に集中する方法を持っておくこと。
3）なるべく多くの参加者と親交を深めるように努力し、またそれぞれが、日本チームの一員として責任を持った行動をすること。
4）自分の競技が終了しても、日本チームの他の人でまだ競技を控えている人もいるので、他の人への心づかいを忘れないこと。
5）無断に宿舎、競技場を離れないこと、また、単独行動はとらないこと。
6）部屋をきれいに使うこと。
7）パスポート、現金、貴重品の管理をしっかりすること。
8）生水は飲まないこと。

7 毎日の報告について

1）試合結果について
① 各チーム監督は毎日のチームの行動日程及びリザルトを宿舎に戻り次第、選手団本部に提出すること。
② 記録は、選手団本部においてもインターネットで確認する予定である。

8 メディアへの対応について

台北 2009 日本選手団ウェブサイト http://www.jfd.or.jp/sports/21sd/公式報道サイトと定め、写真・映像・記事を発信します。世界でのデフリンピックへの理解が進むことを期待し、メディアに対し積極的に情報を提供します。各競技の選手・コーチも日本選手団として積極的な協力をお願いします。
尚、大会期間中は団員によるインターネットなどでの日記・レポート・解説・ニュース・写真・動画等の発信制約がある為、遵守すること。

■各競技協会のウェブサイト・ブログなどについて
□認められる内容
①記事：各競技のトレーニング・練習・試合結果・報告
②写真：各競技のトレーニング・練習・試合などの写真
□認められない内容
①記事：上記以外すべて
②写真：各競技で同意の得られていない他国チーム選手の肖像自身、他競技、開閉会式
③動画：すべて
■各選手・役員のウェブサイト・ブログなどについて
□認められる内容
①記事：自身の競技や心情、体調、プライベートに関する内容
②写真：自身の肖像(競技活動、開閉会式、表彰を除く)
□認められない内容
①記事：同意の得られていない他の選手に関する内容
②写真：同意の得られていない他の選手の肖像自身、競技活動、開閉会式、表彰の写真
③動画：すべて
■これらの条件遵守期間は競技種目に関わらず全員 2009 年 8 月 31 日～9 月 16 日とする。

【競技中における抗議について】

- ■ 抗議する場合には、必ず団長に報告をすること。
- ■ 下記を熟読し、手順の流れについてつかむこと。
- ■ 抗議する際の申し立て金については競技団体で立替とする。申し立てが認められなかった場合の経費については大会終了後に、競技団体毎に全日本ろうあ連盟へ請求するものとする。

〜〜〜

デフリンピック規則より DG24. 権限・判定権（紛争）

1. ICSD 会長または会長に指名された者は、主催国協会（又は組織委員会）又は大会参加国協会により提出された、大会に関係するあらゆる申立ての仲裁において最高権力を有する。
2. 競技中に試合についてだされた異議については、担当の審判によって判断が下される。これらの審判の判断の対象となるのは、試合結果が決定してから２時間以内に英語で書面で異議を申立てた場合に限られる。紛争に関して、さらに明確にする必要であれば、該当する国際スポーツ連盟規則を参考にしなければならない。
3. 役員の決定に対する申立ては、抗議委員会に提出する。併せて評議員会で決められた額の申立て金を納めるものとする。
4. 抗議委員会の決定に対する申立ては、申立人である選手団の役員が、抗議委員会の決定後、4 時間以内にデフリンピックの審査員団に対しておこなわなければならない。
5. 抗議委員会は５名からなり、１名は技術委員とする。他の４名は組織委員会が指名する。
6. 審査員団は５名で構成し、うち３名は ICSD 執行委員会が指名し、残りの２名は組織委員会が指名する。
7. 申立てが受け入れられた場合、申立て金は訴えを起こした選手団に返却される。
8. 聴力テスト及びドーピングに関する申立ては、（医療委員会、選手委員会などの主要代表者と協議の上）、ICSD 執行委員会が判定権をもつ。

【ドーピング検査の手順】

ドーピング検査の対象競技者は、競技順位やくじで決定されます（従って、予告なしに通告されます）。検査内容・手順はドーピングオフィサーがひとつひとつ説明してくれますので、支持に従ってください。

ドーピングオフィサーからドーピング検査対象となったと通告があった後、検査終了まで、選手の全行動はドーピングオフィサーから監視を受けることになります。同様に、検査中は外部からの異物混入を防ぐために、容器の選択、採尿、そしてその容器を密封するまで、選手本人とドーピングオフィサー双方が確認した上で実施されます。検体は、密封された状態で検査機関に搬送され、尿の成分が分析されます。

その結果 2 週間程度で実施団体に報告されます。その後選手に通知され、陽性の場合、その選手は罰則を適用されます。

1. **ドーピングオフィサーから、検査対象者になったことを通告されたら、検査への同意を確認するための通告書類に署名する（検査を拒否することは規則違反となる。）**
   ＊ドーピングオフィサーから検査対象になった旨を伝えられます。後に種目の出場がある場合などは、オフィサーにその旨を伝えてください。いったん検査室に出頭し、オフィサーの同伴があれば、その後の競技を続けることも表彰式にでることも問題ありません。検査には 1 名の同伴者（コーチなど）を連れて行くことができます。

2. **尿意をもよおすまでウェイティングルームで待機する。**
   ＊検査室には尿を出やすくするために安全なスポーツドリンクや水等が用意されます。採取した尿量が 75ml 以下の場合は、再度の採尿が必要です。

3. **待機中に、いくつかの採取カップの中から、使用するカップを自ら選ぶ。**

4. **採尿する。**
   ＊同性のオフィサーが一緒にトイレに入り、選手が正しく採尿しているかどうかを目で見て確認します。

5. **採取した尿を保管するためにいくつかのサンプルキットの中から使用するものを自ら選ぶ。**
   ＊サンプルキットには外箱に確認用のシールが貼ってあります。また中にボトル 2 本が入っています。あらかじめサンプルキットが密閉されているか、また容器に破損がないか確認します。

6. **2 本のボトルに、指示された量の尿を分注し、しっかりふたをする。**

7. **残った尿で、ph 値と比重を測定する。**

8. **検査 7 日以内に使用した薬物・サプリメントについて申告する。**
   ＊大会前 7 日以内に使用した薬物・サプリメントがあれば、名前・服用量などを申告します。診断書に書いてある薬品と同じものでも申告してください。（大会前に薬名、サプリメント名とその成分がわかるものを英語でメモにして所持することをおすすめします。）

9. **ドーピングコントロール用紙にすべての関係者が署名した後、控えを受け取る。**
   ＊選手と同伴者は記録書の内容が間違いないか確認し、署名をします。

現在使用している‘くすり’は、使用目的ごとに、名前、メーカー、薬品名、番号などを英語でリストにし、常に所持して下さい。（検査で必要となります。）

【報告書作成について】

大会終了後、日本選手団員は「全員」報告書の作成が義務付けられております。

【手順】

① 日本選手団員は報告書を作成→競技団体担当者へ提出。
② 競技団体で取りまとめ→デフリンピック派遣委員会事務局へ提出。

【事務局への提出〆切】

2009年10月13日（火）厳守

※ 事務局提出〆切りを勘案し各競技団体内での〆切を決められますよう、お願い致します。

【報告書の内容】

■選手団員は下記のページ数を厳守して、報告書を作成して下さい。
■事前に作成できる内容は、準備を進めておくことをお勧めします。
■報告書をスムーズに作成できるよう大会期間中はメモを取ることをお勧めします。

1）団長・競技監督（文字数：・4800 字～6400 字）
① 選手の選考について
② 成績一覧
③ 成績と評価
④ チーム（コーチ）体制と各コーチの役割
⑤ 競技スケジュール（旅行スケジュール）
⑥ 大会の競技運営などの報告
⑦ 競技規則の適用（問題点など）
⑧ 大会参加までの準備状況
⑨ 反省・まとめなど

2）スタッフ（競技スタッフ・本部スタッフ）（文字数：1200 字～1600 字）
① 団体内の担当とその内容
② 反省・まとめなど

3）選手（文字数：600 字～800 字）
① 成績に対する自己評価
② 反省・まとめなど

【様式について】

競技団体から事務局へ提出する際には下記の点に注意し、提出下さいますよう、お願い致します。

① パソコン（ワード）で作成。

② 書式
・サイズ：A4 タテ
・文　字：横書き
・余　白：上下左右 2.0cm
・段　組：2 段
・文字サイズ：8 ポイント

※ 文書作成は「ワード」、表については「ワードまたはエクセル」を使用ください。
※ 写真は日本選手団広報担当が撮影したものから選びます（事務局）。

【医療チームマニュアル】

◆メディカルスタッフから選手・スタッフの皆様へ

今回の大会ではメディカルスタッフとして医師・トレーナー・看護師がご一緒しています。
メディカルスタッフの仕事は、皆様の健康管理、病気や怪我の予防や治療を行います。
『メディカルルーム（内科）』、『メディカルルーム（整形外科）』『トレーナールーム』を開設します。

場 所　　フラートンホテル15階　スイートルーム
診療・治療時間　7：30～10：00　19：00～22：00

メディカルルーム（内科）・（整形外科）

2名の医師と看護師が対応します。
- 怪我をした方
- 具合の悪い方(病気)
- 体の調子がいつもと違うと感じる方
- **自分の持ってきた薬を飲む前に**
  眠れない時や気持ちが落ち込んだ時も看護師に気軽に声をかけてください。

トレーナールーム

2名のトレーナーとアシスタントが対応します。
- ケア及びコンディショニングが必要な方は**チームトレーナーと一緒**に来てください。
  ストレッチング指導、テーピング指導、トレーニング指導、アイシング指導、超音波治療、低周波治療、鍼治療、その他のコンディショニングに関わること
- 怪我をして初めて利用する方は医師の診断を受けてください。
- 2回目以降は時間の**予約**をしてください。

診療時間外の急病・怪我をした時 …… 主に夜間や早朝など
緊急連絡先
①メディカルスタッフ：＿＿＿＿＿＿(看護師)　＿＿＿号室
②本部：＿＿＿＿＿＿　＿＿＿号室

競技会場で急病や怪我をしたとき → **メディカルスタッフ**：＿＿＿＿＿＿へ連絡

会場の医療救護所で治療を受ける
（チーム同行のスタッフまたは**メディカルスタッフ**が付添い）

地元の医療機関に運ばれる → **入　院** → **ホテルに帰る**

治療を受けた後ホテルに帰る

問診票に記入したものを持参の上、メディカルルームで診察を受ける

※ 日本チームの医師は、競技会場や台北の医療機関で治療を行うことはできません。
地元の医療機関に付添うことはできます。
※ 各競技団体に配布した問診票に記入し、それを持参の上、メディカルルームにお越しください（発熱がある場合は問診票（2））にもご記入下さい）

大会期間中に守っていただきたいこと

◆自分の健康管理をしましょう

皆様から大会の前に提出していただいた診断書および基本健康調査用紙は大会前に選手の健康状態を把握するための調査で、大会期間中に医師の診察が必要な場合に参考にするものです。

既往（持病）や大会前の怪我が大会期間中に悪化する場合があります。また、大会中に病気になる、怪我をする場合があります。選手の皆様自身で健康管理をすることが大切です。早めに医師やトレーナーに相談することが健康管理です。

大会期間中に病気やけがなどについて心配なことは何でも医療担当者にご相談ください。

うがいと手洗いをしてください。インフルエンザや風邪など、病気を予防します

- **熱が出たときは、必ずメディカルスタッフに連絡してください。**
- **人ごみに出るときはマスクをしましょう。**
- **咳や熱が出たときはマスクをしましょう。**
- **個人（競技団体）で滞在日数分のマスクを持参しましょう。**
- **マスクは1日1枚（使い捨て）使いましょう。**
- **競技チームで体温計を準備してください。**

千通研イラスト集
見て納得！守れる健康 ～良くわかる医療知識～より

◆自分で持ってきた薬を飲む前に、必ず医療スタッフに相談してください。
（自分の判断で飲まない）

①アンチドーピング（ドーピングを禁止する）について

アンチドーピングとは、ドーピングから『スポーツを守る』ことです。

ドーピングとは、競技能力を高めるために薬物などを**不正**に使用することです。

世界ドーピング防止規程および日本ドーピング防止規程により、ドーピング防止規則違反となる事項が規定されています。

ドーピング防止規則違反は、ドーピング検査で禁止物質が検出された場合、禁止薬物や禁止方法の使用が証明された場合、ドーピング検査を拒否した場合、公正なドーピング検査を妨害した場合、あるいは監督・コーチなどの関係者が競技者へドーピング規則違反を行った場合などに適用されます。

ドーピングは、

(1) 選手自身の健康を害します
(2) 不誠実（アンフェア）です
(3) 社会悪です
(4) スポーツ固有の価値を損ねるものです。

②個人で携帯した薬剤について

市販の薬にも禁止物質は含まれています。風邪薬（総合感冒薬）や鼻炎の薬にはエフェドリンなどの禁止物質が含まれている場合があります。葛根湯などの漢方薬には麻黄を含むものがあり、禁止物質のエフェドリンが含まれています。また、市販の胃腸薬の中には禁止物質の興奮薬ストリキニーネ（ホミカ）を含むものもあり、要注意です。

滋養強壮薬の一部には、禁止物質のメチルテストステロン（蛋白同化薬）が含まれています。海外で、サプリメントとして市販されている DHEA（デヒドロエピアンドロステロン）は禁止物質（蛋白同化薬）です。ドリンク栄養剤、毛髪・体毛薬、咳止め、痰の薬、サプリメントと呼ばれる栄養補助食品にも禁止の成分が含まれる場合があります。

治療で禁止薬物を使用する必要のある場合は TUE を申請してください。ただし、TUE 申請が承認されるのは、禁止薬物以外に代替治療がない場合に限られます。

日本選手の TUE の申請は大会参加前に済ませています。

大会期間中に新たに TUE 申請したうえで薬剤を使用することがありますので医師にご相談ください。

TUE(治療目的使用に係る除外措置)は禁止物質・禁止方法を治療目的で使用したい競技者が申請して、認められれば、その禁止物質・禁止方法が使用できる手続きです。

③点滴はできません

選手は治療目的の点滴ができません。ドーピング防止規則違反です。

◆熱中症の症状に注意しましょう。

９月の台北は気温や湿度が高く、熱中症になる場合があります。予防のため水やスポーツドリンクを飲みましょう。

水は、ミネラルウオーターを飲みます。水道水や生水は飲まないようにします。

千通研支部だより

表１ 熱中症の重症度分類

（出典：日本神経救急学会）

参考

選手・役員記入

問診用紙（１）

受診される方もしくは代理の方が記入ください。受診日＿＿＿月　＿＿＿日

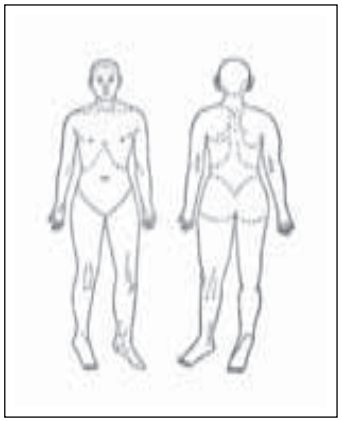
氏名：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　　性別：男・女

生年月日：昭和・平成　＿＿＿年　＿＿＿月　＿＿＿日　年齢：＿＿＿歳

[（どちらかに○をお付けください）　選手　,　役員　]

競技名:＿＿＿＿＿＿＿＿[種目（階級・ポジション）:＿＿＿＿＿＿＿＿]

１．　どんなことで診察を希望されましたか？



２．　診てもらいたいところを右図に○をつけてください

３．　これまでの主な病気やけがを記入ください。

病気＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

けが＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

４．　現在、服用中の薬（あり、なし）　薬品名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

５．　薬物アレルギー　（あり、なし）　薬品名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

６．　食物アレルギー　（あり、なし）　食物名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

７．　女性にお尋ねします。妊娠の可能性はありますか？（あり、なし）

ご記入ありがとうございました

発熱がある方は裏面にも記入下さい

以下はメディカルスタッフが記入　問診用紙を確認したスタッフ氏名＿＿＿＿＿＿＿＿

予想される問題点；どちらかに○を付ける　　内科系　,　外科系

＊　当用紙に記載された内容は、台北デフリンピック日本選手団として必要なことのみに使用いたします

参考

選手・役員記入

問診用紙（2）

以下のどちらかに○をお付けください

１．　38度以上の発熱が２４時間以内にある。

はい　　いいえ

２．　鼻水・鼻づまり、のどの痛み、咳、発熱または熱感や悪寒がある。

はい　　いいえ

３．　10日以内に新型インフルエンザ患者と濃厚な接触をした（その患者が発症1日前から発症後7日目までの9日間の感染期間内に接触した）。

はい　　いいえ

ご記入ありがとうございました

以下はメディカルスタッフが記入　　問診用紙を確認したスタッフ氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

どちらかに○を付ける　新型インフルエンザは　　疑いあり　，　疑いなし

＊　当用紙に記載された内容は、台北デフリンピック日本選手団として必要なことのみに使用いたします

参考

新型インフルエンザ相談票

相談依頼年月日		平成２１年　月　日　午前　・　午後　：
相談依頼者		部屋番号
		氏　名
		年　代　10 歳未満（　歳）・10 代・20 代・30 代・40 代・50 代・60 代・70 代以上
		連絡先　電　話：　（　）　E-mail：　@
1	相談内容	☐ 38度以上の発熱が24時間以内にある ☐ 鼻水・鼻づまり、のどの痛み、咳、発熱または熱感や悪寒がある ☐ 10日以内に新型インフルエンザ発生地域に行かれ病人と接触した ☐ 10日以内に新型インフルエンザ患者と濃厚な接触をした （その患者が発症1日前から発症後7日目までの9日間の感染期間内に接触） ☐ 現在、インフルエンザに感染していて、相談したいことがある。 ・具体的な相談内容を記載してください。
2	新型インフルエンザ相談窓口からの連絡方法について、以下のどちらを希望しますか。	☐ 電　話による回答を希望する。 ☐ E-mailによる回答を希望する。
3	備考	

【東京海上の保険が即時適用される医療施設】

	HOSPITAL		TEL NO.	ADDRESS
★	馬偕紀念病院	Mackay Memorial Hospital (フラートンホテルから約 10 分)	02-2543-3535	台北市中山北路 2 段 92 号
	天母英明診所		02-2874-5958	台北市天母東路 69 巷 7 号
	宇生診所		02-2871-8542	台北市中山北路 7 段 56 号
	甲子児科		02-2871-9191	台北市天母北路 68-10 号
	天母忠明眼科		02-2873-4567	台北市天母西路 3 号 5F 之 3
	むさしのクリニック		02-2876-6955	台北市天母東路 8 巷 19 弄 5 号
	台安医院	Taiwan Adventist Hospital (フラートンホテルから約 25 分)	02-2771-8151	台北市八徳路 2 段 424 号
	宗北内児科診所		02-2541-1001	台北市民生西路 24 号
	陳耳鼻科医院		02-2541-9088	台北市中山北路 2 段 20 巷 1-4 号
	鄭光志小児科診所		02-2726-6132	台北市松山路 484 号
	劉輝雄連合診所		02-2560-2586	台北市吉林路 245 号
	羅氏皮膚科診所		02-2874-3222 02-2874-3223	台北市中山北路 7 段 14 巷 2 号 2F

★印→台北デフリンピック指定医療施設

誓約書

私は、第 21 回夏季デフリンピック（台北 2009）の日本選手団員として、財団法人全日本ろうあ連盟デフリンピック派遣委員会の意向に従い、以下の事項について誓約いたします。

1，第 21 回夏季デフリンピック（台北 2009）の日本代表としての名誉を保ち、国際ろうスポーツ委員会の規則を遵守して競技・行動すること。

2，出発前までに配布する選手団必携を熟読し、派遣期間中は団長の指示・決定に従い、規律を守り集団行動に努めること。

3，国際アンチ・ドーピング機構規程および関連ドーピング規定を遵守すること。

4，派遣期間中、組織委員会の許可した報道機関および日本選手団事務局の撮影・録音・インタビュー等には、極力応じること。

5，財団法人日本障害者スポーツ協会、財団法人全日本ろうあ連盟の主催および許可した行事への参加要請に応じること。

6，公式ユニホームの支給を受けた団員は、ユニホームを他人に譲ったり売買しないこと。

以　上

2009 年　　月　　日

競　　技：

自 筆 署 名：　　印

保護者署名：　　印

※未成年の場合は保護者のサインを添えて提出

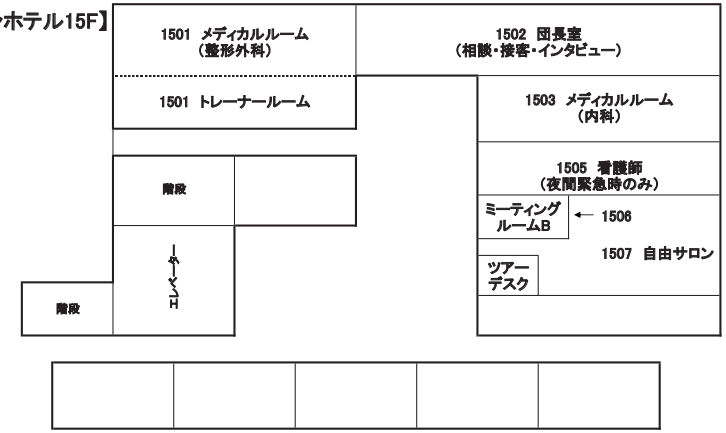
財団法人全日本ろうあ連盟

デフリンピック派遣委員会

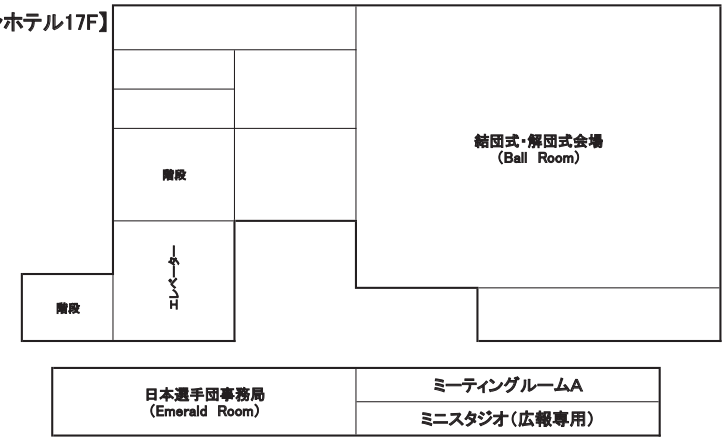
委員長　石野 富志三郎　殿

【フラートンホテル　15F・17F　見取図と事務局、各施設の開所時間】

【フラートンホテル15F】



【フラートンホテル17F】



(15F)メディカルルーム (15F)トレーナールーム	7:30 ～ 10:00 ／ 19:00 ～ 22:00
(17F)本部事務局 (15F)サロン	7:30 ～ 23:00
(17F)ミーティングルームA (15F)ミーティングルームB	7:30 ～23:00（予約制）

＝メモ＝

＜台北 2009 日本選手団の編成にかかる指針＞
全日本ろうあ連盟スポーツ委員会
2007 年 10 月 27 日策定

はじめに

第 21 回デフリンピック夏季大会（台北 2009）に、

(1)高水準の競技に適切な準備ができている競技者のみを派遣し、

(2)競技者が持てる能力を最大限に引き出す環境を整えるために、

スポーツ委員会は日本選手団編成にかかる指針をここに策定し、全日本ろうあ連盟 2007 年度第 3 回理事会報告後の 11 月 19 日に発表する。この指針は全日本ろうあ連盟が立ち上げる予定の派遣委員会にあらためて報告されるほか、国民に広く公開されるものである。

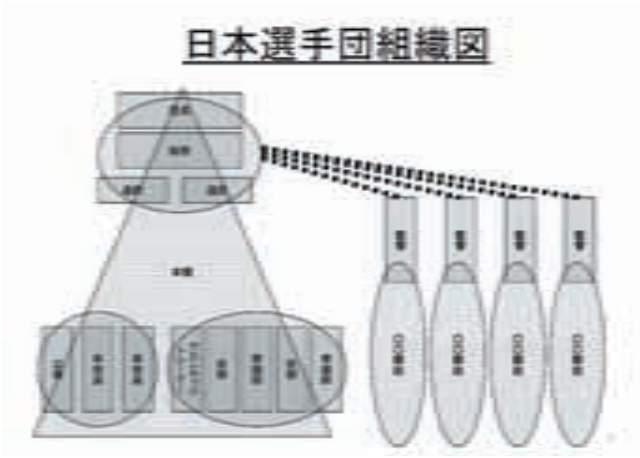
各競技団体はこの指針をもとに台北 2009 でメダルを競えるための選手強化及びチーム編成準備を行う。

選手団編成について

従来は団長、総監督、事務局長を置いてきたが、競技上の様々な対応を迅速に行う指示系統の観点から、今回は、団長と総監督を同一人物が務めることとし、総監督は廃止、事務局長を総務に変更する。

団長の任務は全日本ろうあ連盟の設ける派遣委員会によって委託された職務に加えて、国際ろう者スポーツ委員会(ICSD)事務局、デフリンピック組織委員会(DCOC)事務局との連絡調整を行うことになる。

なお、日本選手団と別途にスポーツ委員会代表が ICSD 総会への出席を目的として派遣されるべきであり、この代表は日本選手団を監督する立場におかれる。



総務：団長の指示を受けて本部を統括する。

通訳：団長付きとして英語及び手話通訳を交替で行う。

広報：選手団の広報を統括し、メディアへの対応を行う。

事務員：デフリンピック組織委員会との連絡・調整を行って選手団滞在にかかる事務を行う。英語上級レベルが求められる。

アスレチックトレーナー：医師・看護師と連携して、選手の体調管理に関して各競技チーム（のトレーナー）にアドバイスを行う。手話上級レベルが求められる。

医師：アスレチックトレーナー・看護師と連携して、医療処置及び予防を行うほか、アンチドーピング管理に関して各競技チームにアドバイスを行う。手話上級レベルが求められる。

看護師：医師と連携して、医療処置及び予防を行う。選手と直接意思疎通を図り、医師と選手の意思疎通を支援するために、手話通訳士・者資格の所持が求められる。

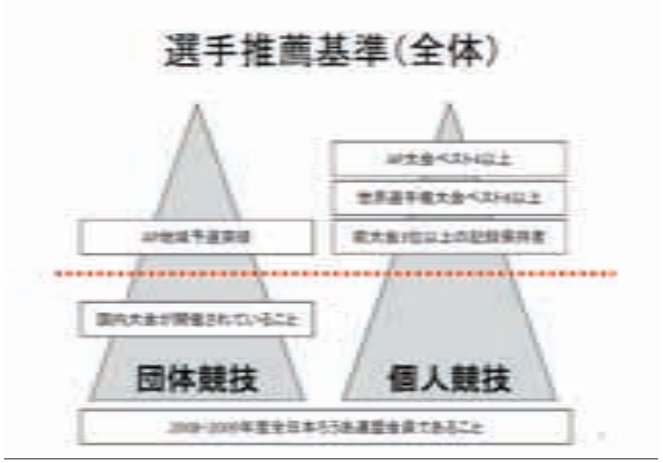
監督：団長と連携して各競技チームの統括を行う。各競技 TD 等との連絡調整・チームメンバーへの指導も含む。

選手推薦基準について

高水準の競技に適切な準備ができていて、メダルの可能性がある競技者のみを「台北 2009」に日本代表として派遣するために、各競技団体は次に示す推薦基準に基づいて選手の推薦を行う。スタッフについては基準を特に設けない。

各競技団体は推薦する選手・スタッフがデフリンピックの精神及び世界アンチ・ドーピング規定について十分に認識しこれに従って日本選手団団員として行動することを保証しなければならない。

聴覚障害を持つ日本選手団団員は少なくとも 2008・2009 年度において全日本ろうあ連盟会員でなければならない。



サッカー競技

男子はクウェート 2008 で開催される地域予選を突破すること

女子は本選出場がほぼ決定しているが、2008 年度中に国内で少なくとも 3 チーム以上による大会が実施され、その結果による全国からの選抜チームであること

両方とも、チームメンバー選出は日本ろう者サッカー協会の定めるところによる。

バレーボール競技

男子・女子ともに本選出場がほぼ決定しているが、2008 年度中に国内で少なくとも 4 チーム以上による大会が実施され、その結果による全国からの選抜チームであること

両方とも、チームメンバー選出は日本ろうあバレーボール協会の定めるところによる。

バスケットボール競技

男子・女子ともに本選出場がほぼ決定しているが、2008 年度中に国内で少なくとも 4 チーム以上による大会が実施され、その結果による全国からの選抜チームであること

両方とも、チームメンバー選出は日本聴覚障害者バスケットボール協会の定めるところによる。

卓球競技

クウェート 2008 でベスト 4 の選手

2008 年 7 月の世界選手権大会でベスト 8 の選手

上記選手を日本ろうあ卓球協会の管理する 2008 年度ランキングで上回る選手

陸上競技

2008 年 9 月の世界選手権大会で決勝進出の選手

上記大会 8 位記録又はメルボルン 2005 大会の 3 位記録を超える公認記録を 2008 年 9 月から 2009 年 5 月までの間に出した選手

オリエンテーリング競技

国内普及が重要課題である現状では推薦の見込みがない。

ただし、ICSD の TD から、完走できるレベルでも若手を派遣していただきたいという要請があることに留意する。

テニス競技

2008 年アジアパシフィックオープンベスト 4 の選手

上記選手を ICSD テニス TD の定める 2008 年度ランキングで上回る選手

ビーチバレーボール競技

2008 年度もしくは 2009 年度初めまでに国内で 8 ペア以上による大会を実施し、その大会で優勝したペア

バトミントン競技

2007 年 9 月の世界選手権大会ベスト 8 の選手

上記選手を日本ろう者バドミントン協会の管理する 2008 年度ランキングで上回る選手

水泳競技

2007 年 8 月の世界選手権大会 6 位以上の選手

上記大会 6 位記録を超える公認記録をクウェート 2008 など 2008 年度中に出した選手

ボウリング競技

2008 年開催予定の世界選手権大会で 8 位以上の選手

上記選手を日本ろうあ者ボウリング協会の管理する 2008 年度ランキングなどで超える選手

空手競技

2008 年 5 月の世界選手権大会でベスト 8 の選手

テコンドー競技

2008 年 5 月の世界選手権大会でベスト 8 の選手

柔道競技

2008 年 5 月の世界選手権大会でベスト 8 の選手

各競技チームのスタッフ

デフリンピックで定める各競技につき最低 1 名のスタッフを保証する。

選手 4 名毎に 1 名のスタッフを保障する。(バスケットボールの場合は、1 名＋6 名の 7 名となる)

スタッフにどの役割を振るかは各競技チームが決定する。

ただし、監督・トレーナーは必ず置くこと。

保証人数を超えるスタッフの配置は自由とするが、各競技協会が経費を負担することとする。

以上

様式1

第21回夏季デフリンピック（台北２００９）

競技団体調査書

（記入日　　年　　月　　日）

競技団体名				
所在地	〒			
TEL		FAX		
E-Mail				
連絡責任者	氏名			
	役職			
	所在地	〒		
	TEL		FAX	
	E-Mail			
第21回夏季ﾃﾞﾌﾘﾝﾋﾟｯｸ（台北2009）担当者	氏名			
	役職			
	所在地	〒		
	TEL		FAX	
	E-Mail			
メディア（広報）担当者	氏名			
	役職			
	所在地	〒		
	TEL		FAX	
	E-Mail			
第21回夏季デフリンピック推薦選手数				
推薦人数	選手　　名			

＊この様式は、日本選手団広報のためのメディア配布資料となります。

様式2

第21回夏季デフリンピック（台北２００９）

強化スケジュール

競技名

第21回夏季デフリンピック（台北２００９）までの強化活動計画を詳しく記入してください。

（記入日　　年　　月　　日）

強化内容（該当に○）	実施期日	実施場所 所在地	参加人数 選手	コーチ	総数
合宿 競技会（　　） その他（　　）	月　日 ～　月　日	〒 住所 TEL			
合宿 競技会（　　） その他（　　）	月　日 ～　月　日	〒 住所 TEL			
合宿 競技会（　　） その他（　　）	月　日 ～　月　日	〒 住所 TEL			
合宿 競技会（　　） その他（　　）	月　日 ～　月　日	〒 住所 TEL			
合宿 競技会（　　） その他（　　）	月　日 ～　月　日	〒 住所 TEL			
合宿 競技会（　　） その他（　　）	月　日 ～　月　日	〒 住所 TEL			
合宿 競技会（　　） その他（　　）	月　日 ～　月　日	〒 住所 TEL			
合　計					

＊この様式は、日本選手団広報のためのメディア配布資料となります。
＊参加人数は第２１回夏季デフリンピック（台北２００９）参加予定者を記入して下さい。

様式３

第21回夏季デフリンピック（台北２００９）

日本代表推薦選手一覧表（個人競技用）

競技名	

（記入日　　年　　月　　日）

順位	氏名	推薦の理由（メダル、入賞の可能性を具体的に記入すること）
【例】	○○　○○	2001年のアジア太平洋ろう者競技大会、バドミントン個人３位。また、2006年、2007年全国ろうあ者体育大会でダブルス優勝した。
1		
2		
3		
4		
5		
6		
7		
8		
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		
16		
17		
18		
19		
20		

＊当用紙に記載された内容は、第２１回夏季デフリンピック（台北２００９）日本選手団として必要なことのみに使用いたします。

様式3-1

第２１回夏季デフリンピック（台北２００９）

日本代表選手推薦一覧表(団体競技用)

競技名	

（記入日　　年　　月　　日）

順位	氏名	推薦の理由（チーム内の役割、ポジション等も含め具体的に記入すること）	
例）1	○○　○○	キーパー	ソルトレークシティ大会より日本の正ゴールキーパーで、2003年の世界選手権では、4試合での失点は、1試合平均2点で、鉄壁の守備であった。
例）2	○○　○○	フォワード	2003年の世界選手権大会では、4試合で5点をあげ、日本の最高得点を得、世界選手権の得点ランキング4位であった。
1			
2			
3			
4			
5			
6			
7			
8			
9			
10			
11			
12			
13			
14			
15			
16			
17			
18			
19			
20			

＊当用紙に記載された内容は、第２１回夏季デフリンピック日本選手団として必要なことのみに使用いたします。

様式4

第２１回夏季デフリンピック（台北２００９）
日本代表推薦選手調査書

競技名	

（記入日　　年　　月　　日）

氏　名	性		名	性別
ふりがな				
漢　字				男
ローマ字				女
出生地	都道府県		市郡	
生年月日	19　年　月　日　歳　（2009年4月1日現在）			
パスポート有・無	名前ローマ字		有効期限	年　月　日
	旅券番号		国籍	
現住所	ふりがな			
	住所	〒		
	自宅の最寄駅	（JR　・　私鉄　）　線　駅		
	自宅TEL		携帯TEL	
		自宅に手話通訳できる人がいる　・　いない	携帯　E-Mail	
	自宅FAX		PC　E-Mail	
住民票のある住所 ＊現住所と異なる場合は記入して下さい。	〒			
聴力損失	右　db　／　左　db		身体障害者手帳No.	等級
装具の使用（該当に○）	補聴器（　）　人工内耳（　）　その他（　）			
手話	分かる　・　少し分かる　・　分からない			
国際手話	分かる　・　少し分かる　・　分からない			
勤務先（在籍学校名）	名称			
	所在地	〒		
	所属部署（学年）		役職	
	TEL		FAX	
派遣依頼（必要な場合記入）	会社名			
	所属長名		役職	
	送付先	〒		
緊急連絡先	連絡者氏名	（続柄：　）	TEL/FAX	（連絡方法：　）
未成年の場合保護者氏名	ふりがな			
	名前	（続柄：　）		
	※緊急連絡先と電話番号など違う場合は電話番号／ＦＡＸ番号もご記入ください。			
	TEL　／FAX			

＊当用紙に記載された内容は、第２１回夏季デフリンピック（台北２００９）日本選手団として必要なことのみに使用いたします。

様式5

第２１回夏季デフリンピック（台北２００９）
日本代表選手プロフィール

（記入日２００９年　月　日）

氏　名	性	名	性別	競技名
ふりがな				
漢　字			男	写真欄 ※写真は貼り付けないで下さい。 ※写真の裏に必ず氏名・競技名・選手・役員の別をご記入下さい。 3.5×4.5 3ヶ月以内に撮影
ローマ字			女	
居住地	都道府県　市郡　区町村			
生年月日	19　年　月　日　歳　（2009年4月1日現在）			
出生地	都道府県　市郡	勤務先名		
聴覚障害	ろう　・　難聴　・　中途失聴	業務内容		
手話	分かる　・　少し分かる　・　分からない	身長		cm
出身校 ＊在学の場合は学年記入のこと		体重		kg

この競技・種目を始めたきっかけを教えてください。

この競技・種目の楽しさはなんですか？

ライバル（名前と国名）を教えてください。

目標を教えてください。

目標が達成された時、その喜びを誰に一番伝えたいですか？

ふりがな		関係	ふりがな		関係
名前			名前		

あなたにとってデフリンピックとはなんですか？

デフリンピックでアピールしたいことを書いてください。

＊この様式は、日本選手団広報のためのメディア配布資料となります。

様式6

第２１回夏季デフリンピック（台北２００９）

日本代表選手プロフィール①（個人競技用）

（記入日　　年　　月　　日）

ふりがな		競技名
選手氏名		

メダル獲得予想

種　目	予想

国際大会成績・記録
（アジア太平洋ろう者競技大会・世界選手権大会など含め）デフリンピックの成績は全て記入してください。

開催年	大会名	競技	種目	記録	順位	参加者数

国内大会成績・記録

開催年	大会名	競技	種目	記録（決勝）	順位	参加者数

＊この様式は、日本選手団広報のためのメディア配布資料となります。

様式6-1

第２１回夏季デフリンピック（台北２００９）

日本代表選手プロフィール②（団体競技用）

（記入日　　年　　月　　日）

ふりがな		競技名
選手氏名		

国際大会成績・記録
（アジア太平洋ろう者競技大会・世界選手権大会など含め）デフリンピックの成績は全て記入してください。

開催年	大会名	記録（予選リーグ）		記録（決勝トーナメント）		参加者数

国内大会成績・記録（日本選手権レベルの大会）

開催年	大会名	記録（決勝トーナメント）		参加者数	チーム名

＊この様式は、日本選手団広報のためのメディア配布資料となります。

記入例６(添付１)

第7(8?)回
アジア太平洋ろう者競技大会
日本代表推薦選手プロフィール（個人競技用）

（記入日　2006年　3 月　16 日）

ふりがな	しずくいし　ぎゅうたろう	競技名
選手氏名	雫石　牛太郎	アルペン・スノーボード

メダル獲得予想

種　目	予想
大回転	3位入賞
パラレルスラローム	2位

国際大会成績・記録
デフリンピックの成績は全て記入してください。

開催年	大会名	競技	種目	記録	順位	参加者数
1999	タポス	アルペンスノーボード	大回転		DF	7
		アルペンスノーボード	パラレルスラローム		5位	13
2003	スンツバル	アルペンスノーボード	大回転	1分42秒22	4位	19
		アルペンスノーボード	パラレルスラローム		3位	27

国内大会成績・記録

開催年	大会名	競技	種目	記録（決勝）	順位	参加者数
2004	全国ろうあ者体育大会（富山）	アルペンスノーボード	回転	1分10秒76	1位	8
		アルペンスノーボード	大回転	1分31秒40	1位	6
2005	全国ろうあ者体育大会（岩手）	アルペンスノーボード	回転	1分10秒25	1位	10
		アルペンスノーボード	大回転	1分34秒02	2位	12
2005	岩手県民冬季体育大会	アルペンスノーボード	大回転	1分30秒99	15位	37

様式7

第21回夏季デフリンピック（台北２００９）
推薦競技監督・スタッフ一覧表

競技名	

（記入日　　年　　月　　日）

No.	役職	氏名	推薦の理由（具体的に）
1	監督		
2	スタッフ		
3	スタッフ		
4	スタッフ		
5	スタッフ		
6	スタッフ		
7	スタッフ		
8	スタッフ		
9	スタッフ		
10	スタッフ		

＊当用紙に記載された内容は、第21回夏季デフリンピック（台北２００９）日本選手団として必要なことのみに使用いたします。

様式8

第21回夏季デフリンピック（台北２００９）

推薦競技監督・スタッフ調査書

競技名	

（記入日　　年　　月　　日）

氏　名	性		名		性別
ふりがな					
漢　字					男
ローマ字					女
出生地	都道府県		市郡		区町村
生年月日	19　　年　　月　　日　　歳　（2009年4月1日現在）				
パスポート	名前ローマ字		有効期限	年　　月　　日	
有　・　無	旅券番号		国籍		
現住所	ふりがな				
	住所				
	自宅の最寄駅	（JR　・　私鉄　）　線　　駅			
	自宅TEL		携帯TEL		
	※聴覚障害者の場合、自宅に手話通訳できる人がいる　・　いない		携帯E-MAIL		
	自宅FAX		PC　E-Mail		
住民票のある住所 ＊現住所と異なる場合は記入して下さい。	〒				
装具の使用（該当に○）	補聴器（　　）		人工内耳（　　）		その他（　　）
勤務先	名称				
	所在地	〒			
	所属部署		役職		
	TEL		FAX		
派遣依頼（必要な場合記入）	会社名				
	所属長名		役職		
	送付先	〒			
緊急連絡先	連絡者氏名	（続柄：　　）	連絡先	（連絡方法：　　）	
未成年の場合保護者氏名	ふりがな				
	名前	（続柄：　　）			
	※緊急連絡先と電話番号など違う場合は電話番号／ＦＡＸ番号もご記入ください。 TEL　　／FAX				
語学力（英語）	Reading & Writing	5　4　3　2　1			5段階評価（5が最良）該当の番号に○印
	Listening & Speaking	5　4　3　2　1			

＊　当用紙に記載された内容は、第21回夏季デフリンピック（台北２００９）日本代表選手団として必要なことのみに使用いたします。

様式9

第21回夏季デフリンピック（台北２００９）

競技監督・スタッフプロフィール

（記入日　　年　　月　　日）

氏　名	性	名	性別	競技名
ふりがな				
漢　字			男	写真欄 ※写真は貼り付けないで下さい。 ※写真の裏に必ず氏名・競技名・選手・役員の別をご記入下さい。 3.5×4.5 3ヶ月以内に撮影
ローマ字			女	
現住所	都道府県　　市郡　　区町村			
生年月日	19　年　月　日　歳　（2009年4月1日現在）			
出生地	都道府県　　市町村			
勤務先名				
聴力障害の有無	有　・　無			
手話	手話暦（　　年）／　資格取得→手話通訳士・手話通訳者・その他（　　） 手話レベル→　普通に会話できる　・　挨拶程度　・　覚え始め　・　全く出来ない			

指導者・競技役員等の資格	取得年	資格の内容	備考
	年		
	年		
	年		
	年		
	年		
	年		

国際大会等の参加歴	参加年	大会名	開催地	役職・役割等
	年			
	年			
	年			
	年			
	年			
	年			

所属団体		指導歴	年
競技団体内での役職			

第21回夏季デフリンピック（台北2009）に対して抱負を書いてください。

＊この様式は、第21回夏季デフリンピック（台北２００９）日本代表選手団広報のためのメディア配布資料となります。

様式10

第21回夏季デフリンピック（台北２００９）

日本選手団本部スタッフ調査書

担当	

（記入日　　年　　月　　日）

氏　名	性		名	性別
ふりがな				
漢　字				男
ローマ字				女
出生地	都道府県		市郡	区町村
生年月日	19　　年　　月　　日		歳　（2009年4月1日現在）	
パスポート	名前ローマ字		有効期限	年　　月　　日
有　・　無	旅券番号		国籍	
現住所	ふりがな			
	住所			
	自宅の最寄駅	（JR　・　私鉄　）	線	駅
	自宅TEL		携帯TEL	
	※聴覚障害者の場合、自宅に手話通訳できる人がいる　・　いない		携帯E-MAIL	
	自宅FAX		PC　E-Mail	
住民票のある住所 ＊現住所と異なる場合は記入して下さい。	〒			
装具の使用（該当に○）	補聴器（　　）	人工内耳（　　）	その他（　　）	
勤務先	名称			
	所在地	〒		
	所属部署		役職	
	TEL		FAX	
派遣依頼（必要な場合記入）	会社名			
	所属長名		役職	
		〒		
緊急連絡先	連絡者氏名	（続柄：　　）	連絡先	（連絡方法：　　）
未成年の場合保護者氏名	ふりがな			
	名前		（続柄：　　）	
	※緊急連絡先と電話番号など違う場合は電話番号／ＦＡＸ番号もご記入ください。			
	TEL　　／FAX			
語学力（英語）	Reading & Writing	5　4　3　2　1		5段階評価（5が最良）
	Listening & Speaking	5　4　3　2　1		該当の番号に○印

＊　当用紙に記載された内容は、第21回夏季デフリンピック（台北２００９）日本代表選手団として必要なことのみに使用いたします。

様式11

第21回夏季デフリンピック（台北２００９）

日本選手団本部スタッフプロフィール

（記入日　　年　　月　　日）

氏　名	性	名	性別	担当
ふりがな				
漢　字			男	写真欄 ※写真は貼り付けないで下さい。 ※写真の裏に必ず氏名・担当（例：外科医）をご記入下さい。 3.5×4.5 3ヶ月以内に撮影
ローマ字			女	
現住所	都道府県	市郡	区町村	
生年月日	19　年　月　日	歳　（2009年4月1日現在）		
出生地	都道府県	市町村		
勤務先名				
聴力障害の有無	有　・　無			
手話	手話暦（　　年）／　資格取得→手話通訳士・手話通訳者・その他（　　） 手話レベル→　普通に会話できる　・　挨拶程度　・　覚え始め　・　全く出来ない			

○○士・翻訳など資格	取得年	資格の内容	備考
	年		
	年		
	年		
	年		
	年		
	年		

国際大会等の参加歴	参加年	大会名	開催地	役職・役割等
	年			
	年			
	年			
	年			
	年			
	年			

所属団体	
所属団体での役職	

第21回夏季デフリンピック（台北2009）に対して抱負を書いてください。

＊この様式は、第21回夏季デフリンピック（台北２００９）日本代表選手団広報のためのメディア配布資料となります。

様式1

【別紙１－1】
選手記入

基本健康調査用紙

選手の皆様にお願いします。
皆様の健康を守るための調査用紙なので、できる限り正確に記載して下さい。

医師の診察を受ける前に、Q1～Q8までの質問にお答え下さい。わからない場所は診察の時に、医師が問い合わせますので、記入しなくて結構です。

医師にお願い致します。

選手が記入するこの表紙よりQ1～Q8までの回答状況をチェックし、必要があれば詳しく聞いて記載して下さい。

選手氏名：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　　性別：男・女
生年月日：昭和・平成　＿＿＿年　＿＿＿月　＿＿＿日　年齢：＿＿＿歳
所　属：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　　学年：＿＿＿年生
住　所：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
電　話：＿＿＿（　　）＿＿＿＿　Fax：＿＿＿（　　）＿＿＿＿
E-mail：＿＿＿＿＿＿＿＿
競技名：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　　競　技　歴：＿＿＿年
[種目（階級・ポジション）：＿＿＿＿＿＿＿＿]

聴覚障害の原因となった傷病名：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
聴覚障害の原因となった傷病の発症時期：＿＿＿＿年（頃）
聴覚障害の原因となった傷病に関する手術歴：（有、無）
有の場合　→　＿＿＿＿歳：［手術名…　　］
＿＿＿＿歳：［手術名…　　］
＿＿＿＿歳：［手術名…　　］
聴覚障害に関連した症状が現在ありますか？：（有、無）
有の場合　→　どのような症状に対してどのような対応をしているのかなど具体的にお書きください　：
＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＊　本調査用紙・診断書は、財団法人日本体育協会作成の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を改変して使用しております。
＊　当用紙に記載された内容は、台北デフリンピック日本選手団として必要なことのみに使用いたします

様式1

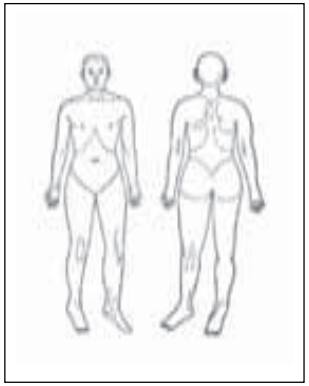
【別紙１－2】
選手記入

Q1. 障害の原因となった傷病以外のこれまでの主な病気・ケガについての質問

Q1-1：これまでに以下の病気をしたことがありますか。
“ない”場合には（　）内に×印、“ある”場合には（　）内に○印を付け、そのケガをした時の年齢を＿＿部に記入、身体図にケガの場所に○を付けて下さい。

1)	貧血	（　）	＿＿歳	2)	喘息	（　）	＿＿歳
3)	高血圧	（　）	＿＿歳	4)	心臓病	（　）	＿＿歳
5)	川崎病	（　）	＿＿歳	6)	腎　炎	（　）	＿＿歳
7)	肝炎	（　）	＿＿歳	8)	胃十二指腸潰瘍	（　）	＿＿歳
9)	てんかん	（　）	＿＿歳				
10)	その他	（　）	＿＿歳	［病名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿］			
		（　）	＿＿歳	［病名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿］			
11)	手　術	（　）	＿＿歳	［病名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿］			
		（　）	＿＿歳	［病名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿］			
		（　）	＿＿歳	［病名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿］			
		（　）	＿＿歳	［病名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿］			
12)	輸　血	（　）	＿＿歳	［病名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿］			
13)	薬物アレルギー			［薬物名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿］			
				［薬物名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿］			
14)	食物アレルギー			［食品名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿］			
				［食品名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿］			

Q1-2：これまでに２週間以上競技や練習の支障となる“ケガ”をしたことがありますか。
ない・ある（＿＿＿歳）
“ある”場合には、右の身体図にケガの場所に○を付けて、病名を上記以外にあれば記入して下さい。



［病名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　］
［病名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　］
［病名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　］

Q1-3：これまでに練習中や試合中に意識を失ったことがありますか。
ない・ある（＿＿＿歳）
病名を上記以外にあれば記入して下さい。
［病名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　］

医師メモ：
＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＊　本調査用紙・診断書は、財団法人日本体育協会作成の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を改変して使用しております。
＊　当用紙に記載された内容は、台北デフリンピック日本選手団として必要なことのみに使用いたします

Q2. 現在の病気やケガについての質問

Q2-1：現在、治療や検査を受けている病気がありますか。

ない・ある［病名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿］

［病名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿］

［病名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿］

医師メモ：

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

Q2-2：普段使用している薬がありますか。

ない

ある：＜①常用（毎日使用）、②頓用（時々使用）、③常用＋頓用＞

※“ある”場合は、『別紙３．使用薬物についての調査書』に記載して下さい

Q2-3：普段使用している健康食品、栄養剤、ビタミン剤、滋養強壮剤（ドリンク剤）などがありますか。

ない

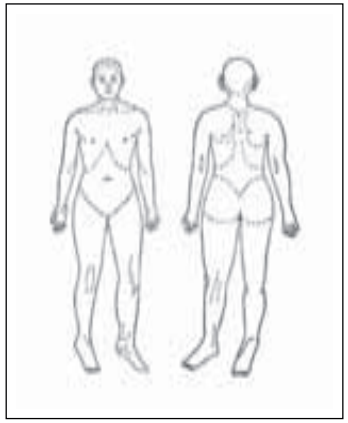
ある（“ある”の場合は、下記に記入して下さい）

品　名	メーカー名	使用頻度	使用量／日
＿＿＿＿＿＿＿＿	＿＿＿＿＿＿	（毎日・時々）	＿＿＿＿＿
＿＿＿＿＿＿＿＿	＿＿＿＿＿＿	（毎日・時々）	＿＿＿＿＿
＿＿＿＿＿＿＿＿	＿＿＿＿＿＿	（毎日・時々）	＿＿＿＿＿

Q2-4：現在、競技や練習の支障となる"ケガ"をしていますか。

ない・ある

※（“ある”の場合は、右の身体図にケガの場所がわかるように○で印を付けて下さい。また具体的に病名を記入してください）



［病名・障害名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿］

［病名・障害名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿］

［病名・障害名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿］

医師メモ：

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＊　本調査用紙・診断書は、財団法人日本体育協会作成の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を改変して使用しております。
＊　当用紙に記載された内容は、台北デフリンピック日本選手団として必要なことのみに使用いたします

Q3：自覚症状についての質問

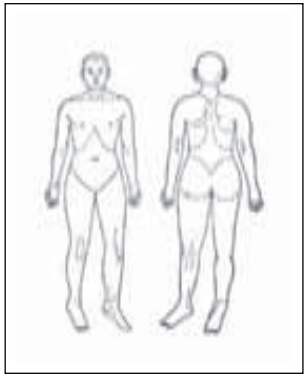
（　）内に"ない"場合には×印、"ある"場合には○印、わからない場合には？印を付けて下さい。

1. 全般

1)	記憶が低下してきた	（　）	2)	練習についていけない	（　）
3)	練習がこなせない	（　）	4)	楽にできた練習がきつくなった	（　）
5)	練習意欲がわかない	（　）	6)	疲れやすい	（　）
7)	疲労がたまっている	（　）	8)	体がだるい	（　）
9)	力が入らない	（　）	10)	たちくらみがひどい	（　）
11)	風邪をひきやすい	（　）	12)	体重の変動が大きい	（　）
13)	体重が減少している	（　）	14)	体重が増加している	（　）
15)	寝付きがわるい	（　）	16)	熟睡できない	（　）
17)	早く目が覚める	（　）	18)	朝起きるのがつらい	（　）

2. 皮膚（右の身体図に問題のある場所に○印を付けて下さい）

1)	褥瘡	（　）
2)	アトピー性皮膚炎	（　）
3)	みずむし	（　）
4)	じんましん	（　）
5)	その他	（　）



3. 頭部

1)	外傷	（　）
2)	頭痛	（　）
3)	その他	（　）

4. 眼

1)	近視	（　）	2)	乱視	（　）	3)	視野異常	（　）
4)	眼鏡	（　）	5)	ｺﾝﾀｸﾄﾚﾝｽﾞ	（　）	6)	痛み	（　）
7)	かゆみ	（　）	8)	めやに	（　）	9)	異物感	（　）
10)	かわき	（　）						
11)	その他	内容：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿						

＊　本調査用紙・診断書は、財団法人日本体育協会作成の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を改変して使用しております。
＊　当用紙に記載された内容は、台北デフリンピック日本選手団として必要なことのみに使用いたします

5. 耳

1) 痛み ( ) 2) 耳だれ ( ) 3) 耳鳴り ( )
4) めまい ( ) 5) 聴力障害 既述 ( )
6) その他 ( ) 内容：＿＿＿＿＿＿＿＿

6. 鼻

1) 鼻水 ( ) 2) 鼻づまり ( ) 3) 鼻血 ( )
4) その他 ( ) 内容：＿＿＿＿＿＿＿＿

7. のど

1) へんとう腺炎 ( ) 2) のどの痛み ( ) 3) しわがれ声 ( )
4) その他 ( ) 内容：＿＿＿＿＿＿＿＿

8. 口腔

1) 虫歯 ( ) 2) 歯痛 ( ) 3) 歯ぐきの出血 ( )
4) その他 ( ) 内容：＿＿＿＿＿＿＿＿

9. 頸部

1) リンパ節炎 ( ) 2) 甲状腺の腫れ ( ) 3) その他 ( )
4) その他 ( ) 内容：＿＿＿＿＿＿＿＿

10. 呼吸器

1) せき ( ) 2) たん ( ) 3) ぜんそく ( )
4) 呼吸困難 ( ) 5) 息切れ ( ) 6) 喀血 ( )
7) 過換気症候群 ( )
8) その他 内容：＿＿＿＿＿＿＿＿

11. 循環器

1) どうき ( ) 2) 胸痛 ( ) 3) むくみ ( )
4) 心雑音 ( ) 5) 不整脈 ( ) 6) 高血圧 ( )
7) その他 内容：＿＿＿＿＿＿＿＿

12. 血管系

＊　本調査用紙・診断書は、財団法人日本体育協会作成の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を改変して使用しております。
＊　当用紙に記載された内容は、台北デフリンピック日本選手団として必要なことのみに使用いたします

1) 静脈瘤 ( ) 2) 静脈炎 ( ) 3) 血行障害 ( )
4) その他 内容：＿＿＿＿＿＿＿＿

13. 消化器系

1) 吐き気 ( ) 2) 嘔吐 ( ) 3) 胸やけ ( )
4) 消化不良 ( ) 5) 食欲不振 ( ) 6) 下痢 ( )
7) 便秘 ( ) 8) 腹痛 ( ) 9) 黄だん ( )
10) 痔 ( )
11) その他 内容：＿＿＿＿＿＿＿＿

14. 泌尿器

1) 頻尿 ( ) 2) 排尿痛 ( ) 3) 血尿 ( )
4) 尿が濁りやすい ( ) 5) 結石 ( ) 6) 蛋白尿 ( )
7) 糖尿 ( )
8) その他 内容：＿＿＿＿＿＿＿＿

15. 血液

1) 貧血 ( ) 2) 出血傾向 ( )
3) その他 内容：＿＿＿＿＿＿＿＿

16. 神経系

1) けいれん ( ) 2) てんかん ( ) 3) めまい ( )
4) 知覚障害 ( ) 5) 失神 ( ) 6) 意識障害 ( )
7) 運動障害 ( ) 8) 記憶障害 ( )
9) その他 内容：＿＿＿＿＿＿＿＿

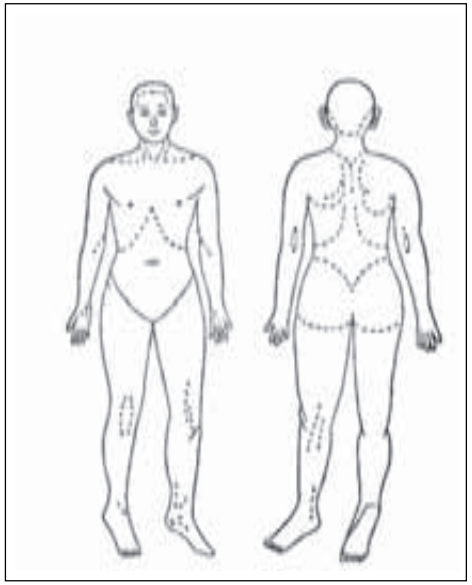
17. 代謝系

1) 糖尿病 ( )
その他 内容：＿＿＿＿＿＿＿＿

＊　本調査用紙・診断書は、財団法人日本体育協会作成の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を改変して使用しております。
＊　当用紙に記載された内容は、台北デフリンピック日本選手団として必要なことのみに使用いたします

18. 運動器（右の身体図に問題のある場所に○印を付け、対応する問題と線で結んで下さい）

1)　痙性　（　）
2)　不随運動　（　）
3)　拘縮・変形　（　）
4)　切断　（　）
5)　筋肉痛　（　）
6)　関節痛　（　）
7)　骨折　（　）
8)　脱臼　（　）
9)　捻挫　（　）
10)　肉離れ　（　）
11)　その他　（　）



Q4. 現在のコンディションについての質問

Q4-1：以下、いずれかに○印を付けて下さい。

練習意欲　：1＝旺盛　2＝普通　3＝なし　4＝全くなし
睡眠　：1＝良好　2＝普通　3＝不良
食欲　：1＝旺盛　2＝普通　3＝低下
便通　：1＝良い　2＝便秘（1回／　日）　3＝下痢（　回／1日）
全般的体調：1＝極めて良い　2＝良い　3＝普通　4＝悪い　5＝最悪

選手のメモ：コンディションが悪い場合には、最近のトレーニング量が非常に多い、風邪をひいているなど思い当たる理由を記して下さい

＊　本調査用紙・診断書は、財団法人日本体育協会作成の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を改変して使用しております。
＊　当用紙に記載された内容は、台北デフリンピック日本選手団として必要なことのみに使用いたします

Q5. 家族の病気に関する質問

Q5－1：両親兄弟・姉妹に、以下のような病気がありますか、一つ一つチェックして下さい。

□内に“ない”場合には×印、“ある”場合には○印と〔　〕内に誰であるかを記入して下さい。

1)　高血圧□　〔　〕　2)　心臓病□　〔　〕　3)　脳卒中□　〔　〕
4)　糖尿病□　〔　〕　5)　痛　風□　〔　〕　6)　結　核□　〔　〕
7)　肝　炎□　〔　〕
8)　その他□　病名：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

Q5－2：両親兄弟・姉妹が以下のような病気で死亡していますか、一つ一つチェックして下さい。

□内に“ない”場合には×印、“ある”場合には○印と〔　〕内に誰が何歳の時に死亡されたのかを記入して下さい。

1)　突然死□　〔　、　歳〕　2)　高血圧□　〔　、　歳〕
3)　心臓病□　〔　、　歳〕　4)　脳卒中□　〔　、　歳〕
5)　糖尿病□　〔　、　歳〕　6)　痛　風□　〔　、　歳〕
7)　結　核□　〔　、　歳〕　8)　肝　炎□　〔　、　歳〕
9)　その他□　〔　、　歳〕　内容：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

備考：突然死とは、原因不明に急に（たとえば24時間以内）死亡すること。
痛風とは、血液中の尿酸値が高く、足の親指などの全身の関節が痛くなる病気です。

Q6. 体重減量についての質問

Q6－1：競技に際して体重減量はありますか：
1＝なし　2＝あり　減量前体重＿＿＿kg、目標体重＿＿＿kg

Q6－2：上の質問で“あり”の場合
スムーズに減量できますか：1＝はい　2＝いいえ

選手のメモ：　サウナ、食事量を極端に減らすなど、その具体的減量方法を記入して下さい

＊　本調査用紙・診断書は、財団法人日本体育協会作成の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を改変して使用しております。
＊　当用紙に記載された内容は、台北デフリンピック日本選手団として必要なことのみに使用いたします

様式１　　【別紙１－9】
選手記入

Q7. 女性の選手におたずねします

Q7－1：初潮はありましたか：

1＝なし　2＝あり　____歳____ヶ月、あるいは小学校____年生____月ごろ
中学校____年生____月ごろ
高　校____年生____月ごろ

Q7－2：最終月経はいつでしたか：

1．平成_____年____月____日ごろ
2．既に閉経（　　歳頃）

Q7－3：以下のいずれかに○印をして下さい（閉経されている方以外）

月経周期は　：1＝規則的　2＝不規則　3＝無月経（　　年　　月以来なし）
月経出血量は：1＝多い　2＝普通　3＝少ない
月経の痛みは：1＝ほとんどない　2＝痛みはあるが、日常生活に支障なし
3＝日常生活に支障あるが、薬は使用しない
4＝日常生活に著しく支障あり、薬を使用する
（薬剤名：_____）
5＝寝込む

医師メモ：どのように処置しているか、具体的に記入してください

_____
_____
_____
_____
_____

＊　本調査用紙・診断書は、財団法人日本体育協会作成の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を改変して使用しております。
＊　当用紙に記載された内容は、台北デフリンピック日本選手団として必要なことのみに使用いたします

様式１　　【別紙１－10】
選手記入

Q8. 心理サポートについて

Q8-1：これまで競技を継続していた中で、専門家による心理サポートや相談が必要と感じたことがありますか。

1：ない　2：ある

Q8-2：“ある”場合はどのようなサポートが必要であったかを具体的にお答え下さい。

※例えば、①競技力向上につながるメンタルトレーニングの指導
②競技と仕事や学業の両立の事で問題を感じ、他の人にアドバイスをして欲しかった事など

_____
_____
_____
_____
_____
_____

Q8-3：競技場面で心理的問題（課題）を感じたことがありますか。

1：ない　2：ある

Q8-4：“ある”場合はどのような内容であるかを具体的に答えて下さい。また、その時にどのように解決したのかも書いて下さい。

※例えば、競技場面であがってしまい本来の実力がだせなかった　など

_____
_____
_____
_____
_____
_____

_____年　　月　　日　　医療機関名・住所・電話番号

医師名：_____　印

＊　本調査用紙・診断書は、財団法人日本体育協会作成の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を改変して使用しております。
＊　当用紙に記載された内容は、台北デフリンピック日本選手団として必要なことのみに使用いたします

様式　2

【別紙２】
医師記入

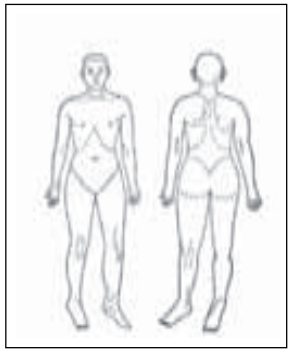
このページは医師が記入します

氏名：　　；　生年月日：昭・平　　年　　月　　日

診断書（１）

＜身体所見＞

身長：＿＿＿＿cm　体重：＿＿＿＿Kg　体温：＿＿＿＿℃
脈拍：＿＿＿＿拍／分
血圧：＿＿＿＿／＿＿＿＿mmHg
（必要に応じて右の身体図を利用して下さい）



	異常所見の有無	異常所見の内容
顔面	なし　あり	
口腔	なし　あり	
頸部	なし　あり	
胸部	なし　あり	
腹部	なし　あり	
四肢	なし　あり	

＜臨床検査所見＞

心電図検査	所見：				精査の必要（無　・　有）	
胸部Ｘ線	所見：				精査の必要（無　・　有）	
尿　検　査	蛋白	（＿＿＿）	糖	（＿＿＿）	潜血	（＿＿＿）
血液検査	赤血球	（＿＿＿）	ﾍﾓｸﾞﾛﾋﾞﾝ	（＿＿＿）	ﾍﾏﾄｸﾘｯﾄ	（＿＿＿）
	白血球	（＿＿＿）				
生化学検査	CK	（＿＿＿）	AST（GOT）	（＿＿＿）	ALT（GPT）	（＿＿＿）
	総蛋白	（＿＿＿）	総ｺﾚｽﾃﾛｰﾙ	（＿＿＿）	中性脂肪	（＿＿＿）
	HDL ｺﾚｽﾃﾛｰﾙ	（＿＿＿）	尿素窒素	（＿＿＿）	ｸﾚｱﾁﾆﾝ	（＿＿＿）
	尿酸値	（＿＿＿）	血糖値	（＿＿＿）	血清鉄	（＿＿＿）
	UIBC	（＿＿＿）	フェリチン	（＿＿＿）		
	その他先生が重要と考えられる検査所見		（　　）			

※異常値について、低値の場合は↓、高値の場合は↑を付記して下さい。［例：AST(68↑)］

＿＿＿＿年　＿＿月　＿＿日　　医療機関名・住所・電話番号

医師名：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　印

＊　本調査用紙・診断書は、財団法人日本体育協会作成の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を改変して使用しております。

様式　2

【別紙２】
医師記入

このページは医師が記入します

氏名：　　；　生年月日：昭・平　　年　　月　　日

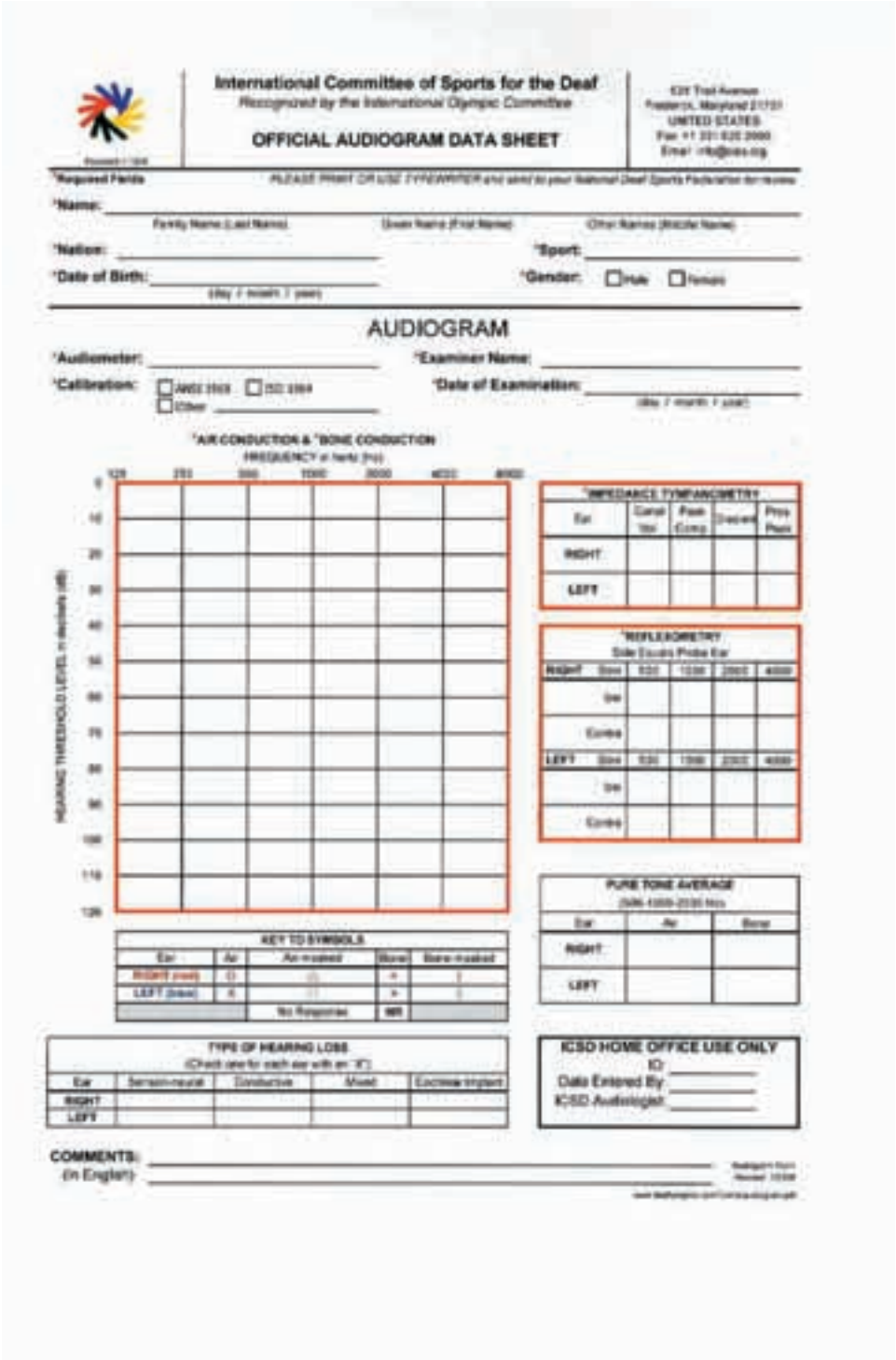
診断書（２）

※ その他、前頁についての備考、選手の障害内容や合併症などに応じて前頁検査項目以外の検査を施行しておりましたらその結果の記載をお願い致します。

＿＿＿＿年　＿＿月　＿＿日　　医療機関名・住所・電話番号

医師名：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　印

＊　本調査用紙・診断書は、財団法人日本体育協会作成の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を改変して使用しております。



International Committee of Sports for the Deaf
Recognized by the International Olympic Committee

OFFICIAL AUDIOGRAM DATA SHEET

AUDIOGRAM

HEARING THRESHOLD LEVEL in decibels (dB)

KEY TO SYMBOLS

TYPE OF HEARING LOSS

ICSD HOME OFFICE USE ONLY

COMMENTS: (in English)

インフルエンザ罹患者の発生への対応経過

記録　大杉　豊（総務）

これはインフルエンザ罹患者が発生して以来終息宣言を出すまでの日本選手団本部の動きを記録したものである。日本選手団本部の危機管理能力が試されたことになるが、今後の参考のために掲載する。文中の個人情報類は全て伏せていることを承知されたい。

９月６日（日）

台北市政府衛生局よりインフルエンザ流行に関する注意の周知文書を受け取る。総務判断で、医療スタッフに翻訳及び解説の選手団各競技チームへの配布を至急に指示、同日中に周知完了。

９月７日（月）

8 時 40 分　田口医師報告：8 時 20 分、サッカー男子チームの A 選手が発熱（39.6 度）、のどの痛みがあり受診。夕方に再診することに決定。

午前、同室の選手を別の部屋に移動させる。

19 時 10 分　田口医師報告：A 選手の再診　インフルエンザ検査キットを使用 A 型（+）と出る。

21 時 00 分　田口医師が A 選手を病院に連れて行く。（台安医院）

22 時 30 分　田口医師より電話連絡：　A 型（+）と出た。

23 時 10 分　田口医師より報告。新型である可能性が高い。比較的元気である。

事務局緊急会議を行う。緊急事態と判断。

（1）　インフルエンザの蔓延を防ぐことを最大の目的とすることを確認
（2）　報告・連絡・相談の更なる徹底を確認
（3）　総務が対応責任者となり、主に田口医師、山崎事務局員、矢口オフィサーと連携を取って危機管理を行うことを確認
（4）　マスク 2000 枚の買出し

24 時 00 分　全日本ろうあ連盟本部（日本）にメール報告

24 時 30 分　矢口さんに電話（インフルエンザが発生した時の組織委員会への報告先を聞いたところ、医療担当者が良いのではないかと回答あり。矢口さんからかけてもらうがつながらず、矢口さんの上司になる陳玲玲（ﾁﾝﾚｲﾚｲ）さんに伝えた。明日の朝、陳さんから医療担当者へ連絡が入る予定。

24 時 50 分　ホテル（支配人がいなかった＋日本語が分かる人がいなかったので日本語が分る人が来たら連絡くださいとメモで伝えた。）

25 時過ぎ　ホテル周辺のドラッグストアを回ってマスク 2000 枚を確保、競技チームごとに分ける。

９月８日（火）

7 時 50 分　交流協会の馬場さんに電話連絡。以前のインフルエンザ対応とは違う対応マニュアルになっているので、落ち着いて対応するよう助言を受ける。

8 時 00 分　医師報告（A 選手は 37,3 度　食欲旺盛）。

8 時 30 分　ホテル側と協議

9 時 55 分　交流協会松村さん(邦人保護担当)に電話連絡。

10 時 00 分　①田口医師に確認済
(1)部屋の中ではマスクなし
(2)同室の選手は問題なし
②ホテルが入り口でホテル利用者の検温チェックを開始
罹患選手に対してはルームサービスを開始

10 時 05 分　交流協会松村さん→ホテルに医師を派遣する可能性

11 時 20 分　交流協会松村さん・馬場さん来所
対応方法を改めて確認

11 時 50 分　台北 2009 組織委員会より指示
①　マスコミに流れたので取材があった場合の対策を講じること
②　選手にマスク着用を強く指示すること

13 時 45 分　台北 2009 組織委員会の陳玲玲さん来所。
組織委員会と台北市政府衛生局で記者会見を 4 時から行うなど対応する。

14 時 45 分　交流協会馬場さんより電話連絡。外務省に連絡したとのこと、すでに台北のマスコミにニュースが流れていて、記者会見の後はメディアが騒ぐのでしっかり対策を取るようにと助言有り。

15 時 10 分　全日本聾唖連盟石原本部事務所次長と河原派遣委員会事務局次長に電話で連絡。

15 時 35 分　NHK 台湾支局の記者より電話取材を受ける。正確な情報を提供する。記者の話では、台湾のメディアはなんでも大袈裟に騒ぐとか…

15 時 44 分　A 選手の家族（日本）に電話で連絡を取って、正確な情報を伝える。

15 時 55 分　田口医師より報告あり。バドミントン競技チームの B 選手発熱 37.6 度。
直ちに同室（1119 号室）の選手を別室に移動させる。

16 時 00 分　記者会見

16 時以降　台北時事通信、台北 Yahoo などから記事が配信される。日本のインターネットにも流入。

17 時 00 分　罹患者をホテル 7 階の部屋に移すことを決定。

20 時 00 分　総務が各競技チーム代表を対象に緊急ミーティングを招集。インフルエンザ発生について正確な情報を提供し、これからの対応について理解を求める。マスク着用及び毎朝の体調チェックに全員が同意。

21 時 30 分　定例事務局会議にてインフルエンザ発生に関する諸事項の確認。

23 時 00 分　医療スタッフとのミーティング。台北市政府衛生局からホテルに指示のあった体調チェックを衛生局ではなく医療スタッフの主導で進めることを確認。

９月９日（水）

8 時 00 分　田口医師報告：B 選手熱が上がる。ほぼ確定。病院に連れて行くことと試合出場を見合わせることの確認あり。病院に連れて行くことについて承認。試合出場を見合わせることについてはバドミントンチーム監督より団長への報告が必要と伝える。

8 時 15 分　バドミントン競技チーム監督より B 選手の試合出場取り止めについて相談あり、個人戦の出場取り止めを仮承認。ただちに団長に報告、承認に変更。

8 時 26 分　田口医師報告：男子サッカーチームの C 選手が受診。6 時 40 分 38 度 1 分、7 時 50 分 37 度 6 分。インフルエンザの可能性あり。直ちに部屋を隔離へ。本人は比較的元気。

8 時 50 分　団長会議にて組織委員会の盛治仁氏から団長に①3～4 日間はマスク着用②マスコミに注意の指示がある。

9 時 00 分　総務より各チームに緊急指示。①選手団内でインフルエンザ拡大中②マスク着用の徹底③

マスコミの取材に応じないこと

9 時 5 分　フラートンホテル支配人に A 選手、B 選手の状況の説明を行う。

9 時 31 分　B 選手病院へ。田口医師同行。
田口医師が試合欠場届に必要な証明書を発行してバドミントン競技チームに渡す。

9 時 50 分　団長報告：テニス会場で日本人選手のみ検温あり。

11 時 45 分　医療スタッフが「日本選手団健康調査票」を作成。フラートンホテル支配人に提示して、確認を取る。毎朝医療スタッフが確認後、ただちにコピーをホテル支配人に提出することとする。

13 時 15 分　田口医師報告：(1) B 選手は病院でインフルエンザと診断される。本日より 5 日間隔離、投薬治療。(2) C 選手は依然として 38 度台であるため、インフルエンザの可能性が極めて大きいものとし、直ちに病院に連れて行く。

14 時 00 分　フラートンホテル支配人に B 選手の状況について報告。

14 時 10 分　台北デフリンピック大会本部より「病状報告書」を毎日提出するよう指示を受ける。

14 時 40 分　B 選手の家族（日本）に電話で連絡を取って、正確な情報を伝える。

15 時 00 分　男子サッカーチーム監督報告：A、C 選手以外に二人が発熱している。その場ですぐ田口医師への電話を指示、今晩 7 時に診察を行うことを決定。

16 時 55 分　田口医師報告：C 選手が病院でインフルエンザと診断される。本日より 5 日間隔離、投薬治療。

17 時 10 分　交流協会松村氏に電話連絡して、3 人の状態および対応状況を説明する。

17 時 30 分　フラートンホテル支配人報告：台北市政府衛生局より連絡があり、A 選手の検査結果が出て「新型検査の結果は陰性」とのこと。また、ホテルとしては、田口医師の完治証明をもって選手の隔離を停止してよいとのこと。

17 時 40 分　交流協会松村氏に電話連絡して、上記結果を報告する。

18 時 00 分　田口医師に上記結果を伝える。

19 時 00 分　台北デフリンピック大会本部の陳玲玲氏に電話連絡して、3 人の状態および対応状況を説明する。

19 時 25 分　田口医師報告：男子サッカーの D 選手 39.6 度、E 選手 37.4 度。D 選手はインフルエンザの疑い濃厚。E 選手が 30 分後に熱が上がっていれば、D 選手と二人を病院に連れて行く。

19 時 45 分　男子サッカーチーム全員及びバドミントンチーム 2 名に対してホテルのレストランで朝食を取ることの禁止を指示する。

20 時 20 分　定例事務局会議で情報の共有を図る。

20 時 50 分　C 選手の家族（日本）に電話で連絡を取って正確な情報を伝える。

22 時 20 分　田口医師報告：D 選手、E 選手ともに病院でインフルエンザ A 型と診断される。

9 月 10 日 (木)

8 時 00 分　D 選手の家族（日本）に電話で連絡を取って正確な情報を伝える。家族の 1 名が昨日発熱、病院でインフルエンザ A 型と診断を受ける。家族は開会式の頃に台北に来て D 選手と接触している。

8 時 05 分　田口医師報告：男子サッカーの F 選手が発熱、37.4 度。10 時に再診。

8 時 20 分　矢口報告：昨日男子サッカーチームに同行したボランティアが発熱 37.8 度。病院に行くよう指示をしたとのこと。

8 時 45 分　E 選手の家族（日本）に電話で連絡を取って正確な情報を伝える。

10 時 00 分　田口医師が F 選手を病院へ連れて行く。

11 時 00 分　矢口報告：ボランティアは病院でインフルエンザ A 型と診断される。

12 時過ぎ　田口医師報告：F 選手の病院での診断はインフルエンザ A 型。B 選手は高熱が続いている。A 選手は土曜日に完治の見込み。他の選手は 37 度台で安定。

12 時 26 分　全日本聾唖連盟久松事務局長より応援スタッフ派遣を検討することのメール連絡あり。

13 時　男子サッカーチーム監督に正確な情報を伝えて、自主的に試合棄権をせざるを得ない状況に近づいていることを伝える。選手団本部の決定には従っていただくことを確認した。

13 時半　フラートンホテル支配人報告：衛生局から問い合わせがあり、「男子サッカーは今後試合があるかどうか、出るかどうか」。

13 時 45 分　全日本聾唖連盟久松事務局長にスタッフ 3 名の派遣を要請。
（1）医療チームの手話通訳者 1 名
（2）総務を支援する手話通訳者 1 名
（3）総務を支援する事務職員 1 名
（物品）総務を支援する事務職員が使用する無線 LAN 対応パソコン 1 台

14 時 00 分　インフルエンザ罹患者を見舞う。100%オレンジジュース 1 リットルを 1 本ずつ差し入れ

15 時 10 分　全日本聾唖連盟久松事務局長よりメール連絡あり。久松局長を含む 4 名が応援に来ることになる。（11 日～15 日 2 名、12 日～15 日 2 名）

15 時 30 分　台北市政府衛生局護士　趙佑純氏（女性）来所：
患者に関するインタビューを受ける。D 選手、E 選手、F 選手の 3 名に H1N1 検査を実施。

16 時 00 分　台北市政府衛生局疾病管制部・顔慕庸部長（男性）来所：
台北市と東京都の衛生局は連携を強めている。今回のインフルエンザ発生についてお見舞いを申し上げたい。今回台北のマスコミを通して誤った報道が出されたことについてお詫びを申し上げたい。A 選手の検査結果は H3N2、季節性インフルエンザであった。あらためて記者会見を行う。日本選手団の適切な対応にお礼を申し上げたい。罹患者については投薬と隔離を継続し、試合には出さないでいただきたい。サッカー競技は接触が多くないので試合相手のチームメンバーにウイルスが移る危険性は極めて低い。衛生局としてのお願いしたいことは、7 階を中心としたホテル内での隔離、毎日の健康チェックと報告、マスク着用、手洗いの徹底。

16 時 40 分　男子サッカー尾上監督に、以上の経過を伝え、チームでの健康管理を徹底することを条件に試合出場の許可を出す。具体的には、尾上監督自身が毎朝選手の体温を測って報告すること。

17 時 50 分　交流協会松村氏より電話あり：現状を報告。

18 時 20 分　F 選手の家族（日本）に電話で連絡を取って正確な情報を伝える。

20 時 30 分　田口医師報告：男子サッカーの G 選手、H 選手が 37.6 度の発熱で、病院に連れて行く。

20 時 40 分　定例事務局会議で情報の共有を図る。

9 月 11 日（金）

9 時 00 分　日本選手団ウェブサイトに以下のお知らせを掲載。中国語への翻訳文も掲載。

日本選手団におけるインフルエンザの発生について

9 月 7 日（月）男子サッカーチームにインフルエンザ罹患者が出ました。直ちに日本選手団医療スタッフが対応、現地病院で処方された薬剤を投与し、ホテルでは自室に隔離し静養させています。重症には至らず、間もなく完治する見込みです。

一部のメディアで新型インフルエンザ(H1N1)発生と報道されましたが、台北市政府衛生局からの連絡では、季節性インフルエンザ(H3N2)との判定結果が出ています。

台北デフリンピック組織委員会、財団法人交流協会、そして台北市政府衛生局と緊密な連絡を取り、インフルエンザの拡大を最小限に抑える対策を講じているところです。ホテル側も大変協力的であり、現在のところ男子サッカーチーム以外の各競技チームにはインフルエンザの拡大はみられていません。

各競技チームに手洗い・うがい・マスク着用の徹底を図るとともに、毎朝体温測定など健康調査を実施して、インフルエンザの徴候が見られたら医療スタッフが直ちに診察を行う体制を確立しています。

インフルエンザの発生で日本・台湾の国民にご心配をおかけしております。今回の件で台北市政府衛生局をはじめとする多くの皆様よりご協力・ご支援をいただいていますこと、心より深くお礼を申し上げます。

日本選手団はインフルエンザの拡大防止に努め、世界ろう者スポーツの祭典「デフリンピック」の成功に全力を尽くす所存です。

2009 年 9 月 11 日　日本選手団総務　大杉　豊

9 時 10 分　田口医師報告：現在の状況について。

9 時 30 分　健康調査票未提出・未記入者に試合会場などからすぐホテルへ戻るよう指示する。

14 時 25 分　台北市政府衛生局より連絡。
D 選手　陰性（服薬のため）、E 選手　H3N2、F 選手　H3N2

14 時 30 分　ホテル及び田口医師に上記について報告

14 時 45 分　B 選手の保護者（日本）に電話で現状を報告。

14 時 50 分　田口医師に上記について報告

17 時 45 分　交流協会松村氏に現状報告

18 時 15 分　台北市政府衛生局にマスク 500 枚の提供を依頼。選手団で購入したマスク 2000 枚及び新型インフルエンザ検査費用の負担もしていただくことになる。

19時20分　G選手、H選手の家族（日本）に電話で連絡を取って正確な情報を伝える。

23時過ぎ　応援スタッフ2名ホテル入り

9月12日(土)

17時20分　台北市政府衛生局疾病管制部・顔慕庸部長（男性）来所：
台北市政府衛生局長よりの正式謝罪・お礼の文書を受け取る。日本選手団の適切な対応が非常に高く評価されている。これからも継続してインフルエンザ予防に全力を尽くしてほしいと要請される。

19時10分　田口医師報告：A選手、C選手、D選手、E選手の4名について隔離を明日午前にも解く見通しであること。

22時00分　田口医師、尾上監督、高橋マネ、大杉で協議。
（1）　明日隔離を解く4名の試合出場について
（2）　選手団内に起きている男子サッカーチームへの差別的な行為について
（3）　残りの日程について
（4）　明日正午、久松事務局長同席の協議で最終決定

23時過ぎ　久松事務局長を含む応援スタッフホテル入り

9月13日(日)

9時30分　A選手、C選手、D選手、E選手の4名の完治証明が田口医師から発行される。

9時35分　ホテル支配人に証明書を見せて承認を取る。

9時40分　4名の隔離を解く。

10時35分　田口医師報告：昨日の報告を受ける。

12時00分　尾上、高橋、久松、大杉で協議。男子サッカーチームメンバーは全員最後まで一緒に行動していただくことを確認。

13時30分ごろ　久松事務局長が男子サッカーチームの選手を激励する。

14時20分　矢口さんに閉会式についての懸念を伝える。(1) 選手団全員がマスクを着用して入場すること (2) 入場者に体温チェックをするかどうか

9月14日(月)

8時00分　B選手、F選手、G選手、H選手の4名の完治証明が田口医師から発行される。

9時45分　交流協会松村氏の代理広瀬氏より電話。終息宣言を出したことを説明。

久松・大杉であいさつ回り（記録は別紙）
10時00分　天母国中
11時00分　財団法人交流協会
13時30分　台北デフリンピック大会本部
14時00分　天母国小
15時00分　日本人会、日本工商会
17時00分　台北市政府衛生局

18時00分　応援スタッフの任務終了。

19時00分　緊急事態は去ったものと判断して通常体制に戻る。

以上

夏季デフリンピック開催地一覧

回数	開催国	開催都市	開催期間	大会規模		日本代表団派遣			日本代表団成績		
				参加国数	選手数	選手	役員	計	金	銀	銅
1	フランス	パリ	1924年8月10日～8月17日	9	145						
2	オランダ	アムステルダム	1928年8月18日～8月26日	10	210						
3	西ドイツ	ニュールンベルグ	1931年8月19(21)日～8月23(24)日	14	316						
4	イギリス	ロンドン	1935年8月17日～8月24日	12	293(283)						
5	スウェーデン	ストックホルム	1939年8月24日～8月27日	13	264						
6	デンマーク	コペンハーゲン	1949年8月12日～8月16日	14	405						
7	ベルギー	ブリュッセル	1953年8月15日～8月19日	16	524						
8	イタリア	ミラノ	1957年8月25日～8月30日	25	625						
9	フィンランド	ヘルシンキ	1961年8月6日～8月10日	24	595						
10	アメリカ	ワシントン	1965年6月27日～7月3日	27	697	7	4	11	0	1	1
11	ユーゴスラビア	ベオグラード	1969年8月9日～8月16日	33	1183	9	4	13	0	4	0
12	スウェーデン	マルメ	1973年7月21日～7月28日	32	1061	9	4	13	4	2	0
13	ルーマニア	ブカレスト	1977年7月17日～7月27日	32（37）	1118（1468）	17	8	25	5	2	0
14	西ドイツ	ケルン	1981年7月23日～8月1日	32	1213（1663）	34	11	45	7	4	2
15	アメリカ	ロサンゼルス	1985年7月10日～7月20日	29	1053(1648)	52	15	77	8	5	2
16	ニュージーランド	クライストチャーチ	1989年1月7日～1月17日	30（32）	959（1469）	40	16	56	7	3	4
17	ブルガリア	ソフィア	1993年7月24日～8月2日	51	1705(1900)	41	13	54	4	7	5
18	デンマーク	コペンハーゲン	1997年7月13日～7月26日	62（57）	2068(2078)	44	14	58	6	1	1
19	イタリア	ローマ	2001年7月22日～8月1日	71（81）	2405（約4000）	60	26	86	10	5	5
20	オーストラリア	メルボルン	2005年1月5日～16日	75	3500	102	33	135	3	7	1
21	中国	台北	2009年9月5日～15日（予定）	77	2498（選手のみ）	154	90	244	5	6	9
22	ギリシャ	アテネ	2013年7月31日～8月13日（予定）								

冬季デフリンピック開催地一覧

回数	開催国	開催都市	開催期間	大会規模		日本選手団派遣			日本選手団成績		
				参加国数	選手数	選手	役員	計	金	銀	銅
1	オーストリア	ゼーフェクト	1949年1月26日～1月30日	5	33						
2	ノルウェイ	オスロ	1953年2月10(20)日～2月14(24)日	6	53						
3	西ドイツ	オーベルアンメルガウ	1955年2月10日～2月13日	7	61						
4	スイス	モンタナブフーナラ	1959年1月27日～1月31(30)日	8	42(56)						
5	スウェーデン	オーレ	1963年3月11日～3月16日	8	58(53)						
6	西ドイツ	ベルヒスガーデン	1967年2月20日～2月24(25)日	12	86	3	3	6	0	0	0
7	スイス	アポオルボーデン	1971年1月25日～1月29日	13	92	（不参加）					
8	アメリカ	レイクプラシッド	1975年2月11日～2月16日	15	268	10	3	13	0	0	0
9	フランス	メリベル	1979年1月21日～1月27日	14	180	8	5	13	0	0	0
10	イタリア	マドンナ	1983年1月16日～1月23(22)日	16	191	9	6	15	0	0	0
11	ノルウェイ	オスロ	1987年2月7日～2月14日	15	136(225)	10	4	14	0	0	0
12	カナダ	バンフ	1991年3月2日～3月9日	16(18)	294(287)	9	6	15	0	0	0
13	フィンランド	ウッラス	1995年3月14日～3月19日	20	312	10	5	15	0	0	0
14	スイス	ダボス	1999年3月6(7)日～3月14日	18	273	10	5	15	0	1	1
15	スウェーデン	スンツバル	2003年2月27日～3月9日	22	253	14	15	29	2	0	0
16	アメリカ	ソルトレークシティ	2007年2月1日～2月10日	24	310	17	22	39	3	0	1
17	スロバキア	ハイタトラス	2011年2月11日～2月20日(予定)								
18	カナダ	バンクーバー	2015年2月6日～2月14日(予定)								

平成 21 年度日本パラリンピック委員会強化事業
障害者競技スポーツ強化事業

第 21 回夏季デフリンピック報告書

発 行 日：2010 年 2 月 15 日
発　　行：財団法人日本障害者スポーツ協会
財団法人全日本ろうあ連盟（連絡窓口）
〒 162-0801　東京都新宿区山吹町 130　ＳＫビル８Ｆ
TEL 03-3268-8847　　FAX 03-3267-3445
ホームページ　http://www.jfd.or.jp/
Ｅメール　jfd-sc@jfd.or.jp
編　　集：デフリンピック派遣委員会
編集協力：日本聴覚障害者陸上競技協会 / 日本ろう者バドミントン協会 / 特定非営利活動法人日本デフバスケットボール協会 / 日本ろう者ボウリング連合 / 日本ろう者サッカー協会 / 日本ろう者武道連合 / 日本ろう者水泳協会 / 日本ろうあ者卓球協会 / 日本ろう者テニス協会 / 日本デフバレーボール協会
印　　刷：日本印刷株式会社

この事業は、独立行政法人福祉医療機構（障害者スポーツ支援基金）の助成により行ったものです。

公式ユニホームの胸につけられた
日本選手団のロゴマーク